蒸汽帝国～真鍮の乙女～

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒸汽帝国～真鍮の乙女～

【Ｎコード】
Ｎ１４８４Ｄ

【作者名】
万墨人

【あらすじ】
蒸気と魔法のファンタジーの開幕です！魔法が失われて千年がたったこの世界に、あるきっかけで魔法が蘇ったら……。その時、人は魔法を手にしてどう変わるのか？物語は一人の少年と、少女の長い旅と成長を軸に展開します。

ロロ村（前書き）

山深い谷にあるロロ村。ここから物語りは始まります。天才科学者のニコラ博士とその助手をつとめるパック少年は、地下室で実験を開始しますが……。

ロロ村

「ボイラー圧力最大！　温度は３００を越えました！」
「よし、蒸気弁を開け！　三番から六番までだ！」
「ニコラ博士！　五番のバルブから蒸気が漏れています！」
「なんとかしろ！　布でもまきつけておくんだ！　蒸気があがっているんだぞ！」
「はいっ！」

ふるい民家の地下室である。とはいえ完全な地下にあるというわけではなく、その半分くらいは地面に出ている。いわゆる半地下とよばれるつくりだ。地面につきでている部分には細長い窓があけられ、そこからは午後のまぶしい陽射しがななめに室内にさしこんでいた。

天井にはふとい木材の梁がささえ、壁は漆喰で塗られている。つくりは農家のそれだったが、この地下室いっぱいに占領しているのは無数の機械だった。まるで巨人がちいささの限界に挑戦して組み上げたかのような奇妙なスケール感の機械は、なにに使われるのかさっぱり用途がわからない。パネル一面にスイッチだの、メーターだのがひしめいているなか、おなじくらいの数の明滅する電球がちかちか、ちかちかとまたたいている。それらの瞬きを見つめていると催眠術にかかりそうな気持ちになる。

地下室にはしろい蒸気が充満し、そのなかをふたりの人影が動いていた。ふたりのうちひとりは老人で、ひょろ長い痩身になめし皮のような茶色の皮膚、みごとに禿げ上がった丸い頭にはふわふわの白髪がこめかみのあたりからくるりと後頭部へかけ生えている。度の強い眼鏡をかけ、その奥からぎょろりとした大きな目玉が地下室の機械のメーターをするどく監視していた。

老人は膝までとどくポケットがやたらとついた上着を身につけ、そのポケットにはぎゅうぎゅうに工具だの、なにかの図面だの、あ

るいはペンや色鉛筆などがささり、あらゆるものが詰め込まれている。その下は上下つづきのオーバーオールで、これまたたくさんのポケットがついたデザインである。そちらのポケットにもたくさんの道具がはちきれんばかりに詰め込まれていた。かれは足もとは頑丈そうな編み上げ靴を履き、どたどたと足音をたて歩いた。

老人の名前はニコラ博士。ここロロ村に数年前飄然とあらわれ、古い一軒家を買い取りそこを研究所として使用し、毎日なにかの実験をやっている。

老人の側には、小柄な少年がちょこまかと駈けまわるようにして助手をつとめていた。小柄ではあるが手足はがっしりとして、動作は機敏である。老人の指示にしたがい、地下室を占領しているさまざまな機械のレバーやバルブを操作している。少年はニコラ博士と違い、半ズボンに白い半そでシャツというシンプルないでたちである。ゴム底のやわらかな靴を履いて、こまねずみのように動き回った。

少年はパックという名前だった。

年令は十二才。

三年前、ニコラ博士がパックの住むロロ村へやってきて、廃屋となっていたこの家を買い取り、研究をはじめたのだが、パックは最初から研究に興味を持ち、いつしか助手となって手伝いをはじめていた。

老人は自分を科学者であると自己紹介した。パックは科学者など見たこともなく、ニコラ博士が自宅に運び込んださまざまな機械に好奇心をつのらせた。博士はそんな少年の好奇心にたいし、うるさがらず相手をしてくれた。やがてパックはおぼつかないながらも、手伝いをはじめるようになった。

そのころはまだパックは十才にもならない子供だったが、十二才になったいまではニコラ博士のなくてはならない助手となっている。

いま博士の研究は最終段階にあった。ニコラ博士は目をぎろぎろと輝かせ、全身汗びっしょりになって機械のメーターを睨んだり、

ときおりポケットからメモをとりだし一心不乱になってなにか書き込んだりしている。

地下室の中心にニコラ博士の研究の成果が横たわっていた。

黄金色にかがやく真鍮の人形。

それは人間そっくりの金属の体をもつ、人形だった。

ほっそりとしたその姿は、どちらかというと女性的で、床から一メートルくらい持ち上がった木の台にあおむけになっている。

薄い、真鍮の板を無数に重ね、驚くべき技でその人形は作られていた。それはもう人形とはいえないほどだ。ほっそりとした腰と、ふくらんだ胸をした金属の少女は眠っているかのように目を閉じ、いまにも目を覚ましおきだしてきそうである。

人形の体には無数のパイプが接続されている。パイプは地下室を埋め尽くす様々な機械に接続され、機械もまたふとい金属のパイプでつながっていた。

ごうごうというボイラーからの音が地下室を満たしている。

ときおりパックがボイラーに石炭を投げ入れ、そのとき火蓋からまばゆいほどのオレンジ色のほのおが室内を照らす。地下室の温度はほとんど人間がたえられる限度を越えている。ふたりとも全身汗びっしょりになり、顔は熱で真赤になっていた。

ごとごとごと……。

地下室をまるで地震のような振動が満たしていた。

ボイラーからの蒸気のちからで巨大な動輪がゆっくりと回っている。動輪からはベルトが伸び、地下室の機械に繋がってなんらかの動力を伝えているらしいが、なんのためか一目見ただけではわからない。

しゅっ、しゅっと天井に張り巡らせた無数のパイプからしろい蒸気が噴き出している。

パックは天井のパイプを見上げ不安そうな顔になった。

「博士……パイプがもちますか？」

パックの言葉にニコラ博士は苦い顔になった。言われるまでもな

くパイプの強度については不安があるのである。
「わからん、やってみないとどうなるか……しかしいまさら中止もできん」
そう言うと、すぐ言葉をついだ。
「とにかく実験を進めよう！」
きっと目を見開き、叫ぶ。
「パック、すべての弁を開け！」
少年はうなずくと目の前の金属のレバーをつぎつぎと倒しはじめた。
がちゃんと派手な音をたてレバーが引かれるとパイプに繋がっているいくつものメーターの針がぶるぶると震えながら蒸気圧が上がっていることを示している。博士は目を押し付けるようにして計器の表示を読んでいた。
やがて得心がいったのかにやりと笑うとそのひょろ長い体で踊るように地下室を跳ね回り、いくつものスイッチを操作しはじめた。
地下室の音がさらに高まった。
地下室の天井まで届きそうな巨大な動輪が旋回し、すべての機械がぶるぶると細かく震えはじめる。
ごうごう……どしゃん、どしゃん……がたがた……！
騒音のため、おたがい何を言っているのかわからないほどだ。
しかしこの段階になればもう言葉は不要である。手順はすでに何度も打ち合わせてある。ふたりはまるでひとつの意思のもと、無言で手足を動かしていた。
地下室を満たすパワーは中心に横たわる金属製の人形に集中しているようだった。
白い蒸気が人形の手足の関節から噴き出している。
すでにふたりは動きをとめ、じっと人形を見つめていた。
息詰まるほどの期待がその視線に満ちていた。
かたかたかた……！
人形の全身が細かく震えはじめた。

おっ、とばかりにふたりは身を乗り出した。
がたん！
人形の上半身が跳ねるように持ち上がる。
無意識に博士は指の爪を噛んでいた。
がたん！
もう一度、真鍮製の人形は上半身を跳ね上げた。
ニコラが叫んだ。
「パック！　圧力をコンマ6まで上げろ！」
ニコラの言葉にパックは目を見開いた。
「しかし博士、それではバルブが……」
パックの抗議にニコラはうるさそうに手をふった。
「いいから上げるんだ！」
はい、とパックは返事をするとレバーに飛びついた。
ぎりぎりぎり……レバーを手前に引いた。
ごおおおっ！
地下室を満たす騒音のレベルが上がった。
がたがた……！
木の台に横たわった人形の動きがさらに早まっていく。
博士は目をさらのようにして次の変化を待ち受けていた。
おおっ、と口が開いた。
ぶるぶると全身を震わせ、金属の人形がゆっくりと上半身を持ち上げたのである。
そして……首をのろのろとまわし、ふたりに顔をむけた。
ゆっくりと金属の瞼が持ち上がった。
瞼の下からははっとするほど澄んだ瞳が覗いていた。
パックは全身をこわばらせた。
人形のふたつの瞳がかれを見つめている……。
「……」
人形の口が開いた。
かすかな音が洩れているような……。

ばんっ！
どこかでなにかが外れるような音がした。
その音にふたりは飛び上がった。
「しまった……」
博士は唇を噛みしめた。
ばしゅーっ！
もうもうと白い蒸気が室内を満たす。とうとうバルブが圧力に負けたのだ。
「あ、あ、あ……！」
博士が悲鳴をあげた。
上半身をおこした人形の少女の頭からさかんに蒸気が噴き出している。
がくがくがく……と人形は身を悶えさすように動かしている。くるり、とふたつの瞳が白目になった。がく、と彼女は頭をのけぞらせた。
「いかん！　実験は中止だ！」
ニコラが叫んだ。
その声にはじかれたようにパックは飛び出し、レバーをつぎつぎと戻し始めた。
ばたん、ばたんと台の上の金属の少女は体を打ちつけるように暴れていた。
ニコラは叫んだ。
「いかん、マリアが壊れちまう！」
どうやら人形はマリアと名づけられているようだった。
ニコラ博士は台の人形に飛びついた。
そのままのしかかると、あばれる手足を押さえつけた。
顔を真っ赤にさせ、なんとか押さえつけようとするが、いかんせん人形の力のほうが強いようだった。
たちまち跳ね飛ばされ、博士は床に腰をうちつけた。
うむ……！　とばかりにニコラ博士は呻くと腰をおさえた。

がしゃん、がしゃんと人形の動きはおおきくなる。ニコラはようやく立ち上がり、人形に繋がっているパイプの接続を外しはじめた。

ぽん、ぽん、ぽんと豆がはぜるような音を立てパイプが外れていく。パイプからはせいだいに蒸気が噴出し、博士の姿をおおった。

ごとごとごと……！

地下室全体が激しく振動しはじめ、ニコラ博士はあおざめた。

「いかん！　動輪が……！」

その叫びにパックは反応した。

ニコラ博士の視線を追うと、巨大な動輪が目にもとまらぬ速さで回っている。蒸気圧が高すぎこのままでは外れそうだ！

無我夢中で飛び出し、動輪に繋がっている蒸気をとめようとバルブに飛びつく。バルブに手を触れたとたん、顔をしかめた。

「熱っ！」

あたりを見回し布を手にまきつけ、ふたたびバルブにとりつき、必死に廻しはじめる。

しゅーっという音を立て、動輪の旋回がゆっくりになった。パックはほーっ、とため息をつきへたりこんだ。

ばん、ばん、ばんと音を立て、天井のパイプが接続からはじけとんでいる。もはや室内はしろい蒸気でなにも見えない。

パックは叫んだ。

「もう駄目だ！　博士、逃げましょう！」

くそっ、とニコラはつぶやくとよろよろと立ち上がった。眼鏡が蒸気で真っ白に曇り、手を前にしてあたりを探っている。それを見てパックはニコラ博士の手をとり、一階へむかう梯子に案内してやった。

ふたりはもつれあうようにして梯子をのぼった。最後にニコラ博士は眼鏡のレンズをふき、ちらりと地下室をふりかえった。

唇をかみしめいまいましそうな顔になる。

「なんで失敗したんだろう……」

「博士、そんなこと言ってる場合じゃないだろ！」

パックは無理やり博士をひっぱるようにして梯子をのぼった。
ようやくふたりは地下室から脱出した。
ぜいぜいはあはあと息をつく。
どしん、どしん……。
家全体が振動している。
「外へ出よう……」
ニコラがつぶやいた。
ふたりはよろよろとドアから外へ出た。
出たところでふたりはまぶしさに目をしばたかせた。昼間のひかりが目を射る。
かれらは同時に家をふりかえった。
！
家全体からまっしろな蒸気が噴き出している。びりびりと壁が振動し、屋根の瓦が踊っていた。
ぼうぜんとふたりは見守っていた。
ぼんっ！
ついになにかが爆発したかのような音がして、家全体が煙につつまれた。
がしゃ、がしゃんと窓ガラスが一枚残らずはじけとぶ。がらがらと屋根瓦がなだれをうって落ちていく。
ひゅーっと口笛のような音がして、地下室からなにかが空へむけて飛び出していく。あとにはしろい蒸気がひとすじ残っていた。
ようやく騒ぎがおさまったのは、一時間もたってからだった。ボイラーのほのおが消えるまで、蒸気釜は蒸気を噴き出しつづけていたのだ。
あとには廃墟が残された。
家の壁にはひびがはいり、窓ガラスは内側からふきとび、屋根瓦はほとんど落ちている。蒸気がひえたあとには大量の水となり、すべて水浸しになっていた。
「こりゃまた、いったいなんの騒ぎだ！」

音をききつけかけつけたのはロロ村の村長、サックだった。小太りの四十男で、村で唯一の商店を経営している。派手な黄色い上着に真っ青なズボン。首からは商売に使う算盤を紐でさげていた。

かれの経営する商店はいわばよろずやで、食料から衣料、薬、農具など村で必要と思われるあらゆるものを扱っている。村人の需要にこたえるサックはいつしか重要人物となっていて、とうぜんのごとく村長となりすでに十年以上になる。

サックの背後にはひょろりとした手足の長い少年がにやにや笑いを浮かべ、パックを見ていた。

その顔を見分けたパックはひとりごちた。

ギャンのやつだ……。

かれはサックのひとり息子で、パックよりふたつ上の十四才である。背が高く、髪の毛は見事な金髪。さらりとしたその髪の毛を無造作にかきあげているが、わずかに数本額の前に垂れるのを許し、それがまたかれのハンサムな顔を強調している。その顔はやさしげで、天使のように美しい。

だがパックは、ギャンのその優しげな表情の裏に残虐な性格がひそんでいるのを知っている。ギャンの背後にはおなじくらいの年頃の村の少年たちが数人、ギャンを真似して意地悪そうな薄ら笑いを浮かべこちらを窺っている。

あとで面倒なことになりそうだ……。

パックはばくぜんとした不安を感じていた。

とにかくなにかちょっとしたことでもギャンは難癖をつけてくる。それが正しいことか誤っているかは関係ない。要は言いがかりをつけられればいいのであり、それをたねにねちねちといやらしいほどの仕打ちを仕掛けてくるのがギャンの好みである。

ギャンの背後にいる少年たちは取り巻きであり、言いなりになっている。とはいえ、ギャンにたいする尊敬とか、怖れなどかけらほどもあるわけではない。ギャンのふるまう金が目当てなのだ。

サックのまわりには不安そうな村人たちがニコラの家を遠巻きに

とりまいていた。
　それらの人垣のなか、パックは父親のホルンの顔を見分け唇をかんだ。父親のホルンは顔を真っ赤にさせ、怒りの形相をうかべパックを睨んでいる。どっしりとした身体つき、身長はまわりの人々に比べ頭ひとつはかるく突き出ている。もじゃもじゃの真っ黒な顎鬚をはやし、髪の毛は短く刈り込んでいる。仕事からそのままやってきたのか肌着はまっくろに煤によごれている。
　パックとホルンはふたりで暮らしていた。母親はパックを生んですぐ死んでしまった。その後、ホルンは男手ひとつでパックを育ててきている。父親のホルンは、村で唯一つの鍛冶屋をやっている。かれの鍛えた農具は頑丈で、使い勝手が良いと村でも評判で、村から遠く離れた隣村からも買い手がくるくらいである。
　そのホルンのとなりにふっくらとした小柄な女性が立っている。パックとホルンの暮らす家のすぐ隣にすむメイサという女性である。まるまると太った身体つきで、その太り気味の体を村の女らしい黒っぽいスカートとこまかな模様のレースがついたエプロンでつつんでいる。艶のある真っ黒な髪の毛は頭のてっぺんに団子にむすび、それをやわらかなウールで編んだ帽子が覆っていた。
　彼女はパックとおなじくらいの年頃の娘の手をにぎっていた。女の子は興味津々という表情でパックを見つめていた。
　女の子はどちらかというと太り気味のメイサにくらべ、ほっそりとして痩せていた。燃えるような真赤な髪の毛をして、卵型の顔をしている。村の女の子らしくなくスカートをはかず、ズボンにシャツという男の子のような格好をしている。しかしそれが妙に似合っていた。赤い髪の毛はぎゅっと後頭部でしばり、ポニーテールにしている。彼女はパックを見つめにっこりとほほ笑んできた。
　ミリィまできている……。
　彼女を見つけ、パックは苦りきった。
　彼女はパックとおなじ十二才、同じ年、同じ日に生まれ、兄妹どうぜんに育ってきた。じつをいうとパックはメイサに育てられてき

たといっていいくらいだ。メイサの夫はホルンと親友だったが、パックが生まれるころおきた戦争にふたりとも召集をうけ、戦争がおわったころホルンひとりが生きて村へ帰ってきた。メイサの夫は戦死したと伝えられ、ホルンは足をひきずるようになった。

その戦争についてパックは何度かホルンに尋ねたのだが、父親は重い口を開こうとはしなかった。メイサの夫であったかれの親友を助けられなかったことが重荷になっているらしかった。

「あんたたち、いったいなにをしたんだね？」

村長のサックがずいと一歩前へ進み出て片手をあげ、指を一本立てて見せた。

ニコラは顔をあげた。

「実験じゃよ」

「実験？」

サックは腰に手をあて頭をぐいとふった。

「あの音はなんだね？　なにか爆発したような音だったが」

「爆発などしとらん……ただちょっと機械の調子が悪かっただけじゃ」

ほう、そうかね――とサックは皮肉な笑みをうかべた。

「こんどで三度目だな。こんな騒ぎになったのは」

サックの言葉にニコラはひるんだ。

そうなのだ。

かれがロロ村に住みはじめ、家を買い取り研究所兼住居として実験をはじめてすでに二度、このような騒ぎをおこしていた。これで三度目。サックはつづけた。

「一度目はまあそんなこともあろうかと思って許した。二度目もわたしらは我慢した。だが三度目となると話しは別だ。もうわたしらも黙ってはいられないよ」

「どういうことだね？」

じょじょにニコラの顔が赤くそまっていた。

やばい……！

パックははらはらしていた。
ニコラ博士はきわめて短気なのだ。このままではニコラ博士の怒りに火がつくのはあきらかである。
サックはわめいた。
「出て行ってもらおう！　わしらはあんたらの実験とやらでひどい被害をこうむっているんだ！」
「どんな被害だね、教えてもらおう！」
ニコラも怒号した。
サックはかんかんになって足を踏み鳴らしさけんだ。
「あの音！　村中にひびくあの音でわしらの牛や山羊が怯えている。牛は乳をださなくなるし、山羊は草を食べなくなる！　それにいまはあんたらの家だけだが、いつか村に火事をださんともかぎらないじゃないか」
ロロ村の産業は牧畜である。
牛、山羊、羊などを飼い、牛からはミルクをしぼりチーズなどをつくる。羊からは羊毛をとり、織物をおる。これらの生産品は春になるとちかくで開かれるバザーにもちこまれ、村の現金収入となるのだ。
ニコラ博士はサックの背後の村人に話しかけた。
「どうなんだ、あんたらもおなじ意見か？」
ニコラ博士に問いかけられ、村人たちはすばやく目配せをかわしあった。村の人間はめったにじぶんの意見を言うことはない。村長のサックは商店を経営しているせいか、きわだって雄弁だった。
サックはすばやく背後の村人たちをふりかえった。
「どうだ、あんたらもわたしと同じ意見だろう？　このニコラ博士に村から出て行ってもらいたいはずだな？」
サックに言われ村人たちは困ったような顔をしておたがい見合わせた。
かれらの胸のうちを代弁するとたしかにニコラ博士が実験とやらをすることについては不安があるが、それでもはっきりと村を出て

行けとは言えないのだった。それは村の牧歌的な生活になじまない。
村人の視線はしぜんにパックの父親のホルンに集中していた。
サックはホルンの長身を見上げた。
「ホルンさん、あんたはどうだね？」
村のなかでただひとり戦争にでかけ生きて帰ってきたことでホルンは一種英雄のあつかいをうけている。サックを除けばこんな場合意見を求められることが多い。
ホルンは困ったように太い指で顎鬚をつまみ口を開いた。
「まあ、博士の研究とやらがどういうことをしているのか知らんが、いまのところこの家だけでとどまっていることもあるし、こらから気をつけるようにしてもらう……こんなこところでどうだろうか？」
ホルンの言葉に村人たちはほっとしたように顔を見合わせた。やはり表立って敵意をむきだしにすることは村人たちにとってむずかしいのだ。
サックはいまいましげに唾をはいた。
「そうかね！　あんたらがそういう意見ならわたしはなにも言うことはないよ。しかしこの際、はっきりと言っておくがね、いまにこのニコラ博士は村に大変な災厄を呼び込むことになるよ！　わたしの言葉をその時思い出しても遅いからね！」
村長のサックはぷりぷりと怒りながら帰っていった。村人たちもようやく解放されたように三々五々、帰っていく。
後に残ったのはパックの父親のホルンとミリィ、それにメイサの三人だった。
「まあまあ……ひどい有様ねえ。掃除が大変……」
メイサはつぶやきながらニコラ博士にお構いなしに家のなかに入っていった。ミリィはパックのそばに近寄った。
「ねえ、いったいどんな実験をしてたの？」
好奇心むきだしで彼女は目を輝かせた。
パックとは兄妹どうぜんに育ってきて、こんな場合でもずけずけとものを言うのだ。

パックはどう説明しようかと肩をすくめた。博士の研究を手伝っているのだが、理解していないことでは村人たちとおなじである。パックは実験室でさまざまな機械を操作することが面白くて手伝っているのだった。

「ね、地下室見せてくれない？」

ミリィにささやかれパックはぎょっとなった。

「そんなこと……博士が許さないよ」

「なにを許さないというんだ？」

ホルンの太い声にパックは身をすくませた。父親のホルンは太い腕をくみ、眉をよせてパックを見つめている。

「おれは博士の研究とやらを見てみたいな。今日のようなことがあると」

ホルンの言葉にニコラとパックは顔を見合わせた。

じっとホルンに見つめられ、しかたがないというように手をあげる。

「まあ、あんたがそんなに見たいと言うなら地下室へきなさい。ただし足もとは保証しないがね」

博士の言葉にホルンはうなずいた。

じろりとパックを睨む。

肩をすくめパックはホルンのあとに続いて家の中へはいっていった。

「ひでえ……」

パックはため息をついた。

家の中は台風が吹き荒れた後のようだった。あちこちに水溜りができ、壁には一面にしみができている。家具はほとんど倒れ、天井からはぽたぽたと水がしずくとなって垂れてきている。

地下室には梯子でおりる。

ぎしぎしときしむ梯子を一同は降りていった。

「なんだこれは……」

ホルンはうなった。

地下室はさらにひどい有様となっていた。　天井にはしるパイプが床になめに垂れ下がり、床は大量の水でプールのようになっている。あたりに焦げ臭い匂いがただよい、灰が一面にうすく積もっている。

ばしゃばしゃと水を掻き分け老人はがっくりと肩を落としてあたりを見回した。

「思ったよりひどい……これでは研究を再開するまでかなり時間がかかるな」

「あんた、まだそんなこと言っているのか！」

ホルンはあきれて大声をあげた。

「いったいどんな研究か知らないが、もうすこしで火事になるところだったんじゃないのかね？　そんな危険をおかしてまでする研究とはどんなものなんだ？」

ニコラ博士とパックは、研究室の真ん中に置かれた台を見やった。あの金属製の人形が横たわっている。

ホルンはふたりの視線をおい、台に近づいた。

「こりゃなんだ、人形かね？」

「ロボットだよ……」

ニコラ博士がぼそりとつぶやいた。

「ロボット……？　なんだね、それは」

「人間そっくりに造られ、人間とおなじように考え、行動するものだ。この研究が完成すれば、そこにあるロボットは話し、考えそして歩くようになる……もうすこしでそのロボットは思考能力をもつようになるところだったのだが……」

ニコラはくやしそうに近くの機械をどん、と叩いた。

ホルンは首をふった。

「そんなものを造ってどうするというんだ？　人間そっくりに動く人形など、おれは都会でさんざん見ているよ。チェスをしたり、絵をかいたりするやつだ……」

ホルンの言葉に博士はきっとなった。

「そんなのはロボットとはいえん！
精巧な作り物だが自動的に動くただの玩具じゃないか！
わしらの作ろうとしているのは、人間と同じように考え、行動するものなんだ！」
「それがそうだというのかね？」
ホルンは人形にむけ顎をしゃくった。
ニコラはうなずいた。
「そうさ。もしこの研究が完成すれば、われわれは人間以外の知的なパートナーを得ることができる。すばらしいことじゃないか？」
ホルンはゆっくりと首をふった。
「おれにはわからんよ……。そんなものができてもたぶん、あたらしいごたごたのもとになるんじゃないのかな？」
これには博士もぐっとなったようだった。
ホルンの背後から顔を出したのはミリィだった。
「これ、女の子なの？」
目をきらきらとさせ、台に横たわっている人形を見つめている。
彼女の質問に博士はなぜか顔をあからめた。
「うん、まあ……どうせ造るならそのほうが造りがいがあるからな」
「これ、本当に動くようになるの？」
「そのつもりだが……」
ミリィは興奮した。
「ねえねえ、動かして見せてよ！　あたし、見たい！」
博士はゆっくりと首をふった。
「これを見てくれ……この有様だ。実験は失敗だった」
博士は絶望的な表情で地下室を見渡した。地下室の機械はほとんど水浸しになり、ボイラーの釜にはひびがはいっている。
なあんだ、とミリィは肩をすくめた。
「つまんないの……」
でも！　とまた顔を輝かせる。
「つぎに実験するのいつ？　その時あたしもこの……ロボットだっ

け？……動くところ見たいな！　ねえ、パック！」
だしぬけに名前をよばれパックはミリィに顔をむけた。
「あんたこの女の子動くところ見たの？」
パックはニコラ博士を見た。
老人はうなずいた。
「ああ、動くことは動いたけどね」
「すごいじゃないの！　あたし、サックさんがなんと言おうと、この研究続けるべきだと思うわ！」
ミリィの言葉に博士はにんまりと笑みをうかべた。結構単純な性格である。
「そう思うかね？」
「そうよ！　だってすばらしいじゃない！　こんな綺麗なお人形が喋ったり、あたしたちとおなじように動くなんて！」
ミリィの反応にパックとホルンはあっけにとられていた。
「なるほどな……」
ホルンは顎鬚をぼりぼりとかいていた。
「あのう……」
天井から声がふってきてみな上を見上げる。
メイサが地下室につづく梯子の上から顔をのぞかせていた。
「どうでもいいけど、お掃除しないと今夜寝ることもできないんじゃないかしら。いまのうちからかたずけしませんこと？」
ニコラ博士はうなずいた。
「まったくだ。そのことについては、すっかり忘れていたよ」
博士は梯子をのぼっていった。
メイサはミリィに声をかけた。
「ミリィ、そんなところにいつまでもいないで上がってらっしゃいな。そこは水びたしで冷えるでしょ？」
はあい、と返事をしてミリィは梯子を上っていく。あとに残されたパックとホルンは顔を見合わせた。
ホルンはパックを見おろし腰に手を当てた。

「さてと……お前にはすこしばかり言うことがあるな」
うん、とパックはうつむいた。
ホルンの言うことがある、というのはわかっている。
「いったいなにが面白くてあの博士の手伝いをしているんだ？　おれの仕事は面白くないか？」
ううん、とパックは首をふった。
そんなことはない。
父親のホルンはこのロロ村で鍛冶屋をやっている。鉄を鍛え、農具やさまざまな道具を造ったり修理したりしている。パックは子供のころから父親の仕事を手伝っていた。ホルンの仕事はそれはそれで面白かった。
真赤な鉄の固まりがホルンのハンマーによって鍛えられ、やがていろんな形になっていくのを見守るのはわくわくする経験だ。
パックは顔を上げた。
「父さん、父さんの仕事は面白いよ。でも、ここでの博士の手伝いもおなじくらい面白いんだ」
そうか、ホルンはかすかに肩をおとした。
ホルンは手をのばし、パックの肩に手をかけた。
「家に帰ろう。もう遅い」
ふたりは地下室から出た。
一階にもどるとミリィの母親のメイサが腕まくりをして博士を手伝ってあと片付けをしているところだった。老人はあまり役立っておらず、メイサのあとをうろうろとついてまわっているだけだった。彼女はてきぱきと働き、床にモップをかけたり割れているガラスを集めていたりしている。
メイサはホルンとパックに顔をむけにっこりと笑いかけた。
「ホルンさん、ここですこしばかり後片付けのお手伝いをしていきますから帰りは遅くなります。食事はミリィが作りますから。よろしいですね？」
メイサはパックとホルンのため朝食と夕食の用意をする習慣だっ

た。ホルンはその礼に毎月いくばくかの謝礼を渡している。
ホルンはあきらめたようにうなずいた。彼女のことはよく知っている。目の前にこのような惨状があれば、それが他人の家であれ手を出さずにいられないのが彼女なのだ。
パックは驚いてミリィを見た。
「ミリィが料理するのか？」
彼女が料理するところなど、パックは見たことがない。ミリィはつん、と顔をそらせた。
「あら、あたしだって料理くらいするのよ！」
へえ、そうかとパックは頭をかいた。
ホルンは首をふった。
「奥さん、ひとりでは片付きませんよ。おれも手伝いましょう」
あらあら、とメイサは手をふった。
「大丈夫ですわよ！　ここはあたしにまかせて家に帰ってらっしゃいな。ミリィ、後は頼んだわ！」
はあい、とミリィは答える。
悪戯っぽい目つきでパックを見ると手を伸ばし、ぐいと腕をつかんだ。
「さあ、家へ帰りましょ！」
もう一方の手でホルンの腕をつかんだ。両手にホルンとパックの二人の腕をつかみ、ぐいぐいと引っ張る。
パックは後ろをふりかえった。メイサがちょこまかと動きまわり、後片付けをしている。ホルンを見上げ口を開いた。
「父さん、やっぱりおれ、メイサ叔母さんの手伝いをするよ！」
ホルンはうん、とうなずいた。
「いってこい！」
パックは無理やりミリィの手をふりほどくと、博士の家へむけ走り出した。
ミリィは叫んだ。
「じゃ、あたしも行く！」

「おっと、きみはおれと家へ帰るんだ。あのふたりが帰ってくる前に、食事の用意をしてやらないとね！」

駆け出そうとするミリィをホルンは押しとどめた。ミリィはしかたなくうなずいた。

「わかった……おじさん」

パックはふたりに手を振った。

「飯のしたく、たのむぜえ！」

そう言うと家へあがりこむ。

中ではメイサがぽっちゃりとした頬を真赤にそめ、ひたいに汗をうかせ働いていた。ニコラの姿はない。

「博士はどうしたの？　叔母さん」

「なんでも地下室が心配だって、下へ降りていったわよ」

博士にとって研究がなにより優先するのである。パックは地下室への入り口にすわりこみ、階下をのぞきこんだ。地下室では、老人が床にたまった水をばしゃばしゃと掻き分け掻き分け、歩き回っている。地下室の機械の蓋をあけ、内部に鼻をつっこむようにしてなにやら点検し、ぶつぶつとなにかつぶやきながら開いたノートになにやら書き込んでいた。

地下室のまんなかにはあの金属の人形……博士がマリアと名づけた……があいかわらずひっそりと横たわっていた。

あんな騒ぎを引き起こしたとは思えないほど静かな寝姿である。

あの時、たしかに彼女はパックを見た。そしてなにか言いかけた……。

ぶるっと頭をふってパックはその考えをふりはらうとメイサに声をかける。

「おばさん、手伝うよ」

あらまあ、とメイサは笑った。

「それじゃあ寝室だけでもなんとかしなくてはね」

早足で二階へあがる。寝室は二階にあるのだ。パックはメイサについていった。

寝室はそれほど被害はなかった。

窓際にひとつ、ドアの近くにもうひとつ鉄製の簡素なベッドがならんでいる。それでも蒸気がこの部屋まで上がってきたせいか、ベッドの敷布はじっとりと湿っていた。メイサは敷布に手をかけ眉をしかめた。

「まったくこれでは寝られないわね……まだ陽が高いから乾くでしょ」

手早く敷布と毛布をたたむと運んでいく。パックも手伝って何枚かの毛布をかかえ階下へおりた。

と、パックはベッドのそばのテーブルの写真立てに気づいた。

写真立てに飾られているのはふたりの老人の姿である。

ひとりはニコラ博士、そしてもうひとりは……やはりニコラ博士だった。というより、まったく同じ顔、姿のふたりの老人が写真に写っている。

じつはニコラ博士は双子の兄弟のひとりだったのだ。

一緒に写っているのは、弟のテスラ博士なのである。ふたりの老人はおたがいの肩に腕をまわし、にこにこと笑みを浮かべ楽しそうである。この写真についてニコラ博士にパックは尋ねたことがある。するとニコラ博士は肩をすくめ説明した。

弟のテスラはニコラ博士と考え方が違い、ニコラ博士がロロ村に引っ込んで研究を続けることに反対だったらしい。以来、ふたりは袂を分かち、兄のニコラ博士はここロロ村で、弟のテスラ博士は都会で研究を続けている。ニコラ博士はテスラ博士のことを口を極めて罵った。

「あやつは研究費ほしさに、軍と手を結びおったのよ！　そんなことでは自由な研究など、出来るわけないのにな……。いまに後悔することになろうて……」

「テスラ博士と会うことはないんですか？」

パックの質問にニコラ博士は哀しそうに首をふった。

「ああ、ないだろうな。いまに大変なことになるぞ、と忠告はした

のじゃが……。軍と手を組んだらどういうことになるか、わしには判っておる。かならずがんじがらめになり、気がつくと首を締め付けている紐に気づくときがくるはずじゃよ」

ふうん、とパックは思った。きっとニコラ博士は弟のテスラ博士をロロ村へ呼びたいのじゃないか、と考えた。

パックとメイサのふたりは家の前に物干しをだして敷布と毛布をひろげ乾かした。まだ太陽は高く、敷布と毛布からは湯気がたっている。

季節は夏だ。まだまだ昼の時間は長い。

メイサとパックはもくもくと博士の家をかたづけていった。

ロロ村（後書き）

蒸汽帝国第一回です。おそらく、わたしの書いてきた小説のなかでももっとも長くなるはずです。かなりの長期連載になると思われますので、気を長ーくしてお楽しみ下さい。

学校（前書き）

パックの日常のスケッチです。村の伝説が語られます。

学校

「へーえ、いがいとやるもんだなあ！」
食卓にならべられたご馳走を前にパックは素直に感心して見せた。
つんと顔をあげ、それでもパックの賛辞にうれしそうにミリィはかいがいしく食事の用意をしていた。
ホルンの食卓にはミリィが用意した夕食がうまそうな湯気をたてている。深いスープ皿には野菜とベーコンのとろりとしたスープ。まんなかの皿には種無しパン。ざく切りのサラダ。ぴりっと香料をきかせた酢漬けの胡瓜など。
「叔母さんはまだ帰らないのか」
ホルンが顔をあげパックにたずねた。
パックはすでにパンをちぎり口に運んでいる。
「うん、おれだけ先に帰っていなさいって言われたんだ。でもほとんど片付いていたから、もうすぐ帰ってくるんじゃないかな」
パックの言葉が終わる前にドアが開く音がして、みんながそちらに視線をやるとメイサが姿をあらわしたところだった。彼女の頬は健康そうにピンクにかがやいていた。
「やっとなんとか人が住めるようになりましたよ。博士ったら、あたしが片付けようとするとそれは大事な装置だとか、資料だからと手を触れるのをいやがってねえ……。あれじゃあんなことがなくてもだれか片付けないとごみためみたいなもんですよ！」
やれやれとため息をついてメイサは食卓に腰をおろした。このところ、四人は家族のようにホルンの家で夕食をとるならわしになっていた。夕食が終わるとメイサとミリィは隣りの自分の家に帰っていく。
給仕の仕事をミリィから引き継ぎ、メイサは手早くホルンの皿にスープを盛ったり、パックにパンを手渡したりしてあれこれを話を続けた。

天気のこと、そろそろ近づいてきた祭りのこと、秋の収穫、はては壁紙をかえたほうがいいかどうか。とにかくメイサの話しはあちこちとぶ。

ふと、メイサは思い出したというようにぽん、とじぶんの額をたたいた。

「そういえばパックちゃん、もうすぐ十三才の誕生日ね」

「うん、そういえば……」

ふいにじぶんに話をふられ、パックはあわてて食べ物を飲み込んで答えた。

メイサは満面の笑みをうかべた。

「ということはミリィも誕生日ってことよね！」

ミリィとパックはぽかんとした表情で顔を見合わせた。いったい叔母さんはなにを言おうとしているのか？

メイサはおごそかな顔で宣言した。

「お山に登る日が近づいているんじゃない？」

ああ、とホルンはうなずき、口を開いた。

「そうか、そういえば……」

ここロロ村では村の子供が十三才の誕生日をむかえると裏山に登るならわしである。

山にはふるい城の廃墟があり、そこには一本の聖剣が石の台座につきささっている。十三才になった子供は、その聖剣に手をふれ、村へもどる。それがならわしであり、儀式であった。

村の伝説によれば、昔……数百年前、もしかして千年前……裏山に魔王の城があった。城は魔王の魔力を強め、世界は滅亡の淵にあったという。

その魔王を倒しにひとりの勇者があらわれ、激闘の末魔王を封印したという。聖剣はそのときのものである……。

その後勇者はロロ村のあったところに住み着き、やがて子孫がふえ、いまの村になったということだ。

つまりロロ村の住民は勇者の子孫と言うわけである。

魔王を封印した勇者に感謝し、そして子孫である自覚をあらたにするため村の子供は十三才の誕生日をむかえると聖剣にふれる慣習なのだ。

パックは窓の向こうの裏山を仰ぎ見た。

山は夜空に溶け込み、シルエットはほとんど見えないが、たしかにその場所にそびえていることはわかっている。

毎日なんの気もなしに見ていたが、その山に登るということはついぞ思いついたことはなかった。

おそらくロロ村の人間だれひとりとしてこのような特別な儀式がなければ登ろうとは思ったことはないのではないだろうか。

聖剣とはどんなものなんだろう……。

パックはまだ見ぬ勇者の剣に想いをはせていた。

かん、かん、かんっ！

朝もやの空気をふるわせ、木のふれあう乾いた音がひびいている。

「それっ！　まだ突きが甘いぞ！　そんなへっぴり腰では、小手が隙だらけだ。そらそら、脇があいている！」

ホルンの楽しげな声が聞こえている。そのあいまにパックのせわしない喘ぎ声。やあ！　というかけ声をかけ、パックは手にした木刀をふりあげた。

「そらっ！」

ホルンの声とともにあっ、というパックの声。

からん、と音がしてパックの木刀が地面に転がった。ホルンがたくみにパックの木刀をはねあげ、宙に飛ばしたのだ。

パックが手にしていたのは木刀である。木刀とはいえ、身体に当たれば怪我だけではすまない。当たり所が悪ければ、重傷もありうる。

対するホルンの手にしているのは無造作に折り取ったらしき小枝いっぽんである。その小枝いっぽんで、ホルンはパックのふるう木刀をらくらくとあしらっていた。

パックの顔に悔しげな表情が浮かんだ。
ホルンはそんなパックをニヤニヤ笑いを浮かべ見つめている。からかうような調子で声をかける。
「どうした、もう降参か？」
「まだだっ！　もう一丁！」
「よし、その意気だ」
パックは地面に転がった木刀に飛びつくと、ぱっと身をひるがえしいきなりホルンにむけ突きをいれた。
思いがけない動きにホルンは一瞬たじろいだ。パックの突きを受け流そうとしたホルンの手元が狂った。
ぼき、と音がしてホルンの小枝が真ん中から折れた。
おっ、とホルンは唇をとがらせる。
わずかに身を反らせただけだが、パックはそれに勢いをえてさらに突きをいれてきた。
ホルンの口もとにかすかに笑みが浮かぶ。
のこった小枝をさっとふりおろし、パックの木刀の刀身の背に当てた。
う！　とパックの動きが止まった。
ホルンの手にした小枝は真ん中から折れ、ほとんど武器として役にたつはずはないのだが、木刀の背にぴたりと当てただけでパックはそれ以上持ち上げられない。見る見るかれの顔に玉の汗がうかぶ。
畜生……とパックは刀身をさっと下げた。
がつっ、と木刀の先端が地面を噛む。
さらにパックは身動きがとれなくなっていた。
右に動かそうが、左に動かそうがまるで地面に根がはえたように動かせない。
ホルンは涼しげな表情で小枝いっぽんで木刀をおさえているだけだ。
「畜生っ！」
ひと声叫ぶとパックは木刀から手をはなした。

そのままへたりこむと、荒い息を吐き肩を落としうつむいた。
「いまの突きはよかったぞ」
ホルンの言葉にパックは顔を上げ「え？」というような表情になった。
父親はうなずいた。
「あの呼吸をわすれないことだ」
うん、とパックはうなずいた。ホルンがほめることはめったにない。じんわりとパックの胸に達成感がわいてきた。
十才になったころパックはホルンに木刀を渡された。ホルンが手ずから削りだした手製のものだ。
その日から剣の修行が始まった。
朝、まだ暗いうちからおきだしホルンは庭で小枝いっぽんを手に持ち待っている。
パックはそのホルンに木刀で打ちかかる。
はじめ、の合図もなくパックが打ちかかったその時が修行のはじまりだった。
とにかく、どのようなかたちでもいいから木刀をホルンの身体に触れさせればいいのだ。
もっとも一度たりともホルンはパックに打ちかからせたことはないが。
おわりはパックがやめたいと思ったら終了だった。ともかくやるもやらないも、パックしだいであった。
最初のうちパックはやりたくはなかった。
どんなに打ちかかってもホルンはらくらくと打ち込みをかわし、パックはとほうにくれた。
そのうち飽きが来る。
十日間、パックは練習をやめたことがあった。
それでもホルンはあいかわらず庭先にたち、小枝を手に持っていた。
とうとうパックはふたたび木刀を手に持ち、父親に打ちかかった。

それ以降、パックは休んだことはない。
雨の日も、雪の日も、風の強い日もパックはホルンに打ちかかる。
ホルンはたくみにパックの攻撃を受け止め、あるいは受け流した。
そして三年。
ぼんやりとであるが、パックはあとすこしでホルンの身体に木刀を触れさせることができそうな感触を得ていた。
それがパックの成長なのだが、自覚はなかった。
「飯にするか？」
ホルンに声をかけられ、パックはうなずき立ち上がった。
家に入る前、庭先を流れている小川で顔をあらい口をすすぐ。さっぱりとした気分になると家に入っていく。
朝食は前日の夕食の残りですませた。
食べ終わると、ホルンとパックは窓にちかより裏山を見上げた。
もうすぐあの山へ登ることになるのだ。
今日の山は全体に霧がかかり、うすぼんやりとしたシルエットを見せている。ごつごつとした岩がつきだし、緑はほんのすこししか生えてはいない。
村は山の斜面に広がる形で発展してきた。どの家からでも山はすぐ目に付くところにそびえ、朝の光を最初にあびる。どういう理由か、朝日をあびると山は金色に輝き、また夕日にそまると燃えるような赤にそまる。
普段は灰色の岩肌が陰鬱な色彩を見せるのだが、この朝と夕方の変化は毎日見ていても飽きることはなかった。
しかし今朝の山はまとわりつくような霧もやのなかに黒々とうずくまっていた。
パックはじっと見上げていた。

朝日が昇ると、朝もやは溶けるように消え、抜けるような青空がひろがる。
一斉に木々では蝉が懸命に鳴き声をあげ、気温はぐんぐんと上昇

した。
「行ってきまあす！」
パックは肩下げのバッグをもって家を飛び出した。
学校へ行くのである。
村の子供は一週間に半分、学校に通う。バッグの中身は教科書と弁当である。ミリィの家を通りかかると彼女がドアを開き、パックとおなじようなバッグを持って出かけるところだった。
「パック、一緒に行こうよ」
「おう！」
返事をしてパックはミリィと肩をならべ歩き出した。
歩き出すとミリィはパックの顔をのぞきこむようにして話しかけてきた。
「ねえパック、お山へはいつ行くの？」
「そうだなあ、やっぱり誕生日のあとかな」
ふーん、とミリィは生返事。
ぱっと前へ飛び出すとくるりと振り向き、パックにまた話しかける。
「ねっ、あたしも一緒に行くわ！　お弁当つくっておくから、連れてってよ」
ええーっ、とパックは声をあげる。
「いいじゃない、あたしだってパックと同じ誕生日なんだもの。やっぱりひとりで行くつもりなの？」
「だってお山へはひとりで行くもんだろう？　ふたりで行くなんて聞いたことないぜ」
「だれが決めたの？　ひとりで行くって」
言われてパックはつまった。
たしかに決められたことではない。なんとなく、ひとりで登るものだと思っていたのである。
そうか……ふたりでもいいんじゃないかな……。
パックはミリィを見てうなずいた。

「よし、一緒に登ろう！」
「決まりね！」
ミリィもうなずいた。
ふたりは肩を並べ歩き出した。
朝日がまぶしく村を照らしている。
二人の歩く道の両側には、ところどころ巨大な石の柱が建てられている。石の柱の表面には細かな浮き彫りで模様が刻まれている。浮き彫りは相当古いものらしく、長年の風雨で模様は薄くなっている。模様のモチーフは渦巻き模様で、村にはこのような石柱が何本も立っているのだ。
この石柱がなんの目的で立てられているのか、製作者はだれか、すべてわからない。ただ、昔からあるので村の誰も疑問に感じたことはないのである。
村の建物のほとんどにはこの石柱に刻まれた模様をまねた飾りがつけられていた。
学校は村のはずれの斜面に建てられている。村の子供たち三十人あまりがそこへ通う。十五才になると卒業で、それより上の学校へは都会へ出なくてはならない。だがほとんどの生徒は村に残ることを選び、上級の学校へ進むのは年にひとりか、ふたりだった。
学校への道で、パックたちはおなじような登校中の子供たちと出会い、かたまりあって歩き出した。
「パック、ギャンに気をつけるんだぜ」
学年が一年下のコールが近づくと、まわりに目をくばりながらささやいた。パックはコールを見おろした。
パックはそう背の高いほうではないが、コールはさらに小柄な男の子だ。まるい頭をくりくりに坊主刈りにして、いつも油断ない目つきをしている。鉢のひらいた頭のせいで、茸に手足がついたような印象をあたえていた。コールの得意技は情報収集で、村のあらゆる噂話に通じていた。
「ギャンがどうしたって」

パックはどちらかというと関心のなさそうな口調で尋ね返した。
ギャンのことは正直、あまり考えたくもなかった。ギャンはどういうわけかパックに対し敵意を持っているらしく、いままでも何度もしつような嫌がらせをしかけてきている。
あいかわらずコールはきょときょとあたりを見回しつつささやきかえした。
「ギャンの奴、いつもの取り巻きをよびよせてなにか相談していたんだ。おれ、聞き耳をたてていたんだけど、何度もパックの名前が出ていたんだ。だから近いうち、なにかしてくるんじゃないかな」
ふうん、とパックは感心してコールをながめた。いったいいつ、コールはこんなことを聞きつけるんだろう。
するとパックの隣りを歩いていたミリィが口をよせてささやいた。
「パック、あのね……ギャンのことだけど……」
「なんだよ?」
大声をあげるパックの口をミリィは慌てておさえた。
「もう……! とにかくギャンのことだけど、ちょっと聞いて欲しいことがあるのよ」
「なにか嫌がらせしてきたのか?」
「そうじゃなくて……!」
ミリィはどう説明しようかと天を仰いだ。
そうこうするうち学校の建物が見えてくる。
二階建ての、木造の校舎である。校庭が前に広がり、背後には杉林がせまっていた。
パックたちは三つある教室の上級生の教室に入った。教室はあと下級生、初年組みのクラスに分かれている。
教室に入るとすでにギャンが席についていた。ギャンのまわりにはいつもの取り巻きが椅子に腰掛けていたり、あるいは立っていたりおもいおもいに取り囲んでいる。パックが教室にはいるといっせいに視線を動かし、じいっと睨んで来た。
「怖い……」

ミリィはパックの後ろに隠れるようにしてつぶやいた。
それほどギャンたちの今日の様子はふだんと違い、殺気立っていた。
どういうことだろう。
パックは内心首をかしげつつ、自分の席についた。パックの席はギャンからいちばん遠いところにある。
のろのろとミリィも自分の席についた。ミリィの席はパックとギャンの中間にある。
いつもなら先生がくるまで教室の中はざわついてうるさいほどなのだが、今日は張り詰めた空気に気づいていたのか、生徒たちは妙に静かだった。パックとギャンの間には電流のように敵意が交わされているようだった。
からり、と教室の引き戸が開き教師が姿をあらわした。
担任のカース先生である。
年は五十を少し越している、ふっくらと太って目にやさしげな笑い皺をきざんだ女性の教師だ。
教室に踏み込んだカースは、異様な空気に一瞬たじろいだが、それでも平静に戻り教壇にたつと口を開いた。
「みなさん、お早うございます」
お早うございます！
生徒が一斉に返事をする。
パックはギャンが返事をせず、だらりと椅子に背をもたれさせ、皮肉な笑みを浮かべているのをちらりと目の隅で確認していた。
カースはにこやかな口調で続けた。
「今日は歴史の授業です。みなさん、このロロ村が十二年前、コラル帝国の版図に組み込まれたのはご存知ですね。ではそれ以前、ロロ村はどの版図にあったのでしょうか？」
生徒に背を向けると、カースは黒板に字を書いていった。

コラル帝国

「そうです、それまではこのロロ村はスリン共和国の所属でした。しかし十二年前に共和国と帝国の間に戦争が勃発し、共和国は滅びました。それ以来、ロロ村はコラル帝国の信託統治領となったのです」

「先生、質問です！」

今年、はじめて上級組みに入ってきたオランという女の子が手をあげた。金髪を三つ編みにして、赤い縁の眼鏡をかけている。ふだんは目立たないが、勉強はよくできる。

カースはうなずいた。

「はい、オランさん。なんですか？」

「コラル帝国とスリン共和国の間でおきた戦争の原因はなんですか？」

「良い質問ですね。十年前、スリン共和国は隣国のゴロスに宣戦布告しました。ゴロスはコラル帝国の保護領だったので、すぐさま帝国はゴロス領に進軍を開始、戦端が開かれたのです。

戦況は最初共和国に有利でしたが、やがて帝国軍が押し返し、わずか一ヶ月で戦争は終結しました。共和国のスリン大統領は国軍の崩壊直前、逃亡し、いまは行方が知れません。噂では、ゲリラを組織し共和国再興を画していると言われますが、あくまで噂です。

このコラル帝国はもともと百五十年くらいまえ最初の萌芽が見られ、当時の風雲に乗じてひとりの皇帝が誕生して……」

授業はコラル帝国の歴史にうつり、パックはうつらうつらしはじめた。カース先生の声は子守唄のように心地よい。

と、パックの頬になにか当たった。

なんだろうと目を開けると、机に丸めた紙が落ちている。

きょろきょろと教室を見回すと、ギャンの目とあった。

ギャンは意味ありげな視線で、丸めた紙を見ている。

パックは紙をとりあげ、ひろげた。

ギャンの字でこうある。

放課後、会いたし

ギャンを見ると、かれはじっとパックの目を見つめ返した。
やれやれ……。
パックは肩をすくめた。
わかった、という風にパックはうなずいて見せた。
ギャンはにやりと笑い、目をそらした。
そのふたりのやりとりを、ミリィが見ていたことをパックは知らなかった。

学校（後書き）

この話で語られる伝説とパックがどうかかわっていくか、それは次回以降のお楽しみです。

ギャン（前書き）

クラスメートのギャンとパックは放課後、対決する。ギャンの本性があらわに。

ギャン

放課後、パックは学校の裏手にある森でギャンと顔をあわせた。
パックはひとり、ギャンはいつもの取り巻きをつれている。
木の切り株に腰をおろし、ギャンは顎をあげてパックを下から見上げた。
「ギャン。なんの用があるんだ」
パックが口を開くと、ギャンの取り巻きのひとりのツーランという少年が大声をあげた。
ぼってりと太り、目鼻が丸い顔の真ん中にあつまったような顔をしている。
「ギャンさんと呼べ。お前より、二年うえだぞ！」
パックはツーランの言葉を無視した。無視されツーランの口もとがひくひくと痙攣して、ぴりぴりと額に青筋がういた。
ギャンはふっと笑い、肩をすくめ口を開いた。
「パック、おまえまだあの爺さんのところへ通うつもりなのか？」
「ニコラ博士のことかい。それがおまえと何の関係があるんだ」
「村の安全にかかわることだ。いずれおれはこの村の村長になる。村の安全についてはおれの責任なんだ」
「村長になるって？」
パックはあきれた。
ギャンはまだ十四才、いずれ十五才になるだろうがまだまだ大人とはいえない。父親のサックは四十代で、引退するには早すぎる。
「おれが村長になることは決まっていることだ。そりゃ何年先になるかわからないが、いまから村のことについては、いろいろ気を配っておかないとな」
ふらり、とギャンは立ち上がった。
立ち上がるとギャンはパックより頭ひとつぶん背が高い。
その高みからギャンはパックを見下ろした。

ギャンが立ち上がると、取り巻きたちが素早く位置を変え、パックを取り囲む。
逃げ場をふさぐつもりだ。
「パック、おまえがあの爺いのところへ通うつもりなら、すこしばかり痛い目にあってもらわないとな」
へへへ……、と取り巻きの少年たちが下卑た笑い声をあげた。サディスティックな期待感に瞳が邪悪に輝いた。
パックはさけんだ。
「嘘だ！　ギャン、おまえはただ因縁をつけたいだけなんだ。正直に言えよ。おれが気に入らないだけなんだろ？」
しゅっ、とギャンの手首が動いた。
ぱあん、とパックの頬が鳴る。
じいん、と痛みが痺れを伴ってパックの頬にしみた。
ギャンは唇をまくりあげて言い放った。
「なんて言い草だ！　お前には年上の人間にたいする敬意というのはないのか？」
かっ、とパックの胸に怒りがこみあげた。
この野郎！
パックはギャンに飛びかかった。
「それ！」
ツーランが足をとばし、パックの足にからめてきた。
わっ、とパックは前かがみなってころんだ。
ころんだところにツーランが爪先で蹴り上げようとしてきた。
パックはごろごろところがってそれを避けた。
その時、かれの指先が触れたものは細い木の枝だった。無我夢中でそれを握りしめ、パックは立ち上がった。
「おっ？」
さらに攻撃をくわえようとしたツーランはパックが木の枝を握っていることにちょっとためらった。
細い木の枝一本ではあるが、パックはそれを剣をもつかのような

構えで持っていた。
ツーランはへっ、と笑った。
なんだ、ちょっと触っただけでぽきりと折れそうな細い木の枝だ。
ためらった自分が馬鹿のようである。
だっとばかりに突っ込む。
ぴしっ！
「わっ！」
ツーランは鼻をおさえた。
つーん、と痛みが鼻先から脳天へ突き刺さる。
「痛え！」
悲鳴をあげ、ツーランはかがみこんだ。
ぱしっ！
また鋭い痛みが頬をおそった。
頬をおさえた手の甲にまた痛みがおそう。
わっ、わっと悲鳴をあげつつツーランは踊りを踊るように飛び跳ねた。
いったいなにがおきた。
痛みに涙がにじむ瞼をあげ、パックを見る。
パックは静かに枝先をこっちへ向け、立っている。
くそっ！
一歩ふみだすと、パックの右手が素早く動いた。
ひゅっ、というような風を切る音がして、ツーランの上唇に痛みが走った。
「わあっ！」
ツーランはどっとばかりに尻餅をついてしまった。
もう、戦う気力すらない。
それを見ていたギャンはさっと手をふり、仲間に合図をした。
さっとばかりに仲間たちはパックの背後をふさいだ。
にやっ、とギャンは笑った。
「やるじゃないか、パック。おまえの父親から教えられたのか？」

ギャンの言葉にパックははじめて気がついた、というように手元の枝を見つめた。

身体が勝手に動いていた。

そうだ、ホルンの朝の修行とおなじ気持ちで枝を握っていたのだ。

ギャンを見上げたパックの顔に不敵な笑みがうかんだ。

「だとしたらどうなんだ?」

ギャンは顎をあげた。

「ますます見逃せないな。おまえの父親は軍隊あがりだ。つまり人殺しの訓練を受けているということだ。そんな危ない訓練を受けているということは、いつかお前もその成果を試したいと思うようになるだろう。そんなことにならないよう、いまからお前に徹底的に教育する必要がありそうだ」

ぺっとパックは足もとに唾をはいた。

つくづくギャンは自己正当化しかないやつなんだ。口では立派なことを言って、その実他人にたいし暴力をふるいたいだけなんだ。

ギャンの目が細くなった。

そのギャンの手元に手下のひとりがあたりを探し、木の棒を拾うとさしだす。

ギャンはそれを受け取り、握りしめた。

じぶんの木の棒を見て、そしてパックの握る木の枝を見る。

太さが違いすぎる。

ちょっと当たっただけでパックの木の枝はぽきりと折れてしまうだろう。

ギャンは勝利を確信した。

唇にうすく笑いをうかべ、ギャンはパックに木の棒を振り下ろした。

パックはそれをよけると、さっとばかりに突きをいれた。ギャンの木の棒のさきが地面を噛んだ。

ひゅっ、と風を切る音がしてギャンが頬をおさえた。

驚愕の表情が浮かんでいる。

押さえた手の平を見つめる。
うすく血が滲んでいる。
ギャンの頬につーっ、と血がしたたった。
パックの木の枝の先端で切れたのだ。
ふたたびパックは木の枝をななめ上に振った。
わあ、と悲鳴をあげギャンはのけぞった。
うっ、と鼻先をおさえる。
ツーランとおなじ痛みが襲う。
目に涙が滲む。
うーっ、うーっとギャンは痛みにあえいでいた。
「これ以上やると、今度はお前の目をつぶす！」
押し殺した声でパックはギャンに話しかけた。いかりで顔が真赤にそまっている。
「鼻の先で我慢してやってるんだ。おれができないと思うか？」
パックは薄く笑いを浮かべている。
やれる……父親のホルンとの修行にくらべれば、まるで子供の遊びだ！　ギャンの目には隙だらけに見えた。
ギャンの目に恐怖がうかんだ。
「やめてっ！」
その時、ミリィの声があたりに響いた。
えっ、とパックは顔をあげた。
森の入り口あたりにミリィが立っていた。
パックの表情にギャンもまた鼻先をおさえた姿勢でふりむいた。
ミリィの姿を見たギャンに驚きの表情がはしった。
ミリィは言い訳するように口を開いた。
「パック、あなたが授業中にギャンからなにか受け取ったみたいで、それで心配になって……」
そのミリィの背後から近づいてきた人影に、パックもまた驚いた。
父親のホルンであった。
ミリィはホルンを呼んだのか！

「もうやめないか！」
ホルンの声はあたりを圧した。
びくり、とギャンはホルンの声に震え上がった。
ホルンは本気で怒っていた。
つかつかとふたりに歩み寄ると、さっと手を伸ばしパックとギャンの握っている木の枝と棒を取り上げた。
「帰るぞ、パック」
そういい残し、ギャンをまるっきり無視したまま背中をむける。
パックがぼんやり立っているのに気づき、怒鳴った。
「なにをしているっ！」
パックは飛び上がり、ホルンの背後に続いた。
ちょっと立ち止まり、ホルンは背中ごしにギャンを睨むと口を開いた。
「おれはなにも聞かなかったし、見なかったことにする。わかったか？」
ギャンはぽかんと口を開いたままがくがくと顎をひき、何度も頷いた。
のしのしとホルンは歩きだした。パックとミリィはその後に続く。
そのまま三人は森をあとにした。

家路を辿るホルンは終始無言だった。
パックとミリィはそんなホルンになにも言えず、ただ歩くだけだった。
しゅうしゅうしゅう……。
坂道の向こうから、白煙がたちのぼっている。
目をそちらへやると、ばさばさとおおきな旗ざおがふられ、赤い布がひらひらと踊っていた。
旗ざおを握っているのはダストンという大柄な男で、その後ろから巨大な四輪の機械がゆっくり姿を表した。
蒸気トラクターであった。

後ろの動輪の直径はパックどころか、ホルンの背丈ほどもあり、それが鉄でできている。蒸気エンジンもふくめた車体の重さは、想像もつかない。ただそれが通りすぎた後、深々とした轍が残されることでとてつもない重量を悟ることができるだけである。

運転しているのはダストンの父親のブルンだ。ブルンは村一番の耕作地を持っている農家である。

なぜ息子のダストンが旗ざおをふっているかというと、このトラクターを運転するときはかならず歩行者などの注意をうながすため旗を前でふるようにという法律が制定されているからだった。とはいえ、このトラクターの走る速度は歩くより遅いのでそんなのが必要なのか疑問であったが。

この蒸気トラクターを、ブルンは昨年村にやってきたセールスマンから買い入れた。

ブルンのトラクターはもとより、村ではさまざまな場所に蒸気エンジンによる機械が動いている。パックの家でも、父親のホルンは蒸気で動くハンマーを使って鉄をうちのばす作業をやっている。

蒸気の時代であった。

あらゆる動力が蒸気で動き、人々の暮らしは確実に変わりつつあった。

ブルンはホルンに気づき、トラクターのブレーキをかけた。

ぎぎぃーー……。

おおげさな音を立て、トラクターは前のめりになって停車した。

シリンダーからしゅーっ、と音を立て蒸気がふきだしあたりを白く曇らせる。

「よお、ホルン。ひさしぶり！」

ああ、とホルンもうなずいた。

ブルンはトラクターの運転席から身を乗り出すようにして話しかけた。

「丁度良かった！　あんたの息子のパックに話があるんだ」

パックはホルンの顔を見上げ、父親がうなずくのを見てブルンに

顔を向けた。
「なんだいブルンさん」
「あとでエンジンの調子を見てくれんか？　どうも最近ちからが出なくてなあ」
　パックはいいよとうなずいた。蒸気エンジンはニコラ博士のところで色々見ているから修理くらいなら軽く出来る。
　ホルンが口をはさんだ。
「あんたが購入したところでは直せないのかね？」
　ブルンは顔をしかめた。
「サックに話を持っていくと法外な料金を請求されるんじゃ！　一度、相談してもうこりごりじゃよ。その点、パックならあのニコラ博士のところで助手をしているから蒸気機関には詳しいしな」
　ホルンは眉をあげた。
「サックから買ったというのかね？　かれがそんなことまで手を広げているとは知らなかったな」
　ブルンはうなずいた。
「そうとも！　ちかごろじゃ村のみんなに金を貸すだけじゃなく、トラクターとか蒸気冷蔵庫とか売りつけておるよ。まあ便利になるのはいいが、ローンがかさんでな……しかしあのローン、どうも怪しいな」
「どう怪しいというんだね」
「利率が高すぎる気がする。みな黙っているが、多分業者からリベートを取っているんじゃないかな。そのリベート分が、利率に上乗せされているとわしは見ている」
　ホルンの顔が険しくなった。
「もしそれが本当なら問題だぞ！　サックはロロ村の村長として公正さを期待されているのだからな！」
　ブルンはあわてて手をふった。
「だからそんな気がすると言っておろうが！　なあ、この話は内緒にしてくれんか？　サックにあんたがこの話を持ってねじこむなん

てことはやめて欲しい。わしは争いごとは苦手じゃよ」
ホルンは肩をおとした。
「判った……このことはおれの胸にとどめておこう。あんたのトラクターのことだが、いずれパックをやらせよう。それでいいか？」
そうかそうか、とブルンは上機嫌でうなずくと、旗ざおを持って突っ立っているダストンをうながし、ふたたびトラクターを動かし始めた。
ずしずしと振動をたて、遠ざかるトラクターを見送りホルンはつぶやいた。
「蒸気、蒸気……。このごろじゃなんでも蒸気エンジンだ……。ブルンだって去年までは牛や馬をつかって畑を耕していたんだが、サックの口車にうかうかと乗せられてあんなもの買いこんでしまうくらいだからなあ……」
なげかわしい、といったホルンの口調にパックは口を開いた。
「どうしてさ？　科学が進歩すれば、うんと便利になるし生活も楽になるんだろ？　それがいけないのかい？」
ホルンは頭をふった。
「科学が進歩することが悪いと言っているんじゃない。ただ、それがほんとうに人間の幸福につながるかどうか、わからんと言っているだけだ」
そうかなあ、とパックはつぶやいた。
ホルンの言うことはよくわからない。
ふいにニコラとテスラのふたりの顔を思い浮かべた。
ふたりが造ろうとしているロボット。あれは人間にとって幸福をもたらすものか、それとも災厄なのか？
パックにはわからなかった。

訪問者（前書き）

父親の諭しに反発するパックだったが……

訪問者

その夜、いつものように夕食をすませパックとホルンは食卓で向き合った。

夕食の間、ホルンは一言も発することなくパックはそんな父親の雰囲気におされ、また言葉もなく食事をすませた。

「パック、おれがなにに怒っているかわかるか?」

静かに話しはじめたホルンにパックはびくっとなって父親の顔を見つめた。

そう、ホルンは確かに怒っていた。それは静かな怒りで、わめいたり怒鳴ったりするような火山のような怒りではないが、静かなだけにパックはびくびくとなっていたのだ。

「わかんないよ……」

「お前がギャンにつかった技だ。あれはおれが毎朝、お前に教えていた剣の技だな?」

うん、とパックはうつむいた。

だがすぐ顔をあげ声をあげた。

「それがなにかいけないことなのかい?」

ホルンは髭をしごくように掻いた。

なにか真剣なことを考えているときの癖である。

「どうだ、ギャンを相手にして。やつは手ごわかったか?」

「いいや……。ぜんぜん」

そうだろう、とホルンは顎をひいた。

「おれを相手に毎朝稽古していたんだ。いっぽうギャンとは言えば、剣の稽古などしたことないだろう。つまり素人だ。お前はまだ駆け出しだが、ギャンにくらべれば剣の腕は格段にちがう……わかるか?」

「わかるよ。おれはギャンより強いってことだろ。だから?」

「だからだ……。なあ、あんなところでギャン相手につまらぬ勝負

をするよりもっと良い方法があることに気づかなかったか？」
「もっと良い方法ってなにさ？」
「逃げるという手だ。あんな連中、たばになったってお前なら簡単に逃げられるだろう。それ以前に、ギャンの呼び出しを断ることだってできたはずだぞ」
パックの顔がだんだん紅潮してきた。
「そんなの、できないよ。そんなことしたら、おれは卑怯者と言われる！」
「卑怯者と言われても、他人に怪我をさせるよりましだろう？」
で、でも……でも、とパックはうまく言葉で説明できない。確かにホルンの言うとおり、あの場から逃げ出そうと思えば出来たろう。しかしそれはギャンに次の口実をあたえることになる。パックはあの場で決着をつけるべきだと思ったのだ。
そんなパックの気持ちを読んだのか、ホルンは言葉をついだ。
「あの時、おまえは木の枝を使ったな。だがもし、太い木の棒だったらどうだ？　軽くあしらえたろうか？　ひどい怪我をさせることになったかもしれない。その場では勝ったと思えても、長い将来おまえが後悔しないとは言い切れないだろう？　他人を怪我させたり、ましてや殺したりすることはひどくつらいぞ……」
パックははっとなった。
ホルンは戦争にいっている。
その戦争のことを、父親はいままで何一つ語ったことはなかった。いまもそうだ。しかし、いまホルンが語ったことがなにも関係ないとは言えないだろう。
「もう寝ろ。一晩眠ったら、おれの言うこともすこしは胸に落ち着くかもな」
うん、と答えてパックは立ち上がった。
パックの部屋は二階にある。
階段を登る途中、ホルンにおやすみを言いにふりかえると、かれはテーブルに両手を乗せ、思いにふけっていた。

パックは何も言えず、静かに部屋にもどった。

眠りは浅かった。

どんどんどん、という玄関のドアをノックする音に目が覚め、ベッドから起き上がる。

父親の足音が階下で聞こえ、玄関へ向かう。

パックは足音をしのばせ、そろりとベッドから降りて階段に近づいた。

あたりは真っ暗だ。

と、ぽっと階下に明かりがつき、ホルンがドアを開く気配がする。

その明かりをたよりにパックは階段を降りていった。

二、三歩降りてすぐに一階の様子が見えてきた。ホルンはドアを開いたところで、玄関からひとりの男が内部に入ってきたところだった。

ホルンはその顔を見てあきらかに驚いた様子をしていた。

パックは見つからないよう背を低くすると、その場を見守った。

入ってきたのはホルンと同じくらいの年頃の痩せた陰気な印象の男性だった。

ぺたりと額にかかる黒髪、げっそりとこけた頬には一面に無精ひげがのびている。身につけているのは濃い灰色の足もとまでかくれるようなコートで、頭から被るフードを背中にはねあげている。その下に着込んでいるのは上下そろいの革の上着にズボン。そして膝までおおうブーツ。服にはながい酷使をものがたるほころびや、ほこりがこびりついている。

「ガゼ……！　生きていたのか？」

ホルンはぼうぜんとつぶやいた。

ガゼと呼ばれた男は苦く笑うとうなずいた。そのままキッチンのテーブルに近づくと、どさりと椅子に腰をおろした。ひどく疲れているようで、肩がおおきく上下していた。

ホルンは心配そうに声をかけた。

「なにか食べるかね。あまりものなら、あるが」
ああ、とガゼはうなずき、ホルンは台所から食料をとりだしてテーブルに並べた。
食料が並べられると、ガゼはがつがつと食べはじめた。ホルンは黙ってビールを持ってきてテーブルに置いた。
男はそれも鷲づかみにするようにしてさらうと、がぶがぶと飲みはじめた。
ひとしきりかれの飢えをみたす作業がつづき、ビールを飲み食べ物を咀嚼する音がキッチンに響いていた。
ガゼ……ガゼ……？
どこかで聞いたことがある名前だ。
パックはおもわず大声をあげそうになり、あわててじぶんの口を押さえた。
ミリィの父親の名前だ。
そうだ、確かに間違いない。
ロロ村の墓場にはその名が刻まれた墓があるはずである。
死んではなかったのか――。
それが生きていてホルンに会いにきたらしい。
どういうことだろう？
ようやく人心地がついたのか、ガゼはふうっとため息をついて天井を見上げた。
パックは思わず首をすくめたが、ガゼは背中を向けているので見られる心配はなかった。
「なぜ生きているなら知らせない？」
ホルンは小声であるが、怒気を声にふくませてなじった。
ガゼは肩をすくめた。
「おれはお尋ね者だからな。すくなくとも帝国にとっては。おれが死んだことになっていれば、メイサに迷惑をかけることもない」
「娘のことは知っているのか？」
「ああ、あの戦いの最中に生まれたということは聞いているよ。あ

んたにも息子がいるそうじゃないか。おめでとう」
「おれのことはいい。お前、これからどうするつもりなんだ。それに、なぜ今おれに会いに来たんだ?」
ガゼの顔が真剣になった。
「決まってる。決起のときが近づいているんだ。共和国のため、戦うときがな」
ホルンは渋面になった。
「まだそんなこと言っているのか。戦争はおわった。決着はついた。共和国はほろび、ロロ村は帝国領になった。もう、スリン共和国なんてものは存在しないんだ。おまえは存在しないもののために戦おうというのか?」
「スリン人民軍のホルン大佐との言葉とも思えないな。共和国はまだほろんじゃいない。元首の、バタン・スリン閣下はまだ生きておられる。閣下がおられるかぎり、共和国は健在なのだ! お前は帝国の圧制に賛成なのか?」
ホルンは静かに答えた。
「圧制? 帝国には圧制などないよ。それがあったのは共和国のほうじゃないか?」
ガゼは叫んだ。
「馬鹿いうな! 皇帝などというまがいものの権威によりかかるような帝国に圧制がないなんて!
人民を解放するための蜂起がせまっているんだぞ。共和国には優秀な将軍が必要だ。お前が適任なんだ。なあ、おれと一緒に来てくれ。お前のちからが欲しい」
ホルンは哀しげに首をふった。
「おれは二度と戦争はごめんだ。それにお前の言う、共和国の戦争には大儀などない。どんなに説得されようが、おれは行く気はないからな」
どん、とガゼはテーブルをたたいた。
「そうか、わかった! もう頼まん」

立ち上がり、玄関にむかう。
その背中にホルンが声をかけた。
「これからどうするつもりなんだ？」
「軍を編成する。そしていつか帝国を打倒し、人民のための政府を立ち上げる。近いうち、帝国は人民の足に踏みにじられ、皇帝とその側近の貴族たちは、人民の搾取のむくいをうけるだろう！」
ホルンはふたたび首をふった。
「そうか……死ぬなよ」
ガゼは無言でドアを開き、出て行った。
しばらくそれを見送っていたホルンはふいに顔をあげ、口を開いた。
「パック、盗み聞きはよくないな」
うへえ……！　とっくに気づかれていたのか。
立ち上がるとまともにホルンと目が合う。
「パック、いまのことはメイサに言うなよ。もちろんミリィにもだ」
ああ、わかったよとうなずくと、ホルンもうなずきかえす。
「もう寝ろ。明日も学校があるんだろ」
いろいろ質問したいことはあったが、いまのホルンには何を尋ねても無駄だろう。
パックは部屋に戻った。

訪問者（後書き）

次回はいよいよ聖剣の儀式にむかうパックです！

聖剣（前書き）

パックとミリィのふたりは、聖剣にふれる儀式をするためにお山へと登る。

聖剣

翌日からギャンはパックにからまなくなった。
やれやれと思ったパックだったが、油断は禁物だと気持ちをひきしめた。
あいつのことだ。絶対、あきらめることはしない。いつか、また機会を見て、パックに復讐するつもりだろう。
そのうち日がたち、やがてパックとミリィの誕生日をむかえた。
ふたりは十三才になった。
山に登る日が近づいた。

「それじゃ、気をつけてな」
「お弁当持った？　忘れ物はない？」
山への登り口で、ホルンとメイサはパックとミリィを見送った。
ホルンは腕を組んで、メイサは心配そうにエプロンの端を掴んで登山にむかうふたりを見送る。
山に登る儀式は、当人だけしか行くことは許されない。
パックはミリィと肩をならべ、登り口を見上げていた。
パックはおおきなバッグを背負っていた。なかには大事な荷物が入っている。
時刻は朝早い。
この時間、太陽は山の向こうであたりはまだ暗かった。パックはホルンから手渡されたカンテラをかざし足もとを照らしていた。
細い踏み分け道が、山のふもとから中腹へかけ続いている。そのさきは岩だらけの荒野になっているが、ここからは暗くて見えなかった。
が、いずれ太陽が辺りを照らすだろう。
「それじゃ行ってきます」
パックがそう言うと、ホルンとメイサはうなずき、ふたりは歩き

出す。
「すこし寒くなってきたね」
小声でミリィが話しかけてきた。
パックはうん、とうなずき背中のバッグの位置を直した。
確かにミリィの言うとおり、少し寒くなってきたようだ。秋が近いのかもしれない。
ロロ村の夏は短い。
あっという間に、季節は秋へとむかっている。
それでも一時間も歩かないうち太陽が姿をあらわし、あたりは急速に明るくなってきた。
さあーっ、とまぶしい光が差し込むと紅葉にそまった森の葉に金色の輝きがもどってくる。パックはカンテラを吹き消し、腰のベルトに取り付けた。
ふとふりかえると、ロロ村が眼下に箱庭のように見えてくる。
気がつかないうち、結構登っていたのだ。
踏み分け道の両側に、ところどころ家ほどもありそうな巨大な岩が点在している。いくつかの岩には奇妙なレリーフが彫刻され、あるいは怪物の姿が彫られていた。
ふたりは黙って登っていく。
初めて登ることになるのだが、途中の目印についてはホルンとメイサにくどいほど説明をうけていた。
遠い昔、ここには魔王の城があった。
山全体が魔王の城の領域であった。
その魔王にいどんだのが、ひとりの勇者である。
勇者は魔王を聖剣に閉じ込め、山頂に封じ込めたと言う。
ロロ村はその勇者の子孫によって作られたのだ。したがってロロ村の子供たちは勇者の偉業を忘れることなく、十三才になったらかならず山に登り、聖剣にふれ、勇者の徳をしのばなければならない。
そう教えられてきた。
「ねえ、パック」

なんだ、とパックはミリィをふりかえった。
ミリィはうつむき、なにか言いかけている。
「なんだよ？」
うん、とミリィは生返事。
パックはいらいらしてきた。
「言いたいことがあれば言えば？」
わかった、とミリィは顔をあげた。
「パック、あのね。ギャンのことだけど」
ギャン？
いまさら何を言い出すのか？
「どうしてギャンがパックにからむのか、あたしわかるんだ」
へえ……とパックは真顔になった。
「どうしてだい？」
「そのお……去年のことだけど」
「うん？」
去年……。
それはギャンがパックをやたら敵視し始めた時期である。
「ギャンは学校を卒業したら、都会へ行くんだって」
「ふーん。ま、親父のサックは金持ちだからな。都会の学校へ進学しようと思えば、できるんだろうな。でも、そんなことなんでミリィが知っているんだ？」
「ギャンがそう言ったの。あたしに」
「お前に？　なんで？」
「一緒に都会へ行かないか、って言ったのよ」
ふえっ？　とパックは妙な合いの手をいれた。
「どういうことだい？」
「あたしに結婚してほしいんだって」
ええーっ、とパックは今度は本当に驚いた。
「一緒に都会へ出て暮らさないか、だって」
「で、で、でも、ミリィは……つまり、その、ええと……！」

パックは混乱していた。
結婚？
ミリィに結婚してくれ？
あのギャンが？
「そ、そ、それで、ミリィはなんて答えたんだい？　結婚するのか？」
ミリィはなぜか赤くなった。
「馬鹿ねえ！　いくらなんでもそのころ十二なのよ。断ったわよ。でもギャンは都会に出るころにはあたしも年頃だからできるってきかないのよ。あれから何度もつきまとわれて……それでもあたしが断ったから諦めたらしいけど」
「それでなんでギャンがおれを憎むんだ」
ミリィはきっとパックを睨んだ。
「あたしがパックを好きなんだとギャンは思ってるみたいなの！」
「……」
パックの顔に血が上った。
ミリィとは隣り同士、生まれたときが一緒でまるで兄妹のように暮らしてきた。
はっきり彼女が好きか、と問われれば答えようがないが否定も出来ない。
気まずい沈黙がふたりに流れた。
もくもくと歩くうち、パックは小屋を見つけ救われたように口を開いた。
「見ろ！　ホルスト爺さんの小屋だ」
小屋は粗末な木材で出来ていて、傾いていた。その傾きを支えるため、一方の壁に柱が斜めに突き刺さっている。
小屋の前にはちいさな畑があり、数種類の野菜が植えられていた。さらに小屋の裏手には鶏小屋がくっついて、なかからは鶏のコッコという鳴き声が聞こえている。
小屋の屋根からは石組みの煙突が突き出し、なにか煮炊きしてい

るのか薄い煙がたちのぼっていた。
ふたりは小屋に近づき、入り口の前に立った。
入り口には一枚の布のカーテンが垂れ下がっていて、どうやらそれがドアのかわりをしているようだった。
パックは布を持ち上げ、内部を覗き込んだ。
小屋にはちいさな窓がついていたが雨戸が降りているのか内部は真っ暗だった。
「だれじゃ！」
だしぬけに背後から声をかけられ、パックとミリィは驚きに飛び上がった。
ふりむくとそこにひとりの老人が立っていた。
うすよごれたフードのついたマントを身につけ、目をらんらんと輝かせた老人である。
顔の半分はまっしろな髭でおおわれ、まっくろな皮膚は無数の皺に埋もれている。
捻じ曲がった木の杖を手に持ち、じろりとパックとミリィに視線をそそいでいた。
「あ、あの……ホルストさんですか？」
「いかにも、わしがホルストじゃ。お前さんは？」
「ぼく、パックと言います」
「あたしミリィです」
パックとミリィが自己紹介すると、ホルストはゆっくりと髭をしごいてしげしげとふたりの顔を見つめた。
「ふうむ……わしの記憶に間違いがなければ、パックお前はホルンの息子で、ミリィ、お前さんはメイサの娘じゃな。たしか今年十三になるはずじゃ」
パックは勢い込んだ。
「そうです、そうです。それで……」
ホルストはさっと手をあげパックの言葉をさえぎった。
「それでお山に登りに来たんじゃな。ご先祖の剣に触れるために」

「はい！」

パックは答えると背中のバッグを降ろし、口をあけなかから用意した荷物を取り出した。荷物は食料や調味料である。老人に会ったら手渡すようホルンとメイサに言われてある。

「これ父さんとミリィの母さんからです」

老人は軽く礼を言うとそれらを受け取り、小屋の中に運んだ。それらがホルストの報酬というわけである。

つぎつぎと手渡したパックの贈り物のなかで、刻み煙草の袋を目にしたホルストは、そのときだけ喜色を浮かべた。かれは煙草が唯一の好物なのだ。

かれは山に登ってきた村の子供の案内役で、この仕事をもう四十年続けてきている。小屋の番人は二、三十年に一度代替わりをしているがかれはもっとも長く続けていた。

老人はとん、と杖を地面でたたくと声をはりあげた。

「さて、いよいよお山に登るときがきた！　ご先祖がこの世界に真の平和をもたらせたことに感謝する儀式がこれからはじまるのじゃ！　ふたりとも覚悟は出来ておるな？」

パックとミリィは老人の前で胸に拳をあて、頭をさげ声をそろえた。

「はい、出来ています！」

よろしい、よろしいとホルスト老人は老顔をほころばせた。すべてホルンとメイサから教えてもらっていたことである。

老人は胸をはり、山頂を見上げた。

「さあ、出発じゃ！　案内するぞ、ついてまいれ！」

老人は意外と元気な足取りで歩き出す。パックとミリィも慌てて後を追う。

小屋からは急に坂が急になった。

ごつごつとした岩場がつらなり、なんどもその岩をよじ登るようにして登る。

ときおり巨大な石組みの残骸が行く手をふさぎ、意外な場所で醜悪な怪物の像がぬっと出現しあたりは気味が悪い景色となった。

「このあたりは魔王の城の城郭部分でな、山全体が城といっていい。魔王はこの山全体に結界をはり、みずからの魔力を強くしておったのじゃよ」

ホルスト老人は足場の悪い岩の間を身軽に飛び移りながらふたりに説明を続けた。

パックとミリィといえば、老人の後を追うだけで精一杯で、まわりの風景を鑑賞する余裕などまったくなかった。

朝早く出かけたというのに、昼過ぎになってもまだ山の中腹にも達しない。そろそろ太陽は中天をこし、西の空にひくくかかりはじめている。

もう一、二時間で夕暮れになる。

「まだつかないの？」

とうとうミリィは悲鳴をあげていた。

パックもまた頭から足の爪先までずっぽりと疲労につかって、答えることも出来ないでいた。

「まだまだじゃ！　今夜はキャンプすることになるぞ」

「キャンプ……野宿ってことですか？」

パックはげっそりとした。

こんなに苦労するとは思いもしなかった。

老人はにやりと笑った。

「苦労すればそれだけご先祖の恩というのが身にしみるもんじゃ。それ、今夜はそこで休むとするか」

老人はふたりに巨大な根をはっている巨木を指さした。

パックとミリィは倒れこむようにしてその巨木の根本に身を投げ出した。

はあはあと何度も深呼吸をくりかえして、やっとあたりを見回す余裕ができた。

気がつくと太陽は西の稜線に沈むころで、オレンジ色の光があた

りを染め上げている。
老人はキャンプの用意をしていた。
付近から小枝を拾い、焚き火の準備をしている。
「ほれ！　お前たちも手伝わんかい！」
パックとミリィは立ち上がり、枯れ枝や倒木の切れ端をさがした。
ようやく身動きできるくらい回復している。
小枝が積みあがると、老人はぴしゃりと額をたたいた。
「ほい、しまった！　マッチを忘れたわい」
パックとミリィは顔を見合わせた。
「ぼくらだってそんなもの、持ってないですよ」
老人はうなずいて見せた。
「わかっとる！　火をつけるにマッチだけということはない。さて……」
つぶやくと老人は小枝の山にむかって手の平を向けた。
ぶつぶつと口の中でなにごとかを呟いている。なにかの呪文のようである。
老人の顔が真剣なものになった。
なにか精神を集中しているようである。
……。
……。
老人の中で、気合のようなものが高まっているのが感じられる。
あたりにはりつめた緊張感に、パックとミリィはなにも言えず、だまって老人のことを見守っている。
「！」
老人の口から声にならない気合が発せられ、全身にちからが満ちた。
パックは目を見開いた。
小枝の山の中心あたりに、ぽ、とちいさな炎がともり白煙がたちのぼった。
老人は目をまんまるにしてそれを見つめると、素早くひざまづき

ふーっ、ふーっと息を吹きかけた。
ちいさな炎が老人の吹きかけた息でめらめらっと燃え上がった。
やがてぱちぱちと火がはぜる音がして、焚き火が燃え上がる。
「やった！　成功じゃ！」
老人は嬉しげな声をあげた。
「なにをしたんです？」
パックが尋ねると老人は満面の笑みでこたえた。
「魔法じゃよ！　炎の魔法じゃ！　わしがこの山で四十年も暮らしているのも、魔法の研究をしているからじゃ。ここはかつて魔王が城をつくっただけに、魔法の力がとくに強いのじゃ」
「魔法？」
パックはあきれた。
「でも、まさか」
ミリィがつぶやくとホルスト老人はきっと彼女を睨んだ。
「なんじゃ、じぶんの目で見て信じられないというのか？」
「おれも信じられません。魔法なんて……」
パックの言葉に老人はため息をついた。
「なんということじゃ……。ご先祖様が魔王を封じたのも魔法の力あってのことじゃ。
魔王が封印されてからのち、魔法のわざはなぜか忘れられてしもうたが、この世に魔法の力は満ち満ちておるんじゃ。さっきわしがやったのがその証拠じゃよ」
「ほかに魔法の技をつかえるんですか？」
老人は肩をすくめた。
「いまのところあの炎の魔法だけじゃ。それも四十年間、ずっと研究してやっとちいさな火を熾すことに成功したくらいじゃよ。昔はもっと強力で、すばらしい効果をもつ魔法が世界にあふれていたもんじゃが……。わしはなんとかしてその魔法をこの世に復活させたいと考えておる」
「それでこの山にこもっているんですか？」

ミリィの質問に老人はうなずいた。
あたりを見回し、両手をあげ天を仰いだ。
「この世の中には目にも見えず、においもせんが魔法のちからが満ちている。わしにはそれが感じられるんじゃよ！　数十年前、この山に来てはじめて魔法の力を感じ、それいらい古文書をあさり、研究を続けてきた。魔法の力をただしくつかえば、人間はすばらしい存在になれるはずなんじゃ！」
老人の身振りに空を見上げたパックは、いつのまにか夜になっていたことに気づいた。ぱちぱちと焚き火がはぜ、こまかなオレンジ色の火の粉が天に向かってのぼっていく。
ホルスト老人は火の粉を見上げつつ、憧れるような眼差しになって話しを続けた。
「魔法の技がこの世に満ちていたころ、人々は巨大な岩を空中に浮かべ、城や町を作ったという。さらに魔法の技で遠く離れた場所の知人と話しをすることができ、死に瀕した病人すら、医療の魔法で治療することができたそうじゃ。いまではその言い伝えがどれが真実で、どれがたんなる伝説なのか判らなくなっているがな……」
魔法か……。
パックは老人の言う魔法が世に溢れていたころの世界を想像しようとしたがよくわからなかった。

「さあさあ、いつまで寝ておるんじゃ？　朝じゃ、朝じゃ！　とっとと起きんかい！」
老人のわめき声にパックとミリィは目を覚ました。
まぶしい光にふたりは目をしばたいた。
のろのろと身を起こし、老人が朝の支度をしているのを見守る。
ホルスト老人は朝食の用意をしていた。
とはいえ、固いパンに焚き火で柔らかくしたチーズをのせ、飲み物は付近の小川から汲んできた水だけであったが。それでも空腹は満たされ、歩き出す元気は出てきた。

「さあ、出かけるぞい！」
とん、と杖で地面をうち老人は歩き出した。
パックとミリィはその後に続く。
どうやら足が慣れたのか、前日よりは登山は楽であった。
足もとを見たパックは、かすかな石組みの床があるのに気づいた。
土と埃で埋もれているが、確かに石組みの床で、平坦なところが多くなってそれで歩きやすい。
ふとまわりを見ると、そこかしこに昔の壁や天井をささえていた石柱が立っているのがわかる。あそこのアーチ状になっているのはなにかのドームの名残だろう。
上へ上へと登るにも、ところどころはっきりと階段になっているところがあり、それで登りやすくなっている。
ここは魔王の城だったんだ……。
パックはようやくそれを理解していた。
となりのミリィもまたそのことを理解しているようで、畏れに似た表情が顔に出ている。
ホルスト老人のように魔法のちからを感じることは出来ないが、かつての魔王のちからがまだここには残っているように思えた。
やがてふたりは老人に案内され、山頂へと近づいた。
「ここじゃ」
老人は厳粛な顔つきになって立ち止まった。
ふーっ、とパックはため息をついた。
山頂からふもとへかけ絶景がひろがっている。
どのくらい高さなのか、ふもとのロロ村はまるで箱庭のようにちまちまと家々が立ち並んでいて、ちいさな畑や、家畜のための放牧場が一望の下に見てとれる。
パックは足もとに雲が流れるのをはじめて目にした。それくらい高く登っていたのだ。
ロロ村から北西へ目を転じるとはるかかなたに「青の嘆き」とよばれる大山脈が連なっているのが見える。そのむこうはコラル帝国

の首都、ボーラン市があるはずだ。
ボーラン市……。
かすかな憧れが胸のうずきとなってパックを襲った。
この年頃の男の子として、大都会への憧れはパックにもある。そこは平穏であるが、退屈な日常を送るロロ村とは違った、なにか刺激的で思いもかけない日々がパックを待っているように思えていた。
「パック……」
ミリィに呼びかけられ、パックはわれにかえった。
ミリィとホルスト老人はまじめな顔つきで山頂の一角を見つめていた。
パックも視線をやった。
そのさきに……。
そこに聖剣があった。
どっしりとした岩の台座に一本の古びた剣が突き刺さっている。剣は垂直に立ち、突き刺さったところは岩に同化しているように見えた。
ホルンとメイサに教わったことを思い出し、パックとミリィはその前に近づくと膝まづいた。
目を閉じ、頭を垂れてご先祖のことについて思いをめぐらす。
立ち上がるとふたりはすばやく目配せをした。
どっちがさきに剣にふれる?
ミリィは笑みを浮かべすばやく剣に近づいた。
手を伸ばし、そっと柄の部分に指先を触れさせる。
それだけだった。
ちょん、と触っただけでミリィは大急ぎで手をもとにもどした。
まじまじと触れた指先を見つめているが、なんともなっていない。
次はパックだ。
息を吸い込むとパックは剣に近づいた。
見れば見るほど古びた剣だ。
いったいどんな素材で出来ているのか、錆ているようではないが

長い年月風雨に晒され、ほこりが何層にもなってこびりついているようである。
全体としてそっけないデザインで、聖剣というような印象ではない。
まっすぐな両刃の剣にどっしりとした柄と鍔。装飾と言うのはまったくなく、実用一点張りといった感じだ。
剣を見ているうち、パックのどこかでなにか奇妙な感覚がうずいていた。
なんだろう……。
なんだか懐かしい、といった感情がわきあがってくる。
さらに近づくとその感覚はいっそう強まった。
これはじぶんの所有物だ、そういう感覚がしてくるのだ。
手を伸ばす。
柄を握る。
と、剣を引き抜きたいと言う衝動がこみあげてきた。
ぐっとちからをいれる。
「パック！」
ミリィとホルストは同時に声をあげた。
パックのしていることに気づいたのだ。
するり、と剣が岩の台座から引き抜かれた。
まったく抵抗はなかった。
まるでついさっきやわらかな土に突き刺さったばかりの剣を引き抜いたようであった。
あっけにとられ、パックは引き抜いた剣を手に持ちしげしげと見つめていた。
案に相違して剣は軽かった。
まるで紙で出来た玩具の剣を持っているかのようであった。
「なんということじゃ……」
ホルストは目を一杯に見開き、あんぐりと口をあけていた。
「ホルストさん、どういうことなの？」

ミリィの問いにホルストはぶるぶると顔をふった。
「わからん、こんなことは聞いたこともない……聖剣が引き抜かれることがあるなど！」
いっぽうパックは引き抜いた聖剣を手に持ち、まじまじと見つめていた。
刀身を見つめるうち、身体のうちになにかがこみあげてくる。
ぶうん……。
ぶうん……。
なにかが唸りをあげている。
剣が唸りをあげているのだ。
「パック！」
ミリィとホルストはまた叫んだ。
いまやかれらにもはっきりと聞こえている。
剣が唸りをあげている。
ぶうん、ぶうん、ぶうん……！
剣を持っているパックもその唸りに身を震わせていた。
剣はこまかく振動し、パックは両手で柄を掴み必死に支えていた。
そうしていないと手から振り落とされそうだ。
びゅーん、びゅーん……。
いまや剣の唸りはあたりを圧し、おそろしいほどのちからが満ちていた。
ぴいいいんん――！
わっ、と三人は目を閉じた。
剣の刀身がいきなり光ったのである。
それは青い光だった。
目も開けられていられないほどの、強烈な青い光が刀身を輝かせたのだ。
――――。
気がつくと三人は地面に倒れていた。
ぼうぜんとなり、ゆっくりと身動きをする。

なにがおきたのか、ただ混乱した記憶があるだけだ。
パックは目をしばたたいた。
目の中にまださっきの青い光が踊っているようで、ちらちらとなにか霞がかかっているようでもある。
「ふう……いまのは何だろう……」
つぶやくとようやく立ち上がった。
聖剣を拾おうと身をかがめた途端、あっと叫んだ。
「どうしたの？」
ミリィが声をあげた。
「折れている……」
パックは呟いた。
その通り、聖剣は折れていた。
真ん中から刀身が真っ二つである。
「なんじゃと！」
ホルスト老人は悲鳴をあげた。
おろおろと近寄ると、パックの足元の聖剣を見下ろす。
「本当じゃ！　折れておる！」
そのとき背後から声が聞こえた。
「ここはどこ？」
「なにを言っておる、ここはお山の山頂ではないか」
パックとミリィは老人の前に立ってぽかんと口を開けた。
「ホルストさん、いまのはぼくらじゃないよ」
「なにい？　それじゃだれが……ここにはわしら以外、だれも……」
そう言いながら老人はゆっくりと振り返った。
その瞳が見開かれた。
「だれじゃ、おぬしは？」
叫びながら指をさした。
そこには四人目の人物が立っていた。

魔王？（前書き）

封魔の剣が折れ、ひとりの怪人があらわれた。封魔の剣には魔王が封じ込まれているという。その剣が折れたということは、あらわれたのは魔王？

魔王？

「おぬしはだれじゃ、どこから来よった？」
ホルスト老人はじりじりとその人物に詰め寄った。
見れば見るほど奇妙な人物だった。
全体にぽっちゃりとして、おおきな赤ん坊のように見える。頭が大きく、手足が短いのでそう見えるのだ。
だが皮膚の色は、なにかの染料で染めたかのようなレモンイエロー、唇は紫、頭には一本も毛が無くつるつるである。
異様なのはその耳だ。
ぴん、と尖ってなにかの獣の耳をくっつけたようである。
鼻はひくくほとんどふたつの穴が開いているだけで、ふたつの目はほそく、目をつむっているかのようだ。が、そのせいでいつも笑っているように見える。
さらに奇妙なのはその服である。
だぼっとしたデザインで、目がちかちかするほど強烈なピンクと緑の配色の水玉模様をした上着に、腰には黒い革のベルトを締めている。ベルトには金色のバックルが昼の太陽の光にきらめいていた。
ズボンもまただぼっとしていて、足もとは爪先が反り返った革のブーツにたくしこんでいる。
背はパックよりも低そうだ。
その人物はよちよちとした足取りで三人に近づいてきた。
ホルスト老人はパックとミリィを守るかのように立ちふさがり、手をあげた。
「待て！　そこで停まるのじゃ！」
その人物は立ち止まった。
「ホルストさん……」
ミリィが声をかけた。
「なんだか悪い人には見えないわ」

だが老人は聴いているのかいないのか、肩をいからせ手の平をその人物にむけ、口の中でなにやらつぶやいていた。
あの魔法だ！
パックは老人が炎の魔法を使おうとしているのに気づいた。
奇妙な人物は小首をかしげた。
つ、と片足が動いた。
「！」
老人が気合をいれた。
ぼんっ！
かれの手の平から巨大な火の玉が飛び、空中を走ってその人物の足もとの地面に落ちた。
ずばあああん……！
「うわあ！」
奇妙な人物は悲鳴をあげ、両手で顔をおさえると尻餅をついた。
わっ、とパックとミリィは大声をあげ、老人の魔法の威力に驚いていた。
が、もっとも驚いていたのがホルスト老人だった。
わ、わ、わ、と叫ぶとじぶんの手の平を見つめていた。
「こ、こんなことに、こんなことになろうとは……！」
驚きにその顔にはべっとりと汗が流れ、息は弾んでいる。
あああん……！
泣き声が聞こえる。
見るとさっきの人物が尻餅をつき、天を見上げ泣いている。
ふたつの切れ目のような目から滂沱と涙が流れ、大口をあげ泣いている。
まるで赤ん坊が泣いているかのようだ。
最初に動いたのはミリィだった。
小走りにかれに駈け寄ると、かたわらに膝まづきその頭をなでる。
「大丈夫？　どこか怪我はない？」
くすん、くすんとその人物はしゃくりあげかるく首を振った。

ミリィはほほ笑み、やさしく話しかけた。
「びっくりしたのね。でも大丈夫、どこも怪我していないわよ」
「本当？」
人物ははじめて声をあげた。
あどけない、といっていい子供のような声だった。
「ね、あたしミリィっていうの。あなた、お名前は？」
「名前？」
そういうとかれは小首をかしげた。
ぶるぶるっ、と全身をこまかく震わせる。
「ぼくの名前……」
そういうと黙り込んだ。
そしてぽつりとつぶやいた。
「ヘロヘロ……」
「ヘロヘロ？」
ミリィが問い返した。
「うん、ヘロヘロ。ぼくの名前」
「ヘロヘロ、じゃと？」
ホルストはずい、と一歩前に踏み出した。
その眉がしかめられ、両目は険しくらんらんと輝いている。
「ホルストさん、どうしたの？」
パックが尋ねると、老人はくるりとパックに振り返りささやいた。
「わしの記憶に間違いがなければ、それは古い言葉じゃ。いまはもう使われておらん、古い時代の言葉で、恐怖という意味なんじゃ。そしてその時代、それは”魔王”という意味もあわせて持っておった」
「魔王？」
「そうじゃ。あやつはどこから来た？」
「ど、どこって……」
「あの剣じゃ！　あの”封魔の剣”があやつを封じておったのじゃ！」

「と、いうことは？」
老人はゆっくりとうなずいた。
「あやつは、このロロ村のご先祖が封じた魔王のなれのはてなのじゃよ。おそらくな」
「で、でも……」
パックはヘロヘロと名乗った人物を見やった。
ヘロヘロはぺたりと地面にすわりこみ、なにくれと世話をやいているミリィをまるで母親を見るように仰いでいる。
とても魔王には見えない。
「剣が折れた。そしてあやつが現れた。関係がないわけ、ないじゃろうが！」
老人はいらいらと拳を天につきあげると、ふたたびはったとヘロヘロをにらみつけた。
「ミリィ！　そこをどくのじゃ！」
「え？」
それまでヘロヘロに関心をそそいでいたミリィは、ホルスト老人の荒げた声にびっくりして立ち上がった。
老人は手の平をヘロヘロにむけ、口の中でなにごとがつぶやいている。
ミリィは大声をあげた。
「ホルストさん、どうするつもり？」
「そやつを殺す！　いまならわしの魔法で焼き殺せるかもしれん」
ぐっとホルスト老人は全身にちからをこめ、精神を集中させた。
かれの手の平にゆらゆらと陽炎のようなものが立ち昇った。
うん、と気合を入れようとした瞬間、ミリィが飛び出し手足を伸ばしてヘロヘロをかばう姿勢になった。
「やめて！　そんなこと許せません！」
はっ、とホルスト老人は構えを解いた。ふっと緊張がさる。
「なぜじゃ！　わしの話を聞いたろう。そやつはわしらのご先祖が封印した魔王なのじゃぞ！　そのままにしておいては、いずれそや

つはふたたび世界を滅ぼすため災厄をもたらすに違いないわい！」
ミリィは叫び返した。
「そんなのわからないわよ！　もしかしてホルストさんの勝手な思い込みかもしれないじゃない」
う、とホルストは詰まった。
確かにそうだ。
そのヘロヘロが魔王であるということはホルストの推測に過ぎない。
パックが触れた剣が折れた。
そしてヘロヘロがいる。
となれば、魔王を封じた剣からなにかが飛び出したと考えるしかないではないか。剣から出てきたなら、それは封じられた何者かであり、その封じられた何者かは魔王である。
ならばヘロヘロは魔王である。
という理屈だ。
しかしいまのヘロヘロはとても魔王に見えない。
黄色の肌、紫色の唇。
とても人間とは思えない容貌だが、その態度は無邪気でまるで大きな赤ん坊のようだ。
うむむ……、とホルストは悩んでいる。
ゆっくりとヘロヘロに近づき、かれを見おろした。
ヘロヘロはぽかんとした顔で老人を見上げ、にっこりと笑った。
まるきり他人というのに悪意のかけらもなく、恐怖すら感じていないようだ。老人がかれを魔法で焼き殺そうと宣言した後だと言うのにそんなこと何もなかったかのようである。
老人はほっとため息をついた。
「わからん。こやつが魔王のなれのはてだとあのときは確かに思えたのだが」
そう言うとふっと腕を上げ、額の汗をぬぐった。
パックはあることに気づいた。

「ホルストさん。聞きたいことがあるんだけど」
「なんじゃ」
「魔法、使えるようになったんだね」
パックの言葉にホルストは目を丸くした。
「そうじゃ。言われるまで気づかなんだ。確かにわしは魔法を使えるようになった……」
そう言うと、今度は虚空に手を伸ばしむっと気合をいれた。
ぼっ！
老人の手の平から炎の塊がほとばしる。
オレンジ色の炎は空中を飛び去り、ちいさくなって消えた。
「まさに魔法じゃ……威力も桁違いじゃ」
ホルストはぼうぜんとつぶやいた。
そして首をふった。
「なぜじゃ、なぜいま突然このような魔力がわしにやどったのじゃ？」
きっとヘロヘロを睨む。
「あやつがあらわれたとき、わしの魔法の力が強まったのを感じた。ということは……」
「ということは？」
パックは問い返した。
「あやつが魔法の源ということじゃ！」
そう言うとさっと指さす。
そして真っ二つに割れた剣に目をおとす。
「パックが触れたときこの剣が折れた……」
じろりとパックを睨む。
睨まれたパックはぞくりとなった。
それほど老人の凝視は厳しいものだった。
「不思議じゃ、こんなことははじめてのことじゃ。しかもお前はだれもできなかった剣を引き抜くということをしでかした。なぜ、そんなことが出来たんじゃ？」

「わ、わかんないよ。おれ、なんとなく引き抜けると思って……」
パックはへどもどといい訳をした。
ミリィはヘロヘロと名乗った奇妙な人物とともに無言でパックとホルストを見守っている。
山の頂上に風が吹きわたっていた。

帰りは行きの倍時間がかかった。
なぜならヘロヘロがいたからだ。
山を下る道を、ヘロヘロはおぼつかない足取りでミリィやパックにせかされ歩いていたが、ときどきへたばってもう歩けないと泣き出し、そのたびにミリィが元気をだしてと励まさなければならなかったからである。
パックもまた荷物を抱えることになった。
あの剣である。
折れた剣をそのままにするわけにはいかないとホルストが主張し、なんとなく剣を折れた原因をつくったパックが背負うことになったのである。
剣は重かった。
折れる前、パックはその剣がまるで紙のように軽いと感じたものだったが、折れたいまでは本来の金属の重みが戻ってきたのか、ずっしりと重量を主張してかれの背中に背負ったバッグのなかでパックの肩に重みを加えている。
ようやくふもとに降りて、ホルストの小屋で別れるときにはすでに三日目の朝だった。
行きの日程とあわせると五日になる。
パックもミリィもすっかり疲れ、小屋の中へ折り重なるように転がり込んだころは全員荒い息をついている始末だった。
元気なのはホルスト老人ひとりだった。
「とにかく家へ帰んないと……」
ミリィにそう言うと、彼女もうなずいた。

彼女の隣りにヘロヘロも尻餅をついている。
かれはびっしりと全身に汗をかいていた。
ミリィはヘロヘロに話しかけた。
「ヘロヘロちゃん。あんた、あたしの家へ来る？」
「お家？」
「そう、あたしのお家」
うん、とヘロヘロはこっくりした。
パックは驚いた。
「おい、ミリィ。本気か？」
「当たり前じゃない。この子をここに置いたままなんてできないわ」
この子、だって？
それを聞いていたホルストも目を丸くしていた。
「さ、行きましょう」
ミリィが立ち上がると、ヘロヘロも大儀そうに立ち上がる。彼女にうながされ、小屋を出て行く。
後を追って立ち上がったパックの肩を、ホルスト老人がぐっと掴んだ。
「待て、おぬしには話しがある」
え？　と振り向いたパックにミリィが近づく。
「ミリィ、おぬしは先に帰っておれ。わしはパックとすこし話し合いたいのじゃ」
ミリィは肩をすくめた。
「そういうことなら、お先に失礼します」
くるりと背を向け、ミリィはヘロヘロをつれて出て行った。
彼女とヘロヘロの姿が朝もやのなかに遠ざかると、はじめてホルストはふーっ、とため息をついた。
そしてパックのほうへ向き直ると、小屋の椅子をすすめた。
パックが座ると、老人はその前にもうひとつの椅子を引っ張り出し、向かいあう形となった。
長い話しになるのか、老人はふところからパイプを取り出すと口

に咥え、煙草をつめ一服つけた。
紫の薫り高い煙が老人の口からぽかりと吐き出され、あたりにたなびいた。
「お前とよく話し合いたいと思ってな、ミリィたちには先に帰ってもらったのじゃ。
パック、あのヘロヘロをどう思う？」
「どうって……」
老人の質問の意図がわからず、パックは口ごもった。
老人はうなずいた。
「わからんか、無理もない。あの山頂で、わしがあやつを……ヘロヘロを……魔王のなれのはてじゃと言ったのは覚えておろうな？」
パックはうなずいた。
老人はつづけた。
「その確信はいまでも変わっておらん。あやつは魔王なのじゃ！」
「でも邪悪には見えなかったなあ。どっちかというと、まるで赤ん坊に見えたよ」
「そこじゃ！」
ホルストはパックの答えに勢いづいた。
「あやつが封魔の剣に封印されていったいどのくらいの年月がたったと思う？　なんと千年ちかくじゃぞ」
「千年……」
「そうじゃ、詳しい暦は調べてみんと確信はできんが、そのくらいの年月はたっておるはずじゃ。その魔王を、お前は解放してしもうた……」
「で、でも……お、おれ、そんなつもりなかったし、どうして……？」
「どうしてお前が剣に封印されておった魔王を解放することができたのか、というのじゃな？」
老人はまた一服煙を呑みこみ、吐き出す。
ぷかり、ぷかりと紫煙があたりにただよった。

「さて、それはよく判らん。まあ、ちょっとは推測はつくが、はっきりした事が判るまで、口にするのはやめておこう。あとで確信できたところで、お前に教えるよ。それまで、我慢してほしい。

それよりあのヘロヘロじゃ。

あやつは千年というもの、剣に封印されておった。が、死んだわけではない。生きているわけでもない。

その千年という長い年月が、あやつから魔王であったころの記憶をぬぐいさってしまったのかもしれんな。それであのように、赤ん坊のような状態になったとも考えられる」

ふうん、とパックはわからないままうなずいた。

老人の目つきが鋭くなった。

「なあ、パック。わしは心配なのじゃ。

魔王はあのように赤ん坊のような状態でこの世に返り咲いた。いまのところ、あやつの心は子供そのものじゃ。

純粋で、無垢で、そして悪というものを知らない。言うならば、生まれたばかりの赤ん坊そのものじゃ。

もし、あやつが悪に染まったとしたら……ふたたび魔王となって蘇るかもしれん」

老人の推測に、パックの心臓はどきんと跳ね上がった。

魔王がふたたび姿をあらわす？

その想いを読み取ったかのように老人は深く頷いて見せた。

「だからパック。あやつをこの世に呼び出した者の責任として、よく見張っておるのじゃ。

よいか、あやつを悪に染まらせてはならん！　魔王の再来はなんとしても防がなければならんのじゃ」

折れた剣（前書き）

パックとミリィの間に微妙なすれちがい……ヘロヘロと名乗った奇妙な人物はやはり魔王？

折れた剣

聖剣が折れたというニュースはたちまち村にひろまった。

パックの家には村人たちが入れ替わり立ち代り訪れ、持ち帰った剣を見にやってくるのだった。

剣はホルンの手により、壁にあらたに棚をつくってそこに置かれることになった。まさかそこらの道具箱にほおりこむこともできまい、というのがホルンの弁であった。

まじまじと折れた剣をものぞきこみ、村人の一人が口を開いた。

「ホルンさん、どう思うね。剣が折れるなんて、不吉なきざしとしか思えんが」

うーむ、とホルンは家の作業場で鋤や鍬の修理の手をとめうなった。

「そんなこと、おれにはわからん。鍛冶屋のおれの目で見ると、この剣におかしなところはなにもないが……確かに昔の達人の技がふるわれていることはわかるがな」

次の質問は剣のことだった。

「この剣、もとにもどせるかね?」

この質問にもホルンは首を横にふるのが常だった。

「パック、いったいなにがあったんだね? 村のみんなは十三才になるとかならず剣に触れることになっておるが、引き抜いた者など聞いたことはない。なぜお前がそんなことできたんだ?」

村人に尋ねられ、パックは困ってしまった。

いったいなにがあったのか、一番知りたいのはパックのほうである。

やってくる村人は半で押したようにおなじことをふたりに質問する。ふたりはおなじことを答えるしかない。

わかりません、と。

物見高い村人たちの中に、ギャンの顔を認め、パックはうんざり

となった。
ギャンの目は冷たく執念深いひかりをたたえていた。
またなにかよからぬことを企んでいるに違いない。
その村人のなかに情報屋コールの姿もあり、熱心に村人たちの話を聞いている。
このときこそ情報集めの好機とはりきっているのだろう。
背の低いコールはちょこまかと走り回って油断ないひかりを目にたたえ聞き耳をたてているのがパックにはおかしかった。

ようやく野次馬がいなくなると、ホルンは折れた聖剣を手にし、じっと見つめた。
「父さん、それ鍛えなおすつもりかい？」
うむ……と、ホルンは顎鬚をひねった。
「やるだけやってみるか。パック、用意しろ！」
おう！　とパックは元気よく返事した。
ふいごを操り、火種をおこす。
ごうごうという音とともに炉に火が熾された。石炭が燃え、作業場のなかは猛烈に暑くなった。
ホルンは鉄の挟み道具で聖剣をつかむと、赤く燃えた石炭のなかにつっこんだ。じっと鉄が熱くなるのを待つ。
充分熱せられたところで引き抜き、ハンマーを打ち付ける。
かあん！
驚いたほど澄んだ音が響いた。
かあん！
なんども打ち付ける。
ホルンのこめかみに汗が浮いてきた。
「駄目だ……」
ホルンは首をふった。
いきなりホルンは素手で折れた剣を握った。
「父さん！」

パックは大声をあげた。たったいままで熱せられていたのである。火傷だけではすまない。手の平の肉が焼ける匂いを予感したパックは目を閉じた。

が、なにごともおきない。

「やはりそうか……」

ホルンはつぶやいた。

「大丈夫なの？」

ああ、とホルンは答えパックに持っていた聖剣を指し示した。

「さわってみろ」

言われてパックはそろそろと手を伸ばした。

さわる。

パックは目を丸くした。

「熱くない……冷えているよ」

その通りだった。

あれほど熱せられていたのに、聖剣の表面はまったく熱をもっていなかった。これでは鍛えなおすなどということは不可能である。

「おそらく、古代の刀鍛冶のわざで出来ているのだろうな。そのわざはいまは失われているのだ。この剣はわれわれには知られていない金属でできているに違いない。融点がおそろしく高く、熱してもすぐ冷めるのだ」

「それじゃ、もとに戻すことはできないのかい」

わからん、とホルンは頭をふり腕組みをした。

そうか、とパックはがっかりした。

折れた剣がもとの姿を取り戻すところを見てみたかった。

それより気になるのはミリィのことである。

あの日以来、ミリィは連れ帰ったヘロヘロにつききりで、ほとんど一日中なにくれと世話を焼いている。

ヘロヘロのほうもミリィに頼り、まるで子犬が母犬につきまとうように彼女のあとをついてまわっていた。

毎晩の夕食にミリィがパックの家で一緒に食事をとることもやめていた。

その日、いつものようにパックの家で夕食がはじまったが、席につくのはパック、ホルン、メイサの三人きりだった。

メイサに聞くと、ミリィは家でヘロヘロに食事の世話をしているのだそうだ。

ふうん、とパックはうなずいたがなんだか面白くなかった。

「ところでホルンさん。あのヘロヘロって子、どうします？」

いきなり質問され、ホルンは目をしろくろさせた。

「なにを、ですかな？」

「まあ、いやですわ。学校ですわよ。あの子、字も読めないみたいなんですよ。ちゃんと読み書きくらい、教えてあげないと可愛そうですわ」

「はあ、そうですか。しかしあいつは……ヘロヘロといいましたかな。いったい幾つになるんですか。学校に通わせるにも、年令がよくわからんでしょう」

ふたりの会話を聞いてパックは可笑しくなった。

ホルスト老人の推測が確かなら、あのヘロヘロは千才以上になるはずである。

パックよりも、ホルスト老人よりも、そしてこの世に生きているすべての人々よりも年をとっているわけだ。

ホルンの質問にメイサも真剣に考え込んでしまったようだ。

いくつでしょうねえ、と首をかしげている。

とにかくふたりはヘロヘロを学校へやることにしたらしかった。

翌日、パックは学校が休みなのでミリィの家に出かけた。

家の前ではメイサが洗濯物を干していた。

「叔母さん、ミリィは？」

「あら、ミリィだったらヘロヘロちゃんをつれて出かけたわよ」

「出かけた？　どこへ？」

メイサは指をあげて山を指した。
「ふーん、それじゃ……」
パックは駆け出した。
メイサが何か叫んだようだが、聞いてはいなかった。
ふたりが山へ？
いったいなにをしに。
山へ続く道を駆け登りながらパックは自分でもどうかしていると思った。
それにしてもミリィはヘロヘロに構いすぎじゃないかとも考えた。
どうしてそんなにヘロヘロなんかに夢中になるんだ？
やがてホルストの小屋が見えてくる。
小屋の前は草原になっていて、一面の花畑だ。
そこにミリィとヘロヘロが腰をおろしていた。
ミリィは花を編んで輪をつくり、ヘロヘロの頭にかぶせている。
花輪を頭にかぶり、ヘロヘロはにこにこしていた。
「ミリィ！」
パックが叫ぶとミリィとヘロヘロは顔を上げた。
「あら、パック。どうしたの？」
どうしたの、と尋ねられパックは言葉につまった。
何も言えず、パックは黙ってミリィとヘロヘロの前に近づくとどっかりと座り込んだ。
「パック、ヘロヘロちゃんって物覚えいいのよ。あたし、ヘロヘロちゃんにいま字を覚えさせているところなの。お母さんが、ヘロヘロちゃんを学校へやるっていうから、それまでにすこしでも学校の勉強についていけるよう教えてるんだ。ね、ヘロヘロちゃん。あなた、自分の名前書けるのよね！」
ミリィは早口でそういうと、ヘロヘロに向かって同意を求めた。
ヘロヘロはうん、とうなずき口を開いた。
「うん、ぼく、もう字を覚えた！　名前も書けるんだよ」
偉いでしょう、とばかりに胸を張る。

ミリィを見ると彼女も自慢げにヘロヘロを見ていた。
それを見ているとなぜか腹が立ってきた。
パックは嫉妬、という言葉を知らない。
が、それは間違いなく嫉妬なのだ。
と、ヘロヘロが急に顔をしかめ頭をぶるぶるっとふった。
ミリィが乗せた花輪が頭からポロリと落ちた。
「どうしたのヘロヘロちゃん」
ミリィが心配そうに声をかける。
「わかんない、頭がかゆい」
ヘロヘロがつぶやいた。
どれどれ、とミリィが覗き込む。
ヘロヘロの毛の無い頭のてっぺんに、ぽっちりと虫の食ったような痕がある。ちょっとふくらみ、腫れているようだ。
「虫にさされたのかしら？　痛い？」
「ううん、かゆいだけ」
そう、あとでお薬を塗っておきましょうね、というミリィの声を背中で聞きながらパックは立ち上がった。
無性に腹が立つ。
そのまま無言で走り出した。
驚いたミリィがパックの名前を呼ぶ。
パックは後をふり返らず走っていく。

途中、ホルスト老人と行き逢った。
「おお、パックか。どうした、こんなところで？」
呼び止められパックは顔を赤らめた。
どういうわけか、恥ずかしくなったのだ。
「なんでもない」
ホルストは顔をあげ、小屋の前の草原で座っているミリィとヘロヘロに気づいた。
そしてパックを見る。

老人の唇がすぼめられ、笑顔になった。
「ほう……あのふたり、仲が良いのう。いや、このごろしょっちゅうああやって花畑で遊んでおるのじゃよ。ちかごろはミリィはヘロヘロに勉強を教えておるようじゃな」
「さよなら！」
老人のそばをすりぬけようとすると、ホルストは腕をのばしてパックの肩を掴んだ。
「まあまあ、わしの話しも聞きなさい。ミリィはヘロヘロに夢中のようだが、いずれおさまるよ。やがてお前とミリィの仲ももとにもどる。心配することはない」
パックはホルストの顔を見上げた。
老人のふたつのおおきな目がじっとパックの目を覗きこんでいる。かれの目は、わかっているよと言っているようだ。
パックはかっと顔が熱くなった。
なんだか自分の心の中を言い当てられたようで恥ずかしい。
老人は顔中皺だらけにしてにこにこと笑っている。
「それじゃ……」
つぶやくと村めざして走り出した。

歩いていると、いつしかパックの足はニコラ博士の家に向かっていた。
そういえば、あれから顔を出していないな、と考えパックは思い切って尋ねることにした。金色の少女、マリアのことも気になるし。
博士の家はかなり修復されているようだった。
壁のひび割れはまだ残っているし、屋根瓦も大部分落ちたままだ。だが窓ガラスには新しいガラスがはまっていて、無残な印象は薄れていた。
玄関のドアの前に立つと、いきなりニコラ博士の声がした。
「パックか？　よく来たな」
声だけで姿はない。

どこから聞こえているのか、パックはきょろきょろとあたりを見回した。
「なにをしておる。さっさと入って来い。ドアは開いているぞ」
ドアのノブを掴み、開くとドアの上の方になにか望遠鏡の一部のようなものが見えた。レンズが動いてパックを狙っている。
いつものように地下室に行くと、博士は見慣れない機械の前に座っていた。
「こんにちわ、ニコラ博士、それ、新しい機械ですか？」
パックがそう言うと、博士はくすぐったそうな顔になった。
誰かに自慢したいときの表情であることを、パックはすぐわかった。
机の上にダイヤルや、つまみが沢山ついたコンソールがあり、その上に窓のようなものがある。窓には家の中から見た玄関前の景色が映っていた。
「これを操作していたら、お前の姿が見えたんでな。ちょっと声をかけたわけなんじゃ」
そう言ってニコラ博士はコンソールのつまみを動かした。窓の景色がゆっくりと横に動き、隣りの家の前庭が映し出される。
「わあ、すごいや……これ、どこでも映せるんですか？」
「カメラのレンズがあるところならな。今のところレンズがあるのは玄関前だけだから、そこしか映すことはできんが、もっとレンズを増やせば村中のことがわかるぞ」
「声は？　博士の声だけ聞こえたけど」
「こいつを使う」
博士は、喇叭のようなものを見せた。
「これに向かって話せば、遠く離れたところへ声だけ送ることができるのじゃ。レンズにはこれとおなじものがついているから、会話もできるのじゃ」
パックは素直に感心した。
「すごいや。まるで魔法ですね」

この言葉を聞くと、博士は眉をしかめ指をふった。
「違うぞ、パック。これは科学じゃ！　魔法などという非科学的なものではない。第一、魔法なんてものは子供のお話しに出てくるだけのことで、実際には存在しないぞ」
「でもホルストさんは魔法を使えるんです」
博士は目を丸くした。
「なんのことじゃ？」
そこでパックは山でおきたことを説明した。
ニコラは難しい顔になった。
「それはたぶん、なにかの奇術ではないのかな？　その老人が、お前たちを驚かせるため手品かなんか、使ったのに違いないわい」
博士は喋っているうち怒りがつのってきたらしく、興奮して腕をふりまわした。
「けしからん！　子供をそんな手品などで騙すとは！　一度、意見しなくてはならんな」
「へえ……、じゃそのホルストさんに頼んで、一度博士と会うよう話してみますよ。ホルストさんの魔法が本物かどうか、試してください」
博士はうなずき、ホルストの魔法の真偽について科学的な立証をしてみせるとうけあった。
面白いことになってきた。
パックはその日が楽しみだと思った。
実際にホルストの魔法を眼にしたとき、博士がどんなことを言うのだろう。
パックは地下室を見渡し、すっかりかたずいていることに気づいた。
「きれいになったんですね」
「ああ、なんとか実験を再開できるまでにこぎつけた。そろそろ次の実験にとりかかってもいいころだ」
そう言うとニコラ博士は台の上のマリアを見やった。

相変わらず金色の人形は、台の上で静かに眠っている。
真鍮でできた彼女の身体は、ぴかぴかに磨き上げられまわりのメーターや、ランプの光を受けて輝いていた。
博士はパックの肩を叩いた。
「再開のときは、パック。お前にも手伝ってもらわんとな！」
パックはうなずいた。
すっかりヘロヘロのことは念頭からさっていた。

覚醒（前書き）

ヘロヘロは魔王となってしまうのか？　魔王を覚醒させるものはなにか？

覚醒

「学校へ行くわよ、パック」
え？　とパックはミリィの声に顔をあげた。
食卓の向こうからホルンが眉をあげた。
朝食をすませ、さあそろそろ登校時間だと思ったとたんである。
「珍しいこともあるもんだ。ミリィがお前をさそいにくるとはな」
ホルンはにやにや笑いながらつぶやいた。
キッチンの窓からミリィの笑顔が見えていた。
パックは立ち上がり、カバンを肩からさげドアを開いた。
「お早う！」
ミリィが声をかけた。
となりにはヘロヘロが並んで立っていた。かれもまた肩からカバンを提げていた。
「今日から登校するのかい？」
ミリィはうなずいた。
ああ、そうか……とパックはつぶやくと外へ出た。
歩き出す。
ミリィは急ぎ足になって側へ来るとパックの顔を覗き込んだ。
「いやねえ、パック。なに怒ってんの？」
「別に……」
「あたしがなにかした？」
「何も……」
ああ、そう。とミリィはつんと顔を上げた。
ヘロヘロはそんなミリィの手をぎゅっと握ってついてくる。
その頭に、ぽっちりとなにか突起のようなものが突き出している。
ほんの、小指のさきほどのちいさなものだが確かに突起だ。
いや、角といっていいだろう。
「それ……」

パックが指さすと、ミリィは眉をひそめた。
「あ、気がついた？　そうなの、昨日からヘロヘロちゃんの頭に生えてきたのよ。痛くはないみたいだけど、なにかしらね」
「角に見えるね」
「パックもそう思う？」
ミリィの顔は心配そうである。
昨日、ヘロヘロが頭がかゆいと言ったのをパックは思い出していた。あれがきっかけなんじゃないか。
パックはにわかに不安にかられた。その不安がどこから来るのかわからないが、なにかとんでもないことの前触れのように思えたのは確かである。

ヘロヘロの登場は教室にセンセーションをまきおこした。
ミリィがヘロヘロを紹介すると、わっとばかりに教室の生徒たちはふたりを取り囲んだ。
「すっごーい！」
「ね、その肌色、本物なの？」
「触っていい？」
突然に集まった生徒たちに囲まれ、ヘロヘロは目を白黒させていた。
それをパックはやや離れたところから見ていた。
ミリィは顔をあからめ、他の生徒たちの質問にこたえている。なんだかとても嬉しそうである。
「おい、ミリィちゃん、あの野郎にすっかり夢中じゃないか？」
ふりむくとギャンだった。
唇の端にうすく笑いを貼りつかせ、目には奇妙なひかりをたたえている。
「それがどうした。関係ないだろ」
「そうかい、このごろお前、ミリィとあまり会ってないんじゃないか？　ヘロヘロとかいうやつにすっかり取られた格好だろ」

ギャンは顔を近づけささやいた。ギャンの口からは、くちゃくちゃと噛んでいるハッカのきつい匂いが漂った。

パックはかっとなった。

ギャンに自分の胸のうちを言い当てられたような気がしたからである。

「だからおれには関係ないって言ったろ？　あっちへ行ってろ！」

「そうかい……それじゃお前はあのヘロヘロにはなんの関心もないってわけだな？　そうか、よくわかったよ」

にやにや笑いをたたえつつ、パックから離れていく。

どういう意味だ、とパックは言い返そうとしたがギャンは教室のうしろのすみの低位置に戻り、例の取り巻きをしたがえ、椅子にだらしなく腰掛けているだけだった。

からり、と教室の扉が開きカース先生が入ってくる。

たちまち大騒ぎがおさまり、教室はしんと静まりかえった。

カースの目はヘロヘロに注がれた。

「今日、あたらしいお友達が来てくれました。ヘロヘロさん、と仰るのですね。ヘロヘロさん、立って皆さんに挨拶をお願いします」

ミリィにうながされ、ヘロヘロはぐずぐずと立ち上がる。全員の注目を浴び、おろおろしていた。

そのまま黙ってしまった。

教室はしーん、とヘロヘロの次の言葉を待っている。

やがてヘロヘロの黄色い顔が、真赤に染まってきた。

ふつふつと大粒の汗が浮かぶ。

と、ヘロヘロの両方の耳からぽーっ、と音をたて湯気が噴き出した。

教室のみんなはわっ、と驚いた。

どて、とヘロヘロは尻餅をつき目を廻してしまった。

教室は大騒ぎになり、カースは叫んだ。

「みなさん、騒がないで！　静かに！」

声をからして制止する。

ミリィはヘロヘロの元に飛ぶように駈け寄るとハンカチを取り出し、ぱたぱたと顔のあたりを仰いでいる。
やがてヘロヘロの目がぱちりと開き、あたりをきょろきょろと見回した。
のぞきこむ生徒たち、そしてミリィに気づく。
むっくりと起き上がり、えへへと笑う。
どっと教室の全員が笑った。
カースも苦笑いをしている。
そのなかで笑っていない者がふたり。
ひとりはパック。
机に顎をのせ、背中を丸めヘロヘロとミリィを見ていた。
パックはふと教室のうしろに目をやった。
もうひとり、笑っていない者がいた。
ギャンである。
例のごとく背中を椅子にもたれかけ、だらりと腕をたらしていた。
が、その視線はじっとヘロヘロに注がれている。その視線はねちっこく、粘りつくような執拗さをふくんでいる。

授業が終わり、パックは教室を飛び出した。
出て行く寸前、ちらとミリィとヘロヘロを見やると、ふたりは生徒たちにかこまれなにか熱心に話している。声をかけるかためらったが、結局パックはそのまま外へ出た。ミリィがこっちを見たようだったがそのまま学校を後にする。
あーあ、なんだか気分がくさくさする。
道すがら小枝を折り取り、振り回しながら歩く。道の両側に生えている樹木の枝についている葉をその小枝でむちゃくちゃに落としながら進んだ。
おれはなにをやっているんだろう?
ふとそんなことを思う。
道の向こうからしゅうしゅう、ぽんぽんという蒸気の近づく音が

してパックは立ち止まった。
パックの眉があがった。
あれはなんだ？
近づいてくるのは、巨大なムカデのような機械だった。
体長五メートルほど、全体は六つの体節にわかれている。金属の身体はオリーブ・グリーンに塗られごつごつと沢山のボルトや鋲が打たれていた。
機械はいくつもの金属の足が流れるように動き、道路をわさわさと動いている。
ムカデの頭部にあたるところには蒸気エンジンと操縦席があり、ニコラ博士がハンドルを握っていた。
「博士！」
パックが声をかけるとニコラ博士は顔をあげ、にこにこと笑いかけ機械の進行を止めた。
パックは駈け寄った。
「博士、すごいや。あたらしい機械ですか？」
「うむ、まあな。ちょっと実験していたところじゃよ」
ハンドルを握るニコラ博士はうずうずと頬に笑いを貼りつかせうなずいた。自慢したいのはやまやまなのだが、多少の見得もあって手放しで自慢したくはないというところか。
「わしの開発した、あたらしい蒸気エンジンでこいつは動くのじゃ！」
ニコラ博士はぽん、とボイラーを叩いた。ぐいっ、とレバーを引くと、ぼおーっと汽笛が鳴り、勢いよくシリンダーから蒸気が噴き出しあたりを白く染めた。
「車輪を使うことも当初考えたが、あたらしい駆動方式を試す意味もあってな、このような形になったが正解じゃった。これなら石ころだらけの岩地や、起伏のはげしい草原でも楽々移動できるわい」
操縦席のニコラ博士は操縦席のボタンを指差した。
「もし森などで前方に木が立ちふさがったときなど、これを使うの

じゃ！」

ボタンを押すとムカデの口から牙がにゅっと生えがちがちと噛みあった。パックは目を丸くした。

「乗ってみるか？　ん？」

もちろん、とパックはうなずき伸ばされたニコラ博士の手を掴んで操縦席に這い上がった。

操縦席に座ったパックにニコラ博士はつぎつぎと操縦法を教えはじめた。

「よいか、このレバーがアクセル。そしてこっちがクラッチじゃ。ギアを変えるときはこっちのレバーを使う。これをこうすると後進、このレバーで姿勢を変える」

パックが教えられたレバーを引くと、いきなりムカデの前部分の体節がもちあがり、あぶなくパックたちはひっくり返りそうになった。

「わ、わ、わ！　気をつけんかい！」

「ご、ご免なさいっ！」

パックはあわててレバーを元に戻した。

機械の頭部はふたたび下がり、姿勢は元に戻った。

「ふいーっ、驚いた。でも、どうしてこんな機能が必要なんです？」

「荒れ地などで岩があるときなどこの機能をつかって乗り越えることができるのじゃ。うまくつかえば、ほとんど垂直な崖すら上り下りできるぞ」

パックはすっかり興奮していた。

「すごいや！」

と、その時学校のほうからひとりの少年が走ってくる。

目をほそめたパックはそれがコールだと気づいた。

短い両足を懸命に旋回させ、必死に走ってくる。

「おーい！」

パックはコールに向かって声をはりあげた。

コールはパックに気づいた。

パックの乗っている機械を見てぎょっと立ち止まる。
パックは操縦席から飛び降り、コールに駆け寄った。
「どうしたんだ？　なにかあったのか」
「ギャンが……」
コールはぜいぜいとあえぐと、やっと落ち着いたのかパックの目をまともに見た。
「ギャンがあのヘロヘロってやつを学校裏で仲間と一緒に取り囲んでいるんだ。ミリィも一緒だ」
なにい、とパックは身を乗り出した。
さっとばかりにムカデの操縦席に飛び移ると始動レバーを握った。
「博士、この機械借りますよ」
返事も聞かず、パックはアクセルを踏み込んだ。
ぼおーっ、と汽笛の音がして機械はざわざわと足を蠢かし進みだす。
あっけにとられていたコールは慌てて喚いた。
「おい、パック！　おいていくのかよ？」
ぎいーっ、とパックはブレーキをかけ、コールに手を差し出した。
「乗れよ」
「そうこなくちゃ！」
するするとコールはムカデによじ登り、パックの隣りに座った。
パックはそれを確認してアクセルを踏み込む。
パックはハンドルを握り、ムカデを操縦した。たった一回教わったばかりなのに、ムカデの操縦はあきれるほど簡単だった。博士は必死になってムカデの頭部にしがみついている。
「こいつ、こんなにスピードが出るなんて計算外だ……！」
え？　と、パックはニコラ博士の顔を見上げた。
「じゃ、今日が試運転なんですか？」
おほん、とニコラ博士は胸をはった。
「わしの設計がいかに優れているか、証明されたわい！」
博士はそれでも満足げだった。

がっしゅ、がっしゅと蒸気の音を立て、ムカデは全速で走っている。

ときおり野良作業に出ている村人と出会うとみなわっ、と驚き口をぽかんと開け見送った。

やがて学校の建物が見えてくる。

校庭に走りこみ、パックはムカデを止め操縦席から飛び降りた。

コールもその後を駈けていく。

そのまま校舎の裏へまわる。

「おい、パック！」

つられたように博士もパックを追って校舎の裏へと走っていった。

校舎裏の森の中に踏み込むと、すぐにギャンたちの姿が見えた。

森の中の開けた場所に、ヘロヘロを真ん中に輪をつくって取り囲んでいる。

輪の中心のヘロヘロはべそをかいていた。

ぼこ！　と、ヘロヘロの頭に小石がぶつかる。ギャンの取り巻きのひとりが投げたのだ。小石がぶつかり、悲鳴をあげたヘロヘロを見て、取り巻きたちはげらげら笑っている。

すでに何度も石をぶつけられた後なのか、ヘロヘロの顔は無残にはれあがり、出血のあとがあった。

腰に両手をあて立ちはだかっているギャンにミリィが叫んでいた。

「やめてギャン！　ヘロヘロちゃんにかまわないで！」

必死にギャンを止めようとするが、それを後ろからツーランが羽交い絞めにしている。

ギャンはじろりとミリィを見た。

「そうはいかんな。こいつは噂では魔王のなれのはてだという。ご先祖様が封印した魔王を、パックのやつが解放してしまった。危険じゃないか。いまのうち、殺したほうがいいかもしれん」

「殺す！　あなた、なに言っているの？」

「村のためだ。こいつは生きていては世界にまた破滅をもたらすか

もしれないじゃないか？　違うかね」
「そんなことない！　ヘロヘロちゃんにはあたしが人を愛したり、大事にする心を教えてあげるつもりなんだもの。絶対、世界を破滅させるような魔王にはさせないわ！」
「坊っちゃん、ミリィを黙らせてくださいよ！」
ギャンの右手にいるダルトという逞しい体の若者がいらいらして叫んだ。ダルトは学校を卒業して、いまは農作業についている。が、在校中からギャンとはつるんでいることが多く、卒業後もこうして取り巻きのひとりでいるのだ。ダルトは手に棍棒をもっていた。ダルトの父親はギャンの父親サックの農地を借りて交錯している小作人で、自然ギャンのことを坊っちゃんとよぶ。
ぺっと手に唾をつけ、ダルトは棍棒をふりかぶりヘロヘロに打ちかかった。
ミリィが悲鳴をあげた。
ごつ、といやな音を立て、棍棒がヘロヘロのどこかに当たった。
うむ……とひとこえ唸るとヘロヘロはしゃがみこんだ。そのまま動かない。気絶したのかもしれなかった。
「はなして！　ヘロヘロちゃんが死んじゃう！」
目に一杯涙をため、ミリィは叫んだ。
「ギャン！」
たまらず、パックは叫んだ。
ギャンはゆっくりとふりむいた。
「なんだ、パックか……お前はあいつのことは知らんといったばかりじゃないか。邪魔するなよ」
「パック！　ヘロヘロちゃんを助けて！」
ミリィの言葉にパックははじかれたように飛び出した。
「そらよ！」
そのパックの足もとにダルトがひょい、と棍棒を放り投げた。
「わっ！」
棍棒に足をとられ、パックはもんどりうって転んだ。さっと転ん

だ勢いで一回転すると、一挙動で立ち上がる。
「おっ？」
パックの素早い動きにダルトはちょっと驚いたのか、とたんに用心深い表情になった。
腰をかがめて棍棒を取り上げると腰をひくくして構えた。
パックも身構えた。
農作業で鍛えられているダルトの身体は、服の上からもはっきりわかるほど筋肉が盛り上がってごつごつとしていた。ほかの取り巻きの、やわな身体ではなかった。
「ダルト。良い機会だ。このパックに目上の人間を尊敬させることを教えてやれ！　ただし甘く見るなよ。こいつの父親に剣を教えられているらしいからな」
ぱしっ、ぱしっと手に棍棒を打ちつけ、ダルトはにやにやと笑っていた。
「なあに心配することねえです。おれだって多少剣の心得はあるんで」
そう言うとダルトは棍棒を両手に持つと正眼に構えた。
なるほど……確かに心得はあるようだ。
パックは目を細めた。
じりっ、じりっとダルトはパックに向け距離を縮めていく。
パックには得物はない。
やあ！　と、ダルトは声をあげ撃ちかかる。
さっとパックはそれをさけぴょんと一飛びすると距離をとった。
それを見越し、ダルトは棍棒を横殴りにふった。
パックは背をそらせ、あやうく避けた。
焦りに、汗が噴き出した。
このままではやられる。
と、パックを睨んでいたダルトの表情が変化した。
なんだろう、とパックは眉をひそめた。
ダルトの視線はパックの背中ごしを見ている。

ふるい手だ。
背中に何かあると思わせ、おもわずふりかえったときに襲いかかるつもりだろう。
が、ダルトのほかギャンの取り巻き、そしてギャンもまたパックの背中に視線を注いでいる。
ミリィもあっけにとられた表情で同じ方向を見ていた。
そのときようやく駈けつけたニコラ博士がパックに声をかけた。
「パック、そいつはいったい何者だ?」
ようやくふりむいたパックは目を見開いた。
そこにいるのはヘロヘロだった。
が、それはいままでのヘロヘロではなかった。
ずんぐりとした身体つきはそのままだったが、その表情が違っていた。
細い目が妖しく光り、口にはにゅっと牙が生えている。
そして頭の角が太く、そして長くなっていた。
いまでは二十センチほどの長さにのび、太さも五、六センチはありそうだ。
ぐふぐふぐふ……と、ヘロヘロは口の中でこもった笑い声をたてた。
「ヘロヘロ……お前……」
パックが声をかけるとヘロヘロはぎろりと目玉を動かした。
「パックか……駆けつけるのが遅かったじゃないか……もしかして、ここに来るのは厭だったんじゃないのか?」
「なに言ってるんだ?」
パックの胸はずきりと痛んだ。
ヘロヘロのことは考えたくもなかった。だからギャンがあんな目つきで見ていたのに関わらず、教室を飛び出してしまったのだ。こうなることは判っていたのに……。
はあはあはあ……とヘロヘロは低い声で笑った。
パックはぞっとなった。

魔王が復活した！
その表情を覗き込んだヘロヘロは鷹揚にうなずいた。
「さよう、わしこそが魔王そのものである！」
そう言うとギャンを見る。
視線を向けられたギャンはへたへたと腰を抜かしていた。
「ギャン、とかいったな。礼を言うよ。お前のおかげで、本来のわしに戻れたからな。この角……」
こつこつと指をあげ、角にふれた。その指には太く、鋭い爪が生えていた。
「これにお前の悪意、嫉妬、妄念がびんびんと響いてきた。お前の悪意は底なしだ。お前の暗い欲望にわしは目覚めたのだ……」
わはははは……！
ヘロヘロの哄笑はまるで物理的な力を持つかのようにあたりを圧倒する。ダルトは恐怖のあまりくらくらと目をまわしていた。
「ヘロヘロちゃん……」
目に涙をため、ミリィはつぶやいた。彼女を羽交い絞めにしていたツーランはすでに雲を霞と逃げ去っていた。
ほほ、とヘロヘロは軽く笑った。
「ミリィ、お前はわしに善良さを教えてやろうと思っていたようだが、それはいまはかなわぬことだ。が、お前がわしに寄せてくれた好意に免じ、お前だけは助けることにしよう。さて、魔王の復活の手はじめとしてこのロロ村を地獄の業火に陥としてやろう」
ヘロヘロはさっと両手を天にのばした。
上を見上げたパックは、いつの間にか空がどんよりと曇り、真っ黒な雲がロロ村にのしかかるようにかかっていることに気づいた。
雲はまるで生き物のようにのたくり、渦をまいている。
ぴかっぴかっと雲間から稲光が閃光を発していた。
ひゅう……と生暖かな風が吹き渡った。
風はパックの髪を乱し、あたりの森をざわざわと波立たせた。
さっとヘロヘロは指先をたて、ロロ村を指差した。

かっ！　と稲妻が雲から地面にのび、ぴしゃーん、という派手な音が響く。

ぼっ、と森の向こうからオレンジ色の炎があがり、もくもくと黒い煙が立ち昇った。

ヘロヘロはちっと舌打ちをした。

「なんだ？　村を狙ったのに……。千年もの眠りで狙いが狂ったか……？」

ぐっとミリィを睨む。

彼女は立ちすくんだ。

のしのしと近づくと、彼女の腕を掴んだ。

「ヘロヘロ！」

パックが叫ぶと、ヘロヘロはにやっと笑い、ミリィの腕を掴んだままふわりと空中に浮かび上がった。

そのままロロ村の方向へ飛び去っていく。

それを見たパックはものも言わず駆け出した。目指すはムカデである。あれに乗って、追いかけるつもりである。

「浮いた！」

見上げているニコラ博士は信じられない、といった表情になった。鋭い視線で浮かんでいるヘロヘロとミリィを見つめている。

「どこからも吊っている線など見えない……、これは手品ではないのか？　本当に魔法など存在するのか？」

博士は眉をしかめ、唇を噛みしめた。

ヘロヘロは叫んだ。

「面倒だ、このままロロ村全部を、この世の果てまで吹き飛ばしてくれん！」

「ヘロヘロ……やめて……そんなことしちゃ、いけない……」

腕を掴まれたまま空中に浮かび上がったミリィは弱々しく首をふった。

ヘロヘロはそれには答えず、ぐっと片方の腕をさしのばした。

眼下にロロ村が見える。

村のあちこちからは村人が家から飛び出し、空中に浮かぶヘロヘロとミリィをあっけにとられ見守っていた。
その騒ぎにメイサが家から飛び出した。
村人たちの視線を追い、空を見上げる。
空中に浮かんでいるヘロヘロと、腕を掴まれているミリィに気づき、あっと叫んだ。
「ミリィ！」
悲鳴をあげた。
が、ミリィはメイサの声に気づいた様子はなかった。ぐったりしているミリィを見つめ、メイサはへたへたと腰を抜かし地面に座り込んでしまった。
パックはムカデに乗り、ようやく追いついた。
「ミリィーっ！」
叫ぶが、ふたりは高く浮かんでいて声が届いたかどうか判らない。
ヘロヘロがおおきく腕をふりまわした。
村をおおう雲の動きが早まった。
まるでじょうごに吸い込まれる水の動きを見ているように、雲が渦を巻いている。
ばりばりばりと物凄い音とともに、閃光が走った。
電光が何本も雲から地面に突き刺さり、突風が村を駆け抜けた。
雷電が地面に突き刺さり、オゾンの匂いが漂った。ぼっ、と立ち木に火がつき燃え上がる。さらなる突風が屋根瓦を吹き飛ばす。
村人たちの悲鳴がした。
ごおおお……。
風が渦を巻き、立ち木の炎を村の家々に運んだ。藁屋根の家はたちまちマッチ箱のように燃え上がった。
黒煙が立ち上り、空中にうかぶヘロヘロの顔を赤く染めた。
ヘロヘロは叫んだ。
「吹き飛んでしまえ！」
叫ぶとおおきく腕をふった。

かっ、とさらなる白光。
そのまわりで電光が激しくなり、密度を高めていく。
ヘロヘロの顔が驚愕に歪んだ。
「な、なんだ……これは……ど、どうなっている……？」
きょろきょろと目を動かし、唇を噛みしめた。なにか計算外のことがおきたらしい。
空中に浮かぶヘロヘロとミリィのまわりに激しく電光が飛び、しだいにその間隔が縮まっていった。
やがてすっぽりとつつみこむような球体を形作る。
ヘロヘロとミリィの姿が白光に呑みこまれ、白く輝く球体となった。
球体からヘロヘロのわめき声が聞こえてくる。
「違う！　違う！　これは違う！　なぜだ、なぜ魔力が効かない？　こ、こんなこと……こんなことって……！」
最後にうおーっ、という怒号があたりに響いた。それは怒りと、狼狽とが入り混じったような声だった。
と、ひゅっという風きり音をたて白光は北方の方向へ飛び去ってしまった。
あっというまにちいさくなり、空のかなたに消えてしまう。
雲は消えた。
かわりに青空がもどり、日の光がロロ村を照らし出した。
風もやんでいた。
ざわざわと村人たちが言い交わしはじめた。
「なんだ、ありゃ」
「ミリィの姿が見えたようだな」
「ミリィを掴んでいた、変な奴はだれだ？」
「たしかヘロヘロとかいう奴じゃないか」
「なにがあったんだ？」
その中で、母親のメイサはいやいやをするように首をふっていた。
「ミリィ……ミリィ……」

そこへやってきたのはホルンだった。
地面にへたりこんでいるメイサに気づく。
「奥さん！」
メイサはうつろな視線をあげた。覗き込むホルンの顔に気づいた様子もないようだ。
ホルンは膝まづき、メイサの肩を揺り動かした。
「奥さん……！　メイサ、何が起きた？」
「ミリィが……」
それだけ言うのがやっとで、あとは両手を顔にうめ、すすり泣いた。
パックは唇を噛みしめ、ムカデのアクセルと踏み込んだ。
ぽおーっ、と汽笛が鳴り響き、あたりにいた村人たちは驚いて飛びのいた。
その音にホルンは顔をあげた。
「パックじゃないか？」
パックはちら、と父親とメイサを見た。
ものも言わず、パックはそのままムカデを走らせた。
ホルンはあっけにとられ見送った。
目指すは白光が飛び去った方向である。

使命（前書き）

ミリィとヘロヘロを追跡していくパックだったが……。
やがてパックは自分の使命を知ることになる。

使命

かちゃり、とドアが開くと全員いっせいにそちらを向いた。
ホルン、メイサ、ホルスト、ニコラ。
ドアを開いたのはパックだった。
全身泥だらけ、あちこちすり傷だらけで疲労困憊している。
顔をあげたパックは驚きの表情になった。「父さん、叔母さん、ホルストさん、それにニコラ博士……？」
夜になり、パックは家に帰ってきたのだった。
よろよろと四人の前に歩きより、ホルンが指し示した椅子にどっかりと腰をおろす。
がくりと首がたれ、おおきく肩で息をしていた。
「どこまで行ったんだ？」
ホルンの質問に、パックは顔をあげた。
「峠まで……」

パックはミリィとヘロヘロを包んだ白球を追いかけ、夢中でムカデを走らせた。
しかし空を飛ぶ白球のほうが格段に早さが違い、すぐ見失ってしまった。
唇を噛みしめ、どうしようかと思案する。
ふと、この辺に帝国軍の総督府があることを思い出した。
そうだ、軍に救出を頼もう！
パックはムカデの鼻先をそちらの方向へ向け急行した。

帝国はさまざまな要衝に駐屯している。
なにしろいまだ共和国のゲリラが出没するし、治安維持も担っているからだ。
総督府はロロ村の近くでもっともおおきな軍の施設だ。

ロロ村からまっすぐ伸びる街道がこの地でボーラン市に続く街道と交叉して、交通の要衝となっている。自然、軍事的にも重要地点となっているため総督府とそれに付随する駐屯地は規模が大きい。

街道沿いには人家が立ち並び、総督府があるためか道路はきちんと舗装され、歩道には街路樹が数メートル間隔で植えられロロ村とはまるで別の繁華な様子を見せていた。

パックの乗るムカデは歩道をあるく人々の目を引いた。親に連れられた子供が、甲高い声で叫びながら指をさす。

やがて総督府の建物が見えてくる。

白い大理石で表面を飾られた総督府の建物は陽射しをまぶしく反射していた。

総督府の建物には翩翻とコラル帝国の帝国旗がひるがえっていた。建物の入り口近くでは軍の兵士が数人、見張りの任務についている。

建物の前には数台の軍の乗り物が駐車していた。

どうやら蒸気機関で動く乗り物らしく、いつでも発進できるようボイラーの火は落としておらず、後方の煙突からはもくもくと黒い煙が噴きあがっている。二、三人の兵士たちが暖を取るためか、ボイラーの近くでたむろして背中をまるめていた。

そこへムカデを運転して近づいたパックは兵士らの注目を浴びることになった。

「停まれ！　貴様、何者だ?」

銃を構え、兵士らがわらわらと駈け寄ってくる。

パックは叫んだ。

「大変なんです！　ロロ村で魔王が暴れて、ミリィが攫われた！」

パックの説明に、兵士たちはぽかんとした表情になった。

「魔王？　なんだそりゃ？」

「だからヘロヘロという封魔の剣に封じられていて……」

必死に説明するパックに、兵士たちは胡乱な表情になった。

「ともかくこっちへ来い！」

銃をつきつけられ、パックはムカデから降り立った。

背中に銃口を押し付けられたまま、総督府の建物に連れて行かれる。
「怪しいものじゃないですよ！　とにかくロロ村で大変なことが……」
だが兵士たちはパックの言うことなど耳にかす様子もなく、建物の奥へと引っ張っていく。
「なんだ、その小僧は？」
連れてこられた部屋の向こう側で、なにか書類仕事をしていた軍服の男が顔をあげ叫んだ。
まるで数日間絶食していたと思われるほどげっそりと頬がこけ、目の下には黒々とした隈ができている。その割りに身動きは機敏で、パックはこの軍人はもとからこういう顔つきなんだと思った。
肩には中佐の徽章があった。
「はあ、ロロ村の住民だと申しておりますが、なにやら妙なことを口走っております」
ロロ村……？
と、中佐は首をかしげた。
「ああ、この近くの村だな。で、何があったというんだね？」
これはパックに向けての問いかけだった。
パックは勢い込んで、いままでのことを事細かに説明した。
ふむふむ、と一応親身になってパックの説明を聞いていた中佐だったが、説明が終わるや否や首をふった。
「魔王だの、魔法だの昼間からこの子供は酒でも呑んでいるのか？」
はっ、とパックを連れてきた兵士はかしこまった。
「いいえ、その様子はありません。ただ妙な乗り物で近づいてきたので、怪しいと思い停止させたのであります」
「妙な乗り物？」
「はあ、ムカデのような足が六対ついておりまして……」
「見せてくれ」
中佐は立ち上がった。

パックを連れてふたたび表へ出る。
建物の前に停止しているムカデに気づき、呆然となった。
「これは……どこの兵器だ？」
「ニコラ博士の発明だよ！」
「ニコラ博士？」
そこでパックはニコラ博士のことも説明するはめとなった。
中佐はうなずいた。
「科学省長官のテスラ博士に兄がいるとは聞いていたが、そうかロロ村にいたのか……」
「科学省長官？」
「そうだ、わがコラル帝国が誇る科学省の長官をなさっておられる。いままで様々な兵器を開発、発明なさった偉大な科学者だ」
そう言うと中佐は胸を張った。
ぽん、とパックの肩に手をやる。
「ともかくお前の村でなにか事件が起きたと言うなら、調査官を派遣するから調書はその後でとろう。ミリィという女の子が行方不明となれば、わがほうで捜索人として手配するからな」
駄目だこりゃ、とパックは肩を落とした。
まるで信じてくれない。
中佐は腰に両手をあて、にやにやしながら続けた。
「とにかく、魔法だの魔王だの夢のようなことを言うのはよしなさい。まあ、テスラ博士の兄の知り合いだと言うなら怪しいものではなさそうだが、頭がおかしいと思われるのがいやだったらあまり法螺はふかないほうが利口だぞ」
パックはムカデに乗り込み、アクセルを踏み込んだ。そっぽをむき、唇を噛みしめた。
こうなったら、誰にも頼むもんか！
しゅっ、しゅっと蒸気を吹き上げ動き出したムカデに中佐は目を丸くした。
「さよならっ！」

叫ぶとパックはミリィの連れ去られた北の方角へ向けてムカデを走らせていった。

「そこまで行ったんだけど、ムカデが動かなくなってあとは歩いて帰った。博士、すみませんでした。勝手に機械を動かして」

パックの説明にニコラは首をふった。

「いいのさ。あとで取りに行こう。たぶん、燃料切れだ」

メイサの顔を見てパックはすまなそうな顔になった。

「叔母さん、ごめん。ミリィは見つけられなかった」

おお！　と、メイサは顔を手で覆った。その肩がふるえている。

ホルンは顔をおおきな手の平でぬぐった。

「帝国軍の連中に相談したというが、信じてはもらえなかったというのか？」

パックはうん、とうなずいた。

「あいつら、てんで信じてくれなかった……」

おれだって信じられれん、とホルンはつぶやいた。

パックが見上げると、ホルンは肩をすくめた。

「すまん、なにしろおれが外に出たあとはすべてが終わっていたからな」

「なにがあったのか、わしには判らんよ。いまでもそうだ」

そう言って、ニコラは頭をなんどもふった。

ホルストは噛み付くように叫んだ。

「魔王が復活したのじゃ！　あんたはそれをじぶんの目で見たのじゃないのかね？」

のろのろと目を上げ、ニコラはホルストを見た。

「魔王？」

「そうじゃ！　おそれていたことがおきた。あのヘロヘロは魔王のなれのはてじゃ。千年間、封魔の剣に封じ込まれていたのじゃが、その封印をパックが解いてしまった……。千年の眠りは魔王をただの赤ん坊にしてしまったが、ギャンの悪の精神にふれ、本来の魔王

が復活したのじゃろう」
「おれのせいで……」
パックは拳を握り締めた。
ホルストは首をふり、やさしく声をかけた。
「違うな、パック。お前の責任ではない。魔王を復活させたのは人間の中にある邪悪さなのじゃよ。思うに、わしらがいかにヘロヘロを悪に触れさせないよう気をつけても、いずれ邪悪に染まることはわかっておったことじゃった……」
「でもあいつの封印を解いたのはおれなんです」
「そこじゃ。問題は」
ホルストはぐっとパックに指をつきつけた。
「なぜ、お前がヘロヘロを剣から解放させることになったのか？お前が剣に触れたとき、なにがおきた？　パック、その時のこと覚えているか？」
パックは眉をひそめ、考え込む表情になった。全員がパックの言葉を待っている。
「あのとき……剣に触れたとき、なんだか懐かしい気分になった……変なこと言うようだけど、あの剣がおれのもののような気がして……」
ホルストは腕をくんだ。
「やはりそうか。お前は伝説の勇者の生まれ変わりなのじゃ」
全員、ホルストの言葉にあっけにとられた。
ホルンがつぶやいた。
「パックが勇者の生まれ変わり？」
「そうじゃ。勇者はこのロロ村に骨をうずめた。いずれ魔王が復活することを予測しておったのじゃろう。
魔王は封魔の剣で封印されたが、滅ぼしたわけではなかった。いずれ魔王を真に滅ぼすための機会を待ったのじゃ。
勇者の子孫はその使命をうけ、剣に触れる儀式をつくりだした。
やがてその儀式は勇者に感謝するということに変わったが……し

かし勇者の血は脈々とこの村に流れておった。おそらくパックは勇者の血をもっとも濃く受け継いでおるのじゃろう。そのため、封魔の剣は魔王を解放したのじゃ。勇者の子孫によって、こんどは完全に魔王を滅ぼすためにな。

パック、お前は魔王を滅ぼすための使命を受けたのじゃよ」

「そんな、おれ……まさか……！」

全員の注目をあび、パックは真っ赤になった。

ホルストはふたたび口を開いた。

「気の毒にな、パック。しかし魔王を解放してしまったことは事実じゃ。そのことに正面から向き合うべきじゃ」

「でも、どうすればいいんです。どうすれば、おれが魔王を滅ぼせるんです？」

「封魔の剣じゃ！　あれは勇者が魔王を滅ぼすため鍛えあげた剣じゃ。おそらく、あれが鍵となる」

「しかし剣は折れてしまった」

ホルンが壁にかけられた剣を見てつぶやいた。

ホルストはうなずいた。

「そうじゃ、剣は折れてしもうておる。しかし、剣をふたたび鍛えなおす方法があるはずじゃ。パック、お前はそれを見つけなくてはならん」

「パックにそんな責任が？」

ホルンはホルストを見つめ、怒ったようにささやいた。

ホルストは肩をすくめた。

「しかたがない。すべては宿命なのじゃよ」

全員、黙りこんだ。みなの想いは伝説の勇者におよんでいるようだった。

やがてパックは顔をあげ、口を開いた。

「父さん、メイサ叔母さん。おれ、その責任を果たすよ。おれ、魔王を滅ぼして見せる！」

「パック……」

なにか言いかけたが、ホルンは口を閉ざした。
パックはメイサを見て言葉を重ねた。
「そしてミリィを連れ戻してあげる。叔母さん、おれ、なんとしてもミリィを取り戻すよ！」
メイサの目に涙があふれた。
「ありがとう、パック……」
ホルンが立ち上がった。
「今夜はもう、遅い。これからのことは、明日また話し合おう。良い知恵も、こんな暗いなかでは浮かばんからな」
メイサはうなずき、ホルンにうながされ家へ帰っていった。
ニコラも立ち上がり、ホルストにむかって話しかけた。
「それがいい。わしはホルストさんに少々聞きたいことがあるんじゃ」
「わしに？」
「そうじゃ。いまでもわしは魔王とか、魔法とか信じられないが、今日起きたことは起きたことで事実を検証する必要がある。あんたには悪いが、それを確かめるため協力してもらいたい。それがパックのためになるからな」
「わかった。協力しよう」
立ち上がったニコラ博士は奇妙な笑い顔になった。
「しかしあのテスラが帝国の科学省長官だとはな……今日、最大の驚きじゃよ！」
ふたりして出て行くとき、ホルストはパックをふり返った。
「パック。早まった行動をしてはならんぞ。すぐにミリィを探しに行こう、など考えてはおらんじゃろうな？」
ホルストの言葉は図星だった。
その顔を見て、ホルストはうなずいた。
「お前の気持ちもわかるが、少し待っておくれ。良い考えが浮かんだら、知らせるから、それまで待つのじゃ。よいな！」
パックはうなずいた。

全員出て行ったあとで、パックはずしりと肩にのしかかった責任の重さに打ちひがれる想いだった。

魔王を滅ぼす？

このおれが……？

決意（前書き）

ミリィを探しに旅立つことを決意するパックだったが……。

決意

翌日、村の被害はじょじょにあきらかになっていった。
死人は出なかったものの、火災にあった家屋、落雷で掘り返された地面などまるで戦争にあったかのようであった。
中佐の約束どおり、調査官が昼ごろ派遣され村人たちから話を聞いて回っていた。
そしてミリィがメイサの娘であり、確かに行方不明と判ると、しかめつらしい顔つきで捜索人名簿にのせるから心配するなと、これはメイサに請合った。
メイサはちからなくうなずいた。
それを見て、パックはこんな役所仕事ではミリィの行方が判るはずがないとますます確信していた。
村人たちは広場にあつまり、これからどうするのか顔を見合わせた。
そこにコールがやってきて、事件の真相を話しはじめると村人たちの怒りはギャンに向かった。
「あいつが魔王を復活させたってことか？」
「悪い奴だと思っていたが、それほどとは」
「そういえばこんなことがあったぞ……」
全員、ギャンの悪行の数々を思い出しはじめていた。
そこへサックが姿を現した。
「ひどいことになっておるな……。わしの村がこんなことになるとは……。なんでもホルンの息子のパックが魔王を解放したということだが――」
サックを見る村人の視線は冷たかった。その視線に、サックはけげんな表情になった。
「どうした、村の衆？　さあさあ、村がこんな状態になったんだ。さっそく道路の修復や、家の修理をせずはなるまいて。費用は貸し

てやるからな。金を借りたいものは、わしに言ってくれ。利息はいつもの通り……」

喋りだしたサックの口はしだいに重くなっていった。

「なんだ、その目は？　わしの言っていることがわからんのか？　おい、なにか言え！」

ひとりの村人がずい、と前に出るとサックの顔を睨み叫んだ。

「あんたの息子の責任についてだ！」

「ギャンがどうしたというのだ？」

「そのギャンが、魔王を復活させたということだよ！」

「なんだと？　馬鹿なことを言うな！　魔王を呼び出したのはパックではないか」

「その魔王に悪をふきこんだのはギャンだ！　ギャンの邪悪さが、魔王を復活させたというぞ」

サックの顔色は赤くなったり青くなったりめまぐるしく変化した。ぱくぱくと口だけが動くが、言葉にならないようだ。

ひとりの村人が声をあげた。

「あんたはいままで村長として息子のギャンを放任していたな。それがこの有様だ！　もう我慢ならん。いますぐ辞任するべきだ」

そうだ、そうだという声があがる。

サックは怒りを顔にのぼらせた。

「く……、わしがどんなに村につくしてきたか……知らんわけではあるまい」

「あんたのやったのは金を貸しただけじゃないか。それも法外な利息をとってな！」

「そうだ、おれたちこれからボーラン市に出かけてあんたの金貸しのことを報告しようと考えているんだ。あんたの利息の利率、ほんとうに公正なものかどうか、裁判所で判断してもらうことにする。それに確か金を貸すにはちゃんとした資格が要るというぞ。サック、あんたがそんなもの持っているなんていままで聞いたことないがね」

進退窮まったサックはきいーっ、という悲鳴のような、奇妙な声

をあげた。
ものも言わずくるりと背を向けると、一目散に自宅を目指す。
取り残された村人は一時の興奮がさめ、どうしようという表情になった。
「どうする？　あんなことつい言ってしまって……」
「だれかボーラン市へ出かけるって言ってたな。おい、言ったのはトカフ、あんだだろ」
「おれが？　いや、違う！」
トカフと呼ばれた男は激しく手を動かし、かぶりをふった。
「だれか相談するには……」
「ホルンがいい！」
ひとりが声をあげた。
「そうだホルンなら……」
全員、顔をあわせ頷きあう。

「待ってくれ、みんな！　いきなり押しかけてきてそんなこと相談されても困る」
家の前に集まった村人にホルンは声をあげた。
ひとりが前へ進み、口を開いた。
「しかしこうなったら、あんたしかいないんだ。頼まれてくれよ。このままじゃ、サックが何をしでかすか……」
そうだそうだという同意の声に、ホルンは困ったように髭をしごいた。
ホルンは家の中をふりかえった。
キッチンでパックがひとり、食事をとっていた。もくもくとパンを口に運び、ミルクを飲む。村人たちの騒ぎには吾関せずというところだ。ホルンの目がきらめいた。
かれは村人たちのほうへ顔をむけ、うなずいた。
「わかった、近くボーラン市に行って、話をしてみようじゃないか」
わっ、という喚声があがった。

ホルンは両手をあげ、騒ぎになろうとするのを押さえた。
「そういうわけだから皆さん、ここはひとつ家に帰って静かに待ってもらえないか？」
「あんたが引き受けてくれれば安心だ」
村人たちは愁眉を開き、笑みを浮かべつつ帰っていった。
ようやく家の前が静かになって、ホルンはほっとため息をついた。
家の中にもどり、パックの前にすわった。
「パック」
ん？　と、パックは顔をあげた。
「なに、父さん」
「お前、家を出るつもりだろう？」
あわててパックは食べ物を飲み込んだ。
「なんだい、出し抜けに」
ホルンはにやっ、と笑った。
「隠さんでもわかる。お前のことだ、おれに黙って家を出てミリィを探しに行くつもりなんだろう」
「だからなんだい！」
パックは顔を赤らめ、食卓を平手でたたいた。
「焦るな！　おれはお前がミリィを探しに行くのを邪魔しようというんじゃない。なにしろお山に登って、ご先祖の剣に触れてきたからな。お前は大人だ。おれがどうこう言って止めるわけにもいかん」
意外な成り行きにパックはきょとんとなった。
「だが黙って出て行って、あてもなくさ迷うわけにもいかんだろう？　なにか探すあてがあるのか？」
言われてパックは黙った。
そう言われると弱い。
とにかく北へ向かって旅立つつもりだったからである。
「だからな、まずおれと一緒にボーラン市に行ってみないか？」
「ボーラン市？」
「そうだ、帝国の首都だ。人も集まるし、情報も集まる。北の方向

へ向かったあの光を見ている人間も多いはずだ」
「そうか！」
パックの顔に喜色が浮かんだ。
「そういう人を探して聞けば……」
「そうだ、もっと詳しい情報が手に入るかもしれない。さっき村の人たちがおれにボーラン市に行って、サックのことについて調べてくれと頼んできた。いい機会だ。サックの事のついでに、ミリィの行方について手がかりが得られるかもしれん。
だからちょっと待て。おれの出発の用意ができるまで」
パックは判った、とうなずいた。

決意（後書き）

次回ではいよいよニコラ博士のマリアが始動します！お楽しみに。

マリア（前書き）

ニコラ博士の実験室で、マリアに命を吹き込む実験が行われる。その実験に付き合うことになったパックだった。

ホルンとパックが、ボーラン市へ行くと言う噂はぱっとひろまった。

パックは村のあちこちでいつボーラン市へ行くんだと質問攻めに合った。

だからニコラ博士からおなじ質問を受けたときうんざりして言った。

「だから、まだ判りませんよ。父さんはなにも言わないし……そうだ、隣町に図書館があるってそこに出かけたな。そして町のみんなにいろいろ訪ねて歩いているな……」

ニコラ博士はうなずいた。

「そりゃあ、調べ物をしているんだ。ボーラン市にいって、市の担当者に会って話をするため証拠を集めているんだろう。そうか、今すぐというわけではないのだな?」

「まあね」

ニコラ博士の家である。

パックはいつもの地下室でニコラ博士と話していた。

ニコラ博士はがりがりと髪の毛をかきむしりながら言った。

「それなら実験を手伝ってくれ! いまならうまくいきそうなんだ」

パックは地下室の金属の少女を見やった。

「あれですか?」

「うむ」

ニコラ博士はにやっと笑った。

パックの顔は興奮でかがやいていた。

「そうかあ! ついにやるんですね!」

「やるか?」

「やりましょう!」

ふたりは勢いよく立ち上がった。

パックはボイラーの蓋をあけ、中へ石炭を放り込み火をつけた。
やがて温度が上昇し、蒸気圧が高まっていく。
ふとニコラ博士はパックの顔を見てつぶやいた。
「そう言えば、お前まだこのマリアの身体の中は、見たことなかったな」
「ええ、そうです」
「見たいか？　ん？」
博士がこう言うときはじぶんが見せたいときである。心得ているパックはにやりと笑ってうなずいた。
「ええ、ぜひ！」
そうかそうか、と相好を崩した博士は金属の少女の身体のあちこちを外し始めた。
人間そっくりの人形の前半分がぱっくりとはずれ、中身がむきだしになる。
パックは目を瞠った。
「すごいや……」
人形の体内にはぎっしりと複雑そうな機械が埋め込まれていた。その配置は、どことなく人間の内臓を思わせる。
胸の部分には肺を思わせるふたつのタンク、心臓そっくりの形のポンプ、腹部にはうねりくねったパイプが詰め込まれている。
「ねえ、博士。このなかに詰まっている機械はなんのためにあるんです。何の役にたつんですか？」
「わしが開発した超小型の蒸気機関じゃよ。この胸にあるのはボイラー、こっちはピストン、こっちは水タンクじゃ！　燃料を入れれば独立して動力を供給できるようになっている」
博士の説明にパックは目を輝かせた。
しかしニコラ博士は沈痛な表情になっていた。
「今のところロボットは人間のように動き回ったり、考えたり、話すことはできん。そんなことをどうやって実現したらいいのか研究の端緒もつかない状態なんじゃ。しかしその日のくるまで、ロボッ

トの身体の中に将来人間と同じような機能をする機械の雛形をいれておくことは必要だと思ったのだ。

蒸気機関と人間の内臓は似ても似つかないが、生命活動であるということでは同じ意味を持つ。人間に流れている血液が蒸気であり、ボイラーは肺、ピストンは心臓という具合にな。

ほれ、これを見い」

そう言うと博士はロボットの頭の外板を外して見せた。

頭の中には脳に似た金属のスポンジが詰まっている。

「これはイリジウムのスポンジなのじゃ。いつの日か、人間の脳と同様な機械が発明された日には、ロボットの頭部にはこういう形で装着されると思っておる。ほれ、スポンジからはこのように導線が繋がっておるじゃろう？　これが人間で言うなら神経にあたるものじゃ」

博士は説明を終えると、ロボットの外板を丁寧に元に戻した。それを終えると、天井を仰ぎあこがれるような眼差しになる。

「いつの日か……ロボットは自分で考え、行動し、人間の友になる……その日を目撃することはできんだろうが、けっして夢物語ではない！　なあ、パック。そんな日が早く来るようお前も協力してくれよ」

はい、博士とパックは答えた。

「よし、それでは始めるか！」

ニコラ博士は地下室をあちこち飛び回り、そこらのスイッチや、ボタンをつぎつぎと動かした。

蒸気のパイプを何本も金属の少女の身体に接続していく。

しゅうしゅう……ごとごと……。

地下室に生気が吹き込まれる。

送り込まれた蒸気が、少女の身体のあちこちから噴出し、白い湯気をあげている。

パックはニコラ博士に声をかけた。

「博士、それは？」

ニコラ博士は見慣れない装置を地下室へ持ち込んでいた。
「発電機じゃよ！　この前の実験では電力という要素が抜けていた。あのロボットを始動させるためには、電力という要素が必要だと研究の結果判ったんじゃ！」
博士はダイヤルを一杯にまわす。
ぴゅうぴゅうという不吉な音を立て、装置の天辺にある針金にばりばりという紫電が飛び交った。
それを見てパックは背筋に寒気をおぼえた。
「だ、大丈夫ですか……」
「わしを信じろ！」
ニコラ博士は陽気に叫んだ。
蒸気圧が高まっていく。
パックは計器を覗き込み、つぎつぎと変化する指針を読み上げていった。
「圧力七十パーセント……八十パーセント……九十……博士！　もうすぐ百です！」
「百五十パーセントまであげろ！」
「そ、そんな……無理ですよ！」
「いける！　わしの計算では百五十七までは安全のはずなんじゃ！」
首を傾げつつそれでもパックは博士の指示通り圧力をあげ続ける。
ごとごとごとごと……。
まるで地震のように地下室は揺れ始めた。
かたかたかた……。
台の上の金属製の少女像がこまかく振動し始めていた。金属の身体と台が触れ合う音が、かたかたという音を立てている。
ニコラ博士は目を一杯に見開いていた。
びゅーん……！
発電機の電力が上昇していた。
ぴしっ！
電光が飛び交い、地下室のむき出しの金属に紫電が放たれた。

ぱしっ！
ぱしっ！
ばりばりばりばりっ！
ふたりの髪の毛が静電気を受けたように逆立っている。緊張と興奮で、ふたりはそのことにまったく気づいていない。
ころはよし、とニコラ博士は発電機から伸びているコードを掴んだ。
コードの先端には端子がついていた。
それを台の上に横たわっている少女に近づける。
おおきく息を吸い、博士は端子を少女の金属の肌にくっつけた。
びりびりびり！
「うおおおおっ！」
コードを掴んだまま博士は絶叫した。
数万ボルトの電流が流れ、そのショックで博士は跳ね飛ばされていた。
「博士っ！」
パックは叫んでいた。
博士はというと、白目を剥き、完全に気絶している。
駈け寄ろうとしたパックであったが、ふと台の上の少女に目を留めた。
かたかたかた……。
彼女の全身はこまかく振動していた。
パックは目を見開いた。
少女が起き上がろうとしていた！
ゆっくりとその上体が持ち上がる。
ぱん！
ぱん！
豆がはぜるような音を立て、彼女の全身に繋がれているパイプが弾け飛んだ。
ばしゅーっ！

彼女の全身から白い蒸気が湧き上がる。
その蒸気につつまれ、何も見えなくなる。
どうしよう、とパックは迷った。
博士はもちろん心配だ。
しかし彼女をこのままにしていいのか？
ごとり……。
固いものが床に触れる音がして、金属の少女が台の傍らに降り立っていた。
なんと彼女はじぶんの足で立っていた！
「きみ……」
パックはおもわず口を開いていた。
いってからしたうちをした。
あいてはただの金属の少女像である。
人間ではない。
返事など期待していなかった。
と、少女の目が見開かれた。
パックは驚いた。
彼女はパックをじっと見つめている。
そして声がもれた。
「あたし……」
たしかに彼女は口をきいていた。
そう言って両手をあげ、じぶんの顔にふれる。
「あたし……だれ？」
パックはニコラ博士が名づけた少女の名前を思い出した。
「マリアだよ」
彼女は顔をあげた。
「マリア？」
「そう、きみはマリアだ。そしておれはパック」
「パック？」
マリアは首をかしげた。

「そう、よろしくな」
パックは手を差し出した。
マリアはその手を見つめ、自分の手を伸ばした。
ふたりの手が触れ合った。彼女の手は金属なのに暖かい。蒸気のせいだ。パックはぼんやりと思った。
マリアはパックの手を握った。
「痛え！」
パックは悲鳴をあげていた。
マリアの握ったちからは思ったより強く、パックの手は万力につかまれたような痛みを伝えてきたのである。
怯えたようにマリアは手を引っ込めた。
「大変、あたし傷つけてしまった！」
大丈夫だよとパックは無理に笑顔を作って見せた。
そのときニコラ博士が目を覚ました。
ううん、とうなり首をふる。
パックはニコラ博士のところへ跳んで行った。
「大丈夫ですか、博士？」
ぶるっと顔を左右にふり、ニコラ博士はずれた眼鏡を調整して目を見開く。
ぼんやりとした視界が戻ったのか、かれは立ち上がっているマリアを見た。
「あれは……」
パックはおおきくうなずいた。
「そうです、博士！　成功です！」
むう、とひと声唸ると博士は立ち上がった。
つかつかとマリアに近づくとまじまじと見つめた。
「信じられん……」
パックは首をかしげた。
「どうしてですか？　成功したんですよ。マリアはこうして立っているじゃないですか」

「それが信じられんというのだ。わしはマリアを動かすための研究を続けてきた。が、このように自立させるまでは考えておらん」

パックはさらに判らなくなった。

「どういうことです？」

ニコラは腕をふりまわした。

「わからんのか！　このロボットが何のささえもなく立っておることを。二本の足でだぞ！　とても信じることはできん！」

パックの顔色を見てあきらかに理解していないことを悟り、博士はため息をつき説明をはじめた。

「お前は自分の足で立っているからそれがどんなに困難なことかわからんのだ。いいか、人間が二本の足で立つと言うことは大変なことなんだぞ。それをなんの意識もない、人間の姿に似せたロボットにさせることはとても出来んことだ」

「でもマリアは話します」

「なんじゃと？」

博士は大声をあげた。

「マリア」

そう言ってパックは彼女にむけ指を立てて招いた。

マリアは無言でパックの側に立った。

「きみの名前は？」

「マリア」

彼女の声にどうです、とパックは博士を見た。

博士は卒倒しそうだった。

「こ……こ、こんな馬鹿な！　ありえん！」

「でも彼女は博士の研究でしょう。自分で言ったじゃないですか。いずれロボットは人間と同等の知能を持ち、会話するようになるって」

「未来の話しじゃ！　遠い、未来ならそんなこともありうるじゃろう。じゃが、いまではない。わしはその未来のため、基礎研究としてロボットをとりあえず蒸気のちからで動かす研究をしていたのだ。

今日できるのは彼女が自分で身を起こすくらいのことじゃった。それだけでも十分成果があると考えていたんじゃ。自分で話すなど、わしの研究の範囲を超えておる！　こ、こやつには知能がある！」

パックはぼう然となった。

「それじゃマリアは？」

「わしの研究の成果ではない。それだけは確かだ！　第一、人間がどうやってものを見、考えるかなんて誰もわからん。蒸気のちからで……」

そこで博士は口をあんぐりと開けた。

蒸気のちから……とつぶやく。

「そうだ、そうかもしれん……それならホルストの身の上におこったことも説明がつく……」

ぶつぶつつぶやくとポケットからメモを取り出しペンを走らせた。もうパックとマリアのことも念頭から消えているようだ。

どうしたものかとパックはぼんやりと立っていた。

と、地下室の階段の上から人影がさした。

見上げるとホルンの顔と目が合った。

「父さん……」

ホルンはうなずき、口を開いた。

「お前を探していたら、博士の家に行ったと聞いたものでな……。おい、明日出発することになったぞ！」

パックは声をあげた。

「ボーラン市にかい？」

そうだ、とホルンはうなずいた。

ひと飛びでパックは階段を駆け上がり、叫んだ。

「じゃ、ミリィの行方を捜しに出かけられるんだね？」

ホルンはうなずいた。

が、ちょっとパックの背後を見て声をあげた。

「パック、お前の後ろにいるのは……？」

え？　と、パックは背後をふり返る。

マリアがすぐ後ろにぴったりと寄り添っていた。
「マリア……きみ？」
ん？　と、ニコラ博士が顔をあげた。
パックはマリアにニコラ博士のほうを指さして見せた。
「きみはニコラ博士のところへ戻るんだ」
マリアはゆっくりとかぶりをふる。
「どうしてさ？　きみを作ったのはニコラ博士だぞ！」
「わたしはパック様にお仕えします。そう決まっているのです」
「ええっ！」
パックは驚いて声をあげていた。

博士の一階の居間で、パック、ホルン、マリアは机を囲んで椅子に腰をおろしていた。
博士の工夫したちいさなストーブには湯沸しが載っていて、湯がたぎっていた。
ニコラ博士は手ずから器用に湯沸しから湯をポットに移し、紅茶を淹れていた。
「パックは砂糖が三つとミルクたっぷりだったな。ホルンさんあんたはどうだね？」
「砂糖はいらない。ミルクだけ、ちょっぴりいれてくれればいい」
「ふむ。わしは砂糖もミルクもたっぷりいれれるのが好きでな……マリア、お前はもちろん飲まんだろうな？」
そう言うとひとりくっくと笑い出す。どうやらひどく面白い冗談を言った気になっているらしい。
すっかり用意ができるとニコラ博士はトレーに紅茶を揃えて持ってきた。
居間に紅茶の香りがただよい、三人は黙って啜った。
「どうもわしの思いもかけなかった出来事がおきたらしいな」
ニコラ博士が宣言した。
パックとホルンはじっと博士の次の言葉を待っていた。

博士は首筋に両手をあて、くきくきと首の関節をならしていた。
やがてぽんと両手を膝に戻し話しはじめた。
「わしはずっとロボットの研究を続けておった。もちろん、いずれロボットは人間と同じように考え、行動し、やがては人間のもっとも役に立つ存在になると思ってのことだ。しかしそれが実現するのは早くても数十年後、もしかしたら百年後になるかもしれんとも思っていた。
しかしいまのマリアはわしの思っていないようなことになっている。なんとこのマリアは自分で考え、喋り、行動する。なぜこんなことがおきたのか？」
ニコラ博士は口をひき結んだ。
その顔色がじょじょに赤くなった。
つぎに言い出したときはいかにも言いたくなさそうな表情になっていた。
「これは……もう、魔法としか言いようがない……！」
博士の顔は苦渋そのものだった。
「こんなこと言うのは科学者として断腸のきわみじゃよ！　なんと、わしの口から魔法などという言葉が出るとはな！」
ホルンが口を開いた。
「どうしてです、博士。魔法がどう、この件に関わってくるんです？」
「この空中には魔法があふれておる！　パックが封魔の剣にふれ、あのヘロヘロと言う魔王を解放した瞬間から、魔法が蘇ったのじゃよ！　それしか考えられん。マリアの身におきたのはその結果なんじゃ！
パック、ヘロヘロが現れてからホルストの魔法が急に強くなったと言っておったな。あのときから世界には魔法があふれたのじゃろう。おそらく、ヘロヘロは魔法のちからの源なのかもしれん」
ぼくが……と、パックはじぶんの顔を指差した。そうだ、そう考えるとホルスト老人の魔法のちからが増したのも説明がつく。

「マリアを設計したときわしは意図的に人間の臓器を模した器官をその内部に配置した。まあ将来の設計のための雛形としてのものじゃが、偶然にも本物の器官として働きはじめることになったのじゃ。魔法の中に相似の法則というのがある。つまり似たものはおなじ働きをする、というものじゃな。

たとえば心臓の形に似た野菜は、人の心臓の働きを強める薬草になるという言い伝えじゃよ。

マリアの中にあるものは人間の臓器に似せた器官じゃ。したがって似たものは同じ働きをするという法則から、人間とおなじように考え、行動するちからが吹き込まれたのじゃろう。わしはそういった魔法のちからの源を”魔素”と呼ぶことにした」

ホルンはあたりを見回した。

「このなにもないところにも”魔素”というのがあるんですか？」

博士はうなずいた。

「そうじゃ。しかもどうやらこの”魔素”のちからは蒸気が加わることによって増加するらしい。わしはちょっとした実験でそれを確かめてみた。

マリアの中に吹き込まれた蒸気のちからによって増加した”魔素”のちからで、彼女は人間と同じように行動できるようになったかもしれんな。

なあ、マリア」

と、博士はマリアに向け優しく話しかけた。

マリアは博士を見た。

「お前、パックに仕えると言ったな。なぜだい」

マリアはちょっと小首をかしげた。

「わかりません。ただそうしなければならないと思っただけです」

ふうむ、と博士は腕を組んだ。

じろりとパックを見る。

パックは首をすくめた。

「わしが気絶している間に、パックがマリアに話しかけた……そう

じゃな？」
　はい、とパックはうなずいた。
「それが原因なのじゃろう。おそらく、雛鳥が最初に見たものを親と思うように、最初に話しかけられた人間にしたがうようになっているのかもしれん」
「それじゃマリアは……？」
　パックはマリアを見た。マリアはパックをじっと見つめている。
「そうじゃ！　マリアは動き出したその時からパックに従うよう運命付けられているのじゃ」
「そんなの……」
　パックは困惑した。
　これからミリィを探す旅に出なくてはならないというのに、こんなの連れては行けない！
　マリアの存在は、どう考えても重荷としか思えなかった。
　くすり……と博士は笑った。
「あきらめろ。わしをさしおいて、話しかけたからこうなったのじゃ。マリアはもう、お前の責任のもとにある。彼女を頼むぞ。それに彼女は厄介だけではないかもしれん。もしかしたら、お前を助けてくれることになるかもしれんしな」
　そうかなあ、とパックは天井をあおいだ。
　ニコラ博士はホルンを向いた。
「ホルンさん。ところで明日、ボーラン市に出かけるそうじゃな？」
「ええ、まあ」
「わしも一緒に行くよ」
「あなたが？」
　ホルンは居住まいを正した。
　ニコラはうなずいた。
「ああ、こうなったらマリアはパックについてゆくじゃろうし、わしも彼女については観察の機会を無駄にしたくはない。ボーラン市へ行く途中でのマリアの行動を観察することによって、これからの

研究の道筋が判るかもしれんしな。
パック、いいな？　わしも一緒に行くぞ」
へっ、とパックはうなずいた。しかたない。博士がこうと言い出したときは決して後には引かないことを知っていた。
ホルンは困ったように顎をかいていた。

旅立ち（前書き）

いよいよパックとホルンがボーラン市に旅立ちます！

旅立ち

ニコラ博士の家を辞去すると、マリアは当然のようにパックについて歩いてくる。
真鍮の身体が陽射しにきらめき、村人たちの好奇の目が注がれていた。
「パック、その女はいったいなんだ?」
話しかけてきたのはコールだった。あいかわらず目ざとい。
「ロボット、っていうんだ。名前はマリアだ」
パックが答えると、コールは目を丸くしてついてくる。
「なかに人が入っているのか?」
「いいや。全部機械だよ。ニコラ博士の発明なんだ」
パックが説明してやるとすげえ、すげえと何度もつぶやきながらじろじろ見つめる。
「まいったなあ……」
パックは困りきっていた。
あんなのがくっついてこられたのでは、目だって仕方がない。
「なかなかスタイルがいいじゃないか」
隣で歩くホルンは面白がっていた。
その通りで、マリアはすらりと伸びた手足に、ほっそりとした身体つきの、スタイルから見ればかなりの美少女である。ただ、全身金色の真鍮で覆われているというだけだ。
ときどき蒸気が溢れるのか、頭のあたりから白い湯気がぽーっ、と噴き出している。近くによるとしゅっ、しゅっという蒸気機関の音が聞こえてくる。
「どこまでついてくるつもりなんだ?」
家の前でコールに向き直ると、かれはぺろりと舌を出した。
「悪い……でも、あんまり驚いたんでつい……じゃ、またな!」
そういい捨てるとさっさと村の方向へ駆けていく。あの分じゃ、

さっそく村の全員に触れ回るつもりだろう。
家に帰りつくと、ホルンはさっそく旅の準備をはじめていた。
大きなバッグに書類の束を何通も押し込み、食料をまとめて入れている。
その時、ドアをノックする音がした。
「パック、出てくれ」
ホルンに言われ、パックはドアを開いた。
「ご免よ……」
玄関に立っていたのは村長のサックだった。
背後にダルトを引き連れている。
ダルトはじろりとパックを睨んでいた。
ずかずかとサックは室内にあがりこみ、ズボンのベルトに両手の親指をさしこんで胸をそらした。
それに気づいたホルンは作業の手をとめ、向き直った。
「なんですかな？　村長」
「あんた、明日ボーラン市に行くそうじゃないか！」
サックは興奮したときにでるきいきい声で叫んだ。
ホルンはうなずいた。
「そうです。それがなにか」
「目的はなんだね？」
ホルンは黙り込んだ。
パックは一歩前に出た。
「ミリィの行方を探すんだ！　あのふたりが包まれた光の行方を知る人がいるかもしれないからね」
サックは目を細め、ちっちっと舌を鳴らしている。パックを無視してホルンに話しかけた。
「噂じゃ、あんたわしのことをいろいろ嗅ぎまわっているそうじゃないか？　村の人間にわしが貸した金の利率が高すぎるとか、わしが口利きして買い込んだ機械の納入先とか、それを都のえらいさんに訴えるつもりなんだろう？」

ホルンは両手をひろげた。
「だからどうだと言うのかね？　やましいところがないのなら、黙っていれば済むことだ。わしにどうせよ、と言うのだ」
「やめてもらいたい！　ロロ村はわしの村だ！　わしが丹精込めて、ここまで発展させた村だ！　あんたのような金棒引きのためにせっかくの平和をかき乱されたくはないんでね！」
ふうむ……と、ホルンはひと声唸った。
「やはり……噂は本当なんだな。あんた村長の地位を利用して村のみんなに……」
サックはかっとなった。
「やめろ！　どうしてもボーラン市へ行くのをやめないというのなら、わしにも考えがある」
「どういう考えなんだ」
するとダルトが一歩、前へ出た。
手に太い棍棒を持っている。
ぱしっ、ぱしっと手に棍棒を音をたてて鳴らし、するどく部屋を見渡した。
ホルンは緊張した。
ダルトはいきなり棍棒をふるうと、窓ガラスに叩き込んだ。
ぐわしゃーん、という派手な音をたて、ガラスが四散する。
「やめろ！　なにをする！」
ホルンは怒号した。
ダルトはにやりと笑った。
「やるかい？　一度あんたとやりあってみたかったんだ」
「いいだろう。外へ出ろ」
ホルンの言葉にダルトは喜色を浮かべた。
ゆっくりと家の外へ出る。後にホルンが続いた。
パックもあわてて外へ出た。
背後の気配にふり返ると、マリアがぴったりとくっついて来ていた。両手の拳を握り締め、軽く前傾姿勢をとっている。彼女はパッ

クにささやいた。
「あの男、危険ですわ！　わたしがホルンさまをお守りしましょうか？」
「やめとけよ。父さんに任せておけ」
マリアはうなずき、背をまっすぐにさせ見守る態勢になった。
家の前庭に、ホルンとダルトは向き合って立っていた。
ダルトは手に棍棒を持っている。ホルンは何も持っていない。
「なにか持てよ。手ぶらで戦うつもりか？」
「おれはこれでいい。なにか持たないと戦えないというなら、勝手にすれば良いさ」
この言葉にダルトはあきらかに動揺したようだった。
ちょっと考えていたが、やがてにたりと笑いを浮かべた。
「そうか。そっちがそう出るなら、おれはかまわねえ。あとで泣き言いうなよ！」
そう言うと棍棒をぶるーん、ぶるーんと振り回す。
うおーっと叫ぶと襲いかかった。
ぶん、と空気を切り裂いて正面から襲い掛かる棍棒を、ホルンはちょっと身をそらしてよけた。それを予想していたのか、ダルトは振り回した勢いでそのまま円を描くと棍棒を横殴りにしてくる。
さっとホルンは腰を引いてそれもかわす。
ぶん、ぶん、と音を立てて振り回される棍棒をホルンはただよけているだけだ。
どうするんだろう、とパックははらはらしていた。
棍棒を振り回すダルトの顔にじっとりと汗が浮かんできた。
その息が荒くなる。
「ち、畜生……よけるだけで、なにもしねえのかよ！」
焦っていた。
ホルンは黙ってよけているだけだ。
どん、ととうとうダルトは棍棒を地面におろしはあはあと肩で息をしていた。

ぐわぁり……、と棍棒を投げ出した。
「そうか、どうしても男らしく戦わないっていうなら……こうするまでだ！」
唇を噛みしめ、頭をさげて突進した。
ホルンはそれをステップしてよけると、さっと足を伸ばした。
足をからまれ、ダルトはおおきく両腕を振り回してよろけた。
あやうく転びそうになるところをふんばり、顔を真っ赤にして向き直った。
「野郎！　どこまでも卑怯なやつだ！」
叫ぶと拳をかため、殴りかかる。
その拳をホルンは手の平で受け止め、さっと手首をひねった。
「痛てててて！」
ダルトは絶叫していた。
あっという間にかれの手首は背中側に廻され、ホルンの手によってひねり上げられていた。
「離せ！　離せよお！」
喚く。
「そうか、離してやろう」
ホルンはそう言うと、さっと掴んでいた手首を離すとその背中をぽん、と叩いた。
わっ、わっとダルトは腕を振り回しつつとんとんと片足をあげて前へと進んでいく。
そのさきに立ち木があった。
どん、と正面から立ち木に衝突する。
顔をまともに打ち付けていた。
「……！」
顔の真ん中に真っ赤な打ち身の跡をつけ、ダルトはふらふらと左右に身体を揺らしていたが、やがてどう、とばかりに仰向けに倒れてしまった。
白目をむいている。

ぱん、ぱん、と手を叩きホルンはサックを見た。
「どうするね？　こいつは勝手に暴れて、勝手にのびちまった。わしの責任ではないよ。あんたが連れてきたのだから、あんたが連れ帰るべきじゃないかね」
サックは地団太を踏んで叫んだ。
「後悔することになるぞ！　わしに逆らうとどうなるか……それでもいいのか！」
「お帰り願おう……出発のため忙しいんだ」
静かなホルンの言葉にサックは怒り心頭に発していたが、やがて上目がちになって家から出て行った。
のびているダルトの横腹を蹴り上げる。
「起きろ！　この役立たず！」
うぐ！　とうめき声をあげ、ダルトは目を覚ました。
きょろきょろとあたりを見回していたが、ホルンの姿が目に入るとぎょっとなった。
サックの怒りの表情にばつが悪そうな顔になると、のろのろと身を起こす。
ふたりは無言で歩き去った。
ぱちぱちぱち……。
いきなりの拍手に、ホルンとパックは顔をあげた。
いつの間にか、家の周りに村人が集まり、拍手をしている。
ひとりが満面に笑みを浮かべ近づいてきた。
ブルンだった。
「やあやあ、ホルン。じつに鮮やかな手並みだな！　あのサックとダルトをぐうの音もだせないほど懲らしめるとは」
どうやらブルンの感想は村人たち共通のもののようだ。みな、うなずき笑いあっている。
ホルンは首をふった。
「いや、これが始まりだ。あとでサックがどう出るか……。明日、出かけた後みんな気をつけてくれ」

ホルンの言葉に村人たちは不安そうに顔を見合していた。
「それじゃ今日はこれまでにしてくれ。忙しいんでな」
その言葉に村人たちは我に帰ったようになり、ぞろぞろと自分の家へと帰っていく。
パックはホルンに声をかけた。
「父さん。いまのが解決法なのかい？」
パックの言葉にホルンは肩をすくめた。
「いいや。いまのは相手をあしらっただけだ。争いを解決するには、もっと複雑で骨の折れることを覚悟しなくてはな。とにかく、お前も旅の支度だ！」
ホルンはパックの肩をたたいた。
パックはふと思い出して口を開いた。
「父さん、あれ、どうする？」
パックの指さした方向を見てホルンは眉をよせた。
パックの指先は壁にかかっている聖剣をしめしている。
「そうか……あれがあったな」
すこし考え、うなずいた。
「やはりあれはお前が持つべきだ。ホルストも言っていたろう。あの聖剣をもとに戻すことが、魔王を封印する鍵だと。もしあのヘロヘロというのがその魔王だとすると、あれが必要なときが来るかもしれない。しかし大変な旅になるな。ミリィの行方を探すのと、聖剣を鍛えなおす方法を探るというふたつの目的ができたんだから」
しかしパックは答えた。
「ふたつともおれの使命なんだろう？　だったらやって見せるさ」
そう言って胸を張る。

翌朝、ふたりは旅立った。
日の光はまだ山の向こうに隠れ、あたりは暗い。
荷物の大部分を引き受けたのはマリアだった。
ホルンが荷物をまとめると、マリアは無言でそれを担ぎ上げた。

おい、それは……と抗議をすると、マリアは首をふった。
「いいのです。これくらい、軽く担げますから」
少女のようなほっそりとした姿態をしているマリアが、おおきな荷物を軽々と持ち上げているのは不思議な眺めだった。ちからをこめると、マリアの身体のあちこちからしゅーっ、と勢いよく蒸気が噴き出す。そのまま歩き出すと、しゅっしゅっと音を立て、内部からピストンが蒸気を押し出す音が聞こえてくる。
「そういえばニコラ博士はどうしたんだろう？」
パックがつぶやくとホルンは首をふった。
「博士のことはいい。旅立ちの時刻はべつに打ち合わせていないからな。どうしてもついてきたかったら、勝手に来るだろう」
そうか、とパックはうなずいた。
ドアを開け、外に出たふたりは思わず立ち止まった。
なんと家の前に村のみんなが勢ぞろいしていた。
「ホルンさん、頼むよ。市の担当者に、ちゃんと話してくれ」
ひとりの村人が声をあげた。
ホルンはうなずいた。
「ああ、任せてくれ」
と、隣りのミリィの家の玄関のドアが開き、メイサが顔をだした。眠っていないのか、真っ赤な目をしてくまができている。
「パック……」
叔母さん、とパックはメイサのもとへ走っていった。
メイサはじっとパックの顔を見つめている。
「叔母さん、かならずミリィを連れてかえるから、心配しないで」
パックの言葉にメイサは両手で顔をおおった。
「有難う……有難う……」
それ以上言葉をかけることができず、パックはくるりときびすを返して待っていたホルンのもとへ駈けて言った。
「行ってきまあす！」
大声をあげると、そのままふり返らず歩き出した。

しばらくたってちらりと背後をふり向くと、パックの家とミリィの家がちいさく見えている。

メイサの姿が玄関にあった。彼女は村人の真ん中に立ち、ぽつんと心細そうにしている。

もはや目鼻立ちも判らないほど離れていたが、彼女はじっとパックの背中を見つめているようだった。

ふたたびパックは正面を見た。

あとは振り返らなかった。

旅の仲間（前書き）

えーと、タイトルが「旅の仲間」だからといってホビットは出てきません。でも、お話しが進んでから、そんな”小さな人”を出してもいいかも。皆さん、どうですかね？

旅の仲間

村からかなり離れたころ、ようやく太陽が山の稜線から顔を出し、だしぬけに夜明けとなった。

山の夜明けはあっというまである。

パックとホルン、マリアは街道を歩いていた。

街道といっても、地面をむきだしにして踏み均しただけの道である。

道の両側には草が生い茂り、並木が続いていた。

草原には羊や山羊が放牧され、牧童が犬をつれてのんびりと歩いている。と思えば、冬にそなえてか農夫が長い柄をもった鎌を振り回してざくざくと牧草を刈り取り、それを荷車に積んでいた。

陽射しはぽかぽかと暖かく、これからの長旅をパックは気楽に考えていた。

ボーラン市は山脈を越えた向こうである。

まずふたりは西に向かい、隣町で駅馬車に乗るつもりだった。そこからさらに北の町に行くと、ボーラン市直通の汽車が出る。順調にいけば、十日もあればつくはずだ。

と、背後から聞こえてくる音にパックはふり向いた。

しゅっ、しゅっという蒸気機関のリズミカルな音。

それが近づいてくる。

背後の道はのぼり坂になっていて、その向こうは見通せなかった。が、やがて坂の頂上ふきんに白い蒸気が見えてきた。

陽射しをきらりと反射するそれに、パックは笑顔を見せた。

「やあ、ニコラ博士だ。ようやく追いついてきたのか！」

確かにそうだった。

ニコラ博士があのムカデに乗ってやってきたのである。

がちゃがちゃと騒音をたて、六対の脚をいそがしく前後に動かし、金属のムカデが蒸気を噴き上げ近づいてくる。

ニコラ博士の隣に座る人物を見て、パックは大声をあげた。
「ホルストさんじゃないか！」
そう、森の隠者ホルストがニコラ博士の隣りに座っているのだ。
「パック、ホルン！　黙って出かけるとは水臭いじゃないか！」
陽気に叫びつつ、ニコラ博士はムカデを近づけてきた。
がっしゅ、がっしゅ！　という力強い蒸気を吐き出しながらムカデはパックの横を通り過ぎるときいーっ、というブレーキの音を立て停止した。
パックは叫んだ。
「ニコラ博士が来ることは判っていたけど、ホルストさんまでどうして？」
ホルストはニコラ博士の隣りでパイプを咥え、盛大に煙草の煙を吐いている。まるでムカデの蒸気機関から噴きあがる蒸気と競い合いをしているかのようだ。
「むふう……ま、お前とミリィが山に登った儀式をしたからあと数ヶ月は儀式に参加する子供はいないからな。それでわしも一度都会を見るには良い機会だと思ったのよ」
そう言うとにい、と笑った。
「さあ、乗りなさい。歩いていったのではいつまでかかるか判らん！」
ニコラは博士の言葉に、パックはホルンを見上げた。
ホルンは苦笑していた。
「そうですな……それではお言葉に甘えて」
パック、ホルン、マリアはニコラ博士のムカデに乗り込んだ。どうやらこのために準備したのか、ムカデには椅子が増やされていた。
それに気づいたパックに、ニコラ博士はうなずいた。
「そうじゃ、この席をとりつけるので遅くなったのじゃ。間に合ってよかったわい」
さあ、出かけるぞと声をかけ、ニコラ博士はアクセルを踏み込んだ。

がるるるん……と獣のような唸り声をあげ、ムカデは六対の脚をふたたび動かし始めた。
このような姿をしているにかかわらず、ムカデの乗り心地はよかった。六対の脚はなめらかに動いて振動をあたえず、驚くほどの快速で進んでいるのにまるで揺れてはいない。
吹き付ける風が心地良い。
空は晴れ渡り、何羽かの鳥が餌を探しているのかのんびりと翼をひろげていた。
うとうとしていたパックだったが、ふいにマリアの声に目を覚ました。
「あぶないっ！」
ぱーん、という銃声。
ついでかきーん、という銃弾が跳ね返る音。
はっと見ると、マリアがホルンの身体に覆いかぶさるようにしている。
「マリア！」
叫ぶとマリアはくるりとふり向き、右手の山の斜面を見上げた。
肩にしょいこんでいる荷物をさっと振りほどくとマリアはさっとムカデから飛び降りた。
「おい、何する気だ？」
声をかけるがマリアは無言で山の斜面を駆け上がっていった。
驚くほどの快速である。
ニコラ博士はムカデを停止させ、マリアの行動を食い入るように見つめていた。
きらきらと輝くマリアの金色の身体が藪の中へ飛び込んで、がさがさと斜面がざわめいていた。
やがて「わあ！」という喚き声。
ぱん、ぱんと続けざまに銃声が響いた。
驚いて一同は頭を低くする。
ふたたび斜面からがさがさと音がして、藪の中からマリアの姿が

あらわれた。
片手にひとりの人物の襟首を掴まえている。
「サックさん。あんただったのか！」
ホルンは大声をあげた。
マリアはサックの襟首を掴まえたまま、ずるずると引きずるようにムカデの前に連れてきた。
サックは恨みがましい目でホルンを見上げた。手に銃を持っている。
銃口からはまだ白煙がたなびいていた。

「あんたがこんなことするとはな」
あきれるホルンに、サックはがばと身を伏して頭を地面にすりつけた。
「頼む！　見逃してくれ！　わしはどうしても村長でいなくてはならんのだ！」
「なぜだ。なぜ、そんなに村長にこだわるのかね」
ホルンの質問にサックは顔をあげた。
「決まっておる！　村長の地位はわしにいろいろ商売の便宜を得させてくれた。いまでもそうだ。村人への融資、商品の買い入れ、業者への口利き……」
「村の発展はその中にないのか？」
サックは肩をすくめた。
「わしが勢力を強めれば強めるほど、自動的に村はおおきくなる。そうなっておるのだ。事実、ロロ村はわしが村長でいる間、驚くほど大きくなったではないか！　あんたもそれは認めるはずだ」
「だが公正な手段ではない。村人はあんたの金を借りているため言いたいこともいままで言えずにいる。近頃、ようやく正直な声をあげ始めているが……それも追いつめられてのことだ」
サックは吐き捨てた。
「なんと言うことだ。わしの恩も忘れるとは……」

その時、左手の牧草地から数人の牧童らしき人物が近づいてきた。
「銃声が聞こえてなんだろうと思ってね。このあたりには猟師はいないはずだが」
そう言いかけ、銃を手にしたサックに目を丸くした。
「サックさん……あんた、こんなところでなにをしているんだね？」
サックは顔を真っ赤にさせた。
くそっ、と叫ぶとだしぬけに銃口を振り回した。
「殺してやる！　みんな、殺してやる！」
さっとマリアはサックの銃を奪った。
あっけにとられる一同の前で、マリアはサックの銃を両手で握るとぐっと全身に力を込めた。
ぐい、とばかりにサックの銃は真ん中からへしおれてしまった。
相当力をこめたのか、マリアの全身からはしゅーっと勢いよく蒸気が噴き出す。
へたへた……と、サックは尻を地面につけて座り込んだ。
ホルンがこれまでのいきさつを物語ると、牧童たちは首を振った。
「なんてことだ、村長がこんなことするとは……」
ざわざわと口騒ぐ村人たちにむけ、ホルンは両手をあげ口を開いた。
「おれはこれからボーラン市へ急ぐ。村長のことはおれに任せてほしい。くれぐれも騒がないでくれ」
牧童たちはホルンの言葉に静まった。
「あんたが任せてくれと言うなら、任せよう」
ありがとう、とホルンは礼を言った。
牧童たちが去っていくのを見て、サックはホルンに話しかけた。
「わしをどうするつもりだ？」
「決まっているじゃないか。あんたのやったことは殺人未遂だぞ。ボーラン市に行く前に、軍の人間にあんたを預ける。帝国軍がよろしく裁判をやってくれるさ」
ホルンの言葉に、サックは色を失った。

サックはホルンとマリアの真ん中に座らされ、そのままムカデは動き出した。
「本当に総督府にわしを連れて行くつもりなのか？」
ホルンは答えた。
「当たり前じゃないか。おれを銃で狙ったことを忘れたのか？」
サックは下唇を噛みしめた。
運転をパックに替わってもらい、ニコラ博士はマリアを仔細に観察した。
「ほほお、ここがサックの銃にやられたところだな。穴は開いていないが、へこんでおるわい……あとで叩いて直してやろう」
それに対し、マリアは答えた。
「大丈夫です。じぶんで直せますから」
そう言うとむっ、といきんだ。
ぶしゅーっ、と蒸気が噴きあがる音がして内圧が高まっていく。
ぽん、ぽん、と音を立てへこんだところが元に戻る。
博士は下唇をかんだ。
「マリア、そんなに蒸気を無駄遣いするものではないぞ！　どういう影響があるか判らんからな」
はい、とマリアは答えた。
と、ぎりぎりぎり……とマリアの身体から異音が響いた。
「どうしたマリアっ！」
博士は叫んだ。
「どうやら……無駄……遣い……した……みたい……」
マリアの口調がはっきりと遅くなる。
その瞼がゆっくりとさがり、がくりと首がたれた。
「マリア！」
パックも叫んでいた。
その瞬間、サックはぱっと立ち上がり、ムカデから飛び降りると一目散に村の方向へ向かって走り出した。

「あっ、逃げたっ！」
パックが叫ぶと、ホルンはその肩を押さえた。
「放っておけ。もう、やつはおしまいだ。総督府にこのことを報告しておけば、あとは帝国軍が引き受けてくれるだろう」
サックはさっきの丘の斜面に駈けあがり、藪の中に飛び込んだ。すると一頭の馬にまたがり姿をあらわした。
「馬か！　あれで先回りしたんだな」
ホルンはつぶやいた。
ぴしり、とサックは馬に鞭をくれ馬首をめぐらせて逃げていく。目指すはロロ村らしい。
「村へ逃げてどうするつもりだろう」
パックの疑問にホルンが答える。
「多分、家の金をかき集めて高飛びするつもりだろう。やれやれ、せっかくサックのことで色々調べまわったのに無駄になったな。もっともミリィの行方を探すという目的は残っている。パック、先を急ぐか」
うん、とパックは頷いた。
「やれやれ、すっかり冷えている。蒸気を使い果たしたと見える」
額をぬぐい、博士はつぶやいた。
動かなくなったマリアを横たえ、博士は彼女の身体を点検していた。
「蒸気がなくなったのかい？」
パックの質問に博士はうなずいた。
「考えてみても、昨夜からずっとこいつは活動しっぱなしじゃった。この身体にそんなに蒸気を溜め込んではいられんからな。さっきの活躍で使い果たしたんじゃろう。どれ、蒸気を補充してやるとするか」
そう言うとさっとムカデによじ登り、その蒸気機関に燃料をくべるとシリンダーからパイプを引いてマリアの身体に接続した。
しゅっ、しゅっという音とともに蒸気が補充されていくと、マリ

アの目がぱちりと開いた。
「マリア……」
パックが声をかけると、彼女は上半身をおこし、うなずいた。
「ご心配かけました」
ふう、と一同は緊張を解いた。
ようやく元に戻ったマリアをムカデに乗せ、一同はふたたび旅を続けることになった。
目指すはボーラン市。
帝国の首都。
あらゆる人々が集まる都会。
パックは胸が高まるのを抑えることが出来なかった。
ふと思う。
きっとボーラン市に行けば、ミリィの手がかりが見つかる。なぜかパックは確信を持っていた。

サック（前書き）

やぶれかぶれのサック旦那のお話です。

サック

数刻後、サックはロロ村に姿を現していた。
村は平穏な様子である。歩いていくサックは、だれにも見咎められることはなかった。
何食わぬ顔でサックは自宅兼商店になっている家へ帰りつくと、あたりを見回し中へと入っていった。
だだだっ、と音を立て二階へとあがる。
そこにはサックの妻と、息子のギャンがいた。妻は窓際にすわり、なにか編み物をしている。
ギャンはというと、長いすにだらしなく寝そべり、果物をかじりながら最近都会ではやりの週刊誌を読みふけっていた。内容は芸能界のゴシップである。
サックの足音に顔をあげたふたりは、ぎょっとした表情になった。
「あなた……」
「父さん？」
顔をあげた妻は眉をひそめた。
彼女の名前はトーラ。
卵形の顔、輝く金髪。四十を手前にした今でもはっとするほどの美人である。ギャンはこの母親に似たのだ。
サックは青ざめた顔でふたりを睨むと怒鳴った。
「ふたりとも！　すぐこの家を出るんだ！」
意外な一言に、ふたりは立ち上がった。
「父さん、なにがあったというんだ？」
ギャンが尋ねる。サックはいままでのいきさつを説明した。
「だから今すぐ、このロロ村を出なくてはならん。すぐ身の回りのものと金をありったけ持って、どこか遠くへ身を潜めるんだ」
サックの言葉にギャンは顔をゆがめた。
「冗談じゃねえよ！　おれは御免だ」

「ギャン……」
「父さんのしでかしたことで、なんでおれたちまで逃げ回らなければならないんだ？　おれはついていかねえぜ」
わなわなと唇を震わせ、サックはトーラを見る。
トーラもまた首を横にした。
「わたしもお断りします。犯罪者の妻だなんて、おお、なんてことでしょう。あなた、たった今から離縁させて頂きます。わたしの実家はボーラン市にありますので、いまからギャンを連れて出て行くつもりですからそのつもりで！」
くうーっ、とサックは呻いた。
「なんてことだ……おれの苦労も知らないで勝手なことばかり……」
そんなサックに妻は追い討ちをかけた。
「この家にあるお金は、すべてあたしが頂きますのでそのおつもりで。離婚の慰謝料としては少ないけど、まあこんな事態だししかたありませんね。それに金庫の鍵はあたしが預かっていますから、あなたには金庫は開けられませんから、そのおつもりで」
悔しさのあまりサックは地団太を踏んだ。
「なんだと！　あの金はおれが稼いだ金だぞ！」
サックの言葉にトーラはそっぽを向き、ふたたび編み物に目を落とした。忙しく編み棒を動かし、サックを無視している。
「父さん」
ギャンはにやりと笑った。
「こんなところで時間をつぶしていいのかい？　いまに帝国軍がやってきたら、逃げることも出来なくなるんだぜ」
ギャンの言葉にサックははっ、となった。
拳をかため必死にふたりを睨んでいたが、ついに諦めたのか踵をかえすと一階の商店に戻っていった。
サックの足音が一階へと遠ざかると、トーラはほっとため息をつき、指先を額にあてた。そんな仕草も、彼女がするとまるで一幅の名画の一場面のようだ。

「あんな男と結婚するんじゃなかったわ。それにこんな田舎暮らしなんてもううんざり」
「母さん、ボーラン市に行くって、本当かい？」
ギャンの問いかけにトーラは顔を上げた。
「ええ、そのつもり。いい機会だわ。あなたはどうするの？　やっぱりこの村の学校がいいのかしら？」
冗談じゃない、とギャンは首をふった。
「おれだってこんな田舎、御免だね！　ねえ、おれもボーラン市に連れて行ってくれよ」
トーラはにっこりとほほ笑んだ。
「ええ、あなたとあたし、都会でちゃんとした暮らしを始めましょう……ああ、ひさしぶりだわ！　舞踏会に音楽会、それに詩の朗読……文化的な生活があそこではあたしたちを待っているわ！」
そう言うトーラの顔はうっとりと希望に満ちていた。
そんな母を見つめるギャンはほくそえんでいた。
実際、ヘロヘロのことがあってから村人の視線が冷たく、ときには突き刺さるようでロロ村に暮らすことに嫌気がさしていた。ミリィも行方不明の今、ロロ村にとどまる理由はなにもなかった。
それよりボーラン市だ！
帝国の首都、大都会！
そこそが、ギャンにとっては理想的な生活が待っているはずである。
ギャンはその日が待ち遠しかった。

「旦那さん……」
一階に姿を現したサックに、使用人が驚いたような顔で叫んだ。
サックは無言で帳場に近づくと、レジの金を洗いざらい攫ってポケットにねじ込んだ。
「あ、それは今日の売り上げ……」
「うるさいっ！」

怒鳴ると、サックは真っ赤な顔で家を飛び出していった。
外に飛び出したサックは、その足でダルトの家へ向かっていた。
ダルトの家は村のはずれにあり、粗末な掘っ立て小屋だった。農地ももたず、また村人の多くが羊や山羊を飼っているのに対し、ダルトは家畜も持たない。そのため、ダルトはサックの小作人として過ごしてきたのである。
ダルトは家の前で薪を割っていた。
上半身裸になり、たくましい腕で斧を握り振り下ろす。かつん、と乾いた音がして薪がふたつに割れた。
そこへサックがやってきた。
ダルトは汗をふき、斧を杖によりかかるとサックを待ち構える格好になった。
「やあ、旦那。どうしましたんで?」
「大変なことになった……」
サックの顔は青ざめていた。
なにかあったな、とダルトはぴんときた。
「じつは……」
サックの告白に、ダルトは仰天した。
「旦那、まさかそんな……本当にホルンを殺すつもりだったんで?」
いいや、とサックはかぶりをふった。
「そんなことするもんか! ただ脅しになればと思っただけだ! しかしこうなったらおれたちは村を出なくてはならん」
ダルトはきょとんとした顔になった。
「おれたち……って、おれも入っているんで?」
「当たり前だ! 村の連中の借金のとりたてに、お前もおれについて回ったのを忘れたのか? やつらはおれとお前を一緒に見ているんだぞ」
あ……、とダルトは口を開けた。
かれが納得したのを確信したのか、サックはにやりと笑った。
「なあ、もうおれとお前は一蓮托生なんだ。わかるな? この村に

いては、いずれ帝国軍に逮捕される。そして裁判だ。お前はおれの従犯として罪は軽くなるだろうが、それでも罪名はつく。悪ければラーフ島の強制収用で徴用になる。軽くても数年はくらいこむだろう」

ラーフ島という呼称にダルトは震え上がった。凶悪犯が収容される島で、そこでは強制労働が犯罪者に課せられるのだ。

「旦那、ど、どうすればいいんですか？」

ダルトはサックになきついた。

サックは顎をあげた。

「だから逃げるんだ！　すぐこの村を捨て、帝国軍のいない地方を目指すんだ。おれは商売ができる。お前は腕っ節がたつ。ふたりで旅すればなに、どうにでも稼げるだろう。やるか？」

ダルトはうなずいた。

実のところ、ダルトは腕っ節はたつが頭のほうはあまりよくない。冷静に考えれば、サックと連れ立って村を出ることがそんなに得になるとは限らないのだが、長い間考えることはすべて他人任せに生きてきたダルトにとって、サックの提案は納得できるものだった。

ダルトはすばやく自分の家に飛び込み、すぐさま手早く荷物をまとめ出てきた。

ふと思いつき、それまで巻き割りに使っていた斧を手にとった。

「旦那、じゃあ出かけますか？」

すっかり口調も明るくなっていた。サックに決断を任せきるつもりになっている。

サックもうなずき、歩き出す。

目指すは南の方向だ。

ともかく南は帝国から遠ざかるからである。

さてここで作者はしばらくロロ村と、パックたちの行動から目を離さなければならない。

ミリィはあのあと、どうなったのか？

サック（後書き）

次回はミリィが登場！　お楽しみに！　それから、これからの展開になにか希望や提案がありましたら、是非お願いします。

エルフの目覚め（前書き）

ヘロヘロに誘拐されたミリィのであったのは、伝説のエルフだった……

エルフの目覚め

光の球につつまれたミリィとヘロヘロは空中を怖ろしいほどの速度で運ばれていく。

まわりには真っ白な光が満ち、なにも判らない。

ただ全身に感じる加速感から、物凄い勢いで空中を飛んでいることだけは判った。

ミリィは悲鳴をあげていた。

ヘロヘロも悲鳴をあげている。

いったいどれほどの時間がたったことだろう。

悲鳴をあげ続けることも限界がある。

ただミリィはぐったりとなっていた。

片手にはまだヘロヘロの指先が食い込み、もはや痛みさえ感じないほど痺れていた。

空中を運ばれていく感覚がやがて地面へと落ちていく感覚に変わった。

落ちていく!

落下していく感覚に、ミリィは目を見開いた。

いつの間にかあの光の球は消え去っていた。

ふたりの落下していくのは、見渡す限りの森だった。

どうやら相当北の方向へ運ばれたらしく、目に入るのは天をつきさすように伸びる針葉樹の森である。ちらりと真っ白な雪を頂いた山脈の姿をミリィは認めていた。

わあ、とミリィは叫んでいた。

むう……、とミリィの手を掴んでいたヘロヘロがうなった。

「どこだここは?」

ヘロヘロにも判らないらしい。

急速に接近してくる地面に、ヘロヘロはむっと全身にちからをこめた。

ふっ、と落下の感覚が消え、ミリィはじぶんが空中に漂っているのを認めた。
ゆっくりと落ちていく。
まるで羽毛が落ちていくように、ふたりはそっと地面に足をつけていた。
「どこだ、ここは！」
もう一度、ヘロヘロは怒鳴った。
目をきょろきょろさせ、油断なくあたりに気を配っている。極度に緊張しているようだ。
ぼうぜんとミリィはあたりの木々を見上げた。
巨大である。
ただ巨大というだけではない。
なにか神秘的な雰囲気があたりに満ちている。
おおい……。
ヘロヘロが怒鳴る。
ぉぉぃ……と、こだまがかえってきた。
ミリィは思わず耳を覆った。
「そんなに怒鳴らなくてもいいでしょう！」
ヘロヘロはきっと睨んだ。
「なぜだ。人がいれば聞こえるかもしれないじゃないか？」
「そうじゃなくて……」
ミリィは口ごもった。
いったいこの感覚をなんと説明したらいいだろう。
この森は神の森だ……。
ミリィは確信していた。
人間が足を踏み込んでいい場所ではない。なにかもっと神聖な……。
ヘロヘロは胸を張った。
「ここには覚えがある……おれは昔、ここにいたことがある……！」
えっ？　と、ミリィはヘロヘロを見た。

ヘロヘロは目をぎょろりとさせ、あたりを見回している。
ミリィもあたりを見わたす。
巨大な針葉樹が、目の届く限り立ち並んでいる。空は木々の葉にちらりと見えるだけだ。
足もとはふかふかとした苔でおおわれ、どっしりとした木々の根もとに這い上がって中腹あたりで途切れていた。根もとにはところどころ小さな潅木や、茸が生えている。驚くほど木々の地面は閑散としていた。
森には静寂が支配していた。
黙っていると耳が痛くなるほど森閑としている。
ミリィは身を震わせた。
ここにいるべきではない！
ヘロヘロがじろりとミリィを見た。
「どうした、一緒に来い！」
ミリィはかぶりをふった。
「いやよ……」
「なぜだ？」
「とにかく厭！　あんたなんかと一緒に行くもんですか！」
ヘロヘロはちっと舌打ちした。
「仕様がない奴だな……仕方ない、黙っておれについてくるよう調整しておこう」
そうつぶやくとじっとミリィを見つめた。
ミリィは身を固くした。
ヘロヘロの目が光っている。
黄色く、怪しい光を放っている。
ミリィの瞼が垂れていく。
半眼になったミリィに、ヘロヘロはゆっくりと話しかけた。
「そうだ……お前の願いはおれの願い……おれの願いはお前の願い……おれの命令はお前のすべて……判るな？」
がくがくとミリィは首をふっている。

足もとは定まらず、目はうつろだ。
ヘロヘロはにやりと笑った。
「これでいい。もう、煩いことも言わなくなるだろう」
そう言うとぱちりと指を鳴らした。
はっ、とミリィは顔をあげた。
ぱちぱちと目を瞬かせる。
ヘロヘロはうなずいた。
「さあ、出発だ。来い！」
顎をしゃくるヘロヘロに、ミリィはにやりと笑い、ふんと顔をあげる。
その様子に、ヘロヘロはぎょっとなる。
「ミリィ、お前？」
「馬鹿言ってんじゃないよ！　このスットコドッコイ！」
いきなりまくしたてられ、ヘロヘロは目を白黒させた。
「なんだってえ？　あたしがうるさいこと言わず、あんたの命令を大人しく聞くってえ？　へっ、なんて馬鹿なんだろ。あたしがあんたに大人しくついていくなんて、どうしたら考えることができるんだろうねえ！」
「ミリィ、お前……お前……」
「お前なんてあんたに言われたくないね！　ちゃんとミリィさんと呼ばないか」
びくり！　と、ヘロヘロは背筋をのばした。
「返事はっ？」
言われてヘロヘロはあわてて答えた。
「は、はいっ！　ミリィさんっ！」
答えたあとで後悔した。
なぜだ？　なぜおれはミリィの言いなりになっているんだ。
よろしい、とミリィはうなずいた。
「それじゃ行こうかい？」
「ど、どこへ？」

「それはあんたに聞かないとね。さっきあんたが言っていたじゃないか。ここには来た覚えがあるって。さあ、案内しな！」

ヘロヘロはあたりの気配をさぐった。

そう、あちらの方向、森がもっとも深い方向からなにかの気配が漂ってくる。

ふらふらとヘロヘロは歩き出した。

その後ろからミリィが連れ立って歩いていく。

歩きながらヘロヘロは自問自答していた。

なにがおきた？

確かにミリィにはかれが催眠術をかけたはずだ。

もっとも簡単な魔法である。この魔法で、ミリィはヘロヘロの思うがままのはずであった。

それがいまではがらりと性格が変わり、ヘロヘロに命令している。

不思議なことに彼女に命令されたヘロヘロは逆らう気力をすっかり奪われていた。

魔法。

魔法……。

魔法が……。

そうだ！

ヘロヘロは凝然となった。

これには魔法が関わっている。そうに違いない。

最初はロロ村を滅ぼそうとしたとき……ヘロヘロの狙いは狂い、たんに村に火の手をあげただけに終わった。つぎに村全体を吹き飛ばそうと試みたら、こんどはじぶんたちがどこかへ運ばれてしまった。

そしてミリィへの意思の操作……。

すべて失敗している。

そうだ。

自分の魔法の力はことごとく狂っているのだ。

思いがけない結果しか生み出さない魔力に、ヘロヘロ自身が振り

回されているのだ。
千年の眠り。
そう、長い年月あの封魔の剣に封じ込められていたことがヘロヘロの魔法を狂わせているのだろう。
となると、魔力がふたたび正常にふるえるようになるまで世界を征服することはおろか、うっかり巨大な魔力を使うことすら出来ないことになる。
なんとかしなくては。
このままでは真の魔王など名乗れない。
とぼとぼとヘロヘロは自分の感覚に導かれ歩いていった。魔力は意のままにならないが、感覚はまだ研ぎ澄まされているようだ。
あ！
それじゃなぜ、空を飛ぶことができた？
空を飛ぶのも魔法の力だ。それなのに、飛ぶことはまるで普通に出来た。
判らん……。
背後でミリィが息を呑んだ。
ふっ、と顔をあげたヘロヘロも息を呑んだ。
そこにあったのは巨大な館であった。

どれほどの巨大さなのだろう。
その館はことごとく太い木の柱で組み上げられ、何層にも重なった屋根が見上げる限り連なっている。
おそろしく古い。
それだけは確かだ。
だが奇妙な印象を館からミリィは受けていた。
古いのだが新しい。
まるでつい昨日出来たばかりなのに、そのまま千年間保存されている。そんな印象を受けるのだ。
木で組みあがった壁、屋根、そして尖塔。いったいどれほどの規

模なのだろう。おそらくこの館には一度に千名ほどの人間を収容することができるに違いない。
屋根は急角度で鋭く立ち上がり、その前面には複雑な文様を刻んだ柱が組み込んでいる。
窓はすくなく、ちいさい。どこからどう見ても寒い地方のための住宅である。
口をあんぐりと開け、見上げているヘロヘロのそばでミリィはぶるっ、と身を震わせた。
「どうして、こんな大きな館がここにくるまで気づかなかったのかしら？　まるで、いきなり現れたみたい……」
そうつぶやくと、全体の大きさを確かめるためか二、三歩下がった。
と、ミリィの姿がふっと掻き消えた。
「ミリィ！」
ヘロヘロは叫んだ。
ぱっ、とミリィの姿がまた現れた。
驚愕の表情である。
「見た？　あの館が消えたの！」
「消えたのは、ミリィ、お前だぞ」
え？　と、ミリィは首をかしげた。
ヘロヘロはあることを思いついた。
「もう一度、下がってみろ」
言われてミリィは後ろにさがる。
その姿が消える。
また現れた。
「やっぱり消えたわ！」
ヘロヘロは彼女の側を通り過ぎ、ミリィが消えた辺りまで歩いた。
ふりむく。
館は消えていた。
ただ、巨木が茂っているだけである。

もう一度戻る。
「こんどはあんたが消えたわ！」
ヘロヘロは頭をふった。
「それだけじゃない、消えたあたりに立つと、館が消えてしまう。どうやら、特別な魔法が働いているようだ」
ミリィはヘロヘロに言われてまた確かめてみた。
「本当、離れると消える。ここまで戻るとまた見えるようになる…魔法だわ。でも、なんでこんな魔法がかかっているのかしら」
「おそらく、この館を人目にさらしたくないのかもしれないな」
「どこかに入り口はないのかしら」
「こっちだ」
ヘロヘロは鋭い爪の指先をあげた。
指さした方向を見たミリィはうなずいた。
どうやらヘロヘロの言うとおり、入り口があるようである。
どっしりとした木の扉が閉まっている前にミリィとヘロヘロは立っていた。
丁度、手の届くあたりに取っ手があった。
ミリィはヘロヘロに顎をしゃくった。
開けてみて、といっている。
ヘロヘロはやれやれと取っ手に手をかけた。
そのまま押す。
ぎいーっ、と音を立て、扉は観音開きに開いていった。
鍵はかかっていない。
そのことにミリィはちょっと驚いた。なんとなく、鍵がかかっているものと決め込んでいたからである。
入ってすぐにミリィは立ちすくんだ。
そこは広間になっていた。
その広間のすみからすみまで、ひとひとりがようやく寝そべられるほどのベッドが無数に置かれ、そのベッドひとつひとつに人があおむけに寝かされていたからである。

みなぴくりとも動かない。
こわごわとミリィは人物に近づいた。
指先を人物の肌に押し当て、びくっと引いた。
「これ人間じゃないわ……まるで木像のよう……」
そう、ミリィの触れた人物の肌はまるで木像のように固く、ひやりとした感触をつたえてきたのだ。
ミリィは顔を近づけてつぶやいた。
「でもまるで生きているみたい……もし木像となると、なんでこんなに精巧なものを？　これ、生きていたころの写しかなにか？」
「いいや、これらは本物だ。ただし人間じゃない」
ヘロヘロがうめいた。
「人間じゃない？」
「そうだ。よく見てみろ。人間がこんな耳をしているか？」
ヘロヘロに言われ、ミリィはそっとその耳に視線をうつした。
なるほど、人間とは違った、ぴん、と尖った耳が生えている。
「エルフだよ。人間よりもっと古い種族でな。信じられないほど長生きだ。おそらく、その最長老は一万年は生きているだろう」
エルフ……。
その名前はミリィにも聞き覚えがあった。
が、おとぎ話の登場人物としてだ。
ふとあることに気づき、ミリィはヘロヘロの耳をちらりと見た。
ヘロヘロの耳もおなじように尖っている。
そしてヘロヘロが言った言葉。
ここには覚えがある……。
ヘロヘロはこのエルフとなにか関係があるのか？　まさか、魔王とよばれるヘロヘロと、気高い種族のエルフが？
「エルフのことは聞いているわ。でもなんでこんな木像みたいになっているの？　生きているのか死んでいるのか……」
「生きておる……」
ふいに響いた声にミリィは顔をあげた。

見ると広間の向こうから、ひとりのエルフが杖を手にやってくる。すらりとした上背のある、長身の男だった。

ゆったりとしたローブのようなものを身にまとい、足もとは木の皮のようなものを編み上げたサンダルである。

髪は真っ白で、背中まで達するほどながい。

その顔はいかめしい中に春風を思わせる優しげなものがあり、ミリィはまるで恐怖を感じなかった。

「どこから来たのかな……人間の娘と」

かれはそう言うとミリィを見てにっこりとほほ笑んだ。

「そして魔物！」

ヘロヘロを見た目は厳しいものになった。ヘロヘロは背の高いエルフの長老の凝視にあい、身体をぴんと突っ張らせ口をぱくぱくさせた。どうやら身の自由を奪われたようだ。

「あ、あの……あたしミリィと言って、ロロ村から来ました。こっちはヘロヘロと言って……」

「ヘロヘロ……それはわれらの古語で”恐怖”を意味する。転じて魔王の意味も持つ。なるほど見たところ魔王の性はその体内に宿っているようだな。しかしまだ本性はあらわになってはおらん」

じろりと睨まれ、ヘロヘロはうつむいた。どうやらそれくらいの自由はあたえられているようである。しかし一歩も動けないことには変わりない。

ミリィをふたたび見たエルフの顔はふたたび優しげに戻っていた。

「人間の娘よ。わしはエルフの長をつとめるラングというものだ。わしらエルフは世界を覆う破滅から身を守るため、じぶんたちの時をとめ、長き眠りについていた。どうやらその災害は終わったようだな」

「世界の破滅？」

目を丸くするミリィにラングと名乗ったエルフはうなずいた。

「すべての世界から魔力が消えうせたのだ。わしらは魔力を使ってその生命、生活をささえていた。魔力の消滅はわしらの破滅に直結

することを予感し、ふたたび世界に魔力が蘇るまでみずからの時をとめた。ここにいるすべてのエルフはそのため、木像のように固くなっている。

なんとか、この一帯だけには魔法をとどめることに成功した。それで館に不可視の魔法をかけ、人目をさけていたのだ。しかしわれらの生活を営ませるほどの魔法はとどめることはできなんだ。それほど世界にせまった破滅は徹底的だったのだ。

われらはみずからの時を止め、破滅がすぎさったときまっさきにわしひとりが目覚めるよう、魔法をかけておいた。それでわしが一番先に目覚めたというわけだよ」

エルフの説明にミリィは側のヘロヘロを見つめていた。

魔法が世界から消えた。

そしてよみがえった。

ヘロヘロは封魔の剣に封じ込まれて眠っていた。

そしてパックがその封印を解いて解放した。

ホルストがその後、魔法のちからを揮うことができるようになった……。

ミリィは叫んだ。

「ヘロヘロが魔法のみなもとなんだわ！」

ラングは眉をひそめた。

「その邪悪な生き物が魔力のみなもと？　妙なことを言う」

「でも、そうなんです。魔法が蘇ったとき、このヘロヘロも蘇ったんです！」

ミリィはロロ村でおきたことを詳しく説明した。彼女の説明を耳にし、ラングの顔は険しくなった。

「もしそれが本当のことなら由々しき事態だ。わしらは魔法に依存して生きておる。しかしその魔法が邪悪な者のちからによって維持されたとなると、われらの存在意義そのものが問われることとなる。さて、どうしたものか……」

ラングは広間に眠る無数のエルフを見わたした。

突っ立っているヘロヘロをじろりと見る。
すっ、と指を一本たてる。
「まずは仲間を目覚めさせよう」
一本たてた指先にちいさな光がともった。
その光が見る見るおおきくなり、まばゆいほどのきらめきとなって広間全体にひろがった。
まわりで身動きする気配にミリィはあたりを見回した。
なんと、いままでベッドに仰向けになっていたエルフたちが、ひとりまたひとりと目覚め始めていた。
おおきく伸びをするもの、深呼吸しているもの。頭をはげしくふり、目を瞬かせるものさまざまである。
目覚めたエルフの顔を見て、ミリィはぼうっとなっていた。
どのエルフも、美しい。
男女の別なく、息を呑むような美しさをしている。
ミリィはそのエルフたちに子供や、老人がひとりもいないのに気づいた。
そのことをラングに言うと、かれはうなずいた。
「さよう。われらエルフに老人、子供はひとりもいない。なにしろわれらエルフは長生きで、青年期にはいってから数百年を生きるものは珍しくない。さらに老年期にはいっても、ほとんど老化の徴候を見せることもないから、老人の姿をとっているものもいないのだ。
そんなわけで、われらはめったに子供を作ることはない。なぜなら、われらエルフを養うための森は、千人ちょっとの人数しか許してくれないからでもある。われらは人口を増えることを厳しく監視しているのだ」
「お館さま……」
ラングの顔が、ひとりの目覚めたエルフを認めてほころんだ。
呼びかけたのは、ほっそりとした少女のような可憐さを見せる女のエルフである。髪はうすいグリーンで、踵まで達するほど長い。
白い肌はほのかにピンクに輝き、まるで白い水草が人のかたちをと

っているかのようだ。
ラングは手をのばした。
女のエルフはそっとその手にじぶんの手の平を重ね合わせた。
なんとなくミリィはふたりが夫婦なのではないか、と思った。
「紹介しよう。わしの妻、ヨンである」
「はじめまして、人間の娘さん」
ヨンという女のエルフはミリィににっこりと笑いかけた。そのあでやかな笑みに、ミリィはなぜかどぎまぎした。
「ミリィです……」
蚊の鳴くような声で自己紹介する。
ヨンはぱっと花が咲くような笑い顔を見せた。
「まあ、可愛いかた！　そんなに固くなることありませんのよ」
そうしている間にも、広間にはつぎつぎと目覚めたエルフたちが寝床からおり、ラングのもとへ挨拶にやってくる。
ラングはいちいち頷き、挨拶をかえす。
まるで王様のようだ、とミリィは思った。「みなの者！　ながき眠りから目覚めたエルフの選ばれ者たち！　ようやく、魔法がこの世界に戻ってきたようだ……」
ラングの言葉に、エルフたちは顔を輝かせた。が、ラングは重々しい口調で続けた。
「が、単純に喜べることではないのだ。その魔法のみなもとについて、あらたな疑問が生じたのだ。みな、そこの魔物を見よ！」
エルフたちはラングの言葉に、ミリィの側で身動きもとれないでいるヘロヘロを見た。
かれらの顔に驚きの表情が浮かんだ。
「魔物だ……」
「邪悪な気配を感じるぞ！」
「しかしまだ、その邪悪さは完全に表に出ていないようだ」
「そのとおりだ！」
ラングは声を張り上げた。

「ここにいる人間の娘、ミリィによると世界に蘇った魔法のちからは、そこの魔物がもたらしたものらしい。われらが眠りに着く前、世界を支配していた魔王がいたことは諸君も知っていよう？」

うなずくエルフたち。

「その魔王のなれのはてが、その魔物なのだ。世界から魔法が失われたとき、その魔王が封印されたと言う。そして封印が解けたとき、世界に魔法が蘇った。その関連はあきらかである！」

エルフたちに動揺がはしる。

「お館さま。それではわれらの魔法のみなもとはそこの邪悪な魔物によってもたされている、というのですか？」

「魔王がわれらの救い主、ということですか？　そんな馬鹿な……」

ラングはゆっくりと首をふった。

「そうなのだ……まことに驚くべきことだが、疑いはない。これからどうしたらいいものかな？」

「その魔物はいますぐ殺してしまうべきです！　いまなら殺せるはずだ！　なにしろ、いまだ魔王として本性をあらわしていないようですからな」

別のエルフが疑問を呈した。

「しかし魔法はどうなる。魔王を倒せば、ふたたびわれらは眠りにつかなくてはならなくなるぞ」

「とばかりとも限りますまい。その魔物を殺してから、ゆっくりと魔法のみなもとの秘密を解き明かしてもよい。その身体に魔法のみなもとが隠されていれば、それを取り出せばふたたび世界に魔法を蘇らせることが出来るかもしれん」

それを聞いていたヘロヘロは震え上がった。

ラングの瞳が光った。

「魔法を取り戻すことができるかどうか、それは判らんが魔王を未然に殺す、ということは賛成できる。魔王がこの世界に君臨していたころ、世界には絶望しか存在しなかった。あの苦痛をふたたびもたらしてはならん！　われらは魔法なしでは生きられないが、ほか

の生き物にはそうでもない。が、魔王の脅威は他の生き物、そしてわれらに明らかである！」

そう言うと、ラングは手に持った杖を構えヘロヘロに向き直った。

杖の先端が光り始めた。

いけない！　と、ミリィはヘロヘロの前に立ちはだかった。

ラングは叫んだ。

「どけ！　人間の娘！　お前まで殺してしまうぞ！」

「いいえ！　どきません！　ヘロヘロを殺してはいけないわ！」

「なぜだ？　そやつは魔王のなれのはてなのじゃぞ」

「たとえそうでも、いまはそうではありません。また魔王になる可能性があっても、いま殺したらあなたがたは無力な相手を殺したという不名誉が残るのではないですか？」

ラングはぽかんと口を開けた。

「不名誉？」

「そうです。あたし子供のころからエルフのことは聞かされてきました。エルフは名誉をもっとも重んじる種族だって聞いています。それは嘘なんですか？」

「嘘ではない。われらのもっとも重んじるのは名誉だ」

ラングは首をふった。

考え込む。

そのラングに、そっと妻のヨンがよりそった。

「あなた……」

ヨンに話しかけられ、ラングは顔をあげた。

「この人間の娘さんの言うことが正しいわ。いまこのヘロヘロを殺せば、わたしたちには無力な相手を殺した、という不名誉が永遠についてまわります」

「永遠に……か？」

はい、とヨンはうなずく。

そうか、とラングは顎をひいた。

かれの顔が明るくなった。

「おぬしの言うことが正しいようだ。あやうく、われらは不名誉を得るところであった。しかし問題は残る、どうしたものかな?」
わたしに考えがあります、とヨンが進み出た。
ラングは優しく妻を見た。
「どのような考えかな?」
ヨンはラングに耳打ちをした。
ラングの目が大きく見開かれた。
ヨンを見る。
彼女はうなずいた。
ラングはとん、と杖で床を叩いた。
「彼女の提案で問題が解決された! ミリィよ」
ラングに話しかけられ、ミリィは顔をあげた。
「お前はそのヘロヘロを正しく導くことはできるか? 邪悪に染まらせることなく、魔王にさせることなく」
ミリィは驚いた。
「わたしに?」
「そうだ。わしの見るところ、ヘロヘロはお前に対し——なんというか、精神的に依存しているように見える。お前が導けば、悪にそまることなく、正しく生きることを悟るようになるかもしれん。つまり人間になる、ということだよ」
「人間になるのですか? このヘロヘロが」
「そうだ。可能性は低いが、ありえないことではない。人間として生きたい、とそやつが心の底から思わないと駄目だがな。
その方法を教えてやることはできん。わしにも判らんからだ。
ただ、わしの予感によればどこか遠くの場所でお前はその使命をはたすことになると告げておる。
お前はヘロヘロを連れ、世界中を旅して、その答えを見つけなくてはならない。その旅の中で、お前はヘロヘロを人間にする答えを見つけることになろう」
ミリィは叫んだ。

「あたしやります！　ヘロヘロを人間にして見せます！」
ラングはうなずいた。
「そう言うと思った。ミリィよ、お前は優しい心を持つようだ。その優しさがヘロヘロを改心させるちからとなるかもしれん。だがお前ひとりではその使命も重荷でしかないだろう。わしらの代表をひとり、お前たちの使命達成の助力としてつけよう。どうだ、わしの提案を受けるかね？」
ミリィはうなずいた。
「はい！　ヘロヘロを改心させるためなら、なんでもやります！」
「よし決まったな！　それではわれらの代表を選ばなければならんが……」
うおう……！
その場にいたエルフ全員が手を挙げた。
「お館さま！　ぜひわたしを推薦してください！」
「いいえ、わたしです！　その使命にわたしを命じてください！」
「わたしを！」
「わたしを！」
全員、熱をおびて口々に立候補していた。
ミリィはあっけにとられた。
「いったいどうして……」
驚いているミリィにラングは答えた。
「この使命のほか、エルフとして名誉に感じる使命はあるまい？　この使命を成功させたなら、魔王を改心させたと同時に世界を救うという名誉も得ることになる。だがこう自薦の者が多くてはだれを選んで良いか迷うな……。おおそうだ！　ミリィとやら、おぬし食事はまだかな？　休息はしておらんのじゃろう？」
言われてミリィは気づいた。
考えてみれば食事はおろか、睡眠すらろくすっぽとっていない。
空腹と睡眠不足で、ミリィは倒れそうになっていた自分に気づいた。

「やはりそうか……。まずはおぬしに食事と休養をあたえよう。ヨン。お前、この娘に食事と泊まる場所を頼む」
はい、とヨンはうなずいた。
手をあげ、ミリィの右手に重ねる。
「いらっしゃい、あなたいまにも倒れそうよ」
ミリィはヘロヘロを見た。
あいかわらず一言も発せず、棒をのんだように固まっている。
「あれのことなら心配しなくてもいいのよ。あとであわせてあげるから、まずはあなたが休息をとらないとね」
ミリィは素直に従った。
そのほうがいいと思えたのだ。
これもエルフの魔法であろうか？

ケイ（前書き）

エルフの美少女登場！

ケイ

ミリィが案内されたのは、エルフの館の客間だった。
広々とした空間に、ミリィはため息をついた。
壁は白っぽい木の板で組み合わされ、天井には丸窓がくりぬかれている。丸窓にはめこまれたガラス越しに、明るい日差しが室内に踊っていた。
案内したのはケイと名乗った、若い女のエルフだった。というより、少女に近い年頃に見える。
そのことをミリィが言うと、ケイはうなずいた。
「そうなんです。あたし、一番若いエルフなんです。一族が眠りについたとき、人間の数え方で十六才でした。たぶん、ラングさまはあなたと年が近いということで案内役に命ぜられたのでしょう」
にっこりと笑うケイはほかのエルフと違って、肌が黒檀のように黒かった。
目は青く、空の青さを映したよう。
髪の毛はオレンジ色で、それを男の子のように短くそろえている。
ついじろじろと見つめてしまうミリィの視線に、ケイはにっこりと笑いうなずいた。
「あたしの肌、黒いでしょ」
先に言われ、ミリィはうろたえた。
「え、そ、そんな……あたし！」
「いいのよ。いまのところ肌が黒いエルフはあたしだけなんだけど、昔はもっといたそうよ。あたしの両親の肌は白いんだけど、どういうわけか黒い肌のエルフが黒い肌の子供を生むとは限らないの。あなたがた人間の世界でも、肌が黒い人たちが、多く暮らす場所もあるんでしょう？」
「ええ、南の地方ではあなたのような肌をした人たちがいるって学校で習ったわ」

「学校？　それはなに？」
　ミリィはエルフに学校のことを説明した。ミリィの説明に、ケイは目を輝かせた。
「おなじくらいの年頃の子供たちが集まって……素敵ねえ！　ここにはあたしくらいの年頃の友達なんて、だれもいないのよ」
　そうつぶやいてケイはいっけなあい、とじぶんの頬を両手でおさえた。
「あたし、あなたをもてなすために指名されたんだった！　ついお話しに夢中になってしまって……ねえ、ミリィさん。あなたお食事まだだったわね？」
　ミリィがうなずくと、ケイはにこっと笑って話を続けた。
「それじゃ食事を持ってくるわ。エルフの食事だから、あなたがた人間の食べるものとはすこし違っているかもしれないけど、でも味は保障するわ！」
　ちょっと待っててね、と叫んでケイは飛ぶように部屋を出て行った。
　ひとり取り残されたミリィはほっとため息をついた。もの静かな雰囲気のエルフたちにくらべ、ケイひとりだけ異彩をはなっている。やはりエルフの中で一番若いだけあり、まるでミリィは同年齢の女の子といるような気がしていた。
　ほどなく足音が近づき、ケイがもどってきた。
「お待ちどお！」
　手に木製のトレーをささげ持っている。
　ぷん、と香料のかおりがただよう。
　ケイの持ってきたのは澄んだスープに様々な果物、ぱりぱりに焼いたクラッカー、茸の和え物。サラダなど。みな、薫り高い香料がつかわれ、ぴりっとした香辛料で味付けがされていた。
「人間はお肉が好きらしいけど、あたしたちエルフは菜食主義なの」
　ケイはそう説明した。なるほど、料理には肉はひとつも入っていない。それでもエルフの料理はとても美味しく、ミリィは夢中にな

って食べていた。
が、あることに気づいた。
「ねえ、あなたが出て行って、すぐ戻ってきてこの料理を持ってきたけど、いったいいつ料理したの？　とてもそんな時間なかったように思えるけど」
くすり、とケイは笑った。
「あたしたち時を止めて眠っていたでしょう？　おなじことを料理にもかけているのよ。あたしたちは料理をつくるときはいっぺんにどっさりつくって、そして同時に時を止めるのよ。あとは食べたいときに時を止める魔法を解除すれば、いつでも出来たてが手に入るというわけ！」
ふうん、とミリィはうなずいた。
エルフは魔法を使いこなしている。
ケイは部屋の窓を見上げた。
夕暮れが近づいているのか、窓の外にはオレンジ色の光が差し込んできて、そろそろ室内は薄暗くなってきていた。
「暗くなったわね。明かりをつけましょう」
ケイはつぶやいて部屋のかたすみに近づいた。壁にかけられている水晶の飾りに近づくと、その表面をとん、と叩いた。
と、水晶の内部にぽっ、と明かりが灯った。
たちまち部屋のなかは昼間のように明るくなる。
びっくりするミリィに、ケイはいたずらっぽく笑いかけた。
「これ、魔法のランプなの。この明かりは昼の光と同じくらい明るいけど、熱はもたないのよ。昼間の光を、この水晶に閉じ込めているの。叩くと、閉じ込めた光が外へ出て行くというわけ」
へえ、とミリィは感心してその水晶の明かりに近寄った。
手をのばし、水晶の表面に触れる。なるほど、ひやりとした感触があるだけで熱はもっていない。
「なんでも魔法なのね……」
「そうよ。あたしたちエルフは魔法を使って生活しているの。人間

はいろいろ火を燃やしたりしているようだけど、あたしたちは極力火は使わないようにしているの」

「どうして？」

「だって火を熾すには木を燃やさなくてはならないでしょう？　あたしたちエルフは森の守り手として木を燃やすことはなるべく避けるようにしているわ」

そう言うケイの顔はエルフの生活を誇っているようだった。

食事のあと、風呂に案内された。

風呂場もまた広々としている。

湯の温度はぬるめで、ミリィの好みだった。

湯船に身を沈めると、はられた湯の表面にはさまざまな香りをはなつ香草がばらまかれ、湯をわずかに緑に染めていた。その香りを湯の蒸気とともに吸い込むと、体の芯から疲れが溶けていくようだった。

あらかじめケイに説明されていたので身体を洗う手順には迷うことはなかった。

肌に香油をすりこみ、用意された灰を身体にまぶす。そして湯で洗い流すのだが、どうやらエルフの生活に石鹸というものは存在しないようだった。

ミリィはひとりうなずいた。

エルフは千年間眠っていたという。石鹸の発明はその後のことだ。知らないのも無理はない。そのことに思い当たると、ミリィはなぜか可笑しかった。

魔王の系譜（前書き）

ヘロヘロの素性があきらかになる。いったいヘロヘロとは何者なのか？

魔王の系譜

客室で一晩ぐっすり眠ると、すっかり疲れはとれていた。
足音にドアを見つめると、ノックの音がする。どうぞ、と答えるとケイがドアの隙間から顔をのぞかせた。
「お早う！　どうやらよく眠れたみたいね」
ミリィはうなずいた。
「顔、洗いなさいよ」
うながされ、ミリィは風呂場に付属している洗面所で顔を洗った。そして客間でケイが用意してくれた朝食をとる。今朝のメニューはたっぷりとバターを塗ったパンに、とろりとしたメープル・シロップをかけたものだった。つけあわせにぱりっとした野菜がつき、食後にはヨーグルトをかけたフルーツがついた。
「これからどうするの？」
ミリィが問いかけると、ケイはぐいっと頭をゆすって広間のほうを見た。
「みんな広間に集まっているわ。あの、ヘロヘロという魔物の素性をさぐるんだって」
広間にはエルフの一族が全員集まり、厳粛な表情でミリィを待っていた。
ラングがにこやかな表情でミリィを出迎えた。
「お早う、ミリィよ。よく眠れたかな？」
「はい、とても」
ミリィが答えると、ラングはうなずいた。
「昨夜よく考えたのだが、あのヘロヘロと言う者を改心させるには、まずあの者を良く知らなくてはならない。あやつはいったいどこからやってきたのか？　そしてどうして魔王などになったのか？　そういったことは謎だった。だが、あやつがほとんど無力の今、それを知るよい機会だと思う」

こちらへ……と、ラングはミリィを招いた。
一歩前へ出たミリィは、ふと上を見上げあっと驚いた。
なんとヘロヘロが空中に浮かんでいる。
だらりと手足をたらし、その目はうつろで意識があるのかないのか、ミリィが見つめていてもその表情は変わらない。
「いま、あやつはうつつの状態にある。われらの魔法で、あやつのこころを開かせ、もっとも古い記憶を掘り起こそうと思う。つまり、あやつの心の中に潜り込むということだな。ミリィよ、お前があやつを改心させると言うなら、あやつのすべてを知る必要がある」
ミリィは震えながらうなずいた。
ラングはやさしくミリィの肩を抱いた。
「いいかしっかりするのだぞ！　お前が経験することは人間にはなしえないことだ。だが自分をしっかり掴んでいる限り、心配はない。自分が自分であるという意識を保っているのだ。できるかな？」
はい……と、ミリィはうなずいた。
よろしい、とラングは顎をひいた。
「それでは始める――いまより、このヘロヘロと名乗る存在の意識に潜り込む……」
そう言うや否や、ラングは目を閉じなにかを一心に祈り始めた。
背後のケイもまたラングにならい、目を閉じた。
広間のエルフたちも目を閉じ、祈りをささげた。
ラングの、ミリィの肩を掴むその手にちからがこめられる。
宙に浮かんだヘロヘロの顔が恐怖に歪んだ。
「やめろ……おれから出て行け……おれのこころから出て行け……！」
弱々しくうめく。
ミリィもまた目を閉じていた。
頭の芯がじーん、と痺れるようで身体もまた他人のようだ。
閉じた目の奥に、ぼんやりとした映像が浮かんできた。
それは古い記憶だった。

地面にへばりつくみじめな生き物。
それがヘロヘロの持つもっとも古い記憶である。
かたちもなく、ただどろどろとしたかたまり。
だが生きている。
目も鼻もなく、耳もない。
あるのはただひとつの目的。
飢え。
飢えだけがその生き物のすべてだった。
食べ物を求め、生き物はそのどろどろとした身体を伸ばし、ゆっくりと移動した。そしてすこしでも消化できるものに行き当たると、全身の細胞を使ってがつがつと消化する。
もしそこに生物学者がいれば、その生き物の正体を「これは粘菌と呼ばれる生き物である」と、分類したに違いない。粘菌は不思議な生き物だ。植物とも動物ともつかず、群体で生き、胞子を飛ばし繁殖する。
ただその生き物は胞子を作らず、ずるずると身体を動かして餌を探すだけだった。もしかしたら突然変異体なのかもしれなかった。
そんな日々をすごすその生き物にある変化が生じた。
それは枝に張られた蜘蛛の巣に一匹の蝿が捕まった瞬間だった。
ねばねばした蜘蛛の巣の粘液に蝿が捕まり、羽根を必死に震わせた瞬間、蝿のはなつ原初的な恐怖の信号が生き物の深部にあるなにかを揺り動かしたのである。
やがてほどなく蝿の震えを感知した蜘蛛がするすると糸をたどって近づき、その生命を絶ったとき生き物はある絶頂を感じた。
蝿がそのわずかな生命力を放出させたその瞬間、生き物はそれまで感じたことのない満足感を感じたのである。
生き物は本能的に悟っていた。
これだ！　これこそじぶんが求めていたものだ！
まとまった思考としてはないものの、生き物はなんとかおなじ体

験をするため試行錯誤を繰り返した。
そして最初のおおきな一歩を踏み出したのである。
生き物は自分の細胞を自由に組み合わせることが出来た。
身体の表面に透明な細胞を集めると、それがレンズになった。
はじめての光を感じ、生き物はあわててそれをひっこめた。
そろそろともう一度レンズをつくり、焦点を結んだ。
！
生き物は初めて自分の目で世界を認識した。
それは森の片隅であったが、生き物にとっては最初の眺望であった。どっしりとした巨木が天をささえんばかりに枝葉を茂らせ、葉の間からは日の光が幾本もの光の筋となって降り注いでいる。
その光景に、生き物はしばし呆然となっていた。
やがて生き物は学んだ。
耳を、そして鼻を作った。
五感を生き物は手に入れていた。
最初に感じた他の生き物である蜘蛛の姿をそれは真似した。
八本の脚を伸ばし、よたよたとその生き物は移動した。そしてさらなる試行錯誤を繰り返し、生き物は最初の殺しを経験したのである。
最初に殺したのは地面をのたのたと這う蚯蚓である。
蚯蚓が断末魔の声にならない悲鳴をあげ絶命した瞬間、生き物はようやく自分が飢えから解放されたのを感じていた。
それから生き物は森の地面で同じようなほかの生き物の生命力をすすり長いときをすごしていた。
姿も変わっていた。
蜘蛛の姿は身体が大きくなりすぎ維持できなくなっていた。つぎに手に入れたのはネズミの姿であった。
が、それは本物のネズミとは似ても似つかない奇妙なものだった。脚が六本あり、毛が一本もなくつるりとしている。それでも鋭い歯と、すばやく動く足で獲物を捕まえその生命力を貪ることはできた。

身体が大きくなるにつれ、生き物の姿はどんどん変化していった。すばやい動きと、獲物を捕らえるのに便利なように生き物は様々なほかの生き物の姿を真似していた。

そしてとうとう最終的な変化の時が来たのである。

その生き物は森の中で闇の王者として君臨していた。音もなく獲物に忍び寄り、あっという間にその生命を奪い、獲物から生命が失われる一瞬、生命力をすすりこの世の春を謳歌していた。

ある日、生き物はこれまで経験したことのない衝動を受け取っていた。

それは死を迎えた生命とは違う、暗くて強烈なにかだった。

感情であった。

恐怖と怒りがまじりあったその感情の衝撃に、生き物は全身を震わせた。

いままでの単純な死への恐怖とは違い、それらの感情は継続的で、かつ奇妙な味を持っていた。

興味を引かれ、生き物はその感情の出所へ向かって近づいた。

人間だった。

数十人の人間が、森の開けた場所でおたがいにらみ合っていた。手には原始的な棍棒のような武器を持っている。

かれらは時折鋭い声でおたがいを罵りあい、敵意をむきだしにしていた。しかしまだ戦いの決意はつきかねるようで、にらみ合いを続けているだけである。

しかしかれらの燃えるような殺意、敵意は生き物の感覚に痛いほど響いていた。

生き物は昂揚感につつまれていた。

これだ!

この憎悪と恐怖、相手を殺したいという明確な意思!

強烈な感情の発露に、生き物は全身でその感情をすすっていた。

やがてふたつの人間の集団は、おたがい決意が高まったのか、やにわに激突した。

武器と武器が噛みあい、たちまちあたりはむごたらしい戦場となった。その苦痛と恐怖、むき出しの殺意に生き物はうっとりとなっていた。地面には血だまりができ、苦痛でうめく人間がのたうちまわっている。

やがて戦いは決着がついたのか、敗れた集団はよろよろとおたがいの肩を支えあい、逃げ出していった。勝利したほうも、追う気力もなく勝利の雄たけびをあげるのが精一杯というところだった。

生き物は初めて見る人間に興味をおぼえ、その姿を真似することにした。集団から少し離れた場所にいたひとりに狙いをしぼり、そっと近づいた。

狙われた人間は身動きの鈍そうな、太った男だった。生き物が近づくと、気配を感じたのか、ふいにきょろきょろしはじめた。

生き物は頭上からいきなり飛び降り、男の身体に覆いかぶさった。男は悲鳴をあげる間もなく、一瞬で絶命していた。生き物は大急ぎで男の細胞と自分の細胞を混ぜ合わせ、その姿を盗んでいた。

生き物はその人間の集団に溶け込んだ。森では様々な人間の集団が暮らし、わずかな食料を奪い合うためお互い憎みあい、殺し合いを繰り返していた。生き物が潜んだ人間の集団はその中でも最大のものだった。

生き物は貪欲に人間の感情をすすり、成長していった。欲望は無限に膨れ上がった。

生き物がより効率的に人間の感情を吸収するための努力が、世界に魔法を生み出すこととなった。魔法が世界に浸透するとともに、生き物はより人間の恐怖、憎悪、殺意などの感情を効率的に吸収できるようになっていた。

奇妙なことがおきた。

魔法は生き物の所属する人間の集団を変えていった。

その集団は魔法に習熟し、使いこなした。

そして魔法でみずからを変え始めた。

より優美に、そして美しく、賢く種族としての属性を変化させていった。

それはエルフの祖先であった。

そのころ、生き物はヘロヘロと名乗っていた。

ヘロヘロはエルフの祖先とともに生き、成長していった。エルフはヘロヘロの魔力でさらに変化していった。

かつての原始的な姿は優美なものとなり、森で暮らす種族となったのである。ヘロヘロがエルフの森の記憶を持っていたのも道理である。ヘロヘロはある意味、エルフの祖先でもあったからである。

そしてついにヘロヘロは自らをこう名乗った。

魔王と……。

ラングの選択（前書き）

エルフの長、ラングによりミリィの道連れとなるエルフの代表が決められる。その名前は……

ラングの選択

ラングは目を開いた。
ぱちぱちと瞬きをする。
ミリィもまた目を開いていた。
あたりを見回すと、ぼう然としたエルフたちの顔が目に入ってきた。
「なんと……われらエルフと人間はおなじ祖先を持っていたのか！」
「あやつはそんなに長いときを生きていたのか……！」
全員、宙に浮かんだままにいるヘロヘロを見上げていた。
ヘロヘロはまだ硬直の魔法が解けないままなのか、ぐったりとしたままぴくりとも動かないでいる。
ラングは宙に浮いたヘロヘロを見上げ、つぶやいた。
「あやつが生まれ故郷のこのエルフの森にやってきたのも偶然ではない。かれは無意識にこの森に引き付けられたのだろう」
片手をあげ、ヘロヘロにむけた。
そのままそっと、下げていく。
ヘロヘロもまたゆっくりと降りていき、地面に足がついた。
そのままくず折れるように床に横たわってしまう。
「ヘロヘロ！」
駈け寄るミリィに、うっすらヘロヘロは目を開けかすかに口を動かした。
「ミリィ……」
ミリィはひざまづいた。
「大丈夫？」
ん……、とヘロヘロはミリィにささえられながら立ち上がった。
ラングの厳しい眼差しにもまるで反応しない。まるで呆けているようだ。
「こやつがいかにして魔王となり、そして魔法がこの世界にどうし

て生じたのか、すべてわかった！」

いかめしい表情のまま、ラングはそう宣告した。エルフたちは押し黙ったまま、ラングのつぎの言葉を待っている。

「まこと魔法のみなもとは、こやつにあった！　われらエルフもまた、こやつのために魔法を操り、森に住むことになったことには疑いの余地はない……」

そう言うラングの顔は苦渋に満ちていた。

「こやつがまことに邪悪さをなくすことができるのか、わたしには判断できぬ。しかしその希望は持とうではないか！　ミリィとともに世界を旅し、その方法を知るという希望を。彼女にはわれらエルフのひとりを仲間として旅立てよう。そしてわたしは一晩だれを連れて行くか考えた」

ここでラングは言葉を切り、広間をゆっくりと見回した。

居並ぶエルフたちは固唾を呑んで見守っている。

おおきく息を吸うと、ラングはにっこりと笑った。

「その名はケイ！」

ミリィの側で控えていたケイはびっくりした。

「あたし？」

「そうじゃ、お前がミリィの旅についていくがよい！」

「お館さま！」

ひとりのエルフがたまりかねて前へ進み出た。

「納得いきません。なぜ、ケイなのでしょう？　彼女はわれらのなかでもっとも若く、経験もありませぬ」

ラングはうなずいた。

「そうだ。ケイは若い。生まれてからまだ二十年もたっていない。われらの基準からすれば、子供と同じだろう。だが、それが彼女をミリィとともに旅立たせる理由なのだ。この世界はわれらが眠りについて千年の年月がたっている。

その間、世界は変わってしまった。われらがこの森で暮らしていたころの常識はもはや通用しない。そんな世界であらたな知識を学

ぶには、若いケイが適任と思う。
ケイの若い目が、変化した世界を見て学べば、われらもまたあらたな知識を手に入れることになる。そうではないかな？」
前へ進み出たエルフは、その説明に頭をさげた。
「なるほど……そういうお考えでしたか。判りました。仰せの通り、ケイが適任でしょうな」
エルフは引き下がった。
あっけにとられ、口をぽかんと開けているケイにラングはほほ笑んだ。
「どうしたケイ？」
ラングに話しかけられ、ケイははっとわれにかえった。
「あ、ご免なさい。つい思いがけないことなので……」
ラングはミリィに顔を向けた。
「ミリィよ。このケイがお前の旅の道連れとなる。なにか異存はあるかな？」
ミリィは立ち上がった。
「いいえ、お館さま。あたしも、ケイさんと一緒に旅をできれば嬉しいです！」
じつはひそかにミリィはケイが旅の道連れにならないかなあ、と思っていたので喜んでいた。やっぱり一緒に旅をするなら、話しが合いそうなケイのほうがよかった。

ヘロヘロはぼうっとしたままだ。大丈夫かしら、とミリィはヘロヘロの目の前で手を振って見せた。
どろん、とした瞳をあげヘロヘロはなんの反応も見せない。
ラングはミリィの問いかけるようなまなざしにうなずいた。
「この館にいる間、こやつには好き勝手させないためこういう状態でいるようにさせている。だが館を出れば、ふたたび邪悪な性質が表に出るようになるだろう。お前がこやつを善導するにはちと手こずるだろうな。覚悟はできているかな？」

ミリィはうなずいた。
「はい、かれを殺さずあたしに任せていただき、感謝します。きっとあたしが、かれを善き性格に導くことを約束します」
ラングはケイを見た。
「ケイよ。お前はエルフの代表としてふたりを守るのだ。ミリィのよき相談相手となるように。わかっておるな？」
ケイもまたうなずいた。
「はい、お館さま。エルフの名誉のため、頑張ります！」
彼女の答えに、ラングはうなずいた。じっとケイの目を見つめている。
ケイもまた、ラングの目を見つめた。
その目が潤んでいた。
ついに堪らなくなったのか、ケイはラングの胸に飛び込んだ。
「お父さま！」
ええっ、とミリィは驚いた。
かたわらのヨンを見ると、彼女はゆっくりとうなずいた。
「ええ、そうなの。ケイはわたしたちふたりの娘。眠りに着く前、百年ぶりに生まれたエルフの娘なんです」
抱き合っているケイとラングを見ているうち、ミリィの胸がずきりと痛んだ。
お母さん……。
ミリィは母親のメイサの顔を思い返していた。
そうだ、すっかりそのことを忘れていた。
でも、ヘロヘロのことがある。かれに人間らしい心を教えるという使命が！
どうすればいいのだろう？
ミリィは堪らなくロロ村が恋しかった。
村のいろんな場所がミリィの胸に蘇り、さまざまな顔が浮かんでは消える。
その中にパックの顔があった。

パック……。
その顔はなぜか怒っているように見えた。

「旅立ちにあたり、ケイにはこの弓を持たせよう。エルフの持つ、最高の技術で作られた弓だ。道中、身を守る役に立つだろう」
ラングは館の前でケイに一棹の弓を手渡した。すらりとした優美な形で、白い木材で出来ているらしい。弓には複雑な文様が精緻な技法で刻まれている。
ミリィとケイ、そしてヘロヘロのまわりには館のエルフ全員が集まって旅立ちを見送っていた。みな、期待と不安が入り混じった表情である。
ミリィはヘロヘロに連れ去られた時の、通学時の姿になっていた。いつもの服に、肩からはバッグをかけている。バッグの中には教科書がきちんと入っている。
となりに立つケイは体にぴったりとしたスタイルの服を身につけて、緑のマントを背中に跳ね上げている。
ケイは目を瞠って手渡された弓に見入っていた。
「これをわたしに？」
「そうだ。わしの予感によれば、お前はミリィと共に様々な苦難を経験するだろう。そのとき、この弓がお前たちを守ってくれるはずだ」
「ありがとうございます」
ケイは顔を真っ赤にさせ、その弓を身につけた。矢も弓と同じ材料で出来ている。
「それからミリィ、お前にも贈り物がある」
そう言ってラングはミリィに一巻きの鞭を手渡した。
「武器としてはそれほど威力はないが、様々な使い方ができるだろう。これもエルフの技で出来ているから、お前でもすぐ使いこなせる」
手渡された鞭は皮製で、しなやかな手触りだった。ミリィはそれ

を腰の周りに巻きつけてベルト代わりにすることにした。
ふたりがエルフの贈り物を身につけたのを確認して、ラングは息を吸い込んだ。
「旅立つ前に一言、ミリィには明かさなければならないことがある。なぜ、われわれエルフが魔法が失われた間、時をとめ眠りについたのかを」
ラングは片手をあげ、なにごとが口の中でつぶやいた。
と、ミリィの目の前の空中に、窓のようなものが開いた。
エルフの館の大広間の映像である。そこにはエルフたちが集まり、不安そうな顔でラングの前に集まっていた。
なにかおかしい、とミリィは思った。その映像に映し出されるエルフたちが、いま館の前で集まっているのとはちょっと違う。
みな、腰がまがり、顔には深い皺が刻まれている。皮膚はくすみ、ところどころできもののようなものが見えている。
そうだ、これは老齢の徴候である。
いまいるエルフたちはみな若々しく、男も女もため息のつくほど美しいのに対し、映像の中のエルフたちはどことなく疲れ、そして優美さも失っているようだ。
「魔法が失われ、われらはこのように醜く、そして老いてしまっていた。そうだ、われらは魔法がなくては生きていけぬのだ。ほかの人間たちは魔法がなくなってもなんとか生き抜いていけたのだろうが、われらはあまりに魔法に依存するようになっていた。もはや、魔法はわれらにとって生命そのものとなっていたのだ。だからわれらは魔法が蘇るまで、みずからの時を止めたのだ」
それじゃあ、とミリィはヘロヘロをふりかえった。
ヘロヘロはまだラングの魔法が効いているのか、ぼうっとした表情で立っている。
ラングはうなずいた。
「そうだ。もしもヘロヘロが善良なこころになり、魔王としての本性を失ったとき、ふたたび魔法はこの世界から失われるのかもしれ

ない。この前はヘロヘロが封印されていたとはいえ、かすかにでも魔法がこの世界に保たれていたからわれらは時をとめる魔法を使えたが、もしかすると今度こそ魔法がこの世界から完全に消え去ることになるのかもしれない。そうなると、われらは人間と同じように年老い、死んでいく運命を甘受しなければならないのかもしれん」

ラングが手をふると、映像は消えた。

ミリィを見るラングの顔には、さっき見たような老齢の徴候もなく、若々しく健康そうに見えたのだが、その向こう側に本来のかれの老いが見えているようだった。

ケイは目をまん丸にしてラングを見つめている。ラングは首をゆっくりとふった。

「いいや、ケイ。われらは魔法を失うことを怖れているわけではない。老齢による死がわれらの運命なら、甘んじて受けよう。お前はまだ若いから、魔法がこの世界から失われても変化はないだろう。ただ、ほかの人間とおなじように成長するようになるだろう。それはお前にとっていいことなのかもしれないな。だから心配しないで、ミリィの手助けをして欲しい。判ったな?」

ケイはうなずいた。

ミリィは感動していた。

エルフは確かに高貴な一族だ。魔法による永遠の生命を捨ててまで、ミリィの使命を助けようという決意に、胸があつくなる。

ラングは顔をあげ、口調を変えた。

「さて、まずは使命の道筋だが、これを使うといいだろう」

ラングは着ているローブから一本の短い木の棒を取り出した。小枝を無造作に折り取ったような形で、それをラングは大事そうに持っていた。棒の一端は矢印のような形になっている。

「お館さま、それは?」

ひとりのエルフが棒を見て声をあげた。

ラングはうなずいた。

「そう、”案内棒”だ。われらエルフにとって代々伝わっている魔

法のちからがこめられた棒である」
こっそりとミリィはケイの顔を見た。彼女の顔は畏敬にうたれているようにこわばっている。
「そんなに大事なものなの？」
近づきささやくと、ケイもまたささやき返した。
「ええ……あたしもはじめて見るわ」
ラングはその”案内棒”をミリィに差し出した。
「これを道に迷ったさい、投げるのだ。その時、棒が指し示した方向が、お前たちの進む道である。ただし、いったん棒を使ったなら決してその方向から外れてはならぬ。あくまで棒を信頼するのが、肝心だ」
ミリィはラングから棒を受け取り見つめた。
あいかわらず、ただの折れた木の枝にしか見えない。
ラングはにやりと笑った。
「たいしたものに見えぬであろう？　まずは投げてみるがいい」
ミリィはラングにうながされ、その棒をぽんと空中に投げ上げた。と、棒はくるくると空中に回転したまま、その場で浮かんでいる。落ちてくるとばかり思っていたミリィはびっくりしていた。
棒の回転は水平になり、しばらく空中で漂うように浮かんでいた。やがてその回転がゆっくりとなり、ついに静止した。
棒の矢印になっている方向を見て、ラングはうなずいた。
「南をさしているな。まずはその方向を目指すべきであろう。そこで出会った誰か、あるいは場所で次の方向を探るのだ」
棒はすうーっ、と空中を滑るように移動し、ミリィの手の中におさまった。
ミリィはラングを見上げた。
「そこには何が……いいえ、町があるのですか？」
ラングはかぶりをふった。
「わからん。もともとわれらエルフはこの森をめったに出ることはないし、なにしろ千年の時が立っている。もし千年前、町があった

としてもいまもあるかどうかわからん。しかし”案内棒”はつねに正しい道を――つまりお前にとってもっとも正しい道を指し示すことは確かなのだ」

ラングは手をさしあげた。

「さあ、人間の娘ミリィ。そしてエルフの娘ケイ。魔物のヘロヘロよ。旅立つのだ！」

館の前に勢ぞろいしたエルフはラングの言葉を繰り返した。

全員に見送られ、三人は歩き出した。

少し歩くと、ミリィは背後を振り返った。

館は消えていた。不可視の魔法が働いている証拠である。

エルフの”オーラ”

館から離れるにつれ、ヘロヘロの様子が変わっていく。
漂うような歩き方は徐々にしっかりとし、とろんとした目つきは鋭くなった。
やがてぶるっと頭をふると、立ち止まった。
「ここはどこだ?」
「エルフの森よ」
ケイが答え、ヘロヘロは目を細め彼女を見た。
「お前はエルフの娘だな。なぜ、ミリィとこんなところにいる?」
「わたしがミリィと一緒に旅立つ使命を受けたからよ。それに、わたしは”お前”呼ばわりされたくはないわ。わたしにはケイという名前があるの」
ヘロヘロは歯をむき出して笑った。ずらりと鋭い牙のような歯が剣呑なひかりをはなつ。
「生意気な奴! おれのことを知っているのか?」
「知っているわ。ヘロヘロちゃん。あんた、魔王なんですってね」
「なにおう……!」
ヘロヘロは顔を真っ赤にさせ怒りの表情を見せた。片手を奇妙な形にかまえ、ケイに向かって身構える。
むっ、とヘロヘロが気合をいれると、その手の平からばりばりと音をたて、電光が放たれた。
ミリィは棒立ちになった。
しかしヘロヘロの電光はあらぬ方向へそれてしまった。ケイの身体にはかすりもせず、まわりの巨木にあたり閃光を発して消えてしまう。
ケイはにやりと笑った。
「どうしたの? あたしを狙ったのじゃないの?」
ヘロヘロは怒りに震え黙っていた。

ケイはゆっくりと話しかけた。
「あなたがなぜ失敗したのか、教えてあげる。あたしにはあなたの”オーラ”が見えるのよ。その”オーラ”が、あんたには相手を攻撃することはできないということを示しているから、平気だったの」
ケイの話を聞いて、ヘロヘロは目を丸くした。
「”オーラ”……？」
「そうよ、魔法を使う者同士、見ることの出来る”オーラ”よ。あんただって、見えるはずじゃない？」
ヘロヘロはつぶやいた。
「そうだ……忘れていた」
ミリィのもの問いたげな表情に、ケイは説明した。
「魔法が使えるようになると、他人の”オーラ”が見えるようになるの。それは人のまわりで輝くひかりみたいなのだけど、魔法が使えない人間には見ることができないの。その”オーラ”の色や形、強さで、その人の魔力の強さがわかるのよ」
そしてヘロヘロを見る。
「ヘロヘロ、あんたの”オーラ”はあたしたち、エルフの”オーラ”と同じ色、形をしていたわ。エルフの魔法は防御、治癒に長けているけど、他人を攻撃することは出来ない性質のものなの」
「おれの”オーラ”がエルフと同じ……？」
ヘロヘロは愕然となったようだった。
「千年、剣に封じ込められた間、あんたの”オーラ”はエルフと同じものに変わったのよ。もともとあんたはエルフの姿でこの世に現れたんだから、そのせいかもね」
そうか……と、ヘロヘロはがっくりと肩を落とした。魔法がうまく使えないのもそのせいなのか。
が、かれはぐっと頭をあげた。
しかし空を飛ぶことはできる！
ヘロヘロはミリィとケイを見た。
なぜこのふたりと一緒に歩いていなければならない？

おれは自由ではないのか？
かれの足が地を離れ、ふわりと宙に浮く。
ミリィは声をあげた。
「どこへ行くの？」
「おれの勝手だ！　あばよ！」
ヘロヘロの身体は森の木々の間を抜けていく。ぐんぐんと上昇し、ふたりの姿が小さくなった。
ミリィは唇を噛んだ。
このままかれを行かせてはならない！
彼女の手は腰に巻いた鞭をさぐっていた。
無意識にほどくと、ひゅうと音を立て鞭をふる。
しゅるしゅると鞭はのび、上昇していくヘロヘロの足首にからまった。
「わっ！」
ヘロヘロの身体が空中で停止し、ミリィの鞭に捕まった！
「は……離せ！」
わめくが、かれの足首にからまったミリィの鞭はぎりぎりと締め付けてくる。ぐっと全身にちからをこめ、空をめざすのだがまるで動けない。
「くくくくっ！」
ヘロヘロの顔が悔しさに真赤になった。
ミリィは鞭を握る手にちからをこめ、ぐっと引いた。
ヘロヘロの身体がミリィに引かれ、下がっていく！
ぐいぐい、とミリィは鞭を引いていく。
そのたびにヘロヘロは引き寄せられていく。
ついにヘロヘロは地面に戻されてしまった。
はあはあと荒い息をつき、ヘロヘロは地面にぺたんと尻を落とし、恨めしげな目でミリィを見上げた。
「なぜだ！　なぜ、おれを勝手にさせてくれない？」
「あんたはあたしと一緒に旅することになっているの！」

ミリィは叫んだ。
「お前と一緒に？　なぜだ！」
「あんたを善良にするためよ」
ヘロヘロの顎がだらりと下がった。
「おれを善良に？　冗談だろう？」
ミリィは首を横にふった。
「冗談ではないわ。あたし、エルフのお館さまと約束したの。あなたを殺さないという約束と引き換えに、あなたを善良にする道を探す旅に出るってね！　だからあんたはあたしと一緒に行かなければならないのよ」
ヘロヘロは顔をふせた。
その肩が震えている。
くくくくく……。
ひいひいひい……。
ほうほうほう……。
ちいさく、切れ切れの声で悲鳴のようなものを押し殺している。
やがて肩の動きがおおきく、波立つようになった。
がはははは……！
かれは哄笑していた。
吠えるようにヘロヘロは笑っている。
おおきく口を開け、牙を剥き出しにした笑い。
腹を抱え、涙を流してヘロヘロは笑い続けた。
ばんばんと手で地面を叩き、転げ周りつつ地面をかきむしった。
「あはははは！　いうに事欠いて、おれを善良にするだと？　なんという馬鹿げた話しだ！」
「なに笑っているの！　人が真面目に話をしているのに、失礼じゃない？」
ミリィの叫びはヘロヘロにあらたな笑いの発作を引き起こしただけだった。
「こ……こ、これが笑わずにいられるか！　おれをなんだと思って

いる。魔王だぞ！　その魔王を、善良にするだと？　お、お前は掛け値なしの大馬鹿者だ！」

わははは……といつまでもヘロヘロは笑っていた。

ミリィは一歩前に進み、ヘロヘロをきっとにらみつけた。

ヘロヘロの顔に一瞬、怯えの表情が浮かんだ。

ミリィは一語一語、押し出すように言った。

「いいこと、あんたはあたしたちと一緒に旅するの。これから勝手にあたしたちから離れて、どこかへ行ったり、魔法を使ったりしないこと。そしてあたしの命令には従うこと。いいわね？」

ヘロヘロは大人しくこっくりした。

ミリィとケイは肩を並べて森を歩いている。

その後を、とぼとぼとヘロヘロがついてくる。なんだか毒気をぬかれ、その足取りはすっかり自信をなくしていた。

ケイはヘロヘロを振り返り、ミリィに話しかけた。

「ねえ、どうしてヘロヘロにあんなこと言ったの？」

「どうしてって……ああ言わなければならないと思ったからよ。これからあの子を連れて行くのに、ふらふら空を飛んで逃げられたら困るでしょ」

「そうじゃないわよ。あたしが言いたいのは、あいつにあんたがどうして命令できるかってことなの。なんと言ってもあいつは魔王よ。他人の命令を大人しく聞くような奴じゃないわ」

ミリィは首をふった。

「わからない。でも、そうしなければならないと思ったの。それだけよ」

「あんたにあのヘロヘロを思い通りに出来るちからがあるなんて、信じられない。それにヘロヘロがあんたの命令に従うのも、もっと信じられないわ。これにはなにか、訳がありそうね」

「訳？　どんな訳よ？」

「さあ……でも、あいつがあんたの命令を大人しく聞くということ

は好都合ね。あんたの言うとおり、ふらふら勝手に離れられたら、お館さまの約束を果たせないから」

うん、とミリィはうなずき腰に巻いた鞭に目を落とした。

「それにしてもこの鞭、すごいわね。あたし、一度も鞭なんか使ったことはないけど、あたしが思ったとおりに動いてくれた。それにあんな長さに伸びるとは思わなかった」

「エルフの魔法がかかっているからよ。もとの何倍もの長さに伸びるし、どんな重さにも切れることはないの。これから、いろいろ使い道がありそうね」

ミリィは頷いた。

確かにこの鞭、いろいろ使い道がありそうだ。”案内棒”といい、この鞭といい、エルフの贈り物には驚くほどの魔法がこめられている。ミリィはそっと背後からついてきているヘロヘロをふりかえった。

そのヘロヘロは、あいかわらず大人しくふたりに従い歩いている。

ミリィはふと思った。

いったいヘロヘロと自分の関係はなんだろう？

そのヘロヘロは考えていた。

なぜミリィの命令に従うのだろう？

おれはどうなってしまったのか……。

判らない。

かれは頭をぶるっとふり、ふたりの後について歩いていった。

と、顔をあげた彼女は叫んだ。

「森が終わるわ！」

ケイもミリィの見た方向を見て同意した。

「そうね、エルフの森はここまで――。これからは……」

ケイは絶句した。

「なに、これ？」

森の途切れた場所に立ち、ケイは驚きに目を瞠っていた。

森の守り手（前書き）

ケイの見たものは？そしてヘロヘロが明かすエルフの秘密とは？

森の守り手

荒れ地が目の届く限り広がっている。
エルフの森の境目には、緑の草地がすぱりと断ち切られるように終わり、そこからは荒野が広がっていた。
地面はひび割れ、ところどころ枯れ木がしらっ茶けた無残な姿をさらしていた。
ひゅう……と一陣の風がほこりを舞い上げた。
「どういうことかしら？　生き物ひとつ見当たらないなんて」
ケイは荒野を見渡し、ぶるっと震えて自分の胸を抱きしめた。
ミリィは背後のエルフの森を振り返った。
森は深い緑に静まり返り、黒々とした沈黙でうずくまっている。
そこにはたっぷりとした水気と、生命の神秘が詰まっている。
しかしミリィの目の前に広がる荒野には、一滴の水、たったひとつの生き物の活動の気配すら感じなかった。
ケイの目が怒りに燃え上がった。
「きっと人間たちの仕業だわ！　かれらは無制限に森の木を切り倒し、こんな荒れ地をつくったんだわ！　なんてことでしょう」
「でも、どうしてエルフの森はそのままなの？」
「魔法がかけてあるからよ。あなた、エルフの森に入ったとき、なにか感じなかった？」
「そう言えば、なんだか怖いような気がしたわ。ここにはいるべきじゃないって、強く感じた……」
ケイはうなずいた。
「そうよ。みだりに人間が入り込まないよう、エルフの森には魔法がかけられているの。どんな日照りの年でもエルフの森にはたっぷりとした雨が降り注ぐし、人間にとってはどこか怖ろしく、近寄りがたい領域として避けるようにね。みなさい、エルフの森の境界を。まるでナイフで切り取ったみたいに正確に別れているでしょう？

これが魔法がかかっている証拠だわ」
ふとケイは膝をおり、荒れ地の地面からぱさぱさに乾燥した土を掬い取った。
そして手を開き、掬い取った土を風に流す。
ぱらぱらと土ぼこりが煙のような細かな塵となって風に流されていく。
「千年前、あたしたちエルフは人間に森を守るよう契約を交わしたわ。それが忘れられてしまったのね……もう、人間はあたしたちエルフの教えを守っていないのね」
くすくすと笑い声が聞こえてくる。
ふたりは背後を振り返った。
ヘロヘロが笑っている。
ふたりの注目をあび、ヘロヘロはおどけたような仕草で肩をすくめた。
「なにを馬鹿なことを！　この荒れ地はエルフが作ったものだ！」
「なんですって？」
怒りに燃え、ケイは一歩前へ進み出た。
「出鱈目にもほどがあるわ！　あたしたちエルフは昔っから森の番人、自然の守り手として……」
「そこが間違いだと言うのだ」
ヘロヘロの目は半眼に閉じられ、ひややかな口調になった。
「なんという自惚れだ！　おれでさえそんな自慢はせんぞ！　教えてやろう。エルフの森には魔法がかけられていると言ったな？　いったいどんな種類の魔法だ？」
「それは森を守るため……」
「そうだ。森の生き物を守るための魔法だ。だが不自然だとは思わないのか。森の生き物を守るということは、その生命力の源をほかから大量に、そして長期間奪うということなのだ」
ケイは絶句した。
「いいかな？　エルフの娘さん。よく考えてみるが良い。わしはそ

の昔、魔王として世界に君臨していたころある城をつくった。いま、ロロ村があるあたりにそびえていた城は、魔法による結界で守られ、難攻不落の砦だった。わしはその城を維持するため、大量の魔力を消費した。そして何が起きたか？　城の周りにはこのような荒野が広がったのだ。魔力の結界の外側ではありとあらゆる生命が絶たれ、毒地が点在するようになった。ここはわしがかつて作った魔王の城のあたりの光景とそっくりだ」

「そんな……」

ケイはぐらりとよろめいた。

「だがそうなのだ。わしは城を作り荒野を生み出した。だがそれが人間のせいだとは一度も思わなかったぞ。荒れ地を生み出したのは自分のせいであることは承知しておった。だがエルフはどうだ？　このような荒れ地を生み出しておきながら、それを人間のせいにするとは、なんという思い上がりだ！　お前らエルフこそ、自然の破壊者なのだ！」

「嘘よ！　そんなの嘘！」

ケイは絶叫していた。

ヘロヘロはかぶりをふる。

「お前たちはこう言ったではないか。この世界から魔法が消え去る前、エルフの館に魔法をかけ、人間の目から隠し、そしてふたたび目覚めるまで時を止めたと。ついでにエルフの森全体にも人間が立ち入らないよう魔法をかけたのだろう。いくら魔法が消えたとしても、このあたりの魔力をかき集めればそのくらいの魔法はかけられるからな。そして千年間かけっぱなしでいたのだろう？　それがどのくらい、あたりの生き物に影響をあたえるか、考えたことはなかったのか？　おそらくエルフの森の近くでは、このような荒れ地が無数にあるに違いない。それもこれもお前たちの仕業なのだ」

ケイは両手で顔を覆い、声を殺してすすり泣いた。

ミリィはそっと近づき、その肩にふれた。

びくりとケイは震えてミリィを見る。

ミリィはうなずいた。
「行きましょう。とにかく、あたしたちはお館さまの言いつけを守るしか道はないわ」
ケイの目が見開かれた。
「どうする？　それとも、あなたはエルフの館に戻る？　それでもいいのよ」
ううん、とケイはかぶりをふった。
「あんたの言うとおりね。あたしたちにはあたしたちの使命がある。まずはそれを果たすことよ」
涙を拭き、ケイは荒れ地を見つめた。
ふたりは歩き出した。
その後ろをヘロヘロは意地悪そうな笑みを浮かべついていく。

半日ほど歩き、あたりが暗くなって三人は休憩をとることにした。かつては巨大な木陰をつくっていただろう巨木は、いまはすっかり枯れ木になり根もとにはおおきなうろが出来ていた。そのうろに、三人は今夜の宿をとることにしたのである。うろのなかには小さな泉がわいていて、三人の喉を潤した。
「”旅人の樹”だわ」
ケイはつぶやいた。
「なんなの”旅人の樹”って？」
「その昔、エルフがもっと沢山いて、人間の世界と親しく行き来していたころ、こういった”旅人の樹”を植えたの。葉陰で影を作り、うろには泉がわくよう魔法をかけてね。これはそのひとつだったに違いないわ。こんな枯れ木になっても、まだちいさな泉をつくるだけの魔法は残っていたのね……」
ケイは愛しげにうろの壁をなでた。壁にはかつてこの”旅人の樹”を利用しただれかのいたずら書きであろうか古代の文字でなにかが彫り込まれている。
「キルロイはここへ来た……だれかしら、このキルロイって？」

古代の文字を読めるケイはつぶやいた。
「これを食べて」
ケイは物入れから包みをとりだし、ミリィに差し出した。
「なあに、これ？」
「エルフの携帯食料よ。これひとつで、一日なにも食べなくてもいいの」
ふうん、とミリィは差し出された包みを開いてみた。
包みはおおきな葉でくるまれており、なかには固く焼き締められた焼き菓子のようなものがあった。棒のような形に固められており、ミリィはその先端をかじり取った。
「おいしい……」
もぐもぐと口を動かしていくと、ぱりぱりに乾いた食料は口の中でもっちりとした弾力を取り戻し、適度な歯ごたえを伝えてきた。味はねっとりとした甘みと、フルーツのさわやかさを併せ持ち、かすかな塩気が全体を引き締めている。
ケイもまた一本を口にし、噛みしめていた。
「おれには呉れないのか？」
不機嫌そうにヘロヘロがつぶやいた。
ケイは目を見開いた。
「あんたがエルフの食べ物を欲しがるの？」
「おれは二日、なにも食べていない」
ああ、そうかとミリィは思った。考えてみれば、ヘロヘロはロロ村で魔王として目覚めてからずっと食事をとっていないのだ。
「そんなに欲しいならあげる」
ケイはひとつを差し出した。
ヘロヘロはつつみを開き、エルフの食料を口に入れる。
もぐもぐと咀嚼し、ひとつうなずいた。
「うむ、悪くはない」
ぺろりと食べつくすと、手に残ったかけらを舐めた。
ケイの顔を見て不審そうな表情になる。

「どうした？　妙な顔をしている」
はっ、とケイは瞬きをした。
「いえ……あの、あんたがエルフの食べ物を平気で食べられるとは思っていなかったんだもので……」
「おれをなんだと思っている？　もとはエルフの仲間だったのだぞ」
ケイは肩をすくめた。
「もう今夜は遅いわ。明日のため、そろそろ寝ましょう」
ミリィの提案にケイとヘロヘロはごろりとその場に横になった。館を出る前に三人にはエルフのマントが贈られていた。紙のように薄いが、身体をそれで覆うと寒さを遮断してまるで羽毛の布団にくるまれているように暖かい。
すぐにヘロヘロはいびきをかき寝入ってしまう。
その横で、ミリィは夜空を見上げていた。
見上げた星空の星座は見慣れたものだったが、地平線ちかくの星座はほとんどが隠れて見えない。かなり北に来ている証拠だった。
彼女はまたパックの顔を思い返していた。
ふいに腹を立てていた。
なんでパックはあの時、さっさと帰ってしまったのだろう。まるで自分とヘロヘロに怒っていたみたいだった。もうすこし一緒にいてくれたら、ギャンにあんなことさせる羽目にはならなかったはずなのに……。
だがいつまでも腹を立ててはいられなかった。
見上げる星空がミリィの涙で曇っていた。

夜明けと共に、三人は身動きをして起き上がった。
荒れ地でも夜明けの空は美しい。
かん、と叩けば響きそうな青空が広がり、太陽が顔を出すとあたりには金色のひかりが満ちた。
ケイは水筒に泉の水をつめ、方角を確かめた。
「南はこっちよ」

指を上げしめす。
ふたたび旅は開始された。

じりじりと太陽は宙天高くのぼり、影は短くなっていく。
それなのに気温はほとんど上がらない。冷たい風が、三人を押し戻すように吹きすさぶ。
土ぼこりが盛大に舞い上がり、目をまもるようにミリィは手をかざしながら歩いた。
乾燥した空気が唇をかさかさに乾かした。
ミリィはケイの水筒をうらめしげに眺めた。
ケイはがんとして水を飲むことを禁じていた。なるべく水は節約しなくてはならないというのだ。
ふと思いついてミリィはエルフのマントで顔を覆った。
これは大正解だった。
エルフのマントは薄く、目を覆っても視界は完全に確保される。しかも襲い掛かる埃から目を守ることができた。
それを見て、ケイとヘロヘロも同じように顔をぐるぐるに覆った。
なんであたしはこんな辛い旅をしているんだろうとミリィは思った。
あのヘロヘロを善良にするためだ！
だが肝心のヘロヘロがあんな調子で、そんなことができるのだろうか？

単調な荒れ地の様子に変化があったのは三日後のことだった。
足元の大地が盛り上がり、三人はあえぎながら丘をのぼっていく。
平坦な場所はかぞえるほどで、いくつもの丘をのぼり、そして下がっていく。徐々に高度はあがって、空気が薄くなるのを感じていた。
気温はさらに下がり、地面は岩がちになっていく。でこぼこの地面は歩きづらく、ミリィは何度も足をとられ転んだ。
エルフのケイはこんな状態でも軽やかな足取りに変化はなく、ま

たヘロヘロも鈍重そうな身体つきをしているくせに一度も転ぶことはなかった。
結局、一番優雅さから遠いのは人間のミリィひとり、ということだ。
先頭を歩くケイが叫んだ。
「館があるわ！」
え、とミリィは顔を上げた。

森の守り手（後書き）

今回はちょっと皮肉なストーリーになっています。エルフのイメージが壊れた、なんて言うひといますかね？

伯爵（前書き）

三人の目の前に現れた館の正体は？不思議な伯爵の登場でミリィたちの冒険はどうなる？

伯爵

館は荒れ果てていた。

かつては美しい庭園が目を楽しませていたであろう庭は一面に枯れ草が重なり、枯れ木が死人の指のような枝をひろげている。池は涸れ、かさかさの砂埃が幾重にも重なっていた。

見上げるような塀をたどり、正門前で三人は立ち止まった。正門の鉄門は倒れ、両脇の石の柱には奇妙な紋章と怪物の彫像が刻まれている。怪物はかっと口を開き、おおきく見開いた目で見知らぬ侵入者を睨みつけている。

「入るべき……よね？」

ミリィはケイに尋ねた。

ケイはうなずいた。

「そうね、”案内棒”が示した方角をたどった結果ですもん。いまは棒を信じるしかないわ」

三人はゆっくりと館の敷地に入っていった。

ミリィはちらりとヘロヘロを見た。

無表情だが、ヘロヘロはぴりぴりと緊張しているようだった。ぴんとたった耳の先端がぴくぴく動いている。

ミリィはささやきかけた。

「どうしたの？」

「ここにはなにかいる……おれには感じるんだ……！」

ヘロヘロは呻くように答えた。

ミリィはちょっと驚いた。いままでヘロヘロがこんな反応を見せることはなかった。そしてこわごわと彼女は館を見た。

館はすべて石組みで出来ていて、長年の放置で崩壊が始まっていた。蔦がからまり、根を張って石組みを壊し、それから枯れたのだろう。一面に茶色い蔦がからまっていた。

両脇に翼をひろげたような形に館は建てられており、正面の馬車

道はカーブを描いて両腕をのばしたようなふたつの階段につながっている。その階段のさきには半円形のバルコニーが続いていた。

玄関のドアは開け放たれ、観音開きのドアは片方の蝶番が折れたのか、ななめに倒れている。

三人は館の中に入っていく。どうやらここは客を迎え入れる広間だったようだ。

たっぷりとした採光を取り入れた設計で、窓からの光で中は充分明るい。

窓にかけられたぼろぼろのカーテンが、かすかな風にふわりとなびく。空気にはかすかなかび臭い匂いがまじっていた。

広間の壁という壁には無数の絵が飾られている。絵の主題はたいてい風景画か室内で、どうやらこの館の生活を描いたもののようだ。ほとんどの絵には数人の男女が登場し、楽しげに歓談したり、なにかの遊戯にふけっていたりする。絵の背景に描かれた風景は、みなかつての館の在りし日らしい。庭の緑は生き生きとして、池の水面には水草が生え、庭の緑を映していた。

ミリィは天井を見上げた。

細かな模様が精緻な浮き彫りでほどこされ、一面に蜘蛛の巣が張ってはいたが、かつての豪華さはいまも健在だった。

広間には放置されたさまざまな調度が、ほこりをかぶっている。まるである日、ふいに館の住人がここを大慌てで立ち去り、そのままにしたようで、その後誰も訪れていないかのようだった。

ケイは広間の壁にかけられた肖像画に気づいた。そっとミリィの肩にふれ、そちらを指さす。

ミリィもケイの見つけた肖像画を見た。

いったいいつの時代に描かれたものだろう。

ひとりの青年の全身像が描かれている。

年令二十代後半くらいか、ほっそりとした細身の身体に、ぴったりとした騎士のコスチュームをまとっている。真っ赤な上着に、青いズボン。膝まである革靴。ズボンの両脇には黒と黄色で縁取りを

縫い付けられている。腰には細身の剣をたらし、肩からはマントがひるがえっていた。

青年の顔はやや憂いをおび、その目はどこか遠くを眺めているようだった。真っ黒い髪の毛に、灰色の瞳。画家はこの肖像画にどこか不安な雰囲気をこめることに成功していた。

その青年の顔を見つめるミリィは、奇妙な感覚に襲われていた。なんだか肖像画の人物に見つめられているような……。

いまにもその肖像画から、青年が歩み寄ってきそうな……。

！

絵の中の青年のマントがかすかに動いた――ような気がする。

ぶるっ、とミリィは首をふった。

馬鹿な、どうかしている。

隣りのケイはぽかん、と口をあけている。

「どうしたの？」

「見た？　マントが動いたわ！」

ミリィは仰天した。

それではいまのは気のせいではなかったのか？

と、青年が一歩、足を前に踏み出した。

凝然と固まっている三人の目の前で、肖像画の青年はゆっくりと絵の中から広間の床に進み出て、立ち止まった。

顎をあげ、あたりを見回す。

その視線が三人の顔にとまる。

青年の顔がほころんだ。

白い歯がきらめき、笑顔になる。

「これはこれは、お客様とは珍しい」

青年の声は柔らかで、どこか古風な響きを持っていた。ミリィはふとエルフの館の、ラングの口調を思い起こしていた。

ゆったりと近づいた青年は、おおきく腕をふって挨拶をした。

はっ、とケイは夢から醒めたように一歩踏み出し、腰をかがめ頭を下げた。

「お騒がせして申し訳ございません。わたしどもは旅人で、この館が目にとまりつい入り込んでしまった者です。ご迷惑でしたら、いますぐにも退去いたします」

ふっ、と青年は笑った。

「ふむ、エルフのお嬢さまですな。漆黒の肌をしたエルフとは珍しい。しかし、その肌の黒さがあなたの美しさを強調しているようだ。こちらこそ、是非この館でひと時を過ごしていただきたい。なにしろ、この館を訪れるお客さまはほとんどいないような状態ですからな」

ちらりとケイの顔を見たミリィは驚いた。彼女は青年の賛辞にぼうっとなっているようだった。

ヘロヘロというと、牙を剥きぐるるる……と喉の奥で唸っていた。

「どうしたのよ？　ヘロヘロ」

「気をつけろ。あいつは――危険だ！」

「危険？」

「当たり前じゃないか。絵の中から出てきたんだぞ。お前たち、それが奇妙だとは思わんのか？」

ケイは目をぱちぱちと瞬かせ、ようやく言葉を口にすることが出来た。

「あ……あの、あたしエルフのケイと申します」

ミリィも続いた。

「あたしはミリィです」

おお……、と青年はじぶんの額に手をやった。

「これは失礼した。自己紹介がまだでしたな。わたしはウルグ・フォン・グラフ・オーデヴォン伯爵。ウルグ、とだけお呼びください。もし敬称をつけたいのなら、伯爵で結構」

周りを見回し、ウルグ伯爵は眉をしかめた。

「少々、屋敷が荒れておるようですな。お客さまを迎え入れるのに、これではちと不都合です。すこしお待ちを」

そう言うと、ぱちりと指を鳴らす。

と、あっという間に家具を覆っていた埃が消え去り、天井の蜘蛛の巣や、ぼろぼろのカーテンが元通りになる。床はまるで鏡のようにぴかぴかに磨き上げられ、窓のガラスは透明さを取り戻した。

「庭も……」

伯爵が指さすと、荒れ果てていた庭園の緑が取り戻され、池には透明な水が満々とたたえられていた。

うなずくと伯爵はマントルピースを指さした。冷え切ったマントルピースに、ぼっと赤みが差しオレンジ色の炎がゆらめいた。たちまち室内は快適な暖かさを取り戻す。

「さて、お疲れでしょう。いま召し使いがまいりますから、お座りを……」

その言葉が終わらないうちにドアが開き、召し使いのお仕着せを着た数人の男女が入ってきた。召し使いは忙しく立ち働き、広間のソファやテーブルの埃をはたき、お茶の用意を始めた。

召し使いたちに案内され、ミリィたちはソファに座った。目の前のテーブルに、茶器がセットされ、馥郁としたお茶の香りが漂った。付け合せの菓子が差し出され、ミリィはそのうちのひとつをとって一口かじる。

ケイもまた口に入れた。

おどろきにミリィと目を合わせる。

なんという旨さ！

ふたりはおもわず皿に出された菓子を貪るように食べていた。

ミリィはヘロヘロを見た。

ヘロヘロは不機嫌そうに腕を組み、出された菓子には目も呉れない。

「どうしたの？　あんたも食べたら？」

いいや、とヘロヘロはかぶりをふった。眉をしかめ、険しい顔つきである。

「おれは食わん。ここは怪しい。それに、あの伯爵も怪しいとは思わんか？　絵の中から出て来たのだぞ」

そりゃまあ……とミリィは肩をすくめた。
しかし目の前に出されたご馳走を無視するには腹が減りすぎていた。
くすり――と、伯爵は笑った。
マントルピースにもたれ、面白そうにヘロヘロを見ている。
「そこの紳士はかなり変わった御仁ですな。まあお客はなるべくなら変わった方が望ましい。いずれその方とも分かり合える日がくるでしょう。それではわたしは別に用があるので失礼します。あとは召し使いがよろしくやってくれるでしょう」
ちょっと敬礼のような仕草をすると、伯爵は広間を出て行った。
あっけにとられ、ミリィとケイは伯爵の後ろ姿を見送った。なにか、慌てている様子である。
三人の給仕をしている召し使いの一人が顔をそっとミリィに近づけ、ささやいた。
「お客さま、できるだけ早くこの屋敷からお逃げなさい。時がすぎるごとに、逃げ出すことは難しくなります」
え？　と、ミリィは顔を上げた。
ささやいた召し使いは、年のころ五十代と思われる中年の男である。日に焼けた皺ぶかい顔つきをしていた。その目はひた、とミリィを見つめ必死の表情を浮かべていた。
それはどういうことですか、と反問しようとしたミリィだったが、召し使いは顔をそらし立ち去ってしまった。
ミリィは伯爵が出てきた絵を眺めた。
窓から西日が差し込み、真っ赤な陽射しが絵にまともにさしこんでいる。絵の中にはむろん、だれもいない。
夕日が丘の向こうに沈み、夜になるとディナーとなった。
伯爵は三人を別の部屋へ案内し、またもやあの召し使いたちがどこからか出現し、夕食を用意する。
出された夕食にミリィとケイは喚声をあげた。

「エルフはわたしの記憶が確かなら、菜食主義のはずですな。あなたにも食べられるよう、工夫しました。お気に召しましたら嬉しいのですが」

伯爵の言葉に、ケイは感激している様子だった。

その言葉どおり、出された料理はすべて野菜か、根菜類を調理したもので、肉料理はひとつもなかった。

むろんミリィとしてもロロ村で肉料理を口にすることはそうなかったが、それでも季節の変わり目の祭りの前日には家畜をつぶしてその肉を口にすることがある。ちょっとは期待していたのも事実だ。

ミリィの隣りで、ヘロヘロはエルフの携帯食料を食べていた。

「どうしてそれしか食べないの？」

そう尋ねるとヘロヘロはもぐもぐと口を動かしながら首を振った。

「おれはこれでいい。お前ら、その料理がいいなら勝手に食べたら良いだろう」

夕食はおもに伯爵がミリィに質問をすることで過ぎた。

「わたしはあの絵の中でこの世の災厄が過ぎ去るのを待っておりました。そうです！　魔法の枯渇です。ご推察の通り、わたしもまた魔法のちからを生きる糧としているのです。ようやく災厄が過ぎ去り、こうしてお客さまを迎えることができ、嬉しい限りです。わたしが絵の中で過ごしていた間、世の中は変わったでしょうな？」

ほほう、蒸気機関というものが出来たのですか？　それに電気。なるほど――伯爵は千年間の世の中の変化に好奇心を抱いているようだった。

夕食の間、伯爵は談話の名手として座をもりあげた。

伯爵の冗談の大半は時代遅れで、ミリィは半分くらいしか理解できなかったが、それでも楽しいときをすごした。一方、ケイは伯爵のジョークがひどく受けたようで、けらけらと大口を開けて笑っている。

やがて夕食が終わり、おのおのにワインが振舞われた。ミリィのグラスには半分ほどそそがれ、水を足して薄められたものが供せら

れた。ケイはぐいぐいとお替りをして、目がとろんとなり、伯爵を見る視線はひどく色っぽいものになった。ミリィは用心深く、出されたワインをすすっていた。ヘロヘロはあいかわらず一滴も口にしない。

召し使いたちは三人を客間に案内した。

客間は三部屋にわかれ、三人はひとりづつ部屋をあてがわれた。部屋もまた広間と同じく豪華な内装で、ここでミリィは天蓋つきのベッドというものを初めて見た。

あの話しかけてきた召し使いにミリィは何度か声をかけようとしたのだが、かれは知らんぷりをきめこんでいた。

ミリィは腹を立てた。

そう、そんならいいわよ!

ベッド・メークを終わった寝台にミリィは仰向けに倒れこんだ。

その途端、眠気が襲い掛かってくる。

瞼がくっつく直前、ミリィはなにが気がかりなんだろうと思った。

ともかく疑問だらけなのは間違いない。

あの伯爵はどうやって絵の中にみずからを封じ込めたのか。そしてあの召し使いたち。あれらもやはり絵の中に封じ込められてすごして来たのだろうか?

しかしその疑問は長くは続かなかった。それほど疲れきっていたのだ。

ミリィはぐっすりとひさしぶりのベッドでの快い眠りに浸っていた。

絵師（前書き）

伯爵の言うまま留まる三人だったが、やがてこの屋敷の奇妙な謎が明らかになっていく……

翌朝、ケイのけたたましい大声にミリィは起こされた。
「ないっ！　ないわっ！　ああ、どうしよう……どこにも見つからない！」
なんだろう、とミリィはベッドから起き上がり、ケイの部屋へと向かった。
ドアを開けると、ケイは大騒ぎで部屋中を這いずり回り、なにかを探している。
「どうしたの？」
ミリィが声をかけると、ケイははっと顔をあげた。
「そうだ！　ねえ、ミリィ。あんたの部屋にない？　あたしの弓と矢筒？」
ミリィは目を丸くした。
「あの弓と矢？　ラングさまから貰ったあれ？」
そうよ、とケイは泣きそうな顔になっている。
「どうしよう、目が覚めたらなくなっていたの……お館さまに頂いたエルフの宝なのに……」
どうした、とヘロヘロがやってきた。
ミリィに説明をうけ、うなずく。
「そうか……伯爵が隠したのだろう。武器を取り上げるためにな」
それを聞いてケイは目を険しくさせた。
「伯爵さまがそんなことするわけないわっ！　あんた、伯爵さまを泥棒よばわりするの？」
怒りのため、声が尖っている。
へっ、とヘロヘロは肩をすくめた。
「勝手にしろ！　おれはただの推察を述べただけだ。信じる、信じないはお前の自由だ」

「弓矢がなくなった、と言われるのですか？」
朝食の席で伯爵は眉をひそめた。
そんな憂い顔すら、絵になる。ミリィはひそかにそう思った。朝食の席で、伯爵は失礼、目が弱いのでと断ってわざわざ窓のない部屋にミリィたちを招待した。朝の光は、目に悪いのですと言い訳をする。しかしほかの部屋からの間接光が開け放たれたドアから入ってきて、不自由はなかった。
ふうむ、と伯爵はしばし黙った。
やがて口を開いたかれは、意外な一言を発した。
「それでケイさん。その弓矢ですが、本当にお持ちだったのですか？」
伯爵の言葉に、ケイはぽかんと口を開けた。
そんなケイの顔を見て、伯爵は柔和な笑みを浮かべた。
「わたしはあなたの仰る、弓矢を見ていないのです。ですからなくなったと仰られても……」
「で、でもあたし昨夜は背中に弓矢を背負っておりましたし、それにミリィだって……ねえ、ミリィ。あんた見ていたでしょ、あたしが弓矢を持っているところ」
ケイは必死に訴えた。ミリィは伯爵に向き直った。
「伯爵さま。あたしもケイの弓矢は見ています。それをエルフのお館さまからケイが受け取ったところも。ですから、かならずこの屋敷のなかに弓矢はあるはずです」
伯爵はうなずいた。
「わかりました。ともかく、気の済むまで屋敷中をお探しになったらよかろう。しかしこの屋敷は広い。迷子になられたら困るので、だれか付き添いをつけましょう」
「それなら……」
とミリィは口を開いた。
「そのかたに案内を頼みたいのですが」
ミリィが指さしたのは、昨夜ミリィに向かって警告した召し使い

だった。
伯爵は無頓着にうなずいた。
「よろしい。それではバス。お前がこのかたがたを案内するのだ。判っているが、このかたがたの命令はわたしの命令と思って、従うのだぞ」
召し使いの名前はバスというらしい。
バスは深々と頭を下げた。

伯爵の言うとおり、屋敷は広かった。
さらに通路は複雑で、思いがけないところに曲がり道があり、袋小路もいくつもあった。
「伯爵さまがこの屋敷を何度も改築、増築を繰り返したため、わたしども知らない部屋がいくつもあります。ですから、わたしどもの案内なしではあまり出歩かないよう願います」
バスは丁寧だが、きっぱりとした口調でそう言った。ミリィはうなずいた。バスの言うとおり、とても案内なしで動き回る気にはならない。
三人はバスの案内で屋敷中を探し回った。
屋敷の部屋はいくつもあり、それらを回るうちミリィは疲れ果ててしまった。
ケイもまた、諦めの表情になっていく。
「ねえ、ミリィ。あたし、ほんとうにお館さまからあの弓矢、受け取ったのかな……？　なんだか自信がなくなってきちゃった」
ミリィは大声をあげた。
「あんたまで何言うのよ！　あんたがそんなこと言うと、探すかいがないじゃないの」
「御免、でもこんなに探して見つからないんじゃ、そう思うのも無理ないわ」
ヘロヘロはむっつりとミリィとケイにしたがっていた。そのヘロヘロがはじめて口を開いた。

「外へ行くにはどうすればいいのだ？」
「外？　またなんでそんなこと気になるのよ」
「いいから、おれは外を見たい。おい、バス。案内しろ」
バスは頭を下げ、先にたった。
ヘロヘロの後に歩き、ミリィはいったいなにが気になるのだろうと首をひねった。
やがてバスは外に面した廊下に一行を案内した。
ヘロヘロは庭に出た。
最初に見た、あの荒廃した雰囲気はもうかけらもない。青々とした緑は涼しげな木陰を芝生に落とし、庭の水面には水草が生い茂っている。
ヘロヘロは空を見上げた。
あ！
飛ぼうとしている。
ミリィは身構えた。
ヘロヘロが逃げようと空に浮かんだら、あの鞭で防ぐつもりだった。
が、ヘロヘロの顔が歪み、ほっとため息をついた。
「思ったとおりだ。飛べん！」
え、とミリィはヘロヘロの顔を見た。
「どういうこと？」
ヘロヘロは首をふった。
「飛べないのだ。おれの魔法は封じられている」
ミリィは驚いた。
ヘロヘロはケイを見た。
「ケイ、お前はどうだ？　なにか魔法が使えるか？」
「魔法？」
ケイはつぶやいてなにごとか口の中でつぶやき、指を一本立てた。
驚きに目が丸くなる。
「あたしも使えない！　光の魔法を使おうとしたんだけど……」

ミリィは呆然となっていた。
と、ぽんぽんとボールが弾みながらミリィの足もとにころがってきた。
何の気なしにそれを拾い上げると、陽気な声がした。
「やあ、すまん。そのボール、返してくれないか？」
え、と顔を上げると庭に数人の男女がたたずみ、にこにこと笑顔をむけている。みな健康そうで、若々しさにあふれている。その顔を見て、ミリィはあっ、と思った。
みな、広間にあった絵の中に描かれた男女である。服装すら同じだ。ボールを拾い上げ、それを手に近づいていく。
「やあ、有難う！」
声をかけた青年はミリィの顔をまじまじと見つめた。
「見慣れない顔だけど、もしかしたら新しいお客さんかね？」
はい、と答えると青年はにやっと笑う。
「そうか！　ま、あまり長逗留するのは薦められないな。できたら、早くこの屋敷を出ることだ」
それはどういうことですか、と尋ねようとした刹那、青年の顔が恐怖に歪んだ。
「あっ！　こんなこと言うつもりなかったんだ！　許してくれ……ああっ、伯爵！」
叫びながら恐怖に歪んだ顔のまま走り去った。ミリィは取り残されたほかの人々の顔を見わたした。
驚くべきことに、すべての人々が柔和な笑みを浮かべ、それまで中止された遊戯を再開している。青年の恐慌の表情など、まるで見ていなかったようだ。
ミリィの胸にじわりと恐怖が忍び込んだ。

伯爵が三人を広間に呼び、こう申し出た。
「あなたがたをお迎えした記念に、是非肖像画を描かせてもらいたい」

思いがけない伯爵の言葉に、三人は顔を見合わせた。
「あのう、肖像画ですか？」
ミリィの言葉に伯爵はうなずいた。
「さよう。もっとも描くのはわたしではない。わたしが抱えている絵師に描かせるつもりだ。腕のほうは保証する。どうかね？」
ミリィは広間に飾られた無数の額を見上げた。その視線を追って、伯爵はにっこりとほほ笑んだ。
「その通り。この屋敷を訪れた客人は、すべて記念に肖像画を描かせてもらっている。ま、わたしの感傷のようなものだ。いつまでも楽しいときをすごした記憶をあらたに思い返したいと思ってね」
ケイはミリィの袖をつかんだ。
「いいお話だわ。ねえ、ミリィ。描いてもらいましょうよ」
「ええ……」
ミリィはヘロヘロを見た。
ヘロヘロは眉をひそめ、険しい顔つきで伯爵を睨んでいる。
「どうしたの？」
ヘロヘロに顔を近づけ、ささやいた。
「いよいよだな……いよいよ、あいつが正体を現した」
「え？」
「これは罠だ！　肖像画を描かせると言うのは罠だ！」
まさか、とミリィは思った。肖像画を描かせると言うのがどうして罠なのだろう？
それでは、と伯爵は立ち上がり部屋を出て行った。いれかわり、絵師の格好をしたひとりの老人が姿を現す。ひどい年寄りで、背がまがり歩くにも苦労しているようだ。こんな年寄りがちゃんと絵を描けるのだろうか？
かれは大儀そうにイーゼルをたて、木炭を手にキャンバスに向かった。
三人のポーズを決めると、驚くべき速さで手を動かす。見る見るキャンバスに下絵が出来ていく。その顔は鬼気迫るといった形容が

ぴったりで、たちまち老人の顔には汗が噴き出した。
あっという間に下絵を完成させると、パレットに絵の具をたらし、筆先でかき混ぜ、色を調整する。
まるで殴り描くといった感じで老人の筆先はキャンバスを踊った。はあっ、はあっと激しい息遣いで老人は絵を描き進めていく。汗が滴り落ち、絵の具が飛び散った。
夕日が広間を染めるころ、老人はがくりと首をたれた。
「これまでにしよう……仕上げは明日にする……」
ぶつぶつとつぶやきながら老人は足を引きずるようにして部屋を出て行った。
三人はキャンバスに駆け寄った。
「すごい！　これをたったあれだけの時間で描いたなんて、信じられない」
ケイは口をぽかんと開け、絵に見入っていた。ミリィもまた老人の絵に感嘆を隠しきれなかった。またたく間、といって短い時間に、老人は三人の肖像画をほとんど仕上げていた。
背景は広間の窓辺で、三人が並んで立っている。絵を覗き込んだミリィは叫んだ。
「ケイ、あなた弓を持っているわ！」
「え？」
「これを見て！」
ミリィは指さした。
指先を追ったケイはあっ、と声をあげた。
見ると、絵の中のケイはあの弓矢を背におっている。
「今です！　ケイさま、弓をおとり下さい！」
出し抜けの声に三人は顔を上げた。
いつの間に現れたのか、召し使いのバスが真剣な眼差しでケイを見ている。
「そうだ、いまこそチャンスだ！　ケイ、弓を取るんだ！」
あの、庭で見かけた青年が現れ、叫んでいる。その顔は必死の表

情で、かれの背後にその場にいたほかの客も勢ぞろいしていた。
バスは言葉を重ねた。
「お願いです、わたしどもを伯爵から解放してくださいっ！」
ヘロヘロが叫んだ。
「ケイっ！　お前の弓はなくなっていないっ！　おれを信じろっ！」
ミリィもまた天啓を受けていた。
「ケイっ！　目を閉じるのよ！」
ケイはミリィの顔を見た。途端に頷き、目を閉じる。腕が上がり、背中にまわる。目に見えない弓をとり、これまた見えない矢筒から矢をとり、つがえた。
きりきりとケイの腕が見えない弓を引き絞る。
「やめろーっ！　なにをしているっ！」
広間に伯爵が入ってきた。
その顔を見て、ミリィはぞっとなった。
伯爵の端正な顔は恐怖に歪み、まるで別人のようだ。
ケイの弓先がくるりと回った。その先は伯爵の肖像画を狙っている。
その伯爵は怖ろしい顔つきのまま、物凄い勢いで走ってくる。その指先は鉤のように曲がり、顔にはてらてらと脂汗が浮かんでいた。
伯爵の声を耳にして、ケイの弓先がぐらりと揺らいだ。
「今よっ！　ケイっ！」
ミリィは必死になって叫んだ。
ひょう――、とケイの見えない弓矢が放たれ、空中を飛翔した。
ぎゃあああっ！
怖ろしいほどの絶叫が伯爵の口から広間を支配した。額をかきむしり、よろよろと上体を揺らす。
あーっ、あーっと幼児のような鳴き声を上げ、伯爵は歩き回った。
がくり、と膝がおれる。
さわさわさわ……。
かすかな音が聞こえてくる。

ミリィの肌が粟立った。
伯爵の身体が崩れていく。まるで砂でできたように、伯爵の身体全体がこまかなほこりになって散っていく。
さあーっ、と開け放たれた窓辺から一陣の風が広間を吹き渡った。その風に乗って、伯爵の身体が煙となって消えていった。あとには何も残らない。
「有難うございます……これでわたしども、解放されました……」
バスが晴れやかな笑みを浮かべている。
その顔が見る見る崩れ落ちる。伯爵と同じように、埃になって飛び散っていく。周りにいたほかの人間も、おなじように飛び散っていく。しかしかれらの顔には満足したような笑みが浮かんでいた。
あっ、とミリィはまわりを見わたした。
広間は最初に見たときと同じように荒廃していた。庭を振り返ると、やはり最初に見た荒廃が支配していた。
「絵を見て……」
ケイの声にミリィは壁を見上げた。
！
ミリィは目を瞠った。
壁を一面に飾っていた無数の絵はすべて白紙にもどっていた。豪華な額は、むなしく白地のキャンバスを飾るだけだ。
伯爵の肖像画を見上げたミリィはあっ、と声をあげた。
あの端正な青年の姿はどこにもなかった。替わりに描かれているのは、あの絵師だった。肖像画は老人の姿に変わっていたのである。その額の部分に、ケイの矢が深々と突き刺さっていた。
「おそらく伯爵は魔法が消え去る前、自分の魂を絵に封じ込める方法を編み出したのだろうな。それで屋敷を訪れる人々を絵画に封印し、その魂を支配したのだ。まず最初に自分の姿を絵に封印し、屋敷に迷い込んだ人々を幻覚で惑わし、その魂を封印した。閉じ込められた魂は、伯爵の思いのままになる運命になったのだ。あの絵師

こそが、死ぬ前の伯爵の本来の姿なのだ」
ヘロヘロはミリィとケイにむかって解説した。ふたりはヘロヘロの言葉にうなずいた。
そのふたりの顔を見たヘロヘロはにたりと笑った。
「それにしてもお前たち、ひどい顔色だ。まるで何日もなにも食っていないみたいだ」
え、とふたりは顔を見合わせた。
あっ、とふたりのけぞる。
目の下には隈が出来、ほほはこけている。
ぐうーっ、きゅるるる……。
ふたりの腹が鳴っているのだ。
「ヘロヘロ……あんた……」
ミリィは恨めしげにヘロヘロを見た。ヘロヘロの頬はつややかで、充分栄養が満ち足りているように見える。むろん、エルフの携帯食料をかれだけは食べていたからだ。

ひどい脱力感と戦いながら、ミリィとケイは必死になって館から脱出した。脱出する前、伯爵の屋敷はまるでつっかえ棒が外れたように崩壊をはじめていたのである。
ごろん、ごろんと音を立て、伯爵の屋敷の石組みが崩壊していく。もうもうたる白煙が立ち上り、屋敷の柱が、天井が、そして壁が崩れ落ちた。
ようやく敷地から脱出したとき、屋敷は跡形もなかった。まるで千年間徐々に崩壊していったのが、一瞬に時が動き出したかのようだった。地面にへたりこみ、ケイはミリィにエルフの携帯食料を差し出した。無言でそれを受け取り、ミリィは口に入れた。エルフの食料が喉を通り、身体に吸収されるにつれ、彼女の身のうちにちからが満ちていく。
崩壊した屋敷を、夕日が赤く染めていた。
「それにしても、どうしてあの時だったの。召し使いのバスはほか

でもあたしたちに真相を話してくれてもよかったじゃない」
　ヘロヘロは首をふった。
「わからん。だが、あの時以外肖像画に日の光が差し込むことはなかった。夕日が傾き、窓を通して絵を照らすのは、この時間しかなかったのだ。おそらく日の光に肖像画のちからは封じられたのだろう」
「それじゃなぜ伯爵はカーテンを下ろさなかったの？　それで簡単に防げたはずじゃない？」
「だからあくまで推測だ。たぶん、伯爵の実体は存在しないのだ。伯爵にできるのは幻覚を見せることだけで、実体のあるものに手を触れることはできないのだ。屋敷も長年、あのままで存在し、カーテンがないあの窓から同じ時刻に夕日が差し込み、その間だけ召し使いたちや、虜囚となった客たちは自由をとりもどせるのだろう」
　そう……。ミリィはヘロヘロの言葉にうなずき、崩壊していく屋敷を眺めた。
　それにしても、どうしてエルフの”案内棒”はこんな場所にミリィたちを導いたのだろう。あやうく命を落とすところだった。
　物入れから”案内棒”を取り出し、まじまじと見つめる。
　ケイがじっと見つめている。
　彼女はうなずいた。
「たぶん、これがあんたの使命に必要なことだったのよ。”案内棒”の示した方向に間違いはないわ。さあ、次の場所を目指しましょう」
　ミリィは立ち上がった。
　ぽん、と”案内棒”を宙に放り投げる。

絵師（後書き）

次回はパックの冒険が再開します。帝国の首都、ボーラン市へ向かうパックはそこでどのような冒険をするのか？お楽しみに！ＰＳ：この時代より千年前のことを書いた「封魔の剣」もよろしく！

ボーラン市へ！（前書き）

いよいよパックたちは帝国の首都ボーラン市へ向かいます。さてミリィの行方を探るパックたちは、そこでどんな冒険をするのか？

ボーラン市へ！

しゅっ、しゅっと蒸気の音を立て、ニコラ博士のムカデは街道をすべるように進んでいる。

陽射しは暖かで、片側が山肌もう片側には草原が広がっていた。

ムカデに乗るのはパック、ホルン、ニコラ博士とホルスト老人、そして真鍮のボディをきらめかせているマリアである。

目指すは帝国の首都、ボーラン市。

ここにやって来る前、一行は総督府に立ち寄り、サックの仕出かしたことを訴えた。総督を務めるあの中佐はその訴えに驚き、ホルンに調書を作るため協力するよう命令した。それを受け、かれらは総督府のある町に数日滞在し、協力していたのである。その間、中佐はロロ村に兵士を派遣し、ホルンの訴えの裏づけをとった。そしてそれに間違いないとなると、さっそくサックを全国指名手配すると確約した。

ようやく解放され、かれらは博士のムカデに乗り、首都を目指す旅を再開することになったのだ。

ぷかりとパイプの煙草をふかし、ホルストはしげしげとマリアを見つめつぶやいた。

「まこと驚くべき発明ですな、あなたのマリアは。これがただの金属の人形であるとは、いまでも信じられませんな」

運転しているニコラ博士は上機嫌だった。自分の発明を誉められるのが、かれにとっては至福の悦びである。

「いや、わたしもこのマリアがこのように意識を持ち、自分の意思で動くことになるとは予想外でしてな」

ほう、とホルストはパイプを口から離し、火皿をひっくりかえしぽんと叩いて灰をすて、もう一度一掴み煙草を詰めなおした。口の中でむにゃむにゃと唱えると、その指先にぽっ、とちいさな炎があがる。その炎をパイプにつけ一服吸い込む。もうもうと煙草の煙を

吐き出し、ニコラ博士に向き直った。
「予想外と言えば、わしの魔法のちからも日々強まっているようですな。それに火の魔法だけでなくほかの魔法も使えるようになってきました」
ニコラ博士の目がきらめいた。
「ふむ。魔法のちからが強まったということは興味深い。それはどう考えるべきですか？　ひとつ、あなた自身の魔法のちからが強くなった。ふたつ、空中に満ちている”魔素”の量が増えている。考えられるのはそのふたつですが、あなたはどうお考えですか」
「両方でしょう。あの封魔の剣が引き抜かれてから、わしは日々魔法の練習に励んできました。あなたの言う”魔素”ですかな？　そのちからも強まっているのを感じますし、またわし自身の魔法に対する感度も強まっているのを感じますわい。おそらく、こういったことはわし以外にも起きている可能性はある」
「というと、ほかにも魔法を使える人間がいると？」
「当然でしょうな。千年間魔法はこの世から消えておりましたが、その記憶はまだ人々に生きております。ほかにもわしのように魔法を研究してきた人間がいるに違いないとわしは思います」
ふたりの話を聞いていたホルンは尋ねた。
「いったい魔法とはなんでしょう？　なぜ、人は魔法を使えるのでしょう」
ニコラ博士は肩をすくめた。
「それが判れば苦労はないのですがな……ただ、わしは”魔素”の存在に気づいていらい、少々研究を重ねてきました。その結果、魔法は”魔素”だけで使えるのではないということがわかってきたのです。つまり魔法を使うには”魔素”だけでなくエネルギーが必要だということですな」
「話しがよく判りませんが」
「ふむ……かなり曖昧な話であることは承知の上です。たとえばこのムカデを考えてください。このムカデは蒸気の力で動きます。蒸

気は火の熱で水をあたため、水が蒸気になるとそのちからをシリンダーに送ってピストンを動かします。蒸気を作るには大量の熱エネルギーを必要とします。魔法もおなじことで、魔法を使用するということはまわりのエネルギーを奪うのです。ですから蒸気で動くマリアが魔法のちからで意思を持ち、自分で考え行動するのも”魔素”に蒸気のエネルギーが加わることによる結果なのです」

「熱のエネルギーが魔法には必要なのですか？」

「いいや、熱だけではありません。エネルギーの形はさまざまですな。ホルストさんの火の魔法の場合、奪われたエネルギーはすぐ熱エネルギーになって空中に放出されますから損失はありません。しかし別の魔法を、大量に、そして持続的に使った場合の影響はどうでしょう？　多分、自然になんらかの影響をあたえずにはすまんでしょう。最悪の場合、生き物のすまない荒れ地がひろがることになるのではないかと思っています」

ホルンの眉がせばめられた。

「となると、魔法を使うことは考え物ということですか？」

ホルストはうなずいた。

「そうです。それにはまったく、わしも同意します。わしは魔法の研究を長年続けてきましたが、古代の魔法使いたちの記録を読むと、みな魔法の濫用をいましめております。きっと、古代の人々は魔法を使うことによる副作用について心得ているのだと思います」

かれらの話を聞いていたパックは退屈していた。

ムカデは順調に道を進んでいる。

蒸気エンジンの音は単調に繰り返し、ムカデの六対の足が規則正しく繰り出されるリズムに、ついうとうととなる。

パックは街道に沿って、鉄路が陽射しに光っているのに気づいた。

「父さん、あれ」

指さすとホルンはうなずいた。

「ああ、あれは鉄道だ。ボーラン市に繋がっている」

そう言うとちらりと空を見上げ、太陽の位置を確認した。

陽射しは山肌に隠れそうに傾き、あたりに長々とした影がのびていた。

「この時間では汽車はもう通過してしまったな。明日になれば駅のある町に着くから、そこから汽車に乗ればボーラン市には半日でつくだろう」

あることがパックには気になっていた。

「ねえニコラ博士。このムカデはどうするんです？　これに乗ったままじゃ、汽車には乗れないよ」

ニコラ博士はにやりと笑った。

「まあ、見ておれ。ちゃんと考えておるから」

言うなり、博士はムカデの進路をぐいと線路に向けた。

なにをするのだろうとパックが見ていると、博士はムカデを線路に乗り上げ進行方向をボーラン市に向ける。

「博士？」

ニコラ博士はひとつうなずくと、操縦席のレバーを引いた。

と、がちゃんがちゃんと音がして、ムカデの六対の足が腹部に折りたたまれてしまった。かわりに車輪があらわれ、鉄路に噛み合わさる。

「なにするんです？」

ホルンが叫ぶ。

「なにをって、これからボーラン市へ向かうのさ。出るとき、ちゃんと時刻表を調べてきたからこの時間以降、汽車は朝まで通過しないことはわかっておる。心配するな、夜明け前にはボーラン市へ着く！」

手を伸ばし、手元のハンドルを引いた。

ぽーっという汽笛の音が鳴り響く。

「さあ行くぞ！　帝国の首都へ！」

パックはつぶやいた。

「いいのかなあ？　こんなことして」

「かまわん！　せっかくの線路だ。使わないのはもったいないでは

ないか！」
アクセルを踏み、博士はムカデを全速で走らせた。
ムカデは線路を快調に進んでいく。

夜明け前、線路の向こうにボーラン市の威容が見えてきた。
「は、は、は、博士え……や、や、やっぱり、き、き、き、汽車に乗ったほうが良かったんじゃないのかなあ……」
がちがちと震えながらパックは音を上げた。
「ば、ば、ば、馬鹿を言え……！　う、う、う、運賃を払わずに来れたんだぞ！　と、と、と、得したと思わんか！」
ニコラ博士もまたぶるぶる震えつつ強がっている。
この時間、気温は零度ちかくに下がってきていた。吹きすさぶ寒風はまともにムカデに吹きつけ、四人は寒さに震え上がっていた。平気なのはロボットのマリアだけである。
なにしろムカデの操縦席は吹きさらしで、風除けなどなにもない。強い向かい風に、パックの目に涙が滲んでいる。かれはまっすぐ進行方向を見据え、近づいてくるボーラン市を見つめた。
古い城塞都市の特徴をボーラン市は残し、山の斜面に幾重にも構築した城壁にかこまれ中心に王宮がそびえている。
まわりに皇帝につかえる臣下の屋敷、さらにそのまわりを貴族の屋敷がとりかこんで王宮を守る構造になっている。
そのまわりを取り囲んでいるのは商業、工業に従事する平民の家々である。ボーラン市の食料を調達するため、かつては市のまわりを広大な農地が取り囲んでいたが、それらはいまや低所得者むけの住宅に変わっている。食料はボーラン市が支配する農業専門の町、村から毎日届けられるのである。
その低所得者むけの住宅地には、ぽつんぽつんと学校や病院などの公共施設が点在し、ひろい公園が住民に開放されている。
「すげえ……ロロ村とはぜんぜん違うなあ……」
パックはぽかんと口を開けたままつぶやいた。

その時、山肌をさっと朝日が染め上げた。
地平線から昇った朝日は、見る見るボーラン市を輝かせていく。王宮の外壁に使われている大理石の化粧板が、その朝日にまぶしく反射し、五彩の色にきらめいた。
夜明け前から活動していたのだろうか、市の中心部近くからもくもくと大量の煙が噴きあがっている。さらに市のはずれにも、巨大なレンガ積みの建物がそびえ、そこの煙突から大量の黒煙が噴きあがっている。
「博士、あれはなんです？　すっげえ、煙出ているけど」
「すっげえ……なんて言うでないぞ。お前が田舎ものだというのが一発でわかるわい。まあ、答えてやる。あれは発電所じゃ」
「発電所？」
「ロロ村では電気がほとんど使われておらんから知らんのも無理はない。ボーラン市では、各家庭に電気を送っているのじゃ。そのための発電所じゃよ」
それを聞いて、ホルンは目を怒らせた。
「あんなに大量の煙を吐き出しているんじゃ、ひどく空気を汚しているに違いないでしょうな。市の人間は、あんな煙の中、どうやって暮らしているのです」
博士は肩をすくめた。
「どうしようもないわい。電気なくして、市の生活は一日も過ごせん。煙はおもに平地に住む住民の地帯に流れ込んでいるから、毎年、多くの肺を病んだ患者が出ておる。わしがボーラン市を逃げ出したのも、あれが一因なのじゃ」
そういう目でボーラン市を見ていると、うっすらと市を灰色の煙が覆っているのがはっきりと判る。
ぽーっ、とかすかに汽笛の音が風に乗って聞こえてくる。
パックは博士をふりかえった。
「博士！」
「そろそろ鉄道が再開したようじゃな。どれ、わしらもここから離

れることにしようか」
博士はレバーを操作し、ムカデを停止させた。
がちゃ、がちゃんと派手な音を響かせ、ムカデの腹部から足が飛び出し、それまで線路に乗っていた車輪がはずれた。
がちゃ、がちゃと横歩きでムカデは線路から離れていく。
と、線路の向こうからがしゅがしゅと蒸気機関の音を響かせ、機関車が接近してきた。
ぼおーっ、とけたたましい警笛を鳴らし、機関車はムカデのすぐ横を通過していく。疾走して行く機関車の動輪がパックの目の前を横切っていった。
パックは噴き出した汗をぬぐった。
「あっぶねえ……あのままあそこにいたら、轢かれているところだった！」
博士もうなずいた。
「まったくじゃ……！」
ふうーっ、とホルンとホルスト老人がため息をついた。かれらはあやうく命を落とすところだったことに、ようやく気づいたのだった。

夜明けの市街を、ムカデが六対の足を動かし前進していく。
出勤途中の市民が、ぽかんと口を開け、それを見送った。
蒸気で動く車はそう珍しい光景ではない。実際、ムカデの横を数台の蒸気車が白い蒸気をシリンダーから噴き出させ、しゅっしゅっという蒸気の音をたてて通過していく。
「おい、あんたら、そりゃ一体なんだね？」
好奇心の強い蒸気車を運転しているひとりの男が、運転席から首を伸ばして声をかけてきた。どこかのお抱え運転士なのか、制服らしきものを身につけ、口の端に楊枝をくわえている。制服は派手なグリーンで、運転している蒸気車のボンネットには家紋が象嵌されていた。

男の問いにニコラ博士は答えた。
「見てわからんか？　蒸気ムカデじゃ！」
へえ、と男は訳がわからないままうなずいた。
「どこのメーカーの製品だね？　あたしゃ、こう見えても車には詳しいが、そんな蒸気車は見たことないな」
「わしが作ったのさ」
「あんたが！　じゃあ、あんた発明家ってわけだ！」
まあな、と博士はうなずいた。そろそろ男の詮索好きがうるさくなってきたようだ。
「じゃあな」
ハンドルを廻し、男の運転する蒸気車から遠ざかる。男は運転席から首を突き出し、いつまでも見送っていた。

「さて、どうやってミリィの行方を探すかだが……あんたはなにか考えがあるのかね」
昼近くになり、ようやく大通りに面したレストランが店を開け、一行はそのひとつに休憩をして相談することにした。
道路に面した外にいくつもテーブルがならび、そのひとつにかれらは案内された。給仕が要領よく茶器を用意し、茶の香りが立ち昇った。
口火を切ったのはホルスト老人である。
かれは悠揚とパイプを取り出し、いつものように火をつけ一服吸い付けた。
問われてホルンは腕を組んだ。
「といっても、だれかれ構わず聞きまわるわけにもいかんしな……なにか良い方法はないかな」
ニコラ博士が口を開いた。
「あんた新聞というものを知っておるかね」
「新聞？　まあ、知っていますが、それがなにか？」
「広告を出すのじゃよ。空を飛ぶ白球についてなにか見たことのあ

る人、噂を聞いた人がいないかどうか、あて先は新聞社にしてな。それで待てば良い」

「なるほど！」

ホルンの愁眉が開いた。

それを聞いて、パックはじりじりしていた。

そんなことでミリィの行方が判るのだろうか？　パックは決意した。新聞に行方を尋ねる広告を出すのも良いだろう。しかし、パック自身でなにかやってやろう。

ホルンとホルスト、そしてニコラ博士が額を集め、なにごとか相談をはじめたのを見て、パックはそっと立ち上がった。

するとマリアも立ち上がる。

あちゃ、とパックは頭をかいた。

そうだ、マリアのことを忘れていた。マリアはあれからどこへ行くにもパックの側について行動する。トイレや風呂にもついて行こうとするので、なんとかそれはやめさせたが、それでもマリアの注意はパックからそれることはなかった。

マリアに向けて指を一本、口にあて静かにと合図するとパックはそろりと歩き出した。

ところがホルンの目は節穴ではなかった。

「どこへ行くんだ？」

ホルンに呼び止められ、ちぇ、とパックは手をポケットに入れた。

「父さん、おれ父さんの言っただれかれ構わず聞いて回るって方法試してみるよ。いいだろう？」

ふむ、とホルンはうなずいた。

「まあ、いいさ。やって見るがいい。おれたちはあそこの――」

と、レストランの向かいにあるホテルを指さした。

「ホテルに部屋をとっているから、暗くなる前に戻って来るんだぞ」

わかった、と手を振ってパックは歩き出した。

充分離れたところで、パックは声を張り上げた。

「ニコラ博士ーっ！　ムカデを借りるよ！」

「なんじゃと！」
博士は仰天して目を剥いた。
もうパックの姿は消えていた。

ボーラン市へ！（後書き）

次回はあらたなキャラクターが登場します。それは……プリンセスです！やっぱりファンタジーにはお姫さまがいなきゃね！

プリンセスの憂鬱（前書き）

帝国の姫君の登場です！

プリンセスの憂鬱

サンドラ・ドゥ・アンクル・コラル・カチャイという長ったらしい正式名称を持つひとりの少女が、窓辺で退屈そうに外を眺めていた。

彼女は十四才。

親しい友人は彼女をサンディと呼ぶ。

ほっそりとした身体つきの、輝くような金髪の持ち主で、その瞳ははっとするほど美しいブルーである。

尖った顎と、ちいさな鼻。いつもびっくりしているような大きな瞳。その瞳はつねになにか面白いことを探し、生き生きと動いている。白い肌は一点の染みもなく、磁器のような滑らかさを保っている。

防寒のため裏地に細かな羊毛を植え付けた顔をすっぽりと覆う帽子をかぶり、ながい袖をだらりとさげたワンピースを身につけている。その胸にはコラル帝国の紋章が金糸、銀糸で縫い付けられていた。

ふっ、と憂鬱そうな顔で彼女は部屋を見渡した。

小柄な彼女にとって、この部屋は大きすぎる。いや、だれにとっても巨大すぎるだろう。

まるでテニス・コートほどもある巨大な天蓋つきのベッド。巨人が使用するのかと思われるほどの箪笥。百人がいっぺんに座れるほどのソファに、図書館ひとつがまるごと引越してきたような本棚。なにひとつとして彼女に合わせたサイズの家具はなかった。

なにしろ彼女こそ、コラル帝国の継承順位十六位である姫君なのだから。

十六位という継承順位は、そう高いものではない。彼女のうえには五人も男子の皇太子がいるし、帝国の継承には男子が優先されるから、彼女が女帝となって帝国に君臨する可能性はそう高くはない。

しかし十六位という順位は無視していいほど低い順位ではなかった。なにしろ彼女のしたには、百人以上の継承資格候補者がひしめいているのである。

来年は十五才になる。

十五才！

ああ、永遠に十五才の誕生日がこなければいいのに……。

サンディはため息をついた。

なぜなら帝国の姫君は十五才の誕生日がきたら、かならず結婚しなければならないという慣習なのだ。

たぶん、帝国の友好都市のひとつを統治する貴族か、王宮に伺候する大臣の子息、あるいは有力な軍人のもとへ嫁入りさせられるはずだ。それが帝国の統治にとって必要なことなのである。

サンディの目が怒りに燃え上がった。

そんなの厭だ！

彼女の瞳がふたたび部屋の外にさまよった。

ここから逃げ出すことを、ずっと物心ついてから考えてきた。

しかしどうやって？

サンディが生まれたのは王宮の塔のひとつ、母はサンディを産んですぐ死に、それ以来何人もの乳母に育てられて成長した。

生まれてからこのかた、彼女は王宮以外の場所を知らない。六才になると王宮顧問の家庭教師が彼女の教育を任され、皇族としての教養、道徳、礼儀を身につけさせられてきた。

王宮の図書館には外の世界のことを書いた書物があって、サンディはわずかな自由時間にそれらの本を読み漁り、空想をふくらませてきた。

やがて十才をすぎたころサンディは個室を与えられた。いま、彼女がいるこの部屋である。

王宮の東の端にあり、塔の中ほどにある円形のこの部屋は、朝日と夕日があたる位置にあって、東の窓辺に昇った朝日が、西側の窓

辺にしずむのを眺められた。

塔があるのは王宮のかなり高層階にあたり、窓辺にすわって見おろすとボーラン市を一望できた。

そこから見る市の全域で、朝夕平民たちの屋根から立ち上る煙に、夜になるとともる灯火をサンディは憧れの目で見つめるのだった。

季節ごとにボーラン市にはサーカス団がやってくる。

陽気な音楽が鳴り響き、それらが風に乗って聞こえてくると、サンディはどうしようもなく王宮を飛び出したくなる。

が、王宮を固める護衛兵は、王宮を外から守るだけでなく、サンディが勝手に外に飛び出すことも防いでいる。なんども外へ逃げ出そうとしたサンディは、それらの衛兵たちがけっして自分を気ままにしてくれないことを骨身にしみて確信した。それ以来、空想の中で彼女は王宮の外を歩くことを夢見てきた。

贅沢な暮らしであるが、その実際は囚人とそう変わりない。

窓辺にすわるサンディの耳が、階段をあがってくる足音をとらえた。

彼女はむきなおり、ドアを見つめた。

ドアが開き、ひとりの背の高い女が姿をあらわした。

濃い、灰色の地味な上着に足首までかくれるスカート。髪の毛は高々と結い上げ、一筋の乱れもゆるしていない。

がっしりとした顎に、やや黄色みをおびた肌の色をした中年の女である。鼻のうえにちいさな縁なし眼鏡をかけ、レンズの向こうからじろりとサンディを見下ろした。

「レディ・サンドラ！　また授業から逃げ出しましたね！」

声はひややかで、突き刺さるようだ。

サンディは唇をつきだした。彼女だけが「レディ・サンドラ」と堅苦しく呼びかける。サンディなどと、親しく呼びかけることは考えられなかった。もっともサンディのほうで、彼女にそんな親しげな呼びかけをしてもらいたいなどと思ったことはなかったが。

「逃げ出したんじゃないわ。あの時、丁度メルが……」

メルというのはサンディが飼っている猫の名前である。サンディはこの猫を可愛がっていた。

女は手に持った教鞭をさっと立てた。サンディは口をつぐんだ。女の名前はタビア女史。サンディの家庭教師のひとりである。彼女の担当は国語と歴史である。

タビア女史の背後から、ひとりの女の子が姿を現した。サンディと同じくらいの年頃である。亜麻色の髪に、同じ色の瞳で、サンディを見るとかすかに笑みを浮かべた。唇がわずかに開き、ちいさな歯並びがのぞく。

しかし彼女の笑みのたくわえはそれでつきたのか、すぐ無表情に戻る。ややうつむき、ちらちらとサンディを見ている。

それを見てサンディは開けっぴろげな笑顔になった。

「エイラ！　こっちへ来なさいよ！」

エイラ、と呼ばれた少女はおどおどとした感じでタビア女史の側をすりぬけ、近づいてきた。サンディは彼女の両手をとった。

「ひさしぶりじゃない！　どうしてた？」

「おやめなさい！」

まくしたてようとするサンディを、タビア女史はぴしゃりとやりこめた。びくりと肩をすくめ、サンディとエイラはタビアを見上げた。

「まだ授業も始まってもいないのに、そんなうかれようでは困ります。さあ、授業を始めますよ」

ぴしり、と教鞭を手の平にうちつけ、タビア女史はかつかつとヒールの音を響かせ、机のむこうに椅子を運び、座った。

「さあ、あなたがたも座りなさい」

はあい、とふたりは返事をして椅子に座り、ちいさな黒板を取り出した。

しばらく授業が続き、タビア女史はきっとサンディを見つめた。

「違う、違う！　何度繰り返したら判るのです。その綴りは間違い。さあ、罰を受けなさい」

その言葉におどおどとしてエイラが立ち上がった。
タビア女史は机を回ってエイラの前に立つと、教鞭を握った。
「手を出しなさい」
はい……、とエイラは両手を差し出す。
ぴしり！
教鞭の先端がエイラの手の平を打った。
サンディは目を閉じた。
間違えたのはエイラではない。サンディである。しかし罰を受けるのはエイラ。そういうことになっているのだ。
エイラはサンディのご学友である。
学友はサンディの変わりに罰を受ける。サンディはプリンセスであるから、その身に鞭を揮うわけにはいかない。それでエイラのような学友が代わりに罰をうける。王族の子弟はみなこのような教育をうけていた。
サンディが間違えるたび、ぴしっ、ぴしっと鞭の音が部屋に響く。
その音を聞くうち、サンディの目に涙がたまる。
ふっ、とタビア女史は顔を上げた。
サンディの目にたまる涙を見て、首をふった。
「あなたがちゃんと勉強をしないから、エイラが罰を受けるのですよ。判っているのでしょうね」
はい……、と消え入りそうな声でサンディは返事をした。
タビア女史は立ち上がった。エイラも立ち上がる。
「今日の授業はこれまでにしましょう。明日は五十四ページからはじめます。いいですね、ちゃんと予習をしておくのですよ。レディ・サンドラ」
くるりと背を向け、タビア女史は部屋を出て行った。エイラもその後に続く。部屋を出る直前、エイラはちょっと手を挙げ、サンディを見た。
サンディも手を挙げる。
ばたん、と音を立てタビア女史はドアを閉めた。かつかつ……と

いう足音が遠ざかる。
一人残されたサンディは、拳を握り締めた。
いつか……ここから逃げ出そう！

実を言うと、サンディはいつでも王宮から逃げ出すための準備を進めていた。
王宮は山の斜面に建てられ、最初の建物が建てられてから数世紀が過ぎ去っている。その間、帝国の拡大にあわせるように新たな望楼や、塔が増築され、皇族の家族が増えるにつれ部屋も建て増しされてきた。もっとも古い部分は中心部にあって、その周りにあらたな施設が取り囲むように建て増しされたのである。
ゆえに王宮内部には思いがけないところに廊下や、階段があり、その内部はちょっとした迷宮になっている。
生まれてからずっと王宮に暮らしてきたサンディは、王宮を守る衛兵よりずっと詳しくその内部に通じていた。
ある日のこと、サンディは地下に通じる秘密の通路を発見したのである。
おそらく帝国の成立以前の、コラル王国のころ、まだ周囲の同盟都市との関係が不安定だった時点で、非常事態に備えるための脱出路なのだろう。その通路をたどったサンディは、そのさきが王宮の外に繋がっていることに気づいた。
何度も通路を行き来して、その先がボーラン市内に通じていることを確かめたサンディは、ひそかに脱出の準備を進めていた。
変装のための服や靴、数日分の食料や金にかえるための宝石（サンディは王族の常として現金などは持ち歩いたことはなかった）などを部屋に隠し、いつの日か王宮を抜け出す日を待っていたのである。
こうしていつでも王宮を抜け出せる態勢を造ってはいたが、いざとなると気がくじけた。
それはそうだろう。生まれてからずっと王宮で暮らし、生活して

きたのだから。外の世界についてはなにも知らないし、体験したこともない。せいぜい窓辺から、ボーラン市の市街を眺めるくらいである。

いつでも抜け出せる……。

そうなると、それはいつ、という問題だ。それが今日なのか、それとも明日なのか、ひたすらサンディは自分の中でこの時、というのを待っていた。

授業が終わり、いつものように窓辺に座ったサンディは、ボーラン市からきらきらとした光がまたたくのを目にして、なんだろうと思った。

ちょっと考え、部屋から望遠鏡を取り出す。

サンディはお姫様であるから、たいていの望みは叶えられた。外に出る以外は。そこで望遠鏡が欲しい、と教師の一人にねだったのである。

翌日届けられた望遠鏡に、サンディは夢中になった。それでボーラン市のあちこちを覗き、市民の生活を目の当たりにするのが、彼女のちかごろの楽しみでもあった。

望遠鏡を覗くサンディの目が驚きに見開かれた。

金色の輝きをまとった少女が見える。

最初、ブロンズ像かなにかと思ったが、人と同じように動き回っているのを見て考えを変えた。

なにかしら？　なかに人が入っているのかしら？　もし、中に人が入っているのなら、そうとう痩せた人間にちがいない。その金色の少女は、目にする限りふつうの女の子のように見える。その中に人が入るなら、骨と皮のようにやせていなければならないだろう。

サンディの好奇心は強く刺激された。

待っていたきっかけ――。

彼女は、今日こそその日だと確信した。

ベッドの下に潜り込むと、小箱を引き出す。中には、王宮を脱出する日のための、用意の品が詰め込まれている。

ワンピースを脱ぎ捨て、下着だけになる。
黒いタイツを履き、膝までおおう柔らかな革靴に足を滑り込ませる。
その上から茶色のキルトをまき、濃い緑色の上着に、青いチョッキを身につけた。髪の毛は臙脂色のリボンで結び、狩猟用の帽子をかぶる。そして裏地が赤、表が黒地のマントをはおる。
腰にはふとい飾りつきのベルトを巻き、それには小物入れを取り付ける。身を守る短剣は、ベルトと革靴に鞘をとりつけ、二本用意する。
帽子には飾り羽をあしらい、手首には小粋なブレスレットをはめると、とても王宮のプリンセスとは思えない、どこかのお転婆な女の子に変身した。
その自身の姿を姿見で確認して、サンディはちょっと得意げに笑みを浮かべた。
そっとドアから通路を見て、誰もいないことを確認すると、そろそろと足音を忍ばせ階下へと移動する。
数階分階段を下り、彼女はある部屋へ向かっていた。

とんとんというひそやかなノックの音に、エイラはそれまで読んでいた本から顔をあげた。
ふたたびノックの音。
エイラは立ち上がり、ドアの覗き穴の蓋をあげた。
ブルーの瞳と目が合い、エイラの目は驚きにおおきくなった。
ドアが開かれると、サンディが飛び込んでくる。
「サンディさま……」
エイラがつぶやくと、サンディはしっ、しっと指を唇にあてる。
「大きな声をださないで！」
エイラはサンディの姿を素早く見てとった。
すこし哀しげな表情になる。
「王宮の外にいらっしゃるのですね……」

その言葉に、サンディはちょっとばつの悪そうな顔つきをした。
「まあね、今日決心したの。あたし、なんとしても王宮の外へ出るってね」
「そうですか。ご無事をお祈りしています」
「ね、エイラ。あんたも一緒に来ない？」
「わたくしが？」
エイラはびっくりした。
「そうよ。あたしが王宮を逃げ出したら、あんた叱られるに違いないわ。今日だってあたしのせいで、鞭の罰を受けたんだもの。ね、一緒に行こうよ！」
その言葉に、エイラはゆっくりと首をふった。
「行けません……どうぞおひとりで行って下さいませ。あたしは残ります」
「どうしてよ？　あんた罰を受けるかもしれないのよ」
「それでもいいのです。どうかサンディさま、おひとりで。そのほうがあたしなど足手まといになりますから」
そう言うとエイラはにっこりと笑った。
サンディの肩がこころもち下がった。
「判ったわ。それじゃ、あたしだけで王宮を出ることにする。なにか聞かれたら、あんたはなにも見なかったし、聞かなかったことにするのよ！」
はい、とうなずくエイラに、サンディは彼女の肩をぎゅっと抱きしめた。
「あんたを残すのは辛いわ……。いつか戻ったら、外のことといっぱい話してあげるからね！」
ちゅっと頬に素早くキスをすると、サンディは風のようにエイラの部屋から出て行った。
それを見送るエイラの顔に、ある決意が浮かんでいた。
彼女は部屋を出ると、急ぎ足になって階段を上り、サンディの部屋へと移動した。ドアは思ったとおり開いている。

サンディがそれまで身につけていた服が脱ぎ散らかされている。それを拾って、エイラは自分の服と交換した。帽子をかぶると髪の毛が完全に隠され、背中からならサンディと見分けはつかない。

そしてエイラはサンディのベッドに潜り込むと、布団を頭からかぶった。

こうしてサンディができるだけ遠くにいけるよう、じぶんが身代わりになるつもりなのである。

プリンセスの憂鬱（後書き）

彼女がどうパックと関わる冒険をするのか、お楽しみに！

サンディ（前書き）

パックとサンディの出会い。そして王宮ではプリンセスの出奔についての騒ぎがおきる。

サンディ

町を歩くすべての人がふり返る。
思ったとおりだ。
パックはムカデの操縦席でハンドルを握り、となりにマリアを乗せてボーラン市街を練り歩いた。
人々は驚きの表情を見せ、あっけにとられこちらを見つめている。
まずは人々の注目を集めることだ。
最初にボーラン市に入ったとき、蒸気車の運転手が話しかけてきて、パックの頭に作戦が浮かんでいた。
人々の注目を集め、じゅうぶん引き付けてその上でミリィを攫った、あの白球についての情報をつのるつもりだったのである。
パックは目の前に広場があるのに気づき、そこへとムカデを向かわせた。
広場の真ん中に行き着くと、ムカデを停止させる。
物見高い市民がぞろぞろと集まってくる。
パックは立ち上がった。
人々は面白そうな、それでいて一抹の不安を浮かべる複雑な表情で見上げている。
息を吸い込み、唇を舐めた。
「みなさん！」
パックの声に、ちょっとどよめきがおきた。
「みなさんに少しぼくの話を聞いてもらいたいと思います！」
なんだ、はやく喋れ！　と、ひとりが声を張り上げた。
良い傾向だ。
「ぼくはボーラン市の南、ロロ村と言うところから来ました。そこではある不思議な出来事がおき、白い球のようなものが北を目指して飛び去るという事件がおきました。ぼくはその白球の行方について知りたいと思っているのです。みなさんの中で、その白球を見た、

あるいは噂を聞いたというかたはいらっしゃいませんか？」
集まった人々はおたがい顔を見合わせた。
なんだ、知っているか？
さあなあ……。
空飛ぶ白球？　なんだい、そりゃ？
ざわめきはしだいに沈黙にかわる。
パックはふたたび声を張り上げた。
「なんでもいいんです！　だれか、空を飛ぶ白球について……」
その声は途切れてしまう。
人々は興味を失ったのか、三々五々、散らばっていく。
パックはがくりと肩を落とした。
だめだ……うまくいくと思ったのに。
人々が散った後、ひとりの少女が残っていた。
マントを肩からはねあげ、羽の飾りをつけた帽子を小粋に横に被っている。
輝くような金髪に、澄んだブルーの瞳。
その唇は面白そうにかすかに上向いていた。
「ねえ、あんた！」
え……？　と、パックは顔を上げた。
少女と目が合う。
「ねえ、あんたのことよ！　あんたの名前、なんていうの？」
パックはちょっとむっとなった。
「なんだい、人に物を尋ねるときは……」
「自分からってね。判った、判った。あたしサンディっていうのよ。あんたの名前は？」
「パック……」
思わず答えてしまう。
「ああそう、パックっていうんだ。ね、パック。あんたの横にいる女の子。いったい正体は何なの？」
パックはマリアを見た。

「彼女はマリアっていうんだ。ロボットだ」
「ロボット？　何それ」
「人間と同じように行動する、機械人形さ」
へえ、とサンディの目がおおきくなった。
ひらり、とムカデに乗り込み、パックの近くにやってくる。
わ、とパックは上体をそらせた。
それくらいサンディは近々と顔をよせてくる。
「すごぉい……本当に機械なんだ！　ね、もっとよく見せてよ！」
これはマリアに言っているのだ。
マリアはちょっと小首をかしげた。
そのマリアの手をとり、サンディは興奮していた。
「暖かいのね。機械なのに、どうして？」
マリアが答える。
「わたしは蒸気の力で動いているからです。蒸気の熱で、暖かいのでしょう」
サンディの頬が紅潮した。
「喋れるのね！」
マリアがうなずく。
「ね、パック。あんたがさっき言っていた、空を飛ぶ白球ってなんなの？　事情がありそうじゃない。あたしに話してくれない」
パックはとまどっていた。この少女は、どういうわけか人に命令することに慣れているようで、パックが断るなど頭から考えていないみたいだ。
まあいいか、あれだけいた人々の中で彼女ほど興味を示してくれた相手はいないし。
パックはロロ村で起きた事件を話しはじめた。ところどころサンディが質問をはさみこむ。その質問のしかたが当を得ていて、パックはいつしか彼女に語ることがあの事件について頭の中を整理することに気づいた。
いったいこの少女はなんだろう？

話し終えると、サンディと名乗った少女は腕を組んだ。
「信じられない話しね。でも、このマリアってロボットの女の子がいるんだもの。信じざるを得ないわ。その魔法って、いまもこの空中にあるのかしら？」
「それはニコラ博士に聞いてみないと判らないけど、マリアがこうして動いているんだから、そうなんだろうね」
サンディはぱちん、と両手を打ち合わせた。
「決めた！　あたし、あんたと一緒にそのミリィって女の子を探す手伝いをしてあげる」
ふえっ、とパックはのけぞった。
「な、なんだってえ？」

王宮の廊下を、内務大臣と警察長官のふたりが急ぎ足で宮殿に向かっていた。
まわりを近衛兵がふたりを守るように十人ほどで固めている。近衛兵たちはみな銀色のヘルメットを目深に被り、一様に無表情にあたりに気を配っていた。
樽のように太った内務大臣と、鶴のように痩せて背が高い警察長官という取り合わせはひどく目立った。
ふたりがあきらかに泡を食って急いでいるのを、王宮に詰めていた新聞記者が見咎めた。
「おい、あのふたり……」
「内務大臣と警察長官だ」
「妙な取り合わせだな」
「これは何かあるぜ……！」
記者たちは全員、ふたりめがけて突進した。手に手にメモをかざし、ふたりに質問を浴びせる。
「長官、なにか事件でも？」
「大臣、これからどこへいらっしゃるのですか？」
記者たちが取り囲もうとするのを、まわりを固めた近衛兵たちは

無言で振り払う。
大臣はなにを聞かれてもノーコメントの繰り返しで押し通した。
わあわあと取り囲む記者たちを振り払うようにしてふたりが宮殿の奥ふかく消えていくと、記者たちは顔を見合わせた。
「なにかあるぜ」
うん、とかれらは頷きあった。

宮殿の会議室にふたりは走りこんだ。
見上げると、首が痛くなるほどの高みにある天井からは、目も眩むほどの明かりをはなつシャンデリアがいくつも垂れ下がり、壁には同盟国の旗がびっしりと飾られ、帝国の威信を現している。会議室の正面には皇帝の肖像画が飾られ、その視線は何ものも見逃さない叡智を表現していた。
百人以上が座れる大テーブルには、いまはたった三人が腰をおろしているだけだった。
タビア女史と宮殿の近衛隊長のふたりが神妙な面持ちでならび、ちょっと離れた席でエイラがうつむき、声をしのばせ泣いている。
「プリンセス・サンドラが行方不明ですと?」
入るなり内務大臣が怒号した。
女史は静かに顔を上げた。
となりに座る近衛隊長は顔を真っ赤にして、目を怒らせている。
内務大臣と警察長官はどっかりと椅子に腰をおろし、ぼう然とした顔を見合わせた。
「フーシェ大臣、お静かに願います」
タビア女史が口を開く。フーシェ内務大臣はじろりとエイラを見た。
「そこの娘は?」
大臣の問いに答えたのは近衛隊長であった。
「は、プリンセスが行方不明であることが発覚したとき、この娘はプリンセスの服を身につけ、われらの発見を遅らせたのであります。

一応、こちらで尋問をしましたが、おふたりが尋問したいのではと、連れてまいりました」
大臣はそうか、と天井を仰いだ。なにか考え事をするときの癖であった。
「名前は？」
意外と優しげに大臣はエイラに話しかけた。エイラはびくりと肩を震わせただけでうつむいたままだ。
タビア女史が鋭く声をかけた。
「大臣が名前をお尋ねです。答えなさい」
エイラです……と彼女が蚊の鳴くような声で答える。大臣は眉をしかめた。
「タビア女史、そんなに頭ごなしに命令するものではない。それでは答えるものも答えられないではないか」
失礼いたしました、と女史は答えた。
「エイラ、というのだね。きみはプリンセスの……」
「学友です」
ふたたびタビア女史が答える。
大臣の顔に怒気が浮かんだ。
「きみ！　わたしはこの娘に話しかけているんだぞ。あんたに話しているわけではない」
女史の顔がかすかに赤らんだ。
ふっ、と大臣は息をついた。
立ち上がると、エイラの側にやってきて椅子をひいて座った。
「な、エイラというのか。きみ、プリンセスとはずっと一緒に育っているんだな。学友とはそういうものだ。小さな子供のころからきみはプリンセスと仲良くしてきたんだろう」
はい、とエイラはかすかにうなずいた。
彼女が反応したのに力を得て、大臣は話しかけた。
「プリンセスに頼まれたのかね？　彼女が外に抜け出すまで、きみが身代わりになって捜索を遅らせるために」

エイラは顔を上げた。涙に目を真っ赤にさせている。
「いいえ、プリンセスはなにも命令されてはおりません。逃げ出す直前、あたしにお会いになりましたが、その時なにも知らない、なにも聞いていないと答えるように仰っただけです」
「とすると、きみの独断でやったことか？」
「はい、なんとかプリンセスが遠くへいけるようにと思って……」
大臣は腕を組んだ。
「どうしてだね？」
「サンディが……いえ、プリンセス・サンドラが御かわいそうで……彼女はいつも王宮を逃げ出したいと仰っていたんです。ですからあの時、あたしはプリンセスの望みを叶えて差し上げたいと……」
「いつも？　というと、プリンセスは前から王宮を逃げ出すことを計画していたのかね」
はい、とうなずくエイラに大臣は首をふった。
「なぜだ！　いったい、なにが不満で……」
「サンディはこう仰いました。王宮はまるで牢獄だ。あたしは囚人と同じだと」
大臣は渋面をつくった。
その時初めて警察長官が口を開いた。
「どうします？　すぐに全国の警察署、および総督府に報せを……」
いかん！　と大臣は手を振った。
「あくまで内密に捜索するのだ。もしこれが外部に知れたらどうなる？　かえってプリンセスに危険がせまる」
危険、という言葉にエイラは顔を青ざめさせた。
「いいかね、帝国の同盟国のなかには完全に帝国の支配に服していない国がいくつかあることはきみも承知しているだろう？　もしそんな国家にこのことが知れ、さらにプリンセスがそれらに身を奪われたら？　判るだろう？」
警察長官はうなずいた。
「そう、ですな。それに共和国の残党の問題もありますし。やはり

内密に捜査をするのが上策でしょう」
「長官、きみになにか案があるかね？」
「秘密警察を動かしましょう。優秀な諜報部員が数人わたしの配下におりますから」
「それだ！　すぐ手配したまえ。いいか、どんなことがあってもこのことが外部に知れてはならんぞ！」
かしこまりました、と長官は頭を下げ、会議室を出て行った。
内務大臣はタビア女史と近衛隊長に向き直った。
「会見はこれまでとする。女史、あなたはこの学友のエイラを部屋へ連れて行きなさい。隊長、きみに命令する。いいか、このことは他言無用だぞ！」
隊長は立ち上がり、敬礼をして出て行った。
女史はエイラを促し、会議室を出て行く。その背中に大臣は声をかけた。
「いいかね、その娘に罪はない。罰をあたえるなど、決してやらんようにな！」
女史は肩をすくめ、ドアを閉めた。
後に残された大臣は誰もいなくなってはじめて頭を抱えた。
「なんということだ……」
重い責任にうちひがれた老人の姿がそこにはあった。

エイラの部屋の前でタビア女史は立ち止まった。その後ろにエイラがついて来ている。
女史はくるりとふり向いた。
エイラがおびえた瞳で女史を見上げている。
女史はぐい、と片方の眉を上げた。
「なんてことでしょうね……わたしは……本当に驚きましたよ」
エイラはうつむいている。
「プリンセスの出奔を手助けするとは、それがあなたの忠誠心なのですか？」

無言のままの娘を見おろし、女史はふっとため息をついた。
「本来なら厳重な罰を与えなければならないところですが、大臣のお言葉がありますからそれはよしましょう。しかし！」
女史が声をはりあげ、エイラはびくっと震えた。
「あなたが反省するのは止めません。反省をあらわすため、わたしがいつも命じることをなさることを期待します。いいですね？」
そう言い放つと、女史はかつかつと靴音をたてて遠ざかった。
じゅうぶん遠ざかると、エイラはすばやく扉を開き、部屋に飛び込んだ。
じぶんの勉強机に向かうと、黒板を取り出す。白墨を手にし、なにか考えている。
そして書き出した。

――わたしはプリンセスへの忠誠心を取り違えました――わたしは……

それをなんども繰り返した。

教師に与えられている部屋に戻った女史は、ほっとため息をついて固い椅子に腰をおろした。部屋の中は簡素、というより厳しい修道女の部屋のようだ。囚人でもこれほど調度のない部屋には住んでいないと思わせる。
机の引き出しから女史はひとつのブローチを取り出した。
それだけが飾り気のないこの部屋であざやかなほどあでやかな雰囲気をはなっている。
ブローチはロケットになっていて、蓋を開くとちいさな写真が内蔵されている。
写真はサンディの幼いころのものだ。
女史の顔にはじめて女らしい、柔らかな線があらわれた。
愛しげに指先で写真をなでさする。

その瞳に一筋、涙がうかぶ。
ブローチを抱きしめるように女史はうつむいた。
彼女は嗚咽していた。

エイラ（前書き）

王宮を飛び出したサンディの行方を追うため、フーシェ内務大臣はある計画をたてるのだった。

エイラ

会議室でなにか考え込んでいた内務大臣は決意したように立ち上がった。

ドアを開けると、廊下には近衛兵が待っている。

かれらにうなずくと、大臣は宮殿の奥深くへ向かって歩き出した。近衛兵たちが大臣を守るようにすぐまわりを固め、一緒に歩き出す。めざすは皇帝陛下の執務室である。

執務室に入ると、すぐ皇帝へ面会を申し入れる。大臣じかじかの申し入れである。すぐ通された。

大臣の報告を受けた皇帝はぽかんと口を開けた。

「サンドラが家出？　どういうことかな」

コラル帝国皇帝グレゴリオ四世は、議会から上程された書類の向こうで眉をひそめた。

肖像画の姿とはだいぶ差がある。

背が高く、堂々とした体躯の肖像にくらべ、目の前の皇帝はどちらかというと、痩せてやや猫背の姿勢をした、どこにでもいるような老人にすぎない。がっしりとした顎と、鋭い目の光をたたえた肖像の面影はなく、品の良い優しげな顔つきをしている。共通しているのは、年のわりには艶の良い頬と、きちんと切りそろえた顎鬚くらいのものか。

皇帝の机にはうず高く書類の山が積まれ、その横には帝国の玉璽が置かれていた。皇帝の一日の執務というのは、議会から上程された法案の書類に目を通し、承認の印璽を行うことのみである。皇帝には議会への拒否権はなく、たんなる承認機関として機能しているだけであった。

”君臨すれど統治せず”が、コラル帝国皇帝の常態である。

フーシェ内務大臣は詳しく事件のあらましを語った。それを聞く皇帝は、なんの感情もあらわさず、ふむふむとうなずくのみであっ

た。
「それで内密の捜査というわけか」
「さようでございます。もしこれが帝国以外の同盟国、いや同盟国に知れるのはまだよいとして、共和国の残党に知れましたら……」
わかっとる、というような仕草を皇帝はした。
「そうだな。それは危険だ。もしプリンセスが共和主義者の手に落ちたとしたら、どのような脅迫の種につかわれるか……。いや、それでもプリンセスが無事戻ればよい。最悪の場合……」
皇帝は暗澹とした目つきになった。大臣もそれに同意した。
「ですから、内密にしなければなりません。幸い、これを知っているのはごく数人に限られております。警察長官は秘密警察を動かし、捜査に当たっております」
皇帝は顔を上げた。
「しかし今のままプリンセスが戻らないとすると、遅かれ早かれ不在は判ってしまう。なにか対策はあるか?」
内務大臣は頭を下げた。
「ひとつ腹案がございます。プリンセスのお姿は、国民に知られてはいないのでございましょう?」
「ああ、十五才になるまで、皇族の子弟は表に出ることはあまりない。皇太子はべつだが、サンドラは継承順位確か……」
「十六位でございます」
「そうだったな。そのような順位では、国民の関心も薄い。それで、なにをしようというのかね」
大臣の目がきらめいた。
「替え玉をしたてるのでございます。プリンセスがお戻りになられるまで、不在を隠すためでございます」
皇帝の目が驚きに見開かれた。
「なんと! そんなことうまく行くと思っておるのか?」
「勝算はございます。これは事件の詳しい報告を聞いてからわたしの頭にともった考えでございますが、うまくいくと思われます。つ

きましては……」
大臣は皇帝の側により、耳打ちをした。
それを聞いている皇帝の顔がやや和らいだものになった。
「なるほど……良い考えかもしれん」
それでは早速手配いたします、と大臣は皇帝の執務室をあとにした。

ノックの音に、エイラはびくりと顔を上げた。
彼女の返事もまたずドアが開かれ、タビア女史が姿を現した。背後に近衛隊長を従えている。
「エイラ、すぐわたしとともに宮殿へまいるのです」
質問はあとだ、といわんばかりにタビア女史はエイラを立たせ、部屋を出て行った。訳がわからぬまま、エイラは女史の後について廊下に出る。近衛隊長の鋭い視線に、エイラは身をすくませた。
急ぎ足のふたりに小柄なエイラはほとんど駆け足になった。なんどか質問しようとしたのだが、女史の厳しい顔つきにあきらめた。
やがて通路はエイラの知らない区画に入り込んだ。いままで宮殿の、こんな奥深くへ入り込んだことはなく、エイラはますます怖ろしくなっていった。
ここは謁見室へ通じる通路ではないかしら……。そう思っていると、通路にはいままで見たことのないほどの衛兵が武器をかまえ、数メートルおきに立っている。
厳重な警戒の雰囲気に、エイラの足は遅くなっていく。
はやくなさい、と女史は何度もしかりつけた。
やがて通路は行き止まりになり、ドアの前にエイラは見知った顔を認めた。
フーシェ内務大臣であった。
エイラの顔を見た大臣は、こっちこっちというように手招きをした。
彼女の背中を抱きかかえんばかりに大臣は部屋へ招き入れる。

なにがなんだか判らないうち、エイラは部屋の中に入っていた。
そう大きな部屋ではない。真正面におおきな窓を背にした机があり、その椅子にひとりの老人が座っていた。
老人は優しげな目つきでエイラを見た。
その顔をしげしげと見たエイラは、ふいにその顔が会議室にかけられた皇帝の肖像画と似ていることに気づいた。いや、似ているどころではない。本人である。
エイラは気が遠くなった。
皇帝は椅子から立ち上がり、机を回ってエイラの前へと歩み寄ってきた。
彼女の顔を眺め、大臣を見る。
「これが、その娘かね？」
さようでございます、と大臣は頭をさげた。
ふむ、そうか……と皇帝はうなずいた。
上体を折り曲げ、顔をエイラに近づける。
「エイラ、というんだな。お前」
はい……と答える。皇帝は手を伸ばし、エイラの頭をなでた。
「エイラとは仲良くしておったのじゃろう？　ん？」
「は……はい……！　プリンセスはいつもわたしにお優しくしてくださいました」
そうか、と皇帝は眉をさげた。頬に皺がきざまれ、笑顔になる。
「あれのことについては知っているだろう。しょうしょう跳ねっかえりではあるが……。あれは母親似でな。あれの母親も同じような性格をしておった。しかし頭は悪くはない。むしろ賢い、といっていい。だからわしはあれが王宮を飛び出したとしても、そう心配はしておらん」
意外な皇帝の言葉に、エイラは目を丸くした。
「だが心配なことはある。あれが外を飛び回っておることが帝国を快く思っておらん連中に知られることだ。わかるな？」
エイラは何度もうなずいた。

「そうだ、したがってサンドラを探すことも秘密にしておかなければならんのだ。その間、彼女の不在を誰にも知られないようにしなくてはならない」

皇帝の話がどこへ向かっているのか、エイラにはさっぱり見当がつかなかった。

「そこでだ、お前……エイラというのじゃな。お前にサンドラの身代わりを勤めてもらいたいのじゃよ」

「わ、わたくしが……？」

となりで内務大臣がうなずいた。

「そうだ。お前ならレディ・サンドラと同い年であるし、背格好も似ている。遠目には、じゅうぶん身代わりで通る。頼む！　うんと言って欲しい」

エイラの瞳は救いを求めるように部屋の中をさまよった。

タビア女史の厳しい顔、内務大臣の必死な表情、皇帝の優しげな顔にうかぶやや心配げな顔に、エイラはうつむいた。

ひと時の沈黙の後、ようやくエイラは顔をあげた。

「はい……わかりました」

エイラが承知して、怒涛のごとく物事は進んだ。エイラは急流に漂う木の葉のように運ばれるだけだった。

宮廷付きのメーク係が呼ばれ、エイラの髪の毛を金髪に染めさせられた。やや青白いエイラの顔色に、頬紅が施され生き生きとした肌色に変えさせられた。そしてサンディの服を着せられたエイラの姿に、タビア女史はすこし首をかしげた。

「問題は目の色でございますね。レディ・サンドラの目はブルーでございましたが、この娘の目は茶色です。どういたしましょう」

大臣はちょっと思案したが、なにか考え付いたのか、指を立てた。

「レディ・サンドラは近視ではなかったかな？」

大臣の言葉に女史は眉を吊り上げた。

「そんなこと！　いいえ、レディ・サンドラは近視ではございませ

んでした。視力は並みの娘よりよいくらいでしたわ」
「だが、そういうことにすればなんとかなるんだが……」
「大臣閣下、いったいなにを仰りたいのですか？」
「こういうことだ」
大臣はそう言うと、ポケットから一組の眼鏡を取り出した。ふとい黒ぶちの、ややクラシックなデザインである。レンズは入っていない、伊達めがねであった。
それをエイラにかけさせる。
大臣はにんまりと笑った。
「どうだね、眼鏡をかけると、ひとはその人の目の色が茶色か、青かなんてことはあまり気にしなくなる。眼鏡をかけた娘、という印象だけが先に来るもんだ。これなら遠目でなら、なんとかなるさ」
「その眼鏡、いつも持ち歩いているのでございますか？」
その言葉に、大臣は悪戯っぽい表情を浮かべた。
「そうさ。わたしはちょくちょくこの手で変装をして、新聞記者をまいているんだ。ほかにも靴のなかに小石をいれたりする。そんなことで姿勢が変わり、歩き方も変わるもんだ。ま、心理的な変装というわけだ」
まあ、と女史が口を開けた。
さて、と大臣は背を伸ばした。
「これで宮廷内はごまかせるとして、問題はレディ・サンドラの行方だ。なあ、エイラ。きみはレディ・サンドラと一番の親友だ。なにか、彼女から聞いてはいないかね。王宮の外へ出て、なにか見たいとか、あるいは行きたい場所について……」
エイラは思い出しつつ答える。
「そういえば、先だってボーラン市にサーカス団がやってきたとき、とても見たいと仰っていたようです。あの日は一日中、サンディ……レディ・サンドラは落ち着かなくて」
それまで黙ってかれらのやりとりを聞いていた皇帝はうなずいた。
「そうだろうな。あれの母親もにぎやかなことには目がなかった。

しかしこの時期、サーカス団などボーラン市には来ていないから、そこで探すのは無理だろうな」

大臣は首をふった。

「いいえ、そんなことはございません。それならサーカス団を呼べば良いのでございます。サーカス団に限らず、巡回のカーニバル、遊園地、そういったものは数限りなくございます。それらを招待すれば、レディ・サンドラの気を引くに充分でしょう」

皇帝の顔が晴れやかなものになった。

「なるほど。むやみやたらと探し回るより、ずっと確かであろう。フーシェよ、そちに命ずる。その……サーカスであったかな？　とにかく、サンドラが引き寄せられるようなものならなんでもよい、すぐに手配いたせ！」

ははあ……、と大臣が叩頭する。

エイラはそんなんで大丈夫かしらと、心配になった。

出会い（前書き）

サンディに振り回されるパックたち。パックはサンディと共にボーラン市で意外な人物と出会うことに。

結局サンディはパックにくっついて、ホルンたちが部屋をとったホテルまでついて来てしまった。

「はじめまして。あたしサンディっていいます。パックさんの話を聞いて、とても興味がわきました。お願いです！　あたしもミリィの行方を探すお手伝いをさせてください！」

一気にまくしたてるサンディに、ホルンは目をぱちくりさせた。

こんな父さんは初めて見る……パックはなんだか可笑しかった。

「ええ、つまり、その……われわれと行動を共にする、と思って良いのかな？」

ようやくそれだけ言うのがやっとらしい。

サンディはうなずいた。

「ええ、その通りです。ご迷惑はおかけしませんから。あ、さっそくですがこのホテルにあたしも部屋をとりたいのですが、よろしかったら……これを」

そう言うと、サンディは腰の物入れから革袋を取り出し、ホルンに手渡した。

「なんですかな？　これは」

「現金の持ち合わせがないので、これを差し上げます」

ホルンは革袋を開いて、中をのぞいた。

たちまち顔が真赤に染まる。

ため息をついて革袋をサンディに返した。

「いえ、これはあなたが持っていたほうが良い。部屋代のことなら心配なく。わたしが代わりに払っておくから……」

サンディは革袋を受け取り、妙な顔になった。

「え、でもそれでは……」

「とにかく、それはあなたが持っていたほうが良い。それに、そうむやみやたらと人に見せるものではない。よろしいな？」

最後にはホルンは厳しい顔になり、サンディは気おされたのか口をつぐんだ。

「さあ、それでは部屋のことはわたしが手配しますから」

そう言ってホルンは立ち上がると、サンディの肩を押して部屋の外へ出てしまった。後に残されたパックたちは顔を見合わせた。

「どうしたのかな、父さん。なんだか慌てていたみたいだ」

「あの娘、サンディといったな。いったいどこで出会ったんじゃ？」

ホルストがにやにやしながら問いかけた。

パックはサンディの出会いの顛末を語った。

「妙な娘だな」

話を聞き終わったニコラ博士はぽつりとつぶやいた。

足音が近づき、ドアが開いてホルンが姿を現した。

全員が注目すると、ホルンは額の汗をぬぐってしょっぱい笑顔を見せた。

「いや、まいった。冷や汗をかいたよ」

やれやれとつぶやいて、ホルンは椅子に座り込んだ。

「ホルンさん。あの娘に部屋をとってやったのか？」

ホルストが問いかけると、ホルンはうんとうなずいた。

「ああ、ここでへたに追い払うと、どこでどんな目にあうか、わかったもんじゃないからな」

ニコラが口を開いた。

「またなんで、そんな親切をしてやる気になったのかね？」

ホルンはため息をついた。

「あの娘はかなりの家柄の娘だ。おそらく貴族の出だろう」

みな、疑問を顔に出したのだろう。ホルンは説明し始めた。

「あの娘がわたしに差し出した革袋の中身は、宝石だった。それも、きわめて高価なものであることは一目でわかった。あんなものを持つのは貴族しかいない。そしてそれを持ち出せるということは、彼女がそういった家柄の出であることは間違いない、と思う。そこでひとつ疑問がわく」

ホルンは眉をひそめた。
「なぜそんな高価な宝石を持ち歩いているのか。そんなものを持ち歩いているより、現金を持っていたほうが便利じゃないか。あの娘の服装を見ると、そうとう裕福な暮らしをしていることがよくわかる。裕福であるが現金を持ち歩く習慣がない……しかし高価な宝石を持ち出せることのできる家柄となると、貴族しか思い当たらない。それもそうとう高位の貴族だ。すくなくとも伯爵以上の家柄だろう」
ニコラが皮肉な口調で言った。
「それで親切にしてやる気になったのかね？　彼女の家がお礼をすることを期待して」
それを聞いたホルンは肩をすくめた。
「馬鹿な！　おれはあの娘がもしかしたら家出をしたのではないかと思っているのだよ。あの世間知らずの様子から、おそらくボーラン市をひとりで歩くのは今回が初めてなのかもしれない。あのまま目を離したら、どんな連中に捕まるか判ったものじゃない。だから、おれの目の届くところにおいておこうと思ったのだ。おそらく、家のものは彼女を必死で探しているだろう。その間、家族が見つかるまで、部屋をとってやったのだ」
ニコラはうなずいた。
「判ったよ。あんたの考えが。おそらくあの娘はあんたの言うとおり、かなりの貴族の家柄の娘なんだろうな。しかし面倒なことになるぞ。そういう貴族の家というものは奇妙な論理をもつことがあるからな」
「まあな。しかし勝手な行動をさせておくより、ましだ。とにかくあの娘の正体を知らんことにはどうしようもない。そこでパック！」
いきなり自分に話題をふられ、パックはびっくりした。
「な、なんだよ」
「お前、あの娘と行動をともにして、なんとか彼女の家を聞き出すんだ。もしおれの思ったとおり、家出をしたのならなかなか話さないとは思うが、とにかくどこの家の出か判らんとどうしようもない」

おれに？　と、パックは自分の鼻を指さした。ホルンが重々しく頷くのを見て、パックは天を仰いだ。

新聞社にミリィを攫った空飛ぶ白球のことについて広告を頼んで数日たった。

新聞に記事が掲載されるのはまださきのことというので、その間、パックはせっせと街へムカデでくりだし、人々に聞いて回ることにした。ロボットのマリアを乗せたパックのムカデは、いつでも街の注目を浴びていた。

サンディもくっついてくる。

彼女は街のあれこれが珍しく、なにか目にとまるとパックに尋ねる。

「ね、あれはなに？」

「あれって、なんだい」

「ほら、鉄の柱にくっついているガラスの……」

「街灯だよ」

「街灯ってなあに？」

「だから、夜になるとあれが光るんだ」

そう説明してやると、サンディはああ、とうなずいた。

「あれがそうなの。夜になると街のなかでともって、とても綺麗だと思っていたの。そうか、街灯っていうのね」

「夜になるとって……家から見えたのかい」

「そうよ、窓から街が見渡せて……」

サンディははっ、と口をつぐんだ。喋りすぎた、といった様子だ。

「ねえ、きみの家はどこにあるんだい？」

そう尋ねたパックに、サンディは顔を真っ赤にさせそっぽを向いた。

家のことについて話題を向けると、かならず彼女は話したくないという素振りを見せることにパックは気づいていた。

まあいい、とパックはここは引くことにした。無理押しはよくな

い。
こうして街に繰り出し、人々に聞いて回る日々が続くが、はかばかしい成果はあがってこなかった。
人々はパックの運転するムカデに興味をしめすが、パックの質問にはみな一様に首をふった。
だんだん、パックはこのボーラン市にいても、ミリィの行方について手がかりを得ることは無理なんじゃないかと思い始めてきた。
やっぱり黙ってでも、ひとりで北の方向へ進んだほうが良いのかも。
と、いきなりサンディが大声をあげた。
「ねえ、パック！　あれ、あれを見て！」
なんだと目をやると、壁になにかポスターが貼られている。それをサンディは夢中になって指さしている。
ムカデを止め、よく見るとサーカス団の宣伝だ。

”近日中、キオのサーカス団来演”

とある。
サーカス団の名前なのか、おおきく「キオ」とあり、空中ブランコや、ライオンの火の輪くぐり、ピエロのおどけた仕草などの絵が、極彩色で描かれている。見ているだけで、わくわくしそうな絵柄である。
「ねっ、サーカス団よ！　見て見て！」
「わかってるよ、それが何か？」
気のないパックの返事に、サンディは信じられないというように首をふった。
「あたし、一度で良いからサーカスを見たいと思っていたの。ね、サーカスが来たら一緒に見に行かない？」
パックはあきれた。
まったくこのサンディという女の子は天真爛漫というか、能天気

というか……。

「そんな暇ないよ。おれはとにかくミリィの行方を知る方法がないか、それしか考えられないんだ」

「あら、サーカスにはいろんなお客がくるのよ。その人たちになにか知っているか聞いてみるのは無駄じゃないと思うんだけど」

彼女の提案に、パックはあ！　と思った。

そうか……。

パックはポスターを真剣に見つめていた。

さてホテルに帰ろうとしたパックだったが、いきなり道路のまんなかに現れた蒸気車に行く手をふさがれ、あわててブレーキを踏んだ。

「なっ、なんだ？」

行く手をふさぐのは、軍の蒸気車である。全体にグレーに塗られ、帝国の紋章が車体には描かれていた。

形から見ると装甲車らしい。ごつごつとしたデザインで、いくつか車体から突き出している砲座が剣呑である。

装甲車の天井の蓋がぱくりと開き、ひとりの士官が姿を現した。

「停まれ！」

「だからもう停まってるって。いったい何のようだ？」

むかっ腹がたっているパックは怒鳴り返した。

士官の顔に「おや？」という表情が浮かぶ。このように反論されるとは思っていなかった様子である。年令は二十代半ばの、若い兵士だ。階級は中尉であった。髭剃りあとがくっきりと残っている。やや細面の、両目がひどく狭まっている顔をしている。

中尉はじろりとパックのムカデを睨んだ。

「最近、そのムカデのような乗り物に乗っている子供がいるという噂だったが、お前のことか？　名前は？　年は？　そしてどこから来た？」

矢継ぎ早の質問にパックはますます腹を立てた。

「なんでえ、いきなり。そんな尋ね方じゃ話したくないね！」
「なに……」
中尉の顔が怒りで赤く染まった。
と、隣に座っていたマリアが身動きをした。
いけねえ、とパックは反射的にマリアの腕を押さえた。
「おい、やめろ！　いいから、ここはおれに任せろ」
「でも、あの人間はあなたに危害を加えようとしています」
マリアは中尉が腰にぶらさげている拳銃のバックルに手をかけているのを見逃さなかった。
パックは息を吸い込み、中尉に話しかけた。
「いったい、どうしておれにそんなこと聞きたいんだ。中尉さん」
中尉は答えた。
「帝国の首都で、そんな奇妙な乗り物を乗り回しているのだ。われわれが興味を持つのも当たり前のことだろう。いったい、お前の目的はなんだ。答えないと、反逆者として逮捕するぞ」
反逆者！　パックは驚いた。
「冗談じゃない。おれはただ、町の人に北の空に飛んで行った白球のことについて何か知らないか、聞いて回っているだけだよ」
「なんのために？」
パックはふたたびロロ村で起きたことを説明するはめになった。なんども説明しているので、すらすらと述べることが出来る。
説明を聞く中尉の眉間に怒りの皺がきざまれた。
「魔法？　そして魔王だと？　法螺話もいい加減にしないか。そんな作り話で、われわれをごまかせると思ったら間違いだぞ！」
「本当のことだって！　このマリアを見ろ！　ロボットだぞ。マリアは、魔法のちからで人間のように考え、動くことが出来るんだ！」
中尉は目を細め、マリアを見た。
「ロボットだと？　ふん、おおかたその中に人間が入っているんだろう。われらの目はごまかせんぞ！」
「違う！　マリアはニコラ博士の発明なんだ！」

その言葉が終わらないうち、装甲車のなかから声がした。
「ニコラ博士だと?」
そして中尉の後ろから、もうひとりの人間が姿を現した。
その人間を見て、パックは叫んだ。
「ニコラ博士!」
「違う。わたしはニコラ博士の弟、テスラ博士だ!」
ニコラ博士そっくりの老人はこたえた。

出会い（後書き）

ニコラ博士の弟テスラ博士の登場です！次回、テスラ博士がどうかかわるか、お楽しみに！

テスラ博士（前書き）

ニコラ博士の弟テスラ博士の登場です。テスラ博士はボーラン市でどんな研究をしているのか。

テスラ博士

パックたちは中尉の装甲車に誘導され、ボーラン市のはずれにある軍の施設へと連れて行かれた。連行、といっていい扱いだった。

テスラ博士、と名乗った老人はパックのムカデや、ロボットのマリアに興味を示し、顔をすりつけるようにしげしげと観察していた。そんな仕草は、ニコラ博士そっくりだとパックは思っていた。

「確かに……わしの兄。ニコラの製作したものに間違いはない」

ため息をついてテスラ博士はつぶやいた。

「街でお前のムカデの噂を聞きつけ、瞬間的に兄の製作した発明品ではないかと思ったのじゃ。それで軍に頼んで、捜索したというしだいじゃ」

パックたちの連れてこられたのは、軍の施設の中にある研究所のようなところだった。

壁一面に貼られた無数の座標や、メモ、そしてごたごたと置かれた複雑な装置の数々に、パックはロロ村でのニコラ博士の研究所を思い出していた。

サンディははじめてみる研究所の内部に目を輝かせている。

「すごーい！　こんな機械、はじめて見たわ。ねえ、これなあに？」

彼女の指が、機械のボタンに触れそうになり、テスラ博士は慌てて立ち上がった。

「それに触れちゃいかん！」

博士の大声に、サンディはびくっと飛び上がり、よろけた。あわてて手をつこうとして、機械の操作盤に倒れこんだ。いくつかのスイッチやレバーに手が触れた。

ばしゅーっ！　という音と共に、機械に接続されているパイプからもうもうと白い蒸気が噴き出した。

わあ！　と叫んでテスラ博士は機械に飛びついた。

サンディはびっくりして立ちすくんでいる。

がたがた、ごとごとと派手に振動し、機械からつながれているベルトが猛烈な勢いで動き出す。そのベルトは天井の滑車を廻し、研究所の装置がつぎつぎに動き出した。

テスラ博士は機械を停めようと必死に手足を動かした。

パックたちを連行した中尉はぼうぜんと眺めているだけだ。なにをしていいのか、判らないらしい。

それを見てとったパックは、無言でテスラ博士の側へ駈け寄ると、機械を停止させるためにレバーを引いたり、バルブを閉めなおしたり手伝った。

ようやくすべての機械の作動が停止し、テスラ博士は汗をぬぐった。

「まったく……ろくなことをしない娘じゃな！　お前のしたことが判っておるのか？　そのスイッチを押しただけでなく、機械の始動レバーまで一緒に引くとは。まるで悪意あってのことのように思えるわい」

サンディはしゅんとなった。

「ごめんなさい……」

「もう二度と触るでないぞ！」

そう言うとじろりとパックを見た。

「お前、ずいぶん機械の扱いに慣れているようじゃな」

「うん、ニコラ博士の助手を勤めていたからね」

ほう……と、テスラ博士の口がまるくすぼまる。

「ニコラの助手をな……。兄はいったいロロ村とかいう田舎に引っ込んで、なにを研究しておったのじゃ」

「あれだよ」

パックはマリアを指さした。

テスラ博士は眼鏡の奥から、疑わしそうな目でマリアを見た。

「あれがロボットだというのか？　すべて機械で出来た人間型のロボットだと？」

「そうさ。人間と同じように考え、そして動くんだ」

博士はゆるゆると首をふる。
「確かに兄とわしは長年、人間型のロボットの開発を研究してきた。しかし、人間と同じように考える能力を与えることはいまの科学理論では不可能であると結論したのじゃ。どうしてそんなことが可能か、わしには判らん」
「だから魔法なんだって！」
テスラ博士の皮肉な笑みに、パックは失望した。やはり信じちゃくれない。
サンディは研究所の一角に目をとめ、口を開いた。
「ねえ、あれなんですか？」
サンディの指さしたのは、翼をひろげたおおきな機械だった。パックはその機械に小型の蒸気機関がすえつけられているのを認めた。蒸気機関には、プロペラが接続されている。
「飛行機械じゃわい。まだ実験の段階だがな」
「空を飛ぶの？」
サンディは目を輝かせた。
テスラ博士は無愛想にうなずいた。
「ああ、わしの理論が正しければな。もしあれが完成すれば、軍事に革命的な進歩につながるじゃろう」
「すっごぉーい！」
サンディは手をたたいた。
「ね、博士。あれで飛ぶときあたしも乗せてくださらない？　あたし、いっぺん空を飛んでみたい！」
「お前さん……」
博士はあきれかえっていた。
あきれているのはパックも同じだ。こんなところに強制的に連れてこられて、兵隊たちの厳しい視線にさらされているというのに、彼女はぜんぜん恐怖を感じていないようだ。まるで住み慣れた自分の家で、遊びに来た客と楽しく談笑しているかのようだ。
その時、研究所の入り口でおきた騒ぎにパックとサンディはふり

むいた。
なんと、ニコラ博士が数人の兵士と共に研究所に連れて来られようとしている！
「ニコラ博士！」
パックの声にニコラ博士は憤然として、まわりの兵士たちの腕を振り払った。
「おう！　パック。これはいったい何のことじゃ？　いきなり兵士たちがわしの泊まっておるホテルにやってきて、有無を言わせず連行しおって……なにがなんだか……」
その時、ようやくニコラ博士は研究所の様子と、ぼうぜんと立っているテスラ博士に気づいた。
「テスラ……」
「兄さん」
ふたりは近寄った。
こうして見ると、鏡に写したようにそっくりだ。
「テスラ、いったいどういうわけなんじゃ。いきなり兵士たちがわしをここに連行するなど、無礼極まりない！　けしからん！」
ニコラ博士はぷりぷり怒っていた。
「この子供が……」
テスラ博士はパックを指さす。
「魔法だの、なんだのと馬鹿なことを本気になっておるようじゃが、どうやら兄さんの影響らしいな。田舎に引っ込んでいたと思ったら、子供相手に馬鹿話を作り上げて喜んでいるらしい。いいかげん、その金属の人形にはいっている人間をだしてやれよ。さぞ暑かろう」
「な……な……な……！」
怒りのあまり、ニコラ博士は言葉がうまく出すことが出来なくなる。
「なんじゃとお！」
大声で、研究所のガラスがびりびりと震動した。わ、とパックは耳を押さえた。近くでニコラ博士の大声をまともに聞いたので、耳

がきーんと鳴っている。
「そんな幼稚なことわしがやっておると言うのか！」
「だってそうだろう？　人造人間の研究は、知能の開発は無理だと言うことでお互い諦めたはずじゃないのか？　それなのに人間と同じように行動するとなれば、中に人間が隠れていると推察できる。きわめて論理的だ！」
「論理、と言ったな！　論理的というなら、その論理の前提となる証拠は何だ？　お前はマリアの中身も見もせんで勝手な理屈ばっかり言いおって……」
「魔法の結果、というのが論理的なのか！　あんたも科学者なら、魔法なんてことを口にすることがどんなに恥ずかしいことが判っているだろう？」
ニコラ博士の肩がかすかに落ちた。
「そう……恥ずかしい。魔法、などというものに説明を求めるのは科学者として恥ずかしい限りじゃ。しかし、そうと考えなければ説明がつかんのじゃ！　テスラ、お前最近の研究で、実験の結果が妙な傾向をしめすことに気づいてはおらんのか？」
テスラ博士の目が大きく見開かれた。
「どうしてそれを……兄さん、何を知っている？」
「やはりな。最近、あらゆる観測結果がよりはっきりと観測者の希望通りの結果になる傾向をしめしている。こうなって欲しいと思う結果になる。計測の結果があまりに予測どおりに行き過ぎる。そうじゃないのかね？」
「そう……それには気づいていた。いままでうまくいかなかった実験が、つぎつぎと思い通りになっていく。予測どうりの数値が、つぎつぎと現れる。こんなことは今までなかった。最初、わしの実験の腕が上がったのかと思った。しかし以前うまくいかなかった実験でも、同じ条件、同じ方法で試してもうまくいく。いや、うまく行き過ぎる！」
どっかりと椅子に座り込み、テスラ博士は指先でこめかみをこす

った。
「兄さん、それが魔法の結果なのか？」
ニコラはうなずいた。
「そうだ。この空中には」
そう言ってニコラ博士は手を泳がせた。
「”魔素”とわしが名づけた要素が満ち満ちている。その”魔素”は人間の思考に反応し、さまざまな奇跡をおこす。あのマリアも、その結果だ。わしは長年、ロボットが人間と同じように考え、行動することを夢見てきた。わしの思考に反応し、”魔素”のちからで、マリアは人間のように考え、行動するようになった。マリア……」
やさしくマリアに呼びかける。それはまるで娘に呼びかけるようだ。マリアはゆっくりとニコラ博士の側へ近づいた。
「マリア、お前の身体の中をテスラに見せてやりなさい」
マリアはうなずくと、自分の胸のあたりに手をかけた。
ばくり、と彼女の体の前面が開き、機械の内臓がむき出しになった。テスラ博士は顔を近々と寄せて覗き込んだ。
はっ、と顔をあげ兄を見る。
「確かに彼女の体の中にあるのは機械だ。蒸気機関そのものが、納められている。見事な細工だが、これで彼女が人間と同じように行動するには説明がつかない！」
「判ったろう」
ニコラ博士はマリアにうなずいた。マリアは身体を元通りにした。
テスラ博士は頭をふった。
「兄さん、それが事実なら……科学はなんの意味があるんだ。わしらは人間の叡智の進歩のため、あらゆる事象を研究してきた。そこに真実があると思ったからだ。しかし魔法などが現実のものとなったら、われわれの研究に何の意味がある？　いくら観測を積み重ねても、観測者の意向にそう観測結果しか出ないなら、それは科学ではない！　科学は観測者の意思など無関係に存在するものでなくてはならない！」

「いや、そうではないぞ」
「なにがだい？」
「わしらにはもうひとつ研究しなければならない対象がある。それはわしの発見した”魔素”だ。この”魔素”がいったいどのような性質のもので、なぜ人間の思考に反応して現実を変えることが出来るのか。それを研究しなければならない。もし”魔素”の科学的な研究が完成すれば、それ以外の科学の研究も、お前の言うような観測者の意思に関わらない、純粋な観測結果が得られるようになるだろう」
テスラ博士は目をきらめかせた。
「そうか……もしかしたら……」
マリアを見る。
「その”魔素”を研究すれば、あらたな兵器を開発することも可能じゃな。そのマリアのような、ロボットの兵士を作ることもできる。マリアは真鍮で出来ているが、わしなら鋼鉄で兵士をつくるな。鋼鉄の兵士……そう、鉄人兵団とでも名付けようか！」
ニコラ博士は怒りに震えていた。
「テスラ！　お前、なんということを考えているのだ！」
弟は兄をきっと睨んだ。
「なにが悪い？　わしはコラル帝国の忠実な臣民じゃ！　帝国の発展のため、より強力な軍事力を研究するのが、わしの役目だと思っておる！」
しばらく両手を握り締め、怒りに震えていたニコラ博士だったが、やがてがくりと肩を落とした。
「そうか……お前はすっかり変わってしまったな。いいだろう、勝手に鉄人兵団でも、空飛ぶ兵器でも作れば良い。そのうち、じぶんの間違いに気づく日が来るに違いない」
「兄さん……」
テスラ博士は口ごもった。
「さよなら。わしはロロ村へ帰るよ。ここにはわしの居場所はない」

「そうか……」
ふたりはしばし見詰め合った。

パックはムカデに乗り込み、エンジンを始動させた。
サンディ、マリア、ニコラ博士がつづく。
あの中尉が、パックを見上げ声をかけた。
「すまんな。反逆者でないことはよく判った。しかしそのムカデは目立ちすぎるぞ。これをお前にやろう」
そう言って、パックに一枚のシートを手渡す。
帝国の紋章が描かれている。
「その紋章をムカデに貼りなさい。それがあれば、無用な疑いはかけられずにすむぞ」
パックはニコラ博士を見た。
博士はうなずいた。
「いいよ。貼りなさい。わたしはかまわないから」
「ありがとう」
パックが中尉に礼を言うと、かれはにやりと笑った。意外と人のよさそうな笑顔だった。たぶん、それがかれの本来の性格なのだろう。

ホテルに帰ると、ホルストとホルンが心配そうな顔で待っていた。
「どうしたんです、ニコラ博士。いきなり軍の兵士が現れたかと思うと、あなたを連れ去ってしまって……なにがあったんですかな?」
ホルンの問いかけに、ニコラはぐったりと椅子に腰掛けた。頭をふり、テスラ博士とのやりとりのことを答えた。
「まったく、あいつは変わってしまった。帝国の臣民だと! わしの発見した”魔素”を使って、新兵器を開発するつもりだと言いおった。いやはや、どんな兵器を作るつもりなんじゃろう……」
「兵器を作るだけならいいのですがな……」
ホルストがつぶやいた。ニコラ博士は妙な顔になった。ホルスト

は肩をすくめた。
「それを使う機会を求めるようになったらことだな、と思ったのですわい」
ニコラ博士は暗澹たる顔つきなった。
ひとり、考え込んでいるニコラ博士をよそに、ホルンはパックに声をかけた。
「パック、これを見ろ」
手にしていたのは新聞だった。
パックは父親の手から、それをひったくるようにして受け取った。
紙面に目を走らせ、顔をあげる。
「記事が載ったんだね！」
うん、とホルンはうなずく。
パックは夢中になって記事を読んだ。

”空飛ぶ白球について情報を求む！
過日、ロロ村より空中に消えた空飛ぶ白球は、北の方向へ向けて飛び去った。この白球についての情報、あるいはミリィという少女についての情報を求める。情報の提供者は新聞社か、もしくは市内のホテルに宿泊しているホルン、パックの親子に提示されたし。”

とあり、パックたちが泊まっているホテルの名前、連絡方法が記載されていた。
記事はちいさなべた記事であったが、パックにはそれは紙面のなかでひどく目立っているように思えた。

サンディとマリアは同じ部屋を与えられている。
ふたりとも女同士、というわけだがサンディはマリアが普通の意味で女の子かどうか、首をかしげていた。
なにしろ夜中にベッドに入るのはサンディひとりで、マリアは部屋の中でパックの声がかかるまで微動だにしないで椅子に腰掛けて

いるか、窓辺に立ったままでいるかどちらかである。
なんどかサンディはマリアにベッドに入って休むよう声をかけたのだが、マリアは首を左右にするだけだった。
「わたしはロボットですから、人間のような睡眠の必要はないのです。どうぞ、お先におやすみください」
サンディは唇をとがらせた。寝間着に着替え、ベッドに横座りになって髪の毛をとかしつけている。
「なあんだ、つまんないの。あんた、女の子でしょう？　どこからどう見ても、女の子にしか見えないもの」
マリアはちょっと首をかしげた。
「さあ、どうでしょう。確かにわたしの姿は人間の女性をうつしたものですが、わたしの身体の中には蒸気機関が納められているだけです。わたしはロボット。人間ではありません」
「ね、初めて動き出したときのこと覚えている？」
「はい、わたしは生命を与えられた瞬間からすべてのことを記憶しています」
サンディは肩をすくめた。
「ロボットだから、って言うのね。ねえ、どうしてパックの命令をきくの？　あんた、パックには特別の感情があるみたいに見えるわ」
マリアは首をふった。
「わたしには人間の言う、感情というのはありません。ただ、目覚めた瞬間パックさまにお仕えするのがわたしの使命であることを悟ったのです」
「それが博士の言う”魔素”のせいね。ねえ、マリア。あんたパックの目的がなにか知っているの」
「はい。パックさまは幼なじみのミリィという女の子を探しています。そして蘇ったという魔王を倒すことを。それがパックさまの目的です」
「その魔王を倒すってことだけど。パックの話しでは魔王が蘇ったから魔法がこの世界に存在するってわけよね。ということは、魔王

を倒すということは、魔法もこの世から消えるということじゃない？」

「そうですね」

「怖くないの？　魔法がなくなったら、あんたはもとの金属の人形にもどるのよ。もう、人間のように考えたり、ものを感じることはできなくなるのよ。いやな言い方だけど、それは死ぬってことなのよ」

マリアの顔は金属の一枚板を加工したものだから人間のように表情をあらわすことはできない。永遠の無表情のままだ。だが、サンディにはマリアがうっすらと笑ったように見えた。

「わたしには繰り返しますが感情というものはないのです。ですから怖いという感覚はわかりません。しかしそれがパックさまのおやりになりたいことなら、わたしは全力を尽くしてパックさまの目的を達成するお手伝いをしたいと思っているのです」

サンディは言葉を返すことができなかった。

そのころ。

ボーラン市の、高台にある丘陵地帯。

そこは高級住宅街になっていた。

市の、富裕層がそこに集まって暮らしている。

その一角にそびえる城と見まがうほどの豪邸。

ベランダごしの窓辺に、ひとりの青年――とはまだ早すぎる年令の少年――が、おなじ新聞記事に目を落としていた。

「ミリィの行方……か！」

つぶやき、額にかかる金髪をうるさそうに指でかきあげた。

天使と見まがう美貌。

その顔に、冷酷そうな笑みが浮かぶ。

ギャンであった。

テスラ博士（後書き）

次回はあのギャンがふたたびあらわれます。

上流階級（前書き）

母親のトーラに連れられ、ボーラン市にやってきたギャン。かれを待っていたボーラン市の暮らしとは？

上流階級

十日ほど前、サックがホルンを銃で狙い、ロロ村を遁走したその後。

ギャンの母親、トーラはてきぱきと使用人に指示を出し、商店の後始末に追われた。

「この商店はあなたがたにお任せします。売り上げの一部をボーラン市に送金して、積立金を支払えば、この店はあなたがたにお譲りするつもりです。どうですか？　あなたがた、自分の店が持ちたいと思いませんか？」

サックの店で、使用人として働いていた中年の夫婦は、おたがいの顔を見合わせた。

「この店が、わたしどものものになると仰るのでございますか？」

そうです、とトーラは尊大にうなずいた。

夫婦の顔に希望のひかりが浮かんだ。

「ぜ、是非お願いいたします！　わたしども、じぶんの店をもつことが夢でございました」

そう、よかったわね、とトーラは笑顔になった。

これで厄介な問題はひとつ片付いた。ロロ村で暮らし、商店を経営するなんて面倒なことは真っ平だった。それより恩を売って、この夫婦に名義を移し、商店の売り上げの一部を受け取るほうがよっぽど気が利いている。

馬車を用意し、トーラとギャンは大事なものを荷物にして村を出ることになった。

見送る村人たちの目には、別れの悲しみなどかけらほども浮かんでいなかった。トーラはサックと結婚して村で暮らし始めても、一度も村人たちと溶け込もうとせず、高々とした見下した態度で終始したし、ギャンもまた数々の悪事によってだれにも愛されるとはいいがたかった。あれほどいたギャンの取り巻き立ちは、ひとりも見

送りに出てこなかった。
金の別れが縁の別れ、ということだろう。
馬車を走らせ、駅へ着くと、トーラとギャンの親子はボーラン市に行くための汽車に乗り込んだ。
ボーラン市の駅には、トーラの両親が待ち受けていた。
ギャンにとっては祖父母にあたる。
「お帰り」
最初に声をかけたのは祖母のミトである。
ほっそりとした、背の高い老婦人で、厳しい灰色の目をして背をまっすぐのばしている。髪の毛はすでに真っ白になっていたが、それをきちんととかしつけている。どことなく、母親のトーラにおもざしが似ていた。
「お前がギャンか。こんな小さなとき、わしの膝に乗っけてやったきりだったなあ」
人のよさそうな笑みを浮かべているのは、祖父のゴルドであった。祖母のミトとは違い、背が低く、恰幅の良い老人であった。ちいさな鼻眼鏡をちょこんとかけ、髪の毛はほとんど抜けていた。
祖父母の背後には使用人が数人、ひかえている。かれらはすぐさま、トーラとギャンの手荷物を受け取り、待たせていた蒸気車に積み込んだ。
「さあさあ、立ち話もなんだし、はやく家へ帰ろう」
ゴルドはトーラとギャンを抱きかかえんばかりにして蒸気車に乗り込ませた。車には向かい合わせの座席があり、ギャンは二人の祖父母に見守られる形になって座った。
しゅっ、しゅっと蒸気を噴き出し、一行が乗り込んだ蒸気車は走り出した。
ギャンははじめて見るボーラン市の景色に圧倒される思いだったが、それを必死に押し隠していた。しいて無表情を装っていたが、実際は大声で叫びだしたい気分だった。
これが都会か！

これが帝国の首都か！
すげえ！　なんて人があふれているんだ！
それに建物があんなに……。
ギャンの目は、駅前の商店街や、巨大な劇場、ときおり見かける帝国の威信を高めるためのさまざまな彫像に引き付けられていた。彫像はボーラン市で高名な文学者、科学者、軍人などの英雄像である。それらの事跡はギャンは知らなかったが、彫像の目は厳しくギャンを監視しているようだった。
首都は富と栄光をこれ見よがしに見せ付けている。
ロロ村とはえらい違いだ……。
空を見上げるギャンの目がおおきく見開かれる。
「あれは？」
指さすギャンの方向を見上げた祖父は答えた。
「ああ、あれは飛行船だ」
「飛行船？」
「なんでも空気より軽い気体を詰め込んだ機体で飛ぶんだそうだ。一度に百人の乗客を運べるということだ」
ギャンはじっと首都の上空をゆったりと飛ぶ、葉巻型の飛行物体を見送っていた。
葉巻型の機体は銀色の塗装がなされており、陽射しをまぶしく反射している。
祖父を見て尋ねる。
「ねえお祖父ちゃん、ぼくもあれに乗れるかい？」
ほっほ、とゴルドは笑った。
「なんだ、ギャンはあれに乗りたいのか？」
ギャンはなぜか真っ赤になった。好奇心をむきだしにしたことが悔やまれた。
ここにはおれの知らないことがいくらでもありそうだ。
このボーラン市にギャンは住むことになるのである。
すべてを体験してやろう！

ギャンはわくわくしていた。

祖父のゴルドの家は、ギャンの想像を絶していた。家というより、屋敷といったほうがふさわしい。広大な敷地に建つ祖父の家は、総レンガ造りの、壮麗な建物であった。

思わずぽかんと口を開けて見とれていたのであろう。祖父の面白がっているような表情に、ギャンは気を引き締めた。こんな屋敷、なんてこともない！　ただ、でっかいだけじゃないか！

応接間に通されると、中年のメイドが涙を浮かべ、ギャンの顔を見つめていた。

「まあまあ……坊っちゃん。よくお帰りで……」

そのメイドはどことなくミリィの母親、メイサを思わせた。ふくよかで、笑顔がとびきりの人のよさを現している。

「憶えていないかな？　ベスはギャンの乳母をしていたことがある。もっとも三才までのことだから憶えていないのも無理はないか……」

祖父の言葉にギャンは肩をすくめた。祖父たちの説明では、ギャンは三才のころまでこの屋敷で育てられたと言う。その後、父親のサックと共にロロ村に移り住んだそうだ。しかしギャンの記憶はロロ村での暮らしだけで、そう言われてもぴんとこなかった。

屋敷を案内されると、執事、メイドたちがギャンにたいし、うやうやしく挨拶をしてくる。

ギャンはゴルド老人のたったひとりの孫であり、身内なのだ。

祖父にギャンは一部屋をあたえられた。

「ここがお前の部屋だ。トーラがお前を連れて帰ってくると聞いて、さっそく部屋を用意させた。どうだ、気に入ったかね？」

ギャンは部屋を見回した。

ロロ村での部屋と比べ、雲泥の差だ。

なにしろひろい。

この部屋ひとつで、ロロ村でのサックの家全部の部屋あわせたくらいはありそうだ。

高い天井、どっしりとしたマントルピース。
ドア近くの壁にスイッチがある。
なんだろうとそれに触れる。
ぱ！
天井のシャンデリアが輝いた。
電気だ！
この部屋は電気で照明されているのだ！
今度こそ、ギャンは本気で驚いていた。
ロロ村での明かりは蝋燭か、せいぜい灯油ランプくらいしか知らない。見上げる天井の電球の明かりは、ひどくまぶしく感じていた。
これこそ文明的な暮らしというものだ。
ギャンは祖父をふりかえった。
にっこりと笑い、うなずいた。
「気に入ったよ、お祖父さん」
祖父は満面の笑みを浮かべていた。
そうそう思い出した、というように祖父は口を開いた。
「学校のことだがな、上級学校への入学を申請しておいた。明日から通うがいい」
その言葉にギャンはびっくりした。
「学校だって……」
「そうだとも。お前もこの家で暮らすなら、ちゃんと学業を身につけるべきだ。そうでないと、将来上流階級の一員となることはできんぞ」
上流階級、という言葉がギャンを刺激した。
そうだ、おれもその一員になってやる。
そしてすべてを掴み取ってやる。
学校か……。
ギャンはロロ村での、上級生下級生が入り混じって学んでいた学校を思い出しみずからを慰めた。
なんとかなるさ……。

が、学校はギャンの想像をはるかに裏切っていた。
まず規模が違っていた。
全校生徒、三百人を越す巨大な上級学校は、一年生から三年生までそれぞれ違った教室で学び、さらに一学年三つのクラスに別れていた。何十名ものクラスメートが存在する教室など、ギャンには初体験であった。
男の教師がギャンをクラスメートに紹介した。
「今日から諸君と一緒に学ぶギャンだ。みんな、仲良くやってくれ」
三十名もの視線が一度にそそがれ、ギャンは真っ赤になった。
十名ほどの女生徒たちが、ギャンのそんな様子にくすくすと笑っておたがいひそひそと話を交わしている。
「それじゃギャン。自己紹介をしてくれないか？」
教師に言われ、ギャンはうなずいた。
「はじめまして、ギャンといいます……」
その途端、教室中の生徒たちがくすくすと笑い出した。
なんだろう？　おれはおかしなことを言ったか？
「……ぼくの得意な教科は歴史と体育で、とくに剣道は……」
ギャンは絶句した。
かれが喋るたび、教室中にさざなみのように笑い声がひろがっていく。ギャンを興味津々といった視線で見つめていた女生徒たちも、今度は見下したような視線を送ってくる。
教師が手をあげた。
「みんな！　ギャンが地方のなまりがあるからと言って笑っちゃいかんぞ！」
ギャンは理解した。
かれはロロ村のなまりで喋っていたのだ！
母親のトーラはもともとボーラン市の出身である。だから家ではトーラはなまりのない、きれいな帝国語で喋る。したがってギャンもまたロロ村では気取った、都会の喋り方をすると村人には思われ

ていた。
しかしロロ村で成長したギャンは、どんなに綺麗な帝国語で喋っているつもりでも、ロロ村のなまりが出るのだ。
うつむいたギャンはそれ以上口を開くことが出来なくなっていた。
教師はギャンの自己紹介をきりあげ、授業に移っていった。
その授業がギャンにとってはちんぷんかんぷんだった。
まず教師の喋る授業の内容がわからない。
それに渡された教科書の中身も、ギャンにとっては高度すぎた。
ロロ村での授業中、ギャンはまるで身を入れて聞いていなかったが、それは取り巻きがいたからだ。ここではギャンの知り合いなどひとりもいない。ただただ、授業時間が終わってくれることをギャンは祈っていた。
授業が終わると、まわりの生徒たちはギャンのなまりをからかい始めた。
語尾がのびるロロ村特有の喋り方をわざと真似して笑う。
ギャンがそれに怒ると、にやにや笑いで応じてくる。
はじめて、ギャンはひとから馬鹿にされるという体験を経験したのである。
畜生……。
ギャンは机につっぷし、拳をにぎりしめた。

ギャンのプライドは粉みじんに打ち砕かれていた。
自信があった剣道も、放課後のぞきにいったクラブ活動の部室で見た光景に圧倒されていた。
模擬刀を使って打ち合う部員たちのレベルは、ギャンの想像をこえはるかに高いレベルのものであった。入部を希望するギャンにひとふりの模擬刀がわたされ、さっそく初心者レベルの練習が開始された。
相手をしてくれたのは二年生で、ギャンの打ち込みは簡単に打ち払われ、あきらかにあしらってくれるとわかる相手の切っ先を、ギ

ャンは一度も受け流すことすら出来なかった。
やがてがらりと模擬刀を放り出し、二年生は言った。
「お前、いったいどんな練習をしてきたんだ？　そんなんじゃ正式の部員はおろか、学校の体育の授業でも見学するしかないぞ！」
屈辱にギャンは唇を噛みしめた。

さらなる挫折は、学校で教えられるダンスの授業だった。
ギャンの通う上級学校は、生徒たちはすべてボーラン市の上流階級の子弟であるから、舞踏会などでパートナーとなるため、ダンスを習う。
体育館にワルツのレコードがかけられ、音楽が始まると生徒たちは男性女性入り混じってダンスをする。
その中、ギャンのステップはどたどたと品のないものに映っていた。
相手をする女生徒たちは、ギャンのステップにあからさまに軽蔑の眼差しでこたえ、眉をひそめるのだった。ロロ村での村祭りでのステップが、ついつい出てしまうのであった。
その日、ギャンにはさっそくあだ名がつけられた。
田舎者と。

自分の部屋で、ギャンはベッドにうつぶせ身もだえを繰り返した。
田舎者！
田舎者！
クラスメートから投げかけられるその言葉は、ギャンにとって硫酸のように心を蝕んだ。
もともとギャンは壊れやすい自我をもっている。プライドという自我は、まるで薄いガラス細工のようなもので、他からの刺激に簡単にひびがはいるたちのものである。そのガラスをつつんでいるのが、ロロ村で一番の金持ちの家に暮らすお坊ちゃまであるという自負であったが、上級学校の生徒たちの大半はボーラン市での上流階

級の子弟であるから、ギャンの家などそんななかのひとつにすぎない。

ずたずたに引き裂かれたギャンのプライドは、それを埋めるあらたな材料に飢えていた。

畜生……！

ギャンはじぶんを軽蔑の目で見ていたクラスメートたちの顔をひとりひとり思い浮かべていた。

あいつらに仕返してやりたい！

恐怖を味あわせてやりたい……！

この手で……。

自分の両手が学校の生徒たちの首にかかり絞め殺す。相手の薄ら笑いが恐怖の表情に変わる……。

ギャンの妄想はそこで止まった。

なんだこれは？

ギャンは自分の手の平を見つめていた。

昼間気づかなかったものが、いま手の平から放射されている。

もやもやとした炎のようなものが、ギャンの両手からゆらめき立ち上っていた。

黒い炎に似たものがゆらゆらと手の平をつつみ、その黒い炎は青白い輪郭をもっている。

燃えている。

なにかが燃えている。

が、炎ではなかった。

何か、もっと別な……。

無意識にギャンは額を掻いていた。

額のまんなか、眉間のあたりが妙に痒い。

なんだろうとギャンは立ち上がり、壁に架けられた鏡に近づいた。

ぎょっ、となる。

なんと黒い炎に似たゆらめきは、手の平どころか全身から立ち昇っていたのだ。

鏡に目を近づけたギャンは、眉間の中央になにかぽつんと盛り上がっているのに気づいた。
なにか蚊に刺されたような痕がついている。
ギャンはじっと鏡のなかの自分を見つめていた。

翌朝、ギャンは他人にも自分と同じような放射があるのに気づいた。
あのメイドのベスにもあった。
ベスの放射は、ピンクの色の光のゆらめきだった。
おだやかな光の輪が、ベスの身体のうちから放たれている。
朝食の席でギャンは祖父のゴルドと、祖母のミトをじっと見つめた。
ふたりにはなにもなかった。母親のトーラには、うっすらと赤色の炎が見えた。
使用人のなかに数人、光をもつものがいた。
どうやら光は持つもの、持たないものがいるようだ。色もまた、人によって様々である。それがどういう意味を持つのか、ギャンはじっと考え込んでいた。
「学校はどうだった？　友達はできたか？」
朝食の席で祖父は話しかけてきたが、ギャンは生返事をしただけだった。
ギャンは考えていた。
真剣に考えていた。
自分の黒い炎、じっと見つめているとなぜかそれをコントロールできそうな気がしてくる。
息を詰め、炎をじぶんの身体から外へのばす。
ゆらゆらと黒い炎は青白い輪郭を持ったまま、祖父のほうへのびていく。
祖父の胸へ、炎はのびていく。
心臓のあたりへ、炎を伸ばしてみる。

うっ！　と、祖父の顔色が変わる。
くくくく……と、祖父は胸をかきむしった。
「あなた！」
祖母のミトが悲鳴をあげた。
「し、心臓が……心臓が！」
ギャンは炎をひっこめた。
はっ、と祖父はあえいで息を吐いた。
はあーっ、はあーっと何度も呼吸を繰り返す。顔色は真っ青、というよりどす黒くなっていた。顔中、脂汗でぬれて光っている。
祖母は使用人たちに医者を呼ぶよう金切り声をあげていた。
母親のトーラは呆然となっていた。
その目が、ふと息子のギャンにとまる。
母親は戦慄した。
なぜならギャンの顔に薄ら笑いが浮かんでいたからである。

ギャンは発見したこのちからを色々試すことにした。
炎をコントロールすると、物を動かすことが出来た。
手の平から炎をのばし、目標の物体に触れる。なんと、まるで自分の指で触れている感覚すらあった。握ると、つかめそうだ。
自分の部屋でテーブルにコップを置き、手を触れずに動かしてみる。
ずずっ、とコップが動いていく。
持ち上げる。
なんのささえもなく、コップは空中で浮かんでいる。
炎の密度を変化させると、温度もコントロールできるようだ。
ギャンは自分の身体から炎をいっぱいに伸ばし、部屋全体に張り巡らせる。
がたがたがた……。
部屋中の家具が、地震のように揺れている。
がちゃん！

花瓶が落ちて、床でこなごなに割れる。
ぱりーん！
窓ガラスが内側から吹き飛んだ。
ばさばさばさ……と、窓のカーテンが強い風にあおられまくれあがった。
わはははは！
ギャンは有頂天になっていた。
その身体は、部屋の中央で浮かんでいた。

学校にきたギャンは、昨日の劣等性らしさはかなぐり捨てていた。
かれの姿を見たクラスメートは、最初薄ら笑いを浮かべていたが、すぐに恐怖の表情に変わった。
ギャンの顔にはまがまがしい影が浮かんでいた。
ドアを開けたギャンは、じろりとクラス全体を見わたした。
途端に、クラスメート全員はひんやりとした冷気を感じていた。
冷気はギャンから発しているようである。
ギャンは無言で教室に入ると、昨日かれを「田舎者」と呼んだひとりの生徒に近づいた。
「な、なんだよ！」
思わず生徒の一人が椅子から腰をうかした。
じろり、とギャンの凝視がかれを縛り付けた。
す……、とギャンの片腕があがる。
「おまえ……」
にたり、と笑いがうかぶ。
う！
生徒の顔が恐怖に歪んだ。
気がつくと、かれの両足は教室の床から浮いていた。
「わ！　……わっ！」
ギャンの腕が上がっていく。
生徒の身体もぶらんと空中に浮かんでいく。

さっ、とギャンの腕が横に薙ぎ払われた。
わあーっ、と悲鳴を上げ、生徒の身体は教室の窓へ突進した。
ガラスを突き破る直前、窓ガラスが誰の手も触れていないのにばたん、と開き、生徒は手足をばたばたさせながら外へ飛び出していく。
ぐえっ、という押し殺した悲鳴が聞こえる。
窓側の生徒は一斉に窓の外へ身を乗り出し、下を見下ろす。
教室は二階にあった。
飛び出した生徒は校庭に倒れていた。
手足が妙な角度にねじれていた。まるで壊れた人形のように。
さっと生徒たちの視線がギャンに集まる。
全員、恐怖の表情を浮かべていた。
それらの視線を浴び、ギャンは恍惚の表情になっていた。
これだ！
この恐怖！
濃密な恐怖の香りが、教室中を充満していた。
それをギャンはたっぷりと味わっていた。それらの恐怖は、ギャンにあらたなちからを注ぎ込んでいたようだった。
おれは魔王だ……。
ギャンはつぶやいた。
すると天啓のようにひらめいたものがあった。
そうだ、いまのおれは魔王そのものでないのか？
ヘロヘロがいまのギャンを見たら叫んだろう。
あの”オーラ”は、かつての自分と同じだ、と。

上流階級（後書き）

ギャンは魔王の”オーラ”を身につけ、あらたなちからをえる。ギャンはこのちからでなにをするのだろうか？

少尉（前書き）

みずからのちからに目覚めたギャンは、征服の野望を胸に動き出す！

少尉

結局、ギャンによって教室から放り出された生徒は過失による事故ということにされた。

ギャンは教室中の生徒たちに催眠をかけ、生徒が突然なにかわけのわからないことを喚いて自分から教室の窓を開け、飛び出したという記憶をでっちあげたのである。

あらたに獲得した自分の能力に、ギャンは酔いしれていた。

このちからを使えば、世界征服も可能だ……。

が、ギャンはまだまだ自分のちからが、それほどのものでないことも判っていた。

たしかにいまのこのちからは奇跡的であるが、せいぜいおのれの身を守る役にしかたたないことも自覚していたのである。

だがいつか、ギャンのちからは世界を制するほどのものに成長するだろうことも本能的に悟っていた。それまで、じっくりとちからを蓄え、いつの日か魔王となって君臨してやる。

祖父からあたえられた自分の部屋の窓から、ギャンは外を見つめた。

視線のさきにあるものは、王宮の優美な城の偉観である。

まず、このコラル帝国が手はじめだ。

それには王宮にはいりこむ身分が必要である。

「軍隊にはいりたい？」

祖父のゴルドはあっけにとられ、ギャンの顔を見つめた。

あの朝食の席で倒れてから、祖父はベッドに寝たきりになっていた。ほんのちょっとしたギャンの悪戯だったが、祖父の老いた心臓にはかなりの負担になっていたのだろう。かけつけた医者はしばらく療養をすすめ、使用人に世話されることになった。

もちろん、それが自分のしたことだなどとギャンは口にすること

はなかった。まだまだこの老人には利用価値がある。それまでは生きていてくれなければ困る。

「そうです。お祖父さん。ぼく帝国の軍隊にはいりたいんです。たしかお金をつめば、少尉の任官がかなうって聞きましたけど」

「そりゃたしかにな……しかしお前が軍隊に入りたいだなんてなあ」

老人は頭をふった。

コラル帝国には三つの身分がある。

まず貴族。この貴族にもふたつあり、ひとつは帝国の皇帝の血縁者によって占められている。伯爵以上の爵位のほとんどが、この血縁者だ。この一族からは、皇帝の相続権が認められ、現皇帝になにかあったばあい、次代の皇帝はこの一族から選出される。

もうひとつの貴族は帝国にたいする功労で爵位を授与されたもの。軍人や、政治家などから功績に応じて爵位が授与される。一番下の男爵、子爵などがそうである。

そのしたに位するのが軍人である。帝国軍の士官は、貴族に次する身分のものとして、尊敬を受けていた。なにしろ帝国のちからの源泉がその卓越した軍事力であるから、当然のことだ。

それ以外はいわゆる平民である。

平民は議会をもち、議員は選挙で選出される。平民議会は元老院とおなじだけの権力を持ち、皇帝へたいする法案を提出することが出来る。この平民からまれに貴族に選出されることもあった。

ギャンはそのうち軍人の身分を手に入れることを狙っていた。

正式な軍人となればどうどうと王宮に入り込むことも出来るし、戦争がおきれば出世だって思いのままだ。もっとも現在、帝国とことを構えるような度胸をもった国はほとんどないが、なにかまわない。その気になれば、ギャンは戦争を引き起こすことも出来ると考えていた。

少尉の身分ではどうどうと王宮に入り込むのは難しいだろうが、まずは軍人の身分が必要だ。それには軍隊に応募して、訓練を受けなければならないが、厳しい訓練など最初からするつもりはなかっ

た。

しかし帝国軍には特別の応募枠があり、金をつめばだれでも少尉の任官を正式に受けることが出来る。

大金持ちの貴族の子弟のほとんどが、この金を使った少尉の身分を手に入れている。いわゆる高貴な血の代償というやつで、貴族はいざとなった場合、軍人として前線に立つことを平民たちから期待されているのである。

「しかしお前はまだ十五才だぞ。十八才にならないと、任官は出来ないはずだが」

老人の言葉に、ギャンは手をふった。

「そんなこと、構いません。なんとかなりますよ。とにかく、お金を用意してください。あとは自分でやりますから」

そう言うと、ギャンは老人を見つめた。老人の目がぽかんと見開かれた。その瞳がうつろになっている。ゴルド老人は指を上げ、ベッドの脇の紐をひっぱった。どこかでチャイムが鳴り、ドアを開けて使用人のひとりが姿を現した。老人はかれに金を用意するよう言いつけた。

さっと使用人は頭をさげ、きびきびと老人の部屋の金庫から札束を用意し、ベッドに積み上げた。それをギャンは引っつかみ、笑顔を見せた。

「それじゃ、行って来ます！」

さっさと部屋を後にし、屋敷から外へ出かける。

蒸気車を用意させ、ギャンはボーラン市の王宮近くにある帝国軍本部へと出かけた。

本部の建物は古い、歴史ある建造物だった。

どっしりとした正門をくぐり、受付に近寄る。

事務官がギャンの姿を見て怪訝な表情になった。

ギャンの姿は目立った。見るからに子供で、軍隊に入隊するには早すぎる。しかしギャンは得意の催眠を使って、事務官の怪訝な表

情を消した。うつろな目になる事務官に、金を渡し少尉の任官証を用意させる。

その気になれば、事務官に催眠をかけ金を受け取ったと錯覚させて無料で任官証を用意させることも可能である。が、そうするには上層部までつぎつぎとだまくらかし、帳簿を改竄させる必要がある。そこまでやるには根気と、すべてを把握する調査が必要で、そんな面倒くさい手順を踏むより、祖父ひとりをあやつって金を出させたほうが簡単である。

ギャンはすべてを手早くやるつもりだった。

任官証を受け取ると、その足で軍服や階級章を手に入れるため補給部へと急いだ。サイズを計り、制服を試着すると、それを姿見でためすがめす眺める。

帝国軍人、ギャン少尉の誕生である。

ギャンは本部の壁に架けられている帝国軍の系統図を見上げた。これには帝国軍のさまざまな部署が、ひとめでわかるように図で示されている。

そのうち、どの軍の部署にも属さない、兵器開発局という部署に目をつけた。

これは面白そうだ。どうやら、研究開発をしている部門らしい。二階にある軍令部に出かけ、この兵器開発局への任官をとりつける。あっという間にギャンは軍令部のお墨付きを手に、外に待たせてあった蒸気車に乗り込んだ。

研究所はボーラン市のはずれにあった。

軍の建物がそびえ、その隣りに巨大な倉庫のような研究所の建物が見える。

扉を開け、中に入り込むと、ひとりの老人がなにやら研究ノートにぶつぶつつぶやきながら書き込んでいる。

老人は顔を上げ、眼鏡を指で押し上げた。

「だれじゃね、お前さんは。あまり見かけない顔だが」

ギャンは大声をあげた。
「ニコラ博士！」
老人は苦い顔になった。
「また兄に間違えられた。わしは弟のテスラじゃ！」
「テスラ……博士？」
「そうじゃ。兄のことを知っているということは、お前さんはロロ村の人間じゃな？」
眼鏡のおくから、テスラ博士はじろりとギャンを睨んだ。
ギャンはうなずいた。
「また、と仰いましたね。それはどういうことです？」
「昨日のことじゃ。ロロ村から兄が来ておって、パックという妙な小僧とサンディという小娘をここに連れてきたのじゃ。わしは兄と喧嘩して、二度と会わんということになった……」
怒りのため、テスラ博士の話しは性急で、ギャンは苦労してそのつじつまを探った。ようやく話しの筋道をたどり、ギャンはロボットの存在に興味を示した。
「鉄人兵団ですか？」
問いかけると、テスラ博士はにやりと笑った。手許のノートに描かれているスケッチをギャンは覗き込んだ。
荒っぽくあるが、どっしりとした鉄の鎧をまとった人のような機械が描かれている。スケッチにはテスラ博士の字だろうか、さまざまな書き込みがあった。
その中の、”魔素”という字にギャンは引き付けられた。
「その”魔素”とは？」
「ああ、兄のニコラが発見した要素じゃ。この”魔素”が魔法の源なのじゃそうだが、わしはまだ確認しとらん。これを研究すれば、鉄人兵団はおろか、さまざまな兵器を開発できるようになるじゃろう」
ギャンはうなずいた。あきらかに、自分のこの能力は”魔素”によるものだ。

どんぴしゃりだ！

ギャンは自分が望むものを手に入れたのを感じていた。

「博士！　ぜひ、その鉄人兵団を完成させてください！　この研究は、帝国にとってきわめて有用なものになります」

「言うまでもないわい。しかし予算が限られておるからな……」

「それはなんとかなります。資金は、軍令部に要求してください。ぼくがうまくやりますから」

テスラ博士は疑わしそうにギャンの階級を眺めた。

少尉と言えば士官候補生にすぎない。それにギャンは見るからに若造で、そんなかれに予算を要求させる権限などあるはずもない。

ギャンは肩をすくめた。

「まあ、見ていてくださいよ。それまで、この鉄人兵団と”魔素”の研究を続けてください。じき、予算がつきますから」

その場でギャンはテスラ博士に軍令部への予算請求の書類を用意させた。それを書類入れにいれると、ギャンはふたたび帝国軍本部へと取って返した。

本部へ向かう蒸気車の中で、ギャンはいまの出会いを興奮してふりかえっていた。

あのテスラ博士は掘り出し物だ……なんとかしてかれにもっと多くの、そして世界を征服するにたりる兵器を発明させる必要がある。

ギャンの空想はひろがった。

ぞくぞくと生産される鉄人兵団、空を飛ぶ戦車、巨大な戦艦。それらをしたがえ、世界を征服する自分の勇姿……。

ギャンはそのイメージに酔っていた。

そのころ、研究所でテスラ博士は鉄人兵のスケッチを前にあることをつぶやいていた。

「この鉄人兵に知能を付与するためには……うむ！」

博士の目がおおきく見開かれた。

「あやつじゃ！　たしか二、三年前空想的な論文を提出した若いや

つがおったな。なんといったか名前は……そうじゃ！　ババジ！
ババジ教授じゃ！」

少尉（後書き）

次回はミリィの手がかりがしめされます。パックは首都をはなれ、旅立つのか？

エイダ（前書き）

ミリィの手がかりがついに掴めることにパックたちは希望をもつ。
が、その手がかりと言うのが……

「空飛ぶ白球について情報あり。下記の住所にてお会いしたく……」
手紙をホルンとパックは食い入るように見つめていた。
パックはホルンを見上げた。
「父さん！」
うむ、とホルンは顔をほころばせていた。
「ついに手がかりだ……」
「このバベジ教授ってだれだろう？」
「なに教授だと？」
ニコラ博士が興味を示した。
手紙のあて先には、バベジ教授と署名があった。
「教授というくらいだから、科学者かもしれないね」
パックがそう言うと、ニコラ博士は首をふった。
「判らんぞ。歴史の研究をしていても教授と名乗れるからな」
どうやらニコラ博士の分類では、そういう研究者は教授という地位にはふさわしくないと考えているようである。あくまでも実験をおもにした、研究者でなければ認めたくなさそうだ。
さっそく出かけることになり、パックとホルンはムカデに乗り込んだ。
ホルストとニコラも同道することになった。
「わしらがいて、困ることはないじゃろう？」
ホルストはすましてそう言うと、パイプをくわえた。
「待ってよお！　あたしたちを置いてゆく気なの？」
サンディとマリアが駈けてくる。
パックはぴーっ、と汽笛をならした。これじゃいつまでたっても、出発できない。
「もうだれもいないな？　それじゃ出発するぞ！」
わざとらしくパックはあたりを見回し、レバーを握った。

「どうぞ出発なさって！」
サンディが気取った声でこたえる。
「待て待て、このムカデは五人乗りだ。六人は無理だぞ！」
ニコラ博士が大声をあげた。
言われるとおり、ムカデには五人分の椅子しか用意していない。
全員、顔を見合わせた。
ホルストが手を挙げた。
「それじゃわしが降りよう。わしはあそこで」
と、ホテルの反対側にあるレストラン前の、歩道側のテーブルをしめした。
「待っておるからな。あそこのコーヒーは旨い！」
そう言うとさっさと椅子から立ち上がり、地面に降り立った。
「それじゃ、行って来ます！」
パックが叫ぶと、ホルストはうなずいた。パックはレバーを引いた。
がったん、とムカデは足を伸ばした。
横腹には、中尉のくれた帝国の紋章が描かれている。
しゅっ、しゅっと蒸気の音を陽気に響かせ、ムカデは町を歩き出す。
それを見送り、ホルストは肩をすくめてレストランに歩き出した。
どっかりとテーブルの椅子に腰掛け、ボーイを待つ。
ボーイがやってくるとコーヒーを注文した。
ついでにケーキも追加する。
運ばれたケーキとコーヒーにホルストは相好を崩した。
なんだかこのボーラン市に住みたくなってきた。自分は都会向きの男なのだろうか、とホルストは思っていた。
手紙には地図が同封されており、それを頼りにパックはムカデを走らせた。
だんだんあたりは狭苦しい町並みになっていった。

路地の石組みが不ぞろいになり、町並みの建物もみすぼらしくなる。

あたりに漂う腐敗臭に、サンディは眉をしかめた。

「なんだか、臭いわ……」

汗と排泄物、それに腐った食物の匂いが交じり合って独特の臭気を発散させている。道を歩く人々の目はどろんと濁り、ムカデを見ても興味をしめさない。身にまとうのも、いつ洗濯したかわからないほど色あせた襤褸をまとっていた。興味津々にムカデを見上げるのは子供たちくらいのものだ。その子供たちも、靴さえはかず裸足のまま寒さに震えていた。

「こんなところがあったなんて！」

サンディの顔に怒りがさしのぼった。

「こういう大きな都市ではスラム街はつきものだ。身分の上のものは、こういう場所があることを知りながら、存在しないふりを装っている」

ホルンの言葉にサンディはかっ、となった。

「あたしは知らなかった！　知っていたら……」

「知っていたらどうした、というんだね？　お嬢さん」

サンディはうつむいた。

目に涙が浮かんでいた。

ようやく住所を探り当て、空き地を見つけてパックはムカデをとめた。

降りる直前、ニコラ博士はムカデの操縦席でなにやら操作している。

「用心のためじゃからな」

つぶやく。

地図にあった住所には古びた二階建ての建物があった。

建物にはふといパイプが何本もまきつくように這い、パイプの先端からはしろい蒸気が盛大に噴きあがっていた。

「蒸気を使っているようじゃな」

鋭い視線をニコラ博士はそれに注いでいた。
ドアのそばにはチャイムのボタンがあった。
それを押すと、家の内部でかろやかな鈴の音が鳴り響く。
やがて足音が聞こえ、ドアが内側から開かれた。
「どなたですかな?」
現れたのは、三十代半ばと思われる、若い男だった。
背が高く、黒い髪の毛を半分顔にたらし、口ひげを生やしている。
肌の色は青白く、長い間陽射しを浴びていないようだった。ぎろりと鋭い視線がややうつむき加減の顔のなかで光っている。身にまとっているのは、汚れた白衣である。なぜかその視線はニコラ博士に注がれている。眉間に皺がきざまれ、憎しみといっていい感情が一瞬よぎった。
「失礼、バベジ教授とお見受けするが、新聞で白球のことについて情報があるということなので……」
ホルンの言葉にバベジ教授はうなずいた。
「いかにもわたしはバベジ教授だ。しかしこれほど大勢で押しかけられてくるとは思ってもいなかった……」
まあいい、入りなさいと教授はパックたちを招きいれた。
入って、パックはうわと立ち止まった。
足の踏み場もない、とはこのことだ。
床のあちこちに本が積みあがり、その間を何本ものパイプがうねうねと這い、天井からは無数の電線が垂れ下がっている。狭い室内には無数の機械が立ち並び、ほそい隙間からようやく道ができているという具合。
「なにを研究なさっておるのですかな?」
それらの機械をじろじろと見てニコラ博士は尋ねた。
「人工知能の研究ですよ」
「なに、人工知能?」
「さよう……わたしが帝国科学院に論文を提出したとき、あなたも審査に同席なさっておいでのはずだ!」

「わしが？　そんなことありはせんぞ！　第一、わしは帝国科学院などに所属しておらん」
「馬鹿な！　テスラ博士といえば、帝国科学院の代表ではないか！」
がくりとニコラ博士の口が開いた。
「それはわしの弟じゃ！　わしは兄のニコラのほうじゃ！」
バベジ教授の顔が赤くなった。
まじまじとニコラ博士の顔を見つめる。
ほっとため息をついた。
「失礼……テスラ博士にふたごの兄がいることは承知していたが、その兄がいま目の前にいるとは気がつかなかった。科学院に論文を提出したとき、テスラ博士はわたしの研究を鼻で笑ったのでつい怒りに目が眩んでしまった」
「いいんじゃよ。あいつもちょくちょくわしに間違えられるからの。それにしても人工知能の研究とは聞き捨てならん。それと、弟があんたの研究を真剣にとりあげなかったこともな」
バベジ教授はちらちらとロボットのマリアを見ていた。
「あれは？　ニコラ博士」
うむ、とニコラ博士はマリアをふりかえってうなずいた。
「ああ、あれはロボットのマリアじゃ」
「ロボット？　それではあなたも人工知能の研究を？」
いいや、とニコラ博士は首をふった。
「それについてはまだじゃ。第一、どうやったら機械に知能を付け加えることができるのかさえ、霧の中じゃ」
「それにしては、あれは独自の判断で動いているようですが」
「あれは……いうなれば怪我の功名じゃな。わしの研究成果とは直接関連はない」
そう言うニコラ博士の口調は苦いものだった。
「ともかくその人工知能について教えてくれ！　どのような仕組みで……」
そのまま放っておくとニコラ博士とバベジ教授は学問の話しに夢

中になりそうなので、パックは慌てて間に入った。
「ちょっと待った！　まずミリィの手がかりが先だよ！」
バベジはうなずいた。
「もちろんだ。だが、あなたがたにあの手紙の趣旨を説明するには、まずわたしの研究を理解してもらう必要がある。こちらへどうぞ」
隣の部屋のドアをしめす。
パックたちはそのドアをくぐった。
「なんじゃこれは……」
ニコラ博士はぼうぜんとあたりを見わたした。
壁一面、びっしりとなにかの機械が覆っている。
その間を無数の電線が繋ぎ、部屋の真ん中になにか巨大なものが鎮座していた。
明かりがつくと、全員驚いた。
そこには巨大な女の首があった。

無数のパイプ、さまざまな金属のシリンダー。それらが組み合わさって、全体として女の首のような形になっている。壁の機械にニコラ博士は近々と目を寄せ、眉をひそめた。
「なにやらちいさなリングがいくつも見えるな。これは？」
「それが人工知能の最小部分です。これがいくつも接続され、人間の脳のイミテーションを形作っているのです」
「これは、どう働くものだね？」
「人間の脳は……」
バベジ教授は自分の頭を指さした。
「いくつもの脳細胞によって考え、感じます。わたしは脳細胞を研究して、それを機械に置き換えることができると気づきました。それがわたしの研究成果なのです。そのリングはおのおの極小の磁石として働き、それにまきつけた電線に電流がながれ蒸気が送り込まれると磁束の向きがかわり、スイッチとして動きます。オン・オフふたつのスイッチになり、それが二進法で数値が変化するのです」

バベジ教授の説明を判りやすく言うと、コンピューターのことである。これは蒸気で動くコンピューターなのだ。

ニコラ博士は愕然となった。

「すごい発明じゃないか！　なぜ弟はあんたの研究を無視したのかね？」

バベジは肩をすくめた。

「論文を提出したときはわたしはまだ正式に教授に就任していませんでした。テスラ博士は、無名のわたしの論文が形式上大学の認証を受けていないことで、正式のものではないと言いました。その後わたしは教授職につきましたが、帝国の資金援助を受けることなく私費でこの装置を作り上げたのです」

「なんということじゃ！　このような素晴らしい成果を無視するとは。あやつらしいわ！」

ニコラ博士は憤然となった。

パックはいらいらしてきた。

「で、それが手がかりとは何の……？」

思わず口を挟む。

バベジは笑った。

「いま説明しようとしていたところさ。それではこの装置に電源をいれよう」

つかつかと壁のスイッチに近づくと、いくつかのスイッチに触れる。

ぶうーん、と変圧器が唸り、ボイラーから蒸気が送り込まれ、壁の装置に一斉に通電して無数のランプが輝く。

ざざざざ……。

まるで森の木々に風がふいて、葉がゆれるときのようなざわめきが聞こえてくる。

見ると壁のリングが細かく振動し、それが動くときの音が葉を擦らすような音をたてているのだ。

ぶしゅーっ、とため息のような音をたて、部屋の真ん中の女の首

のような形の装置が動き出した。
その瞼がゆっくりと持ち上がっていく。
瞼の下からは、ふたつの瞳がのぞいていた。
その瞳はしばらくゆっくりと部屋中を見回していたが、やがて立ちすくむパックらに焦点があった。女の口が開き、言葉を押し出した。
「バベジ……」
教授はうなずき、口を開いた。
「エイダ。あの新聞の広告をだしたかたがただ。話をしてやってくれ」
驚きに、ニコラ博士は口をぱくぱくと動かしていた。
エイダ、と呼ばれた女の首はうなずき話し始めた。
「わたしにはこの世界で起きているあらゆる事柄が感知されます。この世界には、不思議な要素が満ちており、それがわたしに知能をあたえ、こうしてお話しができるのです」
「”魔素”じゃ！」
ニコラ博士はつぶやいた。エイダはうなずいた。
「”魔素”というのですか。よい言葉ですね。その要素をきわめて正確にあらわした言葉です。それではこれからわたしは、それを”魔素”と呼ぶことにしましょう」
エイダの瞳はふかい叡智をあらわしていた。その瞳に見つめられると、すべてを見透かさせるような気になってくる。
「わたしの感知した異常なちからは、首都のはるか南から北の方角へむけて飛び去りました。やがて北の森へと到達すると、そこで留まりました。その森にも、異常なちからが集中しているのを感じられます。そのちからは、あなたがたの言葉では魔法、と言うのではないですか？」
「その場所を特定できるかね？」
ホルンは尋ねた。
エイダはうなずいた。

その瞳から光が発せられた。
空中にまるい、球体があらわれる。
サンディはそれに指を近づけ、まるで手ごたえがないのに驚いた。
エイダはにっこりと笑った。
「それはわたしの作り出した幻影です。実体はありません。この球体が、世界全体をあらわしています。いま、わたしたちがいるのは北半球のこのあたり……」
球体に描かれた大陸のひとつに赤い点がともった。
「そのちからはこの方向に飛び去りました」
大陸から一本の矢印がのびていく。
やがて矢印はとまった。そこにあらたな光点が表示された。北極近くの、北の大陸だった。
パックはそれを見上げ、なんて遠方なんだとため息をついた。北の大陸と、いまいるところには大洋が広がり、海が隔てている。
しかしミリィはそこにいる！
なんとしてもそこへ行かなくては。
パックは決意をあらたにした。
エイダの瞳がパックを見つめている。
「しかしもうひとつ、気がかりなことがあります。わたしはこの首都であらたなちからを感知しました」
「どういうことだい？」
「判りません。その性質がどのようなものか、まだデータが不足しています。しかし”魔素”というのですね、その異常な集中を感じます。いまもです」
「わたしはずっと人間の本質が脳にあると思ってきた」
二階にある応接間で、一同は椅子に腰かけバベジの言葉を聞いている。
「逆を言うと、脳が死なない限り人間は不死ということだ。しかし人間の身体は華奢で、わずかな怪我や病気ですぐ死んでしまう。わ

たしの妻もそうだった。妻は、わたしの目の前で病で死んだ。わたしは脳の研究をはじめた。人工的に脳を作り上げることが出来たなら、そしてそれに人間の記憶を移植することができたなら、人間は不死を手に入れることが出来る」

バベジは窓際のちいさなテーブルから写真たてを取り上げ、見入った。若い日のバベジの隣りに、ほっそりとした女がすわっている。その女は気弱げな笑みを浮かべ、ほんのすこしバベジに顔をよせている。

「あの装置にエイダ、と名づけたのも亡き妻の思い出のためだ。装置の出力装置には、妻の面影を投影している。わたしは人工知能の最初のこころみとして、数学の問題を解く装置を考案した。それ以上のものは求めなかった。しかし最初の実験で、あれは驚くべき成果をあげた。なんと、人間以上の知能をしめし、わたしと会話すらしてみせたのだ」

「〝魔素〟のせいじゃ。あれには蒸気のちからが関わっておるからな」

「そう、エイダも同じことを言っていた。蒸気の力が〝魔素〟にちからを加え、単純な計算装置にすぎないあれを、人間以上の知能をあたえることになったのだ」

「怖ろしいことだ……人間の尊厳をおかす研究だ……」

ホルンはつぶやいた。

その言葉にバベジはきっと目を光らせた。

「なぜだね？　人間の知能を研究するということが、なぜ人間の尊厳をおかすのかね？」

「あなたの言葉によると、あれは思考するというじゃないか。人間だけが思考することができるのに、ああいった装置がどんどん増えれば、いつしか人間はああいった思考機械に支配されることになるんじゃないのかね？」

バベジは黙っていた。

一階にもどると、マリアが立ち止まった。
「どうしたの？」
サンディが声をかけた。
「あの思考機械が呼んでいます」
マリアは答えた。
「エイダが？」
マリアはうなずき、エイダの部屋へ歩いていく。
パックたちも続いた。
ざあああ……ざあああ……。
壁の装置が波の音のようなざわめきをたてている。
エイダが思考しているのだ。
「マリア……」
エイダは目を開いた。
「わたしとあなたは、おなじ”魔素”によって思考し、外界を感知します。いま、わたしたちには見えない絆が生まれました。判りますね？」
「はい……」
マリアの返事に、パックは驚いた。
エイダは続けた。
「わたしはここから一歩も動くことは出来ません。しかしあなたを通して、外界を感知することができるようになりました。あなたが見るものをわたしも見、あなたが聞くことをわたしも聞くのです。わたしは外界の”魔素”の異常な集中を感知することが出来ます。それをあなたに伝えましょう。それにより、あなたがたの探す相手がどこにいるか、逐一伝えることができるでしょう」
「ミリィの行方が判る、というのかい？」
「そのミリィと言う娘が、異常な”魔素”の集中する存在と一緒に行動しているかぎり、その近くにいる可能性は高いでしょう」
そうか……パックの胸に希望がともった。
いままではあまりの距離に絶望的になっていたが、こうなるとマ

リアを通じてエイダの判断を知ることが出来る。
パックは無性に旅立ちを欲していた。
その時、わあ！　という大声が外から聞こえた。
さっとニコラ博士は顔をあげた。
「やりおった！」
どたばたと大股で外へのドアを開く。
バベジの家の側に停まっているムカデに数人の子供が群がり、そのうちのひとりが目を丸くして地面にぺたんと腰をおろしていた。
驚きに、すっかり腰がぬけているようだ。
「どうしたんだい？」
少年はすっかり怯え、震える指先でムカデを指さしている。
ニコラは笑った。
「盗難防止に、ちょっと仕掛けをしておったのじゃ。わし以外の人間が操縦装置に触れると、電流が流れるようになっておる。なに、ちくっと刺すような痛みがはしるだけだから大事ない」
博士は少年の頭をなでた。
「もう、悪戯するでないぞ」
少年は立ち上がり、逃げ出した。ちらっ、ちらっと何度も振り返っている。
ニコラ博士はバベジ教授を見た。
「あんたの思考機械、すばらしい発明じゃ。わしはあの発明が、人類の未来を切り開くものだと思う」
有難う、というようにバベジは頭をさげた。
一行がムカデに乗り込み、見えなくなるとバベジは部屋に戻った。
ざわわわ……ざわわわ……と部屋の装置が騒がしく音を立てている。
「エイダ……」
バベジはつぶやいた。
女の首は目を閉じた。
ふたりの間の空間に、幻影が出現する。

それは写真の中に写っていた、あの女性そのものだった。
女性はにっこりと笑みを浮かべ、手を伸ばしてバベジ教授の頬をなでた。
「あなた……」
女の口が開き、言葉をつむぎだす。
バベジはこの思考機械が目覚めてから、かつての妻の思い出をできるかぎり教えてきた。さらに彼女が生存していたころの写真、日記、そして自分で調べた彼女の生い立ちのすべてを教え込んでいたのである。
そしてついに思考機械はその中に、あり日のエイダの姿を現出させることに成功したのだ。
最初はぎこちない幻影の姿であったが、試行錯誤を繰り返すうち、まるで本当の妻が生き返ったかのような反応を見せるようになった。
いつもは幻影のエイダは愛情ぶかい表情でバベジに対しているだけだったが、今日の彼女はどこか寂しそうな笑みを浮かべていた。
「どうした、エイダ？」
幻影のエイダは首をゆるやかにふった。長い髪がふわりとふくらんだ。
「お別れしなくてはなりません」
「なんだって？」
「もうわたしは姿を現すことをやめなくては……」
「どうしてだ？　どうしてそんなことを言う？　わたしはお前がいないと……」
「わたしが姿を現してから、あなたはどこへも出かけなくなった。食事もろくにとらず、わたしの相手をしてばかり。今日、お客さまがいらして、はじめてあなたのことが心配になってきたのです。あなたに必要なのは、本当の実体をもった人間のお相手。どうかもう、わたしをお呼びにならないでください」
「そんな……やめてくれ！　もう会えないのか？」
バベジの瞳に涙がわいた。

いやいやをするように首をふる。
幻影のエイダはうなずいた。
「さようならあなた……お元気で……」
幻影は消えた。
消えた幻影を求めるようにバベジは手を伸ばして空間をさぐっていた。
がくりと膝をおり、うずくまる。
その背中が震えていた。
思考機械のエイダはじっと目を閉じていた。

エイダ（後書き）

今回、蒸気コンピューターのなかで使われている演算素子にはパラメトロンというものをヒントにしています。興味のある方は、検索してみてください。

それぞれの道（前書き）

ミリィの手がかりがわかり、パックたちはそれぞれ自分の道を別れることに。

それぞれの道

新聞を開いたホルストは、サーカスの記事に目を留めた。
「ふうむキオのサーカス来演……か。サーカスのう……子供のころ、一度見たことがあるなあ……」
ホルストは歩道に面したレストランのテーブル席で、だらだらとした午後の休息を楽しんでいた。コーヒーはお替り自由で、もう三杯目になっていた。
記事の中の、奇術師の紹介文にホルストは引き付けられた。
奇術……そう、ホルストが魔法使いを志したのも、そのサーカスで見た奇術師の技に刺激されたからだ。
いまの自分は、奇術師などおよびもつかない奇跡をあらわすことができる。
ホルストはいつしか空想していた。
魔法のちからを大勢の観客の前で披露する自分の姿を。
パイプをとりだし、煙草をつめる。口にくわえ、指をぱちりとならし、指先に火を灯す。それをパイプに近づけ、一服吸い付けた。
煙を吐き出し、遊びでそれを空中でいろいろな形に変化させた。
帆船、竜、肌もあらわな踊り子。
遊びであるが、ホルストの魔法はそこまで成長していた。
と、ホルストは自分を熱心に見つめている目に気づいた。
反対側のテーブル席に、ひとりの男が座り、じっとこちらを見ている。
太った身体に、派手な色合いのスーツを身につけている。でかい蝶ネクタイをしめ、真っ赤な燕尾服、黄色いチョッキ、青いシャツと、見ているだけで目がちかちかしてくる。
男の顔はまるく、目もおおきく見開かれていた。口ひげとつながった顎鬚をたくわえ、それが男の顔をどこかフクロウのように見せていた。男はホルストと目が合うと、フクロウのように首をひょこ

りと動かして挨拶をした。
立ち上がると、近づいてきた。
「失礼……いまあなたのおやりになった技ですが……」
「技？」
「さよう、火を指先に灯したり、煙をいろんな形に作ったり……」
ああ、とホルストはうなずいた。遊びであるから、あらためて他人がこれに興味をしめすとは思っていなかったのだ。
「魔法ですわい。なに、遊びですが」
「魔法！」
男は頓狂な声をあげた。
やがてうなずいた。
「魔法……ああ、魔法ね。よろしい、あなたがそういわれるなら魔法で結構！　わたしはこういうものです」
男は名刺を取り出した。
それを受け取り、目を通したホルストは驚いた。
「あなたがキオのサーカスの団長ですと？」
「さよう。キオはわたしの名前です」
そう言うとキオ団長はホルストのテーブルに椅子を引き寄せ、腰をおろした。
「あなたにお願いしたい！」
座るといきなりキオは真剣な様子で話しはじめた。
「その記事にある奇術師ですが、その記事が載ったすぐあと、事故がありまして……それで腕を骨折してしまったのです。なんと利き腕を折ってしまったので、舞台にたてなくなってしまい、わたしは代役を探していました。それでいまのあなたの技を見て確信しました」
「わ、わしの？」
ホルストは目をぱちくりさせた。
「そうです。あなたに代役をお願いしたいのです！」
そう言うとキオはいきなりテーブルに両手をつき、頭をさげた。

「どうか、どうかわしのサーカス団を救ってくだされ！　奇術師のいないサーカス団など、成り立ちません！　専属の奇術師が復帰するまでで結構ですから！」
　ホルストは呆然となっていた。

　ホテルの部屋に帰ると、ホルストが窓際に椅子を出して座っていた。パックたちがドアを開けると、気のない様子で顔をあげる。
「ああ、お帰り」
　どこか上の空である。
　じっと窓際に顔を向け、外を見ている。
　どうかしたのかな、とパックは思った。やっぱりひとり残ったのが面白くないのだろうか？
　ホルンはベッドに腰かけ腕を組んだ。
「さて……」
　口を開く。
　が、それ以上言葉を重ねることはできないようだ。
「パック……」
　パックはホルンを見た。
「なに？」
「お前、これからどうする？」
「どうするって、どういうことさ。決まってる。これからミリィを探しに出かけるさ。マリアを通じて、あのエイダっていう思考機械の援けも受けられるしね」
　そうか、とホルンはうなずいた。
「わしは賛成できないな」
　それを聞いたパックは大声をあげた。
「賛成できないとはどういうことさ？」
「お前ひとりが旅をするということさ。お前は子供だ。やはり帝国軍に頼んで、捜索してもらったほうがいい。おれはそろそろ村に帰ろうと思う。なにしろこれが」

と、財布を取り出した。
「もう残り僅かだからな。お前だってそうだ。子供のお前がどうやって旅の費用を稼ぐつもりなんだ？」
それを聞いていたサンディが叫んだ。
「これがあるわ！」
そう言って、宝石類が詰まった革袋を取り出す。袋の口を開き、中身をテーブルにあけた。ざらざらと音を立て、まばゆい輝きをはなつ宝石や、装飾品がぶちまけられた。
目をまるくするパックに、サンディは気取って話しかけた。
「言ったでしょ、あたしミリィを探す手伝いをするって！　これを売れば、旅の費用になるわね」
ホルンは首をふった。
「お嬢さん、それはいけない！　それはあんたの家から持ち出したものだろう？　それを使うと、パックは泥棒と同じことになる」
「違う、これはあたしのものなの！　所有者はあたしなんだから、泥棒にはならないわ」
「しかし子供のあなたがそんなものを所有しているなんてことは信じられない。どう考えても、家のものを黙って持ち出したとしか思えんが」
「だってそうだもん！　お父さまがあたしにって、誕生日のたびにくれたものを宮殿の……」
そこでサンディははっ、と口を押さえた。
ホルンは彼女の目をじっと見つめた。
「宮殿？　あなたは宮殿にお住まいだったのか」
「し、知らないわ！　とにかく、これはあたしのものだから、処分するのはあたしの勝手なの！　判ったわね、あたしはパックと一緒にミリィを探すわ！」
「父さん」
パックはホルンに話しかけた。
「父さん、心配するなよ。サンディのものには手をつけないよ。金

のことなら心配ない。おれの見るところ、このボーラン市にはたくさんの蒸気エンジンを利用する機械や設備がそろっている。蒸気エンジンの修理だったら、おれは自信がある。それらを修理して金を稼ぐ。だから、おれひとりにさせてくれ」

「パック……」

ホルンの眉がさがる。

首をふり、苦い笑みを浮かべた。

「わかった、お前はおれの思っているより大人なんだな」

「わしもここに残るよ」

だしぬけにホルストが口を開いた。

え、とホルンとパックがホルストを見た。

「実は……」

と、ホルストは昼間の出来事を話した。

ホルストはにやりと笑った。

「奇術師の代役、面白そうじゃないか！　わしは一度そんなことをやってみたいと思っていたんじゃよ！　わしの魔法が、どのように観客にうつるか、試してみたい」

「わしも残ろう」

ニコラ博士が話しだし、みなびっくりした。

「あのバベジ教授の思考機械、わしは感銘を受けた。わしはかれに申し出て、”魔素”の共同研究を提案してみるつもりじゃ。じつはロロ村にやって来る前、わしはボーラン市の大学に招かれていた。そのときの教授たちとは、いまでも手紙のやりとりなどやっておって、わしの研究成果を知らせておった。だからすぐにでも教授職につくことができるから、生活のほうは心配ない」

「まったく……！」

ホルンは肩をすくめた。

「あんたら勝手な人間だ！　まあいい。おれはロロ村へ帰ろうと思う。しかしあのムカデはどうするね？　ここに残しておくのかね？」

ニコラは首をふった。

「いや、あれはパックに預けよう。マリアの蒸気を補給するにも必要だからな。それにパックに任せておけば、整備もちゃんとやってくれるだろうから」
「そうか、村に帰るのはおれひとりか……」
ホルンは笑った。

ホテルをひきはらい、ホルンはボーラン市の駅のホームに立った。見送るパックたちにホルンは笑いかけた。
パックに顔を近づけ話しかける。
「いいか、あのサンディという娘。お前が旅に出る前に家に戻してやれよ。おれの見るところ、どうやら王宮に住まう貴族のだれかの家柄のようだ。いくらなんでも、お前があの娘を連れまわすわけにはいかんだろう？」
「判っているよ。父さん」
「それからあの剣だがな。やはりおれが村に持ち帰ろうと思う。お前が持ち歩くには重すぎるし、なんとかおれの鍛冶屋としての経験で元に戻す方法を探ってみたい。どうだ？　じつはもう、おれの荷物の中に入れておいたんだ」
パックはうなずいた。
「判った。父さんにまかせる」
駅員が汽車が出発する、と大声で叫んでいる。ホームで別れをおしんでいたほかの乗客が、ぞろぞろと客車に乗り込んだ。
ぽーっ、と長々と汽笛がなる。
ホルンは客車に乗り込んだ。
がったん、と音をたて汽車が動き出した。
ホルンはおおきく手をふって小さくなった。
汽車がすっかり姿を消すと、全員駅を出ておのおのの方向へ歩き出した。
ホルストはボーラン市に来ているサーカス団のテントへ。
ニコラ博士は大学へ。

そしてパックとマリア、そしてサンディはニコラ博士のところへ一時身を寄せることになっていた。ニコラ博士の、大学での学寮に止めてもらう約束をしたのである。

別れる直前、ホルストはパックとサンディに話しかけた。

「市を離れる前に、サーカスを覗きにこい。わしが団長に言って、おまえたちふたりくらい無料で観劇させてやるさ！」

うん、とパックはうなずいた。

旧友（前書き）

ホルンはロロ村へ帰る。が、そのロロ村では一大事がおきていた！

旧友

汽車はボーラン市を離れる。

個室に落ち着いたホルンは、楽な姿勢になると窓の外を眺めた。窓の外のボーラン市の混み合った建物がまばらになり、やがて田園風景に変わる。

夜明けに汽車は終点に着いた。駅を出ると、乗合馬車が客待ちをしていた。

「ロロ村へ行きたいんだが」

御者はうなずき、ホルンは馬車に荷物を積み込んで乗り込んだ。

ぴしっ、と鞭がなり、馬車はゆっくりと走り出した。

馬車の中でホルンは考え込んでいた。

むろん、メイサにどのように話をするかということである。

パックはひとり、旅に出るつもりだ。ボーラン市で蒸気機関の修理や、点検の仕事をするつもりだと言う。そのあとミリィを探す旅に出るのだろうが、いつ出会えるのか、また、出会えたとしてどうやってロロ村へ帰るのか。さっぱり判らない。かといって、メイサにあまり無用な希望を与えたくもない。

馬車は街道を順調に進み、やがて総督府のある町へと近づいた。

窓から外を眺めたホルンは眉をひそめた。

いつもなら総督府の近くには、帝国軍の兵士らがいるはずなのに、今日に限ってひとりも見当たらない。町の様子もなにか変だ。

なにかあったな?

ホルンは異変を直感した。

がたん、と馬車がとまった。

「おい、なにがあった?」

窓から顔をつきだし、ホルンは御者に声をかけた。

「だんな、これ以上行けないようですぜ」

「なんだって?」

進行方向を見ると、通行止めである。
道の真ん中にバリケードができていて、数台の馬車や旅の商人たちが戸惑った表情で立ち止まっている。
バリケードには数人の兵士が銃を持ち、通行を止めている。兵士らの背後には、帝国軍の蒸気装甲車が停車して、ボイラーからもくもくと煙をあげていた。装甲車の機銃は、街道にぴたりと照準を合わせている。
ホルンは馬車から降りた。
「どうしたんです？」
立っている商人らしき男に尋ねると、男はホルンをふりかえり首をひねった。
「さあ、なんでもこの道は通行止めになっているらしいですな。困りますよ。あたしゃ総督府に商品を納入しているものですがね、今日代金を受け取る約束だったんですわ……」
商人は、困った困ったと連発していた。
ホルンは通行止めをしている兵士を観察した。
着ているのは帝国軍の制服であるが、どうも妙だ。着慣れていない。ボタンもきちんととめていないし、サイズも合っていないようである。
兵士の持っている銃も、帝国軍のものではない。
そろりとその場から離れると、ホルンは馬車に戻った。
「おいきみ、おれはなんとしてもロロ村へ行きたいんだ。この道を迂回して、山道のほうへいけないか？」
御者は頭をかいた。
「ようがすが、そうすると酒手を別に頂きますぜ」
それでいい、とホルンはうなずいた。
御者ははやく乗りなせえ、と怒鳴って鞭をふりあげた。ホルンはあわてて馬車に乗り込んだ。
ぴしっ、と鞭が鳴り、馬車は動き出す。
街道をそれ、馬車は山道にはいった。おおきく山を迂回してロロ

村を目指すつもりだ。
山道を登る途中、ホルンは馬車をとめさせた。
「ちょっと待っててくれ」
そう言うと、茂みの中へはいっていく。
茂みをつっきり、山の稜線側へでる。
ここからなら総督府が見おろせる。
ホルンは目をみはった。
総督府の建物から煙があがっている。
窓ガラスが割れ、帝国の旗が降りていた。帝国軍の軍旗は、毎朝衛兵が掲揚し、夜になると降ろすきまりである。昼日中から、降りているとはなにか異常事態である。
替わりに見慣れない旗が総督府に翻っていた。
それを見たホルンの眉がひそめられた。
あれは……見覚えがあった。
共和国軍の旗だ！
スリン共和国。
かつて帝国と戦ったスリン共和国の軍旗がはためいているのだ。
ホルンは唇を噛みしめた。
ついに共和国の残党が動き出したのか。
ホルンはかつて、その共和国軍に所属していた。ホルン大佐といえば、共和国軍でも勇猛を賞賛されたものである。が、ホルンはしだいに共和国の唱える理想が信じられなくなっていた。
やがて戦いは帝国軍の勝利に終わり、ホルンは軍隊を離れた。もう、戦いはこりごりだと思っていたのだが……。
しかし変だ。なぜ今、なのか？　たしかに共和国軍は帝国軍によって壊滅的打撃をうけ、共和国そのものは崩壊し、党首のスリン・バタン永世大統領は残党をかりあつめ、復讐を誓っている。しかし共和国の戦力は帝国軍と対抗することが出来るほどの規模ではない。たしかに総督府を襲い、武器を奪うことは出来ただろうが、それ以後の展開はほとんど期待できない。

もしかしたら、背後に別の勢力があるのかもしれない。たとえば帝国の同盟国のどれかがひそかに共和国と手を握り、代理戦争を仕掛けているのかもしれない。

これはうかうかできないぞ。

ホルンはそっと茂みにもどり、街道に待たせてある馬車に乗り込んだ。

「やってくれ」

一言つぶやくと、車中にもどる。

ごとごとと車輪をきしませ、馬車は動き出した。

ロロ村が見えてくると、ホルンの胸騒ぎはおさまった。

よかった、まだロロ村には共和国軍は進攻していないようだ。

自分の家に馬車を止めさせ、荷物を運び入れていると、ブルンが例の蒸気トラクターを運転してきた。あいかわらず息子のダストンが旗をふって先導している。ブルンはホルンの姿を認めると、あわててトラクターを停車させた。

「ホルン、帰ってきたか！」

「やあ、ブルン。久しぶりだな」

「噂じゃ、総督府への道が帝国軍によって通行止めになっているということだが、通れたのかね？」

「いや、噂じゃない。本当だ。総督府には行けないよ。おれは裏道を通ってきたんだ。それに通行止めしているのは帝国軍じゃない。共和国軍だ」

ホルンの言葉にブルンは目を丸くした。

「共和国軍？」

「そうだ、総督府に旗が揚がっていた。おそらく共和国軍の連中は、帝国の武器、弾薬を奪うために襲ったんだろう。これから村の連中を集めてくれないか。対策を協議しないといかん」

「対策？」

「そうだ、いつ共和国の連中がこっちに来ないとも限らん。もしそ

うなったら、どうするかみなで考えないと」
ブルンは口をすぼめた。
「物騒な話しだな」
よしきた、とブルンは胸を張り、トラクターを再び動かし始めた。
しゅっ、しゅっと蒸気の音を立てトラクターが遠ざかると、ホルンはメイサの家のドアをノックした。
かちゃり、と音がしてドアが開き、メイサが顔を見せた。
ホルンはメイサの顔を見て痛ましく思った。
メイサはすっかりやつれ、こころなしかふくよかな顔もやせて見える。
ホルンの顔を見上げ、彼女の顔に一瞬希望のひかりがさした。
「あの……ミリィは？」
ホルンは首をよこにふった。
「いいや、まだだ。しかし手がかりはつかめた」
メイサはホルンの背後を確かめた。
「そう、パックは一緒じゃないの？」
「ああ。パックはミリィを探すために、ボーラン市に残った。仕事を見つけ、金をためたらミリィを探す旅に出るつもりだ」
そう……と、メイサは肩を落とした。
ホルンはメイサの肩をつかんだ。
「元気を出せ！　きっとパックはミリィを連れて帰ってくるよ」
触れたメイサの肩がやせて、手に骨の感触がはっきり伝わった。
「ありがとう……」
ぼそりとつぶやくと、メイサは家の中へ戻っていった。
ドアが閉まり、ホルンは首をふった。

夕方になり、村の男女たちが集会所に顔を見せはじめた。
集会所は村の中心にある。
椅子が用意され、ホルンは演壇にあがって口を開いた。
「総督府は共和国軍の手に落ちた。これからやつらがどう動くのか

？　推測だが、おそらく帝国に対し、ふたたび戦端を開くつもりだろう」

ホルンの言葉に集会所の中はざわついた。

静かに！　とホルンは両手をあげた。

ぴたりとざわめきが静まった。

ひとりが手をあげ、発言を求める。ホルンはうなずいた。

「戦端を開くとはどういうことだね？　戦争になるのか？」

「おそらくな。しかし共和国軍の人数は帝国軍に比べると物の数にもはいらないほど少数だ。そうなると、やつらはゲリラ戦術をとるはずだ」

「ゲリラ戦術？」

「そうだ、帝国軍の装備、制服を着てなりすまし、不意を襲うつもりだろう」

「帝国はどう出るね？」

「共和国軍のことに気づいたらまず戦力を終結させ、このあたりに戦線を形成するはずだ。へたをすると、付近が戦場になる……いや、もっとはっきり言うと、このロロ村が戦場になる可能性もある」

今度こそ集会所の中は大騒ぎになった。ホルンの言葉にみな浮き足立っている。

今度はホルンはそれを静めようとせず、じっと立ったままみなの顔を眺めている。

やがてひとり、ふたりと喧騒がおさまっていった。

しーん、という静寂が支配した。

みな、ホルンの言葉を待ち受けていた。

「現在、共和国軍は総督府を襲い、占領している。が、当然のこととして付近の村にその手をのばしてくるだろう。もしもこのロロ村が占領されることとなったらどうすべきか、それをみなと話し合いたい」

「どうすればいい、というのだ？」

ひとりが声をあげた。ホルンはうなずき、続けた。

「現在、ロロ村は帝国の領土となっている。しかしそれ以前は共和国の所属だった。戦争が始まったら、帝国軍にとって敵の領土と見なされる怖れもなきにしにあらずだ。だからこの際、はっきりとわれわれが帝国の側に立つと言うことを宣言する必要がある。そのため、まさかの事態に帝国軍に通報する用意をしておきたい」

ホルンの言葉に、みな落ち着きなく顔を見合わせた。

ひとりの老婆がつぶやいた。

「それじゃわしらは帝国に味方するってことかい？　帝国の軍隊がきたら、歓迎して酒や料理をふるまえってことかい？　あたしゃ御免だね！　軍隊なんて、だいっきらいだからね！」

そう言うと、口をへの字に曲げ腕を組んだ。

そうだ、そうだという声があがる。

「帝国軍も、共和国軍もどっちに村に入れなければ良いんだ。そうすりゃ、戦争なんておこらない。どうしても戦争したければ、ほかのところでやってくれと頼めばいいのさ！」

ひとりの若い男が熱弁をふるった。

ホルンは首をふった。

「みんな、そう言うわけにはいかんのだ。戦争というやつは好むと好まざるとに関わらず、いったん始まったら、巻き込まれるのは必然だ。そうならないためには、おれたちが独自の軍隊を持っていなければならないが、この村で武器といったら狩猟用の散弾銃くらいのものだ。追い払うためには武力がいる」

「それじゃ話し合えばいいんじゃないのかな……話し合えば……」

ひとりがそう言いかけ、黙った。自分の提案があきらかに馬鹿げたことであるか気づいたようだった。

村の全員はしーんと静まり返る。

ブルンが立ち上がった。

「村の衆！　みなは覚えているかね。以前、われわれが共和国の領土だったころのことを？」

かれは遠い目をした。

「わしは覚えている。スリン共和国のバタン・スリン永世大統領の圧制はそれはひどいものだった！　となりの村では、共和国の要求する税金がはらえず、村の男たちの半分が徴用され、鉱山で採掘作業を強制された！　このロロ村からも、何人も引っ張られた。かくいうわしも、強制徴募で働かされたひとりだ。わしはもう二度と、あんな体験はしたくない！」

ブルンの言葉に、みなそのころのことを思い出しているようだった。

ひとりがそうだ、とつぶやいた。

ひとり、ふたりと賛意をあらわしていく。

ざわざわとざわめきが広がっていく。

この集会にただひとり参加しない者がいた。

村はずれに住む、シュバルという中年男である。

かれは変わり者だった。

身なりはいつも同じ、地味な作業衣をまとい、村の者と出会っても挨拶ひとつするではなく、ほとんど無視して歩く。生活は薪を拾いそれを隣りの村へ行商に出かけいくばくかの金を得て暮らしている。だから暮らしはひどく貧乏で、家は掘っ立て小屋同然だ。それでも家の周りにはちいさな畑を耕し、毎日の食べ物には不自由したことがない。

それは十数年前のこと、パックが生まれる前の話である。

そのシュバルはいつものように家の周りで薪を拾い、森の茸などを採って食料をさがしていた。

草むらを歩くかれがひとつの石につまづいた。

ひと声悪態をつくと、かれは自分をつまづかせた石を拾った。放り投げようとした彼の目が石をじっと眺める。

何の変哲もない、ただの石だ。

それをじっと見つめるシュバルの目が奇妙な光を帯びた。

石の表面にあらわれたかすかな模様。

渦巻きのような、あるいは波の線のような模様がシュバルの目に入った瞬間、かれは一瞬にして別人に変化していた。

はっ、とかれはあたりを見やった。

森の木々に陽射しがあたり、初冬の枯れた枝ごしにゆっくりと雲が流れている。

その風景に、かれはあるものを見ていた。

渦を巻くなにか、形容しがたいなにかのちから。

それは村のあちこちに点在する石碑や、村の家々に掲げられている模様とおなじものだった。

その模様はつねに動きまわり、集まり、そして一瞬もおなじ状態ではいなかった。

かれだけに見える、なにかであった。

おれは作らなければならない……。

シュバルはつぶやいた。

それが何なのか、そしてなぜ作らなければならないのか、かれには説明できない衝動だった。

石を握りしめ、シュバルは歩き出した。

その日からシュバルの活動が始まった。

家の側の空き地にシュバルは自分をつまづかせたあの石を、地面に慎重においた。

そっと離れ、それを見る。

かれの顔に微笑が浮かんだ。

ゆっくりとうなずき、シュバルはその隣りにもうひとつおなじような石をおいた。

ちょっと首をかしげ、位置を調整する。

今度はいいようだ。

もうひとつ、積み重ねる。

そしてまたひとつ。

シュバルはつぎつぎと石を拾ってきて、積み重ねはじめた。

家の周り、そして村のあちこちからシュバルは石を拾ってくる。
それはどんな石でもいいというわけではなく、また大きさもまちまちで、指の先ほどのちいさな砂利のようなときもあれば、荷車がないと動かせないような大石まで、大きさ形もまちまちであった。
それを家の近くに持ってくると、慎重な手つきで積み上げ、セメントなどで隙間を塞ぐ。
そして十数年。
シュバルの作り上げたものは徐々に形をなしてきた。
それは宮殿だった。
シュバルの石宮殿といえばロロ村では良く知られていた。しかしそれは馬鹿げたことを大真面目に行う、という意味合いである。
なぜならシュバルの作り上げた石の宮殿には、だれも住むことが出来なかったからだ。なにしろ外観だけで、中身はすべて石とセメントが詰まっている。一種の、巨大な彫刻のようなものであったのだ。それを営々とシュバルはただひとりで、十数年の歳月をかけ作り上げた。
尖塔がそびえ、列柱がいくつも回廊の天井をささえ、壁には奇妙な模様や、不思議な生き物の姿が刻まれている。堂々たる外見だが、ただそれだけである。
村のみんなはシュバルになぜこんなものを、と質問したが、かれはだれとも口を利かず、黙ったままであった。
その目はかれだけにしか見えないものを見ているようだった。
ホルンの集会があった数日後、かれはいつものように石の宮殿の建築作業を続けていた。
宮殿は完成直前だった。
巨大な塔が宮殿の中心にそびえたち、そのまわりに異様なかたちの怪物や、奇妙な紋章が描かれ妙に不安定な印象をあたえる。シュバルはその塔に登り、てっぺんの飾りをすえつけているところだった。
一仕事終わると、シュバルは息をいれあたりを見回した。

その視線が、森のはずれに引き付けられた。
木々の向こうから、しろい蒸気があがっている。
なんだろう？
シュバルは目をほそめた。
しゅっ、しゅっと蒸気を吐き出し、なにかが森の街道を進んでくる。
またブルン爺さんの蒸気トラクターか、とシュバルは思った。
ばきばきという森の木が倒される音にシュバルは眉をひそめた。
もしブルン爺さんの蒸気トラクターなら、街道を進んでくるはずである。森の中を木々を押し倒すなんて乱暴なことはしない。
待ち受けると、それはシュバルの思っているものではなかった。
ぜんたいにごつごつとしたシルエット、地面を踏みしめるのは車輪ではなく、キャタピラである。そしてぐっと突き出した砲塔。
戦車だ！
蒸気駆動戦車が近づいてくるのだ。
巨大な戦車が森をつっきり、近づいてくる。
まるで家ほどのおおきさがあり、砲塔もひとつだけでなく前後にふたつづつ、合計四本の砲塔があたりを睨んでいる。これは陸の軍艦である！
戦車の司令塔の蓋が開き、ひとりの男が顔をだした。
「なんだ、シュバルの石宮殿か。暫く見ないうち、完成したようだな」
シュバルは目を丸くした。
顔をのぞかせたのは、ガゼであった。
メイサの夫、つまりミリィの父親である。かつてガゼはロロ村にひそかに忍んできてホルンと会見し、共和国軍に引き入れようと画策したが、断られている。
「ガ、ガゼ……あんたは死んだと思っていたが……」
ガゼはにやりと笑った。
「ところが死んではいない。こうして生きている」

「准将どの、いかがいたしますか？　捕虜にしたほうが……」
かれの部下だろうか、もうひとりが顔を出し口を開いた。
よせ、とガゼは首をふった。
「このシュバルはこうして石の宮殿を作るだけが生きがいの男だ。害はない。それよりこんなところで愚図愚図はしていられれん。先に進もう」
ガゼはちょっとシュバルに向けてうなずくと、ふたたび司令塔に引っ込んだ。
ぐわああ……と蒸気エンジンが咆哮し、戦車は動き出した。ずしずしと地面を振動させ、通過していく。目を瞠るシュバルの前を、戦車に続いて多数の兵員輸送車、トラックが通過していく。
軍隊だ！
シュバルはぼうぜんとそれを見送った。

共和国軍の侵入を知ったのはもうひとりいた。
コールだった。
パックの友達で、村の情報通。あらゆることに鼻を突っ込む習性のあるコールは、その日村の入り口近くで街道を見張っていた。ホルンの集会があってから、コールはいつか共和国軍がやってくるのではないかと勝手にじぶんを通報係と任じていたのである。
そしてそれは報われた。
近づいてくる戦車と、軍隊にコールは立ち上がり、側に立てかけていた自転車のサドルに跨った。つい最近、両親にねだって買ってもらったものである。
ペダルを踏み込み、ホルンの家を目指す。
「ホルンさん！」
ドアを開け叫ぶ。その時ホルンは炉をおこして村人にたのまれた鍬の修理をおこなっているところだった。コールの言葉にホルンは槌をおいて顔を上げた。
「どうしたコール？」

「き……協和国軍が……！」
コールの言葉にホルンは立ち上がった。真剣な表情になっていた。
「きたか……？」
「ああ、戦車が先頭だ！　それに沢山の車が……」
うなずき、ホルンは外へ出た。
すぐ近づく軍隊を見る。
「ホルンさん！　おれ、帝国軍へ報せに行くよ！」
「判った、共和国軍に掴まるなよ！」
うん、とひとつうなずいたコールは自転車に跨り、ペダルを踏み込んだ。山道を選び、共和国軍の背後から村を出る進路を選ぶ。
ホルンは接近する戦車を見守った。
じつに巨大だ。前後の砲塔がぐるぐると左右に動き、あたりを警戒している。
戦車はホルンの家の前に停車した。
司令塔から顔を出しているガゼにホルンは目を見開いた。
「やあ」
ガゼはホルンを見おろした。
うむ、とホルンはうなずいた。
実を言うと、この再会をホルンは予測していたのかもしれなかった。ガゼの襟にひかる階級に、ホルンはつぶやいた。
「准将か……出世したな」
ガゼのやせこけた頬がほころんだ。
「まあな。お前に話しがある」
「おれに？」
「そうだ。わが共和国はふたたびこうして軍を結成して、帝国に宣戦布告することに決めた。ついてはこのロロ村を接収して、駐屯地とすることになった。おれは無益な戦いは好まない。お前から話をして、村のみんなに軽率な行動をとらないよう、よく言い聞かせてくれないか？」
がちゃ、と背後でドアが開く音がした。

ホルンとガゼはその方向を見た。
メイサが真っ青な顔で立っている。
「あなた……」
「メイサ……」
ふたりは見詰め合った。
がく、とメイサはドアによりかかった。
「生きていたのですね。なんとなく、そんな気がしていました」
「報せなくて悪かった。ミリィはどうした？　会わせてくれないか」
その言葉に、メイサはうっと声を詰まらせた。見る見る目に涙があふれる。
「どうした？　あの娘になにがあった？」
彼女はドアの前にくずれおちた。
ガゼは司令塔から降りると、メイサに駈け寄った。

「そうかミリィが……しかし信じられん」
メイサの家の客間で、ホルンとメイサ、そしてガゼがテーブルについている。ホルンはメイサの代わりにミリィにおきたことを語った。ガゼは黙ってホルンの語ったことを聞いていたが、それが終わると首をふった。
「本当なのか、魔王が復活したというのは」
ああ、とホルンはうなずいた。
「おれも信じられない話だが、だが信じざるをえない。奇妙な出来事は次々とおきている。それにその証拠となることも、おれはこの目で見ている」
ボーラン市で見たことをホルンは語った。
「判った……」
最後にぽつりとガゼはつぶやいた。
ぱん、とテーブルを叩き、立ち上がる。
「ミリィのことはこれまでにしよう。パックがあの娘を探しに出かけたということなら、奴の帰りを待つ。おれに出来るのはそれだけ

だ。いま、おれの使命はこの村を確保し、帝国と戦うことだ」
その表情は厳しいものになっていた。
とんとん、とドアがノックされる。
入ってきたのは共和国軍の兵士だった。
さっ、と直立不動の姿勢をとると敬礼する。
答礼をかえしたガゼは命令した。
「報告しろ」
はっ、と兵士は緊張した。
「現在、この村全体を支配しました！　要所要所には見張りが立ち、現在この村からの出入りは完全にチェックされております！」
「よし、そのまま待機。別名あるまで隊員の半分に休息を許可する。ただし、どのようなことがあっても、村の人間とのトラブルは厳に禁止する。違反したものは厳罰に処す。このことを徹底させろ！」
兵士はふたたび敬礼して出ていった。
ガゼはホルンを見た。
「というわけだ。おたがい利口になろうや」
そう言ってにやりと笑った。

山道を必死になってコールは走っていた。
ペダルをこぎ、坂道をあえぎながら登る。ちらりと村をふりかえると、村のあちこちに兵士たちが銃を手にして立っているのが見える。村の広場には、あの巨大な戦車が鎮座していた。
これからどうなるんだろう……。
不安をふりきるようにコールはペダルを踏む足にちからをこめた。
コールの目指すのは、このちかくにある帝国軍の駐屯地である。
総督府は帝国軍の地方行政の要であるが、駐屯地は非常事態に対応するための基地として位置している。そのひとつが、ちかくにあるのだ。
道はようやく下り坂になった。
ペダルをこぐのをやめ、コールは道を自転車の勢いのままに下っ

ていった。
と、曲がり角のむこうから帝国軍の装甲車が姿をあらわした。
コールは思わずブレーキをかけた。
きき－っ、とブレーキの音を響かせ、自転車は横倒しになった。
いててて……、とコールは腰をさすった。
「大丈夫か？」
装甲車からひとりの兵士が飛び出してきた。
コールを介抱して立ち上がらせる。ぱん、ぱんと身体についた土ぼこりを払ってくれた。
「あぶねえなあ、あんな勢いで坂道を下ったら、ぶつかるぞ」
「ごめんなさい……あ、あの大変なんです」
「大変？」
「そうです、共和国軍が攻めてきたんです」
はあ、と兵士は頓狂な声をあげた。
「共和国軍？　スリン共和国のことかい？　あいつらは帝国にさからって、壊滅したんじゃないのか？」
違いますって、とコールは足踏みした。
「まだ健在ですよ！　現にロロ村が攻撃を受けたんです！」
ロロ村？
装甲車のほうからもう一人の声がした。
兵士はふりかえった。
「あ、少尉殿！」
じゃり、と装甲車からもうひとりが地面に足をおろした。ぴかぴかに磨き上げられたブーツ、ぴんとのりの利いた真新しい軍服。
襟には少尉の位が輝いている。
その顔を見たコールはあっ、と叫んだ。
「ギャン！」
ひさしぶり、とギャンは笑った。

旧友（後書き）

いよいよ帝国と共和国の間に戦端が開かれます。登場したガゼとギャン。このふたりが物語りにどう関わっていくか、お楽しみに！

総督府（前書き）

変貌したギャン。かれは野望を成就させるため、着々と活動を進めていく。

本当にギャンか？
コールはあらためてその少尉の顔をながめた。
たしかに目鼻立ちは記憶の中のギャンである。
が、雰囲気ががらりと変わっていた。
かつてのギャンは、どこかひ弱な印象をあたえていた。傲慢で、かつ他人をへとも思わない冷酷さもあったが、やはりお坊ちゃまとしかいいようがない。
ところがいまのギャンは、その美貌に凄絶とさえいえる酷薄な線が加わって、まるで別人といっていい。十五才のはずだが、一挙に十才も年をとったように見える。
「どうしたコール。ロロ村が大変なんだろう？」
コールはじりじりと後退した。なんだか、いまのギャンはとてつもなく危険な感じをあたえる。このままここにいてはいけないような……しかしコールはそれ以上、動けなかった。
ギャンがじっと見ている。そのふたつの瞳に睨まれ、コールの全身は凍りついた。
まるで蛇に睨まれたカエルのようだ。
そこにいた兵士が口を開いた。
「なんでも共和国軍がロロ村を占領したようであります」
なるほど、とギャンは肩をすくめた。
「共和国がまた動き始めたとなると、ほってはおけないな。おい、貴様すぐさま駐屯地に急報してくれ。おれはここに残る」
命令をうけ、兵士はきびきびと敬礼して装甲車に乗り込んだ。がろろろ……、とエンジンが咆哮し、装甲車は走り去った。
「さて、と……どうするかな」
ギャンは片手に銀の握りのついたステッキを持ち、肩には膝丈まであるコートを引っ掛けている。軍帽をまぶかにかぶり、ひさしの

下からコールを見つめた。
「おれの思ったより共和国の動きは早くなったようだ……計画を少々前倒しする必要があるかもしれん……」
つぶやき、そこではじめてコールに気づいたというように顔をあげた。
うっすらと笑みを浮かべている。
「コール、お前には少しの間、眠ってもらおう」
すっ、と片手をあげ手の平をむける。
その手の平をコールの額に押し当てた。
とたんに、コールの膝がかくんと折れ、うずくまる。
コールは目を閉じ、眠り込んでいた。
ギャンは片手でコールの襟を掴むと、そのまま持ち上げた。
おそるべき腕力である。
ぽい、とコールの身体を茂みに放り投げると、あたりを見回す。
誰もいないのを確認して、空を見上げた。
す――、とギャンの身体が宙に浮いた。
そのまま空中に浮きながら、総督府の方向を見た。
ギャンはややうつむき加減の態勢で空を飛び、総督府の方へ飛び去った。

しばらくしてコールは眠りから醒めた。
きょろきょろとあたりを見回す。
なんで茂みなんかに寝ていたんだ?
なにか重要なことを忘れていたような……。
あっ!
共和国軍がロロ村を――!
たしか帝国軍の兵士と話をしたはず。
が、その後の記憶がぼんやりとしている。だれかほかの人物と出会った、そんな記憶があるがだれと出会ったのかはっきりしない。
そこだけ霞がかかっている。

ふらふらと立ち上がり、これからどうしようと考えた。
自転車をおこし、サドルに跨る。
とりあえず、村へ帰るつもりである。

空中を飛んで、ギャンは総督府に近づいた。
煙は収まっていたが、窓ガラスのほとんどは割れ、壁には銃弾の痕がついている。歴然と戦闘の痕跡が残っていた。総督府前の中庭には、帝国の旗にかわり、共和国の旗が翻っていた。
総督府のまわりの商店の店先はすべて閉まっている。
建物の裏側にギャンはひらりと着地し、あたりの様子をうかがう。
この匂い！　死臭だ……。
建物の裏側に、十数人の帝国軍兵士が死体となって横たわり、乱雑に重ねられ放置されていた。埋める暇もなかったと見える。しかし数が少なすぎる。たぶん、ほかの生き残った兵士たちはどこかに捕虜となっているのだろう。
さっと走り出し、裏口から総督府の建物の中へ潜り込んだ。
通路を歩き出し、ぴたりと立ち止まる。
かすかに人の声が聞こえてくる……。
ギャンは耳を澄ませた。
「なんでガゼ准将はロロ村なんか占領したんだ？　あんなとこ、占領する価値があるのか？」
「さあなあ、たぶんそこを臨時の連隊本部にするつもりなんだろう。それにロロ村ってところは、ガゼ准将の故郷だからな」
「偉い人の考えは判らんなあ……」
どうやら一般兵士たちの無駄話だろう。ガゼ、という名前にギャンは眉を寄せた。
どこかで聞いた名前だ。
ああ、ミリィの父親の名前だった。たしかミリィの生まれたころ戦争で死んだと言う話だったが、生きていたのか。
ひとつうなずき、ギャンはかれらの足音が近づくのを待ち受けた。

曲がり角から二人の兵士が現れた瞬間、ギャンは両手をあげ近づいた。さっ、とふたりの額にギャンの手の平がすいつく。

くた！　とふたりは膝を折り、床にうずくまった。そのふたりをギャンは手近の部屋の中へ引きずり込んだ。

壁に寄りかかるように座らせると、ギャンは膝まづいてふたりの顔を覗き込んだ。

ふっ、と手をふるとふたりの目がうっすらと開く。ぽかん、とギャンの顔を見つめた。

「おれの声が聞こえるか？」

ふたりはがく、とうなずいた。

「お前たちは共和国の兵士だな？」

ふたたびうなずく。

「大統領はどこだ？　バタン・スリン大統領だ」

ふたりは指をあげ、天井をしめした。

「ふむ、この階の上にいる、というのか？　大統領はここの総督府にいるのだな？」

がく、がくとふたりは何度もうなずいた。

よし、とギャンは手をふり、ふたりをまた眠らせた。

立ち上がり、通路にもどる。階段を見つけ、昇りだした。

最上階に行き着くと、総督の部屋の前に歩哨が立っている。銃をかまえ、緊張している面持ちである。たぶん、あの部屋に大統領がいるのだ。

ギャンは頭のなかで総督府の建物の見取り図を思い浮かべた。総督府は帝国の領土にいくつか点在しているが、すべておなじ設計図で建てられている。それによると最上階の総督の部屋には、続き部屋があるはずだ。そろそろと後ずさると、ギャンは心当たりの部屋のドアを開いた。壁に近づき目を凝らす。

ギャンはそれまで被っていた軍帽を脱いだ。

と、その額に卵大の盛り上がりがあった。その盛り上がりは瘤のようだったが、縦に一本切れ目があった。

その切れ目が徐々に開き始める。
なんと、切れ目から現れたのは目だった！　ギャンの額に、第三の目があるのだ！　その目を壁に向け、待つ。
壁がだんだん透明になっていく。
驚くべきことに、総督の部屋があらわになっていった。もちろん、ギャンの側からだけ透明なのであって、部屋側からは通常のままである。
これがギャンが獲得したあらたな能力だった。
あれ以来、ギャンはつぎつぎと魔力の使用法を学んでいった。
空中を飛翔する能力、一瞬で他人を催眠に落とし込む能力、手を触れずに物を浮き上がらせる能力など。この、壁を透明にするというのもそのひとつである。
ギャンは不満だった。いろいろ能力を獲得できたが、ロロ村で見た変貌したヘロヘロのあの破壊のちからを鮮烈にいまでも思い返す。
なぜじぶんにはあのちからが生まれないのだろう。
悪戯程度には充分だが、世界を征服するなどいまの段階では思いもよらない。もっと破壊的な能力をギャンは欲していた。
おそらくまだ自分が魔王として成長していないのだろうと考える。
それまで獲得した能力を、フルに活用して立ち回るべきだろう。
ギャンの目の前にあらわになった総督の部屋には、ひとりの老人がデスクに向かい座っていた。背後は窓で、総督府の前庭の景観がひろがっている。デスクの老人は書類をひろげ、ぶつぶつなにごとか口の中でつぶやきながら目を通している。
おそらく、この老人がスリン共和国永世大統領、バタン・スリンなのだろう。
浅黒い肌、高い鷲鼻。強い意志と、決断力に富んだ表情をしている。髪の毛は真っ白で、オールバックにして背中側にたらしている。身につけているのは共和国軍の制服で、どちらかというと質素なりをしていた。手にペンを握り、書類のあちこちに細かな字で書き込みをしていた。ときどき机の上に置いたカップに紅茶を注ぎ、唇

を湿らせる。

どうしようか、とギャンは迷った。

このまま総督の部屋に乗り込み、有無を言わせず大統領を捕虜にしてコラル帝国の首都、ボーラン市に連行することは簡単だ。だが、それでは劇的な盛り上がりに欠ける。ギャンの理想として、帝国と共和国の間に戦端が開かれ、おたがい多数の死傷者が出たころを見計らい、ギャンひとりの手柄で帝国に勝利をもたらす、というシナリオを描いていたのである。少尉を一気に飛び越え佐官クラスの士官に出世し、宮廷に自由に出入りできる身分を獲得したいと熱望していたのだが、いまのタイミングではまだ早い。

ここはひとまず引こうか、と考え始めたころ大統領が顔を上げた。音は聞こえないが、ノックがあったらしい。

まず共和国軍の兵士が入ってきて、なにか喋った。

ちっ、とギャンは舌打ちをした。部屋の中をのぞくだけのつもりだったので、音声を聞き取れるような処理をしていなかった。あわてて念じると、ギャンの耳に会話が聞こえてくる。

「……殿のお見えです」

大統領はうなずいた。兵士はうやうやしくドアの方を向き、客を招き入れる姿勢をとった。

入ってきたのは、禁欲的な表情を浮かべた老人だった。身にまとうのは緋色の僧服で、襟と袖に金糸で豪華な刺繍を施している。頭には高々とした山高帽をかぶり、銀縁の眼鏡をかけていた。寒がりなのか、襟には毛皮の襟巻きをして、鼻の先が赤くなっている。

おやおや……、とギャンは見守った。この新来の客はあきらかに宗教関係者だ。

大統領は立ち上がり、自ら客を歓待し、接客用の椅子に向かいあって腰かけた。かなり大事な客らしい。

大統領は兵士にさがっていろと命令した。兵士はさっと敬礼すると、部屋を出て行く。

「よくおいで下された。オープ大僧正殿。ハルマン教皇殿はお元気

ですかな?」

ハルマン教皇……。

ギャンはその名前を聞いてにやりと笑いを浮かべた。

そうか、共和国の後ろ盾はゴラン神聖皇国だったのか!

ゴラン神聖皇国は、コラル帝国の北に位置する強国である。国家の中枢にはハルマン教皇を首班とする神聖教会が権力をふるい、国民はすべてこの教会の信者であることを強制されている。かつてはコラル帝国と覇を競っていたが、十年以上にわたり友好国であることを続けていた。が、帝国内部にはゴラン神聖皇国の友好を疑う声もおおく、国家の内部とくに軍部では疑いの目をもって見ていた。

その大僧正と大統領が会見をしている。結果はあきらかである。ゴラン神聖皇国は、コラル帝国に叛旗を翻そうとしているのだ!

これは面白くなってきた……。

ふたりは表面上親しげな挨拶をかわし、おたがいの健康などを気遣った会話をしていたが、ギャンの目にはまるで隠し持ったナイフをたがいの腹に突きつけあっているように見えた。狐と狸の化かしあい……。

ギャンはそっとその場を離れ、階段をおりて一階に戻った。

さらに階段をおり、地下へと進む。

気配をさぐると、あたりに人間の排泄物特有の悪臭がただよう。

第三の目をつかい、壁をにらむ。

思ったとおり、地下には帝国軍の兵士らが監禁されていた。みなどこかしら傷を負い、手足を鎖で縛られ酷い状態である。食事もまともにあたえられていないらしく、ギャンの感覚にかれらの恐怖と、怒りがびんびん伝わってくる。

ギャンはそれらの苦痛をうっとりと味わった。

かれらの死の恐怖は、ギャンにあらたなエネルギーをあたえてくれる。

もっと貪りたかったが、別の目的のため諦めた。

通路の向こうに見張りの兵士がいた。

退屈しているのか、机に向かってクロス・ワードをやっている。
つかつかとギャンが近づくと、その足音に兵士ははっと顔をあげた。
さっとギャンは手の平をつかって、兵士の意識を奪った。がくり、と首を垂れた兵士は、その場で絶命している。手早くその身体をさぐり、帝国軍兵士たちを監禁している牢屋の鍵を手に入れる。軍帽をかぶり、額の目を隠した。
鍵を使って牢屋の扉を開けると、兵士たちがぎょっとした表情で顔をあげた。
ギャンは叫んだ。
「おれは味方だ！　逃げ出そうじゃないか！」
わっ、と兵士たちに喚声があがる。
ギャンは次々と兵士たちのいましめを解いていった。
「ありがとう、助けがくるとは思ってもいなかった」
最後にいましめを解いたのは、大尉の階級を持った男だった。年は三十近く、がっしりとした身体つきで、浅黒い肌をしている。おそらく、この男が総督府の代表だろう。
「はっ、わたしは帝国兵器開発部門のギャン少尉であります！　総督府からの定例連絡が途絶え、どうしたのかと探っておりました！」
ギャンはてきぱきとこたえた。
大尉はうなずいた。
「わたしはラー大尉だ。きみの働きに感謝する。脱出して、帝国軍令部に報告したいが、その可能性はあるかね？」
ギャンはさっと立ち上がった。
「この階に武器庫があります。その武器を奪えばたぶん……」
みなまで言わせず、ラー大尉は立ち上がった。
「よし、全員武器庫へ突入する！」
わあっ、と兵士たちは一斉に走り出した。大尉はかれらを指揮し、武器庫に飛び込んだ。手当たり次第に武器を奪うと、そのまま階上へと突進していく。

だだだだだっ！

機関銃の発射音が響き、硝煙のつんとする匂いが漂った。わあっ、という叫び声が交錯し、あたりに血の匂いがしてきた。そのころやっと共和国軍の兵士たちが集まってきて、総督府内に戦闘が開始された。

死だ、死だ、死の匂い……。

無数の死者がはなつエネルギーを味わい、ギャンは興奮していた。数は共和国軍のほうが圧倒的に優位だった。最初の不意打ちの効果がうすれ、態勢を整えつつある敵軍に、帝国軍の兵士がひとり、またひとりと倒れていく。

とうとう数えるほどに減ったころあいを見計らい、ギャンはラー大尉に話しかけた。

「大尉殿！　このままでは無駄死にです。表に装甲車が止まっているのを見ました。あれを奪い、退却しましょう！」

ラー大尉は一瞬迷ったが、結局ギャンの提案をのんだ。

「よし、退却だ！　装甲車を奪う！」

少ない部下を率い、大尉は表に飛び出した。

表にも共和国軍の兵士たちがいる。兵士たちは飛び出した帝国軍兵士たちに驚いたようだった、すぐ武器をかまえ応戦した。

ギャンはじっと敵兵士たちを見つめた。

かれらの視界から、ギャンと大尉の姿が消えた。一種の、遠隔催眠である。

ギャンは大尉の袖を引っ張ると、停車している装甲車に駈け寄った。

「部下が……」

大尉はうめいた。

残りの帝国軍兵士たちは、共和国軍の兵士によって次々と倒されていく。駈け寄ろうとする大尉を、ギャンは押しとどめた。

「大尉殿だけでも助かるべきです！　まずは軍令部への復帰が肝心です」

「し、しかし……」
ギャンは軍帽を脱いだ。第三の目が開かれる。
大尉の目がうつろになった。
その大尉の身体を装甲車に押し込むと、ギャンはエンジンを全開にして走り出した。
必要なのはこのラー大尉ひとり。あとは死のうと生きようとギャンには関係ない。
うふふふ……。
ギャンは操縦席でほくそえんだ。
じつに愉快だ！　おれはついている！
装甲車は総督府を脱出し、首都を目指していた。

新兵器（前書き）

テスラ博士の鉄人兵が公開に！ギャンの野望はふくらむ……

新兵器

「ゴラン神聖皇国がスリン共和国と手を組んだというのか！」
報告を受けたフーシェ内務大臣は真っ青になった。
王宮の大臣執務室で、ギャンはラー大尉とともに総督府の陥落と、ゴラン神聖皇国についての報告を行った。
内務大臣は執務室のなかをいきつもどりつし、頭をかかえていた。
執務室にはほかに帝国陸軍大臣、海軍大臣も出席していた。
「さっそく戦争の準備をしなくてはなりませんな。全兵員に緊急招集をかけ、予備役も後方支援の態勢をとらなくては。それと総督府へむけ、ただちに軍を進発させましょう。報告があったロロ村へも派遣しなくてはなりません」
陸軍大臣の言葉に海軍大臣もうなずいた。
「わがほうもすべての艦船に出動の用意をさせましょう」
内務大臣は首をふった。
「まだ早い！　戦争準備の前にまずゴラン神聖皇国に外務大臣に命じて特使を派遣しなくては！　ハルマン教皇に、真意を確かめる必要がある。第一、まだ宣戦布告もされていないのだぞ」
陸軍大臣は眉をしかめた。
「馬鹿な！　共和国の背後に皇国の手が伸びているとすれば、準備はすぐにでもはじめないと間に合わないですぞ！」
「しかし予算もまだ通過させていない現状では、そんなことにかまけてはおられんのだ。元老院はもとより、平民議会がどう動くかわからん。あんたらわかっておるのかね？　戦争には大変な戦費が必要だ。特別枠を設けて、予算を組みなおす必要がある」
「予算と言えば……」
陸軍大臣が思い出したというようにギャンの顔を見つめた。
「少尉、きみはたしか兵器開発部の所属だな」
「そうです」

「先週、きみのところから新たな予算が計上されたな。莫大な金額だ！　内容は新兵器開発とうたっていたが、いったいどんな計画なんだ？　良い機会だ、説明してもらおうか」
ギャンはにっこりと笑った。邪気のない、だれの疑いも溶かすような笑顔である。
「まさに新兵器です。これにより、わがコラル帝国は無敵の軍隊に生まれ変わります！」
陸軍大臣と海軍大臣は顔を見合わせ、同時に口を開く。
「その新兵器とは何だ？」
言い終わっておたがいむっとした顔で見合った。
ギャンは胸をそらせた。
「鉄人兵団です！」
全員、目を丸くした。

翌日、ギャンの案内で内務大臣、陸軍、海軍両大臣がテスラ博士の研究室に招待された。
研究室に入った三人は、目の前の光景にあっけにとられていた。
「これが……そうか……」
あまりの驚きに、言葉も出ない。
それは巨大な人型の機械であった。つまりロボットである。
身長五メートルはあるだろうか。
どっしりとした足は大地を踏みしめ、長い両腕は金属の輝きに照明を跳ね返している。
「まだ試作品だがな……動作は保証するよ」
テスラ博士は誇らしげに自分の作品を手の平で叩いた。ぱんぱんという金属特有の反響音が研究室にひびいた。
その人型の兵器は恐ろしげな印象をあたえるよう、デザインも工夫されている。手首にはごつごつとした棘のついたリングをはめ、顔はいかつくどことなくゴリラを思わせる。
「動かしてみましょうか？」

そう言いながらギャンは梯子をかけ、ロボットの胸にのぼった。
胸の前が両側に扉のように開き、内部に人間が乗り込めるような座席が出現した。ギャンはその座席にのぼり、ベルトをかけた。
胸の扉が閉まるが、視界が確保されるよう覗き窓がついている。
その窓からギャンは首をつきだした。
「少しさがっててください」
その声に、全員あわてて後ずさる。
ぶるるるるん……。
エンジンの始動音がして、ロボットの関節からしろい蒸気がふきだした。
しゅっ、しゅっ、しゅっ！
ばしゅーっ！
もうもうと蒸気が湧き出し、みなわっと驚きの声をあげた。
ぶるぶる……とロボットの全身が震えだした。
ぐっと片足をあげ、一歩踏み出した。
ずしぃぃん……！
もう一歩！
ずしぃぃん……！
踏み出すたび、地響きがする。
ずしずしと大地を踏みしめ、ロボットは研究所の出口へと向かう。
「扉を開けてくれ！」
ギャンの声に、待機していた兵士があわてて扉を開いた。
どすん、どすんとロボットの歩きにつれあたりの機械が揺れている。
三人の大臣は走り出した。
研究所の外に、廃棄処分になっていた旧式の蒸気装甲車が停めてあった。
ロボットはその前に立ち止まると、手をふりあげた。
ぶーん、と音を立てふりまわし装甲車のまんなかにふりおろす。
ぐわしゃ！

ものすごい音を立て、装甲車は一撃でぺしゃんこになってしまった。

もう一度！

今度は地面にめりこんだ。

ロボットは両腕を伸ばし、スクラップになった装甲車を持ち上げる。

ぶん、と放り投げる。

どしゃ、とスクラップは地面に投げ出され、何度かバウンドした。

やっと停まったときは、原型を失っていた。完全なくず鉄である。

ぼうぜんとして言葉もなかった大臣たちはやっとわれに返った。

「すごい……なんという威力だ！」

陸軍大臣がつぶやいた。

それに海軍大臣も同意した。

「まったくだ、あんな兵器があれば、わが軍は無敵といっていい！」

大臣たちは感銘をうけていた。

だがテスラ博士は首をふった。

「だが、これを戦争に使うには問題がある！」

なぜだ、という目つきにテスラ博士は肩をすくめた。

「乗り手がおらんのじゃよ」

「乗り手？」

「これを操縦することができるのは、いまのところギャン少尉しかおらん。ほかのものがあれに乗り込むと、揺れで正気を保つことすら難しい有様じゃ！　大量生産にはいるには、その問題を解決しなければならん」

ふうむ……と、陸軍大臣は顎をなでた。きっとテスラ博士に向き直り、口を開いた。

「博士、ぜひこの鉄人兵団は完成させなければならん！　予算はいくらでもつぎこむ。なんとしても実用化してもらいたい」

判った、とテスラ博士はうなずいた。

デモンストレーションが終わり、大臣らが帰った後苦々しげな顔

つきなってロボットを見上げた。
「どうしたんです？　なにか不満でも？」
ギャンが問いかけると首をふった。
「いや、なんでもない」
そうですか、とギャンは肩をすくめた。
まあ、今回はこんなものだろう。総督府のこと、ゴラン神聖皇国のこと、そしてこの鉄人兵団のことを披露できたのは上出来にはいる。これによって、ギャン少尉という名前は大臣たちの胸に深く刻まれたはずだ。あとは待望の、共和国との戦争によって、ギャン自身が活躍して英雄となる道が残されている。
ギャンには自信があった。

ギャンが立ち去り、ひとり残されたテスラ博士は、難しい顔つきでロボットを見上げていた。
唇が噛みしめられる。
「くそ！　やはり兄にはかなわないのか……」
鉄人兵団の構想が現実のものとなり、テスラ博士は大急ぎで試作機を造る羽目になった。
いや、それはいいのだが出来たものは博士の構想とはまるで違っていた。最初はもっと人に近いサイズにしようとしていたのである。が、装置の小型化と、知能を組み込む手順に自信がもてず。やむをえず人間が乗り込む設計に変更したのだった。
いわば眼前の鉄の巨人は妥協の産物である。
兄のニコラ博士が作り上げた真鍮の少女、マリアをテスラ博士は思い浮かべた。あれこそ芸術だ……おれの鉄人兵はただの人型の乗り物にすぎん。かれは苦く敗北を噛みしめていた。

数日後、ギャンのもとへ軍令部から昇進の辞令が届いた。
封書を開くと、ギャンを少佐に任命するとあった。
少佐か……。三階級特進である。

これで宮廷へ出入りできる。
ギャンは自分の部屋から王宮を見上げていた。
見てろよ！　かならずおれがあそこの主になってやる！
かれはにたにたと笑みを浮かべていた。

サーカス（前書き）

ホルストの招待で、パックたちはキオ団長のサーカスを見物することに。そこで団長の意外な申し出にパックたちは……

サーカス

帝国軍は動き出した。

総督府の奪回と、共和国軍に占領されたロロ村を解放するためである。

ボーラン市のメイン・ストリートを、帝国軍の主力が隊列を組んで進軍していく。

それをパックとサンディ、それにマリアの三人は眺めていた。

「すげえなあ……」

口をぽかんと開け、パックは素直に感心していた。通過する軍の車両は途切れなしに目の前を横切っていく。兵員を満載した輸送車からは、兵隊たちが道行く市民に手をふって喚声に答えている。道路の両側には、ひとめ見ようと大勢の野次馬が押しかけ、通過する車両に向かって熱狂的な応援をしていた。だれかが配ったのか、ちいさな帝国旗が市民の手に渡され、みなそれを小刻みにふっていた。

最初ロロ村が占領されたというニュースを聞いたときはパックはいてもたってもいられない気持ちだった。すぐにもロロ村に帰ろうと言い出したパックを止めたのはニコラ博士だった。

「お前がいってもなにもならん。第一、戦争になったらなにをする気なんだね？」

そう言われ、パックは言葉をつまらせた。ニコラ博士は続けた。

「ロロ村は帝国の領土だ。そのロロ村が占領されたのだ。すぐにでも、帝国軍が動き出すさ」

そしてニコラ博士の言葉は裏打ちされた。

まわりの市民と一緒に、パックは大声で軍隊に声援をおくっていた。

頑張れよ……ロロ村を頼むぞ……。

そんな気持ちだった。

帝国軍の隊列も、そろそろ終わりにさしかかっているようだった。

もう帰ろうか、と思ったパックは、わあ！　という喚声にふり返った。

隊列の最後から、見慣れないものが近づいてくる。

なんだろう……。

のびあがったパックは、あっと叫んでいた。

なんと、隊列の最後から巨大な人型の機械が歩いてくる。

三階建てほどの建物くらいはある高さで、ゆったりとした歩みで大通りを進んでくるのだ。

「な、なんだあ……」

となりの事情通らしき男が、パックに説明した。

「なんでも帝国軍の新型兵器だって噂だぜ」

「新型兵器？」

「ああ、鉄人兵っていうんだそうだ。ほれ、これを見ろ」

男は号外をひろげて見せた。

それには総督府とロロ村が共和国軍に占領されたという記事のあとに、軍の新型兵器についての記事があった。巨大な、ゴリラを思わせるロボットが精緻なイラストで掲載されている。

近づいてくるのは、それの実物である。

男はじろじろとマリアを眺めた。

「言っちゃなんだが、あんたの連れているその女の子、中にだれか入っているのかい？」

パックは首をふった。

ボーラン市は大都会だけあって、マリアが外を出歩いても他人の詮索をあまり受けない。ただ、物珍しげな視線は慣れっこになっているが、たいていぎょっとしても知らんぷりをするくらいのものだ。男がまともに質問するのは珍しい部類にはいる。パックは男に向けて肩をすくめて見せた。男はそれで納得したのか、眉をあげてうなずいた。

ずしり……ずしり……。

鉄人兵が通過していく。

地面を踏みしめるたび、地響きがすごい。
ぼんやり眺めていたパックは、その胸あたりにある操縦席を見て「ん？」となった。
操縦しているのは若い、少佐の階級をした兵士である。戦車兵のヘルメットを目深にかぶり、横顔しか見えない。が、その横顔は確かに見覚えがあるような……。
あれは……ギャンではないのか？
パックは目をごしごしとこすった。
ヘルメットから金髪がのぞき、貴族的な横顔がちらりと見えていた。
どう見てもギャンである。
が、その顔はパックの記憶したギャンとはどことなく違っていた。
他人の空似、というやつか？
パックはいつまでも見送っていた。

パックたちはその足でボーラン市帝国大学の学寮へもどった。
学寮のとなりには、教授たちのための研究棟が付属されていて、ニコラ博士はそこの一室を与えられ、研究活動に入っている。
博士の部屋に入ると、ニコラ博士は机に向かってなにか論文を書いているところだった。
「ああ、おかえり。どうだった、帝国軍のパレードは？」
「すげえ、迫力だったよ、博士。博士も見にくればよかったのに」
ニコラ博士は苦笑して首をふった。
「あんなの見ても何の足しにもならん。ここで論文を仕上げているほうがましだ」
あいかわらずだな、とパックは思った。
「そうそう、帝国軍の新兵器ってのを見ましたよ」
「新兵器？」
「これです」
パックは男がくれた号外を博士にひろげて見せた。

「これは……」
ニコラ博士の顔が暗くなった。
「どうしたんです？」
「テスラめ、やりおった……！」
うめく。
「テスラ……あ、ニコラ博士の弟……」
「そうじゃ、あやつめ鉄人兵団などと言っておったのだが、作り上げたのだな。共和国軍くらいなら、通常の兵器でじゅうぶん対抗できるはずなのに、こんなものを投入するとは」
ニコラ博士の表情に、パックはにわかに不安になった。
「どうなるんですか？」
「判らん！　これによって戦禍が広がらないことを祈るよ。あのような新兵器を投入した結果、軍が総督府とロロ村の奪回だけで戦線をとどめる理性があるかどうか……はなはだ疑問じゃな」
号外には、共和国軍の背後にゴラン神聖皇国の手が動いているということは書かれていなかった。これは帝国内部の極秘事項であり、現在も秘密裏に外務官僚が皇国に派遣されているところであった。言うまでもなく、ゴラン神聖皇国のハルマン教皇の真意をさぐるためであり、本当に共和国と手を組んでいるのか、その証拠をつかむためである。
そうそう、とニコラ博士は話を変えるためか、一通の封書を取り出した。
「こんなものが来ておった。ホルストからじゃ」
「ホルストさん！」
パックは声をあげた。
ニコラ博士はにやりと笑った。
「サーカスの招待状じゃよ。お前とサンディ、それにマリア。なんとわしの分まであるぞ！」
きゃあ、とサンディは歓声を上げた。
「うれしい！　サーカスよ！　ねっ、パック、一緒に行きましょう

よ」

目を輝かせ、パックの手をとった。

パックは首をふった。

「行けないよ……おれには仕事がある」

旅費を稼ぐため、パックはニコラ博士に紹介され、市のいろいろなところで使われている蒸気機関の調整、修理の仕事を引き受けていた。ニコラ博士のもとで修行した成果か、パックはどこの機械を修理しても、最初の一時間で評価を受けていた。ニコラ博士は旅費くらい、研究費を流用して出してやると言ってくれたのだが、パックは頑固に自分で稼ぐと言い張ったのだった。

ニコラ博士は笑い出した。

「パック、旅費くらいもう溜まっただろう？　いいから息抜きのつもりで行ってこい。ミリィを探す旅の記念とでも思えば良いさ。それにホルストがせっかく招待してくれたのだ。行ってやらんと、あやつに悪いぞ」

そうか……そうかもな……。

博士の言うとおり、旅費はなんとか溜まっている。

パックはサンディを見た。

「判ったよ。サーカスを見に行こう。おれだって、正直見たい気持ちもあるし」

サンディは満面の笑みを浮かべた。

つぎにパックはニコラ博士に顔をむけた。

「だけどひとつ条件がありますよ」

「なんじゃ？」

「ニコラ博士も一緒に行く、ってのはどうです？」

「わしが？　冗談じゃない！　わしは研究でいそがしい」

「ホルストさんに悪いって言ったのは博士ですよ」

う……と、ニコラ博士はつまった。

サンディも調子をあわせた。

「そうよ、博士の招待状もあるんでしょう？」

ううう……と、ニコラ博士の額に血管が浮いた。
「むう……、判った。わしも行こう！」
博士は両手をあげた。おてあげ、といった形だ。

市のはずれにある広々とした空き地に、サーカスのテントは張られていた。
赤と黄色の縞模様のテントに、万国旗がひらめいている。すでにテントの周りには入場を待つ客が長い列をつくっていた。
敷地の中には団員のためのトレーラーが何台も停まり、芸人たちが本番前の練習や、ショーに出演する動物たちに餌をやっている。人気なのは象で、見物人がバナナや林檎をやれるよう、餌の売り場が開かれている。子供たちは小遣いをはたいてその餌を購入して、象にやっている。象が長い鼻をのばして餌を受け取ると、子供たちは歓声を上げた。
その中に、パックはムカデで乗り入れた。
六対の足を動かしてやってくるムカデに、市民たちは驚きの表情を浮かべる。中にはサーカスの出し物だと勘違いしているものもいた。
サーカスの団長のトレーラーに、ムカデを横付けすると、音を聞きつけてホルストが現れた。その格好に、パックは叫んだ。
「ホルストさん、どうしたの、その格好？」
これか、とホルストは自分の服を見てちょっと笑った。
ホルストはいつもの外套ではなく、黒地に金の縫い取りがあるローブを羽織っている。背中側には星とさまざまな紋章が縫い取られ、頭には三角帽を被っていた。
「キオ団長がぜひに、と言い出してなあ。こうでないと、舞台映えしないのだそうだ」
そう言うホルストの髭はワックスで固められ、先をぴんと尖らせている。
かれらの会話にキオ団長も出てきた。

「これはこれは……ああ、ホルストさんの招待客の方々ですな……」
言いかけると、かれの目はムカデに釘付けになった。
「あの……あれはなんですかな？」
「ニコラ博士の発明した蒸気ムカデさ！」
パックが答えると、キオ団長の目がきらりと光った。ムカデと、それに乗るマリアを交互に見つめる。
「あれでいらしたのですか……ふうむ」
感心してムカデとマリアをじろじろと眺めた。ちょっと、とホルストの袖をひっぱる。
キオ団長は背伸びして、ホルストに耳打ちをした。
ホルストの目がおおきく見開かれた。
パックに向かって口を開く。
「おい、パック。団長の提案だがな、あのムカデで登場してほしいそうだ。マリアも一緒に」
「へえ？　マリアと？」
「お願いします」
キオ団長は熱心にパックに向かって頭を下げた。
「登場シーンがどうにもいい演出が思い浮かばなくて困っていたのですよ。あんたらのムカデならどんぴしゃりだ！　それにあのマリアさんですかな、彼女もまた印象的だ。彼女をショーの助手として使いたい。ホルストさんのためにぜひ、お願いいたしたい！」
それと、とキオ団長はサンディにも声をかけた。
「お嬢さん、あなたも出演する気はないですかな？」
「あたし？　ど、ど、どうして……！」
サンディは真っ赤になってしまった。
「あなたのような可愛いくて、きれいなお嬢さんなら観客のうけもぴったりだ！　是非、出演願いたいですな」
慇懃に団長は頭を下げ、サンディの手をとった。
どうしよう、というようにサンディはパックを見た。
ニコラ博士がくすくすと笑い出す。

「いいじゃないか、やってみろよ」
はあ、とパックは頭をかき、サンディを見る。
「どうする？」
「パックがやるというなら、あたしもやるわ！」
しょうがないなあ、というようにパックは肩をすくめる。
「じゃ、やるか！」
うん、とサンディもうなずき胸を張った。
「団長さん、あたしやります！」
おお、とキオ団長は感激していた。

サンディの逃走（前書き）

サーカスに出演することになるサンディだったが、ついに彼女の正体があばかれることに。

サンディの逃走

ふたりのピエロがこけつまろびつ、会場のすみからすみまで追いかけっこをしている。いっぽうのやせたひょろ長い身体つきをしたピエロが、もうひとりの太ったピエロの頭から帽子を奪い取りこっちへおいでとからかいつつ逃げている。太ったピエロはよたよたとした動きで、必死になっておいかけている。途中、わざとらしく床に落ちたバナナの皮ですべり、大げさな動きでずっでんどうとひっくりかえる。

そのたびに観客はわっと湧き、笑い声をあげる。観客の中にニコラ博士もいた。博士だけは出演しなくてすむので、観客席に気楽に座っている。

ひとしきりピエロの演技が終わると、つぎは動物たちの演技である。数頭の犬が行列をつくって登場すると、自転車にのったり、輪くぐりをしてみせる。犬たちの演技のつぎはライオンと虎の登場だ。会場に鉄の檻が組み立てられ、猛獣使いがライオンと虎を鞭の動きで演技させる。象、熊なども登場し、猛獣使いのたくみな誘導で、あきれるほど従順に演技をする。

その間、オーケストラが軽快なポルカや、ジンタを演奏し、雰囲気を盛り上げた。

数分間の休憩のあと、会場が暗くなり、スポットライトを浴びてキオ団長が現れ演説をはじめた。

「さて、ここにお集まりのみなさま！　大変お楽しみになられたことを思い、わがサーカス欣快のいたりでございます！　つぎにお目にかかりますのは神秘の技を身につけた隠者ホルストによりますイルージョン！　誰も見たことのない、奇跡の技をぜひご覧ください！」

もうもうと蒸気の白煙がたちのぼり、オーケストラが音楽を盛り上げる。トランペットの奏列が会場に甲高いテーマを響き渡らせる。

その中を、パックの運転するムカデがのしのしと現れた。ムカデに乗るのはパックのほか、マリア、サンディ、そしてホルスト。

マリアの身体は全身、金色に光り輝いている。会場に出演する直前、サーカスの団員たちによって入念に磨き上げたてられたのだ。

ムカデは会場をぐるりと進んで、喚声があがるなかホルストが両手をふって応えている。ホルストの皺ぶかい顔はほころび、その目は輝いていた。

こんなホルストははじめて見る、とパックは思っていた。

会場からニコラ博士が手を振った。それにパックたちサンディとマリアも応える。

会場のまんなかにムカデが停まり、ホルストはひらりと地上へ降り立った。

ながいローブの袖をひらめかせ、ホルストは両手を高々とあげる。わあわあという会場の喚声がじょじょに静まっていく。

そのままホルストは会場が静かになるのを待っていた。

ついに会場は、しわぶきひとつもれない、完全な沈黙につつまれた。

観客の期待が高まっている。

ホルストの口が開いた。

「みなさん、わたしはホルストといい、長年魔法について研究をしてきましたじゃ！　この世界には魔法が存在します！　それをわしは、証明しましょう」

さっと、ホルストが合図をすると、会場のかたすみからもうもうと蒸気が噴きあがった。蒸気の噴き出し口を持つのはサンディとマリアだ。その蒸気の前にたち、ホルストは両手を動かした。

と、噴き出した蒸気が徐々にかたちをとりはじめ、テントの天井近くの空間に固まっていく。蒸気の雲はひとのかたちをとりはじめた。

おお……、と観客がいっせいに驚きの声をあげる。

蒸気の巨人はゆっくりと歩き出した。

ふわり……ふわり……。

音もなく、しろい巨人が歩いている。目鼻立ちははっきりしないが、たしかにひとのかたちをしているのが見てとれる。

ホルストはふたたび蒸気の雲をあやつりはじめた。

もうひとつ、しろい雲がかたちをとりはじめる。

今度は竜だ！

雲の中からあらわれたのは、翼をひろげた竜であった。

竜はながい身体をくねらせるようにして、巨人にちかづいていく。

巨人ははっと驚き、待ち受ける。

さっ、とホルストが指先をあげた。

なんと！　巨人の手には剣が握られていた。

楽団が、この対決を盛り上げるべく、演奏を続けている。音もなく動く二体の雲の怪物の足音、咆哮を音楽で表現している。巨人が歩くと、その足音のかわりに太鼓がリズムを刻み、竜がその口を大きくひろげ、咆哮するときはトランペットが甲高い音をたてる。

ついに竜が巨人に迫った！

巨人は手にした剣をかまえ、立ち向かう。空中を漂うように迫る竜に、手にした剣をふりおろす。ぎゃああ……と竜の咆哮を弦楽器が表現する。剣が竜の身体を断ち切り、ふたつにわれた竜の身体が水蒸気になって散っていく。巨人もまた、ゆっくりと蒸気に戻り消えていった。

わあわあと観客が拍手をおくり、絶賛する。ホルストの顔は得意そうに輝いていた。両隣にサンディとマリアがたち、手をふっていた。

観客の中で、そのサンディをじっと見つめる一団の男たちがいた。みなそろいの黒いスーツで、黒いサングラスをかけていた。男たちはまわりの観客たちとはまるで違い、陰気な表情のままじっと彼女を見つめていた。ショーが終わると、おたがいうなずきあい立ち上がる。

トレーラーに戻った一同を、キオ団長は大喜びで出迎えた。

「いやあ！　凄い！　たいしたものですなあ！　大成功です」
手放しで褒め称え、ほくほく顔をほころばせる。
サンディとマリアにも顔を向けた。
「おふたりも、また出演してもらえませんかな？」
「でも……」
サンディは首をかしげた。
「無理ですかなあ？」
団長は眉をさげた。
立ち話している一同に、突然蒸気車が近づき、ブレーキの音を派手に響かせ停まった。いっせいに前後のドアが開かれ、数人の男が降り立ち急ぎ足で近づいてくる。
黒いスーツ、目深に被った中折れ帽、視線を隠すサングラス。見るからに怪しい。
パックに続いてサンディも不審そうな表情になった。
「なに？」
言いかける彼女に、男たちはするすると近づいた。
「サンドラ姫！　お迎えにあがりました」
そう言うとさっと膝まづき、深々と頭を下げる。
サンディは真っ青になった。
「サンドラ姫？」
パックがつぶやく。サンディはかぶりをふる。
「し、知らないわよ！　だれかと間違えているのよ！」
黒服の男たちはかまわず続けた。
「おたわむれを。とにかく、お迎えにあがりました。すぐ王宮にお戻りください。皇帝陛下がご心配いたしております」
「いやよ！　あたし、帰らない！」
叫ぶと走り出した。
「皇帝陛下だって？」
ぼうぜんとパックはつぶやく。
男たちは叫んだ。

「追え！　姫を追うのだ！」
はっと部下らしき男たちはうなずくと、サンディを追って走り出した。サンディはサーカスのテントに向かっている。パックもつられるように追いかけた。
テントの楽屋口にサンディは飛び込み、あっけにとられる出演者たちをすりぬけ会場へ飛び込んだ。
会場では空中ブランコの演技を行っている。
それを追って男たちとパックが中になだれ込んだ。
男たちが背後に迫ったのを見て、サンディは舌打ちをしてあたりを見回した。
目の前に梯子がある。
ためらわずそれをするすると登りはじめた。
あ……あ……と、男たちは悲鳴をあげた。
「姫！　あぶない！　お戻りください！」
「あたし帰らない！」
叫ぶとサンディはさらに上に上っていく。
突然の闖入者に観客は大喜びだ。
観客席で見物を続けていたニコラ博士は驚いた。
「サンディじゃないか。彼女はこの演目に出演するとは聞いてはいないが？」
「ああ、あんな高いところへ……」
「あぶない……！」
男たちは上を見上げ、はらはらしている。パックは話しかけた。
「あんたらいったいなんだい？　サンディを姫、って呼んでいたけど」
「なにを言う！　彼女こそサンドラ・ドゥ・アンクル・コラル・カチャイ様そのお人である。気軽にサンディなどと呼ぶでないぞ」
「サンドラ・ドゥ……わあ、いっぺんで憶えきれない。いったいそりゃ、名前なのかい」
「そうだ、彼女こそコラル帝国グレゴリオ四世皇帝陛下の姫君なの

だ」
「えええっ！」
「われらはコラル帝国秘密警察。姫が王宮を出奔したので、探していたのだ」
「隊長、そんなことを話している場合ではありませんぞ！」
部下が上を指差して叫ぶ。
その視線をおったパックは、あっとなった。
なんとサンディが空中ブランコ団員の踊り場まで達してしまっていたのである。この突然の闖入者に、ブランコ乗りの団員もどう対応して良いのか判らないといった様子だ。
秘密警察の隊長は地団太をふんだ。
「ええい、何をしておる！　姫があんなところまで行ってしまわれたではないか！　追え、すぐ追うのだ！」
叱咤され、隊長以下、隊員たちはぎこちない動きで梯子をのぼっていく。それを見たサンディは決意したのか、目の前のブランコに手を伸ばした。
まさか？　あのままブランコで飛び出すつもりじゃないだろうな。パックは思わず手を握りしめた。
だが、サンディはとん、と足で踊り場をけると思い切って空中に飛び出した。梯子を途中まで上った秘密警察の連中はあっ、と叫ぶとその場で凍りついた。
ぶーん、とブランコに掴まったサンディは放物線の頂点までくると、なんとその手を離してしまう。
わあ！
全員、目を閉じた。
そのまま落下したサンディは、転落防止ネットにそのまま背中から落ち、安全に受け止められてはねた。すこし目を廻した様子だが、無事着地するとネットを這い降り、地面に立つ。
どっと観客は拍手喝さい。まったくハプニングとは思っていない。完全にサンディが出演者と勘違いしている。

ふう、とパックたちはため息をついた。
梯子にのぼったままの秘密警察隊員たちはどうしていいかわからない。半分ほどの高さに昇ったはいいが、降りられなくなってしまったようだ。
「こら！　さっさと降りんか！　下がつかえているのだぞ」
「し、しかし隊長殿……」
「ええい！　飛び降りろ！」
痺れを切らした隊長は足をのばし、下の部下の頭をふんずけた。
わあ、と叫んだ隊員は梯子から手を離してしまう。その結果、隊員たちはひと塊になって梯子から落下してしまった。どさ、どさと音を立てかれらは地面にはいつくばった。
それを見ながらサンディはふたたびテントの外にむけ走り出した。パックは出口の付近で彼女を待ち受けた。
「あっ、待てよ、サンディ！」
「パック、ついてこないで！」
走り出したパックに、サンディは叫んだ。しかしパックはサンディの後を追いかけた。
「サンディ、きみが皇帝の娘って……？」
その言葉にサンディは首をふった。立ち止まり、パックの顔を見つめた。目にいっぱい涙がたまっている。
「さよならっ！」
最後にそう言うと、駆け出した。テントの前に停車していた秘密警察の蒸気車に飛び乗ると、エンジンを全開にして走り出す。猛烈な勢いで走り出した蒸気車は、あとに白い蒸気を残しつつ市街へと走り去った。
後に残され、パックはぼう然と立っていた。
そこにようやく秘密警察の連中が息を切らしてやってきた。
「ひ、姫は？」
「どこかへ行っちまったよ……あんたらの車に乗って」
へたへたと隊長は膝を折ってしまう。

「なんということだ。あと一歩だったのに」
パックはつぶやいていた。
サンディがお姫さま？
皇帝の娘？
なんということだろう……！

戦闘（前書き）

帝国軍と共和国軍との戦いが勃発！　ギャンは帝国軍将校として活躍を見せます。

戦闘

ギャンは懐からマッチを取り出し、靴の踵にこすりつけて火をつけた。その火を口もとへ持っていくと煙草を吸い付ける。近頃、覚えた悪癖である。一服吸いつけ、煙を吐き出しながら空を見上げる。よく晴れた昼下がりである。天は高く、ちぎれ雲がひとつふたつゆったりと横切っている。

ギャンは帝国軍の蒸気車の後部座席にすわり、くつろいでいた。車の背後には、鉄人兵が乗り手のないまま膝をおりまげうずくまっている。

目の前の街道には壊れた装甲車や、遺棄された機関銃、速射砲などがちらばり、その間を幾人かの共和国軍の兵士の死体が埋めている。戦闘が一段落し、敵はあっけなく粉砕され逃走していった。その中を帝国軍の兵士らが、共和国大統領バタン・スリンの姿がないか確かめている。おそらく大統領は最初の戦闘ではやばやと逃げ出したのだろうという噂だった。

「やはりありませんね。捕虜にした敵兵士らの証言でも、大統領は早い段階で逃走したとのことですから」

部下のトラン中尉が報告に来た。すこし太り気味で、暑いのか制服の襟をあけ顎から汗をしたたらせている。中尉は三十代なかばで、ギャンにくらべ二十は年上だ。ギャンが生まれる前から帝国軍に暮らし、カタツムリが這うような着実な歩みで昇進してやっとことし中尉に進級している。あっというまに少尉から少佐に昇進したギャンとはくらべものにならない。

中尉の報告にギャンはうなずいた。それは最初から判っていたことである。なにしろバタン・スリン大統領の逃走を目撃したのはギャン自身だからだ。

総督府を占領した共和国軍は、包囲した帝国軍の投降の呼びかけを無視し、おこがましくも攻撃してきた。応戦した帝国軍は数をた

のみにじりじりと包囲の輪を縮め、水も漏らさぬ作戦で攻撃したのである。目的は大統領の拘束であったが、それは失敗した。

じつはギャンが大統領の逃走を手助けしたのである。もっともだれにもわからないよう、細心の注意をしてだが。ギャンはこの段階で共和国軍が壊滅してしまわないよう、大統領だけは逃がそうと考えていた。それができる立場にもいた。

戦闘がはじまり、ギャンは味方の兵士の配置を、大統領が逃走できるよう変えていた。その大統領が逃げ出すのを目撃しても、帝国軍兵士たちはだれひとりとしてその記憶を所持していない。ギャンの魔法であった。

その結果、総督府の奪還には成功したが、大統領の逮捕には失敗したのである。

責任はこの戦闘を指揮した上層部ということになった。

ギャンは帝国の地理を思い浮かべていた。

南に共和国軍、北にゴラン神聖皇国。

いま帝国軍の主力は共和国軍討伐のため、南に移動している。帝国の首都ボーラン市を守るのは近衛兵で構成された、わずか一個師団にすぎない。神聖皇国が帝国を攻撃しようと考えるなら絶好の機会である。

神聖皇国と帝国の間には海が隔ててある。神聖皇国が帝国を攻撃しようとするならば、まず海軍を動かすはずだ。

ギャンはそれを待っていた。神聖皇国との戦争が始まれば、現在の共和国軍との戦いなど老婦人のお茶会とした思えないほどの、凄まじい戦いになるはずだ。

共和国軍など、ほんらいは数個連隊規模で討伐できるのだが、帝国は威信のためか全兵力の半分にあたる二個師団を動かしていた。

卵を割るのに大砲を持ち出すようなものだ。

ギャンは軍令部の作戦に冷笑的だった。

と、かれは座席から背をはなしのびあがった。

むこうから伝令が一騎、馬をとばして近づいてくる。

帝国の軽騎兵である。

それを見てギャンはくすりと笑った。帝国はいまだに前世紀の遺物としか思えない騎兵を所持している。それも重騎兵、竜騎兵、軽騎兵の三種である。重騎兵、竜騎兵ともに蒸気機関による装甲車や戦車が登場する前は戦闘の花形であったが、いまはもうさすがにパレードなどの飾り物になっている。ただ軽騎兵だけは伝令として、現在も使用されていた。

真っ赤な上着に白いズボン。ズボンの横には黒と黄色でラインがひかれ、かぶっている兜の天辺にはひらひらと羽飾りをあしらっている。軽騎兵が馬を飛ばし近づくと、腰のサーベルががちゃがちゃと鳴った。

騎兵はギャンを認め馬を近づけた。

「ギャン少佐殿でありますか？」

ああ、とギャンがうなずくと騎兵は馬からひらりと飛び降りさっと敬礼をした。かちんとブーツの踵を打ち背筋を伸ばす。

「報告いたします！　帝国第五連隊隊長ホルツ大佐は今回の作戦の主目的であるバタン・スリン大統領の捕獲に失敗。更迭されました。したがいましてギャン少佐が連隊の隊長として任命されることになります。これが任命書です」

さっと胸ポケットから封筒を取り出す。

受け取り、ギャンは中身を確認した。

騎兵はさらに報告を続ける。

「軍令部より命令！　本日ただいまよりギャン少佐以下第五連隊はロロ村に進軍。ロロ村を占拠する共和国軍を撃破し、村を解放するようにとのことです！」

「承知した、と伝えてくれ。おれはこれよりあの鉄人兵に乗り込み、ロロ村に向かう、とな」

騎兵はさっと敬礼した。

ギャンが答礼すると、騎兵はふたたび馬にまたがり軍令部へ向け去っていった。

隊長か、良い響きだ。
となりでひかえていたトラン中尉にギャンは顔を向けた。
「中尉！　すぐ全員に伝えろ。これからただちにわが軍はロロ村奪還に向かう、とな。可及的速やかに進軍の用意！」
トラン中尉は敬礼した。
立ち去る前、ちょっとギャンにむかい口を開いた。
「少佐殿、連隊長就任、おめでとうございます」
顔が赤らんでいた。
早く行け、とギャンは手をふった。
はっ、と答え中尉はきびきびとした歩きで立ち去る。
出発だ！　蒸気機関に火を入れろ！　なにを愚図愚図しておるか！
中尉の怒鳴り声が聞こえてくる。
ギャンは後ろの鉄人兵に目をやった。
この総督府作戦では使う機会がなかったが、今回は出番がありそうである。
楽しみだ……。
ギャンはにやりと笑みを浮かべていた。

「いよいよ帝国軍が近づいてきた。戦いになるだろう」
ガゼの言葉にホルンは顔を上げた。
自宅に軟禁状態になって、もう十日以上になる。ホルンはガゼの、村の占領に対する協力を拒否した。ガゼはホルンのロロ村に対する影響力を考え、自宅に軟禁する処置を決めたのである。自宅の玄関には二十四時間共和国の兵士が見張りに立ち、銃を構え近づく村人を遠ざけていた。一日に三回、メイサが食事を持ってくるときだけドアを開けるだけで、あとは一切ホルンは村人の顔を見ることなく過ごしていた。
「ガゼ、もうやめろ」
ホルンの言葉にガゼはきっとふり向いた。
「なあ、戦いはやめないか？　帝国は本気だぞ。前は逃げられたが、

今回はそうはいかん。お前、死ぬぞ。メイサのためにも、生きろ！」
ホルンは数日前の、総督府の方角から聞こえてきた砲撃の音を思い起こしていた。半日間、大砲と機銃の音が聞こえて、ぱたりと止んだ。あっけないほどだった。帝国軍は主力をこのあたりに集結させているのだろう。たった半日で共和国軍の反撃が終わったということは、それほど彼我の戦力が圧倒的な差を持っていることを示している。
「そうはいかない。おれは大統領と共に帝国を倒すまでやめない！　メイサのことは……」
ガゼはおおきく息を吸い込んだ。
「おれは死んだものと思ってくれと、昨日言っておいた。あれは判ってくれる」
「馬鹿な！　ミリィはどうなる？　あの娘は、一度もお前の顔を見たことがないのだぞ。お前だって娘の顔を見たことはないだろう？」
「判っている……。しかし、どうしようもないのだ……。すまん！　ふたりのことを頼む」
ホルンはかぶりをふった。
「おれにはわからん。お前がなぜ、そんなにも共和国に忠誠をつくすのか？」
その言葉に、ガゼは無言だった。
その時、ドアが開きひとりの共和国兵士が入室してきた。制服はよごれ、あちこち焼け焦げや、かぎ裂きができている。兵士の顔も泥と血でよごれ、ひどい有様だ。
「どうした？」
ガゼが叫んだ。兵士はあえぎあえぎ報告した。
「総督府は陥落しました……わが方の損害は多大……大統領閣下は……」
兵士はさっとガゼにちかづくと、なにごとかを耳打ちした。
ガゼの顔色が変わった。
よし、とうなずくと大股にドアにちかづき外に出ると叫ぶ。

「撤収だ！　全員、車両に乗り込め！」
なにごとかとホルンが顔をあげると、ガゼはふりむき笑った。
「大統領は無事脱出した！　おれたちはこれから南方に移動し、あらたな戦線を設定する。安心しろ、ロロ村はもう戦争から逃れることが出来るさ」
立ち上がるホルンを尻目に、ガゼはさっさと歩き去った。
ホルンの家の前に、巨大戦車が停まっている。
その巨大さは、ほとんど陸の戦艦と言って良いほどである。
高さは三階建て、いやもっとあるだろう。見上げるほどの巨体に四門の主砲があたりを睨んでいる。主砲は砲線が重ならないよう高さ、位置を工夫してある。したがって四門同時におなじ目標を狙うことも出来る。もっとも高いところにある主砲は、低い位置を狙うことが出来るよう、俯角がとれるよう工夫されている。
その巨体を移動させるためのキャタピラも巨大だ。キャタピラ部分だけでも、大人ひとりぶんの高さはある。乗り込むためには車体後部からドアを開け、階段を引き出して乗り込む。
ガゼは数人の兵士らに出迎えを受け、戦車に乗り込んだ。
戦車には一度に五十名の乗員が乗り込むことが出来た。が、いまはその倍の百名近くが乗り込んでいる。撤退のためである。
かつかつかつ……と、ブーツの足音高くガゼは最上階にある司令室に入った。
司令室には共和国軍の参謀将校らが待っていた。
ガゼが入室すると、全員起立した。
司令官の席に着席すると、ガゼはマイクを引き寄せた。
スイッチを入れると、ガゼの声が戦車のすみずみまで響く。
「わたしはガゼ司令官だ！　これより共和国軍は南方へ撤退し、あらたな拠点を築きあげ帝国軍との戦いを続ける。そのため全軍の安全な撤退を支援するため、この戦車が殿軍となって主力を守ることとなる。戦いの目的は敵軍の打破ではなく、味方の安全な移動を支援するためである。したがって損害はなるべく少なく抑えたい。諸

君の奮励を期待する！」
　がらがら……。
巨大な軋り音のような響きを立て、キャタピラが動き出した。
どすどす……。
戦車の移動であたりの地面が津波のように揺れている。
ホルンはあわてて家の外に飛び出した。
ゆっくりと戦車が巨体を移動させていく。
「ガゼ……」
ホルンはつぶやいた。
その側にメイサがよりそった。
「あの人、死ぬつもりなんでしょうか？」
ホルンは眉をよせた。
「判らん。だが、共和国のため命をささげるつもりなのは確かだ」
メイサは手で顔をおおった。
「わたしに判りません。なんであの人あんなに……」
「おれにもわからんさ」
ふたりはじっと戦車を見送っていた。

帝国軍の主力は何事もなくロロ村に迫った。途中、予想された共和国軍の抵抗はなかった。ということは、敵は撤退を始めたということである。
「敵軍は撤退を始めたようですな。斥候の報告でも、大規模な移動が確認されております」
ふむ、とギャンはうなずいた。撤退は予想されていたが、これほど無抵抗とは予想外だった。もうすこし骨のあるやつらかと思っていたが、これでは当てが外れた。
しかし、と部下のひとりの報告にギャンは耳を澄ませた。
「気になることがひとつ。敵軍は巨大な戦車を保有しているようです。これが殿軍となって撤退の最後に立ちはだかっている模様です」
「巨大戦車？　それはどんなものだ？」

にわかに興味をおぼえ、ギャンは身体を乗り出した。
「それが……まるで城か、戦艦のような巨大さで、報告によりますと主砲を四門もそろえ、人員は百名近いという報告です。信じがたい報告ですが、複数の斥候が同じことを報告しておりますので、事実と思われます」
「なんで、そんな巨大な戦車を造ったんだろうな？」
「判りません。戦争の常識からは外れております。そんな巨大戦車をひとつ作るより、十台の通常戦車を作ったほうが機動力が増すはずですからな」
部下は苦笑した。ギャンはうなずいた。
まあいい。その戦車が実在するなら、おれの戦いも目立つことができる。
ギャンは部下に命令した。
「よし、ともかくロロ村に急行することだ。全軍、進撃を命じろ！」
はっ、と部下はきびきびと応じた。
ロロ村の入り口近くで終結していた帝国軍は、ギャンの指令により動き出した。
ギャンは待機していた鉄人兵に乗り込み、作動スイッチを入れた。
ぐおおお……！
野獣の咆哮のような音を立て、鉄人兵に命が吹き込まれる。
全軍は進撃を開始した。

ロロ村の向こうの森からかすかな土ぼこりが上がっている。
帝国軍の戦車部隊の隊長が砲塔から顔をだし、双眼鏡を目に当て叫んだ。
「ギャン少佐！　あそこに敵軍の移動した痕跡があります！」
よし、と鉄人兵の操縦席からギャンはうなずいた。
「砲撃を開始！」
かれの命令で帝国軍は砲門を開いた。
帝国軍の砲門は蒸気を使った蒸気砲である。

ぼうだいな蒸気が砲口に送り込まれ、圧縮された蒸気圧が砲弾を発射させる。

ずばあん、と砲弾が発射されると、あとにはもうれつな白い蒸気が残される。

ずばっ！

しゅるしゅるしゅる……！

ずばっ！

しゅるしゅるしゅる……！

砲弾には空気の抵抗で威嚇的な音が鳴るよう、ちいさな笛が取り付けられている。それが落下するときぴいーっと甲高い音を立てるのである。

ぴるるるる……！

どかーん！

それらの音は、敵軍の兵士の戦意をそぐような効果を上げていた。しかし村人にとってはそれ以上の恐怖であった。

主戦場はロロ村ではないにしろ、頭上を飛び交う砲弾の音に村人は青ざめた。みなホルンの家のまわりに集まり、不安な顔を見合わせていた。

「安心しろ。この村には砲弾は落ちないよ」

この中でただ一人、戦争を体験しているホルンは断言した。その言葉に村人は一様にほっとした顔をしたが、やはり不安はぬぐいきれない。

どすん！

どすん！

今度は共和国軍の反撃だ。巨大戦車の砲門が開いたのだ。共和国軍の砲門は火薬を使った発射装置である。黒い煙が硝煙の匂いと共に立ち昇る。

ふたつの軍隊の砲弾がロロ村を飛び越え、おたがいを狙っている。

村人の一人が叫んだ。

「帝国軍だ！」

どどど……と、帝国軍の主力が接近してきた。戦車、装甲車、兵員輸送車が列をなして進撃してくる。ときおり、索敵のためか戦車の砲門が砲弾を送り込む。反撃があれば、そこに敵がいるものとして照準を修正するためである。

ロロ村の村人は歓呼の声をあげた。

帝国軍の兵士は手をあげ、それに応える。

敵を目指し、帝国軍は進撃していく。つぎつぎと通りすぎる車両を見送ったホルンは、その最後に現れた異様なものに目を見張った。

なんだ、あれは？

巨大な人型の機械。鉄人兵である。

鉄人兵はホルンの目の前に停止した。

その胸の窓に見える顔に、ホルンは驚いた。あれは……ギャンだ！

「やあ、ホルンじゃないか」

ギャンがホルンを見おろし、叫んだ。

「ギャン……」

くすり、とギャンは笑った。

「ひさしぶり。こんな形で再会するとは思ってもいなかったぜ」

ホルンはギャンの制服に目をとめた。

「軍にはいったのか？」

そうさ、とギャンは鼻をこすり得意そうな顔になった。肩の階級賞を見せびらかせる。

「これでも少佐さ。安心しろ、ロロ村はおれが守る」

ギャンの変貌に、ホルンはあっけにとられていた。少佐の階級以上に、ギャンは面がわりしていた。村にいたころの生意気で、そのくせ気弱なお坊ちゃまの雰囲気は影を潜め、いまではまるで別人といっていい。

「少佐殿！　敵の巨大戦車の位置が判明しました。これより全力を挙げ、攻撃を開始します」

部下の報告に、ギャンはうなずいた。ホルンに向け、ちょっとおどけた仕草で敬礼をする。

「それじゃ、これからおれの仕事があるからな」
ギャンは鉄人兵の操縦席にふたたび引っ込んだ。
がるるるん……鉄人兵の、獣のような咆哮があたりを圧する。

帝国軍はロロ村を通過し、共和国軍の主力と激突した。
共和国軍の主力はあの巨大戦車である。
戦車自体が移動要塞といってよく、その四門の主砲は近づく帝国軍をよく撃破した。
「あの戦車があるかぎり、敵の撤退を阻止することは出来ませんな。撤退を成功させれば、南方の共和国軍が息を吹き返します。それはなんとしても阻止しなくてなりません」
部下の報告にギャンはうなずいた。
「よし、戦車はおれにまかせろ。お前たちは側面をついて攻撃する」
ギャンの命令は時宜にかなったものだから部下たちはなんの不審も抱かなかった。さあ、ここからがおれの見せ場だ。
ギャンは楽しんでいた。かれにとってはこれはゲームだった。
操縦席から双眼鏡でギャンは敵の戦車を見た。
たしかに巨大だ。
そびえるような巨体、あたりを威嚇する四門の主砲。まるで戦艦にキャタピラをつけたようなものだ。しかし巨大すぎるゆえ、その動きは鈍重だ。そこに付け入る隙がある。
ギャンの命令で帝国軍の装甲車、戦車の群れは村を大回りして敵の側面を狙う位置へ移動している。巨大戦車の砲門は左右に展開し、味方を狙っている。
鉄人兵はかがみこんで、地面の岩をひとつ掘り起こした。それひとつで人間ひとりかかえほどもある大きさだ。そんな岩を、鉄人兵はかるがるとあつかい、まるで小石のように片手で持ち上げる。
鉄人兵の腕がひかれ、ちからがためられた。
ぶーん、と音を立て鉄人兵の腕がのび、手の中の岩が空中に放り投げられた。

岩は放物線を描き、戦車にむけて投げられた。
着弾する。
少し遅れてがつん、という衝撃音が聞こえてくる。
「当たりましたな」
部下が報告する。ギャンはうなずいた。もうひとつ鉄人兵の手に岩が握られた。
また投げる。
吸い込まれるように岩は戦車を直撃した。

「くそっ！　なんてことだ！　たかが石ひとつで……」
ガゼは司令塔で喚いていた。
岩を投げつけられた戦車の内部は大騒ぎであった。
たしかに岩を投げつけられたくらいで戦車の外板はびくともするものではない。厚さ数センチの鉄の板は、砲弾の直撃にも耐ええる強度を持っている。
しかしその衝撃は内部に深刻なダメージを与えていた。
戦車のエンジン、そのほか主機関にはダメージはなかったが、微妙な調整を必要とする砲門の照準は、その衝撃におおきく狂ってしまっていた。また直撃する岩の打撃は内部の兵員たちにも衝撃をあたえ、揺さぶられた衝撃であたりの機器に打ち付けられ、怪我をする兵士が多数出ていた。すぐさま替わりの兵士が交替するのだが、その間戦闘は不可能になる。
「あれはなんだ、いったい……帝国軍の新兵器か？」
司令塔の覗き穴から鉄人兵を見て、ガゼは叫んだ。
「判りませんな。ともかく、このままでは撤退作戦は失敗します。すでに帝国軍は側面に戦線を展開させ、わが方の撤退を阻止しようという動きを見せています」
参謀のひとりがつぶやいた。
ガゼはきっとその参謀を睨んだ。
「なんとかして味方を逃がすんだ！　そのためにこの戦車で敵軍を

引き付ける必要がある。主砲をあのロボットに集中させろ！」
「しかし照準が狂っていますので……」
「そんなことはどうでもいい。目測で発射しろ！」
ガゼの喚きに参謀は直立した。
司令塔の内部があわただしくなった。
戦車の主砲が鉄人兵に集中した。
ずばっ！
ずばっ！
ずばっ！
つぎつぎと主砲が火を噴き、砲弾が送り込まれる。
「ガゼ将軍！　敵のロボットが……！」
部下の報告にガゼはふたたび覗き穴に目を押し付けた。
「動き出した……」
ガゼはつぶやいた。

鉄人は動いていた。
どす、どすと地面を響かせ、二本の足が大地を踏みしめる。
胸の操縦席では、その振動にギャンが耐えていた。上下にゆすぶられる鉄人の座席で、それに耐えるのは容易ではない。全身を五点支持のベルトで締め上げ、操縦席が独立した衝撃吸収機構で守られてはいるが、その振動は身体を持ち上げ、脳天に突き上げるような衝撃を与えてくる。ギャンでなくては耐え切れないほどだ。ギャンはその振動を、みずからの魔力でやわらげていた。これこそがギャンがこの機械をあつかえる秘密だった。
鉄人はまるで人間のように軽々と動く。これもまたギャンの魔力と連動している。
鉄人の動力源は蒸気である。蒸気圧が全身のポンプに送り込まれ、シリンダーを介して鉄人の手足を動かしている。それを操るレバーだけでなく、ギャンは魔力を使って俊敏な動作を鉄人にあたえていた。鉄人の動力源の蒸気にふくまれる”魔素”がギャンにちからを

与えているからである。
ずばっ！
戦車の砲門が砲弾を送り込む。
狙いはもちろん鉄人である。
が、砲弾が着弾する寸前、鉄人はまるでそれを予測したかのように横にステップし、避けていた。ギャンは魔力で砲弾の進路を予見していた。
それやこれやでギャンは鉄人の性能を完全に引き出していた。
あっという間に鉄人兵は戦車に肉薄していた。
腕をふりあげ、鉄人の鉄の拳が戦車をうちすえた。
があん、とうつろな響きをたて、戦車の外板に鉄人の拳がめりこんだ。
ぐるぐると戦車の砲門がてんでばらばらの動きをしめした。鉄人の攻撃に、内部の人員がダメージをうけたのである。鉄人はその砲門のひとつを握りしめた。ぐい、と腕が動き、砲のさきがへしおれた。ぐい、ぐい、と鉄人はつぎつぎと砲門をへし折っていく。またたく間に戦車の主砲は役に立たなくなってしまった。
戦車はあわてて後退を始めた。
ぎゅるぎゅるぎゅると戦車のキャタピラが逆転をはじめる。
鉄人は身をおりかがめ、そのキャタピラに狙いをつけた。
指をキャタピラにかけ、ぐいと引く。
ばちん、と大げさな音をたて、戦車のキャタピラがちぎれ飛んだ。
片方のキャタピラがちぎれ、戦車はぐるぐるとその場で旋回をはじめていた。
やっととまり、ばらばらと戦車から人員が逃げ出していた。
ぐっ、と鉄人が身を近づける。
その口がばくりと開いた。
巨大な口には、ぎらりとひかる鋼鉄の牙がのぞく。
その奥にまるい、筒があった。
その筒から、オレンジ色の炎が吐き出される。

ぐおーっと轟音をたて、長い舌が舐めるように戦車の外板を炎があぶった。火炎放射器なのだ。
ぎゃあーっ、と悲鳴が戦車の内部からあがった。
肉の焼けるいやな匂いがたちこめる。
外を観察するための覗き穴から火炎放射器の炎が内部を炙っている。いきながら焼かれる苦痛による絶叫が聞こえてくるのだ。
その悲鳴を耳にして、ギャンは喜悦の表情を浮かべていた。
死ね！
死んでしまえ！
生きていても役に立たないが、こうして死んでおれのためにエネルギーとなってくれる。
ギャンの額の第三の目はおおきく見開かれていた。
戦車のなかで絶叫している人間の中、ギャンはひとりの人間の存在に気がついた。
司令塔から発散するある人物のイメージ。
ギャンは第三の目を使い、それに焦点をあわせた。
燃え上がる司令塔のなか、ひっしに耐えているひとりの将校。
あれは……あの顔には見覚えがあった。
ガゼだ！
まだ幼いころだったが、ミリィの父親のガゼの顔には記憶があった。ミリィが生まれるころ村を離れ死んだと噂されたが、こうして生きている。
ギャンはにやりと笑った。
あいつは確か共和国軍で将軍となっていたはずだな。
よし……。
ギャンは魔力の手をガゼにのばした。
燃え上がるガゼの制服の炎がじょじょに消えていく。ガゼはひっしになって火を消しとめようとしていたから気づかないはずだ。だがかれの顔はひどく焼けただれている。生きてはいるが、この火傷はあとをひくだろう。

ガゼはよろよろとした動きで司令塔を脱出した。部下のだれかがかれの肩をささえ、必死になって逃げていく。

ギャンはガゼを見逃した。あいつはここで死ぬにはまだ早すぎる。ここは生かしておいて、あとでおれの見せ場をつくる道具となってもらおう……。

どん、どん、と散発的な砲撃の音が聞こえてくる。

帝国軍が逃走する共和国軍に対し最後の攻撃をくわえているのだ。戦闘が終わり、ぞくぞくとギャンの鉄人兵に味方兵士らが終結してきた。

みな帝国軍の勝利を報告している。

その中でギャンの活躍は群をぬいていた。なにしろ陸の戦艦ともいえる巨大戦車を単身、戦闘不能においこんだのである。

ギャンは胸の操縦席の蓋を開き、立ち上がった。

するすると鉄人の身体をよじのぼり、その肩に這い上がるとあたりを見回す。

わあわあという部下たちの喚声が聞こえてくる。

勝利感にギャンは酔っていた。

その目が、ロロ村のはずれにとまった。

あれは……なんだ?

それはシュバルの宮殿だった。

理想宮（前書き）

シュバルの宮殿を見つけたギャンは、その秘密を悟る。一方パックは……。

理想宮

森にそびえる石の宮殿。

それを見た瞬間、ギャンの全身に電流がはしったかのような衝撃が貫いた。

見たのは初めてではない。

なにしろ十数年前からシュバルがこつこつと築き上げてきたものだ。村の人間ならだれでも知っている。ギャンもまた子供のころ、好奇心につられて見にいっている。

しかし形は異様でも、外側だけのだれも住めない宮殿にすぐ興味は失ってしまった。それきり、すっかり記憶から遠ざかっていたのだが……。

しかしいま、こうして見るとその異様さが際立って見える。石をひとつひとつ積み上げた不規則なかたち。どれひとつとして同じ線はなく、なめらかではあるが平面だけの面もひとつもない。まるで悪夢のなかから迷いだしたようなその形。

なぜこんなにも引き付けられるのだろう。

ギャンは鉄人兵から地面に降りると、停まっている装甲車に乗り込んだ。運転席の部下に宮殿へ行くよう命令する。部下はすぐハンドルをきってシュバルの宮殿へ車を走らせた。

近づくとさらに奇妙な感覚が強まっていく。

ギャンの帽子に隠れた第三の目が反応している。

見上げたギャンは目をほそめた。

あたりの”魔素”が宮殿のまわりに渦をなしている。そしてそれはより強まっているようにも思えた。

近づいてくるギャンを、シュバルが疑いの目で見ている。

「あんた、たしかシュバルとかいったな……これを作ったのか？ひとりで」

声をかけられたシュバルはびくびくと怯えの目をあたりにさまよ

わせた。
　ギャンは車から飛び降り、ずかずかと近づいた。両手をのばし、シュバルの襟に手をかける。
「答えろ！　なにか言え！」
　シュバルは目をしろくろさせた。なにしろ十数年もの間、ほとんど人と話したことがないのだ。
「どうしてだ！　どうして、こんなものを作った？　誰がお前にこれを作れと命じた？」
「い……石が……」
「なに？」
「石がささやくんだ……」
　ぱっ、とギャンは手をはなす。くたくたとシュバルは地面に腰をおろした。顔色が真っ青になっている。その手に握られた石をギャンはもぎとった。
　じっとその石を見つめる。
　表面に刻まれたかすかな渦巻き模様。
　それを見た瞬間、ギャンは理解した。
　これは……魔王の城を作っていた石だ！
　そうだ、ロロ村はもともと魔王の城が建っていた場所なのだ。だからその城を形作っていた城の破片が小石になって散らばっていても不思議ではない。シュバルはその石の魔力に反応する能力を持っていたのだろう。
　城にかけられた魔法は、あらゆる攻撃から城を守る性質のものであったはずだ。しかし勇者によって魔王が倒され、封じ込められたあとは魔力のうせた世界で徐々に崩壊するままになっていたのだ。しかし石に封じられた魔力に感応するシュバルによって、ふたたびもとの数分の一になっても魔力を吸収する形となって蘇った……。
　魔王はその魔力を高めるため、城を必要とした。城のあらゆる形態は、世界に存在する”魔素”を集め、強めるための形なのだ。
　城は魔力のレンズとなっているのだ！

そしてその焦点にあたるのが……。

石の宮殿の最上階にあるこの部分。おそらく本物の城では、ここは地上数十メートルの高さにあったことだろう。この部分に城のあらゆる場所から集められた魔力が集中し、魔王に絶大なパワーを与えていたはずだ。

これを本物にしなくては！

まだこの城は模型に過ぎない。いわば本物の城を作る際の、雛形である。

ギャンは部下のトラン中尉を呼び寄せた。

トラン中尉はすぐさまその太った身体を運んできた。

「中尉、すぐさま記録係を呼べ」

「はっ！」

「この石の宮殿を、あらゆる角度から記録しろ。写真をとれ！　いいか、どれひとつかけてもいかんぞ。つまり……これそっくりのものを、すぐさま建造できるだけの資料を作成するんだ。写真だけじゃない、測量もするんだ。とにかく綿密な記録を頼む」

判りました！　とトラン中尉は即答した。

かれが去った後、ギャンは興奮していた。

これでつぎの目標が見えた。なんとかしてこれを本物にしなくてはならない。

それにはどこに城を建造するか。

その候補地はすでにギャンの胸にあった。

それはボーラン市の王宮であった。

ギャンは凱旋した。

ロロ村の奪還、そして共和国軍の壊滅とギャンの戦果はすぐさま王宮に報告され、首都はこの若い軍事の天才を迎える準備におわれていた。

きらびやかな衣装を身につけたブラスバンドが行進曲を演奏し、その後から帝国軍が進軍していく。首都のメイン・ストリートには

華やかな勝利をはたした噂の新兵器、鉄人兵を一目見ようと大勢の群衆が押しかけていた。えんえんと続く装甲車や戦車、兵員輸送車の列の最後に鉄人兵の巨体が現れると、群衆は熱狂的な声援をおくる。

大通りに面したすべてのビルの窓が開け放たれ、紙ふぶきが舞った。

その中を、ずしりずしりと重々しく鉄人兵が歩んでいく。操縦するのはもちろん、ギャンである。鉄人兵の巨体に、見物人は一人残らずあっけにとられ、ついで熱狂的な歓呼の声をあげた。新聞記者はみなカメラをかまえ、フラッシュを焚いて一枚たりとも撮り漏らさないよう、必死になってシャッターを切っている。新聞の一面はもちろん、ギャン少佐の顔のアップである。金髪の若いハンサムな少佐の登場はセンセーショナルであった。

ロロ村を救ったのがギャンと知って、パックはホルストと一緒に見物に出かけていた。マリアも一緒である。パックの行くところ、つねにマリアも従う。

「驚いたな……あれがギャンなのかね？」

ぽかんと口を開け、ホルストは鉄人兵を見送った。ホルストはキオのサーカスで着ていた魔法使いのローブを着ていた。あれ以来、すっかりこの格好が気に入ったようで、団長に頼んで譲ってもらったのである。

「ずいぶん変わった、まるで別人ですよ」

パックの答えに、ホルストは首を横にふった。

「いいや、そんなものではない。もっと本質的なものじゃ！　顔かたちが少々変わっておっても、わしはそんなものに驚くことはない。わしが驚いたのは、ギャンのやつきわめて強い”オーラ”をまとっていることなのじゃ」

「”オーラ”？　なんです、そりゃ」

ぽん、とホルストは額をたたいた。

「ほ！　言っておらなかったかな？　”オーラ”とは、魔力を操る

ことの出来る者が身にまとう”魔素”の流れなのじゃ。強い魔力を持つものは強い”オーラ”をまとう。わしにもある。しかしあのギャンの”オーラ”は桁外れじゃ！」

「前はなかったんですか？」

「そうじゃ。わしがロロ村でギャンを見ていたときは、あのような”オーラ”はまとっておらなかった。どういうことじゃろう……いつの間に、あやつはあのような強い”オーラ”を身につけたのじゃろう？」

心底不思議だというように、ホルストは唇をかんだ。

そのときマリアが口を開いた。

「エイダに聞くべきです」

「エイダ？」

「ほら、バベジ教授のところで見た……」

あっ、とパックとホルストは顔を見合わせた。

「あの時、確かボーラン市に強い”魔素”の集中があると言っておったな。そうか、このことじゃったのか！」

うむむ……！　と、ホルストは天を仰いだ。

パレードが終わると査問会がギャンを待っていた。

「査問？　おれにか」

はっ、とトラン中尉は背筋をのばした。

なんだろうとギャンは首をかしげた。

少佐になると軍令部で個室を与えられる。士官部屋でギャンはくつろいでいたのだが、突然査問委員会が開かれ、かれを招聘すると通達したのである。

ともかく出て見るか、とギャンは立ち上がった。トラン中尉が忠実な犬のようについてくる。ギャンはちょっと眉をひそめた。

「あんたはついてこなくていいよ。呼ばれていないんだろう？」

「しかし……」

何か言いかけるトランに手をふって追い払うと、ギャンは軍令部

の通路を大股に歩き出した。途中で出会う帝国軍の将校は、ギャンを認めると一瞬気おされるような表情を浮かべる。軍帽を目深に被るギャンからは、一種異様な迫力がただよっているのだが、それが”オーラ”のせいであることはわからない。が、なにかただならないものを誰も感じるのだろう。

査問委員会の会場に着くと、衛兵が扉の両側に立っている。ギャンはその前に立ち名前を告げた。衛兵はうなずき、扉を開けた。

U字型の机にずらりと将軍級の士官が勢ぞろいしているのを見て、ギャンはやや緊張した。

「ギャン少佐かね？」

はっ、とギャンは背を伸ばした。質問されたこと以外は答えてはならない決まりである。

正面の、肩幅が広く恰幅の良い中将の階級をつけた男が両手を組み合わせた。

「当査問会はきみの昇進について質問したいと思ったのだ。それできみを呼んだのだが、ひとつ質問したい。なぜ昇進を断ったのかね？」

ギャンは少佐から大佐への昇進を断っていたのだ。打診があったのだが、ギャンは言下に断った。少佐になるのはひとつの目的達成であったが、それ以上の昇進はギャンの目的にはかなわないからだった。大佐に昇進すれば権力が得られるが、同時にさまざまな責任がのしかかってくる。これからいろいろ独自の行動をしなくてはならない今、面倒な責任など負えるものかというのがギャンの結論である。どう答えるか、とギャンは唇を舐めた。

「ぼくはまだ若い。こんな若さで大佐になった例がありますか？」

ギャンは将軍たちにとっておきの笑顔を見せた。若者特有の、無遠慮な笑い。明るく、まぶしいくらいだが、すこし軽薄な印象を与える笑顔。思惑は成功した。居並ぶ将軍たちの顔にやや安堵感が浮かんでいた。

「ぼくについている侍従のトラン中尉は二十も年上です。中尉一人

を私淑させることさえできないぼくに、ベテランの将校がしたがうと思いますか？　無理ですよ。ぼくはこのままのほうがやりやすいのです」

ふむ……、と将軍たちは肩をすくめ顔を見合わせた。

「まあ昇進の話しはこれまでにしよう。もうひとつきみに聞きたいことがあるのだ。なんでもきみは首都の防衛のため、あらたな計画を提出したそうだが、その詳細について聞かせてもらいたい。王宮の改築がそれには含まれているが……」

「提出した書類に設計図が含まれていたはずですが……」

ギャンの言葉にかれらは思い出したように書類入れを取り出した。それらをめくり、ギャンが提出した設計図をひろげる。

「その設計図にありますように、王宮の尖塔、石壁などのデザインを変更したいのです。これにより”魔素”の集中をはかれます」

「”魔素”」

「テスラ博士の発見したものです。この空中には、”魔素”と呼ばれるものが漂っており、それを利用することによりさまざまな効果があらわれるのです。あの鉄人兵にもその原理が使われており、共和国軍との戦いに勝利したのもそのせいなのです。これからの戦いに”魔素”は重要な要素となります。くわしくはテスラ博士の報告をお読みください」

「”魔素”まさか魔法のことを言っているのかね？　わが帝国軍に魔法が必要というのか？」

将軍たちは疑わしそうに言った。ギャンは首を横にふった。

「いいえ、そんな非科学的なことではありません！　確かな科学です。とにかくこれからの首都の防衛にこの計画は必要なのです」

ギャンは言葉の一言、一言にちからをこめ身を乗り出した。自然な仕草で帽子を取る。

はらりと金髪がたれ、額の第三の目があらわれた。

第三の目がぐっと見開かれた。

その場にいた全員がぽかんとうつろな目になった。

「いいですか……首都は危険なのです……魔法による攻撃を防衛するために……この計画は必要なのです……」

ギャンの声が将軍たちの耳にしみこむにつれ、かれらはまるで機械のようになんども頷いていた。

「そうだ……必要だ……」

「首都は魔法にたいして無力だ……」

「その計画を進めなくては……」

かれらはすっかりギャンによって催眠状態に陥っていた。

ギャンはにんまりと笑った。

成功だ！

かれらの後押しで、王宮の改造計画は進むだろう。そして王宮がシュバルの宮殿の拡大版となったあかつきには、増大した”魔素”を使ってギャン自身が首都を支配するのだ。

パックたちはニコラ博士のもとへ出かけた。

ババジ教授を訪れるため同行を求めるためである。

ニコラ博士の研究室のドアを開けたパックは驚きの声をあげた。

「サンディ！」

博士のとなりにサンディが座っていたのである。彼女はパックを認め、気弱な笑みを浮かべた。

「パック……」

「どうしたんだい。心配したんだぞ！」

「ご免なさい」

しおらしくサンディはうつむいた。

「あれからわしのところへ来てな、行くところがないそうなんじゃ」

ニコラ博士が説明した。うなずいたパックはサンディに話しかけた。

「ねえサンディ……きみ、皇帝陛下の……？」

はっ、とサンディは顔を上げた。

「聞いたの？」

うん、とうなずくパックにサンディはつと顔をそらせた。
「隠してて悪かったわ。そうよ、あたしは皇帝の娘。王宮から逃げ出して来たの」
「いったいどうして？」
「来月、あたし十五才になる。そうなると宮廷の慣例として結婚しなくてはならなくなるの。相手は友好国の公子か、あるいは有力な貴族の子弟、軍人相手も考えられる。でもあたしの希望はだれも聞かない。そんなのいや！　結婚はいつかしたいけど、だれかに決められるのはいやなの！」
「それでか……」
「パック、あたしいまは王宮に帰りたくない。ね、分かって。だからミリィを探すたびに一緒に連れて行って。きっと役に立つから」
「しかしなあ……」
パックは頭をかいた。
どうしようか、とニコラ博士を見る。博士はこれはおまえの問題だとばかりに眼鏡をわざとらしくハンカチで拭いていた。
ため息が出た。
「しょうがないなあ……」
ぱっ、とサンディの顔が明るくなる。
「じゃ、一緒に行っていいのね！」
きゃあ、と叫んでサンディはパックに抱きついた。
お、おいよせよ！　と、パックは真っ赤になった。
ニコラ博士が口を挟んだ。
「それでお前たち、ミリィを探しに旅に出るのかね？」
「ええ、お金もたまったし……その前にバベジ教授に会わないと」
「バベジに？」
「エイダという……」
「あの思考機械か？　あれになにか用があるのかね」
パックはギャンのことを話した。
話を聞き終わり、博士は眉を上げた。

「ギャン？　あの跳ねかえりの少年か。首都に来ているのか……」
「しかも帝国軍に入っているんです」
「あいつはたしかパックより二才年上だったな。ということはまだ十五才。十七才にならないと軍に入ることは出来ないはずだが……それが少佐。うーむ、信じられん」
「そのギャンのことを知るため、エイダの話を聞くべきだと思うんです」
わかった、と博士は自分の膝を叩いた。
「それじゃ行こう。ついておいで」
さっさと立ち上がると、大学の通路に歩いていく。
あわててその後についていくパックは尋ねた。
「ちょっとまって……ムカデは？」
「その必要はない」
ニコラはにやりと笑った。

大学の構内にバベジ教授の研究室はあった。
入ってすぐパックは驚きの声をあげた。
なんとそこにエイダがあったのだ。床を埋め尽くす蒸気のパイプ。垂れ下がる電線、壁に取り付けられた電気部品。それらの集積の頂点に、エイダの巨大な頭部が安置されている。
「やあ、いらっしゃい」
バベジ教授はパックを歓迎した。
「かれの研究は自宅でやるより、大学のほうがいろいろ設備も充実できるし、わし以外の研究者の助言も受けられる。ということで大学当局にかけあって、ここにかれの研究室を設置することにしたのだよ」
ニコラ博士は得意そうに言った。
「最初気が進まなかったのですが、こっちに来て部品もすぐ手に入るし、ほかの学部からの見学でヒントが手に入ったり、やはりこちらへ来て良かったです」

ババジ教授はこころもち明るくなったようだ。顔色が前よりいい。
「ババジくん。エイダを動かしてくれないか。聞きたいことがあるんだ」
ニコラ博士に頼まれたババジはうなずいてスイッチを入れた。すぐさま壁の装置に明かりがともり、エイダの瞼が持ち上がった。
彼女はゆっくりとあたりを見回し、パックに目を留めた。
「ひさしぶりです。パックさん」
彼女の声は研究室内に重々しく響いた。
「ミリィを探しに行かれるのですね」
パックは驚いた。
「おれ、なにも言っていないぜ」
「それくらい分かります。あなたの顔に、まえにお目にかかったときになかった決意の表情がありますから。しかしミリィのいる場所はマリアに伝えられるからわたしにわざわざ会いにいらっしゃったということは、ほかになにかお尋ねになりたいことがあるのでしょう？」
「なんでもお見通しなんだなあ！」
パックはギャンのことを話した。エイダは目を閉じた。
「そのギャンという少年ですが、あきらかに魔力を持っていると思われます。ロロ村での出来事とあわせて考えますと、おそらくヘロヘロが魔王として目覚めたとき、その属性を受け継いだのではないでしょうか？　魔王となるにはきわめて破壊的な衝動、邪悪な意思が必要ですが、ギャンと言う少年はそのふたつともヘロヘロより上だったのでしょう。それでヘロヘロの”オーラ”がギャンに移動したのではないでしょうか？　魔王の”オーラ”はヘロヘロよりギャンを選んだといえるかもしれません」
「ギャンが魔王の力をヘロヘロから盗んだ、というのかい？　それじゃヘロヘロはそのことを知っているのか？」
「それは考えられません。ヘロヘロ自身はいまでも自分が魔王だと思っているでしょう。しかし魔王としてのちからを失い、不思議が

っているかもしれません」
「これからギャンはどうなるんだろう。魔王になるのか？」
「分かりません。もともと魔王だったヘロヘロと、人間のギャンでは違いがありすぎます。人間の身体で魔王のちからを身につけるには無理があるのではないでしょうか。もしかしたら副作用があるかもしれません」
「副作用？」
パックはパレードで見たギャンの横顔を思い出した。
人が変わってしまったようなかれの横顔。

「やはり行くのかね」
翌日、パックはムカデにマリアとサンディを乗せ、ボーラン市のはずれにいた。見送りにニコラ博士とホルストが出ていた。
「いろいろ有難う。博士、それにホルストさん」
いいさ、とホルストはうなずいた。
「ミリィを見つけたら、マリアを通じて知らせてくれ。マリアとエイダは感応しあっているから、マリアの見たものはエイダも見ることが出来るから」
ニコラ博士の言葉にパックは頷いた。
それじゃ、と手をあげパックはムカデのアクセルを踏み込んだ。
しゅっ、しゅっと蒸気を噴き上げ、ムカデは六対の足を動かし始めた。
「それじゃあ……行ってきます！」
別れを告げ、パックはムカデに乗って北を目指した。
サンディはムカデの後部座席に乗り、ボーラン市をふりかえった。
遠く、ちいさく王宮が見えていた。
それを見るサンディの目はかすかに潤んでいるようだった。

理想宮（後書き）

やっとパックが旅に出ることになりました。次回はミリィに話しがうつる予定です。

投獄（前書き）

ひさしぶりの投稿です。ミリィとケイ、そしてヘロヘロの三人は町を見つけるのですがそこで大変な目にあうことに……。

投獄

ミリィ、ケイ、ヘロヘロの三人は旅を続けていた。
案内棒の指し示す方向に従い、旅をしているうち、季節が冬から春に変わるように、まわりの景色も荒涼とした荒野から、緑おおい地帯へと移っていく。どうやらエルフの魔法による荒廃の影響がない地域にきたようだった。
「そろそろ町につきたいわ。もう、何日もお風呂に入っていないんだもの」
ミリィはため息をついた。ケイもうなずいた。
「そうよねえ……そろそろ食料も補給したいし……」
エルフの携行食料はすくなくなっている。あと何日もたせられるか、とケイは心細さを感じていた。
「案内棒に聞いてみたらどうだ。どこかの町に案内してくれるかもしれないぞ」
ヘロヘロの言葉に、ミリィとケイは顔を見合わせた。
「そんな使いかた、考えたこともなかったわ」
ケイはつぶやいた。
「ちかくに町があれば、案内棒は連れて行ってくれるかしら?」
ミリィは物入れから案内棒をとりだした。手にとり、じっと見つめる。
「やってみましょう!」
ケイの言葉に、ミリィはうなずいた。
「あたしたち、近くの町に行きたいの! 教えてくれる?」
そう言って、ぽんと案内棒を空中に放り投げる。
案内棒は空中でくるくると回転し、やがて水平になると停止した。しかしふらふらとなかなか矢印がさだまらない。ミリィは眉をひそめた。
「どうしたのかしら? なんだかあたしたちに教えるのを嫌がって

いるみたい」
「まさか」
ケイは笑った。ミリィは空中で漂っている案内棒を見上げ、声をかけた。
「ね、行き先を教えて！　お願い」
案内棒はぶるぶると震え、やがてある方向をさしてとまった。
「そっちへ行けばいいのね。ありがと！」
ミリィが手をさしのべると、案内棒はすっと空中をすべっておさまった。ケイは首をかしげた。
「こんなこと初めて……。どういうことかしら？」
「いいじゃない、とにかく案内棒の指したほうに行きましょう！」
三人は歩き出した。

人が住んでいる地域に近づいたことは、周りの景色で確認できる。ただの草原だったところにひろびろとした畑が見えはじめ、砂利をしきつめた道があらわれた。収穫の季節はすでに過ぎていたので、畑にはなにも植えられていなかったが、あきらかに人手が加わっていることが判別できた。
やがて白い壁と、赤い屋根瓦のならぶ町が見えてきた。
町の中心には高い望楼のついた建物がそびえている。城である。城の望楼には青地に金色の紋章を刺繍された旗がひるがえっていた。
三人が町のなかにはいると、人々がじろじろと好奇の視線を投げかけてくる。たいていはヘロヘロにむけてである。目が合うと、ぎょっとしたような顔になり視線をそらす。
人々の身につけている服は地味な色合いの、簡素なデザインのものである。男はざっくりとしたフードつきの上着に、ぴっちりとしたズボン。くるぶしまでかくれる革靴、上着は粗末な紐で縛っている。女も同じようなデザインだが、足もとまですっぽりかくれるスカートと、黒いエプロンをかけているのが違うくらいだ。町全体に禁欲的な印象があった。

ヘロヘロを見た住民のなかにはあわてて奇妙な手つきをする者もいた。指を交叉させ、目の前でさっと横にふり、その手を背後にかくす。なにかのまじないのようだった。

ヘロヘロは渋面をつくった。

「どうやらおれは嫌われているらしいな」

ミリィとケイはヘロヘロの額から突き出ている角に目をやった。黄色い絵の具を塗りたくったような顔のヘロヘロは、どう見ても普通の人間には見えない。

ケイは宿屋の看板を見上げた。

「泊めてくれるかしら?」

三人は最初に目に入った宿屋に近づいた。

ドアを押し開けると、カウンターで店番らしき少年がぎょっとした顔でこちらを見る。

ケイは少年に近づいて話しかけた。

「あの、泊まりたいんですけど」

少年は震えだした。明らかにその視線はヘロヘロに向いているようだ。

「あ……悪魔……! お、お助け!」

真っ青になり、少年はカウンターから飛び出すと、あたふたと裏口に駆け込んだ。ばたりと音をたて、ドアを閉めると逃げ出していく。

ケイはミリィを見て肩をすくめた。

「駄目みたい……」

三人は宿屋から外へ出た。

外へ出ると、町の通りからはひと気がなくなっていた。

人っ子一人見当たらず、町なみには重々しい沈黙が支配していた。

ミリィはつぶやいた。

「どうしたのかしら?」

その時、道のむこうからぱかっ、ぱかっという馬の蹄の近づく音がする。馬は一頭でなく、数頭はいるようだ。顔を上げたミリィは

驚きの表情を浮かべた。
騎士だった。
まるで中世の絵画から脱け出てきたような、鉄の鎧を身につけた数名の騎士が、馬に乗って近づいてくる。騎士の鎧は、陽射しをうけ、きらきらと輝いていた。その手には太くて、長い槍を持っていた。騎士の側には従者らしき男が付き従っている。
騎士が馬上で手綱を引くと、馬はあがいていないないた。
逃げ出そうとしたミリィたちだったが、いつの間にか背後にも同じような騎士が馬を進め、立ちふさがっていた。
騎士の中で一番立派な鎧を身につけたひとりが槍をぐいとつきだし、鉄兜のむこうから喚いた。
「おぬしらは何者だ？　そしてそやつは悪魔か！」
槍はヘロヘロを狙っている。
ヘロヘロはふん、と鼻をならした。
「悪魔？　そんな低級なものではない。おれは魔王だ！　魔王ヘロヘロ。憶えていてもらおう」
むう……、と騎士は唸り声をあげた。
「あやしいやつ！　町の住民から報せを受けたのだが、城下を騒がした罪でお前たちは裁判にかけられる。おとなしくついてくればよし、もし抵抗するならこの場で殺す！」
騎士の言葉にヘロヘロはかっとなり、拳をかためた。唇がめくれあがり、鋭い牙がむき出しになる。その様子に、騎士はたじろいだが、すぐさま立ち直り槍を構えた。
「抵抗するかっ！」
ミリィはヘロヘロの腕を掴んだ。
「だめよヘロヘロ！　大人しくしなさい」
「大人しくだと？　こいつらおれを……」
「駄目だったら！」
ミリィの腕をふりはらい、ヘロヘロは一歩前へ進み出た。くわっ、とばかりに口を開き、鋭い牙を見せ付ける。

「おれをだれだと思っている……おれは……！」
「ば……化け物！」
そのヘロヘロの物凄い表情に、騎士の一人が浮き足立ち、おもわず手にした槍を横に薙ぎ払う。
がつん！　と、槍のさきがヘロヘロの額の角に当たった。
ヘロヘロは衝撃で膝をがくりと折った。
とっ、とっ、とっ……と、ヘロヘロはけんけんをしてバランスを崩す。
どて！　と、腹這いの姿勢で倒れこんだ。
ぽきっ……。
なにかが折れる音がした。
「ヘロヘロ！」
ミリィは叫んだ。
大変、骨折でもしたのかしら。
「うーむ……」
ヘロヘロはひと声唸ると立ち上がった。打ち所が悪かったのか、ぶるぶるっと頭をふった。
ミリィとケイは同時に叫んだ。
「ヘロヘロ、あんた！」
「おれが、何だと言うのだ」
ミリィに叩かれたショックからか、ヘロヘロはややぼんやりしているようだ。
「あんたの角……」
「おれの角？　おれの角がどうしたって？」
ヘロヘロはぴしゃりと自分の額を叩く。
と、その目が驚きのあまり見開かれた。
ぱし、ともう一方の手で額を押さえる。
「おれの角が！」
「なくなっているわ……」
ミリィがあとを続けた。

ころりとヘロヘロの角が地面に転がっていた。

三人が連れてこられたのは町の中心にそびえる城の大広間だった。なんて薄暗い部屋なのかしら。

ミリィはのしかかるような石組みで作られた天井を見上げて思った。

天井はアーチ型になっていて、ちいさな窓から外の光が差し込んでいる。しかし光源としてはそれだけで不足で、部屋には松明が灯され照明となっていた。松明に使われている油はあまり純度の高いものではないようで、じりじりと音を立てながら燃えていて、いやな匂いが部屋には充満していた。なるべくこんな場所は長いしたくないとミリィは思っていた。

あれからヘロヘロはぼんやりとした表情で、騎士たちに抵抗の気配もなく、大人しく言われるがまに連行されていた。角のとれたかれの顔を見て、ミリィは最初に会ったころのことを思い出していた。

ケイはミリィにささやいた。

「ね、ヘロヘロの角、どうしてあんなに簡単にとれちゃったのかしら？」

「判らないわ……」

ミリィは首をふった。

黙っていろ、と背後についてきた騎士が命令した。

と、広間に緊張がみなぎった。騎士たちは三人に膝まづくよう指示した。しぶしぶ三人は固い、石の床に膝をついた。

衣擦れの音がして、広間の向こうから数人の人物が入室してくる。緋色と金の彩りが目を奪う。

「枢機卿のおなーりぃ……」

ながく、尾を引くような独特な発声で従者がさけぶ。

枢機卿……？

顔を上げたミリィは、こちらを睨みつける目に気づいた。

ぶくぶくと太った中年の男が、険しい目つきでこちらを見ている。

足もとまでかくれるような分厚い生地の僧服を身につけ、顎がすっぽり埋まるような襟巻きをつけていた。その襟巻きから突き出た顔は、熱さのためか真っ赤にゆだっている。

「下郎！　許しがないのに顔をあげるとは無礼であろう。控えよ！」

ミリィはあわてて顔をふせた。

「この者たちか。報せがあったのは？」

甲高い声がミリィたちの頭上を通り過ぎる。

はっ、と背後で身動きする気配があり、騎士のひとりが質問に答えた。

「さようでございます。ダイスの町の住民より、悪魔が襲ってきたとの報告があり駆けつけますと、この者どもがいたのでございます。見たとおりひとりはあきらかに人間の女でございますが、そのほかのふたりはそうではございません。従いまして、枢機卿のお出ましを願うことになったというわけでございます」

ふむ、と枢機卿はうなずいたようだ。

「おぬしの判断はただしい。たしかにこの者どもは人とは思えぬ。黄色いそやつはあきらかに魔の属性をもっている。そして黒き肌をもつその娘も、人間とは違っておる。さて……まずは名前からあきらかにしなくてはならんな。即答をさしゆるす。おぬしら、名前を名乗るがよい」

これはミリィたちにむけて言ったらしい。

ミリィたちは顔を上げ、名前を名乗った。

「ミリィです」

「ケイ」

ヘロヘロは黙っている。

枢機卿はいらだった。

「これ、即答を許すと言ったろうが！　なぜ黙っておる？」

「ヘロヘロ」

ぼそりとヘロヘロは答えた。

「妙な名前じゃの。して、どこからまいった」

三人の間で目配せがあった。結局、ミリィがこたえた。
「エルフの館からです。ここから北にある森の中にある……」
枢機卿の眉がけわしくなった。
「エルフだと？　それは伝説ではないか。エルフなどというものが、この世にいるわけがないであろう。嘘を申すな。正直に言うのだ」
「そんなことないわ！　あたしはエルフよ！　あたしはエルフの娘、ケイよ！」
ケイはかっとなって叫んだ。枢機卿の顔が真赤になった。
「無礼者！　許しもなく発言するとは。この三人を即座に牢屋へ放り込め！」
枢機卿の命令で、その場にいた兵士たちがわっとミリィたちを取り囲んだ。無数の手がミリィたちを捕まえ、有無を言わさず連行していく。ケイの弓矢はとりあげられ、ミリィの鞭も持ち去られてしまった。階段を降りると、そこは牢獄だった。薄暗い廊下の両側に、ずらりと扉がならんでいる。そのひとつが開けられ、三人は荒々しく押し込められた。
抗議しようとしたミリィの目の前で扉がぴしゃりと閉められ、がちゃりとおおきな音をたてて鍵がかけられた。足音が遠ざかり、階段をのぼっていき、地下への扉もまた閉められる音が聞こえた。
三人は投獄されたのだ。

回心（前書き）

牢屋の中でヘロヘロはあらたなる決断をします。ヘロヘロは魔王であることをあきらめるのか？

回心

へたへたとミリィは地下牢の床に座り込んだ。
「なんてことなの……牢屋に入れられるなんて……！」
ケイはあたりを見回している。
「窓がないのね……もっとも、地下だから当然だけど」
明かりは牢屋の覗き穴からもれている僅かな灯火だけである。通路を照らしている松明の光が、かすかに差し込んでいるだけだ。したがって牢屋の扉以外は真の闇で、ほとんどなにも見えない。
のそり、とヘロヘロは一歩牢屋のなかへ歩み寄ると、手探りをしている。
「寝床だ……」
つぶやくとどさりと身を横たえた。
そのまま黙って天井を見上げている。
ミリィはヘロヘロが心配だった。
角が折れてからというもの、ヘロヘロはまるで別人のように大人しくなって、なにか考え込んでいるのかあまり口をきかない。いつも皮肉なことばかり口にするヘロヘロも癇に障るが、こうして黙り込んでいるのもそれはそれで不気味である。
「あーあ！」
ケイはため息をついて座り込んだ。
「なんでこうなるの！　あたしたち、これからどうなるのかしら？」
「たぶん、死刑だな」
闇の向こうからかえってきた声に、ケイとミリィはぎくりとなった。
「だ、だれ？」
「そこにいるのは女の子かね？　ここに若い女の子がよこされるのは珍しい」
「だから、だれなの？」

ミリィは思わず立ち上がり、叫んだ。
牢屋の向こうはあいかわらずの闇である。
いくぶんか目は闇に慣れたというもの、まだものの形を見分けられるほどではない。
くくく……と、含み笑いが聞こえてくる。
「なに、先客さ。つまりきみらと同じ、囚人仲間ってわけだ。まあ、仲良くしようや」
ケイはすっと片手をあげ、指を一本たてた。
口の中でなにかつぶやく。
と、彼女の指先がぽっと明るく輝いた。ケイの指先からはなたれた光は、すうーっ、と空中を移動してそこに留まった。ミリィはぼう然として、その光の玉を見上げていた。
次の瞬間、牢屋の中は明るく照らされた。空中の光の玉が、力強い光を放ち始めたのだ。
闇になれた目には、ほんのわずかの明かりだが真昼の太陽の光のように目に付き刺さった。
あまりの驚きに目をしばたかせたミリィは驚いてケイを見た。
「ケイ、あなた……」
「あたしだってこのくらいの魔法は使えるの。これでよく見えるようになったわ」
彼女はにっこりとほほ笑んだ。
ケイの魔法で牢屋の中は明るくなった。
牢屋は思いのほかひろい。奥行きは十メートルはあり、天井も同じくらいあった。壁はすべて石組みで、天井には太い木の梁があった。
その牢屋の向こうの壁近くに、ひとりの老人が粗末な寝床に横になっていた。老人はケイの灯した明かりに目をしばたかせ、驚きのあまり目を丸くしている。ぽかんと開いた口にはほとんど歯がなく、まっしろな白髪に胸までたっする髭をのばしていた。
ミリィは一歩、老人に近づいた。

老人は恐怖の表情を顔にうかべ、壁に背中を押し付けるようにして必死に身を遠ざけようとしている。
「よ、よるな！　魔法を使うとは、おぬしらは魔女か？」
「魔女？　あたしが？」
ミリィは首をかしげた。
「あたしはふつうの人間よ。お爺さんはだれなの？」
「わしはワフーという。ほんとうにおぬしは人間の女の子かね？」
「ええ、あたしはミリィ。そして明かりをつけたのはケイというエルフの娘よ」
「エルフ？」
老人はぽかんと口を開けた。
「エルフとはあれかね？　森に暮らし、信じられないほど長生きの種族のことかね？」
ケイはうなずいた。
「ええ、そうよ。あたしたちのこと知っているの？」
老人はうなずいた。
「むかし、わしがまだほんの子供のころ絵本で読んだことがある。しかしただのお話しだ。まさか本当にいるとは……」
ミリィはさらにワフー老人に近づき声をかけた。
「ねえお爺さん……ワフーさん。どうしてあたしたち、牢屋になんか入れられることになったのかしら。あたしたち、どんな悪いことをしたの？　いきなりこんなことになって、あたしたちどうしていいか分からないの」
ワフーは用心深くミリィたちを見つめている。
「よかったら、ここに来るまでのことを聞かせてもらえないかね？」
ミリィはことこまかに町についたいきさつ、そして城の大広間での枢機卿とのやりとりを話して聞かせた。ワフーはミリィの話しにいちいちうなずき、聞き入った。
「お前さんがた、放浪罪で投獄されたのだよ。ゴラン神聖皇国では、市民権のない放浪者はそれだけで罪びととされるからのう」

ゴラン神聖皇国……。ミリィは地理の授業で習ったことを思い出した。そんな北方にじぶんたちはきていたのか！

ケイは憤慨していた。

「旅をしていただけで罪人なんて、そんなのないわ！　それじゃあ、この国のひとたちはどうやって旅をするのよ？」

「町の領主に通行許可証を発行してもらうのだ。本人の身分証とともに、旅の目的、どこへ行くか、そのルート、そして滞在日数、自宅に帰る予定日などを申請すれば発行してもらえる。それ以外、許可証なくして旅をすれば、放浪罪として逮捕される仕組みじゃ」

とうとうと並べ立てるワフー老人の長広舌に、ミリィとケイはあっけにとられていた。説明する老人にとっては、自明のことなのでそれが不自然と言う意識はないらしい。

「まるで奴隷みたい」

ミリィのつぶやきにワフーはきっと顔を上げた。

「奴隷じゃと？　冗談ではない！　わしは奴隷などの身分ではないぞ！　もっともわしが裁判にかけられ、運がよければ死刑を免れ、奴隷として生命を保証されるかもしれんが。まあ死刑になるよりはましじゃよ」

「奴隷？　ゴラン神聖皇国には奴隷がいるの？」

質問したミリィにワフーはうん、とうなずいた。

「ああ、いるとも。正式の身分証を持った奴隷がこの町にも何人か住んでおる。この国の奴隷は身分は保証されるし、一生懸命五年か十年真面目に勤めれば、金をためて市民権を手に入れることも出来る。悪い生活ではないよ」

「奴隷なんて信じられない……」

ミリィの言葉にワフーは目を丸くした。

「あんたは奴隷を見たことないのかね？　いったいあんたの生まれはどこかね？」

「ロロ村というの。コラル帝国の……」

「コラル帝国！　あんたはコラル帝国からきたというのか！」

ええ、とミリィがうなずくとワフーは首をふった。
「それを枢機卿に話したのかね？」
いいえ、とミリィが首をふるとワフーは肩をすくめた。
「わしの忠告を聞く気があるなら、けっしてじぶんがコラル帝国の国民であることは知られてはならんぞ。もしそのことを知られたらスパイと思われるからな」
「どうしてスパイだと思われるんです？」
「知らんのか？　ゴラン神聖皇国はコラル帝国を不倶戴天の仇敵としておるんじゃ。コラル帝国の人間だと知られたら、ただではすまん」
ケイが口を挟んだ。
「ワフーさんはどうして牢屋に入れられることになったんです」
老人はくしゃくしゃと笑った。
「異端審問にかけられたのさ！　わしの主張が、枢機卿の癇に障ったのじゃな。”神秘の書”に書かれたことにわしがちょいと異論をさしはさんだことにされたのよ。なに、酒に酔ってつい喋ったことを密告されてしまってな……まったくとんだことだわい」
「その”神秘の書”ってなんです？」
「預言書だよ。ゴラン神聖皇国が将来進むことになる予言がそこには書かれているとされている。わしはもともと聖職者でな、しかしあまり信仰の強いたちではなかったのでな。わしには”神秘の書”に書かれたことが一から十まですべて信じることは出来なかった。それが悪かったのじゃな……」
ワフーの額にふかいしわがきざまれ、かれは唇をへの字に曲げた。
ふと顔を上げ、寝床で背中をむけているヘロヘロに目をやる。
「ところであんたらの連れはどうしたのかね。さっきからずっとあのままじゃが、どこか身体が悪いのかな？」
「そんなんじゃないと思うけど……」
ミリィはヘロヘロをふりかえった。ヘロヘロは寝床に横になり、さっきからぴくりとも動かない。

「ヘロヘロ、あんた眠っているの？」
いいや、とヘロヘロは返事をした。
「どうしたのよ、ずっとそんな調子で」
ほっといてくれ！　と、ヘロヘロは叫んだ。
と、ケイが唇に指をあてた。
「だれかくるわ！」
「明かりを！」
ミリィが叫んだ。ケイはさっと牢屋を照らしている魔法の明かりに近づき、ふっと息を吹きかけた。魔法の明かりはたちまち消えた。
かつーん、かつーんと足音が近づいてくる。
ミリィは背伸びして扉の覗き穴に目を押し当てた。
通路の向こうから、番人らしき人影が近づいてくる。右手には数枚の皿をもち、左手には取っ手のついた桶を提げていた。桶が揺れると、中の液体がちゃぽんちゃぽんと音を立てる。
「飯じゃ！」
ワフー老人が起き上がった。
番人はミリィらの牢屋の前にくると懐から鍵束を取り出した。がちゃがちゃと鍵束をならし、そのうちの一本を選び出す。扉を開けるのかと思ったら、膝をかがめて扉の下の部分にその鍵をつきさし、ひねった。
がちゃり、と音を立て扉の下のちいさな窓が開いた。どうやらそこから食料を差し入れする仕組みらしい。ワフーはちょこちょこと小走りに近づいた。
「食え……」
番人はぼそりとつぶやき、小窓から皿を突き出した。なにかどろりとした液体がたまっている。うれしそうにワフーはそれを受け取り、大事そうにかかえる。皿を受け取ると、番人はパンを投げ入れ、ワフーはひったくるようにそれを拾い上げた。
ミリィたちの分も番人は牢屋の中に寄越してきた。それを受け取ったミリィは、疑わしそうな顔になった。

ばたん、と小窓が閉められ、番人はまた遠ざかった。
足音が聞こえなくなるのを確認して、ケイはまた明かりを灯した。
ワフーは与えられたパンを皿の中に浸してもぐもぐと齧りとっている。
それを見てミリィは指を皿の中につっこみ、ちょっぴり掬い取って舐めてみた。
塩辛いだけで、味も何もない。うえっ、とミリィは顔をしかめた。とても食べられるようなものではなかった。ケイもまた同じような感想らしい。皿を前にもてあましているふたりを見て、ワフーが声をかけた。
「どうした？　食えんのか」
ミリィがうなずくと熱心な表情になった。
「だったらわしに寄越せ！　残すなどもったいない」
ミリィとケイがワフーに皿を渡すと、ワフーは実に嬉しそうな表情になった。がつがつと食べ始め、あっというまに底まできれいに舐めとってしまう。
ミリィは床にすわりこんだ。ケイも側に来てならぶ。
ワフーは満腹したのか、眠そうな目になってこくり、こくりと舟をこいでいる。
やがて横になり、寝息をたてはじめた。
ふたりはぼそぼそと小声で話し合った。
「どうなると思う？　ケイ。こんなところに閉じ込められて」
「わかんない。大体、人間の町にきたのだって、あたし初めてだし。それよりミリィ。ヘロヘロのことだけど……」
「そうなのよねえ……あれからなんだか、すっかり静かになっちゃって。やっぱり角をなくしたのがショックだったのかしら」
ふたりは寝床に横になっているヘロヘロを見た。
あいかわらず背中を見せ、まるで不貞寝をしているように見える。
ミリィは話しかけた。
「ねえヘロヘロ。なんか喋りなさいよ。そんなに角がとれたのがシ

ョックだったの？」
　ヘロヘロはむくりと起き上がった。
　ふたりに顔をむける。
　きわめて不機嫌そうである。
　角のあったところには、まるいあざのようなものができている。
　それをヘロヘロは指でなんども撫でている。
「おれは魔王でなくなった……」
　意外なヘロヘロの告白に、ミリィとケイはあっけにとられていた。
「魔王じゃなくなったって、どういうこと」
「あの角がなくなってから、おれは人間たちの苦痛、感情をなんにも感じとれなくなってしまった。その感情を受け取れないということは、魔法のエネルギーを吸収できなくなったということだ……くそ！　世界を支配したおれが、こんなところで！」
　ミリィは首をかしげた。
「ねえ、どうして世界を支配できないことがそんなにショックなの？」
「はあ？」
　ヘロヘロは妙な顔になった。ミリィの言うことが理解できないという表情だ。
「おれは魔王だったのだぞ！　かつて世界はおれのもとにひれふし、おれは全世界を支配していたのだ！　なのにいまはこんなちっぽけな力しかない……」
　口惜しそうにヘロヘロは拳を握り締める。
「だからどうして世界を支配したいの？」
　ミリィの言葉にヘロヘロは絶句した。
「どうしてって……そりゃ……」
　いいかけ、かれは目を白黒させた。
　眉を寄せ、真剣に考え始める。
「おれは魔力を強めた……魔力を強めるためよりいっそう人間たちの苦痛や、感情を必要とした。そのため特別に設計した城もつくら

せた……するとさらにおれは強さを増した……」
ミリィとケイはじっとヘロヘロを見つめた。
なにか重大なことがヘロヘロにおきている、そんな直感がはたらいていた。
回想しているヘロヘロは遠い目になった。
「そうだ、あのころはおれは支配欲に燃えていた。もっと沢山の感情、もっと激烈な苦痛を求めていた……それが手に入るとさらに強い魔力を求めた……」
かれは自分の手の平を見つめた。
「だがいまはあんな力は持っていない……持つことも出来ない……」
はっ、とヘロヘロは何かに気づいたように顔を上げた。
「だがどうして必要なんだ？　おれは生きている！　千年間の眠りを越えていまは生きているじゃないか！」
立ち上がった。
「それでじゅうぶんじゃないのか？」
ぼう然とつぶやいた。
「おれは魔王になる必要があるのか？」

治癒のちから（前書き）

投獄された三人は裁判にかけられ、ヘロヘロは意外な一面を見せることに。

治癒のちから

「出ろ！　お前たちの裁判がはじまる」
いきなり扉が開き、数名の男が冷たい声音でミリィたちに宣告した。全身こい灰色のローブをまとい、手には分厚い書物を掲げている。男たちの背後には、衛士が油断なく武器を構えている。灰色の男たちの姿を見たワフーは恐怖の表情を浮かべた。がくがくと震えながら、寝床から立ち上がる。
牢屋から出たミリィたちを衛士たちが隙も無くとりまいた。
「ワフーさん、この人たちは何？」
話しかけたミリィにワフーは青い顔をむけた。
「法務官どのじゃ！　わしらの罪をお裁きになられるのだ……」
「そうだ、さっさと歩かないか！」
法務官は顎をあげ、ミリィたちをうながした。
ヘロヘロには特に厳重に衛士たちがとりまき、武器を向けている。じろりとヘロヘロが睨むと、はっとばかりに緊張がはしる。ぴりぴりとした空気がみなぎっていた。
まわりをひしひしと固められ、ミリィたちは牢獄の通路を歩き、階段をあがった。
連れて行かれたのはあの大広間だった。
長い机に、枢機卿ほか法務官がずらりと居並び、ミリィたちは衛士たちにうながされ広間の中心に立たされた。
ワフーは恐怖のため、顔色は紙のように真っ白になっている。がくがくとその膝がこまかく震えていた。
なにがそんなに怖ろしいのだろうとミリィは思った。なんだか裁判と言う茶番を見せられているような気になってくるから不思議だ。
全員がそろうと、法務官のひとりがすっくと立ち上がり、羊皮紙の巻物を広げ、朗々とした声で読み上げた。
「まずはワフーの罪を裁く！　ワフーは民を導く聖職者の務めを忘

れ、あろうことか”神秘の書”について疑いの罪を犯した。これは第一級の不敬罪にあたる。当裁判所では、かれに死刑を求刑するものである！」

死刑の声に、ワフーはがくりと膝をおった。

それを見てほかの法務官が声をあげた。

「死刑はどうだろう？　罪一等を減じてはどうか」

その言葉にワフーは顔をあげた。表情に希望がもどっている。

最初に読み上げた法務官はうなずいた。

「それはわたしも考えていました。しかし不敬罪は重罪です。まずは死刑の求刑が適当と考えました。罪一等を減じるのはやぶさかではございませんが、まずは正式な罪名を確定すべきでしょう」

ここで枢機卿が口を挟んだ。

「ワフーのことはもうよい！　聖職者といっても、末端にすぎん。罪一等を減じ、奴隷の身分にすればいいではないか。それよりそこの三人のことだ！」

はっ、と法務官たちは枢機卿に頭を下げた。ワフー老人はほっとため息をついた。

枢機卿は槌をとりだし、とんと音を立てたたいた。

「判決はくだった！　その者を連れ出し、奴隷の焼印をつけろ！」

老人の両腕を衛士がつかまえ、引っ立てていく。

焼印？

ミリィはその言葉を聞きとがめた。

焼印って、何？

ずるずると引っ張られたワフー老人は広間の外へ連れ出される。

その姿が窓越しに見えた。老人は建物の広場に座らされた。広場には陶器の壷に火が燃え盛っていて、鉄の棒がつっこまれていた。衛士はその棒を取り出した。先は真っ赤に焼けている。

ワフーの両肩をほかの衛士が力任せに押さえつけている。

鉄棒をもった衛士が、その先をワフーの額に押しつけるのをミリィとケイは見た。

じゅうう……。
厭な音とともにワフーの額から煙があがる。
ぎゃあああ！
老人は悲鳴をあげ、身体が痙攣した。
がく、とかれは気絶し仰向けにころがった。その額に十字の印が焼き付けられていた。
ミリィは胸が悪くなった。
吐きそう……！
ふん、と枢機卿は鼻を鳴らした。
じろり、とミリィを見る。
「そこの娘、名前はなんといったかな？」
枢機卿の背後に控えていた従者がひそひそとささやいた。
「枢機卿様、そこの娘、名前はミリィと申すようです。出身地はまだ聞いておりませんが、言葉の様子から見てコラル帝国出身者に間違いありません」
枢機卿の眉が持ち上がる。
「コラル帝国！　するとこやつらは帝国のスパイと言うことになるぞ」
「断定はまだ早いと思われますが、もしやということも……」
うむ、と枢機卿はうなずいた。法務官のひとりが身を乗り出しささやいた。
「枢機卿殿。問題はあまりに重大でございますぞ。もしもこやつらが帝国のスパイとなると、背後関係を吐かせる必要がございましょう。この城には適当な拷問のための設備がありませぬ。やはり首都に送って、正式な尋問官に任せるべきでございましょう」
ミリィとケイは目を見合わせた。ケイは青い顔になって口を開いた。
「拷問されるの、あたしたち？」
わからない、とミリィは首をふった。
「まさかと思うけど」

窓の外を見る。ワフー老人はぐったりとなって、その両腕を衛士たちがひっぱりずると引きずっていく。引きずられるとき、老人はかすかにうめいていた。

ミリィはきっと枢機卿をにらんだ。

「ちょっと！」

彼女の声は広間に意外なほどひびいた。

枢機卿はぎくりとなって、つぎにその顔が真赤になった。

ミリィは一歩、前へ進み出た。

「あたしたちをどうするつもりなの？　返答しだいではただじゃおかないわよ！」

むむむ……！　と、枢機卿は怒りの表情になった。

「無礼者！　許しがないのに勝手に発言するとは」

「なにが無礼よ！　いきなり逮捕して牢屋に入れられたのよ。冗談じゃないわ。すぐ、あたしたちを自由にしなさい。それにワフーさんにあんなひどいことをして……焼印を押すなんて可愛そうだとは思わないの？」

ぽんぽんとミリィの舌鋒は切り込んでいく。ばん、と法務官のひとりが机を叩き、立ち上がった。

「うるさいっ！　黙らんか！　この娘の口をふさげ！」

法務官の命令で、衛士たちがわっとばかりにミリィに殺到した。手足をおさえつけられ、喚こうとした口もとを衛士たちの手がふさぐ。ケイはそれを見て、衛士にむしゃぶりついた。

「あんたたち……離しなさいよっ！」

衛士はものも言わずにケイの手をねじりあげた。

痛みに、ケイはきゃあっと悲鳴をあげた。しかし大人しくしているケイではなかった。捻りあげられた肩を支点に足を振り上げると、踵が衛士の顔を襲う。わっ、とばかりに衛士は思わずその手を離す。そのケイを抑えようとほかの衛士が襲いかかる。

ミリィもまたしゃにむに暴れ、押さえ込まれた手から逃れようとしている。

広間は大騒ぎになっていた。

たちつくす法務官、怒りの表情を浮かべている枢機卿。

そのなかで、ヘロヘロひとり黙ってそれを見ていた。その視線は冷ややかといってよく、むしろわれ関せずというたたずまいであった。

大立ち回りを演じたミリィとケイであったが、多勢に無勢完全に押さえ込まれ、ふたりとも床にうつぶせにさせられていた。ふたりとも、すっかりぐったりとなっている。

ミリィはヘロヘロを見上げ声をかけた。

「あんた、ヘロヘロ……なにか言ったらどうなの？」

ぐずり、とヘロヘロは薄く笑った。

「おれになにを言って欲しいのだ？　おれはなにもできないよ。お前たちがどうなろうと、おれには関係ない」

まあ、とミリィは口を開けた。

枢機卿は怒鳴った。

「この者どもを、首都サイデーンに連れて行け！　そこで尋問することにする！」

三人は衛士たちによって外の広場に連れ出された。

そこには後部が檻になっている馬車が停まっている。ミリィたちはその檻にあらあらしく押し込まれた。がちゃり、と檻の扉が閉まり、鍵がかけられた。

ミリィとケイは檻の鉄棒に手をかけ、あたりを眺めた。

広場にはミリィたちの押し込められた檻つきの馬車のほかに、枢機卿や法務官たちが乗り込む豪華な馬車が停まっている。兵士たちが声を掛け合い、馬車の用意をしている。枢機卿たちが衛士たちに守られ、つぎつぎと馬車に乗り込んだ。出発の準備をしているようだ。

ぴしり、と場所の外で鞭が鳴らされる音がして馬のいななく声が聞こえ、ごっとんと音を立て馬車は動き出した。

ごろごろと車輪が路面をかみ、キャラバンが出発を開始した。

ううむ……、と背後でうめく声がして、ミリィはふりかえった。
見ると、あのワフー老人が檻の奥に横になっているところだった。
ミリィは揺れる檻のなかを這うように近づいた。
老人の額に痛々しく火傷の跡がある。肌がやけ爛れ、腫れ上がっていた。
「お爺さん、ワフーさん……大丈夫？」
ミリィの声にワフーは薄く目を開けた。
「あんたか……ここはどこだ？」
「馬車の中。なんでも首都へあたしたちを連れて行くんだって」
なんじゃと、とワフーは起き上がった。
ずきん、と額が痛むのかうめきつつ手で押さえた。
「なんとか命は助かったようじゃな……やれやれ、この年で奴隷に落ちぶれるとは、なさけないことじゃわい」
じろり、とミリィの顔を見つめる。
「あんた、さっきわしらが首都へ連れて行かれると言ったな？　サイデーンに行くのか」
「そのようね。サイデーンというのが、首都の名前なの？」
「そうじゃ。ハルマン教皇の住まう聖なる都じゃよ。ということは、わしもそこへ行くことになるのか」
「ハルマン教皇？　だれなのそれ」
ワフーは呆れたような顔になった。
「お前さん、そんなことも知らんのか！　なるほど、たしかにあんたはよそ者じゃ。よろしい、教えよう。ハルマン教皇は、わがゴラン神聖皇国の象徴じゃ。わしをふくめ、すべての聖職者を統括する重要な役目を負っておられる。教皇殿は神秘のちからをもち、永遠の命を持つといわれておるのじゃ」
ハルマン教皇のことを語るワフー老人は、なにか怖ろしいものを語っているようで、声はひくくなり表情には畏敬の色がうかんでいた。
その話しにヘロヘロがなぜか興味を持った。

「神秘のちから？　それはなんだ」
ワフーはヘロヘロの顔を見た。
「教皇殿は神のちからを得たのじゃという噂じゃ。指先から電光を発し、その目はすべてを見通す。なんのささえもなく空中に浮き、逆らうものは即座の死をたまわう」
ミリィとケイは顔を見合わせた。どこかで聞いたような話ではないか？
ヘロヘロの目は見開かれた。
「ほほお、それは面白いな。まるでおれが魔王でいたころのちからのようではないか」
「魔王？　なんじゃ、それは？」
ヘロヘロは肩をすくめた。
「なんでもない。忘れてくれ」
そう言うとくるりと背を向け、馬車の外に目を向けた。
馬車は街道を走っているのか、道の両側にひろびろと草原がひろがり、丘陵のむこうに遠く山脈が見えている。夕暮れが近く、空はおどろくほど真っ赤にそまり、オレンジ色の雲には金色の残照が映えていた。

ミリィたちを乗せた馬車は三日三晩走りとおした。途中、食事とトイレのほかはミリィたちは馬車の檻に閉じ込められたままで、馬車の揺れに彼女たちは疲労困憊していた。
旅の疲れからか、あるいは額に刻印された焼印の傷がもとであるのか、ワフー老人はひどい熱で寝込んでいた。
体中びっしりと汗をかき、ときどきうわごとを口走った。
「ああ……神秘の書は間違いじゃ！　あれはわしらがでっちあげた……まさかあんなことになるとは……ウラヌス……ホーバン……約束……燃える、からだが燃える！」
老人の手をにぎったケイは首をふった。
「すごい熱……死んでしまうかもしれないわ」

ミリィは立ち上がり、進行方向にある馬車の覗き穴に顔を近づけた。

覗き穴からは馬車の御者台が見えている。御者台のむこうには、枢機卿と法務官が乗り込んだ馬車の列がながながと前方にのびている。御者は無表情に馬を御していた。

「ねえ、ちょっと！」

ミリィは声をかけた。

御者はその声にちょっと顔をねじむけた。

丸顔で、顎鬚をのばした四十代なかばの男である。

「なんだ」

「ワフーさんが病気なの。お医者を呼んで頂戴」

くすり、と御者は笑った。

「死ぬなら勝手に死ねばいい。死んでくれれば、いい厄介払いとなるんじゃないのか？　第一、あいつは不敬罪で告発されたんだぞ。死刑にならなかっただけで儲けものだよ。いいから放っておけ」

そういい捨てると、前を見た。それきり、ミリィが何度声をかけても頑なに黙ったままでいる。そのうちうるさくなったのか、かれは馬車の覗き穴を外から閉め切り、鍵をかけてしまった。ミリィが爪をかけようとどうしようと、もう覗き穴を開くことは出来なくなった。

ミリィはケイをふりかえった。

「どうしよう、薬もないし……このままじゃ、本当に死んでしまうかもしれない」

ケイも首をふった。

「あたしだって！　ああ……”治癒”の魔法を身につけていれば……」

そこまで口にして、彼女は目をまるくした。

ヘロヘロを見つめる。視線を感じ、ヘロヘロはケイを見た。

ケイは立ち上がり、ヘロヘロに詰め寄った。

「ねえ、あんた。もしかして”治癒”の魔法を身につけているんじ

ゃない？」
　ヘロヘロは驚きの色を見せた。
「おれが？　そりゃ身につけているが……」
「そのちから、ワフーさんに使って！　そして救ってあげて！」
「なにい？」
　ヘロヘロはあっけにとられた。
「おれがなぜ、こんな見ず知らずの爺いのためにそんなことしてやらなければならない？　お断りだ」
　そう言うとぷいと横を向いた。
　ミリィはヘロヘロの側に駈け寄った。
「ヘロヘロ、あたしからも頼むわ。ね、ワフーさんを治してあげて」
　うるさい、とヘロヘロは怒鳴った。
「御者のおやじの言ったとおりだ。生きようと死のうと、おれには係わりのないことだ。いいから勝手に死なせてやれ」
　その言葉にミリィはかーっ、となった。
　だん、と床を踏みしめヘロヘロの胸倉をつかむ。
「何言ってるのよ！　いいから”治癒”の魔法をつかうのよ！」
　ヘロヘロは目を白黒させた。ミリィの必死な様子にたじたじとなる。
　ミリィはぐっとヘロヘロをにらんだ。歯を食いしばり、一言一言押し出すように言葉を出していく。
「いいわね、ワフーさんを助けなさい！　これは命令よ！」
　かく、とヘロヘロは顎をひいた。そのままなにかに操られるようにワフーの側へ歩いていく。すとん、と腰をおろすと両手をのばし、老人の額にかざす。
　ヘロヘロは目を閉じた。
　ぶつぶつと口の中でなにかつぶやいている。
　その両手の手の平からぼんやりと光がともっていた。
　その光はじわじわとひろがり、老人の額から全身をおおった。
　老人の苦しそうな息が楽になり、その胸がおおきく波だった。

ふうー、とワフーの口から息が吐き出された。
汗が引き、表情は穏やかなものになった。
「熱がさがったわ」
ほっとため息をつき、ケイは宣言した。
ヘロヘロはじぶんの両手を見つめていた。
おれは他人を救った。
”治癒”の魔法で。
なぜだ?
なぜおれが他人の命を救うなど、らしくないことをしたのだ。
ミリィに命令されたからだ。
なぜ彼女の命令におれは従うのだ?
ゆっくりとワフーの瞳が開いていく。
覗きこんでいるミリィ、ケイ、ヘロヘロの顔を見つめていく。
「わしは? どうなったのだ?」
起き上がろうとして、めまいがしたのかふらりと倒れこもうとするのを、あわててケイがささえてやる。
「病気だったのよ。でも、もう大丈夫。”治癒”の魔法がきいたから」
「”治癒”の魔法?」
ワフーは口の中でつぶやいた。
そしておおきく目を見開いた。
「だれがわしに”治癒”の魔法をほどこしてくれたのかね?」
ミリィとケイはヘロヘロを見た。
そうか、とワフーはうなずいた。
「ありがとう。あんたは気味が悪い外見をしているが、じつは聖なるちからを持つ素晴らしい人物なのじゃな。ずっと勘違いしていて、すまんじゃった」
ヘロヘロの顔が見る見る真赤になっていく。
「おれは知らん! ふん、だれが人助けなんか……」
いらいらしたように立ち上がると、檻のほうへ行き、外を見つめ

た。

ごとごとと馬車は動いていく。檻からは道の風景が遠ざかっていく。旅を続ける間、馬車はふたたび人家が密集する地域にさしかかっていた。ぽつり、ぽつりと道の両側には農家や、それに付随した小屋が点在するようになり、人によって耕された畑が続くようになっていた。

ヘロヘロはずっと外を見つめ続けた。

かたん、と音がして馬車の覗き窓が開いた。

御者がその窓から覗きこんでいる。

「なんだ、爺いは助かったのか」

あんたねえ、とミリィは御者に詰め寄った。

そのミリィに御者はまた声をかけた。

「サイデーンの町が見えるぞ。見るか？」

え、とミリィは覗き窓の顔を押し付けた。

前方に、はるかに町が広がっている。

サイデーンの町だ。

ゴラン神聖皇国の首都である。

教皇（前書き）

神聖皇国の教皇が登場！

教皇

町が近づくにつれ、ケイの表情は曇っていった。
「どうしたの、ケイ？　気持ち悪いの？」
なんだか気分が悪そうだ。いまにも吐きそうな表情である。
「この匂い……たまらないわ」
匂い？　ミリィには何も感じない。
「おれも感じるぞ」
ヘロヘロはひくい鼻をひくつかせた。
「エルフという種族は、人間よりも感覚が鋭敏なのだ。ひどい匂いがあの町から漂ってくるが、お前にはまだ感じないのだろう」
やがてミリィにもその匂いが感じられた。
人間の排泄物の匂いだった。

ゴラン神聖皇国の首都ということで、ミリィは壮麗な都を思い描いていたが、じっさいに見るサイデーンの町は薄汚れた、みすぼらしい集落といった印象を越えることはなかった。たしかに町の中心部にそびえる聖堂は立派だったが、その周りの人家はまるでバラック同然で、町に近づくとぷん、と異臭が漂ってくるのには閉口した。
だが、ワフーはこの匂いにまるで平気で、ミリィたちの様子に無関心であった。
たぶん、慣れているのだ。
サイデーンの家はほとんど木造か、木組みに漆喰をぬったもので、まるで中世の都市のようだった。町を歩く人々も中世の絵画から脱け出たような感じで、生気のないどろんとした目をミリィの乗った馬車に向けるのみだった。商店もぽつりぽつりと見受けられたが、路地に面したところに並べられている商品はみすぼらしい限りで、こんなので商売が成立するのかしらとミリィは疑いの目をもったくらいだった。

馬車のなかからミリィは町の様子を見ていると、二階の窓からひとりの中年の女が陶器の壷をかかえ、なにかを地面にぶちまけているのを見た。信じられないことに、それは糞便だった。ちょうど真下に通りかかった男がそれをまともに浴び、口汚く罵った。たちまち男と女の間で口論がはじまった。

「なんであんなことするの？」

ワフーは説明した。

「家の中にトイレがないからな。壷にためておいて、外に捨てるんだ」

「でも、そんなことしたら不潔じゃないの？　病気が蔓延することになるわよ」

老人は眉をあげて奇妙な顔になった。どうやら神聖皇国の住民にとって、清潔さは無縁のことらしい。

ケイは息もたえだえといった様子で、あまりの悪臭に参っているようだった。ヘロヘロも耐えているようだが、その顔には脂汗が浮かんでいる。

ようやく人家の密集した地域からはなれ、馬車は町の中心部に向かっていった。路面はむきだしの地面から石組みに変わり、馬車の車輪の音がごとごとから甲高いごろごろという石組みをかむ音へかわっていく。このあたりに来ると風向きの関係か、悪臭は漂ってこずようやくケイとヘロヘロもほっと緊張を解いた。

馬車はゆっくりと聖堂に近づいていく。

ミリィは馬車の中からその聖堂を見上げた。

確かに巨大である。まわりの人家からすると不釣合いなほどの規模を誇っている。

いくつもの尖塔がそびえ、複雑な文様がびっしりと壁面を覆っている。それは隙間というものを恐怖するかのようで、ありとあらゆる面には無意味と思われるほどの彫刻が施されていた。

全体に砂岩で出来てるようで、造られてからはそんなに時間はたっていないようだが、すでに表面には風化の徴候があらわれていた。

全体から受ける印象は陰鬱そのものといったものであった。しかし聖堂を見上げるワフーの顔は歓喜にみちていた。

「どうじゃ、素晴らしいじゃろう？　ハルマン教皇さまの住まう聖堂だぞ！　なんだか聖なるひかりがあふれてくるようじゃないか」

ヘロヘロは皮肉そうな表情になった。

「おれの見るところ、この聖堂には人々の恨みがこめられているように思えるがな」

ワフーはきっとなってヘロヘロをにらんだ。

「なにをいう？　罰当たりなことを……なんの根拠があるというのじゃ？」

「あんな聖堂を造り上げるには、そうとうの費用と人手が必要だったのじゃないかな？　いったい、その費用はだれが負担したのかな。まさか善意の寄付なんかじゃないだろう。どう考えても税金が投入されたのにちがいない。そう考えると、これを建立するための税金は相当のものだったはずだ」

それを聞いてワフーはぐっとつまった。

「だが人々はその負担に喜んで耐えたのじゃ。敬愛する教皇さまのためだからな」

そうかしら、とミリィは思った。聖なる都にしては、人々の表情には暗い、絶望だけがきざまれているように思える。

がたん、と馬車がひとゆれして停まった。

聖堂のすぐ前だった。

衛士が馬車の檻にまわり、鍵を開いた。

「出ろ」

短く命令する。

衛士たちにうながされ、ミリィたちは外へ降り立った。

すぐさま衛士たちが槍をかまえ、ゆだんなく見張る。

出る間もなく、ミリィたちは聖堂へと連れて行かれた。

入り口の、巨大な両開きの扉が開け放たれている。先行する枢機卿らの馬車は見当たらなかった。すでに聖堂のなかへと入っている

のだろう。
聖堂の中は薄暗かった。
天井近くにはステンドグラスがはめ込まれ、そこから外光が導かれている。採光は室内を明るく照らすためというより、暗がりを強調するためのようであった。
内部に入った途端、ケイは不安そうな表情になった。
「なにかしら、頭痛がするわ……」
そう言ってこめかみを押さえた。
ヘロヘロを見ると、薄笑いを浮かべている。ミリィはささやいた。
「どうしたの、なにを笑っているのよ?」
「面白い……この聖堂は面白いぞ」
ヘロヘロはつぶやいた。
「なにが面白いのよ?」
あとで説明する、とヘロヘロはそっぽを向いた。そのヘロヘロの反応に、ミリィはかっと顔に血が上るのを感じた。
なんてことなの! まったく頭にくる!
むううんん……というような、ハミングが聞こえてくる。
なんだろうと見回したミリィは、聖堂の床を、頭のてっぺんをそりあげた僧侶がうつむき加減に歩きながら口の中でなにか呪文のようなものを唸りながら歩いているのを見た。僧侶はあちらこちらにいるようで、かれらが詠唱しているそれが聖堂の内部で反響しているのだった。
僧侶はそれぞれ手に一本蝋燭を持ち、その炎のゆらめきが、聖堂の内部の彫刻や柱をうかびあがらせ、複雑な影をつくりだすのだった。
ミリィたち四人は聖堂の奥深くに連行された。
目の前に壇があり、そこには巨大な玉座がしつらえられている。玉座にはひとりの老人が傲然とかまえ、炯炯とした双眸でミリィたちをにらみつけるようにしていた。
おそろしく年寄りであった。ひからびたミイラのようなその老人

には、体毛というのが一本もなく、眉毛すらなかった。これが教皇であろうが、そのわりに老人の身にまとっているのは粗末な麻のローブひとつきりなのが地位には似合わず、かえって不気味である。老人の目つきは狂人のそれであった。

ワフーはすでに床に膝まづき、額を床にすりつけ震えていた。

「敬愛なる教皇……敬愛なる教皇……」

おなじことを何度も口の中でくりかえしつぶやいている。

教皇の両隣には金属の甲冑を身につけた兵士が微動だにせず、立ちつくしていた。

周りを見回すと、部屋のあちこちには重装備の兵士が武器を身につけ、油断なく見張っているのが見受けられる。これが全国民に敬愛される教皇なのか、とミリィは皮肉に思った。

いけない！　いつの間にかヘロヘロの考え方に影響されたみたいだ、と彼女はわれにかえった。いまはそんなことを考えているときではない。

教皇は口を開いた。

「ゴルト枢機卿、これがおぬしが捕らえたコラル帝国のスパイかね？」

はあーっ、と最敬礼をしてゴルト、と呼ばれた枢機卿が教皇の足もとに膝まづいた。

ということは、あの枢機卿の名前はゴルトというのか。

「わたしめがすこし下調べいたしたところ、あのもののうちミリィともうす娘の話す言葉はあきらかに帝国の発音でございます。本人はそのことについてなにも証言しておりませんが、スパに間違いはございません。背後関係をあきらかにするため、首都サイデーンに連行いたしました」

うむ、と教皇はうなずいた。

じろり、と床に腹ばいになっているワフーを見る。

「この者は？　どうやら最下級の僧侶のようじゃが、こやつがなんの関係があるのだ」

ゴルトは肩をすくめた。
「どうやら手違いがあったようです。わたしは娘ふたりと、あきらかに魔物とおもわれるひとりを連行するつもりだったのですが、神聖冒涜の罪で捕らえたこのワフーというものをおなじ牢屋に入れていたのですが、つい連れてきてしまいました。もっともこの者は今回の裁きに関連することはありませんので、無視なさって結構でしょう」
「そちの判断はただしい。ことは重大である。帝国が動いているということはあきらかである。その背後関係を調べるためにも、余じきじきに取り調べることにする」
教皇はミリィたちを眺めた。
ミリィもまた教皇の目を見返した。
そのとき、ミリィは教皇が肩で息をしているのに気づいた。
病気かしら、なんだか具合が悪そうだ。
ごろごろと喉の奥の痰を飲み込むと、教皇はふたたび口を開いた。
「ゴルト、おぬしはなにか余に見せたいものがあるそうだな」
「はっ、あの娘ふたりが所持していた武器でございます」
武器だと……と、教皇は興味をしめした。
はっ、とミリィとケイは顔を見合わせた。
エルフの長老からわたされたあの武器だ。
鞭と弓矢である。
枢機卿の合図で法務官のひとりがミリィとケイの鞭と弓矢をささげ持ってきた。
受け取った教皇はそれを見て眉をひそめた。
「これが武器だというのか？」
教皇は手招きした。
その手招きに応じてあらわれたのは、逞しい身体つきの戦士だった。
「ドバル。お前はわがゴラン皇国のほこる勇士である。この武器について意見をのべよ」

教皇から手渡され、ドバルと呼ばれた男はしげしげとふたりの武器をながめた。

渋面をつくり教皇に返した。

「これは武器とはいえませぬ。かたちはたしかに鞭と弓矢ですが、これで戦うことはできませぬ」

ほう、と教皇は唇を丸めた。

「それを証明して見せよ」

そう言うとふたたび鞭と弓矢をドバルに渡した。ドバルはうなずいた。

鞭をもち、ひゅっと音を鳴らしてふりまわした。

たちまち鞭はだらりと垂れ下がり、床にぺたりと先端がふれた。

「長すぎます。それになめした革ではなく、なにか毛糸のようなもので編まれております。これでは鞭としてふりまわしても、相手にダメージをあたえることはできませぬ」

つぎにドバルはケイの弓矢を手にとり、矢を番え弦をひきしぼった。

弦がひかれると弓はぐにゃりとまがった。

その弦から手が離れると、矢はほんのすこし前へ飛び、かちゃんと音を立てて床に矢羽のほうをさきにして落ちていった。

くすくすという笑い声があたりからまきおこる。教皇の警護をしている兵士たちがドバルのデモンストレーションを見て、たまらず笑い出したものだ。

「これで敵に傷をつけるのは無理でございます。どちらもまるで武器として役に立つものではございませんな」

軽蔑したようにドバルは言上した。

ミリィはケイの様子に気づいた。

ケイの表情は怒りに満ちていた。

ドバルは鞭と弓矢をぽい、と投げ棄てた。ふたつは音を立て、床にちらばる。

そのときケイの怒りが爆発した。

「それはエルフの武器よ！　資格がないものが手にとっても、役に立たないのは当たり前だわ！　なによ、知ったかぶりをして……」
むう……、と教皇の眉間に怒りのしわがきざまれた。
「エルフだと……お前はじぶんがエルフの娘と申すのか？」
ずい、とケイは一歩前へ進み出た。
「そうよ、あたしはエルフの長、ラングとヨンの娘ケイ！　エルフはこのような侮辱に慣れてはいません」
はっはっはっと教皇は口をあけて笑った。その口には一本の歯も残ってはいない。ぽかりとうつろな空洞だった。
「エルフなど、子供のおとぎ話ではないか。そのようなこと、本気で思っているのか」
「ちゃんとエルフは実在するわ。あたしがその証拠よ！」
ふたりのやりとりを見てワフーはあわてて立ち上がり、ケイにむかってささやいた。
「これ、何を申す。教皇さまの御前であるぞ！」
じろじろと教皇はケイの姿を見つめた。
「ふむ、たしかにお前はなみの人間ではない。その肌の色といい、その耳といいもしも本当のエルフなら……」
そのとき、教皇の目に宿ったひかりにミリィは気になるものを感じた。
なんだろう、ひどく物欲しそうな目つきである。
しずかにケイに向かって尋ねる。
「エルフというのは長生きだそうだな？」
ケイはうなずいた。
「そうよ、あたしたちエルフは長生きで有名だわ。百年以上生きるのはざらだし、千年の寿命をたもつエルフもいるわ」
「そうか……もしそちがエルフなら、お前も長命なのだろうな？　いったいお前はいくつになる？」
「あたしは生まれてから二十年。もっとも魔法で眠っていた時間をくわえると千年以上ということになるけど」

教皇の目がまんまるに見開かれた。
ほそい腕をあげ、ケイに指先をつきつけた。
「この娘を捕らえよ！　いいか、逃がすでないぞ！」
電撃のように教皇の命令はその場にひかえていた衛士たちに伝わった。衛士たちはすぐさまケイのまわりに殺到し、その両腕をがっしりと掴みあげる。
「なにするのよっ！」
ケイは悲鳴をあげた。
教皇はよろりと立ち上がった。
「わしは年寄りだ。かれこれ百年ちかく生きてきて、もう寿命が尽きかけているのを感じておる。だが、いま死ぬわけにはいかぬ！　コラル帝国を倒すまで、わしは生きていかなければならぬ！」
ぎろりとケイをにらむ。
「そこに長命で知られるエルフの娘が現れたのは僥倖といっていい。わしはお前の血を欲する。お前の血があれば、わしはエルフの生命のちからを手に入れることが出来る！」
ケイの顔が真っ青になった。
ミリィはぞっとなった。
教皇はケイの血を抜くつもりなのだ！

魔法医師（前書き）

ケイと別れたミリィたちの前にあらわれた人物とは。

泣き叫ぶケイと引き離され、ミリィはワフー、ヘロヘロとともに地下の牢屋へと連行されてしまった。

牢屋に放り込まれたミリィは、冷たい扉を何度もたたき、ケイに会わせてと叫んだ。

「ケイ！　ケイ！」

ミリィの声は石の壁にむなしく吸い込まれるだけだった。

叫ぶことに疲れ、ミリィはちからなく床にぺたんと尻を落とした。

「ああ、うるさかった。狭いんだから、あまり喚かないでもらいたいな」

ヘロヘロは平然とそんなことをつぶやく。

その冷淡さに、ミリィは怒りにふるえた。

「なんてこと言うの！　教皇はケイの血をぬくつもりなのよ」

ワフーは顔を上げた。

「まさかそんなこと、教皇さまがあの娘の血をぬくなど……」

「考えられないというの？　それじゃ教皇があの場で言ったこと、ほかに考えられる？」

ミリィの言葉にワフーは黙り込んだ。

「ねえ、ヘロヘロ。教皇はケイの血を抜いてどうするつもりなの？」

ヘロヘロは肩をすくめた。

「わからん、エルフの血が何の役に立つのかさっぱりだよ」

「血の交換をするつもりなのじゃ……」

ワフーはつぶやいた。

えっ、とミリィとヘロヘロはワフーを見つめた。

ワフーは青ざめた顔をあげ、言葉を重ねた。

「血の交換じゃ！　教皇さまの血と、エルフの娘の血を入れ替えるつもりなんじゃ」

ミリィはワフーに近寄り、その胸倉をつかんだ。

「どういうことよっ！　なぜ、そんなことあなたが知っているの？」
いやいやをするように、ワフーは首をふった。
「教皇さまは年寄りじゃ。百才ちかくの年をとり、その生命は身体から脱け出ようとしておる。そんなおり、教皇さま付きの魔法医師のひとりがある方法を編み出した。その魔法医師は生命のみなもとが血液にあると考え、若い僧侶の血を抜き取り、それを教皇さまに移し変えた。するとなんたること！　教皇さまの生命が蘇ったのじゃ！　一時ではあるが、教皇さまは若返り、元気になられた……しかしその方法も一時しのぎにすぎなかった。一月もたたぬうち、ふたたび教皇さまは老衰の徴候を見せたのじゃ。そのたびに魔法医師たちは若い志願者から血を抜き取り、教皇さまの老いた身体に注ぎいれておる」
ヘロヘロは興味津々といった様子で尋ねた。
「志願者はどうなったのだ？　そしてそんな秘密を、なぜお前が知っているのだ」
ワフーは顔を手でおおい、肩をふるわせた。
「志願者は血を抜き取られたあと、死んだ。教皇への忠誠をはたすため、かれらはただのひとりも死を恐れなかった。魔法医師は、かれらの死を犠牲に教皇さまの命を永らえるという仕事を続けた。その魔法医師のひとりは、わしの兄じゃ。兄はこの仕事をつづけることに良心の呵責を感じ、わしにすべてを話して自殺してしもうた……」
ヘロヘロは眉を上げた。
「ほほお、面白い。そんなことが可能だとは思っても見なかった」
そう言うと顎をなでている。そんなヘロヘロを見てミリィはかっとなった。
「なにが面白いのよ！　ケイがその魔法医師とやらに血を抜き取られるかもしれないのよ。こうしてはいられないわ……なんとかここから脱出しないと」
「ふむ、ここから脱出するというのは、おれも賛成だな。こんな薄

暗いところにいつまでも閉じ込められたら、こっちがおかしくなる。しかしどうやって？　なにか、ミリィには考えがあるのか」

まともに問いかけられ、ミリィは黙った。そんな考えあるはずはない。いらいらとミリィは牢屋のなかを歩き回った。焦燥感だけがこみあげる。

どうしよう、こうしている間にも、ケイは……。

そのとき、牢屋のドアをことことと叩く音に全員はっとなった。

「そこにワフーはいるか？　おい、ワフー答えてくれ……」

かすかなためらいがちのかすれ声に、ワフーはぐいと顔を上げた。

「その声はホーバンか？」

かたん、と牢屋のドアの覗き窓が開いた。そこから、ワフーと同年齢くらいの老人の目がのぞいた。

「やはりワフーだったのだな？　そうだ、わしだ。ホーバンだよ！　顔を見せてくれ」

よろよろとワフーは立ち上がり、ドアの覗き窓に顔を近づけた。覗き窓からワフーの顔を確認したホーバンと名乗った老人はすこししりぞく。ついでがちゃがちゃという音がして、いきなりドアが開いた。

「ホーバン！」

叫びかけるワフーに向かい、しっ、とホーバンは指を一本唇にあてた。

「声が高い！　だれかに聞かれたらどうする？」

かれはワフーとおなじような粗末なローブをまとっていた。がっしりとした四角い顎をした、背の高い老人だった。太い眉とローブからのぞいた腕はごつごつと筋肉質で、どことなく聖職者というよりは兵士という印象が強い。ミリィのもの問いたげな表情に、ワフーは説明した。

「かれはわしとおなじ僧院で学んだ学友なんじゃ。もうひとりおったのじゃが……とにかく、よく訪ねてくれた。もう、一生会えんと思っておったわい」

ホーバンはにやりと笑った。
「おかしな三人組と、年老いた僧侶が聖堂に連れて行かれたというニュースを聞いてな、もしやと思ったのさ。わしはこっそり物影から覗いてみると、なんと昔懐かしいワフーがおるじゃないか。それでわしは牢番にたらふく酒を飲ませ、寝込んでいるすきに鍵を失敬したというわけだよ。それよりいったい、なにがあったんだ？　その額の刻印は奴隷のものだな」
ワフーは額をおさえた。額の火傷は癒えたが、傷跡は醜く残っている。
「神聖冒涜の罪に問われたのさ。例の神秘の書に疑義を申し立てたとされてな」
「神秘の書……」
ホーバンは眉をしかめた。
「あんなまがいもの書物のためわれわれ苦労させられる。あんなもの、書くんでなかった」
その言葉をミリィは聞きとがめた。どういうことだろう。しかしそれを聞くことは控えた。それよりもっと知りたいことがあるからだ。
一歩牢屋に入り込んだホーバンは、ヘロヘロを見てちょっとぎくりとなったようだったが、顔には出さずささやいた。
「いまなら牢番も眠っている。抜け出すならこの時しかないぞ。どうする？　逃げ出すならわしが手伝うが」
おろおろとワフーはホーバンの顔を見て、そしてミリィたちをふり返った。ヘロヘロは肩をすくめた。
「考えることはないだろう？　ここに一生いるつもりか？」
「しかし……しかし……」
ホーバンはいらいらし始めた。
「なにをしているんだ！　時間がないんだ。奴隷の生活がいいならそれもいいだろう。だが、おれはお前がそんな境遇になるのは我慢ならん。そこのふたりはワフーのよしみで一緒に来てもよしとしよ

う。しかしワフーしだいということには変わらない」
ワフーはふたたびミリィとヘロヘロをふり返った。ミリィは祈るようにワフーを見つめた。
その視線をみとめ、ワフーはうなずいた。
「わかった、お前さんに世話になるよ」
「よし、それならすぐにここを出るんだ！」
ホーバンはきびきびとした声で命じた。なんとなく、他人に命令することに慣れているような口ぶりだった。
ミリィは手を挙げた。
「どこへ行くのよ？　あたし、親友のケイを助けるまでどこにも行かない！」
じろりとホーバンはワフーを見つめた。
「どういうことだ？」
「じつは……」
ワフーはケイのことを語った。それを聞くホーバンの顔が赤く染まった。その表情に怒りが刻まれている。
「まだそんなことをしておるのか！　よし、その娘はなんとしても助けなければ！　もう、教皇の愚かしいあがきで、若い命が絶たれるのは沢山だ！」
ホーバンは手招きして一同を外へ出した。
あたりを見回し、かれはドアを閉めると元通り鍵をかけた。
「こっちだ！」
そろそろと足音をしのばせ、歩き出す。
通路を歩くと、いびきが聞こえてくる。
曲がった先に、ひとりの牢番が壁にもたれ、酒瓶を胸元にかかえ眠り込んでいた。
ホーバンは手に持った鍵束を牢番の腰にもどした。
「これでよし。さあ、次だ！　魔法医師がその娘の血を抜き取るつもりなら、教皇の私室へ行かなければ。しかし教皇の私室とはどこにある？　わしは最下級の僧侶にすぎん。聖堂の中は不案内じゃぞ」

「それならまかせて」
ミリィは物入れから”案内棒”を取り出した。
「ケイの居場所に案内しなさい」
ひょい、と放り投げると案内棒は空中に浮かび、ふらふらとさ迷った。やがて矢印のさきが一方を指し、空中へ留まった。ミリィが歩き出すと、案内棒は先導するように空中に浮かんだまま滑っていく。ミリィはにっこりと笑った。
「この”案内棒”についていけばいいのよ」
ホーバンとワフーはあっけにとられたようだったが、何も言わずミリィの後に続いた。
空中を漂う”案内棒”は通路が分かれているところでひょい、と一方に動き、ミリィが追いつくとすい、と滑ってつぎの分岐路へと案内する。歩きながらミリィはワフーに話しかけた。
「いったい魔法医師とはなんなの?」
ミリィの問いかけにワフーはささやき返した。
「この国には古い書物が残されているのじゃ。あまりに古いので、書かれている文字も判読できないくらいだが、それでも読み取れるところはところどころある。それには古い時代の魔法の呪文や、効果について書かれているのじゃ。魔法医師はそのうち生命の秘法について学んだ学者で、教皇さまのお命を永らえさせるため研究を続けておる。血の交換の秘法も、そのうちのひとつなんじゃ」
ホーバンはつぶやいた。
「おぞましい秘法だ……教皇ひとりのために、若い命が犠牲にされている。こんなことはやめさせなくてはならん」
「この国はどこかおかしいわ! どうしてそんなに、みんな教皇とやらを恐れるのか、あたしにはわからないわ」
ワフーとホーバンは顔を見合わせた。なにか言いたそうだったが、だまりこみ無言で通路を進む。ミリィは自分が悪いこと言ったのかと気まずくなった。
案内棒にみちびかれ、一同は聖堂の通路をどんどん進んでいった。

途中、だれにも出会わなかった。案内棒は、ひと気のない通路を選んでいるのかもしれなかった。歩くミリィは、聖堂の広さにあらためて驚いていた。

石造りの通路の壁にはところどころ松明が置かれ、あたりをほの明るく照らしている。松明に使われているのは獣脂らしく、脂が燃える匂いがミリィの鼻をうった。

いったいいまが昼間なのか、夜なのか、聖堂をさ迷ううちさっぱりわからなくなる。なにしろ窓というのがひとつもなく、松明の明かりだけがたよりである。分かれ道にくると”案内棒”はちょっと空中でとまり、すぐにあたらしい方向を指し示してくれる。

ミリィの鼻が生臭い匂いをとらえていた。

「なに、この匂い？」

ミリィはその匂いに眉をしかめた。いがらっぽく、ねばりつくようなその匂いは、奇妙に不快感をともなっていた。

「血の匂いだ……」

ヘロヘロがつぶやく。その言葉にミリィはぎょっとなった。

気がつくと足もとがぬるぬるとしている。視線を落としたミリィは総毛だった。

にちゃにちゃとした黒っぽい粘液が石の床にひろがっている。ヘロヘロを見ると、かれはうなずいた。

「そうだ、これは血だ。まだ乾いてはいないな。流されて半日くらいだろう」

「ケイ！」

叫んだミリィにヘロヘロは首をふった。

「いいや、まだそんな時間がたってはいない。ほかの人間の血だろう」

あたりを見わたしたミリィの背中にぞわぞわとした寒気がはしる。

床といわず、壁といわずあらゆるところに飛び散った血がくろぐろとこびりつき、層をなしている。乾いた血の跡は、てらてらとした光沢を見せ、そうとうに大量の血が流されていることをしめして

いた。
ふとミリィは耳をすませた。
聞こえる。
かすかなすすり泣きの声。
ほそく、高い声。どうやら泣いているのは女のようだ。
かすかだが、石造りの壁に反響してはっきりと聞こえてくる。
ケイの名前を叫ぼうとするミリィの口を、ホーバンが背後から手をまわして塞いだ。
「馬鹿！　大声をだすつもりか？」
ミリィの耳もとにささやいた。切迫したその声の調子に、ミリィは口をふさがれたまま必死にうなずいてみせた。判った、という合図だ。ふっと肩の力をぬき、ホーバンはミリィの口から手をはなした。
「行ってみよう、音をたてるなよ！」
腰をかがめ、足音をしのばせ歩く。ミリィもまた足音をたえないようついていく。
このあたりは松明の明かりもなく、あたりは真の闇といってよかった。
足先を床におろすと、足の裏ににちゃりとした粘液がこびりついてくる。その正体を知っているミリィは、こみあげてくる吐き気と必死に戦っていた。注意しないと、つるりと滑りそうである。
さらに進むと通路は奇妙な変化を見せはじめた。いままではかっちりとした平面で構成されていたのが、うねうねとなにか生物の内臓のような不規則な形になってきたのである。さらに床や天井、壁から植物の根のようなものが行く手をふさぎ、ひどく歩きづらい。
やがて前方にほのかな明かりが見えてきた。
通路は奥で右手にまがり、むこうにやや広がった空間がある。
壁に身体をすりつけるようにしてミリィはホーバンとともにのぞきこんだ。
ぎしぎしぎし……。

なにかをこすり付けているような音が聞こえてくる。
背中をかがめ、灰色のローブを身にまとったひとりの人物が、なにか真剣に作業を続けていた。その動きから砥石でなにかを研いでいるらしい。ほそい、金属製の管を手に持ち、そのさきを砥石でとがらせている。
たびたび作業の手をとめ、その人物は金属の管の先端をためすがめす点検している。顔をあげるとき表情が明かりに照らされる。つるりと禿げ上がった頭に、髑髏に皮がはりついているといったやせ細った男だった。ぎょろりとむき出された両目はどこか執念深いひかりをたたえていた。これが魔法医師なのか。
ようやく得心が行ったのか、かれはにやりと歯を剥き出して笑った。笑うとますます髑髏に似てくる。
医師のむこうに手足を縛られたひとりの娘がぐったりとなっている。
ケイだ！
飛び出そうとするミリィを、ホーバンとワフーは抑えた。
「落ち着け！」
ホーバンはミリィの耳もとでささやいた。
ケイを見つめるミリィの目に涙があふれた。
気配を感じたのか、魔法医師はぎくりと動きをとめた。
そのまましばらくあたりを探っている。
ミリィたちもまた動きをとめ、息を殺していた。
と、ミリィたちの来た方向から数人の足音が近づいてきた。ミリィたちは通路に複雑に絡まっている根にもぐりこんだ。これなら簡単に見つかることもない。
通路の奥からは松明の揺らめきが近づいてくる。
姿を現したのは、数人の衛士の担ぐ輿に乗った教皇その人であった。教皇をみとめたワフーの身体に震えがはしる。輿に乗った教皇はぐったりとやや横座りの格好になって運ばれている。衛士が手にかかげる松明のあかりで、教皇の横顔が不気味に照らされていた。

近づく教皇に、あわてて魔法医師は膝まづき両手を組み合わせ拝礼する。教皇はちょっとうなずいた。

衛士が輿をおろし、教皇は衛士の肩にすがって立ち上がった。ぎろりと目を剥いて縛られているケイを見つめる。

「用意はできているか？」

教皇のつぶやきが室内に響いた。医師は頭を下げた。

「できております。すぐにでも血液の交換にとりかかれましょう」

そうか、と教皇はうなずいた。手を挙げ合図をすると衛士たちは最敬礼をして部屋を出て行った。部屋には教皇と魔法医師ふたりが取り残された。医師は教皇の手を取り、ケイの隣りにある寝台に横たえさせた。天井を仰いで横たわる教皇は目を閉じた。

医師は厳粛な表情になって教皇とケイの間にさまざまな器具を置き、儀式の準備をはじめた。

さまざまな管、陶器の壷、壁には魔方陣のような奇妙な文様を描かれたタペストリー。血液の交換という作業にかかわらず、ひどく原始的な準備である。医師はタペストリーに向かい、複雑な手つきと呪文を唱え始めた。その声に反応して、あかりがまたたき、タペストリーの魔方陣が鈍くひかりはじめた。そのひかりはゆらゆらと離れていき、なにかの生き物のようにうねり、教皇におおいかぶさった。その瞬間、教皇はかすかにうめく。

ふたたびケイがすすり泣いた。その声に、魔法医師はひょいとそちらを向き、また歯をむき出した笑いを見せた。ひょこひょこと歩くと器具を手にし、ケイに近づき話しかける。

「そんなに泣くでない。な、お前はこれから教皇さまにその血をささげるという名誉な役目につくのだぞ」

ケイはいやいやをする。医師はにったりと笑いながらケイの顎を指でつまんだ。

「それにしても見事な肌の色をしておる。黒檀のように真っ黒で、艶があって……」

顔をすりつける魔法医師に、ミリィはもう我慢ができなくなった。

ホーバンの手をふりほどくと、彼女は猛然と走って室内に飛び込んだ。
「やめなさいよっ！」
ミリィの叫びに医師はあわててふりかえった。
「ミリィ！」
ケイが叫んだ。
迫るミリィを見て、かれの顎ががくりと下がった。怒りをみなぎらせ、ミリィは医師に掴みかかった。その手が首筋にかかり、医師はぐえっと悲鳴をあげた。ミリィの腕にちからがはいると、かれの目が飛び出んばかりに見開かれる。怒りにまかせ、ミリィはぐいぐいと医師の首をしめあげ、ふりまわした。
「や、やめてくれ！　し、死んでしまう……！」
悲鳴をあげる魔法医師をミリィは突き飛ばすようにして手を離した。医師はげほげほと咳き込み、その目にうっすらと涙がにじんだ。
ホーバンとワフーが乗り込んできて、医師はぼうぜんと顔を上げていた。ヘロヘロは悠然と部屋へ踏み込んだ。ケイのいましめを、ワフーは解いてやった。彼女は膝をおり、座り込みそれまで縛られた手首に血行を戻すためさすった。そんなケイにミリィは声をかけた。
「ケイ、気分はどう？」
「有難う……疲れているけど、大丈夫」
「そう、よかった！」
ミリィの顔がやわらんだ。そしてぐっとばかりに魔法医師をにらみつけた。その手に握られている金属の管に目を留める。
ミリィは医師の手から金属の管を取り上げた。
「これは何？　何のためなの！」
魔法医師はおろおろと狼狽をかくせない。
「教皇さまにこの娘の血を移し変える器具じゃ！　か、返せっ！　お前たち、衛士に見つかれば死刑じゃぞ！」
「そんなこと、させるもんですか！」

叫んでミリィは横たわっている教皇を見た。
教皇はしずかに横たわったまま、何を考えているのかこの騒ぎにぴくりとも動かない。
その目が開かれた。ゆっくりと首を動かし、ミリィを見上げる。
唇がめくりあがり、微笑した。
その微笑に、ミリィはなぜかぞっとなった。
「こんなところまで潜り込んで、なにをしようというのだ。帝国の娘よ」
教皇の声はうつろに響き、ミリィの耳朶をうった。ミリィは必死の思いでその声に抵抗していた。教皇はじっとミリィを見つめている。その目は奇妙なひかりをたたえていた。その目に見つめられると、なんだか全身の力が抜けていくようである。
かれの上半身がもちあがる。片手を寝台につき、やや上目がちにミリィを見つめるその瞳は怪しくひかっていた。
教皇の口が開き、言葉をつむぎだす。
「お前たち……わしの命令に従うのだ……わしこそ永遠の支配者……すべてを統べる統括者……わしの命令は絶対なのだ……」
ワフーがかくんと膝をおり、座り込んだ。お許しください、お許しくださいと両手をあわせ教皇を拝んでいる。ホーバンはぐっと全身にちからをこめ、教皇の目の光に耐えていた。ケイはぽかんと口をあけ、見つめている。
そのなか、ヘロヘロだけが皮肉そうな笑みを口の端にうかべていた。
「子供だましだな。そんな催眠、おれにはきかんぞ」
ヘロヘロの声はひやりとするほど冷静で、ぼうっとなっているミリィの意識にナイフのように切り込んだ。
ミリィははっとなった。
怒りが彼女の行動を大胆にさせる。
「なにが命令にしたがえ、よ！」
叫ぶとずかずかと教皇に近づき、粗末なローブをぐっとつかむと

胸倉をつかんだ。
教皇の顔に驚愕がひろがった。
うつろな表情でいたホーバンは目が覚めたような表情になるとローブのなかから一振りの短刀を取り出した。その短刀を教皇に見せつけ、つぶやく。
「こうなったら教皇を人質にするしかないな」
教皇は恐怖の表情を見せた。

教皇の正体（前書き）

ゴラン神聖皇国の教皇の正体があきらかに！

教皇の正体

ホーバンはハルマン教皇のほそ首にナイフを突きつけ、魔法医師は両手を縛り上げ、紐の端を自分の腰に巻きつけた。こうしてふたりを引っ立てつつ通路に向かう。

「どうするつもりなんじゃ。こんな真似をして、わしは老人じゃぞ！」

「どうするもこうするもない。ここを逃げ出すまで、人質としてふるまっていただく」

ふうむ、と教皇はホーバンの顔を見上げた。

「おぬしの顔には見覚えがある。その僧服で判らなかったが、たしかわしの配下の兵士長のひとりにおぬしそっくりの男がおった……」

ホーバンは苦い笑い顔を見せた。

「そうさ、その兵士長がおれさ。だがおれはつかえる主人を間違えた。おれはゴランの国に忠誠を誓ったが、人の生き血をすする吸血鬼につかえたつもりはない！」

ホーバンの言葉を耳にしてなぜか教皇はにやりと笑った。

「お前たち、どこへ向かうつもりなんじゃ？」

「ロロ村よ！」

ミリィが叫んだ。

そうだ、ロロ村だ。生まれ故郷に帰る、それがいまの彼女の願いだと、ミリィはあらためて確信した。

胸の中にロロ村の光景がよみがえる。

懐かしい家、隣に見えるのはパックの家だ。

ああ、あそこで薪を割っているのはパックの父親のホルンじゃないか。となりでは、できたてのシチューをもって母親のメイサがにこにことほほ笑んでいる。

いつの間にかミリィはロロ村に帰ってきていた。

「お母さん！」

ミリィは叫んだ。
その声にメイサが顔をあげた。
ミリィの顔を認め、驚きの表情になる。
その目にみるみる涙が盛り上がった。
たまらず、ミリィもメイサに駆け寄った。
ふたりは家の前で抱き合った。
「ああ、ミリィ……ミリィ……どんなに心配したか……！」
「お母さん、お母さん！」
ミリィも母親の顔に自分の頬をおしつけた。母親からは懐かしい匂いがする。
「ミリィ……」
だれなの、じぶんを呼ぶのは……。
「ミリィ、目を覚ませ！」
なんだ、ヘロヘロの声じゃないか……目を覚ませって……。
「しっかりしろ！　お前は聖堂から一歩も外に出てはいないぞ」
はっ、とミリィは目をまたたいた。
薄暗い石壁の奇妙な部屋。壁には魔方陣が描かれたタペストリーがかかっている。
そう、あの魔法医師の部屋だった。
ミリィはあたりをきょろきょろと見回した。
教皇があの寝具にねそべり、さきほどの姿勢のまま奇妙な表情をうかべている。なんだかあてがはずれた、といった顔だ。教皇はゆっくりとヘロヘロを見つめた。
「なぜじゃ……なぜ、お前にはわしの催眠がきかん？」
ヘロヘロは背中をそらせた。
「当たり前だ。おなじような技は、おれも昔さんざん使ってきた。お前のやろうとしていることなど、先刻承知さ」
教皇は目を細めた。
「お前はただの人間ではないな……名前を聞かせてもらおうか」
「おれの名前はヘロヘロという」

「ヘロヘロ……」
教皇は驚愕の表情になった。ヘロヘロは興味深げな目つきになった。
「おれの名前に聞き覚えがあるのか？　お前の正体こそ知りたいな。お前、本当の教皇なのか？」
なぜだか教皇はうろたえた。
「ば……馬鹿なことを……わしが本物のハルマン教皇であることはそこにいる男が証明してくれるではないか！」
そう言って教皇は膝まづいたままのワフーを指さした。ヘロヘロはワフーに顔を向けた。
「ワフー、あんた、この教皇が昔の教皇とおなじ人間だと思うかね？　あんたはこの国で長いこと聖職についていたそうだな。教皇のことも良く知っているはずだ。どうだ、昔の教皇といまここにいる男がおなじ人間だと、断言できるのか？」
ぽかん、とワフーは口を開けた。
「し、しかし、しかし……そこにおわすかたが、教皇さまでないとすると……わしは……」
ワフーは震える両手で顔を覆った。
「ヘロヘロとは古代語で”恐怖”を意味する。転じて”魔王”の意味ももつようになった。そうさ、おれは魔王だった……千年前、聖剣に封じ込められるまでは……」
「魔王……」
教皇はおうむがえしした。
ヘロヘロはきっと教皇をにらんだ。
瞳がくわっ、と見開かれ、両目からは内側からひかりがたたえられる。
「正体をあらわせ！　いつまでもおれの目をごまかせると思うな！」
指先をつきつけ、ヘロヘロは全身にちからをこめた。
目に見えないエネルギーが指先から教皇に放射されているようだった。

ぶるぶると教皇は全身を震わせはじめた。たらたらと顔全体から脂汗がふきだす。

ぐぐぐぐ……！

教皇はうなりつつ背をそらしはじめた。

どた！　と、教皇は寝台から床にころげおち、その場でのたうちはじめた。

「正体をあらわすんだ！」

ヘロヘロは怖ろしい声で命令した。ヘロヘロの両目からはなたれるひかりは金色のまばゆいものとなり、室内をあかあかと照らし出す。そのひかりをまともに浴びた教皇は苦しげな表情になり、どたん、ばたんと全身を床にうちつけ咆哮をあげていた。

ひいひいひいとあえぎつつ、教皇は顔を上げた。

！

驚愕の表情がその場にいた全員にうかんだ。

そこにいたのはもはやハルマン教皇とよばれる老人ではなかった。全身緑色の鱗におおわれた、人間というよりは爬虫類を思わせる人間に似たなにかであった。

「魔物だわ……」

ケイがつぶやいた。

しゅうーっ、と魔物は息をはきだし、口もとから先端がふたつに割れた真っ赤な舌をへらへらと出し入れしている。その目は真っ赤で、瞳孔は縦に裂けていた。

「どうして判った……わしの正体を、どうして見破ることが出来る……お前は、本物の魔王なのか……」

とぎれとぎれに魔物はつぶやいた。その声はすでに人間のものではなく、口の構造からか、発音にひどく苦労しているらしかった。

「そうさ、おれは魔王ヘロヘロ。かつてはその名で呼ばれたこともある」

ヘロヘロはなぜか憂鬱そうにつぶやいた。
「だがいまは魔王の力をうしない、ただのエルフの姿をかりたヘロヘロさ……。さて、お前にすこし聞きたいことがある」
「なんだ？」
「お前はいつ、教皇とすりかわった。どうしてそんなことが出来た？」
ぐうぐうぐう……と、魔物は奇妙な声で笑い声をたてた。
「数ヶ月前のことだ……季節は夏だったな……おれはお前とおなじように千年前、突然魔法がこの世界から消えうせたとき、身体を失った……。なにしろおれたち魔物は”魔”のちからで生きているからな、魔法が消えうせれば死ぬしかない。しかしおれたち魔物のうち、知能のたかい魔物はじぶんの魂を身体から引き離せることができる者がいたんだ。おれは魔法が消えうせたとき、このままでは身の破滅とさとり、魂だけ抜け出しこの世にとどまることにした」
夏……ミリィはロロ村の山で聖剣が折れたときのことを思い出した。
そう、あれからこの世界には魔法のちからが蘇ったのだ。
「それからおれは千年のあいだ、この世界にさ迷うこととなった。身体をうしない、魔法のちからもなくなったおれにはただ魂としてさ迷うしかなかったのさ。ところが、突然魔法のちからが世界にもどってきた。そのちからで、おれは人間に憑依するちからを取り戻すことができた。もっとも、憑依する相手の同意が必要なのだが……そのとき、この国のハルマン教皇に目がとまったのさ。教皇は死の恐怖におびえていた。死を免れるなら、なんでも取り引きに応じるとおれに約束した。おれは教皇の身体を手に入れた。約束どおり、教皇のいのちはおれの魔法のちからでよみがえることとなった。だが、おれは教皇の記憶、人格まで手につけないとは約束しなかった。おれは教皇の記憶、人格をおいだし、かわりに自分の魂を吹き入れることにしたんだ……」
「それでは教皇を殺したのもおなじではないか！」

ワフーが叫んだ。
魔物はじろりとワフーをにらんだ。
「なにが悪い？　おれは教皇の身体を生かすことに同意しただけだ。記憶、人格までそのままにしてやるとは言っていない」
にやりと魔物は笑った。その顔にはかつての教皇のおもかげがわずかに見てとれる。
魔法医師はつぶやいた。
「それでは血の交換の儀式は……あれはなんだったのだ」
わはははは……と、魔物は高らかに笑った。
「そこの兵士長はおれを吸血鬼と呼んだな。そうだ、おれは吸血鬼なのだ！　おれのちからを維持するには、人間の血が必要なのだからな！　たっぷり人間の生き血を吸わせてもらったよ！　そこのエルフの娘の血はおしかった……一度、エルフの血を吸ってみたいと思っていたのだからな……」
がくぜんと魔法医師は崩れ落ちた。じぶんのやってきたことが、教皇を生きながらえさせることではなく、吸血鬼の命を永らえさせることに気づいたのだ。うずくまった魔法医師はしばらくそのまま震えていたが、やがて顔を上げた。その顔には決意の表情がある。
「それではわしはこの魔物のためにゴランの国民の命を……！」
苦悶の表情になった魔法医師は立ち上がると、もうぜんと壁に走り出した。
額を壁にまともに打ち付ける。ごつ！　という、にぶい音が響く。ずるずると壁にもたれかかった魔法医師の額はふたつに割れ、脳漿があふれていた。医師はその場で絶命していた。かれは自殺していた。
あっけにとられているミリィたちの前で、吸血鬼はくすくすと笑っていた。
「あはははは！　死におったか！　まったく人間という生き物は、簡単に死ぬなあ……」
おのれ！　と、ホーバンは身構えた。

「殺してやる！　ハルマン教皇のかたきだ！」
ひいひいひい……教皇の身体をのっとった吸血鬼は腹をかかえて笑っていた。
「いいのかな、そんなこと言っている場合かな？」
「なに？」
吸血鬼は大声をあげた。
「衛士ども、なにをしておる？　曲者だぞ！」
どやどやと多数の兵士の足音が近づいた。教皇を運んできた衛士たちが、決死の表情で駆け込んでくる。先頭を走ってくる隊長らしき男が叫んだ。
「教皇さま、ご無事で……むっ！」
隊長はミリィたちを見て緊張した。さっと腰の剣に手をかける。一同のなかで武器を手にしているホーバンに数名の兵士が殺到し、剣をつきつけた。ホーバンはあきらめて手から武器を放り投げた。
がちゃん、と短剣が床に落ち音を立てた。
「お前たちは何者か？　ここでなにをしておるっ！」
「こやつらはコラル帝国のスパイじゃ！　わしの命を狙いにやってきたのじゃ！　隊長、はやくこやつらを逮捕せよ！」
あっ、とミリィは声をあげた。
さきほどまでの魔物の姿から、吸血鬼はハルマン教皇の姿に戻っている。叫ぶ声も、ハルマン教皇の声だ。
隊長は部下たちに命じた。
「聞いたであろう！　教皇さまのお命を狙っておる曲者どもを捕らえよ！」
「待って、この教皇は偽者よ！」
ミリィは叫んだ。
隊長はあっけにとられた。
「なにい？　馬鹿なことを……」
「本当なの！　あたしたちの前で魔物が正体をあらわしたんだから！」

指さす先の教皇の姿を借りた吸血鬼はうすく笑っている。かれは口を開いた。

「まったく……なにを言うかと思うと夢のようなことを……さあ、なにを愚図愚図しておるのか？　さっさと逮捕するのじゃ」

はっ、と隊長は返事してミリィたちに迫った。剣をつきつけ怒鳴る。

「大人しく縛につけ！　抵抗するとこの場で殺してやる」

ミリィは唇を噛みしめた。ヘロヘロをふりむき、尋ねる。

「どうしてこの人たちには正体がわからないの？　あんたのちからでなんとかならないの？」

ヘロヘロは肩をすくめた。

「催眠のちからがよほど強く作用しているのだろうな。ホーバンやワフーはもともと教皇の教えに疑問を持っていたからおれのちからで正体を見抜けたが、こいつらは骨の髄から神聖皇国と教皇に忠誠心をささげている。解除するには苦労しそうだ」

「じゃあやりなさいよ！　このままじゃあたしたち、また牢屋に逆戻りよ」

やれやれとヘロヘロは教皇をふりかえる。

ヘロヘロの凝視をあび、教皇はぎくりと緊張した。あわてて隊長に命じる。

「こやつらを殺せ！　危険分子であるぞ！」

教皇の命令をうけ、隊長はびくりと剣を振り上げた。

さっとヘロヘロは隊長をふりかえり、目をほそめた。

ぎらぎらとした眼光がヘロヘロの両目からほとばしった。

そのひかりを浴び、隊長は凝固した。

からん、と手にした剣が床に落ちる。他の兵士も目がうつろになり、だらりと両腕がさがりまるで戦いの態勢にはない。教皇のすがたを借りた吸血鬼もぼんやりとしているのみだ。

さっとホーバンはその剣をさらって構えた。

早口でささやく。

「いまだ！　逃げ出すんだ！」
弾かれたようにミリィとケイは手を取り合って走り出した。
ふりかえるとヘロヘロ、ホーバン、ワフーもそそくさと逃げ出してくる。
その時になってようやく吸血鬼は立ち直ったようだ。
「曲者が逃げるぞ！　追うのだ！」
どたどたとあわただしく乱れた足音が聞こえ、兵士たちが血相をかえて追いかけてくる。
ミリィは物入れから”案内棒”を取り出した。
「どこに逃げたらいいか教えて！」
叫びながら案内棒を投げ上げる。
投げ上げられた案内棒はくるりと空中で一回転すると、さっとミリィの前にすべりこんで矢印の先を向けた。
ミリィたちは案内棒に導かれ、走り続けた。

逃走（前書き）

ひさしぶりの投稿です！　しばらくおやすみしていましたけど、また再開するつもりです。

逃走

聖堂内部の騒ぎは、外にも影響をあたえていた。

いかめしい顔をした衛兵が多数聖堂前に集結し、あわただしい人の出入りは、サイデーンの町の人間にもあからさまで、いったい何事かと噂しあった。

衛兵の隊長は焦っていた。

教皇じきじきの曲者を捕らえよという命令を受けたのにかかわらず、肝心の相手が地に潜ったか、天に駆け上ったか、さっぱり行方が判らないのである。

「どうだ、見かけたか？」

「いいえ、どこにもいません！」

部下の報告を受け、隊長はくそっ！　と、拳をかためた。

赤い髪の少女、そして黒い肌のおなじとしごろの少女、異様な外見の男、それにふたりの修道士。これだけ目立つ一行なのに、まるで手がかりが消えてしまっている。

教皇の治療をおこなう魔法医師は、治療室で事切れていた。壁に真新しい血の跡があり、魔法医師の額は無残に割れている。おそらく曲者たちが殺害したに違いない。やつらの真の狙いはあきらかにハルマン教皇の暗殺である。となると、犯人はゴラン神聖皇国の仮想敵である、コラル帝国の人間という結論になる。

現在ゴラン皇国は戦備の拡大を行っている。きたるべきコラル帝国との戦いに備えてのことだ。あと数ヶ月もすれば皇国の軍備は帝国の戦力をうわまわるとの報告も受けている。

しかしこういうことがあったなら、戦機を逃すわけにはいかず、帝国への宣戦布告も早まる可能性がある。

現在皇国は、スリン共和国のバタン大統領との秘密攻守同盟を結んでいる。

情報によればスリン共和国の軍隊と、帝国の軍隊が遭遇戦を行い、

共和国は手ひどい敗北をしたという。分析によると、帝国はその戦いで新兵器を投入したらしい。

隊長は決意を固めた。

こうなったら、帝国への宣戦布告の時期を早めなくてはならぬ。

「お前たちは引き続き帝国の暗殺者たちの捜索を続行せよ。わしは教皇様に至急面会する必要がある！」

はっ、と部下たちはきびきびとした敬礼をして走り出した。

かれらの捜索計画を話し合う声を背中に、隊長は聖堂内部へ急ぎ足で進んでいった。

「宣戦布告、とな？」

謁見の間で、教皇に化けている吸血鬼は顔をあげた。

かれを本物の教皇と信じている衛兵隊長はかつん、と踵を打ち合わせ背筋を伸ばした。

「はっ！　曲者はあきらかに帝国のスパイと考えられます。教皇様を暗殺に送り込んだ帝国の意図はわがほうの軍備の増強を察知し、その前にわが国の動揺を狙ったものと思われます。帝国にはあらたな新兵器の噂もあります。敵の軍備がととのうのを待って宣戦布告すれば、我が軍の不利になるでしょう。よろしく、ご考察たてまつりたく伏して願います」

ふむ……、と教皇はうなずいた。ふっと横を向く。

表情には邪悪な笑みが浮かんでいるのだが、衛兵隊長にはわからない。

教皇は顔をもどした。

「よろしい……許可する！　衛兵隊、そして神聖騎士団、すべての兵士を招集せよ！　予備役も含めて、総力戦を覚悟せよ！」

隊長は感激していた。

「有難うございます！　わが兵士らは最後の一兵まで帝国を打倒するまで戦うでありましょう！」

くるりと回れ右をして、引き下がろうとする隊長に教皇は声をか

けた。
「待て！　この戦いはわが皇国の重要な戦いとなる。異例ではあるが、最前線にこの教皇がじきじきに親政するであろうと部下たちには伝えよ！」
「教皇様が……そ、それは……」
「いかんか？　ん？」
「い、いえ……！　教皇様みずからお出ましになれば、部下たちは感激するでありましょう。わが国の必勝、間違いなしであります！」
隊長の目はうるんでいた。さっと回れ右をして、謁見の間をあとにする。
誰もいなくなるのを確認して、教皇の唇の両端がくいっ、と持ち上がり、悪魔の笑みを浮かべた。
「くくくく……戦争か……！　結構、結構！　戦いで多くの血が流される。その血はわしの飢えを満たしてくれるだろう……。ここしばらくは、腹を減らさないでいられるというものだ」
かれはいつまでも笑い続けていた。
もはや、あの小娘どものことなどどうでもよくなっていた。

しん、と静まりかえった通路を、ミリィたちは進んでいた。通路は暗く、狭く、そして床にはぬるぬるする苔がびっしりと生えているため、足を速めるわけにはいかない。うっかり急ぎ足になれば、苔に足を取られひっくり返りそうになる。しかし通路には人影がなく、またその気配もなかった。長年、使用されていない通路らしい。
「噂では聞いたことがあった。聖堂の地下には秘密の通路があるということだったが、本当のことだったのだな」
ホーバンはひそひそとささやいた。
その必要はないはずなのだが、つい小声になってしまう。
先頭にはミリィとケイがふたり歩いている。ミリィの目の前には”案内棒”が浮きながら道を指し示し、ケイは魔法の明かりを灯し、行く手を照らしている。

”案内棒”はミリィを導き、この通路を探り当てていた。兵士たちの追跡を逃れるとき、”案内棒”は壁を示すだけでいっこうにほかの方向を示そうとはしなかった。それを見てホーバンが”案内棒”の矢印の先を探ると、かすかな突起を見つけていた。その突起を押すと、壁がぐるりと回転し、この通路を見つけたというわけである。

あぶないところだった。

ミリィたちがこの隠し通路に入って、壁を元通りにしたその瞬間、兵士たちがもとの通路を駆け抜けていたのである。もうすこし遅ければ、発見されているところだった。

「この道はどこへ通じているの？」

ミリィの質問にホーバンは首をかしげた。

「さあ……噂だけしか知らんから、どこへ通じるかは……」

「頼りないわねえ」

ケイの言葉に、ホーバンは苦笑した。

彼女はすっかり元気を取り戻していた。まったくエルフの娘というのはタフである。

「水の音が聞こえるな」

ヘロヘロがつぶやいた。

え、とミリィは立ち止まった。

みな足を止め、耳を澄ませる。

「本当だわ……水の音よ！」

ケイがささやく。

ミリィにも聞こえていた。

前方から、かすかな水音が聞こえてくる。

ふたたび歩き出す。

もう、はっきりと聞こえてくる。

ぴちゃぴちゃ……

ぴちゃぴちゃ……

水音が通路の中で反響し、ケイの灯火で壁に波紋が踊っていた。
「見ろ、船だ……！」
ワフーが指さした。
通路の先には地下の桟橋が広がり、暗い水面に一艘の船が浮かんでいる。桟橋に船はもやいを結び付けられている。船はちいさく、五人が乗り込めばいっぱいである。
「櫂もあるな。多分、非常のときこの船を使って脱出するために用意してあるのだろう」
「それがあたしたちに役立ったってわけね！」
ケイがうきうきと叫んだ。
ヘロヘロはうなずいた。
「まったくだ、これで逃げ道ができたというわけだ」
ミリィたちは船に乗り込んだ。
ホーバンは顔を上げた。
ワフーだけ、桟橋で突っ立ったまま、乗り込む気配をしめさない。
「どうしたワフー。乗らないのか？」
「うむ、わしはここに残るよ」
ホーバンは眉を上げた。
「どうしてだ？　ここで逃げんと……」
ワフーは首をふった。
「わしは逃げるわけにはいかん！　ハルマン教皇様があのような化け物に乗っ取られていることを知って、どうして逃げることができようか……。わしはあの化け物の正体をあばき、欺かれているわが国の人間を救いたいのじゃ！」
「お前になにができるっていうんだ？　相手は魔物だぞ」
わかっている……と、ワフーは肩をおとした。
ぐっと顔を上げ、拳をかためる。
「しかしこれはわしの義務じゃ！　わかってくれ……」
「そうか、それならおれも残ろう」

ホーバンの言葉にワフーはさらに首をはげしくふった。
「いかん！　お前は、彼女たちを守ってコラル帝国へ連れ戻してやってくれ……。これはお前だけしかできん仕事じゃ。第一、どうやって彼女たちがこの国を通過できるか、お前の助けなしでは無理じゃよ。わしらを助けてくれた彼女たちをこんどは我らが助ける番じゃ。だからお前はミリィたちと一緒にここを脱出するのじゃ」
ホーバンはため息をついた。
「わかった……そうまで言われては、断るわけにはいかんな。お前がどうあの魔物の化けの皮をはがせるか、見当もつかないが、お前にまかせよう」
「判ってくれたか」
ワフーは晴れ晴れとした笑みを浮かべた。
うん、とうなずきホーバンは船のもやいを解いた。
ざばり、と櫂が水面をかき、船が桟橋を離れる。
桟橋でワフーは手を振りながら離れていく。
「気をつけるんだぞ――」
ホーバンの声に、ワフーは何度もうなずき手を振り続けていた。

船が視界から消えて、ようやくワフーはもとの道を辿り始めた。
目指すは聖堂である。
なんとしてもあの吸血鬼の正体をあばく決心だった。

ざばり、ざばりと櫂が水面をかく。
櫂を持つのはホーバンとヘロヘロだ。こんなちから仕事、とヘロヘロはぶつぶつ文句を言ったが、ミリィに睨まれて黙ってしまった。
くそ、なんでおれがこんなことを……。
ヘロヘロは不平たらたらだった。
あのエルフの館から旅に出て、いいことはなにもなかった。
幻をあやつる公爵の館ではあやうく絵画に閉じ込められるところだったし、このサイデーンの町でも同様だった。あの”案内棒”に

導かれてからというもの、あやうい場面ばかりに遭遇していた。
はっ、とヘロヘロは顔をあげた。
もしかしたら”案内棒”はわざとおれたちに危険な場所を示しているのかもしれない。
だとすればいったいなぜ？
「もっとちからをこめて漕ぐんだ」
となりに座るホーバンが叱った。
あわててヘロヘロは櫂を握る手にちからをこめる。
さらにヘロヘロは考えをめぐらせる。
そういえばあの「吸血鬼」。あいつは魔法が消えうせた世界で”魂”だけの存在になって生き延びたと言っていたな。そして魔法が蘇って、その魔法のちからを利用して教皇に乗り移ったと……。
「そうか、そういうことか！」
ヘロヘロは大声をあげていた。
前方にすわるケイがびくっと背筋を伸ばし、ふりむいた。
「な、なによいきなり驚かさないでよ」
「いったい、なにがそういうことなの？」
ミリィの声にヘロヘロは肩をすくめた。
「おれの魔法のちからがなぜ失われてしまったか、考えていたんだ」
「それでわかったの？」
「そうだ。あの吸血鬼の言葉ではっきりと判ったんだ」
「どういうこと？」
「あいつは”魂”だけの存在になって生き延びた、と言っていたな」
「ええ」
「”魂”とはなんだ？　やつの記憶、魔法、特性、すべてが肉体から離れた状態だ。おなじことがおれにもおきたに違いない」
「？」
「封魔の剣が折れ、おれが千年ぶりに外に出ることができたとき、魔法のちからがおれの身体から離れてしまったのかもしれない。魂から魔法のちからだけが分離してしまったんだ」

ミリィは目を瞠っていた。
「じゃ、いまは……」
「もしかしたらどこかの人間におれの魔法のちからが乗り移っているのかもしれないな。おれの魔王としての”魂”とともに……」
全員、ヘロヘロの言葉に凝然となっていた。

王宮（前書き）

今回からサンディのストーリーになります。彼女はボーラン市に戻る決意をする。

王宮

ペラはコラル帝国最北端に位置する港町である。

波止場には船が常時、数隻停泊し、荷揚げ作業が朝早くから夕方まで続いている。停泊している船はほとんどが風帆船だが、最近では蒸気機関を搭載した外輪船が増えている。海上交通の要衝でもあり、さまざまな地域からの流入者が集まってくるこの町ではよそ者はあまり目立つことはなかった。

パックはこの町にきて、北の大陸へとわたる便船を探していた。問題はムカデだった。

マリアの蒸気を補給するためにも、ムカデの機関は必要で、そのムカデを運ぶ船を探すのが問題であった。船長に交渉しても、ムカデを見せたとたん、怖れをなして断られることが常であった。いくらムカデがただの機械だと説明しても、その姿から迷信的な恐怖をふりはらうことができないらしい。

その間サンディは町の宿屋に宿泊していた。

パックが船をさがして町を歩き回っているので、彼女は比較的暇をもてあましている。

もっとも町を散策するだけで結構楽しい。

船乗りがおおいのはあたりまえだったが、この町を経由してさまざまな地域へ出発する旅人もおおく、さまざまな人種が見られるここでは、店もいろいろな商品を扱っている。

航海に必要な六分儀、望遠鏡、コンパス、そして地図。サンディは北の大陸にむかうことを考え、地図を数枚購入していた。またポケットにおさまるほどのちいさい望遠鏡を見つけ、買い求めていた。パックには黙っていたが、隠し持っていた宝石や首飾りなどを質屋を見つけて売り払ってもいた。質屋の親爺は、サンディが持ち込んだそれらをびっくりするほどの高額で引き取ってくれた。

そしてレストラン。

北の大陸からの旅人がおおいせいか、この町のレストランでだす料理は香辛料をきかせた、口のなかが焼けそうに辛い料理を出す店がおおい。そういった料理は口にあわなかったが、デザートには夢中になってしまった。

口が肥えた客が立ち寄ることがおおいのか、デザートもこったレシピのものがある。

どういう料理法で出来ているのか見当もつかないほどだ。その中でもサンディのお気に入りは、あつあつの薄皮にたっぷりの砂糖をかけ、その薄皮にナイフを入れるとびっくりするほど冷たいアイスクリームがかくれたケーキである。ナイフをいれて顔を出すアイスはすこしも溶けていなく、これでどうやって熱い薄皮を被せるのだろうとサンディは首をひねった。

その日もサンディはいきつけのカフェでお茶を頼み、店で定期購入している新聞をひろげ紙面に目を通していた。ペラには一週間おくれで首都から新聞が届けられる。やはりボーラン市の出来事は気になるのだった。

ある記事にサンディは目を引き付けられた。

一面にでかでかと活字が躍っている。

読み進む彼女の眉間に皺がきざまれていく。

ばさり、と紙面をおき、サンディは立ち上がった。

つぶやく。

「まさか……こんなことって！」

ぎゅっと新聞紙を握りしめ、サンディは支払いもそこそこに店を飛び出した。

宿屋に飛び込むと、パックが待っていた。

パックはサンディの顔を見つけると、ぱっと表情を輝かせた。

「サンディ、やっと船を見つけたよ！　ムカデを乗せても良いって船長がいたんだ！　これで北の大陸へ渡れる」

「そう、おめでとう。でもあたし、行かない。ボーラン市に戻らな

きゃ」
パックの口があんぐりと開けられた。
「で、でも……きみ……？」
「ごめんなさいね、パック。どうしても戻らなきゃいけないわけができたのよ」
そう言うと彼女はパックにカフェから持ち出した新聞を差し出した。
「読んで！」
なんだい、と言いながらパックはサンディに渡された新聞紙を手に持ち、読みすすめた。
はっ、と顔を上げる。
「これ、きみのことかい？」
裏返しにして紙面をひろげる。
それにはこうあった。

――『コラル帝国のプリンセス、サンドラ嬢婚約へ！』

見出しがあり、記事の詳細がある。
それによると王宮でひらかれた舞踏会でプリンセスが恋に落ち、婚約することになった、とある。結婚は来月で、盛大な結婚式がひらかれ、それには王宮に住まう王族、そして各地の貴族がまねかれるという。
サンディは首をふった。
「まさか！　でもそのプリンセスの写真にあるのは、エイラっていう女の子で、あたしの幼友達なの。あたしが王宮を飛び出したんで、エイラが身代わりになったんだわ。前にも言ったけど、王宮の娘は十五才になったら結婚しなくてはならないの。だからあたしの身代わりに、彼女が結婚させられることになったんだわ」
ふうん、とつぶやきながらパックはさらに紙面を読み進めた。
と、パックもまた眉間に皺をきざんだ。

「プリンセスの相手は帝国軍の若き少佐で……その名前は！」
顔をあげる。
「ギャン少佐だって！」
パックの様子にサンディは尋ねた。
「知っている人？　どんな人なの、ギャン少佐って？」
「おなじ村の人間だ」
「パックの村？　たしかロロ村っていったわね」
「ああ、あいつが結婚の相手だって？　とんでもない！　あいつが相手なら、なにか陰謀があるに違いないよ」
「陰謀？　どうして……？」
パックはギャンのことを語った。
ロロ村でのふるまい、そしてミリィへの片思い、ヘロヘロを苛めたことなど。
サンディは鼻をしかめた。
「あまり女の子に好かれる性格の男の人、って感じじゃないわね」
「当たり前さ。村では取り巻きがいたけど、それもあいつの父親の金が目当てだったんだ。みんな、あいつを嫌っていた」
「エイラが可哀相……きっと無理やり婚約させられたんだわ……だからあたしが帰らなきゃならないのよ。彼女をたすけなきゃ！」
パックはうなずいた。
「わかった。それじゃこれから船に行って、契約をキャンセルしなきゃ」
サンディは驚いた。
「どうして？　せっかく契約できたんじゃない」
「だってこれからボーラン市に戻るなら、おれが送ってやらなきゃ……」
いいわよ、とサンディは首をふった。
「ボーラン市に向かう駅馬車があるから大丈夫。あなたはミリィをさがすっていう大事な仕事があるんじゃない。それにキャンセルしたら、あとでほかの船が都合よく見つかるとは限らないわ。あたし

はひとりで行くわ。ごめんなさいね」
パックは眉をさげた。
「そうか……判ったよ」
そこへマリアが入ってきた。
彼女はサンディの手荷物を用意していた。
「お話しはうかがっておりました。サンディ様のお荷物をまとめておきました。いつでも旅だてます」
サンディは首をふった。
「あんたって、気がきいているのね！」

翌朝、ペラの町はずれにある駅馬車の乗り場で、パックとサンディは別れを惜しんだ。
空は晴れ上がり、日差しが町を照らし出し、気温はぐんぐん上昇している。乗り場にはサンディのほか、ボーラン市に向かう乗客が乗車の順番を待ち、混雑している。その中でムカデと、金色のボディを持つマリアはさすがに人々の注目を集めていた。
サンディはパックに革袋を押しつけた。
「これ、あげる！」
なんだい……と、革袋の中身を確認したパックは表情をくもらせた。サンディに革袋を差し出す。
「これは受け取れないよ」
中身はサンディの持ってきた装身具の残りだった。純金の指輪や、宝石のちりばめた腕輪など、売り払えばひと財産はあるだろう。サンディは首をふった。
「いいわ。持っていってよ。まさかのときに役に立つわ。それにあたし、あんたには黙っていたけど、一部は質屋で換金しちゃっているのよ」
早口にそう言うと、彼女は馬車に乗り込んだ。マリアが彼女の手荷物を後部の荷物入れに運び上げる。御者が乗客にたいし、出発の時刻がせまっていると叫んでいる。パックはあっけにとられていた。

ぴしり、と御者が鞭をならし、馬がいななく。
サンディは窓から首をつきだし、叫んだ。
「さようなら、いろいろあなたには世話になったわ！　ミリィって娘を見つけたら、よろしくね！」
サンディ！　と、パックは叫び返した。革袋を返そうとムカデに飛び乗る。
しばらく馬車と併走したが、サンディは受け取ろうとしなかった。やがてムカデを停め、パックはちいさくなっていく馬車をぼうぜんと見送っていた。
彼女の革袋を握り締め、つぶやく。
「こんなの、どうすりゃいいんだ？」

席に落ち着いたサンディはあらためて新聞に目を通していた。
「プリンセス結婚……ですか？　ほほお、おめでたいことですな」
となりに座った商人らしい老人が、サンディの手に持っている新聞をのぞきこんで感想を口にした。新聞の一面には記事と、エイラの写真が掲載されている。エイラの写真には「プリンセス・サンドラ」とキャプションがつけられている。
写真を見てサンディは彼女が眼鏡をかけていることに気づいていた。
あの娘、眼鏡なんかかけていたっけ、とサンディは首をひねっていた。
馬車は八人乗りで、サンディのほかにとなりに座る老いた商人。子供づれの五人家族。そしてボーラン市の大学に入学するという学生だった。話題はプリンセスの結婚というニュースだった。
サンディの持っている新聞は一週間遅れなので、あと三週間で結婚式である。
頭の中でサンディは日をめくった。
馬車でボーラン市に向かっても、最低二週間はかかる。市内に入って一週間たらずしか余裕はない。なんとかこの結婚話をやめさせ

なくては、と彼女は決心していた。
だが、彼女の頭の中に肝心要のことは思い浮かばなかった。
それはエイラがこの結婚を望んでいるか、いないかということであった。

旅は順調に進み、途中天候は雨に数日降られたが、それでも馬車は着実にボーラン市に向かっていた。
旅の途中、馬車は宿に立ち寄り、乗客は宿泊することになる。
宿屋にも新聞は届けられていて、その度にサンディはプリンセスの結婚についての最新情報を手に入れていた。
結婚式の準備は着々と進められているようだった。
招待客のリストも掲載され、そうそうたるメンバーの名前が書き込まれている。
それを読んで、サンディは唇を噛みしめた。
これでは結婚そのものを白紙に戻すなんてかなり難しい。もし、これを白紙に戻すことになったら、王宮の面目まるつぶれである。
記事には補足として、王宮の改築についても記されていたがサンディはあまり興味がなく、その部分は読み飛ばしていた。
だから馬車がボーラン市の市内にはいって、はじめて王宮を目にしたときひどく驚いた。
王宮はひどく様変わりしていたのである。
城のまわりには工事のための足場が組まれ、大掛かりな改築工事が行われていた。
優美だった城のシルエットは、いまやグロテスクといえるほど改造され、あちこちにパイプがうねっている。城の前面の庭に巨大な蒸気機関が鎮座し、煙突からはもくもくと黒煙が吐き出されていた。
周囲にあった森は切り倒され、地面が露出していた。
まるで巨大な工場のようだった。
サンディは我知らず涙ぐんでいた。
これは彼女が知っていた王宮ではない！

まっすぐ城に向かうつもりだったが、サンディはそれを思い直し、情報を仕入れることにした。

それには帝国大学に行かなくてはならない。

そこにニコラ博士がいるからである。

再会（前書き）

エイラが再登場！　彼女は思いがけないことをサンディに言います。

再会

サンディを見て、ニコラ博士は驚いた顔をした。
「どうした、きみは確か……！」
「どうしても帰らなくてはいけなくなったの」
ふむ、と博士は頭をなぜた。
「例の、プリンセスの結婚のことかね？」
「ええ、新聞で読みました」
「市民はよるとさわるとあの話題だ。正直、わしも驚いている」
まあ、かけなさいとニコラ博士は研究室の椅子をすすめた。サンディは博士と向かい合う形になって腰をおろす。彼女は博士の研究室を見わたした。
前よりいろいろな実験器具や、本が増えているようだ。全体として雑然としているが、どことなく居心地の良い雰囲気が溢れている。
「それで、どうするつもりかね？　これからの予定は？」
サンディは膝で組んでいる両手に目を落とした。
それについては何も考えていなかった。ただ、夢中で戻ってきたのだ。
やがてサンディは口を開いた。
「戻ってきて、王宮を見ました」
それだけでニコラ博士には通じたようだ。博士はうなずいた。
「見たのかね。うむ、改築工事はきみが旅立ったすぐあとに着工されたんだ。この帝国大学にも、協力を要請されたよ」
「協力？」
「そうだ城の内部に蒸気の配管を張り巡らせるための設計を依頼された。だが、そんなことしてどうするのかな。風呂場を新設するつもりかな？」
そう言って博士はくつくつと笑った。ひとしきり笑ってすぐ真面目な顔になった。

「それよりもうひとつの噂が気になる。なんでも北のゴラン神聖皇国が軍備を増強しているという噂だ」
「それはもしかして……」
「うむ、ゴラン皇国は帝国に宣戦布告するかもしれないということだ」
サンディは胸騒ぎを感じた。パックが向かうのはそのゴラン皇国である。
なにもかもいっぺんに動き出しているようだった。
ともかく、はやくエイラに会わなくてはとサンディは決意をかためていた。

ニコラ博士のもとを辞して、サンディは城へ向かった。
近づくにつれ、王宮の異様な光景の細部が見えてくる。
城のあちこちに太い蒸気のパイプがのたくるように這い、前庭には巨大なボイラーが鎮座している。ボイラーからは巨大な煙突が数本つきだし、もくもくと黒煙が噴き上げていた。
目が痛い。煤煙がたなびき、あたりを薄暗くしている。見回すと、通行人たちはみな鼻と口をおおう大きなマスクと、目を守るためのゴーグルをかけていた。サンディは近くの商店でそれらを売り出していることに気づき、自分用にそれを買い求めた。それを身につけると、ようやく人心地がついた。
商店の親爺は、サンディに手渡しながらぼやいた。
「まったく、王宮の連中はなにを考えているんだろうねえ？　毎日、ひどいこの煤煙と臭いで、昼間の間は息もできやしねえ」
そういう親爺もまたマスクとゴーグルをつけている。
サンディは城の裏側へとまわった。
城の裏側にはふかい堀が取り囲み、水がたたえられている。
その堀をのぞきこみ、サンディは愕然となった。
サンディのおぼえている城の堀は、澄んだ水面の美しいところだった。冬には白鳥が翼を休め、夏にはカワセミの姿が見られるとこ

ろだった。しかしいま目の前にひろがるのは、どんよりと濁り、ひどい臭いをはなっているどぶ川であった。水はどろりとたゆたい、表面には日の光をうけてぎらぎらと光る油膜がはっている。

ひどい……！

なんてことをするの。

あまりの変貌に、彼女は拳を握り締めた。

裏側には深い森がひろがっている。もともとは狩猟場で、春と秋の二回、狐狩りをおこなう王族専用の森である。しかし狐狩りにたいする市民の批判の声の高まりと共に、いまはそれも行われることもなくなり、いまは公園となっている。森の梢を見上げたサンディは、木の緑がくすんでいることに気づいた。王宮から流れてくる汚染した空気にやられたのだろう。

森の中に進むと、かつて狐狩りをしていたころ、王族たちの休憩所として設けられた東屋が見えてくる。白い大理石の柱にささえられた丸天井に、精緻な木彫の長椅子がしつらえてあった。

サンディはふきんに誰もいないことを確認してその東屋にはいった。

床には寄木細工のような模様のタイルが敷き詰められていた。さまざまな色模様の石版を組み合わせたもので、東屋が作られて百年以上たつが、いまでも鮮やかな色調を見せている。

彼女はその床に膝まづいた。

タイルのひとつに手を置き、横にずらす。

ごとり、と音がしてタイルの一枚が動いた。持ち上げると、隠し階段が現れる。

これが彼女が王宮から脱出するさいに使った、秘密の通路なのだ。

するりと隠し階段に降りると、サンディはタイルを元に戻した。

とたんにあたりは真っ暗になる。手さぐりで壁を触りつつ、彼女は歩き出した。

道は一本道で迷うことはない。

この隠し通路は何の目的で設けられたのだろう。おそらく古い時

代、コラル帝国が絶対君主制のもとにあったころ、陰謀で王族が王宮を逃げ出すときの用意に作られたに違いない。やがて帝国は絶対君主から、議会制に制度が変わり、その必要はなくなったのだが。

足元の感覚から道は下り坂になる。サンディの想像では、たぶんこの通路は城をかこむ堀の下をくりぬいて通じているのだ。やがて下り坂は終わり、道は平坦になった。

爪先にのぼり階段が触れた。

それをとんとんと登っていくと、突き当りのドアに手が触れた。ノブを探ると、それを廻した。

出たところは城の地下室である。ドアは壁の模様に隠され、そこに隠し通路に通じるドアがあることが判っていないと、容易に発見されることはなかった。

地下室から通路に出ると、サンディは自分の部屋を目指した。

そこにエイラがいるはずだった。彼女がじぶんの替え玉という役目をつとめているなら、かならずそこにいる。

自分の部屋の前にきて、サンディは我知らず緊張しているのを感じていた。

部屋のドアを開く。

円形の部屋の中心に天蓋つきのベッド。ぎっしりと本が詰め込まれた巨大な書棚。書き物をするための筆記台。古典様式でつくられた暖炉。なつかしい自分の部屋だ!

その部屋の窓際に、ひとりの少女が座っていた。

くるぶしまでたっする長いスカート、たっぷりとした袖のブラウス。レースの飾りがついた帽子。みなサンディの持ち物である。

少女はサンディの気配に気づき、こちらをふりむいた。

黒ぶちの眼鏡のむこうの、茶色の瞳がおおきく見開かれた。

エイラだった。

驚愕の表情がのぼる。

立ち上がる。

「サンディ……!」

つぶやき、一歩前へ出た。
たまらずサンディも駆け寄った。
ふたりの手が触れ合う。
次の瞬間、ふたりはおたがいの身体を固く抱き合っていた。
嗚咽がもれる。
ようやく身を離し、サンディはエイラの顔をのぞきこんだ。
変わった。なんとなく、サンディの知っていたエイラではない。
どことなく大人びた雰囲気がある。
なにを言っていいのかわからず、笑顔の中に戸惑いが浮かぶ。
思い切ってサンディが口を開いた。
「新聞を読んだの」
はっ、とエイラの顔に血が上った。
そう……、とうつむく。
ふたりは窓際に腰かけ、向かい合った。
「どうなの？　あの結婚は強制されたものなの？」
サンディは問い詰めた。エイラの返答しだいでは自分が一肌脱ぐつもりだった。
エイラは首をふった。
「いいえ、あたしが望んだの」
がくり、とサンディの顎がさがった。
「そ、そ、そうなの……？　あなた、あの……その……」
「ギャン少佐よ」
エイラが相手の名前を口にした。
「で、でも……あなた……あたしの……」
「そう……あたしはあなたの替え玉。あなたが王宮を出て行ったので、内務大臣があなたが帰るまで替え玉になるよう頼まれたのよ。でもサンディが帰ってくれたので、ようやくお役御免ってわけね」
エイラの表情が変わった。眉がせばまり、険しいものになる。
「あたしはギャン少佐を愛しています！　あのかたと一緒に暮らせるなら、なんでも耐えることができるわ！　たとえ替え玉だとして

も、あたしあなたの代わりに皇女として勤めることだってやれる。だからサンディ、あなたはこれから平民の娘として自由な暮らしを満喫していいのよ。ね、そうしましょう」

彼女はじょじょに身を乗り出していった。口調が必死になる。

「ねえ、サンディ。あなた、王宮の暮らしは窮屈だっていつも言っていたでしょう？　平民の娘だったらどんなにいいだろうって、あたしに言っていたわね？　それならいい機会じゃない？　あなたは平民の娘になる。あたしは皇女となって、愛する人と結婚する。おたがい望みがかなうのよ」

サンディは両手で頬をおさえた。

まさか、こんなことって！

どうしたらいいのだろう？

幻影（前書き）

サンディは王宮で危機にあう。ギャンが登場し、彼女を誘惑するが……

「ねえ、サンディ。わかってくれるわね？　あたし、あの方となんとしても結婚したいのよ。あたしに皇女の位を譲って！」

じりじりとエイラがサンディに迫ってきた。サンディは目を瞠り、あとじさった。こんなエイラははじめて見た。

「エイラ、あなた本気で言っているの？」

「本気よ！　この恋はだれにも邪魔されない。たとえあなたにでも……」

彼女の表情は狂気、そのものだった。

「ねえ、エイラ。そんなことは出来ないわ。そりゃ、あたしも平民の娘になれたらいいだろうなあ、なんて夢想したことは認めるわ。でもこれはどうしようもないことなの。みんなを騙すことになるのよ！」

「それがなによ！　あんたは勝手だわ！　じぶんだけ外の暮らしを楽しみたいとあたしにあんたの役目を押し付けて……」

ふいにエイラは意地の悪い笑みを浮かべた。

「でももう、手遅れだけど……あなたはもう、プリンセスなんかじゃないわ！」

それはどういう意味？　といいかけたサンディは口を閉ざした。

その時、部屋のドアにノックがしたのである。

はっ、とサンディとエイラは扉の方向を見た。

「失礼いたします。ご学業の時間でございます」

聞こえてきたのは中年の女の声である。

サンディの家庭教師、タビア女史の声だ。　がちゃり、と扉が開き、タビア女史のやせた顔があらわれた。

あいかわらず地味ないでたちで、黒髪をきりりと後頭部でまとめている。女史は室内に眼をやり、驚きの表情をあらわにした。

「あなたは……」

「タビアさん……あたし、戻ってきたの」
女史はサンディの顔を見てぽかん、と口を開いた。
「戻ってきた……？」
サンディはタビア女史の前に進み出た。
もう、何年も彼女の顔を見ていない気がする。彼女の学習の時間はいやでいやでしかたなかったが、いまでは懐かしさがこみあげてくる。
「ごめんなさい。勝手に城を飛び出たりして、迷惑をかけたわね」
タビア女史は無表情にサンディの顔を見つめていた。驚きの表情はすでに消えうせ、いつもの冷静そのものの態度にもどっている。
彼女は口を開いた。
「あなたはどなたですか？」
えっ、とサンディが驚く番だった。
タビア女史はさらに言葉を重ねた。
「失礼ですが、わたしにはあなたに見覚えがございません。サンドラ様のお部屋にいらしているということはご学友のおひとりなのでしょうか？」
たじたじとサンディはあとじさった。
「タビアさん、あなた……？」
そのときエイラが鋭く声をかけた。
「その娘、あたしの部屋へ無断で入ってきたのよ！　きっとお父様の命を狙う、暗殺者かなにかだわ！」
タビア女史の顔が険しいものになった。
「暗殺者！　なんということでしょう！」
さっとサンディの側をすり抜け、エイラの前にまわりこみ、彼女をまもるようにたちはだかった。
「曲者！　許しませんよ！　衛兵！　衛兵！　すぐ来るのです！」
タビア女史の叫び声に応じ、廊下の方向からばたばたという数人の足音が聞こえてきた。
はっ、とサンディは廊下に顔をつきだした。曲がり角から人影が

壁に映っているのが見えた。
逃げなくては！
なにがなにやら判らなかったが、異常なことが起きていることは感じられる。
彼女は廊下に飛び出し、走り出した。
背後からタビア女史の「曲者！　曲者！」という声が追いかけてくる。
逃げるサンディの目に涙があふれてきた。
なぜ、タビア女史はじぶんのことを知らないというのだ！

いつの間にかサンディは宮廷の奥深くへ進んでいた。衛兵たちの足音も聞こえない。どうやら振り切ることに成功したらしい。この宮殿の内部については、サンディはすみからすみまで知り尽くしている。したがって、追っ手をまくことなど彼女にとっては朝飯前のことだ。サンディはじぶんがどこにいるのか、あたりを見回した。
中庭に面したところにいることに気づき、サンディは皇帝の執務室が近いことを思い出した。
皇帝。
つまり彼女の父親である。
お父さま……。
その言葉を胸でつぶやくサンディの目に、涙があふれた。
考えてみれば、父親ともずいぶん顔を合わしていない。なにしろ実の父とはいえ、帝国の皇帝である。まわりには父を守ると称し、無数の廷臣がとりかこみ、サンディが会おうと思ってもそうは簡単にいくわけもない。
父親に会おう。
サンディは決意し、歩き出した。

執務室のドアを前に、サンディは息を吸い込んだ。
皇帝の執務室というのに、ドアは簡素な一枚板で、まるでどこか

の商店のあるじが使用する部屋のようだ。
衛士の姿はない。この廊下に通じる出入り口を守っているのだ。
サンディは衛士たちの目の届かない通路を知っていたので、だれにも見咎められることなく、達することができた。
手をあげ、ノックする。
おはいり、という老人の優しげな声が聞こえてきた。
ノブを掴み、サンディは歩み寄った。
はいると、デスクがひとつ窓際にあり、椅子にはひとりの老人が老眼鏡を目にかけ、なにか報告書を読みふけっているところだった。椅子の背後には窓が開け放たれ、中庭のあかるい日差しが部屋に差し込んでいる。
老人はサンディの入室の気配に気づき、顔をあげた。
痩せた顔に、整頓された目鼻立ちが品良くちまちまと収まっている。とても一国の皇帝とは思えない。どこかの図書館の司書といった雰囲気の老人である。しかし、かれこそコラル帝国の皇帝、グレゴリオ四世そのひとだった。
「きみは……」
老人はいいかけ、首をかしげた。
眼鏡をはずし、ハンカチで丁寧に拭くとふたたびかけなおす。しげしげとサンディを見つめているが、その瞳にはなんの表情もうかんでいない。
「お父さま……！」
サンディは老人に近づいた。
皇帝はぎょっとなったようだ。
「だれかね？　わしには娘はサンドラひとりしかおらん。ほかに娘はおらんよ」
「まさか！　ねえ、お父さま。あたしよ、サンディよ！」
老人はのけぞるようにして驚きの表情を見せた。
「知らん！　わしはお前さんのような娘には知り合いはおらんぞ！」
その時、隣の部屋のドアが開き、ひとりの恰幅のいい中年の男が

はいってきた。
「なんの騒ぎです？」
フーシェ内務大臣である。かれは部屋にはいるなり、サンディに気づいた。
「だれです？　見慣れない娘だが」
皇帝はすくわれたように大臣を見た。
「わしの娘だと言い張るのだ。いったいなんのことやら……」
「娘……プリンセスだと？」
そう言うと内務大臣は目を細めてサンディを見た。
「嘘をつくにもほどがある！　わたしはプリンセスのサンドラ嬢をよく見知っておりますが、彼女とは似ても似つきませんぞ！　おい、お前！」
最後の言葉はサンディに向けたものだった。
「いったいどこの娘だ？　だいいち、どうやってこの宮廷に入り込んだ？」
サンディは真っ青になった。
内務大臣どころか、父親のグレゴリオ四世までじぶんを知らないと言う！
まるで彼女の足もとががらがらと崩れ、亀裂に飲み込まれるような気分だった。
ばたばたと数人分の足音が近づいてくる。
「曲者だ！　暗殺者かもしれん！」
「まだ若い娘だ……」
「こっちで見かけたと報告があったぞ！」
衛士たちの声が交錯している。
その声に、大臣と皇帝はサンディを見つめた。
「暗殺者……という声が聞こえたな」
フーシェ大臣がゆっくりとつぶやいた。
違う……と、サンディは首をふった。
ふたりはサンディをなんの感情もあらわさない、冷たい表情で見

つめた。それは彼女を危険人物と断じる視線であった。
だんだんだん！　と、執務室のドアが外部から叩かれた。
「失礼いたします！　この付近にあやしい少女が侵入したという報告がありました。なにかありましたでしょうか？」
衛士の声が聞こえてくる。
フーシェ大臣は叫んだ。
「ここにいるぞ！　すぐ入って来い！」
がちゃがちゃとノブをまわす音がする。
もう、サンディは留まっているわけには行かないと思った。だっ、と駆け出すとあっけにとられたフーシェの横をすり抜け、開け放たれている窓から外へ飛び出す。
窓から中庭へ。
ちらりと振り返ると、ドアが開き衛兵たちがなだれこんできたところだった。フーシェがサンディのほうを指さし、あれが曲者だと叫んでいる。
彼女はしゃにむに走り出した。

どこをどう走り回ったのだろう。
気がつくとサンディは城の上階へときていた。
しん、とあたりは静まりかえっている。
空気はひやりとして、あたりにはずっしりとした闇がわだかまっている。
奇妙だ……と、サンディは思った。
じぶんは宮殿のありとあらゆる場所をじぶんの手の平のように見知っているはずだったが、いまいるこの場所にはまるで見覚えがなかった。
外から見た宮殿の様子が思い出される。
宮殿の外見は、サンディの覚えていたそれではなくなっていた。
なにか夢の中の建物のように歪み、無数のパイプが繋がって、しろい蒸汽に包まれていた。

いまいる場所も、それによく似ている。
通路のようだが、その壁は微妙に歪み、かっちりとした直角や、平面というのがなくなっている。くねくねとした曲線が支配し、どこか植物的といった雰囲気だった。
もしここにミリィがいたら、ゴラン神聖皇国の聖堂の内部に似ていると指摘したはずである。
窓はなく、かわりに壁に松明が明かりを投げかけている。
ぞくぞくとサンディは寒気を感じていた。
そっと壁に手をやると、じっとりと湿っていた。
空気がいやに湿っぽい。
ねっとりとした湿気に、温度は高めだったが、それでもサンディには奇妙な寒気を感じていた。
用心深くサンディは歩き出した。
くねくねと動物の内臓のような通路は歩きにくく、さらに床や壁からつきだしたパイプや配管が、気をつけていないと足もとをすくわれそうになる。
前方が明るい。
ふいにサンディは広々とした場所へ出ていた。
しゅーっ……と、白い蒸汽が噴きあがり、あたりを蒙気につつんでいる。太いパイプが何本も天井から垂れ下がり、床にはいくつもの噴気孔がぽかりとうつろな穴を開いていた。
「誰だ……」
ふいの誰何にサンディははっ、と顔を上げた。
部屋の向こう側、蒸汽ににじむ向こうに玉座のような背の高い椅子がある。その椅子にも無数のパイプがつながり、盛大に蒸汽の柱をつくっていた。
その椅子に、ひとりの男が腰かけている。男は軍服を身につけ、肩にはゆったりとしたマントを羽織っていた。軍帽をまぶかにかぶり、その表情は読めない。ただ、その軍帽から金色の髪の毛が伸びているのが目にとまった。髪の毛はかなり長く、肩までおおうほど

である。
すっ、と男は立ち上がった。
背の高い、痩せた身体つき。しかしひ弱さはかけらもなく、獰猛な獣の雰囲気がまとわりついていた。
軍帽のまびさしから見える顔の下半分は顎が奇妙に尖り、その唇はうすく、酷薄そうな笑いを浮かべていた。
「あなたはだれ？」
サンディの声は恐怖でささやき声になっていた。それだけ言葉を発しただけでも、彼女の全精力を振り絞る必要があった。
「ギャン少佐……」
その答えにサンディは飛び上がった。
「あなたが！」
そう……と、ギャンはうっすらとうなずいた。
「おれがレディ・サンドラ・ドゥ・アンクル・コラル・カチャイ嬢の婚約者だ」
「嘘よ！」
サンディはきっと表情をこわばらせた。
「そんなの嘘！」
くくくく……と、ギャンは笑い声をあげた。
「しかしあいにく、それは本当だ。サンドラ嬢の婚約者というのが気に食わないのなら、エイラの婚約者というのはどうだね？」
「あなたは、いったい何者なの？　なぜそのことを……」
「お前は本物のサンドラ・ドゥ・アンクル・コラル・カチャイなのだな？　コラル帝国皇帝のプリンセス……しかしいまはただのサンディ……」
あなたは何者！　サンディの詰問は悲鳴に近かった。
にやり、とギャンは笑った。唇の端がきゅっとV字に吊りあがり、まさしく悪魔の笑みである。
ゆらり、とかれは玉座から階段を降りるとサンディに近づいた。
羽織っていたマントが噴きあがる蒸気ではためいた。

ひょろりとした高みからサンディを見下ろす。
「ここに来るまで、君は信じられないことを体験したのではないかな？　君を知るはずの人々が、まるで見知らぬ人のようになる……君はここではだれにも助けを求めることはできない……」
サンディの唇はわなわなと震えていた。膝から力が抜け、座り込みそうになる。
「誰よ……あなた……」
「おれはギャン少佐……未来のコラル帝国皇帝……」
「お父さまが……」
「かれはもう、真の皇帝ではない。いまではおれの操り人形にすぎぬ。エイラことサンドラ嬢と結婚し、皇帝の座を手に入れるのがおれの望みだ。そしてお前！」
ギャンは叫ぶと指を彼女につきたてた。
「父を、そして親友を取り戻したくはないか？　お前はここではひとりぼっちだ！　だれひとりお前には優しい顔を見せることはなく、親しい言葉をかけることはもうないだろう。そう、おれがすべてそう手配した。それらを取り消すことの出来るのはおれだけだ！　お前がうん、と言えば元に戻してやろう」
サンディは目に涙をいっぱいうかべていた。
ギャンと名乗るこの男の言うことは真実だと、こころの奥底で悟っていた。
「なにをすればいいの？」
その答えにギャンは満足そうにうなずいた。
顔をサンディにぐっと近づけ、ささやく。指をサンディの顎につけ、仰向ける。ふたりの目は近々と接近した。
「おれとの結婚だ……。婚約を承知すれば、エイラとの婚約を解消し、お前の父親や臣下の記憶を元に戻してやろう。どうだね？」
ギャンはサンディにさらに顔を近づけた。唇がサンディの唇に触れそうだ。
「おれには力がある！　このコラル帝国のすべてをしたがえ、そし

て全世界を征服するに充分なパワーが……。おれと結婚すれば、君は世界のプリンスとなるのだ……」

ささやくギャンの唇はさらにサンディの唇に近づいた。もう、ふたりの唇は触れんばかりだ。

ぱしん、とギャンの頬が鳴った。

はっ、とかれは身を離した。

頬にサンディの手形があかく残っている。ギャンは目を見開き、頬をさすった。

「馬鹿にしないで！　だれがあんたなんかに……」

うふ……、とギャンはうすく笑った。

「いいのか？　もう、お前は一生父親に娘と呼ばれることはないのだぞ。どんなにお前がじぶんが本当のプリンセスだと主張しても、だれもそれを信じるものはいない。お前はひとりぼっちだ！　それでいいのか？」

それでもいいのかあ……と、ギャンの声はうつろに響いた。

ギャンの目が奇妙な光をたたえた。

サンディはぽかんと口を開け、だらりと両手をたらした。その目は半眼で、ギャンを見上げる彼女の表情はどこか憧れるようなまなざしである。

一歩、二歩、サンディはギャンに近づいた。

ギャンはにたりと笑いを浮かべると、サンディを迎えるかのように両腕をひろげた。彼女を抱きしめようとしたその瞬間、はっとかれは顔を上げた。

もうもうと湧き上がる蒸汽の向こうに、ひとりの女性が姿を現した！

「誰だ、貴様！」

さっとギャンは引き下がり、腕をあげ手の平を向け、指を奇妙なかたちに折り曲げた。

「ここには奇妙なちからの凝集が感じられます……”魔素”の異常な高まり……おそらくこの建物のかたちと、注入された蒸気のパワ

ーが組み合わさっているのでしょうね」
その女性は長い黒髪を後ろにまとめ、背中にたらしている。興味深そうにあたりを見わたし、その目がギャンを見つめる。
黒々としたおおきな瞳。
その瞳に見つめられ、ギャンは思わずたじろいでいた。
なにものも見通し、見透かすような視線。
女性はすっ、とギャンに近寄った。足もとはまるで動かさず、まるで宙を浮かんでいるようである。
ギャンの口もとがふたたび笑いを形作った。
「貴様、実体があるわけではないな？　何者だ、幻影か？」
彼女はうなずいた。よく見ると、宙に浮かぶその女性の姿はかすかに透き通り、向こうの景色が重なって見えている。
「その通り。わたしには実体はありません。この城の内部に満ちている”魔素”がこの映像を結ぶちからをあたえているのです。しかしなにも出来ないわけではありませんよ」
そう言うとさっと片手をあげた。
ふわあ……と、女性の髪の毛が持ち上がる。
ギャンは「く！」と口の中でつぶやき、一歩下がった。そしてもう一歩下がる。
女が一歩、前へ出た。
ギャンが下がる。
かれの眉間にはふかいたて皺がきざまれていた。
「下がりなさい！　あなたにはこの娘はわたすわけにはいかない！」
ぐっと女は手の平をむけ、叫んだ。
ギャンは苦しそうに胸をかきむしると、よろよろと下がっていく。
やがて背中が壁にあたった。
それを見て、女はサンディに向き直った。
「サンディ……目を覚ますのです」
そっとサンディの額にくちづけをした。
はっ、とサンディの目が見開かれた。

「あなたは……だれ？」
「目を覚ましましたね」
ふっ、と女性はほほ笑みをうかべた。顔を上げ、あたりを見回す。
「ここにいつまでもいてはいけません。さあ、この城を出て、逃げるのです」
「逃げるって、どこへ？」
さあ……、と女性はゆっくりと首を左右にふった。長い髪がゆれる。
「あなたにとって相談できる相手、そのようなかたに心当たりはないのですか？」
サンディはうなずいた。
「います……そういうひとが……」
「それはよかった、ではすぐそのかたのもとへ向かうのです！　わたしがこの男をおさえているあいだに！」
ありがとう……とつぶやいて、サンディは広間を抜け出した。
サンディの姿が見えなくなると、女はギャンに顔を向けた。
「あなたはギャンですね。あなたのちからはいま、とても強くなりました。しかしその代償をはらわなければならないのを、あなたは知っているのですか？」
「何者だ……貴様！」
「わたしのことはどうでもいいのです。あなたはいま、とても危険な状態にあるのですよ。あなたはちからを求めた。それはかなえられた……しかし失うものもあるのです」
壁にへばりついたままギャンはあざ笑った。
「おれが失うもの？　馬鹿な！　おれはなにも失ってはいない！」
女は悲しげに目をふせた。
「わからないのですか……哀れな」
ギャンはかっとなって軍帽を投げ捨てた。あらわになった額に、第三の目が女を睨んでいた。
「見ろ、このおれを！　おれはだれよりも強い魔力を持っている！

このちからで、おれは世界を征服するのだ……」
第三の目が開かれたことにより、ギャンの身体にあらたなちからが生まれたようだった。
ぐ、と全身をふんばるとかれは背中を壁から離した。ちからをこめ、一歩、また一歩と女に近づいていく。
「お前の正体をあかせ……」
歯を食い縛り、指を奇妙なかたちにまげ、歩いていく。
女は水のように静まりかえった表情でギャンを見つめている。
すっ、とその姿が薄れた。
ギャンは怒鳴った。
「待て！　おれの質問にこたえていないぞ！　お前はだれなんだ！」
ギャンの問いに答えず、女はじょじょに身体を薄れさせていった。
ふっ、と風にふきとばされるように女の姿は宙に消えた。
ぼうぜんとギャンは立ちすくんだ。
「なんだ、やつは……？」
よろよろと玉座に這い登ると、どっかりと腰をおろした。
長い時間、身動きもせずギャンはそのまま微動だにしなかった。
やがて顔をあげ、あたりを見わたした。
「？」
首をかしげる。
なにか重大な出来事がおきたような気がする。それがなにかわからないが、ひどく気になることが……。
立ち上がると床に落ちている軍帽を拾い上げ、頭に被った。
ギャンの記憶からサンディのこと、そして謎の女のことはすっかり拭い去られたように消えていた。

蒸気の知性

帝国科学院のバベジ教授の研究室には異変がおきていた。

ざあああ、ざあああと風に葉がふれあうような音を立て、バベジ教授の蒸汽思考機械「エイダ」の回路が動作を続けている。

「なにがおきているんだ……？」

バベジ教授は研究室でつぶやいた。

室内の中心にはかれが作り上げた思考機械の本体がすえられている。

巨大な女の頭部とも見えるそれは、蒸汽と電気のちからで思考をかたちづくる。それにバベジ教授は「エイダ」と名づけていた。かれの今は亡き妻の名前である。

最初は単純な数式を計算する機械を設計していたのだが、動作を開始した装置はバベジ教授の構想をこえ、人間以上の思考をするようになったのである。

原因は”魔素”のせいだった。

”魔素”が思考回路にあらたなちからを付加し、バベジ教授の想像を超えた思考を可能にしたのだ。

最初私費で研究をつづけていたバベジだったが、ニコラ博士の紹介によりここ王立科学院で研究を再開したときには、あらたな回路を接続する研究をしていた。いままでの回路の数倍の数の回路を接続し「エイダ」の能力を増幅させた。エイダがそれを望んだからでもある。

「エイダ！　聞こえるか？　この騒ぎはなんだ？」

回路が動作する騒音のなか、バベジ教授は叫んでいた。回路の動作音は、それほどやかましく叫ばなければ自分の声すらわからない。

と、あれほど喧騒のかぎりにあった研究室の騒音がぴたりと止んだ。

じーん、とバベジ教授の耳が痛んだ。

ふっ、と教授はため息をついた。

と、かれはエイダの頭部を見た。ぎくり、と硬直する。人間の女性そっくりな頭部の目が開いていた。ふたつの目はじっとバベジ教授を見つめている。

「エイダ……」

ふらふらと教授は頭部に近寄った。

「いったいなにがあった。お前はなにを計算していたのだ?」

「チャールズ……」

エイダの呼びかけに、バベジはぎくりと凍りついた。「チャールズ」と彼女は呼びかけたのである。もちろん、バベジ教授のファースト・ネームだが、エイダがその名前で呼びかけることはかつてなかった。これひとつで、なにか異常なことが起きていることがわかる。

「倍加した素子のおかげで、わたしの思考能力は飛躍的に増幅しました。あなたのおかげです」

エイダの声は研究室に響き渡った。

それは神々しいといってよく、耳にしたとたん、膝のちからが抜けていくようだった。はるかに人間のレベルを超えた思考がその声には感じられる。バベジ教授は驚愕で、くらくらとめまいを感じていた。

「わたしは世界を感じていました。世界に存在する”魔素”のせいで、わたしには人間の感じないことを感じ、見えないものを見るのです。わたしはじぶんの使命を悟りました」

背後で、かすかな香水のかおりをバベジ教授は嗅いでいた。その香水にはおぼえがあった……。

教授はふりむいた。

ぱくり、とかれの口が開いた。驚きに目が見開かれる。

「エイダ……」

まさしくかれの妻、エイダの姿であった。

かれはこの研究室に招かれる前、思考機械「エイダ」によって、

妻の幻影を現出させることを望んだ。最初、エイダは妻の姿をバベジ教授の求めに応じて現出させていたのだったが、かれが人間世界から孤立することを案じ、やめていたのである。

それがいま、姿を今一度現している。

「おひさしぶりです、あなた」

幻影の妻は、教授に向け嫣然とほほ笑んだ。教授は彼女から、妻の気に入りだった香水のかおりを嗅ぎ取っていた。

しかしそれはありえないことだ。

妻の姿は幻影である。幻影が香水のかおりを発散させるはずがない。よろり、と教授は一歩彼女に近づいた。

「エイダ……！」

両手をひろげ、抱きしめようとするがはっ、と立ち止まった。

そうなのだ。

彼女は幻影なのだ。

手を触れることはできない。

「帰ってきてくれたのか？」

ようやく、それだけ言うのが精一杯だ。

エイダの幻影はかるくうなずいた。

「あなたのおかげで、わたしの能力は倍化しました。わたしはいま、世界中の”魔素”による現象を感じとることが出来ます。私は感じています。このままでは人間世界は滅びの道をたどるしかないことを」

「滅びの道……それはなんだ？」

「”魔素”が世界を変えようとしているのです。”魔素”により、人間はあらたなちからを手にするでしょうが、それは本来の人間性の否定という方向に働きます。なぜなら現在の人間は古代の世界の人間と違い、科学の知識を蓄えているからです。科学と魔法の融合は、人間に破滅的なちからをあたえるのです。わたしにはこのちからによる、世界の最終戦争の勃発を予感することができるのです」

「世界最終戦争……？」

教授はぼうぜんとつぶやいた。エイダの言うことは理解しがたいが、彼女の知性は人間をはるかに凌駕していることは感じとれた。

「そ、それでお前はなにをしようとしているのだ？　確か、お前はじぶんの使命を知ったと言ってはいなかったか？」

エイダの幻影はうなずいた。

「そうです。わたしはじぶんの使命を知りました。この世界から”魔素”を取り去ること。人間は人間だけのちからで未来を切り開くことが必要です。魔法はその邪魔をするのです」

「まて、まってくれ！　この世界から”魔素”をなくすといったが、それはつまりお前を……」

「そうです。わたしの現在の能力は”魔素”の影響によるもの。もし”魔素”がこの世界から消えたら、わたしはただの計算機にすぎません」

「馬鹿な！　それはおまえ自身を否定することになるんだぞ！　いいのか、お前は意識もなくなり、ただの計算機として残るということが」

エイダはにっこりとほほ笑んだ。

「それがわたしの望みなのです。人間が本来の道に戻ることが出来るなら、わたしはよろこんでただの機械になりましょう」

教授はへたりこんだ。

圧倒的な知力を前に、どうどうと自己否定する彼女の迫力に、おのれのちっぽけさを自覚せざるをえなかったのだ。

さっ、とエイダの顔があがった。

「バベジ教授、この研究所にひとりの少女がやってきます。あなたもよく知っている相手です。彼女はあなたと、ニコラ教授にたすけを求めるでしょう。どうか、彼女のちからになってあげて……」

そういい残すと、エイダの幻影はふっとかき消すように消えていった。

「待ってくれ！」

あわてて立ち上がったバベジ教授だったが、すでに彼女の姿はな

かった。
あとに、かすかな芳香が残った。

サンディは首都ボーラン市の町並みをさ迷っていた。
どこへ行けば良いのかわからない。
何を見ても、何を聞いても敵ではないかとぎょっとなる。
町外れで彼女は宮殿を見上げた。
ここからだと、はるかにかすんでしまって、細部はほとんどわからない。ただ、その異様なシルエットだけがどんよりとした空に突っ立っているのが見えるだけだ。宮殿のあたりにはどす黒いスモッグがたちこめていた。
ここはサンディの知っているボーラン市ではない。
毎日、宮殿のじぶんの部屋から望遠鏡でながめたボーラン市だったが、いまはよそよそしく、見知らぬ町のようだ。
実際、市内は劇的に変化していた。
町の建物の壁面は無数のパイプや、送気管でうずめつくされ、あちこちに蒸気機関のエンジン部分ががちゃがちゃと盛大な騒音を撒き散らしている。煙突がにょきにょきと何本も目に付き、もくもくと煤煙を吐き出し、市内はその煙でおおいつくされ、昼間でも薄暗い。
おおくの市民はその煤煙から呼吸器を守るため、マスクを装着している。マスクからは浄化装置がつきだし、ぜいぜいとあえぐような呼吸音をたてていた。
ごほ、ごほとサンディは咳き込んだ。
空気はひどい状態になっている。このままでは早晩、喉をやられてしまう。宮殿にはいるまえマスクを買い求めていたが、脱出する際にどこかに置き忘れてしまっていた。
しかたなく、彼女はもうひとつマスクを買い求めた。こんどはフードつきのもので、すっぽりと首からうえを覆うことができ、じぶんの顔を隠すことが出来る。

ぼんやりと彼女はあたりを見回した。
と、路面電車の道案内図が目に付いた。

帝国科学院

という文字が目に付く。
そうだ、ニコラ博士に会いに行こう！
ようやく目的が出来、彼女は市内の路面電車の停留所へと急いだ。

北の大地（前書き）

パックがついに北の大陸へ到着！
ミリィを捜索するパックの旅はどうなるのでしょうか？

北の大地

どんよりとした雲が低く垂れ込め、鉛色の海面がひろがっている。とうとうこんなところまで来てしまった。

パックは船端に身体をもたれかけ、水平線を見つめていた。となりにはブロンズの表面を輝かせたロボットのマリアが寄り添っている。

ようやくのことで蒸気ムカデを積み込むことを承知した船を見つけ、北の大陸目指したのは一週間前のことである。ペラの町を出帆した船は、途中嵐に出会うこともなく、順調な航海を続けてきた。そして今日中には北の大陸にある、アンガスの町に到着する予定だ。

アンガスは北の大陸で、コラル帝国の飛び地というべきところで、数十年前の紛争のさい、帝国に割譲され、いまはその領土となっている。ゴラン神聖皇国は何度となく帝国に領土の返還を交渉してきたが、帝国は拒否をしていた。

ぶるっ、とパックは腕をさすった。

風が冷たい。

こんなことならもっと厚着をすべきだった。ペラを出たときはそんなこと考えもしなかったのだが、これほど北方に来ると、さすがに空気は刺すような冷たさである。アンガスの町に到着したら、さっそく冬着を買い求めようとパックはこころに決めていた。

「寒いのですか」

マリアが話しかけてきた。

パックはうなずいた。

「ちょっとね」

マリアがパックに身体を押し付ける。パックは驚いた。

「おい……？」

「わたしの体の中にある蒸汽で温めることができます。どうですか？」

ああ、とパックは返事した。確かに暖かい。金属の身体をしているマリアは冷たそうな見掛けであるが、彼女の動力源は蒸汽だ。とうぜん、暖かい。背中にふれたマリアの身体からじんわりと温かみがつたわる。

マリアはいつでもパックを気遣う。まるで恋人のように……。

なんだか気まずくなって、パックはそっとマリアの側から離れた。船首に歩くと、前方の水平線ちかくに黒々と陸が見えてくる。

船首近くには、この船――パガス号――の船長が腰のベルトに手を引っ掛けるような姿勢で、じっと水平線の方向に眼をやっている。

「あれは……陸ですか」

ああ、と船長はうなずいた。その顔は潮焼けで真っ黒だ。

「アンガスの町だ。ずいぶん、船が停まってるぜ」

手をあげ、指さす。

パックもそれを認めていた。

船長の言うとおり、アンガスの港にはびっしりと船が停泊していた。

「どういうわけだろう。見たところ軍艦みたいだな」

船長は不安そうにつぶやいた。

軍艦？

「軍艦ということはゴラン皇国のものですか？」

うん、と船長はうなずいた。

「ここらはいちおうコラル帝国の領土となっているが、もともとゴラン皇国のものだったからな。ゴラン皇国の船がたちよることは可笑しくないが、しかし海軍がでばってくることは条約違反だ。こりゃもめるぜ」

近づくにつれ、ゴラン皇国の軍船ははっきりと細部が見分けられてきた。

パックはあきれた。

軍船というからにはもっと近代的な船を想像していたのだが、これはほとんど前世紀の遺物だ。

蒸気機関はなく、三本マストに帆が張られている。高々とした船尾楼に、横腹にいくつもの砲門がならんでいる。

美しい船ではあるが、近代戦にはまったく役に立たない旧式の船だ。

「これが軍艦……？」

首をひねるパックに、船長は苦笑した。

「まあ、帝国の海軍を見慣れた目にはとても軍艦とは思えないのも無理はない。しかし帝国以外の国は、たいていこんなものさ。大砲は青銅だし、蒸気機関もないが、これでも軍艦には違いない」

目の前を横切るゴラン皇国の軍艦をパックは見送った。船首や船端、さらに船尾にかけてごてごてと複雑な飾りがあしらわれ、軍艦というよりは童話の中からあらわれた、観光用の船にしか見えない。しかし船腹から突き出した大砲は本物である。パガス号には武器はない。あんな大砲でも、一発でも撃たれたら降参するしかない。

息を潜めるようにしてパガス号はゴラン皇国の軍艦の側を横切り、アンガスの港に接岸した。

さっそく港湾係員がやってきて、パガス号にラダーを横付けさせた。船長がまっさきに上陸し、係員に書類を差し出す。係員は書類の記載事項を確かめ、うなずいた。ふたりは事務所へ歩いていく。そこで審査が通れば、パガス号の乗客および乗員は正式に上陸が認められるというわけだ。

やがて船長が事務所から出てくると、待ち構えている船員におおきくうなずいた。

船員はほっとしたような表情になると、乗客を降ろしはじめた。

パックのほかは乗客はあまりいなかった。

アンガスの町に行商にきた商人の家族と、帰郷の途中の旅行者、吟遊詩人がひとり、それくらいである。

問題はムカデの荷揚げ作業だった。

パガス号のクレーンが動き出し、ムカデを搬入した木製のコンテ

ナを吊り上げる。作業員が喚きながら、コンテナを下ろしていく。
「ありゃ、なにを積んでいるんです？」
係員が好奇心にかられてパックに尋ねた。係員はこの土地のものなのだろう。むくむくと厚着をして、すっぽりと首に毛皮の襟巻きをしている。まわりを覗き込む住民たちもみな同じように厚着をしていた。
「えーと、乗り物なんです」
「乗り物？」
「蒸気で動く……」
ああ、蒸気ねと係員は不得良にうなずいた。
地面に下ろされたコンテナの木箱が作業員のバールでこじ開けられ、ムカデが姿をあらわすと係員は腰をぬかした。
「こ、こりゃなんだ！」
「だから蒸気で動くムカデ・ロボットだって！」
パックが説明すると、係員はさらに怯える表情になる。
そこへマリアがパガス号から降りてきた。
「そ、そいつはなんだ？」
「マリアです。彼女もロボットです」
パガス号の船員や、乗客はすでに慣れていたが、やはり最初に目にしたときは同じような反応をしめしたことをパックは思い出した。
ムカデにパックは乗り込み、蒸気機関の起動装置を操った。ボイラーに火をいれ、蒸気のバルブを開く。蒸気がシリンダーに送り込まれ、あちこちから白い蒸気があがりはじめると、係員やその場にいたアンガスの住民は驚きのあまり目をまるくさせた。
「どいて！」
パックが怒鳴ると、あわてて人々は脇によけた。
ぐい、とパックはレバーを動かした。
がちゃ、がちゃと機械の音をたて、ムカデは生き物のように足を動かした！
わあっ、と人々はちっていく。

ひらり、とマリアがパックの後ろの座席に飛び乗って、ムカデは六対の足を動かして進みはじめた。

ちらりとパガス号を見ると、船長が甲板から手を振って別れの挨拶を送っている。パックはそれに手を振り応え、町へとムカデを進めていく。

アンガスの町に来て思ったことだが、やはりここは北の果てにあるということだ。町の家々は重々しいレンガ造りで、壁が厚く、窓は最小限の大きさである。家の屋根には煙突が突き出し、もくもくと暖房の煙を上げている。

蒸気機関を使っている形跡は少なそうだ。しかし暖房に石炭を使っているかもしれない。もしそうでないと、いま乗っているムカデのための燃料である石炭をどうやって手に入れるかである。

ムカデは石炭でなくとも、薪や木炭でも動く。しかし効率の点から考えると、石炭こそが望ましい。

ぶるっと操縦席のパックは身震いした。

寒い！

はやく衣服を売っているところを探さないと、風邪を引いてしまう。背後からマリアがそっと身体を押し付けてきた。マリアの体内に燃えている蒸気の熱が、背中側にじんわりと伝わってくる。

「いいよ、マリア。そんなに蒸気の熱をあげると、君が動けなくなってしまうぞ」

「でも、パック様が寒そうなので」

「だから蒸気を無駄遣いするな、と言っているんだ。この町でムカデに積む燃料が手に入るか判らないんだ。君が動けなくなったら、おれが困るんだ」

はい、とマリアは答えた。

わずかに背中側の温もりが減じたようだ。しかしマリアはパックの背中に押し付けた身体を離さない。パックは黙っていた。

しばらく無言でムカデを走らせる。

町の人々はムカデを見てぎょっとした表情になり、そしてそれに乗っているふたりを見て興味津々といった顔つきになる。こいつに乗っていると、どこの町でも見かける反応である。

ようやくおおきな店を見つけ、パックはマリアをムカデに残し、店内へ入っていった。

「ようこそ、いらっしゃいまし。なにをご用立ていたしましょう」

店のドアを開けると、すぐに店主らしい小太りの男が揉み手をして現れた。前掛けと、袖をまくりあげたシャツという姿である。店内は暖房がきいていて、暑いくらいだ。

パックはここで寒冷地向きの装備を整えた。

フードつきのコート、ウールのジャケット、厚底の登山靴など。野営を考慮して、テントや寝袋なども購入する。あれこれ注文すると、結構な荷物になる。それをバッグにまとめて買い入れ、支払いをすませる。

サンディに貰った貴金属がここで役に立った。いったんは突き返したが、サンディが無理やりに受け取らしてくれたのが、ありがたい。ペラの町でパックはそれを現金に交換していた。それでもこれだけのものを購入すると、かなり目減りする。

「この町で石炭は手に入りますか？」

パックの質問に店主はさあてね、と腕を組んだ。

「町の連中は、おもに薪を使って暖を取っているようですな。もちろん、うちは石炭を使って暖房をしておりますが。ああ、石炭をどこでお求めになれるか、ですな。手前どもは港で買い求めております。アンガスの港にやってくる蒸気船のための石炭集積所がございまして」

それを聞いてパックはがっくりとなった。

また港に戻るのか！

その日はホテルを探し、パックは投宿することにした。石炭を買い求めるのは明日にしよう……。

翌日、ふたたびムカデに乗って、パックはアンガスの港へと向かった。

聞いてみれば簡単なことだ。

北の大陸ではまだ、ほとんど蒸気機関は普及していない。ここで蒸気機関を利用するのは、帝国から交易にやってくる蒸気船だけなのだ。そのため、港には船に石炭を供給するための集積所がある。

港に戻ると、なにやら様子が変だ。

パガス号が停泊している。

妙だな。

パックは首をかしげた。

船長の話では、アンガスの港に着いたらすぐペラの港へ戻るため翌朝、はやいうちに港を離れる予定のはずである。しかし時刻はもう昼過ぎ、それなのにパガス号は碇を下ろし、港に停泊を続けている。

港の係員を探し、石炭の集積所に向かう。

集積所では数人の作業員が手持ちぶたさに煙草をくわえ、雑談をしているところだった。

ムカデがやってくると、作業員はぎょっとした表情になった。

パックはムカデから声をかけた。

「こんにちわ！　石炭を買いたいんだけど」

ムカデを止め、パックはひらりと地上に飛び降りた。その後に、マリアも続く。

マリアを見て、作業員はちょっと居住まいを正した。中にはあわてて髪の毛を直しているやつもいる。

金属の身体を持っていることを別にすれば、マリアは印象的な外見をしている。

ほっそりとした身体に、かすかな胸のふくらみを思わせるプロポーション。人間の女性そのままというデザインではないが、全体として若い女性を思わせるラインを持っている。そして歩く姿は優美そのものである。作業員たちは彼女を眼にし、にやにや笑いを浮か

べ見とれていた。
「石炭を買いたい？　あんたが？」
作業員のひとりが口を開いた。がっしりとした身体つきの、顔半分を髭におおわれた男である。
「ああ、こいつを動かすためにね」
パックは答え、ムカデのボディをぱん、ぱんと叩いて見せた。
ほう……、と作業員たちは好奇心むき出しになった。
「こいつは乗り物かい？　いや、すげえ機械だなあ……！」
かれらはムカデの周りにむらがった。最初に口を開いた、髭の男がかれらを指揮し、ムカデに石炭を積みいれた。
代金を払うときになって、パックは質問した。
「パガス号はなぜ出発しないんだ？　今朝早くに出帆するはずだろう？」
ああ、と髭の男はうなずいた。
「昨夜、ゴラン海軍の提督が港湾事務所にお出ましになって、すべての船の出港差し止めを命令したんだ。それでいまは港には船は入港もできなければ、出港もできない状態さ。いや、災難だ。これじゃ、港にやってくる船に石炭や水を売ることも出来ねえ」
一体何が起きているのか？
パックの胸に不安が渦巻いた。

港湾事務所の所長は怒りを抑えかねていた。
じろりと事務所を占拠しているゴラン海軍の兵士を見やる。かれらは我が物顔に事務所を占拠し、すべての書類を押収した。所長はなすすべもなく、かれらの銃の脅しに屈していた。
「すぐ済みます。あんたには悪いが、これも作戦のひとつでね」
にやにや笑いを浮かべつつ、事務所を占拠した大佐は所長のデスクに腰をおしつけ、筆記具をおもちゃにしている。
「どういうことですかな？　アンガスの町はコラル帝国の領土となって半世紀になります。ゴラン皇国の干渉をうける筋合いではない。

それどころか、これはあきらかな条約違反だ！　宣戦布告と見なされてもしかたがないのですぞ！」

大佐は所長を見上げた。

所長ははっ、となった。

「まさか……ゴラン皇国は……本当に？」

大佐はうなずいた。

「さよう……わがゴラン皇国は貴国のコラル帝国へ宣戦布告をするつもりです。アンガスの港の封鎖は、その第一歩だ」

ゆらり……と、所長の視界が揺らいだようだった。ふいに見慣れた事務所の内部が、よそよそしい場所に映る。

宣戦布告……。

当のゴラン皇国の大佐が明言したのだ。嘘ではありえない。

「このアンガスの港は戦略上、どうしても手放せない拠点だ。本日より、この港はゴラン皇国の直轄領となり、海軍の基地として機能することになるだろう。あなたには協力を願うことになる」

所長はちからなく来客用の椅子にすわりこんだ。ぼんやりと自分の手を見つめる。

どうすればいいのだ！

そんな所長を見て、大佐は優しげに話しかけた。

「まあ、そう悩むことはありません。いつもの業務を続けてくれれば良い。ただし、コラル帝国の艦船が来航したときは、別ですがな……」

石炭積み込み作業が終わり、出発しようとしたパックは、港のほうから近づいてくる軍装の一団を見た。

古めかしい甲冑をつけ、手には大時代な剣と槍を持っている。先頭を歩く指揮者らしき男は、さらに膝までとどきそうなゆったりとしたマントをひるがえしている。

がちゃ、がちゃと歩くたび甲冑が擦れ合い金属音を響かせている。日差しに金属の表面がきらきらと輝いていた。

指揮官は石炭集積所前で一団を止め、声をはりあげた。片手に指揮を取るための乗馬鞭を持っている。

「われわれはゴラン皇国の第一歩兵旅団に属する警備隊である！当日よりこのアンガスの港はゴラン皇国の統括することとなった！よってコラル帝国の艦船に燃料を供給するこの集積所もわれわれの管理することになる。集積所は本日から封鎖される。よってここで働くすべての者は、ただちに帰宅し、わがほうの連絡を待つように。給料は保証されるから、生活の心配はない！」

なんだとう……と、髭の男が顔を真っ赤にさせた。ずい、と一歩前へ出て指揮官の顔を舐めるように見る。

「封鎖って、どういうことでえ？　給料は保証されるから家へ帰れ？　馬鹿言うない！　そんなこと聞いていねえぞ」

ざっ、と音を立て兵士たちは一斉に剣を抜いた。それを見て、男はたじたじとなった。

指揮官は氷のような無表情で口を開いた。

「もう一度だけ言う。ただちに帰宅し、われわれの連絡を待て！命令に従わないものは反逆者として処罰する！」

すごすごと髭の男は退散した。ほかの作業員もそれを見て、ぶつぶつ文句を言いながらであるが、帰宅準備をはじめる。

指揮官はそれを満足そうに見ながら、パックに気付いた。

「お前は？」

「パック」

短く答えるパックに、指揮官は背後のムカデを興味深く見つめる。

「これはなんだ？」

「ムカデ」

「ふむ、確かにムカデの形をしているな。しかしどう見ても機械だ。ムカデの形をした機械だな。何をするものだ？」

「乗り物だ」

パックの答えはあくまで短い。

ちら、と指揮官の顔に苛ついたような表情が浮かんだ。

「どこの生まれだ？」
「ロロ村」
「ロロ村？　聞いたことない地名だな。わがゴラン皇国の人民には見えんな。帝国出身か？」
パックがうなずくと、じろりと指揮官はムカデを見た。
「これは武器ではないのか？」
「違うよ。乗り物だよ。蒸気で動く」
ふむ、と指揮官は鞭をふりあげ、とんとんと自分の肩を叩いた。
「まあ一応、この機械は没収することにする。おい！　こいつを押収しろ」
最後の言葉は部下に向けて命令したものだった。パックは叫んだ。
「没収？　どうしてだよ！」
じろり、と指揮官はパックの顔を見た。
「当たり前だろう。わがゴラン皇国はコラル帝国と宣戦状態にはいりつつある。そういう非常事態において、このような怪しい機械は接収することが当然だ。それとお前、パックといったな。お前も尋問することにする」
がしっ、とパックの背後にまわった兵士がその両肩を掴んだ。
マリアにも兵士たちが取り巻き、剣をふりかざす。
「マリア！」
パックが叫ぶと、マリアは無造作に兵士たちの剣を手で掴んだ。ぐいっ、とひねると、あっけなく兵士たちはバランスを崩して倒れこんだ。
パックもまた両肩を掴んだ兵士たちの手をふりほどき、ムカデに駆け上った。マリアも続く。
指揮官がなにか叫んだようだったが、パックはムカデの起動に夢中だった。ボイラーに燃料を送り込み、蒸気の圧力を確認する。じゅうぶん、圧力が上がったのを見てとり、パックは蒸気弁を開いた。
ぴいーっ、と蒸気の圧力で笛のような音が鳴り響き、シリンダーが動き出す。

がちゃり……がちゃりとムカデは足を動かし、進みだした。
「止まれ！」
指揮官が叫びながら追いかける。
パックは無視してムカデを走らせた。
そのうち重い甲冑を着込んだ指揮官は息切れしはじめた。よたよたと歩みがのろくなり、ついに地面にへたり込んだ。
パックはちらりとそれをふりかえると、ムカデの速度を上げ、町を通り過ぎた。
「マリア！　ミリィの居場所は判るか？」
はい、と背後でマリアは返事をした。
「わたしはつねにバベジ教授のエイダと感応しております。エイダの感じるミリィと一緒に移動している存在の居場所は、いまも感じとれます」
そうか、とパックはうなずいた。
とにかく北の大陸に着いたのだ。
目指すはミリィの居場所である。
「方向をしめしてくれ」
こちらです、とマリアはパックの背後から腕をあげた。
パックはその方向へムカデの舵を取った。

部下にたすけ起こされ、警備隊の指揮官は唇を噛みしめた。
部下たちに向け、矢継ぎ早に命令を下す。
「すぐあの機械のムカデの行方を追え！　どう見てもあやしい奴だ。もしかすると、帝国のスパイかもしれん！　わしはこのことを提督へ報告へせねばならん！」
はっ、と部下たちは機敏にうなずくと、がちゃがちゃと甲冑の音を響かせ走り去った。
それを見送り、指揮官はうなった。
「パックとか言ったな、あの小僧……。絶対逃がさんからそう思えよ……」

かれは燃えるような目でパックの立ち去った方向を見つめていた。

ふたり（前書き）

マリアがじょじょに人間らしさを見せる展開です。このさき見せるマリアの変貌を期待してください。

ふたり

ムカデのたてる単調な音が平原に響いていた。操縦桿を握るパックは、いかにも北の大地に来たという実感を味わっていた。

寒々とした景色が目の届く限り続いている。こげ茶色の大地に、ところどころ乾燥した草が黄色い穂先を伸ばしている。まるで生きるのに必死で、旅人の目を楽しませる緑も、花もつける余裕もないようである。

空は一面の曇り空で、白に近い灰色のベールがべったりと覆っていた。

風は冷たく、乾燥している。

アンガスの町を出たあと、ムカデを走らせるパックは、ここは故郷のロロ村とは違うということを心底感じとっていた。

まず人家そのものが見当たらない。

ぼうぼうとした荒れ地がただ続くだけで、その間にはなにもない。森すら、ほとんど見当たらないのだ。痩せて、畑にすらならない荒野がひろがっている。

聞こえるのはムカデの走行音と、ひゅうひゅうという風それだけだ。

「なんだか寂しいところですね」

背中でマリアがつぶやいた。

パックはびっくりした。

彼女がこのような感想を口にしたことは、ついぞなかった。なにがおきても、なにを見てもほとんど反応はなく、ただ他人に問いかけられたときだけわずかに返答をするくらいだったのだ。

そういえば、近ごろマリアは変わってきたように思える。

パックはマリアのため、アンガスの町でフードつきのコートを買い求めていた。やはりむきだしの金属の身体を持つマリアはひどく目立つ。そのため、服を着せ、遠目には人間の女性らしく見せかけ

たのである。さらには寒い気候に彼女の熱が奪われることを防ぐ目的もある。コートを身につけた彼女は、かなり人間らしく見え、その点では成功だった。しかしそのため、パックにとっては奇妙な違和感を覚えるのも確かであった。

そう、どことなく人間臭く見えてくるのだ。仕草にも、口調にも人間の女性らしさがあらわれてくる。

なぜだろう。

パックが考えるに、それまでマリアはパックとふたりきりになる、ということはなかった。それが旅に出て、パックと言葉を交わすうち、徐々に人間らしさが生まれてきたのではないか、と思える。

もしもニコラ博士がここにいたら、ひどく興味をわかせるのではないだろうか。

と、マリアが背後をふりむいた。

「どうした？」

パックが問いかけると、マリアは答えた。

「追跡されています。背後から、馬の足音が聞こえます」

なんだって、とパックはマリアの見ている方向に目を凝らした。荒涼とした地平線のかなたに、かすかな土ぼこりが舞い上がっている。

きら、きらっとなにかが陽の光を受け、金属質の反射を見せている。

やがて馬の足音がパックにも聞こえてきた。

ぱかか……ぱかか……と、リズミカルなギャロップで数頭の馬が近づいてくる。その馬には、全身を甲冑でかためた兵士がまたがっていた。

重装騎兵である。

全身に甲冑をまとい、馬もまた面頬、胸当てを装着している。騎兵たちは、肩紐をつけ長い銃身をもったライフルを背負っていた。

やがて距離が縮まると、兵士は背中のライフルを引き抜いて、パックに狙いをつけた。

銃身の先が喇叭のように広がっている。いわゆるマスケット銃、あるいはフリント・ロックと呼ばれる形式のライフルだ。

ぱあん……ぱあん……と、銃口が火花をちらした。

ひゅん！

かすかな音を立て銃弾が発射され、ちかくの地面にちいさな土ぼこりをたてた。

「冗談じゃない！　やつら、本気だ」

パックは青ざめた。

「逃げたほうがいいでしょう」

マリアは冷静にささやいた。言われるまでもなく、パックはムカデの速度を上げた。

がっしゅ、がっしゅとムカデの蒸気機関が逞しいシリンダーの音を立て、がちゃがちゃと六対の足が地面をかける。

ぱん、ぱんと発射音が聞こえる。

ちゅーん……。

音が金属的に長く尾を引くのは、銃弾が近くを通過した証拠である。

きいーん……！

ついにムカデの金属の外皮に銃弾が命中した。パックは焦った。

銃弾がやんだ。

なんだろうとパックはふりむいた。

すると騎兵たちはライフルの先に弾をこめている。先籠め式の、単発銃なのだ。弾を転がしこみ、火薬を流しこみ、それを棒でつついて固める工程が必要な旧式の銃である。火皿に発火用の火薬をいれ、それを火打石で点火する。

しかし距離は縮まっている。

騎兵たちは装填を済ませると、ふたたびパックに狙いをつけた。
もう、騎兵たちひとりひとりの顔が見分けられるほどに近づいている。
その先頭に、アンガスの町で見たゴラン皇国兵士の隊長の顔をパックは認めていた。
あれから追いかけてきたのか！
パックはぞっとなった。
隊長はにやりと笑うと、ライフルの引き金を引いた。
ばっ、と銃口がしろい火薬の煙で覆われ、銃弾が発射された。
がつっ、と音を立てパックの後ろに座るマリアの身体に銃弾が命中した。
マリアはパックを守るようにして身体を押し付けている。
パックは夢中になってムカデの速力をいっぱいに上げた。
もう、蒸気圧は限界ぎりぎりである。
顔を操縦席に押し付けるようにして、パックは夢中で操縦を続けていた。
ばしっ、かーん、と甲高い銃弾がムカデの外板にはじかれる音がしている。なんとか銃弾をかわそうと、パックは操縦桿をめちゃくちゃに動かし、ムカデを蛇行させた。
もう、どこを走っているのか、どこへ向かっているのかも判らない。
どのくらい走り続けたろうか。
「……パック……パックさま……」
マリアの声が聞こえてくる。
どうやら何度もパックに声をかけていたようだったが、聞こえなかったのである。
え、とパックは顔を上げた。
ふりかえる。
騎兵たちは姿を消していた。
「ふりきりました。もう、安全です」

ムカデの速力を落とす。パックはのびあがって背後を確かめた。
たしかに騎兵たちの姿は影も形もない。
ほっとパックは力をぬいた。
「助かった……」
つぶやいた。

馬が横倒しになり、喘いでいる。目は白目がむきだしになり、口からは泡をふいていた。部下の一人が痛々しげにつぶやいた。
「もう、これは駄目です。楽にしてやらないと……」
隊長は酸っぱい顔になってうなずいた。
ライフルを手にし、弾丸を銃口から転がした。火薬を詰め込み、銃口を倒れこんだ馬のこめかみにあてた。
「許せ！」
ささやくと引き金をひいた。
だあーん、と銃声が荒野に響いていた。馬は絶命していた。
馬というのは走り続けられる限度というのがある。せいぜい三十分全速力で走ったら、もう体力の限界である。野生の馬はいつも走り回っているイメージがあるが、移動のため走るときは速歩くらいの速度である。全力で走るのは天敵に襲われたときで、数分全力で走れば天敵は振り切れるから、それ以上の長距離を駈ける必要はないのだ。
しかも重装騎兵の装備は重く、さらに馬自体に装甲しているから重量はさらにふえる。蒸気の力で走るムカデと違い、馬は生き物なのだ。
騎兵隊はその馬の限界をこえ、鞭をいれて無理やり走らせていた。馬の体力がつき、立ち上がれなくなるのも無理はない。本来、騎兵は乗り替え用の馬を用意し、乗っている馬の足が遅くなると、乗り替えの馬にまたがり、走り続ける。
それを用意しなかった隊長の失敗であった。
後悔に隊長はうなだれていた。

ぎゅっと拳をかため、顔を上げた。
「おのれ……あの小僧……かならずや、追いつめてやるからな……！」
隊長は復讐を誓っていた。

「ここはどこだろう……」
パックはつぶやいた。
さきほどまでの平坦な荒れ地ではなく、ごつごつとした岩山が突き出したところに来ていた。
ムカデの上から地面の傾斜を感じている。
どうやら高地の斜面を登っているようだ。
空気にじっとりと湿り気を感じる。ほどなくあたりは霧につつまれた。
ごつごつとした岩山はおぼろな霧に包まれ、シルエットとなってまるで巨人がうずくまっているように見えた。
ムカデを停止させ、パックは地面に降りマリアの身体を調べた。
彼女の背中側に無数の傷跡がある。銃弾を受けたあとがちいさくくぼみになっていた。
「ひでえなあ……」
パックのつぶやきにマリアは身体にちからをいれようとして、パックはあわててそれをとめた。
「やめろ！　また身体の蒸気をつかってへこみを直そうとしてんだろ？　そんなことで蒸気の無駄遣いをするんじゃない！」
「でも……」
マリアは身体をひねって背中の傷跡を確かめようとする。
「いいからやめろって！　蒸気はいつまで持つか判らないんだ。これから燃料がいつ手に入るか判らないから、無駄遣いはやめろって言うんだ」
はあい、とマリアはうなずいたが、その口調はあまり素直とは言えない。

「でも、燃料が手に入ったら、すぐに直しますからね！」
マリアの口答えにパックは目を丸くした。
「どうしてそんなのが気になるんだ？　身体の動きが邪魔されるわけじゃないだろ」
「それはそうですけど……」
マリアは目を地面に落とし、つま先で地面を蹴った。
ああ、とパックは思い当たった。
そうだ、マリアは女性型として制作されたんだ。つまり女らしい、じぶんの外見に対する気持ちから、ちょっとのへこみにも気になるのではないだろうか？
これは困ったことになったぞ。パックはマリアがこれからますます女性らしくなって、しまいには化粧品が欲しいとか言い出すのではないかと思った。
その時、じぶんはどう対応すれば良いのだろう？

パックはまわりを見わたした。
霧にかくれ、あたりはほとんど見えない。
どうしようか、とパックは迷った。これじゃ、先に進もうにもあぶなくて動けない。ムカデを動かして、地面に穴があったら落っこちかねない。しょうがない、霧が晴れるまで野宿しかないな、と諦めた。
マリアに命じてキャンプの用意をさせた。
アンガスの町でテントや寝袋を買い込んだのが役に立った。ムカデの蒸気を落とし、テントを張って中へ這いこむ。寝袋に潜り込み、目を閉じた。
マリアがテントの中に入って、パックの側に横たわった。
「なんだ、なんだ？」
パックはうろたえた。マリアはロボットである。眠る必要はない。これまでも、パックが寝ている間、マリアは部屋で静かに待っているだけだった。

「気温が低いです。パックさま、寒さを感じていませんか」
そりゃまあ、とパックは答えた。確かに気温は低く、こうして寝袋にじっとしていても寒さがじかに地面から伝わってきそうである。
「わたしが側にいれば暖かいと思います」
つまりマリア自身がパックのために暖房装置になろうというのだ。たしかにマリアは蒸気を体内にめぐらせているから、触ると暖かい。彼女が寄り添っているおかげで、パックはほんのりとした温かみを感じていた。
うん……とパックはうなずいた。
うつら、うつらと眠りに落ちる。
夢の中で、パックはミリィの夢を見ていた。ぼんやりとした視界の中でミリィの顔はよくわからない。
ミリィ……！　パックは夢の中で叫んでいた。
ふりかえると、ミリィの顔はマリアのそれに変わっていた。

朝です、というマリアの声にパックは薄目を開けた。
テントの入り口の隙間から、しろい朝日が筋となって差し込んでくる。
テントから這い出したパックは、目の前に突き出された槍の穂先をまともに見ることとなった。
「動くな！」
押し殺した男の声にパックは凍りついた。
あわててまわりを見回すと、テントは数人の男たちによって取り囲まれていた。
「立て！　ただしゆっくりとだ……」
命令に従い、パックはのろのろと立ち上がった。ようやく自分を取り囲んだ男たちを観察する余裕が出た。
みな薄汚いなりをしている。
何年も着古したような色合いの服を身につけ、足もとは粗末な編み上げ靴だ。服にはあちこち継ぎ当てがあり、全員日に焼けた真っ

黒な肌の男たちである。
パックの背後からマリアが姿をあらわすと、かれらの間に動揺がはしった。
「そ、そいつはなんだ！」
真鍮の身体を持つ彼女は、朝日を反射し、黄金色に輝いていた。
隙を見てとったパックは、槍をかまえている男に突進し、その腕をとった。わっ、とちいさく叫んで男は槍を取り落とした。その槍をさらって、パックは構えた。
わあ！　と叫び声と共に男たちは襲い掛かってきた。ひとりが棍棒を振り下ろしたのをパックは槍で払い、ぐるりと回転させて石突でもって突いた。胸をつかれた男は、両手をふりまわして背中から地面に大の字になる。
なにがなんだか判らないが、とにかくこの窮地を脱出しなければ。
パックは槍を目茶目茶に振り回して囲みを破ろうと奮闘した。マリアは両手をつかって男たちを押し返す。
「パックさま、後ろ！」
マリアの声にパックはふりかえった。
ひとりの男が棍棒を振り下ろすところだった。
あっ、と思って槍を持った手を挙げたが遅かった。
パックの額に棍棒が炸裂した。
目の前に火花が散り、パックは意識を失った。
「パックさま！」
マリアの声が聞こえたが、あとは闇の中に溶け込んでしまった……。

山賊

ぼんやりとした視界に金色の輝きが目に入ってくる。なんだろうと目を凝らすうち、その輝きは人の顔になった。少女の顔である。マリアだ！

はっ、とパックは目を覚ました。

気がつくと、マリアの膝に頭をもたれ、仰向けになって寝ていた。起き上がろうとすると、ずきんと額に痛みがはしる。うっ、と手をやると、ぽっこりと脹れた瘤が触れた。

棍棒で真正面から打ち据えられたのだ。本来なら、額がぱっくり割れて、死んでいたかもしれない。しかし気絶しただけで済んだのは、ちょうどあげかけた槍が多少なりとも棍棒の打撃を受け止めたからだろう。

「気がついたな、小僧……」

きしるような声に、パックは声の主を探して顔を上げた。

目の前の地面に、どっかりと腰をすえ、ひとりの大男がパックの顔を見つめていた。ひどく太っているが、切り裂いたような細い目が陰険そうで、油断はできないとパックはひそかに考えた。大男は毛皮の上着に、なにかの獣の頭蓋骨を利用したヘルメットを被っている。でっぷりとした腹に皮製のベルトをしめ、そのベルトに幅広のナイフを斜めに差し込んでいた。大男のまわりには、パックに襲い掛かった男たちがずらりと居並んでいる。

誰がどう見ても、山賊そのものである。

パックと山賊の親玉の間には焚き火が燃えており、ぱちぱちと薪がはぜる音がしていた。時刻はすっかり夜で、霧がはれたせいか夜空に星がまたたいている。

山賊の親玉は右手に酒のはいった盃を持っていた。それをぐいと持ち上げ、唇にかたむける。ごくごくと喉仏が動き、かれは盃を干した。ふーっ、と熱い息を吐き出す。

「そのキンキラキンの娘、最後まで抵抗したが、お前さんが気絶して命をとると言ったら、あっさり降伏したよ。いったい、そいつはなんだね？　人間か？」
「ロボットだよ」
「ロボット？」
「人間そっくりの、機械。ロボットという言葉、聞いたことないのか」
いいや、と親玉は首を横にした。
「お前さんが乗ってきた、そのムカデそっくりの奴も機械かい？」
親玉が指を上げパックの背後を指差した。ふりむくと、ムカデが変わらぬ姿で鎮座している。そうだとうなずくと、親玉はまた首をふった。
「そいつに触ろうとして、部下の一人がひでえ目にあった。まるで稲妻に打たれたみたいだった」
パックはじぶんの立場も忘れ、くすりと笑った。ニコラ博士はムカデに盗難防止のための仕掛けをしていたのである。それを解除せずに勝手に動かそうとすると、電流が流れるのだ。
ムカデの動力は蒸気だが、蒸気エンジンの出力が直接足を動かすわけではない。蒸気エンジンの出力は発電機に繋がっていて、発電された電気がモーターを回転させる仕組みである。その電気が蓄電池に蓄えられ、まさかのときに外部に流すのだ。
しかし一体、この男の正体は何だろう？
最初手下らしき男たちはパックをいきなり襲った。パックもやむをえず戦って、意識をなくしたが、普通そうなったら手足を縛るかなにかしているはずなのに、いまのかれらからは敵意というものをまるで感じない。
「あんたら、一体何者だい？　ぼくらをどうするつもりなんだ」
詰問すると、親玉は困ったような顔になった。
「さてそれなんだが、わしらもお前さんの正体を知りたいと思っているところだ。最初、あんたがあのムカデみたいなものでやって来

たのを見たときは、てっきりハルマン教皇のあらたな手先だと思ったんだ。それであああいうことになった。悪かったよ、殴ったりして……」

ハルマン教皇とはゴラン神聖皇国を統べる法皇のことである。

「ということはあんたら、ゴラン皇国とは敵対しているのか？」

パックの言葉に親玉は皮肉に笑った。

「敵対とは良い言葉だな。むしろわしらは追われているといったほうが正しい。ゴラン皇国の徴税官から逃れてこんな山奥に暮らしてもう十年になる……。さて、お前さんの名前だが？」

パックは立ち上がった。

「ぼくはパック！　南のコラル帝国からやってきた」

コラル帝国……という言葉に、かれらは一様に驚きの声をあげた。親玉は目を見開いた。

「やはりそうか！　そのムカデの紋章からよもや、とは思っていたが……。コラル帝国は南の大陸だと聞いているが、なぜそんな遠方から来たんだね？」

パックはむっとなって答えた。

「ぼくは名前を教えた。今度はあんたの番だろ！」

親玉は鼻をこすって笑った。

「まさにお前さん……パック君の言うとおりだな。おれはドーデン。こう見えても、昔はフライ村の村長をしていた」

「村長？」

「そうだ。皇国の徴税官がやってくるまではな……」

ドーデンと名乗った大男は遠い目をした。ぽつりぽつり思い出話をするドーデンの話しはこうだ。

ゴラン皇国の徴税が厳しくなり、それまで農産物の物納で収めていた税が現金による納税に切り替わったのが十年前である。現金収入がある村はよかったが、フライ村には特に現金化できるような特産物はなく、納税に困窮した。何度かの督促があり、やがて徴税官が派遣されてきた。徴税官と村人の間に衝突があり、その闘いから

逃れかれらは山奥に移り住んでいるということだった。
かれの話しに、まわりの男たちもしんみりとしている。どうやら全員、そのフライ村の出身らしい。男たちの年令は、ドーデンと同じくらいの五十がらみから、パックとほとんど変わりないくらいの若者までいる。たぶん、幼児のころ村を離れたのかもしれない。
「どうして、ゴラン皇国はそんなに税金を課すようになったんだ?」
「戦争のためだ!」
ドーデンの顔は厳しいものになった。
「知っての通り、皇国と帝国はむかし戦争をした。その結果、皇国の領土はおおきく削られ、生き残った将軍たちは復讐を誓った。いつか帝国に宣戦布告する時を夢見、戦備を充実させるため、税金を重くしたのさ!」
パックには思い当たる話しだった。アンガスの町で、皇国の軍艦を見た話をすると、ドーデン以下、全員が目を丸くした。
「それではもう、皇国は帝国に宣戦布告するつもりなのか!」
ドーデンはうなるようにそう言うと、腕を組んだ。なにごとか考えにふけってるらしく、口をつぐんで黙り込む。
そこへひょろりとした上背のある若者が飛び込んできた。
「ドーデンさん! 報せだ!」
「なんだ、ジャギー。なにを慌てている」
ドーデンは物思いから我に帰り、ジャギーと呼んだ若者に目をやり口を開いた。ジャギーはドーデンの前に前のめりになって喋った。
「キャラバンだ! この近くにキャンプをしている!」
なに! と、全員が立ち上がった。みな興奮をあらわにしていた。真ん中で燃えていた焚き火に水をかけ、靴底で踏みにじって火を消す。
この反応に、パックは驚いた。
「出発準備だ! みんな、油断するなよ!」
ドーデンの叫びに「おう!」と全員が叫び返した。がちゃがちゃと得物を手にし、おたがいの防具を確認しあっている。あきらかに

戦闘準備だ。
ぽかんとしているパックに、ドーデンはにやりと笑いかけた。
「皇国のキャラバンが通りかかったんだ。ひさしぶりの獲物だぜ！」
みなうきうきしてる。
パックの顔にドーデンは肩をすくめた。
「そう難しい顔をするな。村を追われて生きるためにはこんなことでもしなくちゃならねえ……しかし、おれたちが獲物とするのは皇国の輸送隊だけだ。かつてのおれたちのような村を襲ったことは一度もない。なに、皇国がおれたちから奪ったものを取り返すだけさ。それに、獲物の一部はおれたちのように困っている村に渡すしな」
快活に笑うと、かれらはぞろぞろと隊伍を組んで歩き出した。なれた行動なのか、みな無言で、足音はほとんどたてない。
パックはマリアにうなずくとムカデに乗り込んだ。スイッチをいれ、起動させる。
前にも記したようにムカデの動力は蒸気機関が発電させた電力である。蓄電池にじゅうぶんな電力が蓄えられていれば、蒸気機関を始動させることなく、動くことが出来る。
蓄電池だけで動くムカデは驚くほど静かに歩くことが出来る。そろそろと歩くムカデに、盗賊たちはぎょっとしたような表情を見せた。
「おいおい……そいつでついていくつもりか？」
ドーデンは小声でささやいた。
「いいだろ。あんたらの戦いぶりを見てみたいから……」
パックも小声でささやき返した。ちっ、とドーデンは舌打ちをしたが、追い返す様子はなかった。ジャギーに声をかける。
「おいジャギー。案内してやれ」
「お、おれがあれに乗るのかい？」
「そうだ、さっさと乗れ」
ドーデンにうながされ、ジャギーはおっかなびっくりムカデに乗り込んだ。マリアが手を伸ばすと、ジャギーはびくっとなったが、

それでも無言で這い上がる。両目が飛び出さんばかりに見開かれていた。

「パックさま……かれらの闘いに参加するつもりですか？」

パックの背中でマリアが尋ねる。パックはさあな、と首をふった。いったい自分はどうしたいのだろう？

まあ成り行きにまかせるさ、と思った。

途中からドーデンら、盗賊の姿が見えなくなった。ムカデの前部にあるライトがむなしく地面を探すが、岩場にはすっかりひと気がなくなっている。

「おい、明かりを消しな」

ジャギーがささやいた。

「しかしこう真っ暗じゃ……」

「おれは夜目がきく。明かりが向こうに見えたらまずい」

ジャギーは叱りつけるようにささやいた。パックはムカデのライトを消した。たちまちあたりは真っ暗闇になってしまう。ムカデは停止した。

しばらく停まっているとようやく目が慣れてきた。空を見上げると月が出ている。それでもかなり暗い。

「あっちを見な」

ジャギーが指差した方向を見ると、突き出た岩の向こうにかすかにオレンジ色の炎の照り返しが見える。ライトをつけっぱなしにしていると、気付くことはなかったろう。

ムカデをその方向へ動かす。

ちっ、とジャギーは舌打ちした。

「騒がしいな……気付かれちまう」

パックの耳にはムカデはひそとも音を出さないと思えたのだが、盗賊にとっては別なのだろう。

それでは、とパックはムカデから地面に降りた。ジャギー、マリアがそれに続く。

照り返しの見えた岩場に頭を低くして近づいた。
岩の向こうを覗くと、おおきな焚き火をしている光景が目に飛び込んだ。そのまわりに数人の男たちが囲んでいる。鎖帷子を着込み、ヘルメットは脱いでいるが、あきらかに兵士の格好だ。ひとり、真っ赤な僧服の男がうっそりとした陰気な表情で炎を見つめている。僧服は兵士たちから離れた場所で陣取り、なにかの聖典らしき本を開き熱心に読み始めた。唇が動き、ぶつぶつと聖なる言葉をつぶやいている。はらりと僧服のフードが後ろにたれ、かれの顔があらわになった。男の頭は天辺をつるつるに剃り上げられていた。
炎から離れた場所には荷馬車の一群が止まっている。荷馬車には荷物が満載され、そこには完全武装の兵士が鋭い目つきであたりに気を配っていた。
「徴税官の輸送隊だ！　季節ごとに巡回して、徴税してまわるんだ。見ろ、あの荷馬車を！　すげえ、お宝がうなってるぜ」
腹ばいになったパックのそばにジャギーがすりよってささやいた。ぎらぎらとした視線は荷馬車に注がれている。パックは僧服のほうを指さした。
「あれは？」
「法務官だ！　徴税が滞りなく執行されるよう監視しているのさ。もし税を滞納するようなことがあれば、その場で懲罰する役目も負っている……畜生、あいつさえいなけりゃなあ！」
「どうして？　ただの坊主じゃないか」
ジャギーはパックの顔をのぞきこんだ。
「お前、なにも知らないんだな。法務官はただの坊主じゃない。あいつは怖ろしい力を持っているんだ……！」
かれは心底怯えあがっているようだった。顔色は青ざめ、僧服を見るその目には恐怖が浮かんでいる。
ふうん、とパックはふたたび荷馬車のほうへ目をやった。
あっ、と息を呑んだ。
いつの間にか、荷馬車の影に数人の盗賊が忍び寄っていた。一体、

いつの間にあんなところまで忍び寄れたのだろう。荷馬車を見張っている兵士は、巡回してあたりに気を配っている。

と、ひとりの盗賊がひらりと飛び上がり、兵士の背後にまわった。気配を察したのか、兵士はぐるりと踵を返した。背後の男は陽動のようで、さらにもうひとりが兵士の背中に襲いかかった。きらりとほそい線のようなものが焚き火の明かりを反射した。

ぐっ、と兵士は首をおさえた。

細い、針金が兵士の首にまきついている。

ものも言わず、兵士は悶絶していた。音がしないようふたりの盗賊は兵士の身体を抱きとめ、そっと地面に横たえた。

手馴れた作業のようであった。

たちまちあたりからわらわらとドーデン以下、数人の盗賊がわいて出て、荷馬車の中身を物色し始める。目当てのものが見つかったのか、順繰りに荷物を手渡し、運び始めた。

これまでいっさい物音はたてない。すべて無言の作業であった。

かなりの量が運び出されたころ、ふいに本を開いていた僧服の男が立ち上がった。

ぎょろぎょろと目を剥いてあたりの気配をさぐっている。ちょっと首をかしげ、耳をすませた。

「気付かれた！」

ジャギーが小声で叫んだ。

「盗賊だぞ！」

法務官が鋭い声で叫んだ。たちまちあたりにいた兵士たちに緊張がはしる。防具を身につけ武器を取った。

「なぜ気付かれたんだ。音は立てなかったのに」

「あいつは特別なんだ。なんでもおれたちには見えないものを見て、聞こえない音を聞くことが出来るそうなんだ……。法務官がいては、気付かれるのも当たり前だ」

パックの質問にジャギーは悔しそうに答えた。

焚き火から松明に火が移され、兵士たちはあたりを照らし出した。

松明の火にあかあかとドーデンらの姿が浮かび上がった。ドーデンはぎょっと立ちすくんだ。

「あいつらだ！」

兵士たちの声にドーデンたちはあわてて逃げ出した。兵士たちは銃の狙いをつけ、引き金に指をかける。

だあーん！

銃声が響き、ひとりが胸を抑え、うずくまった。逃げ出したドーデンたちの周囲に兵士たちが立ちふさがる。

唇を噛みしめたドーデンはやぶれかぶれの行動に出た。

そまつな得物を手に、兵士たちに立ち向かう。たちまちあたりはわあわあという、闘いの騒ぎになった。ときおり兵士たちの銃声がこだまし、戦いの物音がまじる。

くそっ、とジャギーは毒づくと立ち上がった。手に長めのナイフをふりかざし、戦いの中へと突っ込んでいく。

無茶だ……。

パックはいらいらしていた。

戦うにももうすこし、工夫というのがあるだろうに、ドーデンたちはただ無闇矢鱈に武器を振り回しているだけである。

戦いのさなか、真っ赤な僧服の法務官はひややかな表情でそれを眺めている。

その目の前にジャギーが現れた。

ジャギーはぽかん、と法務官を見つめた。法務官はなんの感情もまじえない表情で、ジャギーの顔を見つめかえした。

わあ――！　とジャギーは叫んでいた。

ナイフを持った手をふりかざし、法務官に向かって突っ込んでいく。

さっ、と法務官の右手が上がった。

ジャギーはまるで電流に触れたように痙攣した。なにやら法務官

の右手からジャギーにむけて放射されているようで、その力にジャギーは完全に捉えられている。

もうパックは我慢できないでいた。

さっと立ち上がり、背後に止めてあるムカデに駆け寄り装置を起動させた。

こんどは蒸気機関を動かす。

しゅっ、しゅっというたくましい蒸気機関の音が聞こえ、ムカデは息を吹き返した。

ぐるりとムカデの鼻先を眼下のキャンプへと向け、パックは前進させた。六対の脚ががちゃがちゃと盛大な音を立て、金属のムカデは戦いの正面へ突っ込んでいく。

わあああ……、とパックは声を限りに叫んでいた。

衝動

はっ、と法務官はふり向いた。
目の前に、パックが操縦するムカデが迫ってくる。法務官の気がそれ、ジャギーは動けるようになって慌ててその場から逃げ出した。
法務官は棒立ちになったが、すぐに立ち直り、右手をムカデにかざした。

パックの手足が勝手に動き出す。法務官の力が、かれを捉えたのだ。
なんだ、これは？
パックは必死になって操縦装置を動かそうとするが、どうにもならない。アクセルを目一杯踏み込んだまま、ムカデは突進した。
あぶない！　このままでは法務官を轢いてしまうぞ……。
その時パックは悟った。
法務官はパックを狙っているのではない。ムカデに向けて力を放射しているのだ。だがムカデは生き物ではない。ただの機械だ。それがかれには判らないのだ。
やめろ！　このままじゃぶつかってしまうぞ！
どしゃばしゃと盛大な音を立て、ムカデは驀進した。
右手をかざし、念を送っている法務官の顔にはじめて焦りの表情が浮かんだ。
目を丸くし、おのれの力がおよばない相手が存在することを悟ったようだ。
あわてて逃げ出そうと、くるりと背を向ける。
はっ、とパックを縛り付けていた法務官の念力が解けた。あわててムカデの進路を変え、速度を落とす。
やっちまえ！　と、ジャギーが叫んでいた。
「殺せ！　そいつは村の吸血鬼だ！」

彼の顔には法務官に対する憎しみがあふれていた。
法務官は手近の岩場にたどりつき、するするとよじのぼる。とてもそんな身軽なことが出来るような身体つきではないが、まるでなにかの爬虫類のように手足を岩の面に貼り付け、驚くべき素早さで駆けのぼった。
岩場の頂上に立つと、パックをにらみつけた。
あかあかとした焚き火の照り返しにより、かれの顔はなにか人間以外の生き物のような変貌を遂げていた。
両目が黄色く光り、唇からしゅーっ、という音を立てる。
「小僧……お前の顔、覚えておこう……その機械のムカデもな！」
さっと身をひるがえすと、かれは岩場の向こうへ姿を消した。
パックはあっけにとられていた。
いったい、あの法務官というのは何者だ？

ばあん！　という銃声と、火薬の臭いにパックはわれにかえった。
わあっ、という喚声と共に、ドーデンの一味と兵士たちが入り混じり戦っている。
戦いはドーデン側の不利であった。なによりかれらには銃というのがない。一方的におしまくられ、かれらは岩場の片隅に追いつめられていた。
ジャギーが叫んでいた。
「パック！　村長を助けてくれ……」
村長？
そうか、ドーデンのことだ。かれは以前、村長をしていたと言っていた……。
パックはムカデのアクセルを踏んだ。兵士たちの集団に突っ込む。
背後をふりかえった兵士たちは一様にぎょっとした表情になる。
突っ込んでくるムカデに、目が点になった。
がんがんとムカデの外板に兵士たちの甲冑があたって音を立てた。
兵士たちを跳ね飛ばし、ムカデは立ちすくんでいるドーデンの前に

やってくると、兵士たちの銃口からかばうように横にとまった。
「はやく！　今のうちに！」
ありがてえ！　と、ドーデンは返事をする。
「お前ら、逃げるぞ！」
おう！　と部下たちが応じ、全員が荷車にとりついた。あの騒ぎの中で、獲物を積み込んでいたらしい。がらがらと騒音を立て、荷車が動き出す。ドーデンたちの執着に、パックはあきれた。命があぶないこの瀬戸際に、獲物をあきらめない態度はある意味、立派といっていい。
兵士たちが一斉に銃を発射しだした。しかし銃弾はかつかつという乾いた音を立て、ムカデの外板にあたってむなしく弾かれる。
パックはドーデンたちを守るようにしてムカデを走らせた。荷車の背後にムカデを置き、岩場を離れる。
顔を真っ赤にさせ、部下たちは荷車の梶棒にとりついて走り続ける。絶対、あきらめないつもりだ。
このままでは疲れて停まってしまうのはあきらかである。
一行が切り立った崖の隙間に入ったとき、パックの頭にひらめいたものがあった。
ぐい！　と操縦桿のハンドルを引く。
ぐっとムカデの頭が持ち上がった。
がつ！　がつ！　と音を立て、ムカデの六対の足先が岩の面につきたてられた。
ほぼ垂直の岩面を、ムカデはよじ登っていく。これがムカデの能力なのだ。
兵士たちはあっけにとられ、棒立ちになった。
パックはムカデの蒸気機関の出力をいっぱいにあげた。
がばり！　と、ムカデの口のところにある楔形の牙を開く。そして目の前の岩を掴み、六対の足をふんばった。
しゅしゅしゅしゅ……と、白い蒸気がムカデの全身からわきあがった。

ぐぐぐぐ……。
押していく。
やがて
岩はゆらりと傾きはじめる。
ぐらり、と岩は岩場から離れていった。ごん、どすんと音を立て、
岩の塊は岩場をころげ落ちていった。
わあ！　と兵士たちはいっせいに飛びのいた。
ごろん、ごろんと音を立て、岩の塊が崖の隙間を埋めてしまった。
道はとざされた。

洞窟

兵士たちの追跡を逃れたパックと盗賊たちは、安全な岩山に逃げ込み、一息ついた。首領のドーデンによれば、ここは皇国政府にも知られていない場所だそうだ。岩山そのものをくりぬき、洞窟をひろげ生活できるようになっていて、そこにはドーデンのような盗賊とその家族が移り住んでいる。

洞窟の住処は意外と広く、通路が四通八通していて、パックは女子供の姿を認めていた。まさしくそこはひとつの町であった。洞窟の内部には煮炊きする生活の匂いがこもり、通路に面していくつもの住居用の洞窟がひろげられていた。それらの煙が外に漏れないよう、煮炊きの場所は洞窟のもっとも奥まった場所にあり、煙抜きの穴は何本にも枝分かれさせ薄められている。

案内されパックがマリアを従えて中へ入ると、彼女の姿に人々はやや怯えの表情をうかべた。

しかし好奇心をむきだしにしたのは子供たちだった。

小さな子供を中心に、わっとばかりにマリアの周囲に群がる。なかにはマリアの身体によじのぼろうとする子供もいた。

まったく抵抗をしないマリアに、親たちはやや安心したようだった。

洞窟の中で最大の空間は、盗賊たちの会議室のような役目を果たしているらしかった。そこにドーデンは兵士たちから奪った荷物を運び込んでいた。

荷物の中身は食料であった。各地から税として取り立てられた作物だということである。ドーデンたちがこれらの獲物に執着したのも、ここに住む家族を飢えさせないためなのだ。

「助かったぜ！　お前は命の恩人だ」

上機嫌でドーデンはパックの肩をどすんと叩いた。パックはうか

ない顔だった。
「どうした？　なに考えている」
ドーデンの問いに、パックは首をふった。
思わず戦いに参加し、さらにはかれらの逃亡を助けてしまった。ミリィを探さなければならないというのに、これではパック自身が犯罪者として追われることになる。
「そういや、まだお前の目的ってのを聞いていなかったな。なんではるばる南の帝国からやってきたかってことだが……」
パックはかれらに説明をはじめた。
そもそものきっかけとなったヘロヘロの出現から、ニコラ博士の”魔素”の発見。そしてミリィが行方不明になってからボーラン市のエイダの示唆によるミリィの捜索。
盗賊たちはパックの波乱万丈の冒険にじっと聞き入っていた。実際、それはかれらの想像をおおきくかけ離れた冒険といってよかった。
「そうか……そんなことがおきているのか」
ため息と共にドーデンはつぶやいた。
脇にいたジャギーがそういえば、というように口を開いた。
「噂だが聖都サイデーンで、不思議な一行が教皇さまのお命を狙ったということだぞ。ひとりは人間の女の子で、もうひとりは全身真っ黒な女。そしてもうひとりは肌がまっ黄色な奇妙な男だったそうだ」
「聖都？　どこです、それは」
パックは勢い込んで尋ねた。ドーデンが答えた。
「教皇さまがいらっしゃる聖堂がある都のことだよ。ここから北西の方向にある」
パックは全員の前に地図をひろげた。
アンガスの町で買い求めたものである。北の大陸が描かれているが、その大部分は空白になっている。海岸線を帝国の調査船で探測した地図だが、肝心の内陸地帯は調査団が入ってなく、ほんの僅か

の部分しか測量できなかったのだ。
「これは……」
ドーデンはつぶやいた。目を丸くしている。
「地図だよ」
不審げにパックは答えた。地図……と、ドーデンたちはおうむがえした。
「こんなものがあるとはなあ！」
うなる。
「あのう、あんたら地図を見たことないのかい？」
「地図くらいあるよ。しかし、こんなに精密なものは見たことない」
正直に感想をのべる。
「おれたちがいまいるのは、ここらへんだ」
ひとりが腕を伸ばし、指さした。
パックは地図を見てあきれた。ずいぶん移動したと思っていたが、地図で見るとほんのわずか、内陸に入り込んだだけである。
北の大陸はおおきいのだ。
「サイデーンの町はこのあたり……」
説明をうけると、聖都であるというサイデーンの町は、大陸のほぼ真ん中にあたる。そこまでの道のりを考え、パックはため息をついた。さらには聖都に行くには、山脈をいくつか越えなければならない。
思えばはるばるここまで来たものだ。
「それで、お前さん。その……ミリィという女の子を探す旅に出るつもりなのか」
ドーデンの問いかけに、パックは強くうなずいた。
それがどんなに遠い道のりであろうとも、絶対やり遂げてみせる！
パックはマリアをふり返った。
「マリア、ミリィたちがどのへんにいるか、わかるか？」
ええ、とマリアはうなずき、膝まづくとその真鍮の指先を地図に触れさせた。

指さしたのはサイデーンのあるところからほんのわずか、東よりの場所である。どうやらミリィらは移動したようだ。しかし東に移動したということは、パックに近づいていることでもある。その事実に、パックは希望を持った。

彼女たちが移動する反対側から近づくには、山脈を越えなければならない。パックは山脈を越える道はないかと一同に尋ねた。

「”ためらい山脈”を越えるんだとう！」

ドーデンたちはいっせいにやめろ、とパックをとめた。

「とても人間が越えられるような山脈じゃあ、ねえ！　サイデーンを目指すなら、南か、北を大回りするしかねえよ」

ジャギーがそう言って分別臭く、首をふった。かれの言葉に、その場にいた全員がそうだ、そうだと相槌を打つ。

「そんなに険しいのかい」

パックの言葉にドーデンはうなずいた。

「険しいのなんのって、この山に”ためらい山脈”と名づけられているだけでも判るだろう？　あそこじゃ一年中、吹雪いていて、道もないしな。サイデーンの都があそこにあるのも、あの山脈が自然の防壁になっているからだ。だけど、北と南の入り口には関所があって、兵士が見張っているからそこをどう抜けるかが問題だがな」

話を聞くうち、旅の前途に暗雲がたれこめてくるようである。パックは唇を噛みしめた。しかし行かねばならぬ……！

パックはマリアの顔を見上げた。

「でも、行かなきゃ……。ミリィを探すのは、おれの役目なんだ」

マリアは無言であるが、その目は「お供します」と言っているようであった。

翌日、パックは旅の用意を整えた。出発を前に、子供たちはマリアと別れなくてはならなくなって名残惜しそうだった。

ムカデの後ろにドーデンたちは荷車をつけてくれた。荷車にはいっぱいに薪が積まれている。ムカデの燃料にするためである。薪の

山を見て、はたしてこれでどれほど距離をかせげるが、パックは不安だった。しかし石炭は北の大陸一帯では使用されておらず、燃料といえば薪しかない。

荷車にはほかに食料が詰め込まれた。長い旅に備え、固く焼きしめたビスケット、燻製の肉、乾燥させた果物などである。パックはその礼に、サンディからもらった装飾品を差し出したが、ドーデンたちはそれを断った。

「そんなもの貰ったところで、交換するところはないしな。それよりあんたが持っていたほうがいい。なにかのときに役立つだろう」

「しかしそれじゃ貰いっぱなしだし……」

「気にすんな！　第一、あの戦いでおれたちに味方してくれたんじゃねえか！」

ドーデンはにやっと笑った。

「それより旅の無事を祈っているぜ！」

ありがとう、とパックは答えた。なんだか、胸がいっぱいになってしまう。

さようなら……と、子供たちがマリアに向けて手をふった。ためらいがちにマリアも手をふり返す。

パックが操縦桿を倒すと、ムカデはしゅっ、しゅっと蒸汽を吐き出しながら動き出した。

がらごろと音を立て、荷車がムカデに引かれていく。洞窟の奥深くから、ムカデは岩山の外へと出て行った。

早朝である。

立ち並ぶ岩山の間から、朝日が弱々しい光をふりまいていた。緯度が高いせいか、日差しは長く影を引いていた。パックは岩山の洞窟をふり向いた。

洞窟の穴からは、盗賊たちの一家が勢ぞろいして顔を出している。みな手をちぎれそうにふっていた。パックもおおきく右手をあげふり返していた。

「マリア、ミリィのいるところを教えてくれ！」

パックの言葉にマリアはうなずき、腕を上げ指さした。
「この方向です」
うん、とパックは返事をしてムカデをそちらへと向けた。
旅のはじまりである。

ムカデに乗るパックを、岩山の影からひとりの人間が熱心に見詰めていた。
赤い僧服、ぎらぎらとした獣のような眼差し。
あの法務官であった。
ムカデが”ためらい山脈”のほうへ進んでいくのを確認して、法務官はするすると手足を這わせ、岩山を降りていった。ちらり、と岩山の洞窟を見る。外に顔を出していた盗賊たちは、いまは中に引っ込んで傍目には無人の荒野に見える。にやりと法務官は残酷な笑みを浮かべた。
あたりをうかがい、誰も見ていないことを確信すると、かれは地面に膝まづいた。
ふところから大事そうになにかの包みを取り出す。包みをほどくと、中からは一個の水晶玉が出てきた。包みを台座にして、法務官は水晶玉を地面に置いた。
その前で一心に祈り始める。
知らない人間がその姿を見れば、僧職者が熱心な神への祈りを捧げているのかと思うだろう。
ほどなく水晶球が輝き始めた。内部から赤い、血の色に似た光がはなちはじめる。
法務官の目が見開かれた。
「教皇さま……ハルマンさま……あなたのしもべでございます……緊急に報告しなければならないことがございまして……」

――報告せよ……

と、水晶玉からひとつの思念が法務官の脳裏に伝達された。その思念を受け取り、法務官は電流にうたれたように身を震わせた。
「奇妙な機械のムカデに乗った少年を見つけました。どうやら帝国からまいったようで……アンガスの町から報せがあった人物と同一人物らしく思えます。その証拠に、真鍮の身体を持った少女を伴っておりました」

――その目的は？

と、思念が問いかけをなした。法務官は残念そうに首をふった。
「判りませぬ……なにが目的か、帝国のスパイかと思いましたが、諜報員としてはあまりに未熟で、おのれを隠すということもいたしませぬ。第一あのような機械に乗っていては、目だって仕方ないではないでしょうか？」

――その少年の動向を逐一報告せよ……重要なことが隠されている可能性がある……。

はっ、と法務官は頭を下げた。顔を上げ、さらに報告を続ける。
「ところで各地に出没する盗賊ですが、いかがいたしましょうや？かれらの住処を見つけたところでございます」

――それはお前の領分ではない。いずれ折を見て盗賊どもは処分されるであろう。

水晶玉から流れ出す〝教皇〟からの思念に法務官は震え上がった。
「処分」という言葉の裏にこもる殺戮への期待が、まるでにおってくるようでもあった。
それは邪悪であった。邪悪さにもいろいろ種類があるが、その邪

悪さは純粋といっていいものだった。法務官はうっとりした表情を浮かべた。かれは恐怖の中に法悦を感じていたのである。

――報告を続けよ……。

思念はさった。水晶玉はもとの透明な姿を取り戻した。法務官はあわてて水晶玉を布に包みなおし、ふところにおさめた。

立ち上がり、駆け出す。その足取りは人間というより、ほかの生き物のようで、ひそとも足音をたてない。

岩山をとんとんとリズミカルに飛び回り、ムササビのように飛翔する。真っ赤な僧服がばたばたとはためき、翼をひろげた怪鳥のようであった。

水の問題

しゅっ、しゅっと蒸気をふきあげ、ムカデは斜面を登っていく。マリアの指し示した方向に従って進んでいくと、山越えのルートになるのだ。しかしまっすぐ山越えをするわけにはいかず、パックはムカデが登りやすいルートを探してゆっくりと進ませていた。

高度が高くなっていくのを感じる。

あたりの様子に、パックは故郷のロロ村の景色を思い出していた。ロロ村も山の中にあり、斜面にへばりつくようにして家々が立ち並んでいた。しかし、いまはひろびろとした草原が広がっているだけである。

日差しが高くなり、気温が上がっていく。

ほっとして、パックはそれまで着込んでいたコートを脱ぎ、丸めて座席の下へねじこんだ。

どこかで雲雀が鳴いている。

青空にぽかりと白い雲が浮かび、ゆっくりと流れていった。ムカデは快調に進んでいる。

喉が渇いた。

水筒をふると、ほとんど水が残っていない。栓を外し、さかさにするが数滴がたれて、あとは空になった。

パックはムカデの計器を調べた。蒸気機関を動かすには水が必要だが、ムカデのタンクにもあまり残っていない。ここらですこし補給する必要がありそうだ。

「川がないかなあ……」

「地図を調べてはいかがでしょう」

マリアの提案に、それもそうだとパックはムカデをとめ、物入れから地図を探して座席の上でひろげる。

ドーデンの言った「ためらい山脈」が地図の真ん中をしめている。

パックたちはそのふもとあたりに位置していた。
川の位置を探すが、近くには無いようだ。あるいは細い流れくらいはあるのかもしれないが、この地図ではちいさすぎて載っていない可能性もある。
しかし村の印を見つけた。
村があるということは、水も近くにあるはずである。人間は水がないと生活できないからだ。
すこし迷ったが、パックはその方向へ向かうことにした。ムカデが人目につくのは困るが、ムカデのタンクに水がないとこれからの旅を続けられない。
パックはコンパスを調べ方位を見ると、村の方向へムカデを進めさせた。

すこし進むと、草原に踏み分け道が出来ている。いよいよ人家が近い。人目を避けるため、パックはこんもりと盛り上がって見える森へムカデを乗り入れた。このあたりの森は、針葉樹がおもで、下生えの密生した照葉樹林とは違い、ムカデが楽に移動できる。
森の中へ進んでいくと、思ったとおり水の気配がする。耳をすませると、かすかな水流の音が聞こえてくる。
ちょろちょろとした細流にそって移動していくと、やがて湖に出た。
ほっとパックは思わずため息をついた。
じつに美しい湖だ。
湖面には波ひとつなく、鏡のような水面には森と空がさかさになって映し出されている。水面を覗き込むと、水晶のように澄み切った水がかすかにゆれている。おそらく水底から水が湧き上がっているのだ。
ムカデから降り、パックは水面にひざまづいた。両手を水の中に差し入れる。思わず声をあげそうなほど冷たい。両手ですくい、口に近づけた。

「飲まないほうが良いよ。死にたくなければ」
口をつけようとした瞬間、声がしてパックはぎくりと凝固した。
顔を上げると声をかけてきた人物が草むらに立ってパックの顔を見下ろしている。
ちいさな女の子だ。年令は十才くらいか。日焼けした肌に、粗末なワンピースを身につけている。灰色にちかい茶色の瞳をして、真面目くさった顔つきでじっとパックを見つめている。片手に木の枝を持って、その先をパックに向けて指し示している。
そろそろと身動きしてパックは立ち上がった。急に身体を動かそうとすれば、どこかへ逃げ出してしまうのではないか、と思ったのだ。
「なぜ飲まないほうがいいんだい?」
しずかに尋ねる。
「毒が入っているんだ。水の中に、魚はいなかったろ?」
言われてみればそうである。水の中を覗き込んでも、魚一匹見当たらない。
毒か……。
パックはため息をついた。
「ぼくはパック。きみは?」
ファング……と少女は答えた。しばしふたりは見詰め合った。
「この近くに住んでいるのか?」
うん、と彼女はうなずいた。
「毒が入っているって、どういうこと?」
ファングは座り込んだ。パックはその側に近寄り、並んで座り込んだ。マリアはムカデに乗ったまま、じっと待ち続けている。
「水が湧き上がっているだろ? あの湧き水から毒が流れ込んでいる。山から……」
と彼女は顔を上げた。うっそうと茂っている木々の間から見えるのは”ためらい山脈”である。そびえたつ山脈の山頂には白く輝く

冠雪が認められる。
「あそこから、かい？」
ファングはうなずく。
「山の地下水がここに湧いている。その湧き水に毒が入っているんだ」
ぽつりと答えた。
「どうして？　そんなことに」
少女はパックを見上げた。その視線に一瞬、憎しみの色が浮かんだ。ムカデと、それに乗るマリアを見つめる。
「あんた”男爵”のところから来たの？」
「だれだい、そりゃ」
ふん、とファングは立ち上がった。
「きっと男爵が毒を流しているに決まっているんだ！　あいつのせいで、このあたりの水は飲めなくなった」
叫んで走り出そうとする彼女の腕をパックは掴んだ。
「ちょっと待ってくれ！　ぼくにはなにがなにやらさっぱり……男爵とはだれだ。それに、なぜぼくがその男爵の関係者だと思うんだ」
ファングはパックの腕をふりはらった。
「死にたくなかったら、このあたりの水は飲まないこった！」
言い残すと、彼女は走り去った。たちまちその姿は木の間に消えてしまう。
すべてはあっという間の出来事だった。パックは、いまの少女が現実にいたのかさえ、疑わしくなっていた。

「どう思う？　マリア。本当に毒が入っていると思うか」
とり残され、パックはマリアに尋ねた。マリアはちょっと小首をかしげた。
「わたしには判りません。水はわたしには動力源になるだけですから」
そうか、とパックは気付いた。そういえばムカデのタンクが残り

少なくなっている。飲む水は別にしても、動力を動かすための水を補給するには使えるだろう。

パックはマリアに命じて、ムカデから水補給ホースを水面にたらした。ポンプを動かし、タンクに水を補給する。いっぱいになると、蒸気を沸かしてムカデを動かし始めた。

ぐるりとムカデの鼻先をまわして、さっきの少女が消えた方向へと向かう。

森は生きている

行けども行けども森はつきない。こんな深い森ははじめてだ。木々は密集してきて、パックはときどきムカデを大木のまわりを大回りさせて進んでいく。

人家どころが、道すら見当たらない。いったい、あの娘はどこへ行ったんだろうと、パックは不安になってきた。さっきの少女はまぼろしだったのか？

森を進んでいくうち、ちりちりとした焦燥感が高まっていく。うなじに、誰かの視線を感じる。

はっ、とふり返るが誰もいない。しん、と静まりかえった森が続いているだけだ。

口を引き結び、パックはふたたびムカデを進ませた。

誰かが見ている……。

それは確信となった。

はっきりとした敵意が森の中に満ちている。ひそやかなつぶやきが、森のどこかでささやきかわしている気配があった。

「マリア……なにか聞こえるか？」

背後のマリアは首をふった。

「いいえ、何も……」

そうか、とパックは肩をすくめた。

やっぱり自分の気の迷いなのだろうか？

ざわざわざわ……。

木々の梢が騒いでいる。風もないのに、かすかな葉ずれで差し込んでくる日差しが瞬いている。

ひゅっ、とパックの頬をなにかが触っていく。

ぱっ、とパックは手を挙げた。

ぴしりっ！

手の甲に鋭い痛みがはしる。木の枝が掠ったのだ。いつの間にか木々は密集していた。がさがさがさ……。ムカデは茂みをかきわけ、進んでいく。

パックはムカデを停止させた。

敵意はますます高まっていく。誰かが、いや、何者かがパックをじっと睨みつけ、見張っているのだ。その視線はパックの一挙手一投足を監視していた。

「誰だ！　おれを見ているのは？　こそこそ隠れていないで、出て来い！」

出て来い……
出て来い……
出て来い……

パックの叫びはむなしく木霊した。

がつん、とムカデの鼻先が大木にぶつかった。パックはムカデをバックさせようとギアを入れ替え、背後をふりかえった。

！

なんと、背後にも大木があり、バックできない。にっちもさっちもいかなくなり、パックは焦った。

どうなってる？

なんとかムカデを動かそうとするが、前にも後ろにも、右にも左にも大木ががっちりと邪魔をしている。

くそっ、とパックは毒づいた。

がさがさがさ……！

上のほうから大きな枝が垂れ下がってくる。どさん、と葉っぱがパックの身体をつつむ。

「わあっ！」

叫ぶ。

ぎりぎりぎりと、パックの全身は木の枝に締め付けられていた。

「パックさま！」

マリアが叫び、手を伸ばし、パックの身体を引き戻そうとする。立ち上がった彼女は枝を振り払い、パックの腰のベルトに手をかけた。

ぐっ、と全身に力を込め、マリアはパックを引き寄せた。

めりめり……と音を立て、枝が折れていく。

その時、森全体から怒号のような叫び声が満ちていた。

苦痛に満ちた叫び声。

どさっとパックはマリアに引っ張られ、ムカデの座席に這いつくばった。

「な、なんだ？」

ぼうぜんと顔を上げ、つぶやく。

いまや森全体が叫び声をあげていた。その声は地の底から轟くようである。

どすん、とムカデの横腹に大木の枝が当たる。

どす、どすん、と何本もの大枝があたってくる。

ひゅるひゅると蔦がパックとマリアの身体にからまった。そのままぐーっ、と締め付けてくる。

パックは歯噛みし、ポケットからナイフを取り出し、刃をぱちんと引き出すとぶちぶちと絡み付いてくる蔦を切り裂いた。蔦の断面から青臭い匂いがして、樹液がしたたる。

木が攻撃をしてくるのだ。森そのものが敵意を持っている！

パックは操縦席に飛びつき、叫んだ。

「見てろ！」
ぐいっとレバーを引いた。
がちゃがちゃと音を立て、ムカデの牙が開閉した。ぐいっと頭を上げ、襲いかかる枝をがっちりとくわえる。
ぼきりと音を立て、枝がちぎれとんだ。
ぎえええ……と、木々は苦しげなうめき声を上げている。いまや、パックにははっきりと判っていた。
この森が敵なのだ。
この森は生きている。生きて、意志を持って動いている！
アクセルを一杯にふかす。
しゅーっ、とムカデのシリンダーから熱い蒸気が吹き上がった。
その時、さあーっと周りの木々がムカデから離れた。
そうか！
パックは身をかがめると、ムカデのボイラーの火炉の蓋を開き、中から燃えている薪を一本、手に取った。
それを頭上にかかげる。
ざあああ……と、森全体が恐怖に打ち震えた。さっとパックが薪をふると、ざわざわざわと森の枝は火から逃れるかのように身を縮めていく。
こいつら、火が怖いんだ……。
「マリア！　こいつを持ってろ！」
マリアに火のついた薪を手渡し、パックは操縦桿を握った。後ろの席でマリアが立ち上がり、火のついた薪をさかんに振り回している。ぱちぱちと火の粉がまって、ぎゅうっと枝や根っこが縮こまる。
さあーっとムカデの進路が開かれた。パックのその隙間にムカデを進ませ、森を抜けていく。
とにかく、こんな妙な森はこりごりだ！
その時、遠くから悲鳴が聞こえてきた。
ぎゃあああっ！

それは人間の悲鳴だった。
断末魔の叫び声。
なんだろうと、パックはその方向にムカデを進ませる。

森の隙間に、真っ赤な衣服をまとった人間がひとり、倒れている。
悲鳴はその人物があげたらしい。
つるりとした坊主頭に、真っ赤なローブを身にまとっている。その人物は、パックのムカデが近づくと顔を上げた。
「あんたは……」
パックはその顔に見覚えがあった。
あの法務官という奴だ！
真っ赤な法衣を身にまとった男は、パックの顔を認めて、かすかな笑みを浮かべた。身動きが辛いのか、ちょっとした動作をするたび苦痛の表情が浮かぶ。
「この森は……生きておる……こんな森が……ゴラン皇国の領土にあったとは、知らんじゃった……」
ごほごほと咳き込む。
「大丈夫かい？　怪我してるんじゃないのか？」
「放っておいてくれ！」
というのが法務官の答えだった。
ちらり、と憎しみの色が浮かぶ。
パックはマリアを見た。マリアはうなずいた。
さっとムカデから地面に降りると、かがみこみ、倒れている法務官をかかえあげた。
「なにをする……かまわんでくれ……」
弱々しく呻くが、抵抗する力はない。マリアは法務官をかかえたまま、ムカデに乗り込んだ。
「放っておいてもいいんだけどね。目の前で死にかけているのを黙

ってみてちゃ、後生が悪いや」
そう言うとムカデを動かした。
「どこか、休める場所があるといいんだけどな……。あんた、あんなところで何してたんだ？」
「お前を尾行していたのだ」
法務官の答えに、パックは「えっ！」と驚いた。
「お前を尾行して、あの森に来た途端、森の木々に襲われた！　不覚じゃった……いったい、この森の正体はなんだ！　なぜ、人間を襲う？」
「それより、なぜぼくを尾行していたのか、聞きたいな」
「お前の目的を探るためじゃ……いったい、帝国の人間がこんなところで何をしている……？」
「ミリィって女の子を探すためさ」
「女の子？」
「そうさ、おれの幼なじみなんだ。それがどういうわけか、この国に連れ去られたふしがある。どうにか会えないかと思って、やってきたのさ」
法務官は頭をふった。
「信じるものか！　お前はスパイに違いない……そんな、女の子を探しにわざわざ……馬鹿馬鹿しい……」
「信じないのはあんたの勝手だ！　ぼくはスパイなんて柄じゃないぞ」
「その金色の娘はなんじゃ？　それにこのムカデに似た機械……お前は”男爵”の一味なのか？」
これで”男爵”という名前を聞くのは二回目だ。パックは法務官をふり返った。
「その”男爵”ってのは何だ？　なんでぼくと関係あると思うんだ？」
ふっと法務官は皮肉な笑みを浮かべた。
「お前は”男爵”の一味に違いないわ……いまに馬脚をあらわす…

…」

ぶつぶつとつぶやくと、がくと前のめりになる。顔色が土気色に変わっていた。

パックは叫んだ。

「いけねえ！　気絶しやがった！」

前方に視界がひらけ、明るくなっていた。森の出口だ！　パックはムカデの速力を上げた。

「パックさま、家があります！」

マリアがささやいた。

パックはうなずいた。

その言葉どおり、森の出口に一軒のちいさな家があった。だれか人が住んでいるのか、屋根の煙突からは白い煙が立ち昇っている。

「おーい！　誰かいないか？　けが人がいるんだ！」

パックの叫びに、家のドアが開かれ、中から人が現れた。

その顔を見てパックは叫んだ。

「きみ……！」

現れたのはひとりの少女だった。

ファングだった。

柳の木

「きみ……さっきの……」
「けが人、ってその人？」
投げ棄てるようにファングは声をあげた。はっ、とパックは法務官に注意をもどした。
「そうだ、怪我しているんだ。命があぶないかもしれない」
ふうん、とファングはねめつける目つきになる。くいっと顎をしゃくり、背を向けた。家の中へはいれ、というのだろうか。
パックはマリアに指示して法務官のぐったりとした身体をかつぎあげさせた。法務官は背が高く、がっしりとした身体つきで、パックひとりでは持ち上げられないがマリアなら軽々と抱き上げられる。
家へ入り込む前、パックは柳の木に気付いた。すらりとした柳の木が、家のすぐ側に生えている。柳の木はパックが近づくとざわざわと枝を揺らし、威嚇するような動きを見せた。
いったいこのあたりの木はどうなっているんだ……。不気味そうに柳の木を見上げ、パックはマリアと共に家の中へ入り込んだ。
家の中は雑然としている。あちこちに家具や、食器類がちらばり、歩きにくい。奥にベッドがあり、マリアはそれに法務官の身体を横たえさせた。
どさっとベッドに投げ出され、法務官は苦痛にうめいた。
「こいつ法務官だね」
パックの背後からファングが覗き込むようにして声をかけた。
「知ってるのか？」
ああ、とファングはうなずいた。
「吸血鬼みたいなやつさ。高い税金がはらえない村人がいると、こいつらの手下がやってきて攫っていくんだ。そして攫われた村人はひとりも還ってこない……。噂では教皇さまのいけにえにされるってことだよ」

ふっ、ふっと法務官はせわしない息遣いをしている。パックは法務官の赤い法衣の前を開いて傷口を確かめた。なにか太いものでぎゅっと締め付けられたような痣が紫色に腫れ上がっている。

ファングは冷たく断定した。

「死ぬね、こいつ。森で木にやられたんだろ？　いい気味だ！」

「死にかけているんだぞ！　その言い方はないだろう？」

「死ねばいいんだ！　こいつなんか！」

ファングは叫んで拳をぎゅっと握りしめた。

「お父ちゃんは、こいつの手下に連れ去られ、戻ってこない……お兄ちゃんもいなくなった……お母ちゃんも……！」

パックは驚いた。

「それじゃ、この家にきみひとりか？」

ファングは顔をそむけた。パックはあらためて家の内部を見渡した。雑然とした室内、散らばった食器。たったひとりでこの家に住んでいればこうなるのも自然かもしれない。だれにも世話されないまま、ひとりで暮らしていたこの娘のことを思い、パックは呆然となっていた。

ファングはふたたび法務官に目を戻した。じっと苦痛に喘いでいるかれを見ている彼女の瞳に奇妙なひかりが宿った。

「こいつを助ける方法がないわけじゃない――」

にやりと薄笑いを浮かべる。

すっとその場を離れると、台所からコップをひとつ持ってきた。コップには水がいっぱいに満ちている。

「その水は？」

「あの湖の水さ！」

「えっ、だってあの湖には毒がはいっているって……」

「そうさ、もしものときはあたしが飲むつもりだった。だけど考えが変わった。まず、こいつに飲ましてからにする」

「毒なんだろう？」

「普通の人間にはそうさ。でも、死にかけたこいつには別さ。ある

意味で、こいつの命を救う水なんだ。さあ、この水をこの法務官に飲ませるんだ！」

ぐいっ、と水を満たしたコップを差し出す。受け取り、パックは法務官を見た。

まさに死にかけている。

呼吸ははやく、顔色は土気色になっている。ファングを見ると、彼女はうなずいた。

「さあ、飲ませるんだ。ぐずぐずしていたら手遅れになる」

よし、とパックは決意をかためた。法務官の頭をささえてやり、その口許にコップを近づけた。

水が口の中に注ぎ込まれると、法務官は手をあげ、コップをみずから掴んでむさぼるように飲み干した。ごく、ごく、ごくと喉仏が動き、一気に飲み込んでいく。

ほーっ、と法務官はため息をつき、がくりと頭をベッドの枕に押し当てた。全身から弛緩がはじまり、ぐったりと手足がのばされる。

一歩、ファングがあとじさる。

「あとは待つだけさ……じき、はじまるよ」　なにを、と言いかけたパックは、法務官の変化に気付いた。

うっ、と法務官の眉がしかめられる。ぐぐぐぐ……と歯を食い縛り、かれは体内から突き上げるなにかに必死に耐えているようである。

かっ、と両目が見開かれる。

がばりと上体が起き上がり、口がぱくりと開いた。

おおおおっ！　と、法務官は叫び声をあげる。

パックはファングを見つめた。

彼女はじっと法務官の変化を見守っていた。

どうした……と言いかけたパックは、法務官がベッドから起き上がるのに気付く。

ぎくしゃくと法務官は立ち上がり、なにかに引っ張られるように出口へ向かった。

それを見送ったパックはマリアと顔を見合わせる。はっ、となってあわてて追いかける。

外へ歩いていく法務官は、手を泳ぐようなかたちで突き出し、ゆらゆらと上体をふらつかせながら歩いている。

「おい！　どうしたんだ？」

呼びかけるが、まるっきり無視している。

目はうつろだ。

法務官の足先は森へ向かっていた。

と、その動きがさらにこわばった。

まるで体の中に固い、棒が入っているように手足を突っ張っている。

お、お、お、お！　と、法務官の唇からうめき声がもれた。

はっ、とパックは見守った。

ぽつ、ぽつと法務官の肌からなにかが顔を出している。

なんだろうとパックは目を細めた。

緑色の……。

葉っぱだ！

法務官の肌から緑の葉が顔を出してる。

ぐーっ、と法務官の背がのびた。

ばりばりと法衣が破れる。

ばさり！　と、法務官の体から枝が伸び、緑の葉が茂っていく。

なんと、かれは生きながら樹木に変身しているのだ。

ゆらり、ゆらりと樹木となった法務官はひょろ長く伸びた手足を動かしながら、森へと進んでいった。

ころり、と法務官の法衣からなにかがころげ落ちた。

マリアが膝をついてそれを拾い上げた。

パックは森へ歩いていく法務官を見送っていた。

いまや、すでに法務官の全身は樹木の樹皮におおわれ、身体からは数本の枝が茂っている。すでに完全に木に変化していた。

森の入り口がぱっと開き、樹木となった法務官が姿を消した。

静寂。

と、森全体がざわざわと震えた。どさ、ばさとなにかが争っているような気配がしている。ばきばきと樹木の枝が折れる音。

ぐえええええ……と、はげしい苦痛の声があがった。

ぽーん、と森からなにかが空に飛んだ。

地面にどさりと落ちる。

ばらばらになった樹木の残骸だった。

気配にふりかえると、ファングが立っている。手にコップを持っている。

「ファング、きみ……？」

「湖の水を飲んだ人間はみな、ああなるんだ。みんな男爵のせいだって噂している。男爵が毒を湖に流しこんだって。そのうち税金の取立てが厳しくなって、これなら木になって生きたほうがましだって、みんな水を飲んだ……」

パックは驚いた。

「わざと飲んだって、わけか？　ああなるのが判っていて？」

彼女はゆっくりとうなずく。目からぽつり、と涙がこぼれた。

「母ちゃんも飲んだ。あの法務官は森に受け入れられなかったんだ。みな知っている。木になったのが、じぶんたちを酷い目にあわせた法務官だってことは」

柳の木を見上げる。

その視線を追ったパックはぎくりとなった。

ファングがコップを口に当てている！

「やめろ！　それを飲んだら……」

ぐっとファングはコップの水を飲み干していた。

晴れ晴れとした笑顔が浮かぶ。

「いままで飲もうとしてどうしても決心がつかなかったけど、あの法務官に飲ませることができて決心がついたよ。これで母ちゃんと一緒になれる」

ゆっくりと柳の木に近づいた。

さわさわと柳の木の枝が動き、やさしくファングを導いていた。
彼女の体から柳の枝が伸びていく。パックを見て口を開いた。
「家の裏に井戸がある。その井戸なら安全だよ。あたしはいままでその水を飲んで暮らしていたんだ……」
パックの見ている前でファングは見る見る柳の木に変身していった。
彼女はおおきな柳のそばに立った。すでに完全に樹木となっていた。
パックはぼうぜんとなっていた。
家のそばに、二本の柳の木がよりそうように地面から生えていた。
「パックさま、これを」
マリアが近づき、手のなかのものを見せた。
水晶玉だった。法務官の法衣からころげ落ちたものである。
受け取りパックは表面を覗き込む。
水晶玉は真っ黒な色をしていた。
黒い色の水晶か……。
手にするとずしりと重い。
パックはそびえている山脈を見上げた。
男爵か――。
いったい、男爵とは何者だろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1484d/

蒸汽帝国～真鍮の乙女～

2010年10月9日12時55分発行